

— 嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6 —

東畑瀬遺跡 3

東畑瀬遺跡 6 G ・ 7 ・ 9 区



平成 23 (2011) 年 3 月

佐賀県教育委員会

— 嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6 —

東畑瀬遺跡 3

東畑瀬遺跡 6 G・7・9 区

平成 23（2011）年 3 月

佐賀県教育委員会

序

本書は、国土交通省九州地方整備局による嘉瀬川ダム建設事業に伴い、佐賀県教育委員会が実施している埋蔵文化財発掘調査の記録をまとめたものです。

今回の報告は東畑瀬遺跡に関するもので、近世の寺院跡と墓地、集落跡等を調査しました。このうち、戦国武将神代勝利の菩提寺である宗源院跡とそれに付随する墓地では、宗源院の創建に関する遺跡や多くの近世人骨が出土しており、この地域の江戸時代の様相を知る上で貴重な調査例となりました。

本書が学術文化の向上に幾分なりとも寄与し、併せて地域の歴史を学ぶ資料のひとつとして生涯教育や学校教育の場で活用されるものになれば幸いに存じます。

発刊にあたり、埋蔵文化財の保護に深い御理解と多大な御協力を賜った国土交通省嘉瀬川ダム工事事務所並びに関係各位に対し衷心より厚くお礼申し上げ、御挨拶といたします。

平成 23 年 3 月

佐賀県教育委員会
教育長 川崎俊広

例 言

- 1 本書は、嘉瀬川ダム建設事業に伴い佐賀県教育委員会が平成 16・17・20・21 年度に実施した佐賀市富士町所在の東畑瀬遺跡 6G・7・9 区の発掘調査報告書で、嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第 6 冊である。
- 2 発掘調査は、佐賀県教育委員会が主体となり、国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所の委託を受けて実施した。
- 3 発掘調査にあたっては、国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所、佐賀県土木部ダム対策課・河川砂防課ダム対策室（現・佐賀県県土づくり本部水資源対策課）、富士町教育委員会（現・佐賀市教育委員会）、富士町ダム対策課（現・佐賀市富士支所嘉瀬川ダム対策課）、並びに地元各位の協力を得た。
- 4 本書の表紙と写真図版の一部に用いた平成 4 年撮影の航空写真は、嘉瀬川ダム工事事務所から提供を受けた。
- 5 本書での遺跡名については発掘調査当時のものを使用したが、平成 22 年 3 月作成の佐賀県遺跡地図では、東畑瀬遺跡 6G・9 区が宗源院跡となっている。
- 6 東畑瀬遺跡 6G・7・9 区の現地調査から報告書作成までの作業に従事したものは下記のとおりである。

発掘作業：姉川妙子	内田英子	嬉野サツキ	岡本和子	岡本君子	小副川千代恵
貝野啓子	嘉村ヒトミ	嘉村末人	坂口伸己	坂口久江	佐保マリ子
重田正子	下津浦理恵	庄島信子	園田公子	時松紗喜子	中島鶴美
中田政信	中原春己	納富弘子	東川福代	藤田一雄	豆田正秀
丸山民江	無津呂明子	森ミカノ	吉原俊輔	吉原文代	吉原松美
吉原美智子	吉原幹夫	糸山禎一	岩熊素子	内川さつき	嬉野みつ代
遠藤啓輔	大谷節子	川崎恵美子	川崎はつえ	川原トシ子	北島裕司
坂井和子	坂井義人	實松政秀	澤田健吉	杉原茂子	重松敏行
進藤睦美	高木俊治	千綿一夫	千綿伸義	野田恵美子	真崎政嗣
丸内隆康	三角憲一郎	光武宣子	藤井千枝子	古川 勲	杠 義臣
横尾和夫	新井英雄	荒木聖剛	井手口 昇	江口敏郎	江 寄 章
柿本由紀子	古賀芳子	幸山 巖	末次貞亮	副島正義	下川利信
下村静雄	竹下政征	長 清一	鶴丸仁之	長倉眞美子	中山隼人
野口節子	野中賢之	野中静枝	松藤孝幸	諸角敏子	山口道雄
山口裕二	山口榮次	吉岡泰士	吉成哲夫		
遺構実測：市田佳奈子	内田真一郎	嬉野サツキ	嬉野みつ代	柿本由紀子	渋谷 格
白木原 宜	田中良輔	時松紗喜子	長倉眞美子	野田美恵子	吉田大輔

（株）埋蔵文化財サポートシステム

遺構写真撮影：市田佳奈子	今泉好孝	内田真一郎	加藤吾郎	渋谷 格
白木原 宜	田中良輔	吉田大輔		

遺跡空中写真撮影：（有）空中写真企画

遺物整理：植木玲子	坂本明子	佐保敦子	重田正子	柴村悦子	谷澤裕美
堀田香澄	松尾三枝子				
遺物実測：江副朋子	大串早苗	境 靖紀	指山美江子	渋谷 格	白木原 宜
辻 静子	鶴田啓子	徳永智恵子	兵動美紀	平山とし	村里育子

山浦美香

整図（デジタルトレース）：白木原 宜 西野元勝 藤井菜穂子 江副朋子 村里育子

（株）とっぺん

（株）埋蔵文化財サポートシステム

遺物写真撮影：今泉好孝 小森義尚 境 靖紀 渋谷 格 白木原 宜

西野元勝

吉田大輔

渡部芳久

写真整理・編集：市田佳奈子 今泉好孝 江副朋子 奥 知恵子 梶山裕史

西野元勝

藤井菜穂子

村里育子

調査記録整理：東畑瀬遺跡 6G 区）遺構：市田佳奈子・渋谷 格

遺物：市田佳奈子・渋谷 格・徳永貞紹

東畑瀬遺跡 7 区）遺構：内田真一郎・白木原 宜・田中良輔・西野元勝

遺物：市田佳奈子・渋谷 格・西野元勝・吉田大輔

東畑瀬遺跡 9 区）遺構：白木原 宜・吉田大輔

遺物：市田佳奈子・白木原 宜・西野元勝・吉田大輔

7 本書の編集は藤井菜穂子の協力を得て渋谷 格が行った。執筆分担は下記のとおりである。

第1章、第2章：徳永貞紹・渋谷 格

第3章：渋谷 格

第4章：白木原 宜・吉田大輔

第5章：渋谷 格

第6章：白木原 宜・吉田大輔

第6章（補遺）：西野元勝

第7章1：川久保善智・澤田純明・大野憲五・竹下直美・隅康二・埴原恒彦

第7章2：米田 穰・内藤裕一・覚張隆史

第7章3：新免歳靖

8 東畑瀬遺跡 6G・7・9 区の整理・報告にあたって、下記の方々から御教示・御協力をいただいた。

家田淳一

石井千絵里

大橋康二

金原正明

全国神代ゆかりの会

宗源院総代会

田上勇一郎

徳永貞紹

鳥越俊行

（有）濱崎石材

東中川忠美

古川末由

三代俊幸

水本和美

宮武正登

村木二郎

（五十音順）

本書の記載方法

- 1 嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の対象遺跡には英大文字 3 文字の略号を与え、実測図・写真等の記録類や出土遺物の注記等に使用している。本書で報告する東畑瀬遺跡は H H T の略号で示される。
- 2 個々の遺構名は、遺構の種別を表す英大文字 2 文字の分類記号（下記参照）と 4 桁の遺構番号の組み合わせで示す。遺構番号の千の位には、各遺跡の地区名を示す数字を付けている。

なお、小穴・柱穴は遺物の出土したものに限り、P の略号を用いて他の遺構とは別個の遺構番号を与えている。このうち掘立柱建物や柵列などの遺構を構成するものについては英大文字を用いて P A、P B、… の要領で示し、それ以外の柱穴・小穴については算用数字 4 桁の一連番号を付け、千の位で地区名を示す。

S A：柵列・堀・土塁・石塁	S B：掘立柱建物・礎石建物	S C：石棺墓・石蓋土坑墓
S D：堀・溝・流路	S E：井戸	S F：道路
S H：竪穴住居・竪穴建物	S J：甕棺墓・土器棺墓	S K：土坑
S P：土坑墓・木棺墓	S T：古墳・その他の墳墓	S X：その他・不明遺構

- 3 出土遺物の〇〇形土器は、〇〇とのみ表現する。例）甕形土器→甕
- 4 実測した出土遺物には 8 桁の遺物登録番号を 1 点ずつ付し、挿図中には各章ごとでの通し番号を付した。
- 5 表で示した出土遺物の計測値は、復元値に *、残存値に + を付けて表現する。
- 6 平成 14 年 4 月に改正測量法が施行されたが、調査時の記録類は全て日本測地系による旧国土座標であることから、混乱を回避するため、嘉瀬川ダム建設事業に伴う文化財発掘調査では今のところ世界測地系による座標を使用していない。

本書で示す方位は旧国土座標第Ⅱ系の座標北で、磁北はこれより西偏約 6° 30′ である。

- 7 出土遺物に関して、本文・表中で記述の煩雑さを避けるため下記の分類・編年を使用・参照したものがある。また、近世陶磁に関して佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏、家田淳一氏より多くのご教示を賜った。

・中世前期の中国陶磁：

太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡 X V—陶磁器分類編一』太宰府市の文化財第 49 集

・中世後期の中国陶磁：

森田 勉（1982）「14～16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

上田秀夫（1982）「14～16 世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

小野正敏（1982）「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

・中世の土器鍋：

徳永貞紹（1990）「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会

目次

本文目次

第 1 章 調査の経過	1
1 調査の経緯	1
2 調査組織	1
3 発掘調査の経過	2
第 2 章 位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
第 3 章 東畑瀬遺跡の概要	11
第 4 章 東畑瀬遺跡 7 区	15
1 東畑瀬遺跡 7 区の概要	15
2 7 区の遺構と遺物	15
1) 7 A 区の遺構と遺物	15
2) 7 B 区の遺構と遺物	21
3) 7 C 区の遺構と遺物	29
4) 7 I 区の遺構と遺物	36
5) 7 J 区の遺構と遺物	40
6) 7 K 区の遺構と遺物	43
7) 7 L 区の遺構と遺物	43
8) 7 M 区の遺構と遺物	43
3 まとめ	44
第 5 章 東畑瀬遺跡 6G 区	67
1 東畑瀬遺跡 6G 区の概要	67
2 第 1 面の遺構と遺物	70
3 第 2 面の遺構と遺物	77
4 2－3 面の遺物	89
5 第 3 面の遺構と遺物	108
6 第 4 面の遺構と遺物	119

7	まとめ	129
第 6 章	東畑瀬遺跡 9 区	133
1	東畑瀬遺跡 9 区の概要	133
2	9 区の遺構と遺物	133
1)	外表施設	133
2)	下部遺構と遺物	159
3	まとめ	170
	(補遺) 6 区の集石および宝篋印塔について	214
第 7 章	自然科学分析	217
1	東畑瀬遺跡 9 区から出土した人骨について	218
1)	はじめに	218
2)	各人骨について	218
3)	神代家人骨の頭蓋形態	230
4)	東畑瀬遺跡 9 区人骨のエナメル質減形成について	231
2	神代家墓所から出土した人骨資料の炭素・窒素同位体比と鉛濃度の分析	250
1)	はじめに	250
2)	資料と方法	250
3)	分析結果と考察	250
3	東畑瀬遺跡 9 区 (宗源院墓地) から出土したガラス玉の自然科学分析	256
1)	はじめに	256
2)	分析資料	256
3)	分析方法	256
4)	結果および考察	257
5)	おわりに	261

挿図目次

図 1 - 1	嘉瀬川ダム水没地区周辺と埋蔵文化財調査地区 (1/25,000)	3
図 2 - 1	東畑瀬遺跡の位置 (1/600,000)	7
図 2 - 2	嘉瀬川ダム建設予定地周辺の遺跡 (1/100,000)	8
図 3 - 1	東畑瀬遺跡周辺の地形 (1/5,000)	12
図 3 - 2	東畑瀬遺跡 6G・7・9 区の位置 (1/2,000)	13
図 4 - 1	7A 区遺構配置図 (1/250)	16
図 4 - 2	7A 区掘立柱建物跡配置図 (1/100)	17
図 4 - 3	7A 区 SB7028 (1/80)	18
図 4 - 4	7A 区 SB7029 (1/80)	19
図 4 - 5	7A 区 SB7030 (1/80)	20
図 4 - 6	7B 区遺構配置図 (1/200)	22
図 4 - 7	7B 区掘立柱建物跡配置図 (1/125)	24
図 4 - 8	7B 区 SB7032・SB7033 (1/100)	25
図 4 - 9	7B 区 SB7034 (1/80)	26
図 4 - 10	7B 区 SB7035・SB7036 (1/80)	27
図 4 - 11	7B 区 SB7037・SA7031 (1/80)	28
図 4 - 12	7C 区遺構配置図 (1/200)	30
図 4 - 13	7C 区掘立柱建物跡配置図 (1/100)	31
図 4 - 14	7C 区 SB7038・SB7039 (1/80)	32
図 4 - 15	7C 区 SB7040 (1/80)	33
図 4 - 16	7I 区遺構配置図 (1/150)	34
図 4 - 17	7I 区トレンチ土層図 (1/60)	35
図 4 - 18	7I 区 SK7018・SK7019・SK7020 (1/40)	36
図 4 - 19	7J 区 SK7022・SK7023 (1/40)	37
図 4 - 20	7J 区遺構配置図 (1/150)	38
図 4 - 21	7J 区土層図 (1/40・1/60)	39
図 4 - 22	7K 区遺構配置図 (1/150)	41
図 4 - 23	7K 区土層図 (1/60・1/80)	42
図 4 - 24	7L 区トレンチ配置図 (1/150)	45
図 4 - 25	7L 区トレンチ土層図 (1/60)	46
図 4 - 26	7M 区トレンチ配置図 (1/300)	47
図 4 - 27	7M 区トレンチ土層図 (1/80)	48
図 4 - 28	7 区出土遺物 1 (1/3・1/4)	49
図 4 - 29	7 区出土遺物 2 (1/3)	50
図 4 - 30	7 区出土遺物 3 (1/3)	51
図 4 - 31	7 区出土遺物 4 (1/3)	52
図 4 - 32	7 区出土遺物 5 (1/3)	53
図 4 - 33	7 区出土遺物 6 (1/3)	54

図 4 - 34	7 区出土遺物 7 (1 / 3)	55
図 4 - 35	7 区出土遺物 8 (1 / 2 ・ 1 / 3)	56
図 4 - 36	7 区出土遺物 9 (1 / 3)	57
図 4 - 37	7 区出土遺物 10 (1 / 2 ・ 1 / 3)	58
図 5 - 1	東畑瀬遺跡 6G 区周辺の地形 (1/1,000)	68
図 5 - 2	6G 区の土層 (1/60)	69
図 5 - 3	第 1 面の遺構分布 (1/200)	71
図 5 - 4	第 1 面の遺構分布詳細 (1/125)	72
図 5 - 5	第 1 面 ・ 1 - 2 面の出土遺物 (3 は 1/2、他は 1/3)	73
図 5 - 6	1 - 2 面の出土遺物 ・ 表採の遺物 (1/3)	74
図 5 - 7	第 2 面の遺構分布 (1/250)	78
図 5 - 8	第 2 面の建物区画 (1/100)、SX6062 (1/40)	79
図 5 - 9	第 2 面北東部の遺構分布詳細 (1/100)	80
図 5 - 10	第 2 面の庭園遺構 (1/100) ・ 土層 (1/40)、SX6057 (1/20)	81
図 5 - 11	SX6079 (1/40)	82
図 5 - 12	第 2 面の出土遺物 1 (64 は 1/4、他は 1/3)	84
図 5 - 13	第 2 面の出土遺物 2 (139 は 1/2、他は 1/3)	85
図 5 - 14	2 - 3 面の出土遺物 1 (1/3)	90
図 5 - 15	2 - 3 面の出土遺物 2 (1/3)	91
図 5 - 16	2 - 3 面の出土遺物 3 (1/3)	92
図 5 - 17	2 - 3 面の出土遺物 4 (1/3)	93
図 5 - 18	2 - 3 面の出土遺物 5 (218 は 1/5、他は 1/4)	95
図 5 - 19	2 - 3 面の出土遺物 6 (1/3)	96
図 5 - 20	2 - 3 面の出土遺物 7 (1/3)	97
図 5 - 21	2 - 3 面の出土遺物 8 (1/3)	98
図 5 - 22	2 - 3 面の出土遺物 9 (1/3)	99
図 5 - 23	2 - 3 面の出土遺物 10 (1/3)	100
図 5 - 24	第 3 面の遺構分布 (1/250)	109
図 5 - 25	SX6058 (1/20)	110
図 5 - 26	SX6100 (1/30)	111
図 5 - 27	第 3 面 ・ 3 - 4 面の出土遺物 1 (369 は 1/2、他は 1/3)	113
図 5 - 28	3 - 4 面の出土遺物 2 (1/3)	114
図 5 - 29	3 - 4 面の出土遺物 3 (1/3)	115
図 5 - 30	第 4 面の遺構分布 (1/250)	119
図 5 - 31	第 4 面の遺構分布詳細 1 (1/100)	120
図 5 - 32	第 4 面の遺構分布詳細 2 (1/100)	121
図 5 - 33	第 4 面の出土遺物 1 (1/3)	123
図 5 - 34	第 4 面の出土遺物 2 (489 ・ 490 は 1/4、他は 1/3)	124
図 5 - 35	第 4 面 ・ 4 面下の出土遺物 (501 は 2/3、他は 1/3)	125
図 6 - 1	周辺地形図 (1/250)	134

図6-2	外表施設位置図 (1/150)	135
図6-3	外表施設 1 (1/60)	144
図6-4	外表施設 2 (1/60)	145
図6-5	外表施設 3 (1/60)	146
図6-6	外表施設 4 (1/60)	147
図6-7	外表施設 5 (1/60)	148
図6-8	外表施設 6 (1/60)	149
図6-9	外表施設 7 (1/60)	150
図6-10	外表施設 8 (1/60)	151
図6-11	外表施設 9 (1/60)	152
図6-12	外表施設拓本 1 (縮尺不同)	153
図6-13	外表施設拓本 2 (縮尺不同)	154
図6-14	外表施設拓本 3 (縮尺不同)	155
図6-15	下部遺構及びトレンチ配置図 (1/150)	174
図6-16	外表施設及び下部遺構位置図 (1/150)	175
図6-17	下部遺構 1 (1/20・1/30)	176
図6-18	下部遺構 2 (1/30)	177
図6-19	下部遺構 3 (1/30)	178
図6-20	下部遺構 4 (1/20・1/30)	179
図6-21	下部遺構 5 (1/30)	180
図6-22	下部遺構 6 (1/10・1/30)	181
図6-23	下部遺構 7 (1/30)	182
図6-24	下部遺構 8 (1/40)	183
図6-25	下部遺構 9 (1/20・1/40)	184
図6-26	下部遺構 10・SX9149 遺物埋納状況 (1/5・1/20)	185
図6-27	土層断面図 (1/40)	188
図6-28	石垣東面 立面・断面図 (1/80)	189
図6-29	石垣北面及び西面 立面・断面図 (1/150)	190
図6-30	9区出土遺物 1 (1/2・1/3・1/4・1/6)	191
図6-31	9区出土遺物 2 (1/2・1/3・1/4)	192
図6-32	9区出土遺物 3 (1/2・1/6)	193
図6-33	9区出土遺物 4 (1/2)	194
図6-34	9区出土遺物 5 (1/2・1/3・1/6)	195
図6-35	9区出土遺物 6 (1/2・1/3)	196
図6-36	9区出土遺物 7 (1/2・1/3)	197
図6-37	9区出土遺物 8 (1/2・1/3)	198
図6-38	9区出土遺物 9 (1/2・1/3)	199
図6-39	9区出土遺物 10 (1/3・1/6)	200
図6-40	9区出土遺物 11 (1/2)	201
図6-41	6区集石および宝篋印塔出土遺物 (1/2)	214

図 6-42	6区集石および宝篋印塔 (1/20)	215
図 7-1	頭蓋最大長と最大幅 (頭蓋長幅指数)	237
図 7-2	頬骨弓幅と上顔高 (コルマン上顔示数)	237
図 7-3	鼻幅と鼻高 (鼻示数)	238
図 7-4	眼窩幅と眼窩高 (眼窩指数)	238
図 7-5	神代家墓所出土人骨と代表的な食料資源の炭素・窒素同位体比	254
図 7-6	神代家墓所出土人骨と他の近世集団における炭素・窒素同位体比の比較	255
図 7-7	ST9122-02(水晶製)の蛍光 X 線スペクトル	259
図 7-8	ST9138-21(カリ鉛ガラス製)の蛍光 X 線スペクトル	259
図 7-9	ST9143-01(カリ鉛ガラス製)の蛍光 X 線スペクトル	259
図 7-10	比重値と PbO の分布図	260

表目次

表 1-1	嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	2
表 4-1	7区出土遺物一覧	59
表 5-1	6G区第1面・1-2面の出土遺物	75
表 5-2	6G区第2面の出土遺物	86
表 5-3	6G区第2-3面の出土遺物	101
表 5-4	6G区第3面・3-4面の出土遺物	116
表 5-5	6G区第4面・4面下の出土遺物	126
表 6-1	9区外表施設一覧	156
表 6-2	9区下部遺構一覧	186
表 6-3	9区出土遺物一覧	202
表 7-1	比較資料	231
表 7-2	エナメル質減形成の個体別出現状況	232
表 7-3	東畑瀬遺跡 9区と江戸一橋遺跡の減形成出現率および出現率の差の検定結果	232
表 7-4	頭蓋計測値 (mm)	234
表 7-5	頭蓋形態小変異	235
表 7-6	四肢骨計測値 (mm)	236
表 7-7	分析資料	252
表 7-8	炭素・窒素同位体比	252
表 7-9	骨中鉛濃度の測量結果	253
表 7-10	比重および蛍光 X 線分析による定性分析結果	258
表 7-11	蛍光 X 線分析による定量分析結果 (%)	260

写真目次

写真 1	ST9106	239
写真 2	ST9108	239
写真 3	ST9109	240
写真 4	ST9112	240
写真 5	ST9114	241
写真 6	ST9115	241
写真 7	ST9117	242
写真 8	ST9122	242
写真 9	ST9124	243
写真 10	ST9127	243
写真 11	ST9130	244
写真 12	ST9131	244
写真 13	ST9136	245
写真 14	ST9138	245
写真 15	上段:ST9105 下段:1.ST9107 2.ST9143 3.ST9144	246
写真 16	病変 1	247
写真 17	病変 2	248
写真 18	病変 3	249

写真図版目次

写真図版 1－1	嘉瀬川ダム予定地周辺（南東から）	265
写真図版 3－1	畑瀬地区周辺（真俯瞰合成）	266
	東畑瀬遺跡全景（南から）	
写真図版 4－1	7A区・7B区・7C区（南東から）	267
	7C区 全景（東から）	
写真図版 4－2	7I区 調査区全景（北東から）	268
	7I区 SK7020（西から）	
	7I区 調査区全景（西から）	
	7I区 トレンチ土層（西から）	
	7I区 SK7018（西から）	
	7I区 トレンチ土層（南西から）	
	7I区 SK7019（西から）	
	7I区 調査状況	
写真図版 4－3	7J区 調査区全景（南西から）	269
	7J区 1 トレンチ土層（東から）	
	7J区 SK7022（西から）	
	7J区 2 トレンチ土層（北から）	
	7J区 SK7023（西から）	
	7J区 2 トレンチ・南壁土層（北から）	
	7J区 1 トレンチ土層（北東から）	
	7J区 調査状況	
写真図版 4－4	7K区 調査区全景（北東から）	270
	7K区 1 トレンチ（北から）	
	7K区 調査区全景（北東から）	
	7K区 2 トレンチ（南西から）	
	7K区 調査区全景（北西から）	
	7K区 2 トレンチ（北から）	
	7K区 1 トレンチ（東から）	
	7K区 調査状況	
写真図版 4－5	7L区 調査区全景（北西から）	271
	7L区 2 トレンチ（北から）	
	7L区・7J区（写真奥） 調査区全景（北西から）	
	7L区 2 トレンチ土層（北東から）	
	7L区 1 トレンチ（北東から）	
	7L区 3 トレンチ（東から）	
	7L区 1 トレンチ土層（北東から）	
	7L区 3 トレンチ土層（東から）	
写真図版 4－6	7M区 調査区全景（南東から）	272
	7M区 2 トレンチ土層 c～d 南側（東から）	
	7M区 調査区全景（北西から）	
	7M区 2 トレンチ土層 e～h 南側（南から）	
	7M区 1 トレンチ（南東から）	
	7M区 3 トレンチ（北から）	
	7M区 2 トレンチ（東から）	
	7M区 調査状況	
写真図版 4－7	7区出土遺物 1	273
写真図版 4－8	7区出土遺物 2	274
写真図版 4－9	7区出土遺物 3	275
写真図版 4－10	7区出土遺物 4	276
写真図版 4－11	7区出土遺物 5	277
写真図版 4－12	7区出土遺物 6	278
写真図版 4－13	7区出土遺物 7	279
写真図版 5－1	6G区 遠景（北東から）	280
	6G区 第1面全景（東から）	
写真図版 5－2	6G区第1面 SB6012（上が西）	281
	6G区第1面 SB6013（上が西）	
写真図版 5－3	6G区 第1面の出土遺物	282

写真図版 5－4	6G 区 第 2 面全景（南から）	6G 区 第 2 面全景（上が南）	283	
写真図版 5－5	6G 区第 2 面 庭園遺構（上が南）	6G 区第 2 面 SX6079（北西から）	6G 区第 2 面 SG6060（上が南）	284
写真図版 5－6	6G 区第 2 面 焼土検出状況（北から）	6G 区第 2 面 SG6061（南西から）	285	
	6G 区第 2 面 SX6065・6066・6067（東から）	6G 区第 2 面 遺物出土状況		
	6G 区第 2 面 SX6016（南から）	6G 区第 2 面 SX6057（東から）		
	6G 区第 2 面 SX6062（南西から）	6G 区第 2 面 SX6092（南東から）		
写真図版 5－7	6G 区 第 2 面の出土遺物	286		
写真図版 5－8	6G 区 2－3 面の出土遺物 1	287		
写真図版 5－9	6G 区 2－3 面の出土遺物 2	288		
写真図版 5－10	6G 区 2－3 面の出土遺物 3	289		
写真図版 5－11	6G 区 2－3 面の出土遺物 4	290		
写真図版 5－12	6G 区 第 3 面全景（東から）	6G 区第 3 面 SX6058 周辺（上が南）	291	
写真図版 5－13	6G 区第 3 面 SX6058（東から）	6G 区第 3 面 SX6063（南から）	292	
	6G 区第 3 面 SX6064（北から）	6G 区第 3 面 SX6101 種子出土状況（南から）		
	6G 区第 3 面 SX6058 土層（西から）	6G 区第 3 面 SX6063 拡大（南から）		
	6G 区第 3 面 SX6078（北西から）	6G 区第 3 面 SX6102 土層（西から）		
写真図版 5－14	6G 区第 3 面 SX6100 検出状況（北から）	6G 区第 3 面 SX6100 土層（西から）	6G 区第 3 面 SX6101・6102（南から）	293
写真図版 5－15	6G 区 第 3 面の出土遺物 1	294		
写真図版 5－16	6G 区 第 3 面の出土遺物 2	295		
写真図版 5－17	6G 区 第 4 面全景（上が西）	6G 区 第 4 面拡大（上が西）	296	
写真図版 5－18	6G 区第 4 面 完掘状況（北から）	6G 区第 4 面 SX6087（北から）	297	
	6G 区第 4 面 SX6082 土層（東から）	6G 区第 4 面 SX6095・6096（東から）		
	6G 区第 4 面 SD6099（南東から）	6G 区第 4 面 SX6088（東から）		
	6G 区第 4 面 SX6098（北東から）	6G 区第 4 面 SX6096 遺物出土状況（東から）		
写真図版 5－19	6G 区 第 4 面の出土遺物 1	298		
写真図版 5－20	6G 区 第 4 面の出土遺物 2	299		
写真図版 6－1	9 区 全景（北西から）	9 区 全景（北東から）	300	
写真図版 6－2	SX9001 正面（西から）	SX9001 右側面（南から）	301	
	SX9001 宝篋印塔正面（西から）	SX9001 左側面（北から）		
	SX9001 右側面～後面（南東から）	SX9001 宝篋印塔右側面（南から）		
写真図版 6－3	SX9002（北から）	SX9004（北から）	302	
	SX9006（北から）	SX9008（北から）		
	SX9003（北から）	SX9005（北から）		
	SX9007（北から）			

写真図版 6－4	SX9010・SX9011・SX9012（北から） SX9016（北西から） SX9013（北から） SX9002～SX9016（北西から）	SX9014（北から） SX9002～SX9016（南西から） SX9015（北東から） SX9002～SX9016（北東から）	303
写真図版 6－5	SX9002～SX9016（南東から） SX9019 右側面（西から） SX9017（北から） SX9020 正面（北西から）	SX9018（北東から） SX9020 右側面（西から） SX9019 正面（北から） SX9021 正面（東から）	304
写真図版 6－6	SX9021 右側面（北から） SX9025 正面（北東から） SX9022（東から） SX9025 後面（西から）	SX9023（南東から） SX9025 左側面（南から） SX9024（南東から） SX9026（北から）	305
写真図版 6－7	SX9027 正面（北から） SX9029・SX9030（東から） SX9027 右側面（西から） SX9031（北から）	SX9028 正面（東から） SX9032（北から） SX9028 後面（北西から） SX9032～SX9038（北東から）	306
写真図版 6－8	SX9039（北から） SX9040～SX9042（南西から） SX9040（南西から） SX9043（南から）	SX9041（南西から） SX9044（南から） SX9042（南西から） SX9045（南から）	307
写真図版 6－9	SX9046（南から） SX9050（西から） SX9047（南から） SX9051（西から）	SX9048（南から） SX9052（西から） SX9049（南西から） SX9053（西から）	308
写真図版 6－10	SX9054（西から） SX9058（移転後） SX9055（西から） SX9059・SX9060（西から）	SX9056（西から） SX9051～SX9058（南西から） SX9057（移転後） SX9053～SX9055・SX9059・SX9060（北西から）	309
写真図版 6－11	石垣東面（南東から） 石垣北面（北から） 石垣東面（東から） 石垣北面（北西から）	石垣東面（北から） 石垣西面（北西から） 石垣北面（東から） 石垣西面周辺（西から）	310
写真図版 6－12	調査区全景（西から）	調査区南西部（北から）	調査区東部（北西から） 311
写真図版 6－13	SX9001 基壇 3 段目遺物出土状況（図 6-30- 2・10）（西から） SX9001 基壇 4 段目遺物出土状況（図 6-30- 1）（南東から） SX9001 基壇 3 段目下部～4 段目上部（北から） SX9001 基壇 4 段目遺物出土状況（図 6-30-12）（南から） SX9001 基壇基底面遺物出土状況（図 6-30- 3）（北から）	SX9001 基壇 4 段目（南から） SX9001 基壇 4 段目遺物出土状況（図 6-30-13）（南から） SX9001 基壇 4 段目遺物出土状況（図 6-30-11）（東から）	312

写真図版 6－14	SX9001 基底面（南から） ST9102 甕内部（南東から） ST9101 甕出土状況（北から） ST9103 甕出土状況（南から）	ST9101 銭出土状況（東から） ST9103 甕内部（東から） ST9102 検出状況（南東から） ST9103 蔵骨器内部（東から）	313
写真図版 6－15	ST9104（東から） ST9106 完掘状況（西から） ST9105（東から） ST9107（北から）	ST9106（東から） ST9107 遺物・人骨出土状況（北東から） ST9106 遺物・人骨出土状況（北西から） ST9108（南から）	314
写真図版 6－16	ST9108 遺物・人骨出土状況（西から） ST9110（北から） ST9108 完掘状況（南から） ST9110 蔵骨器内部	ST9109（北から） ST9111（南から） ST9109 遺物・人骨出土状況（北から） ST9112（南から）	315
写真図版 6－17	ST9112 甕出土状況（南から） ST9114 人骨出土状況（西から） ST9112 人骨出土状況（南から） ST9115（北から）	ST9114（西から） ST9115 石蓋除去後（北から） ST9114 石蓋除去後（西から） ST9115 人骨出土状況（北から）	316
写真図版 6－18	ST9115 完掘状況（北から） ST9118（東から） ST9117（北から） ST9118 人骨出土状況（東から）	ST9117 遺物・人骨出土状況（北から） ST9118 銭出土状況（東から） ST9117 銭出土状況（北から） ST9119（北から）	317
写真図版 6－19	ST9119 甕及び遺物出土状況（北から） ST9122（南から） ST9121（北東から） ST9123（北から）	ST9121 人骨出土状況（東から） ST9123 人骨出土状況（北から） ST9122（北から） ST9124（北から）	318
写真図版 6－20	ST9124 遺物・人骨出土状況（北から） ST9130 人骨出土状況（北西から） ST9124 銭出土状況（東から） ST9131 遺物・人骨出土状況（西から）	ST9127 人骨出土状況（北から） ST9132（北東から） ST9130・ST9131（東から） ST9134（南から）	319
写真図版 6－21	ST9135（東から） ST9138（東から） ST9136 遺物・人骨出土状況（北西から） ST9138 人骨出土状況（東から）	ST9137（北から） ST9141（西から） ST9137（北から） ST9141 壺内部	320
写真図版 6－22	ST9143（北から） ST9145・ST9146 出土状況（北から） ST9143 遺物・人骨出土状況（西から） ST9146 甕内部（ST9147）（東から）	ST9144（東から） ST9146 甕内部（ST9147 取上後） ST9144 人骨出土状況（北から） ST9147 壺内部	321
写真図版 6－23	SX9128（西から） SX9149 出土遺物 SX9149 検出状況（北東から） SX9149 出土遺物	SX9149（北から） SX9149 出土遺物 SX9149 甕内部 SX9149 出土遺物 X線 CT スキャナによる断層像	322

写真図版 6－24	1～5 トレンチ設定状況 (南東から)	3～7 トレンチ設定状況 (南東から)	調査状況	323
写真図版 6－25	9 区遺物写真 1			324
写真図版 6－26	9 区遺物写真 2			325
写真図版 6－27	9 区遺物写真 3			326
写真図版 6－28	9 区遺物写真 4			327
写真図版 6－29	9 区遺物写真 5			328
写真図版 6－30	9 区遺物写真 6			329
写真図版 6－31	9 区遺物写真 7			330
写真図版 6－32	9 区遺物写真 8			331
写真図版 6－33	6 区 石塔調査前	6 区 石塔調査後		332

第1章 調査の経過

1 調査の経緯

嘉瀬川ダムは、嘉瀬川水系嘉瀬川の総合開発の一環として佐賀県佐賀市富士町（平成17年10月1日に佐賀市、佐賀郡富士町、同郡大和町、同郡諸富町、神埼郡三瀬村が対等合併した）で建設が進められており、洪水調節をはじめ、流水の正常な機能の維持、灌漑用水及び都市用水の補給、及び水力発電に供される多目的ダムである。

嘉瀬川ダム建設事業とこれに伴う文化財調査の詳しい経緯については既刊の『東畑瀬遺跡1・大野遺跡1』に記しているので参照されたい。平成22年度は、垣ノ内遺跡4区、地蔵平遺跡3区、音無瓦窯跡の発掘調査を実施して、本書を含め2冊の調査報告書を作成した。

本書は、嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第6冊目となるもので、東畑瀬遺跡6G・7・9区について収録した。

2 調査組織

調査主体 佐賀県教育委員会

調査協力 国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所
富士町教育委員会（現・佐賀市教育委員会）
佐賀県土木部ダム対策課・河川砂防課ダム対策室（現・佐賀県県土づくり本部水資源対策課）
富士町ダム対策課（現・佐賀市富士支所嘉瀬川ダム対策課）
地元各位

調査組織（平成22年度）

総括	佐賀県教育委員会教育長	川崎俊広
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課長	江島秋人
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課参事	七田忠昭
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課副課長	森田孝志
調査総括	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主幹	樋口秀信
調査員	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	白木原 宜
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	梶山裕史
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	今泉好孝
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	渋谷 格
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	市田佳奈子
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	渡部芳久
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	吉田大輔
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	西野元勝
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	藤井菜穂子

事務局	佐賀県教育庁社会教育・文化財課副課長	古川英生
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	宮本宏之
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	井手弘幸
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主事	黒田康裕

調査指導・助言 文化庁記念物課 佐賀県文化財保護審議会 金原正明

3 発掘調査の経過

嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、関連工事に伴って富士町教育委員会（当時）により平成 7～9 年度に断続的に行われたが、平成 11～12 年度の水没地区内確認調査の結果を踏まえ、平成 12 年度以降は佐賀県教育委員会が継続して実施している。水没地区内及び付替国道・付替市道など嘉瀬川ダム工事事務所所管工事に伴って発掘調査が必要な遺跡は、13 遺跡にのぼり（図 1-1、表 1-1）、平成 22 年度前半までに東畑瀬遺跡 1～9 区、畑瀬城跡、西畑瀬遺跡 1～9 区、垣ノ内遺跡、小ヶ倉遺跡、入道遺跡 1 区、音無瓦窯跡、地蔵平遺跡 1～3 区、九郎遺跡 1～3 区、大串遺跡 1 区、平島遺跡、フルタ遺跡、大野遺跡 1～8 区のすべての本調査対象地区で発掘作業を終了しており、調査報告書を 4 集刊行している。

東畑瀬遺跡 6G・7・9 区の調査は、平成 16～21 年度にかけて断続的に実施した。

表 1-1 嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

番号	遺跡名	略号	対象面積（㎡）	遺跡の時代	遺跡の種類	番号	遺跡名	略号	対象面積（㎡）	遺跡の時代	遺跡の種類
①	東畑瀬遺跡	HHT	121,300	縄文～近世	集落・城館 神社・墓地	⑧	フルタ遺跡	FRT	26,600	縄文～近世	集落
②	畑瀬城跡	HTJ	12,800	中世～近世	城郭・墓地	⑨	小ヶ倉遺跡	KKA	47,000	旧石器～近世	集落
③	西畑瀬遺跡	NHT	58,800	縄文～近世	集落	⑩	地蔵平遺跡	JZD	20,000	旧石器～縄文	集落
④	垣ノ内遺跡	KNU	21,000	弥生～古墳	集落	⑪	平島遺跡	HBT	13,000	縄文～近世	集落
⑤	九郎遺跡	KRO	17,950	旧石器～近世	集落	⑫	音無瓦窯跡	OTN	1,500	近世	生産遺跡
⑥	大串遺跡	OOK	3,000	中世	集落	⑬	入道遺跡	NYD	400	旧石器～縄文	集落
⑦	大野遺跡	OON	35,200	縄文～近世	集落・官衙						

東畑瀬遺跡 6G 区

略号：H H T 6 G

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字関屋字鶴

調査対象面積：2,000㎡

調査担当：加藤吾郎・市田佳奈子（平成 16・17 年度）、渋谷格（平成 17 年度）

東畑瀬遺跡 7 区

略号：H H T 7

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字関屋字鶴・辻

調査対象面積：17,300㎡

調査担当：樋口秀信・田中良輔（平成 16 年度）

白木原宜・今泉好孝・内田真一郎・西野元勝・吉田大輔・渡部芳久（平成 20・21 年度）

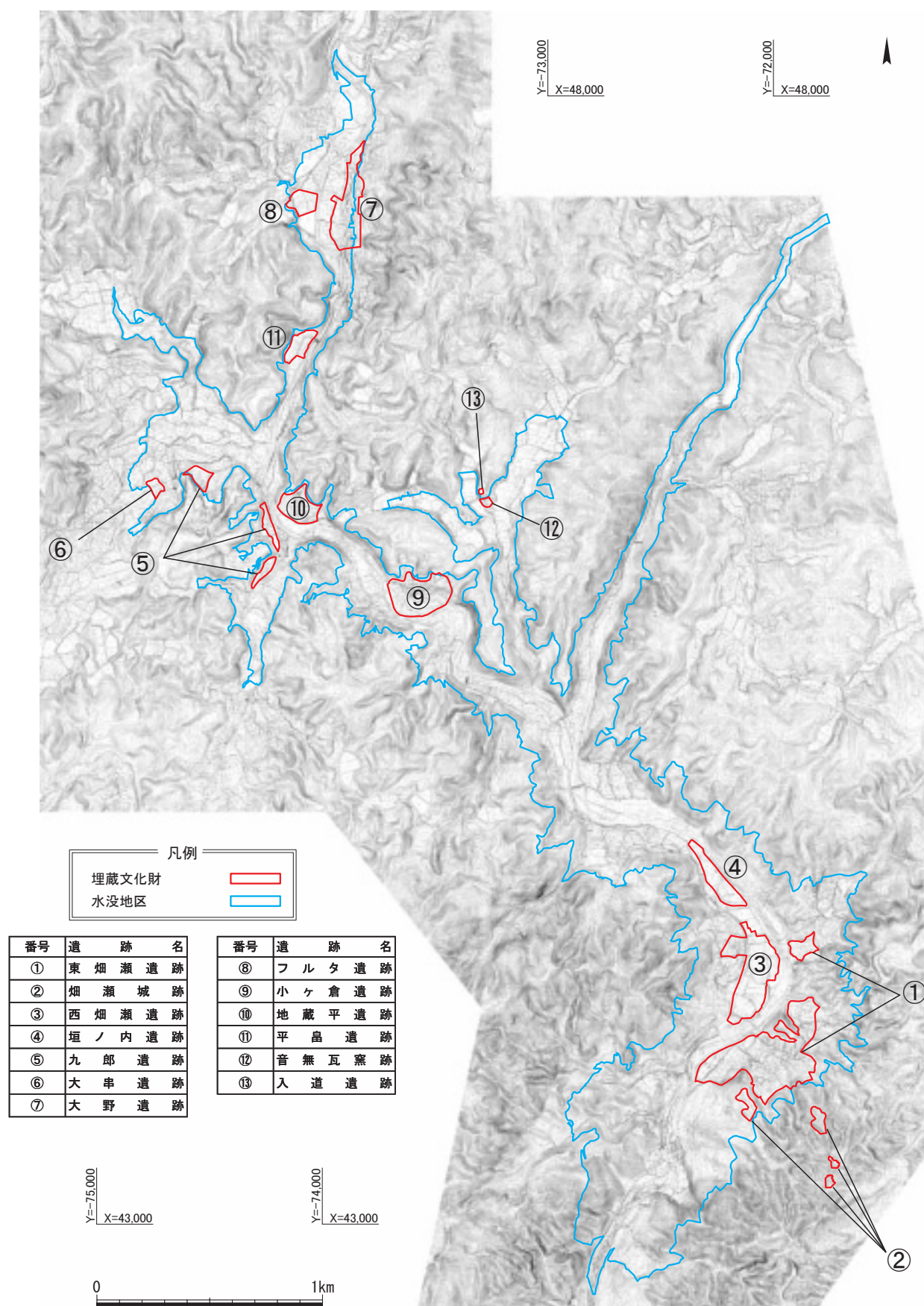


図1-1 嘉瀬川ダム水没地区周辺と埋蔵文化財調査地区 (1/25,000)

調査の経過

東畑瀬遺跡 9 区

略号：H H T 9

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字^{せきや}関屋^{つる}字鶴

調査対象面積：300m²

調査担当：白木原宜・今泉好孝・吉田大輔（平成 20 年度）

調査記録や出土遺物の整理は発掘作業と並行して順次進めたが、本格的な報告書作成作業は平成 20 年度から着手し、平成 22 年度に本書を作成刊行した。

なお、9 区から出土した古人骨については、形質人類学および古病理学的調査を埴原恒彦氏・川久保善智氏に、エナメル質減形成についての調査を澤田純明氏に、炭素・窒素同位体比と鉛濃度の分析を米田穰氏にそれぞれお願いし玉稿を賜った。また、出土した数珠玉については、材質分析および産地同定を新免歳靖氏にお願いし玉稿を賜った。

このほか、遺物の分析・保存処理等を、6G 区出土銅製品については福岡市埋蔵文化財センター、9 区 SX9149 出土遺物については九州国立博物館の協力をそれぞれ得た。

第 1 章 参考・引用文献

嘉瀬川ダム環境検討委員会・国土交通省嘉瀬川ダム工事事務所（2003）『嘉瀬川ダム事業における環境保全への取り組み』国土交通省嘉瀬川ダム工事事務所

嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（2000）『嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書』富士町教育委員会

富士町史編さん委員会（2000）『富士町史』上・下巻 富士町

第2章 位置と環境

1 地理的環境

嘉瀬川は、佐賀県と福岡県の分水嶺をなす脊振山地の金山に源を発し、山間部を流下して神水川、天河川、名尾川などの支流を合わせ、肥前国府や肥前国一宮河上神社のあたりで山地を抜け、佐賀平野のほぼ中央を貫流して有明海に注ぐ、幹線流路延長 57km、流域面積 368km²の一級河川である。上流部には灌漑用水を主な目的とする北山ダムが昭和 32 (1957) 年に完成しているが、すぐ下流にあたる佐賀市富士町の中央部に多目的ダムとして建設中なのが、嘉瀬川ダムである。ダム予定地の下流には古湯温泉と熊の川温泉があり、県内外から多くの人々が訪れている。

佐賀市富士町（旧佐賀郡富士町）は、佐賀県の北端部に位置し、北は県境の分水嶺を境に福岡県前原市・福岡市早良区と、東は佐賀市三瀬村（旧神埼郡三瀬村）・佐賀市大和町（旧佐賀郡大和町）と、西は唐津市七山・厳木町（旧東松浦郡七山村・厳木町）と、南は天山山地の尾根筋で小城市小城町・多久市とそれぞれ接している。旧富士町役場、現在の佐賀市役所富士支所の位置で言うと、東経 130° 12′ 03″、北緯 33° 22′ 58″に位置し、東西 10 km、南北 17 km、面積 143.25 km²である。気候は、温暖湿潤な佐賀県内の中でも平均気温が低く、降水量は多い。山間部特有の日照時間の短さともあいまって冬季の寒さが厳しい地域である。

地勢は、福岡県との県境をなす脊振山地の東西脊梁のうち羽金山・雷山・井原山・金山の峰々を北に仰ぎ、南に脊振山地の一部でもある天山山地がそびえ、両山地の間は高原状の丘陵地・山地とその間を流れる河川により開析された谷底平野・河岸段丘などからなる。西側には羽金山から亀岳を経て天山に連なる南北方向の分水界峰があり、これより東側が有明海に注ぐ嘉瀬川水系、西側が玄界灘に注ぐ玉島川・松浦川水系となっている。佐賀市富士町地域は、東側の佐賀市三瀬村や更に東側の神埼市脊振町（旧神埼郡脊振村）と大小の谷や峠を介して連続しており、このような一体的な地勢の特徴が、「山内」という独自の地域圏を育んできた。

表層地質は中世代白亜紀に生成した花崗岩類を主体とし、雷山や天山周辺に局地的に三郡変成岩の塩基性深成岩類及び蛇紋岩と結晶片岩類が分布する。土壌は、南北の大起伏山地は礫質・粗砂質であるが、中央部の小起伏山地・丘陵地では風化が進んでやや粘土質の土壌に覆われている。山麓部や斜面には礫質・中粗粒の黄色土壌、河川沿いの谷底平野に中粗粒の黄色土壌や礫質・中粗粒・細粒の灰色低地土壌などが分布する。また、嘉瀬川上流域の北山ダム（北山湖）を中心とする一帯には北山層と名付けられた泥炭層を挟む湖成層が分布していて、第四期更新世末期頃に存在した「古北山湖」の湖底に堆積したものと考えられている。

旧富士町域の 8 割以上が森林で、更にその 8 割以上がスギ・ヒノキの人工林である。人工林以外の植生は、ほとんど常緑広葉樹林帯に属するが、標高 900 m 級の南北山地の山頂部近くには夏緑広葉樹林帯が僅かに認められる。動物相は、大型哺乳類ではイノシシ、キツネ、ニホンザル、タヌキ、アナグマ、イタチ、ノウサギ、テンなどが生息し、ニホンザルやキツネは減少傾向にあるが、イノシシは近年急増しており、発掘調査中にも遭遇することがある。鳥類では主な留鳥として大小のサギ類、キジ、コジュケイ、キジバト、カワセミ、ヤマセミなどが見られ、国指定天然記念物のカササギ（カチガラス）は古湯地区より上流部には生息しておらず、嘉瀬川ダム地区内では確認されない。

2 歴史的環境

本地域の歴史的環境全般については、『富士町史』などを参照していただくとして、ここでは近年の遺跡調査により急速に充実してきた考古学的な所見を中心に概述する。

旧石器時代の遺跡は、地蔵平遺跡（10）、小ヶ倉遺跡（9）、九郎遺跡（5）などでナイフ形石器などの示準石器

が出土している。このうち、平成 18 ～ 22 年度に発掘調査を行った地蔵平遺跡では、部分的に始良^{あい}T n テフラ（A T）の堆積層が良好な状態で検出され、その堆積層の上下から多様な石器が出土しており、今後の調査や分析により多くの成果が期待される。

縄文時代の遺跡として知られる箇所は非常に多く、近年の発掘調査で縄文時代各時期の遺物が竪穴住居や炉跡などの遺構と共に検出され、遺跡の内容が明らかになりつつある。嘉瀬川ダム建設に伴う調査に限っても、早期前葉の資料として、小ヶ倉遺跡で円筒形刺突文土器や石槍が出土しているほか、入道^{にゅうどう}遺跡（13）で集石炉と刺突文土器を検出している。早期中葉では、九郎遺跡、平昌^{ひらばなけ}遺跡（11）、垣ノ内^{かきのうち}遺跡（4）などで稲荷山式～田村式期の遺物が出土している。早期後葉では、九郎遺跡や西畑瀬遺跡（3）で塞ノ神 A 式・B 式・轟 A 式系土器などが出土しており、西畑瀬遺跡では地床炉と思われる焼土遺構と焼礫集積遺構が検出されている。前期では九郎遺跡や西畑瀬遺跡で轟 B 式・西唐津式・曾畑式土器があり、西畑瀬遺跡では鬼界アカホヤテフラ（K－A h）を含む層が部分的ではあるが広がっていて、下層から塞ノ神 B 式・轟 A 式期、上層から轟 B 式・曾畑式期の遺構・遺物が確認されている。中期の資料はやや少ないが、九郎遺跡、西畑瀬遺跡で船元式・春日式・阿高式系土器が出土している。後期初頭^{ひがしはたげ}では東畑瀬遺跡（1）で坂の下式土器、少量ではあるが西畑瀬遺跡から中津式系土器が出土している。後期中葉～後葉では、西畑瀬遺跡で鐘崎式期頃の遺物集中部から石製垂飾^{おの}が出土し、大野遺跡（7）では三万田式期の集落で竪穴住居などの遺構を検出している。晩期では、東畑瀬遺跡で縄文時代後期末～弥生時代前期まで集落が断続的に営まれている。

縄文時代と比べると、当地域における弥生時代から平安時代までの様相を知る手がかりは非常に少ない。標高が高く寒冷地であるこの地域では水稲耕作を基盤とする生活が成り立ちにくかったようで、この時期の遺跡数は極端に減少している。近年の埋蔵文化財調査の進展によって、西畑瀬遺跡や東畑瀬遺跡、垣ノ内遺跡などで断片的に遺構・遺物が確認され、ようやく山間部の弥生時代～古代の様相が少しずつ知られるようになってきた。

弥生時代では、東畑瀬遺跡で弥生時代前期の竪穴住居らしき遺構が検出されているが、弥生時代特有の大陸系磨製石器は検出されておらず、縄文時代的な生活が続いていたようである。西畑瀬遺跡では中期の土器埋納遺構や後期の小児甕棺墓が検出されており、1 点ずつではあるが石包丁（磨製穂摘具）・磨製石斧も見つかっている。

古墳時代では、古墳はもちろん竪穴住居などを伴う集落の広がりも確認されていないが、同時代の土器は発掘調査や採集資料で散見される。西畑瀬遺跡では完形の土師器甕と土師器高杯の杯部 2 点を埋納した何らかの祭祀に関わる小穴が発見され、垣ノ内遺跡でも土師器甕などが出土しており、大野遺跡では土坑が確認されている。

律令制下の当地域は肥前国佐嘉郡の範囲であったと思われ、嘉瀬川沿いの脊振山間部と佐賀平野部との結節点に肥前国府が置かれていることを考えると、嘉瀬川上流域も律令国家の関心外であったとは思えないが、具体的な様相を知る史料はなく、遺跡にしても^{うちの}内野遺跡で平安時代前期頃の土師器、西畑瀬遺跡で越州窯系青磁碗や須恵器等の平安時代前半期に遡る遺物が数点出土している程度である。

古代末以降においても、富士町域の各所がどの荘園公領に含まれていたかを示すことが難しいが、少なくとも肥前安富荘領があったことは史料上で確認できる。南北朝初期の暦応 2（1339）年 4 月 25 日石志定阿護状案（石志氏家文書）は中世前期の富士町域を知る貴重な史料で、松浦党一族の石志氏が恩賞として配分された所領を子孫に伝えたものであるが、その中に「安富庄内畑瀬村、同村内火桶」と「安富庄畑瀬村内上於副河」が記されている。肥前安富荘に関しては宮武（1991）に詳しいが、佐賀郡一帯に散在的に散らばる荘領のうち、富士町畑瀬・上小副川、佐賀市大和町東山田・佐保・久留間、佐賀市久保田町北部で確認される遺称地については嘉瀬川流域に分布している点が注目される。古代末～中世前期の遺跡としては、東畑瀬遺跡、西畑瀬遺跡、九郎遺跡、大野遺跡、中原遺跡で屋敷地などの遺構が見つかっていて、特に東畑瀬・西畑瀬遺跡の屋敷地は安富荘畑瀬村との関連で重要である。また、中原遺跡では土師器杯・皿を 40 点ほど集積した遺構が検出されている。

安富畑瀬の名は、近世初期まで鍋島直茂所領目録（杠家文書）の「安富畑瀬山」や東畑瀬宗源院半鐘銘の「佐賀郡安富庄畑瀬山」などで確認できるが、中世後期には畑瀬、栗並、藤瀬、菖蒲、等々の山内の各地を名字とする在地

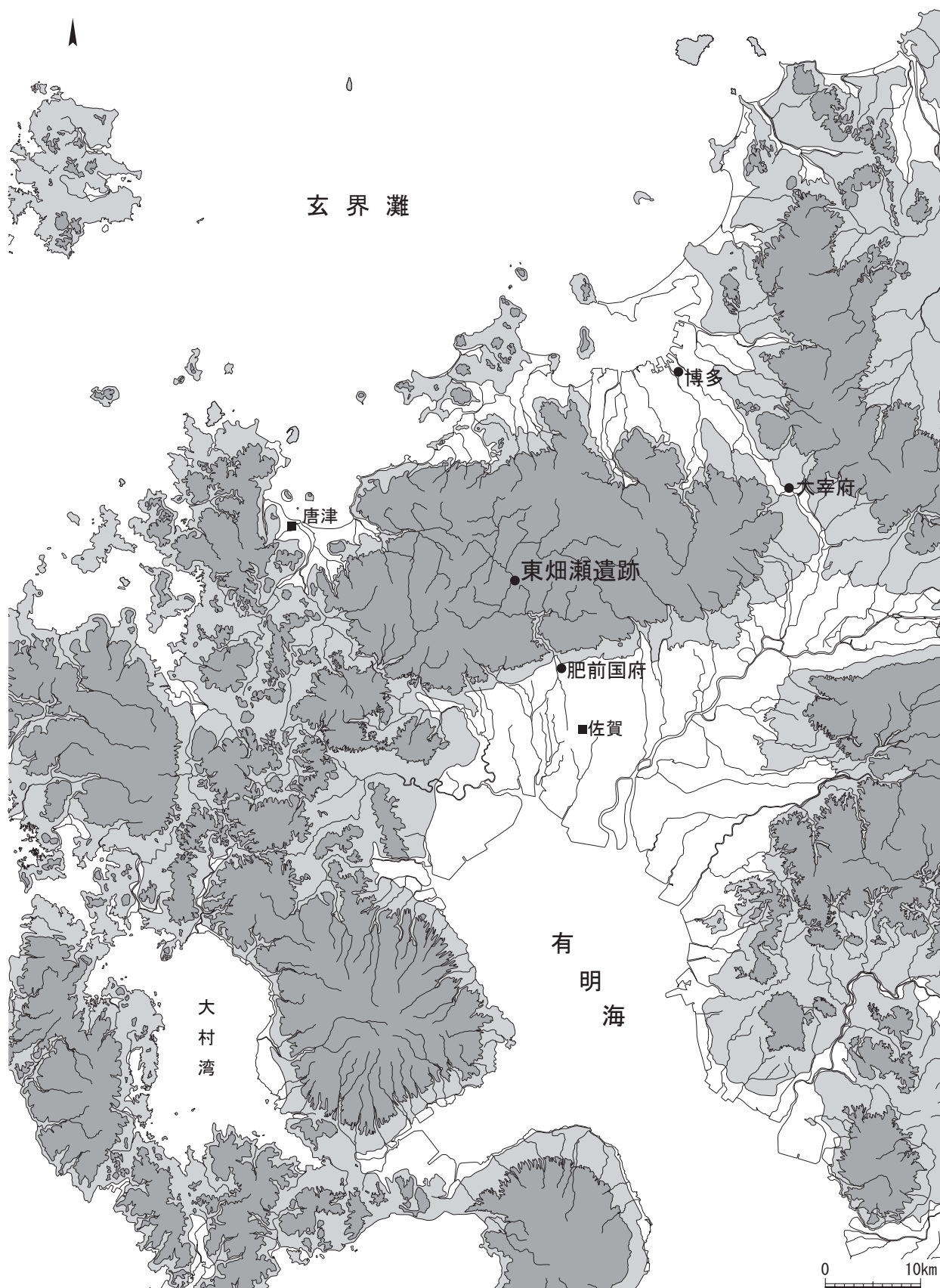


図2-1 東畑瀬遺跡の位置 (1/600,000)



図 2-2 嘉瀬川ダム建設予定地周辺の遺跡 (1/100,000)

国土地理院の数値地図 50,000 (地図画像)『佐賀・長崎』を使用

勢力の台頭によって、荘園としては実態の伴わないものへ変化していったものと思われる。大串遺跡（6）では14～15世紀代の在地有力者層に関わると考えられる遺構群が見つかっており、平畠遺跡でも中世後期の屋敷地が検出されている。

戦国期に至ると、^{くましろうかつとし}神代勝利が各地に割拠した小領主をまとめあげて山内を統一し、佐賀市三瀬村三瀬城を本城として佐賀の^{りゅうぞうじ たかのぶ}龍造寺隆信と覇を競った。勝利は富士町域にも谷田城、熊川城などを構え、永禄7（1564）年に隠居所として畑瀬城を築いたとされる。戦国期の城館については近年の中近世城館跡分布調査によって、山内では三瀬城の規模が際立って大きく、それ以外の在地領主のものと考えられる山城は規模・構造とも簡素なものが多いこと、個々の集落単位で領主居館跡、詰城、領主の墓址、菩提寺、氏神がセットで残っている例が数多く確認できることなど、この地域の独自性が徐々に明らかになりつつある。東畑瀬地区では、勝利が築いた畑瀬城に比定される城郭遺構について、山頂部の一部の調査（富士町教委2005）を含め、隠居所と推定される山麓部の土塁を伴う居館跡、それに付随する山城などの調査によって、総体としての畑瀬城の実態が明確に捉えられるようになってきている。

勝利の嫡子^{ながよし}長良は龍造寺氏と和睦し、龍造寺氏の重臣で鍋島藩祖となる^{なべしななおしげ}鍋島直茂の甥を養子に迎えた。神代氏は^お小城^{あしかり}芦刈、更に佐嘉川^{さがかわ}久保^{くぼ}へと転封されたが、川久保邑主として1万石の大身を保持した。山内は鍋島氏の所管となったが、元和3（1617）年の小城鍋島家（小城支藩）創設にあたって嘉瀬川以西の地域が分け与えられた。これ以降、明治維新を迎えるまで、それぞれ佐賀山内、小城山内として郷村支配が続いた。佐賀山内郷では松瀬三反田に、小城山内郷では大野に代官所が設置された。このうち大野地区に現存する大野代官所の遺構は江戸時代後期のものであるが、その設置時期や詳しい経緯についてはよく判っていない。城郭を思わせる本格的な石垣造りの遺構であり、単に一支藩が山間部の経営のために設けた代官所としては破格の規模であり、隣藩との国境に近い軍事上の重要地であることが、その背景として想定される。隣接する大野遺跡では近世初期の役所的施設とみられる建物群が検出されており、大野代官所の前身のような施設であった可能性がある。東畑瀬遺跡では、神代勝利の菩提寺である宗源院跡で近世から現代までの寺院跡が4面重複して確認され、付属する宗源院墓地では多数の近世墓が調査されている（本書）。また、東畑瀬遺跡を始めとして嘉瀬川ダム建設事業に伴う各遺跡の調査によって山内における近世の開発の様相が徐々に明らかになりつつある。

明治維新の後、伊万里県の設置や長崎県への統合などの紆余曲折を経て、明治16（1883）年に現在の佐賀県が成立した。これに先立つ明治11（1878）年の郡区町村編成法により、富士町域にあたる範囲では、佐賀郡小副川村、^{せきや}関屋村の2ヶ村、小城郡鎌原村、^{ちやのき}苅木村、^{いちかわ}市川村、^{すぎやま}杉山村、^{おおくし}大串村、^{くりなみ}栗並村、^{おおの}大野村、^{なかばる}中原村、^{まなこ}麻那古村、^{かみむつろ}上無津呂村、^{しもむつろ}下無津呂村、^{かみおうせ}上合瀬村、^{しもおうせ}下合瀬村、^{こば}古場村、^{ふじせ}藤瀬村、^{はたせ}畑瀬村、^{ふるゆ}古湯村、^{かみくまのかわ}上熊川村、^{うちの}内野村、^{しもくまのかわ}下熊川村の20ヶ村が行政単位となっていたが、明治22（1889）年の市制町村制により上記の各村は佐賀郡小関村と小城郡北山村・南山村の3村に統合され、旧村名は大字として残ることになった。

昭和31（1956）年には佐賀郡小関村と小城郡北山村・南山村の3村が対等合併して富士村となり、昭和41（1966）年10月1日の町制施行により佐賀郡富士町となった。その39年後にあたる平成17（2005）年10月1日に、佐賀市・佐賀郡大和町・^{もろどみ}同郡諸富町・神埼郡三瀬村と対等合併して佐賀市富士町となった。なお、佐賀市は平成19年10月1日に、佐賀郡川副町・^{かわそえ}東与賀町・^{ひがしよか}久保田町を編入合併している。

第2章 参考・引用文献

- 嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（2000）『嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書』 富士町教育委員会
 佐賀県企画室（1979）『土地分類基本調査 浜崎』
 佐賀県教育委員会（1997）『佐賀県の地質鉱物』 佐賀県文化財調査報告書第134集
 佐賀県教育委員会（1964）『佐賀県の遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第13集
 佐賀県教育委員会（2007）『東畑瀬遺跡1・大野遺跡1』 佐賀県文化財調査報告書第170集
 佐賀県教育委員会（2008）『西畑瀬遺跡1』 佐賀県文化財調査報告書第176集

位置と環境

- 佐賀県教育委員会（2009）『西畑瀬遺跡 2・大串遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 180 集
- 佐賀県教育委員会（2010）『東畑瀬遺跡 2・畑瀬城跡』佐賀県文化財調査報告書第 185 集
- 佐賀県教育庁文化財課（1997）「九郎遺跡 1 区」『佐賀県文化財年報 2』
- 佐賀県教育庁文化財課（1998）「大野遺跡（1 区）」『佐賀県文化財年報 3』
- 佐賀県教育庁文化課（2003）「大串遺跡（1 区）」『佐賀県文化財年報 8』
- 佐賀県教育庁文化課（2005a）「西畑瀬遺跡（4 区）」『佐賀県文化財年報 10』
- 佐賀県教育庁文化課（2005b）「西畑瀬遺跡（5 区）」『佐賀県文化財年報 10』
- 佐賀県教育庁文化課（2006a）「東畑瀬遺跡（5・6・7 区）」『佐賀県文化財年報 11』
- 佐賀県教育庁文化課（2006b）「西畑瀬遺跡（5 区）」『佐賀県文化財年報 11』
- 佐賀県教育庁文化課（2007a）「西畑瀬遺跡（6・7 区）」『佐賀県文化財年報 12』
- 佐賀県教育庁文化課（2007b）「東畑瀬遺跡（8 区）」『佐賀県文化財年報 12』
- 佐賀県教育庁文化課（2007c）「畑瀬城跡（2 区）」『佐賀県文化財年報 12』
- 佐賀県教育庁文化課（2007d）「大野遺跡（4 区）」『佐賀県文化財年報 12』
- 佐賀県教育庁文化課（2008a）「地藏平遺跡（1 区）」『佐賀県文化財年報 13』
- 佐賀県教育庁文化課（2008b）「小ヶ倉遺跡」『佐賀県文化財年報 13』
- 佐賀県教育庁文化課（2008c）「九郎遺跡（1 B 区）」『佐賀県文化財年報 13』
- 佐賀県教育庁文化課（2008d）「九郎遺跡（2 区）」『佐賀県文化財年報 13』
- 佐賀県教育庁文化課（2008e）「九郎遺跡（3 区）」『佐賀県文化財年報 13』
- 佐賀県立図書館（1986）『佐賀県史料集成 古文書編』第 27 巻
- 佐賀市教育委員会（2007a）『大串遺跡』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 16 集
- 佐賀市教育委員会（2007b）『中原遺跡—2・3 区の調査—』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 19 集
- 全国神代ゆかりの会（1980）「神代家伝記」『神代家とその一族』1 号
- 富士町教育委員会（2003a）『富士町内遺跡発掘調査報告書 平成 7 年度～13 年度』富士町文化財調査報告書第 2 集
- 富士町教育委員会（2003b）『中原遺跡 1 区』富士町文化財調査報告書第 3 集
- 富士町教育委員会（2005）『畑瀬城跡』富士町文化財調査報告書第 4 集
- 富士町誌編さん委員会（1968）『富士町誌』 富士町教育委員会
- 富士町史編さん委員会（2000）『富士町史』上巻・下巻 富士町
- 三瀬村誌編纂委員会（1977）『三瀬村誌』 三瀬村
- 宮武正登（1991）「本村遺跡をめぐる中世世界—安富荘内村落としての位置付け—」『本村遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 102 集 佐賀県教育委員会

第3章 東畑瀬遺跡の概要

東畑瀬遺跡は、佐賀県佐賀市富士町大字関屋字鶴・辻・田野々・平・川向に所在する（図3-1）。今回報告する調査区は、6G・7A～7L・9区が字鶴、7M区が字辻である。

東畑瀬地区は、嘉瀬川中流域の左岸に位置し、ダム建設に伴い全戸移転するまで北西向きの山麓部斜面一帯に集落が展開していた。「畑瀬」は暦応2（1339）年4月25日石志定阿護状案（石志氏家文書）に「安富庄内畑瀬村、同村内火桶」とあるのが史料上の初見である。当地には山内を代表する戦国武将である神代勝利が隠居所とした畑瀬城があったとされ、勝利の墓や菩提寺である宗源院がある。嘉瀬川を挟んだ対岸には西畑瀬地区があり、東西の畑瀬地区は、藩政期には東畑瀬が佐賀本藩領、西畑瀬が小城鍋島家（小城支藩）領に属し、昭和31（1956）年に旧富士村として合併するまで佐賀郡小関村と小城郡南山村に分かれていた。現在は国道323号線が嘉瀬川に沿って古湯地区から西畑瀬に向かっているが、近世以前の基幹道は小副川地区で一旦嘉瀬川沿いから外れ、上小副川まで北上した後、西に向かい峠を越えて東畑瀬に入り、嘉瀬川を渡って西畑瀬に至るという経路であったことが、『正保四年肥前一国絵図』などからも読み取れる。これは、小副川地区から畑瀬地区にかけて数箇所みられる平坦地のほとんどない深い溪谷をなしている部分を避けるためと推測される。したがって、6区と7区の間東西の道は、中世から近世にかけては主要な街道であったことになる。

東畑瀬遺跡では、嘉瀬川ダム建設事業に伴い1～9区の発掘調査を実施した。現地調査は平成21年度で終了しており、縄文時代～弥生時代の集落跡・遺物包含層、中世の集落跡・城館跡、近世の寺院跡・神社跡・集落跡などを調査している。

これまでの調査成果から時代を追って概観すると、旧石器時代に遡る確実な遺構・遺物は確認されていないことから、縄文時代から東畑瀬地区の歴史が始まるものと思われる。縄文時代の遺跡は、遺跡西部の嘉瀬川に面した標高約235mの河岸段丘上（1区）を中心に展開している。1区では晩期を中心とした時期の遺構・遺物が多数出土しているが、早期の撚糸文土器や押型文土器があり、3区では前期の曾畑式土器なども出土している。また、来年度報告予定の6T区下層では、後期初頭の坂の下式期の遺物包含層が確認されている。ただ、嘉瀬川対岸の西畑瀬遺跡で、早期中葉から晩期末までの各時期の遺構・遺物が連綿と確認されているのと比較すると、時期は限定されている。

弥生時代になると、1区で引き続き前期前半まで遺構・遺物が確認されているが、狩猟具に偏った石器組成は縄文時代と変わらないもので、水稻耕作が行われていたとは思われない。この時期以降では、中世にいたるまでの間遺物もほとんど確認されていない。西畑瀬遺跡やその北側の垣ノ内遺跡では、量は多くないとはいえ、弥生・古墳時代の遺構・遺物が確認されているのとは対照的である。その中で7K区出土の弥生土器（第4章）は、この地区の歴史を知る上では貴重な資料といえる。後の主要な街道沿いに位置していることは、弥生時代から佐賀平野と玄界灘沿岸地域を結ぶ道が存在したことを示唆しているのかもしれない。

この地に再び開発の手が及ぶのは、平安時代末期の中世になってからである。中世前期の中心もやはり1区であり、鎌倉時代を中心とする屋敷地が確認されている。この屋敷地では、平安時代末～鎌倉時代前期には東西棟であった建物群が、鎌倉時代後期～南北朝時代初期には南北棟の建物群に変遷しており、主体者の交替が推定されている。鎌倉時代前後の畑瀬地区は肥前安富荘の領域に含まれていたとみられ、石志定阿護状案によれば石志氏が「恩賞之地」として獲得していることから、東畑瀬遺跡の屋敷地と松浦党一族との関わりが指摘されている。

中世後期になると、荘園の実態は変容し、山内の小盆地単位で在地勢力が台頭してきたと考えられる。畑瀬地区でも「畑瀬氏」の存在が認められるが、史料的にも考古学的にもその実態は不明な点が多い。畑瀬地区の発掘調査からみると、中世後期の遺物については東畑瀬遺跡6・7区を中心に散見されるので、畑瀬氏の館や詰城などは東畑瀬側

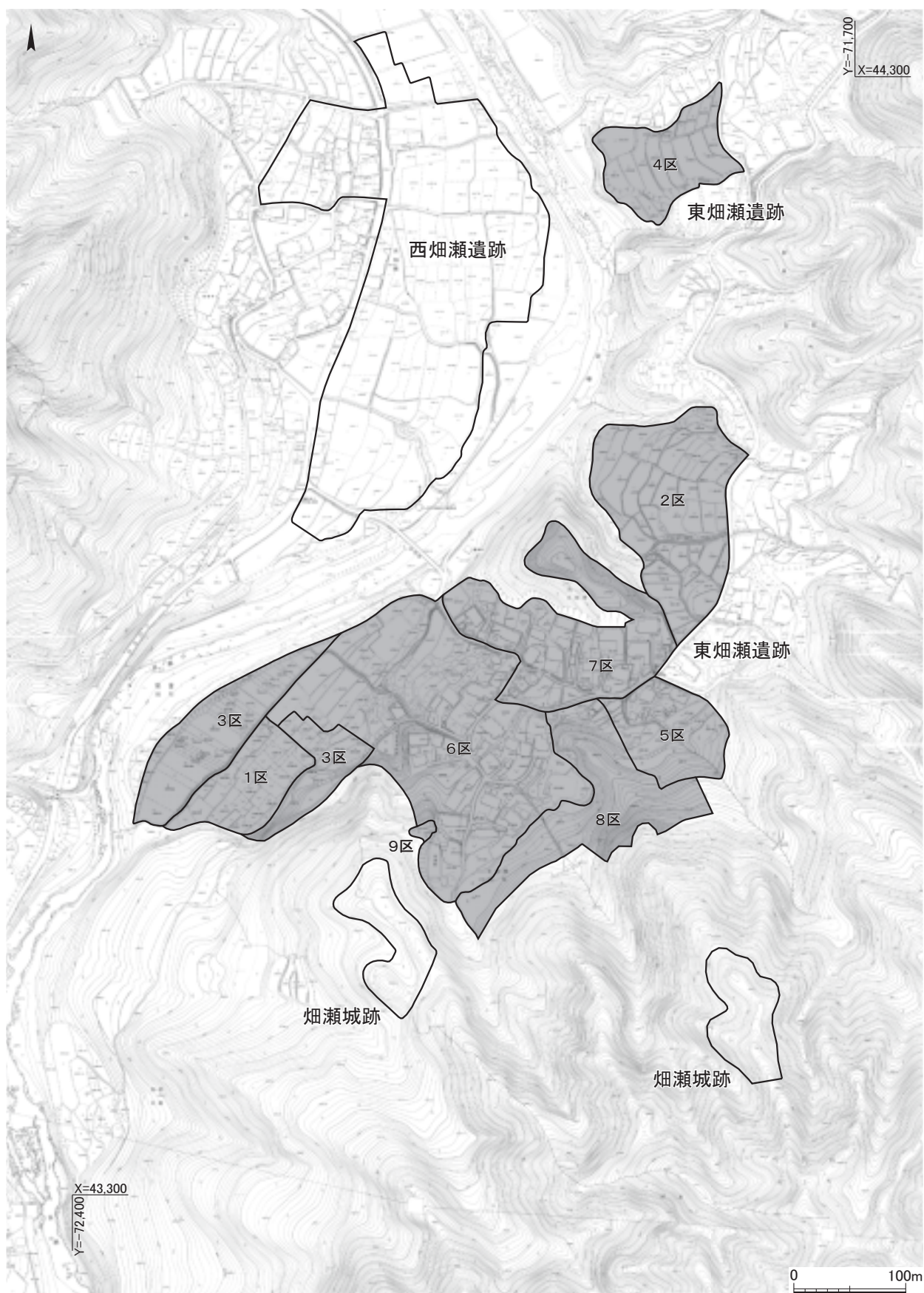


図3-1 東畑瀬遺跡周辺の地形 (1/5,000)



図3-2 東畑瀬遺跡 6G・7・9区の位置 (1/2,000)

にあったことが推測される。

戦国時代になると、神代勝利が山内の総大将となり、佐賀の龍造寺隆信と覇を競い合うが、永禄7（1564）年に勝利は隠居所として畑瀬に城を築いたとされる。その畑瀬城の居館跡とみられる部分が東畑瀬遺跡 6F 区で確認されている。居館跡は北西に向って開く谷部に立地しており、谷を横断するように構築された土塁や堀によって館内部を防御している。館部分では、主殿・門と思われる掘立柱建物や、館内部を区画する堀と推定される布掘り状の遺構などが検出されており、館の構造の概略が判明する。6F 区北側の尾根上（8A 区）には、小規模な山城跡が確認されており、畑瀬城跡 3 区の山城跡、6F 区背後の山頂部の山城跡と合わせて、勝利の畑瀬城の実態が明らかになりつつある。

神代勝利は永禄8（1565）年に畑瀬城で亡くなったとされるが、その菩提寺が宗源院である。宗源院は勝利の生前に開基されたと伝えられており、ダム建設に伴い移築されるまで東畑瀬地区の南部に存続していた。移築後の発掘調査（6G 区）によって、整地により整備された寺院跡の遺構面が 4 面重複して確認された（第 5 章）。このうち、初めて本格的に整備されたとみられる第 4 面は 16 世紀末～17 世紀初頭の時期で、伝承とは異なる調査結果となっている。また、確認された宗源院の整備・改修は、50 年ごとに行われた勝利の年忌に関係する可能性がある。

宗源院には神代勝利の墓、小城鍋島家に仕えた神代家一族や宗源院歴代住職の墓がある墓地（9 区）が付随しており、墓地の移築後に発掘調査が行われた（第 6 章）。調査の結果、近世・近代墓 37 基、埋納遺構 2 基などを確認し、上部の外表施設と明確に対応する墓もある。ただ、神代勝利の墓の下層からは下部遺構は検出されず、宝篋印塔も 17 世紀代の作とみられることから、戦国時代からこの場所に勝利に関する施設があったとは考えにくい。また、出土した人骨については人類学的な分析が行われ、類例が少ない近世人骨の特徴が判明する貴重な例となった（第 7 章）。なお、東畑瀬遺跡内で工事中に発見された宝篋印塔について報告している。

このほか東畑瀬遺跡では、近世の集落跡（5～7 区）や八龍社の跡と伝えられる神社跡（3 区）が調査されている。集落跡の調査では、屋敷地の詳細が分かる例はなかったが、7 区では近世の掘立柱建物が確認され（第 4 章）、出土遺物の傾向などからある程度近世における開発の状況が判明しつつある。江戸時代を通じて遺物が出土している 7 区、18 世紀代を中心とする遺物が出土する 5 区、18 世紀後半から本格的な開発が始まると考えられる 6 区と、それぞれの地区で出土遺物に特徴がある。恐らく、主要な街道沿いの 7 区では、中世から現代にいたるまで集落が存続しているのに対して、やや街道から外れた地区では開発が遅れるといった様相を示しているものと推測される。また、3 区では神社と推定される掘立柱建物が確認されており、出土遺物の特徴から中世から神仏に関わる場として使われたものと考えられている。

以上のように、東畑瀬遺跡の発掘調査によって、この地区の歴史の一端を知ることができるようになった。今後の研究によって、さらに東畑瀬地区の縄文時代以降の様相が詳細になっていくものと思われる。

第 3 章 参考・引用文献

- 嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（2000）『嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書』 富士町教育委員会
- 佐賀県教育委員会（2007）『東畑瀬遺跡 1・大野遺跡 1』 佐賀県文化財調査報告書第 170 集
- 佐賀県教育委員会（2008）『西畑瀬遺跡 1』 佐賀県文化財調査報告書第 176 集
- 佐賀県教育委員会（2009）『西畑瀬遺跡 2・大串遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第 180 集
- 佐賀県教育委員会（2010）『東畑瀬遺跡 2・畑瀬城跡』 佐賀県文化財調査報告書第 185 集
- 佐賀県立図書館（1986）『佐賀県史料集成 古文書編』 第 27 巻
- 全国神代ゆかりの会（1980）『神代家伝記』『神代家とその一族』 1 号
- 富士町教育委員会（2005）『畑瀬城跡』 富士町文化財調査報告書第 4 集
- 富士町誌編さん委員会（1968）『富士町誌』 富士町教育委員会
- 富士町史編さん委員会（2000）『富士町史』 上巻・下巻 富士町

第4章 東畑瀬遺跡7区

1 東畑瀬遺跡7区の概要

東畑瀬遺跡7区は、佐賀市富士町大字関屋字鶴・辻に所在する。ここで報告する7区は、屋敷地や田畑として利用されていた斜面地（標高240～270 m）と、その北側の尾根筋（標高275～280 m）に大別される（図3-2）。斜面地においては、工事工程との都合や、土地の形態に合わせるなどし、調査区を7A区～7L区の13区に細分した。また、北側の尾根筋については、すべてを7M区として調査を行った。

7A区、7B区、7C区については、調査区のほぼ全域について表土を除去したが、7D区～7H区については攪乱が激しかったため、7E区にトレンチを設定し得たにとどまった。また、7I区および7J区については、調査区東部の攪乱が激しかったため、調査区のそれぞれ西端近くについて調査を実施した。7K区についても、調査区北西部の平坦面は開削されていたため、南東部について調査を実施した。

7A区～7C区においては、近世期のものと考えられる掘立柱建物跡が、7I区～7K区においては、同じく近世期のものと考えられる土坑、小穴等が出土した。7L区では、遺構は確認されなかったが、花崗岩風化土からなる旧地形の様子をとらえることができた。また、7M区は、墓地改葬時の攪乱のため旧地形、遺構面が完全に失われていたが、出土遺物から墓地造営が近世期にまで遡るだろうことが確認された。

ここでは、7A区・7B区・7C区・7I区～7M区について概要を報告する。なお、7A区～7H区については平成16年度、7I区～7M区については平成20・21年度に調査を行った。

2 7区の遺構と遺物

1) 7A区の遺構と遺物

7A区では、調査区の中央部で掘立柱建物跡3棟が検出された（図4-1・2）。SB7028は南北棟で、SB7029とSB7030は東西棟である。SB7029とSB7030は、西側が削平されており、全容は不明である。

SB7028（図4-3）

調査区の北西部に位置している。梁行2間（4.80 m）×桁行3間（5.72 m）で、主軸はN 35°W、柱間は、梁行2.40 m、桁行1.91 m、床面積は27.46㎡である。他の2棟に比べると小規模である。

SB7029（図4-4）

調査区の中央やや西寄りに、SB7030と重複して位置する。主軸はN 45°E、梁行は3間（5.66 m）で、柱間は1.89 mである。西側が削平されているが、桁行は3間（6.20 m）まで確認できる。

SB7029 出土遺物（図4-28）

2は肥前産の陶器皿で、灰釉を施しており、胴下部から底部は露胎である。内面見込みは蛇の目釉剥ぎしている。3は肥前産の染付磁器皿である。4は染付磁器皿で、内面の菊花文様はコンニャク印判によるものである。

SB7030（図4-5）

調査区の中央やや西寄りに、SB7029と重複して位置する。主軸はN 64°E、梁行は2間（5.40 m）で、柱間は2.70 mである。西側が削平されているが、桁行は4間（8.60 m）まで確認できる。



図4-1 7A区遺構配置図 (1/250)

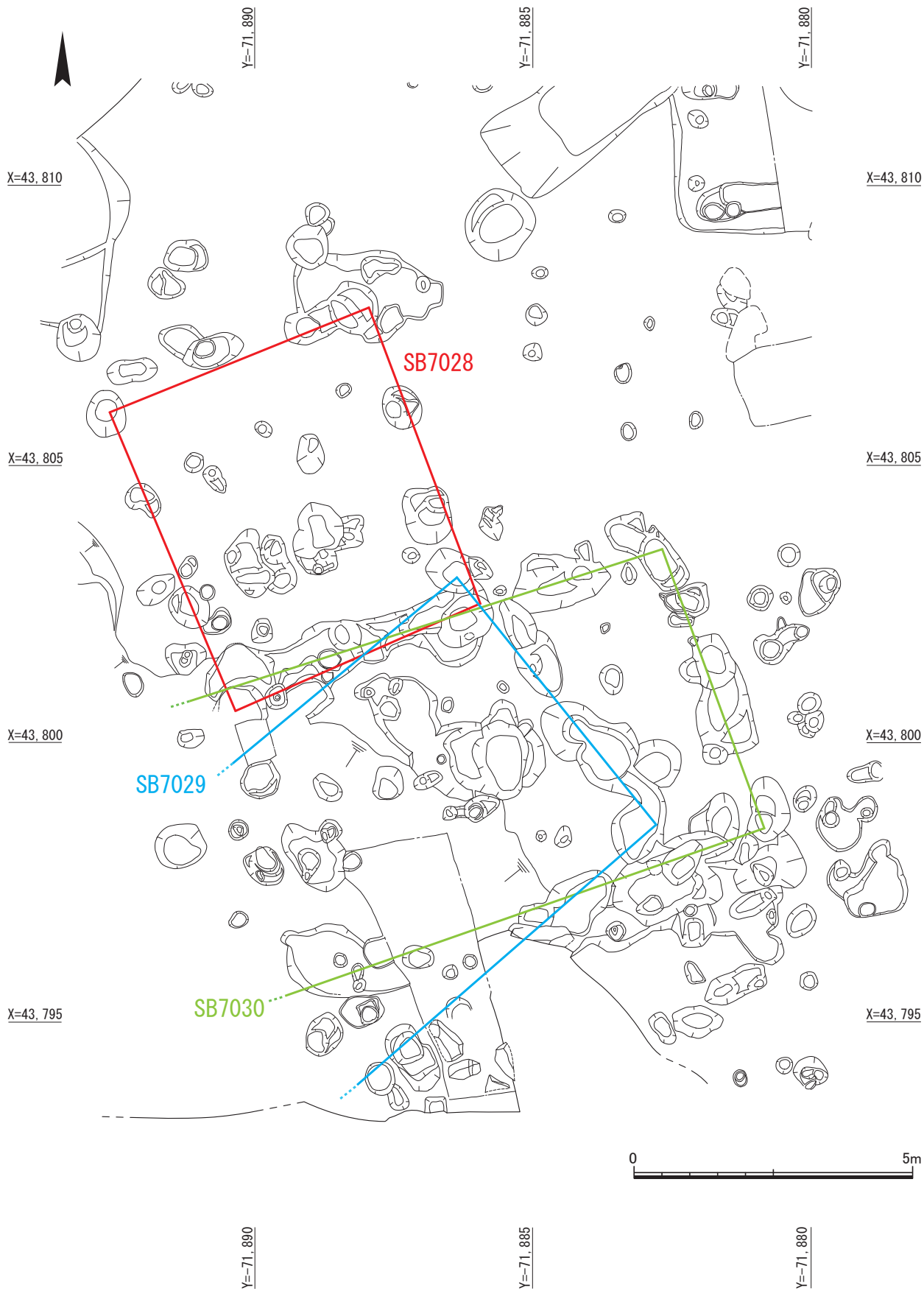


图 4-2 7A 区掘立柱建物跡配置図 (1/100)

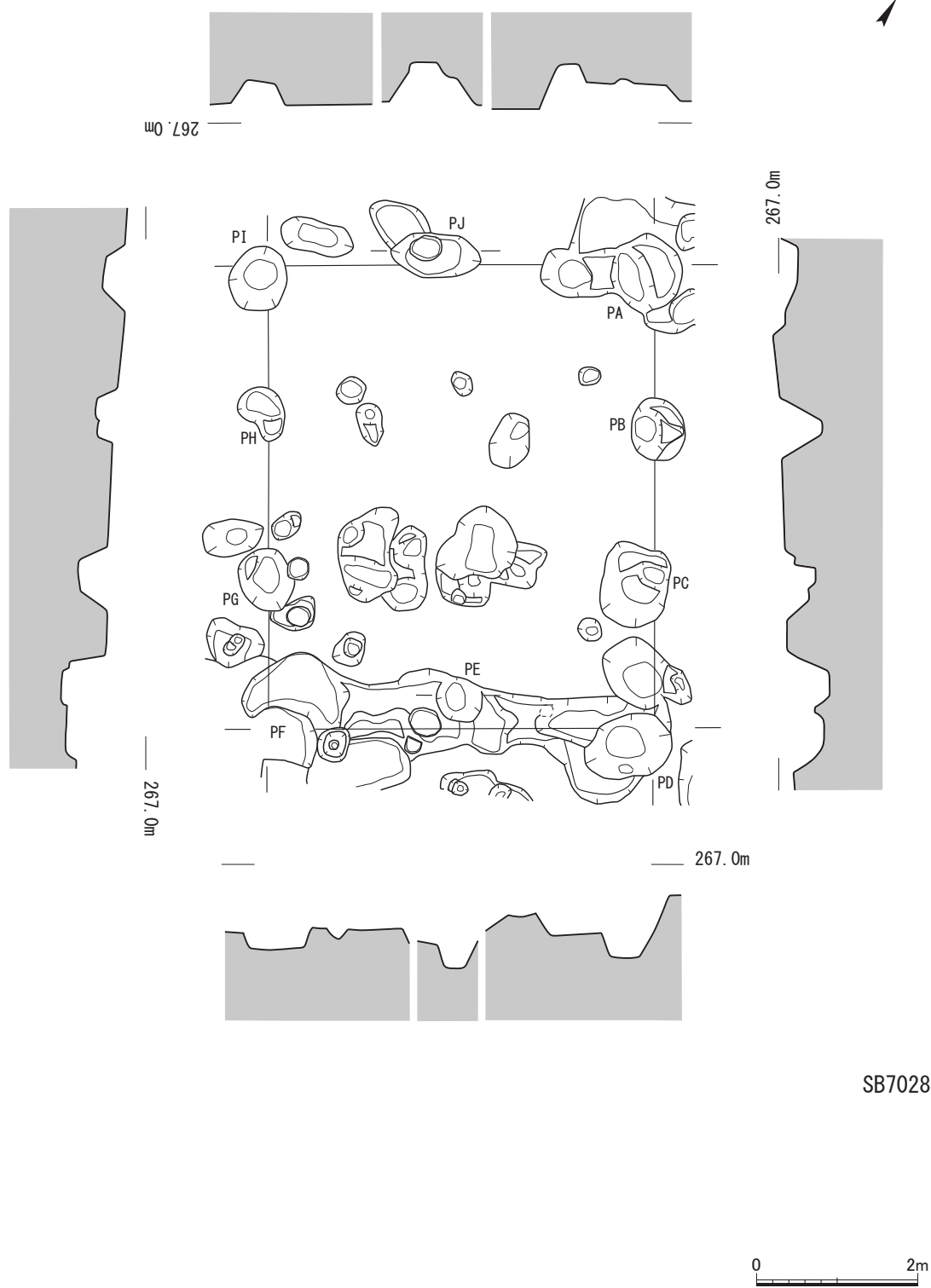
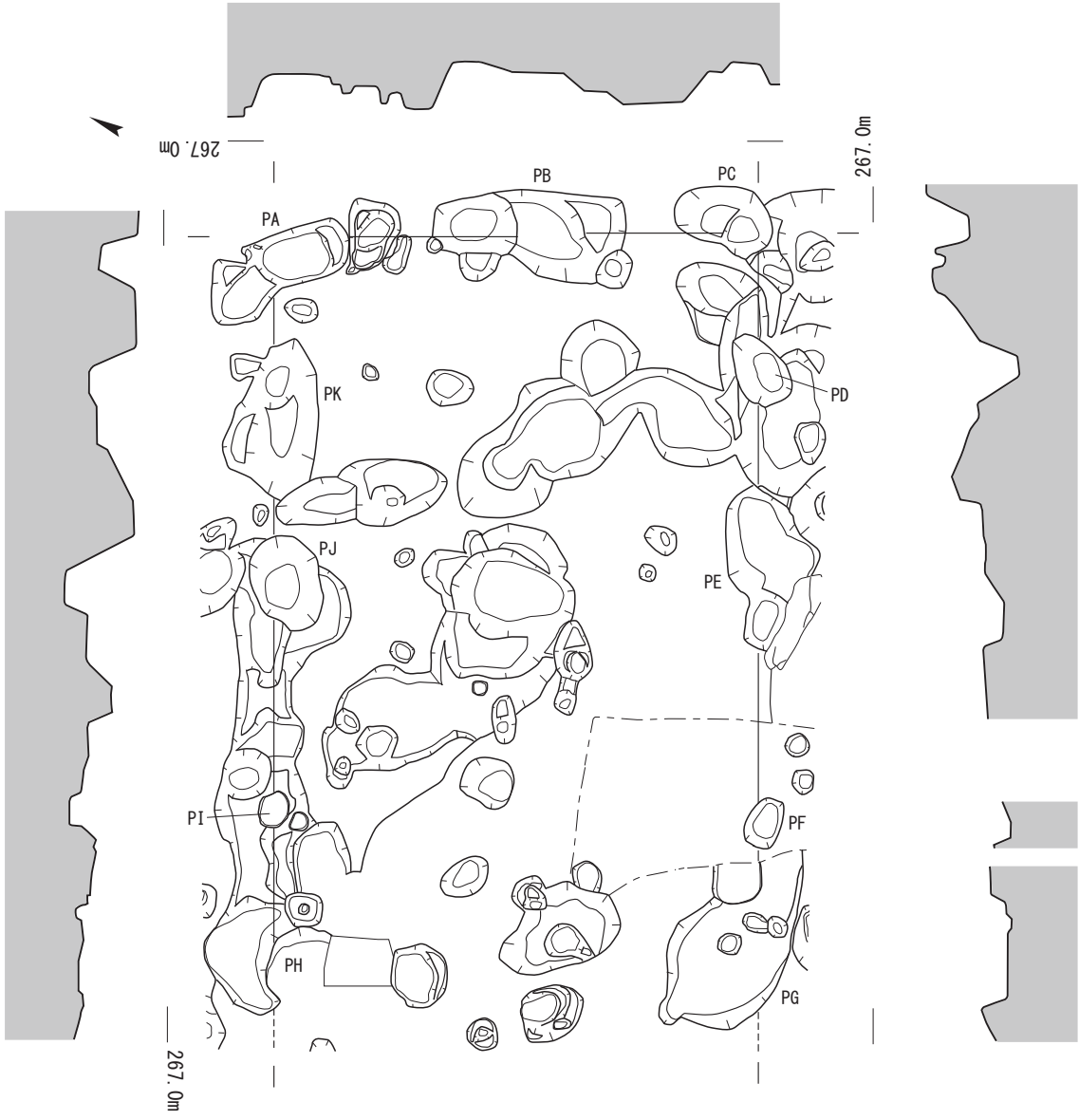


図4-3 7A区 SB7028 (1/80)



图4-4 7A区SB7029 (1/80)



SB7030



図4-5 7A区SB7030 (1/80)

その他の出土遺物（図4－28・29）

1・5～31は調査区内の小穴、32～38は遺物包含層から出土した。

1は肥前産の陶器火入で、外面に銅緑釉を施していたようである。5は福岡系と考えられる陶器鉢で、全体に灰釉を施し、口縁部には藁灰釉を流し掛けている。6は肥前産の白磁紅皿で、型押成形している。7は肥前産と考えられる白磁碗で、内面を見込み釉剥ぎしている。8は肥前産の染付磁器丸形碗である。9は底部糸切の土師器小皿である。10は肥前産の陶器灯火具で、内面に鉄釉を施し、受け部口縁には白土を掛けている。11は肥前産の陶器瓶で、鉄釉を施しており、武雄黒牟田周辺で生産された可能性がある。

12は土師器小皿で、底部糸切である。13・14はともに肥前産の陶器皿である。15～21は、底部糸切の土師器小皿で、17・18の口縁部には油煤が付着する。22・23は染付磁器丸形碗で、22は肥前産、23は波佐見系で内面見込みを蛇の目釉剥ぎする。24は肥前産の染付磁器皿で、内面に墨弾きで菱形渦文を描いている。

25は瓦質土器の茶釜で、外面に煤が付着している。26は底部糸切の土師器杯で、底部に板状圧痕が残る。27は土師器鍋で、外面に煤が付着している。28・29は肥前産の陶器播鉢で、28は平底、29には高台が付き、全面に施釉するタイプである。30は肥前産と考えられる陶器皿で、銅緑釉を施している。31は肥前有田産の白磁瓢箪形皿で、糸切り細工成形である。

32は瀬戸・美濃産の陶器皿で、鉄釉を施している。33～35は肥前産の陶器皿で、いずれも灰釉を施し、33の口縁部には鉄釉を塗り、34の内面に胎土目痕が残る、35の内面には4箇所砂目痕が残る。36は在地系の土師器三足付香炉で、口縁部には煤が付着する。37は波佐見系の染付磁器皿で、内面見込みには五弁花文のコンニャク印判を施している。38は肥前産の陶器甕で、外面に灰釉を施す。

2) 7B区の遺構と遺物

7B区では、近現代の造成土（約0.50m）の下から厚さ0.10mほどの江戸期のものと考えられる遺物包含層がみられた。また、遺構としては、調査区の中央で、柵列1条、掘立柱建物跡6棟が検出された（図4－6・7）。掘立柱建物のうち5棟は、同じ箇所軸を揃えて建て替えられており、同じ機能をもった建物であった可能性がある。

SA7031（図4－11）

調査区の東端近くに位置する柵列で、主軸はN 84°Wである。主軸方位は、掘立柱建物群とほぼ同じで、関連する施設であったことがうかがえる。調査では4間分が確認されたが、東側は調査区外であることから、本来はさらに長い柵列だった可能性もある。

SB7032（図4－8）

調査区のほぼ中央に位置している。梁行2間(3.60m)×桁行4間(8.00m)で、主軸はN 83°Wである。柱間は、梁行2.00m、桁行1.80mで、床面積は28.80㎡である。

SB7032 出土遺物（図4－29）

40は底部糸切の土師器小皿である。44は景德鎮窯系の青花碗で、高台置付を釉剥ぎしている。

SB7033（図4－8）

調査区のほぼ中央に位置している。梁行3間(5.38m)×桁行4間(7.62m)で、主軸はN 85°WでSB7034とほぼ同じである。柱間は、梁行1.79m、桁行1.91mで、床面積は50.00㎡である。

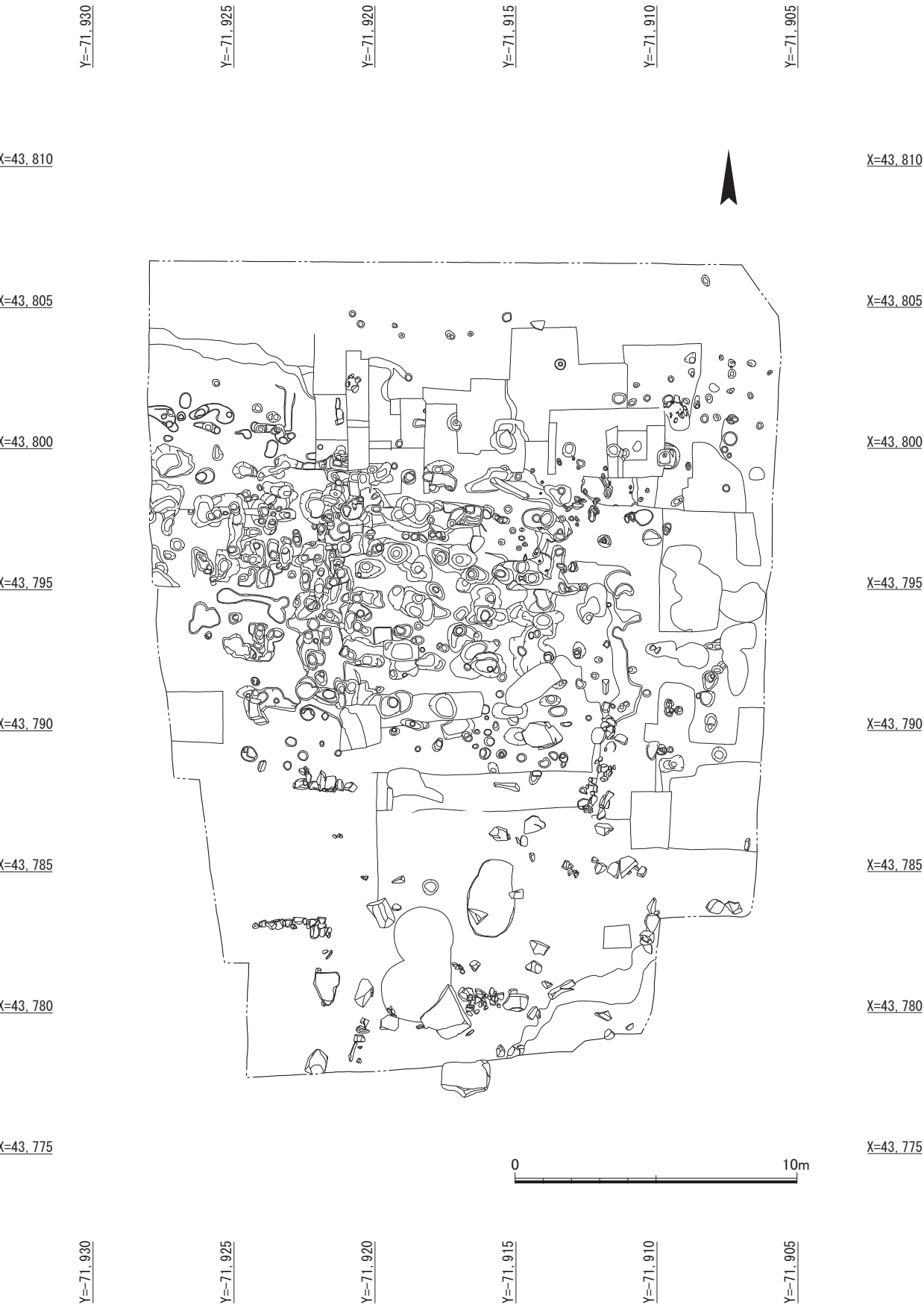


図 4 - 6 7B 区遺構配置図 (1 / 200)

SB7034 (図4-9)

調査区のほぼ中央に位置している。梁行2間(4.24 m)×桁行4間(7.74 m)で、主軸はN 86°W、床面積は32.82㎡である。主軸方位は、SB7033 とほぼ同じである。柱間は、西側の2間はおおむね1.50 m前後であるが、東側の2間は2.00 m強と差がある。

SB7034 出土遺物 (図4-29)

39・41 は、ともに底部糸切の土師器小皿である。42 は森田E群の白磁皿である。43 は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。45 は肥前産の陶器皿で、灰釉を施している。

SB7035 (図4-10)

調査区中央やや西寄りに位置している。SB7032、SB7033、SB7034 の3棟と重複しているものの、やや北西にずれた位置にある。梁行2間(3.14 m)×桁行4間(7.04 m)で、主軸方位はN 84°Wである。柱間は梁行1.57 m、桁行1.76 m、床面積は22.11㎡である。

SB7035 出土遺物 (図4-29)

47 は土師器焙烙で、内外面に煤が付着する。

SB7036 (図4-10)

調査区中央やや西寄りに位置している。SB7032、SB7033、SB7034 の3棟と重複しているものの、SB7035 とともにやや北西にずれた位置にある。梁行2間(2.70 m)×桁行3間(5.88 m)の建物で、主軸はN 83°WとSB7035 とほぼ同じである。柱間は、梁行1.35 m、桁行1.96 m、床面積は15.88㎡である。

SB7036 出土遺物 (図4-29)

46 は瓦質土器茶釜で、外面に印刻文を施している。

SB7037 (図4-11)

調査区の西端に位置している。検出された建物跡の中で、唯一の南北棟である。また、唯一、重複せずに位置する建物でもある。梁行2間(3.52 m)×桁行3間(5.52 m)で、主軸はN 84°Wである。柱間のうち南北両端の2間が2.00 m前後で、真中の1間が1.50 m前後と差がある。

その他の出土遺物 (図4-29～32)

48～54 は調査区内の小穴から出土した。48 は底部糸切の土師器小皿である。49・58・59 は、肥前内野山の陶器皿で、すべて内面見込みを蛇の目釉剥ぎしており、49 は内面に銅緑釉を流し掛けている。50 は瓦質土器の火鉢で、外面に印刻文を施している。51・52 は薩摩産の陶器土瓶で、外面に煤が付着する。出土状況から胞衣埋納の可能性はある。53 は瓦質土器の茶釜で、肩部に印刻文を施している。54 は肥前有田産の染付磁器皿で、高台内に目痕が残る。

55～82・85～88・90・92 は調査区内から出土した。55 は肥前産の白磁紅皿で、型押成形である。56 は竜泉窯系の青磁皿である。57 は波佐見系の染付磁器皿で、内面を蛇の目釉剥ぎしており、重ね積みの跡が残る。60 は肥前産の陶器天目形碗である。61・62 は肥前有田の染付磁器丸形碗である。

63・67 は肥前産の陶器碗で、63 は腰折形碗、67 は藁灰釉の上に銅緑釉を流し掛けている。64 は底部糸切の土師器杯で、底部に板状圧痕が残る。65 は肥前有田の染付磁器皿で、高台内にハリ支えの痕跡が残る。66 は肥前産の陶器皿である。内面の3箇所に方形の釉剥ぎを施しており、肥前川久保皿山窯跡に類例がみられる。

68・75 はともに景德鎮窯系の青花碗で、68 は小野碗C群、75 は高台畳付を釉剥ぎしている。69 は肥前武雄

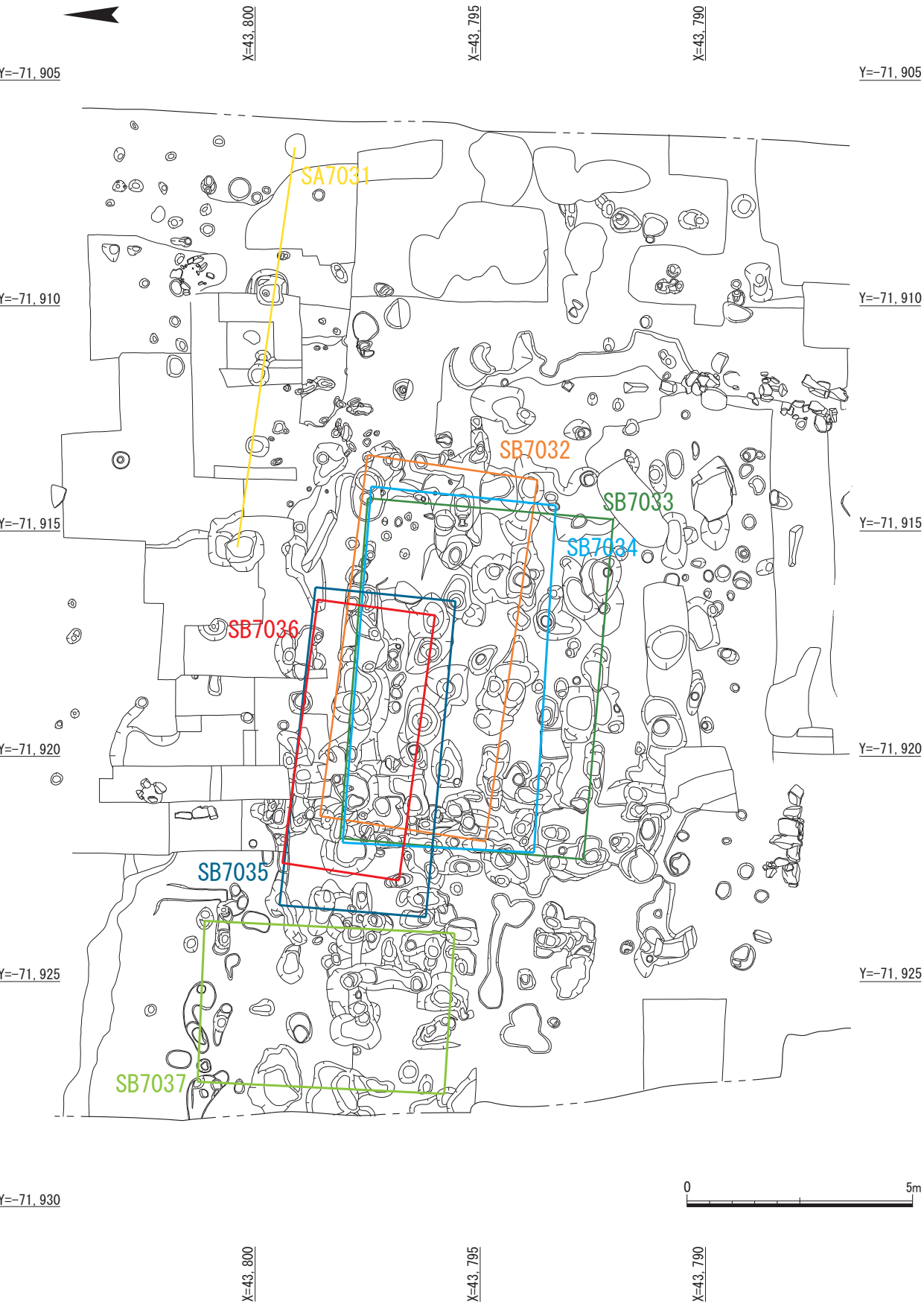


図 4 - 7 7B 区掘立柱建物跡配置図 (1 / 125)

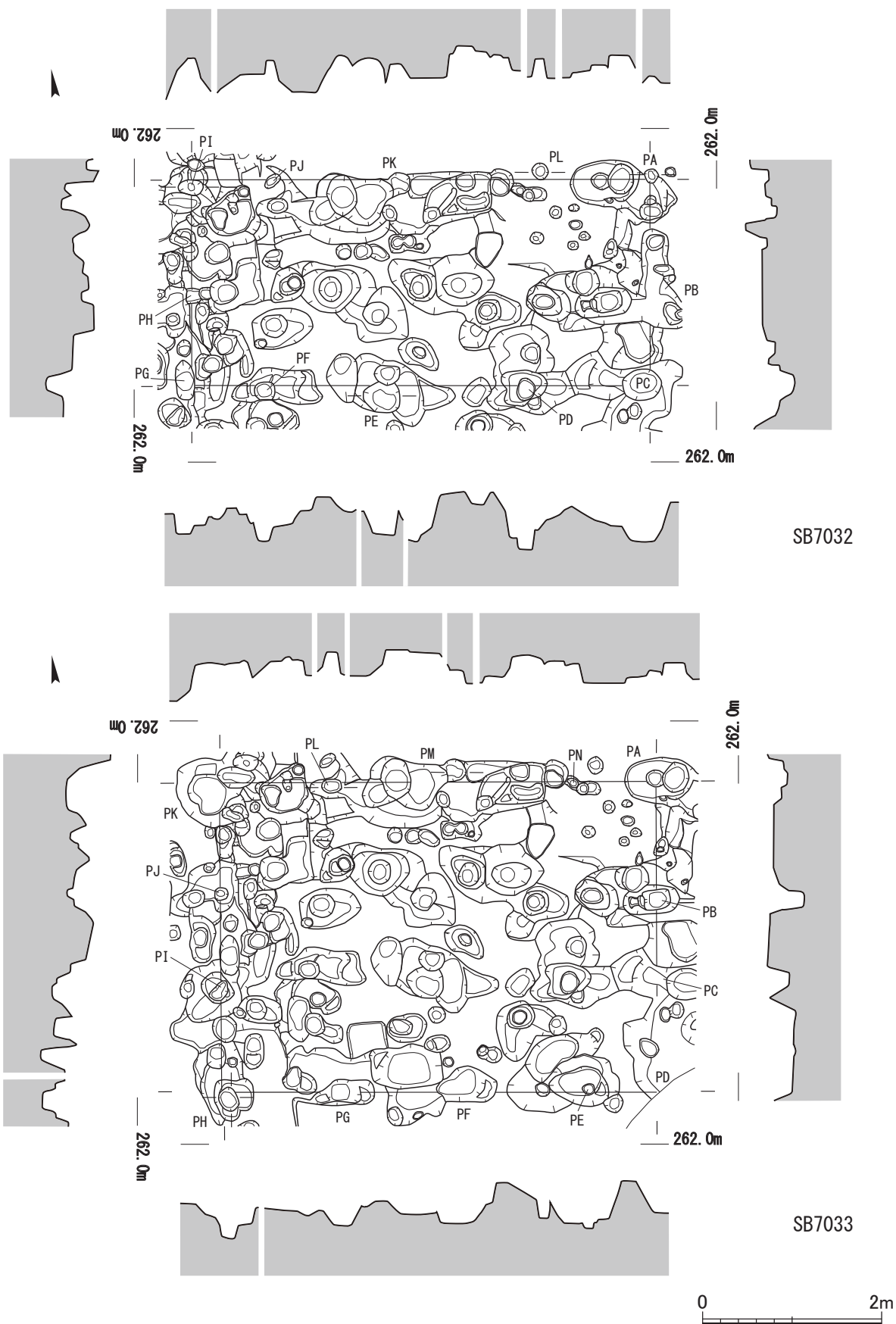


图4-8 7B区SB7032·SB7033 (1/100)

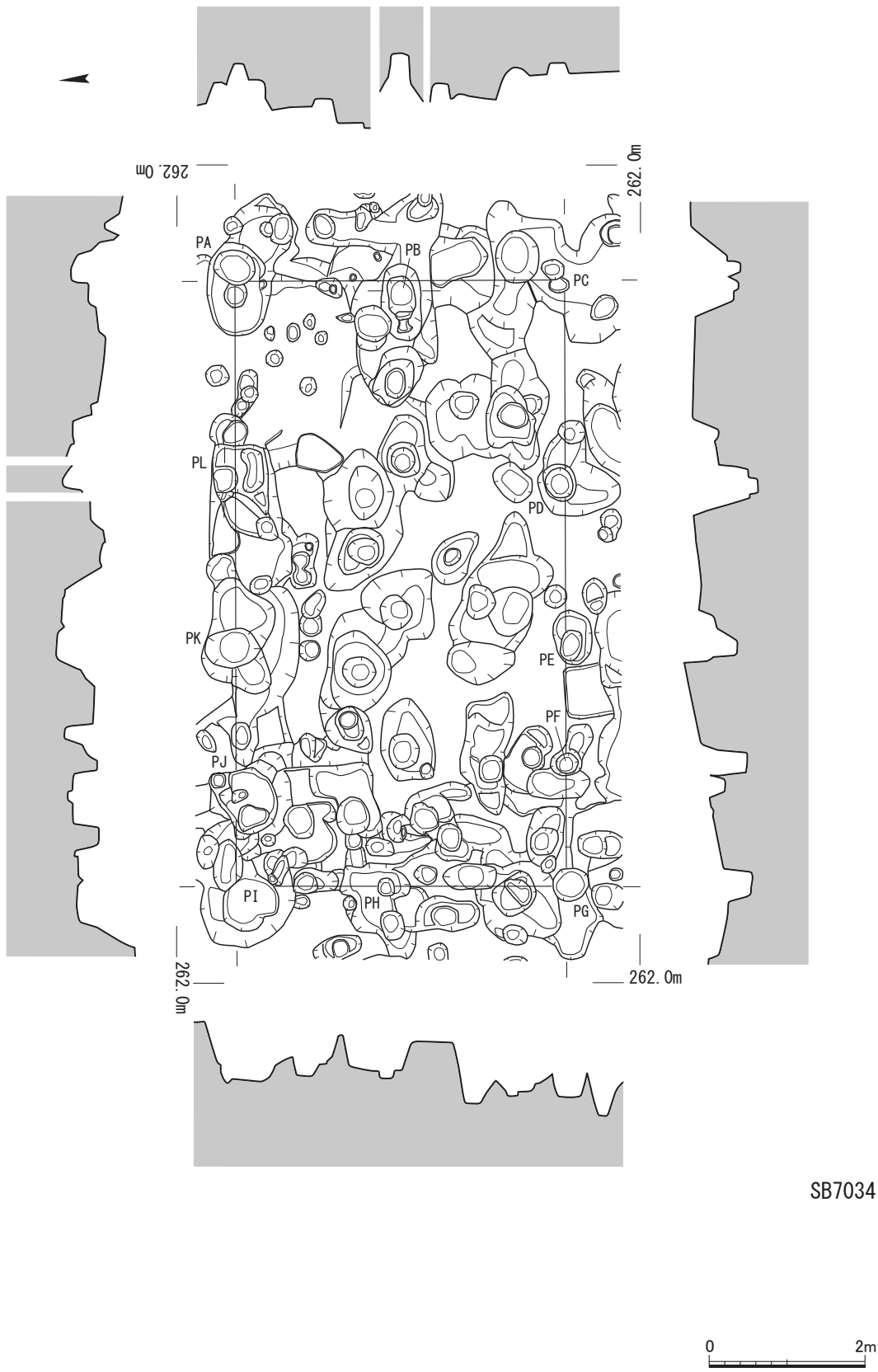


図 4-9 7B 区 SB7034 (1/80)

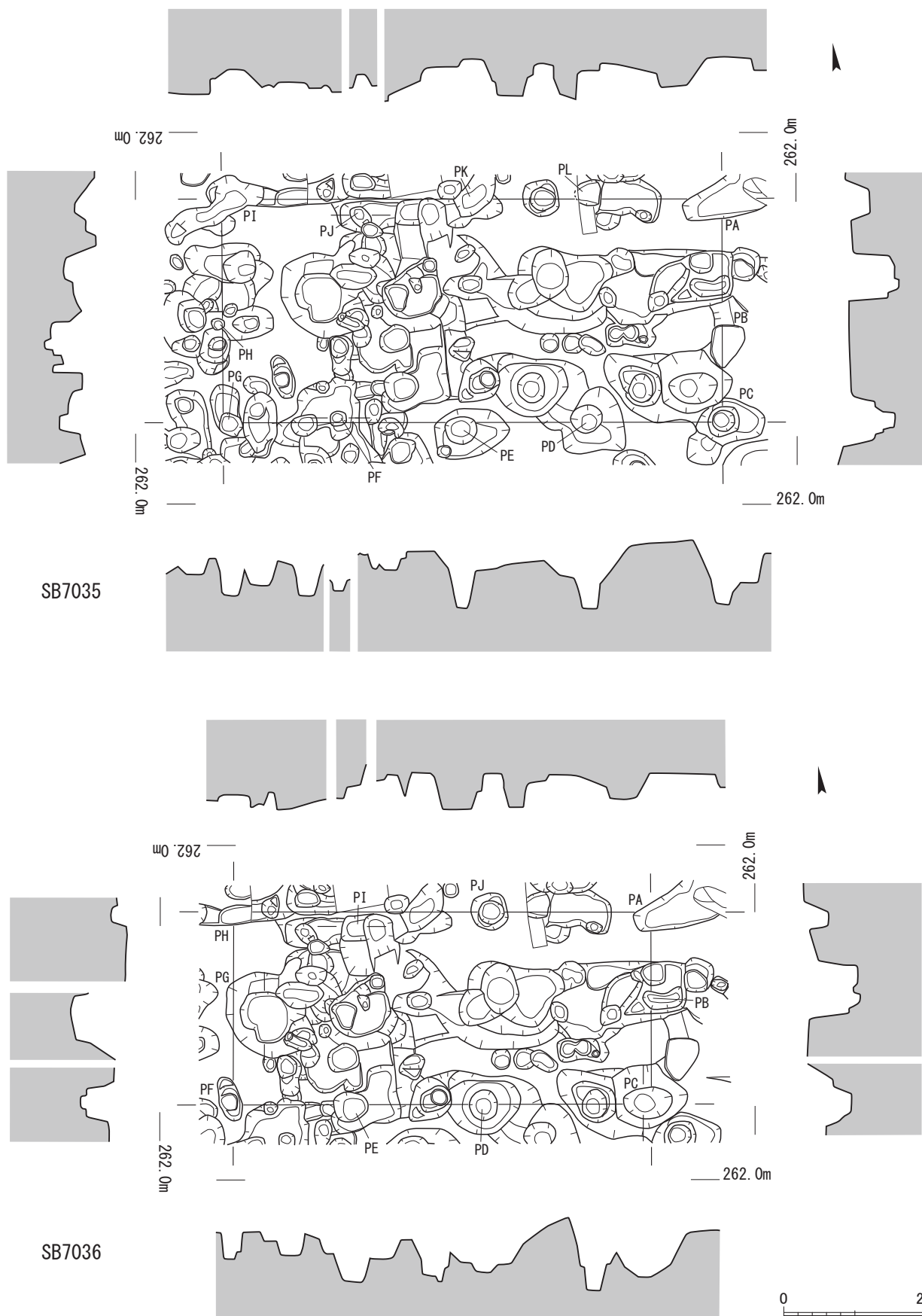


图4-10 7B区 SB7035·SB7036 (1/80)

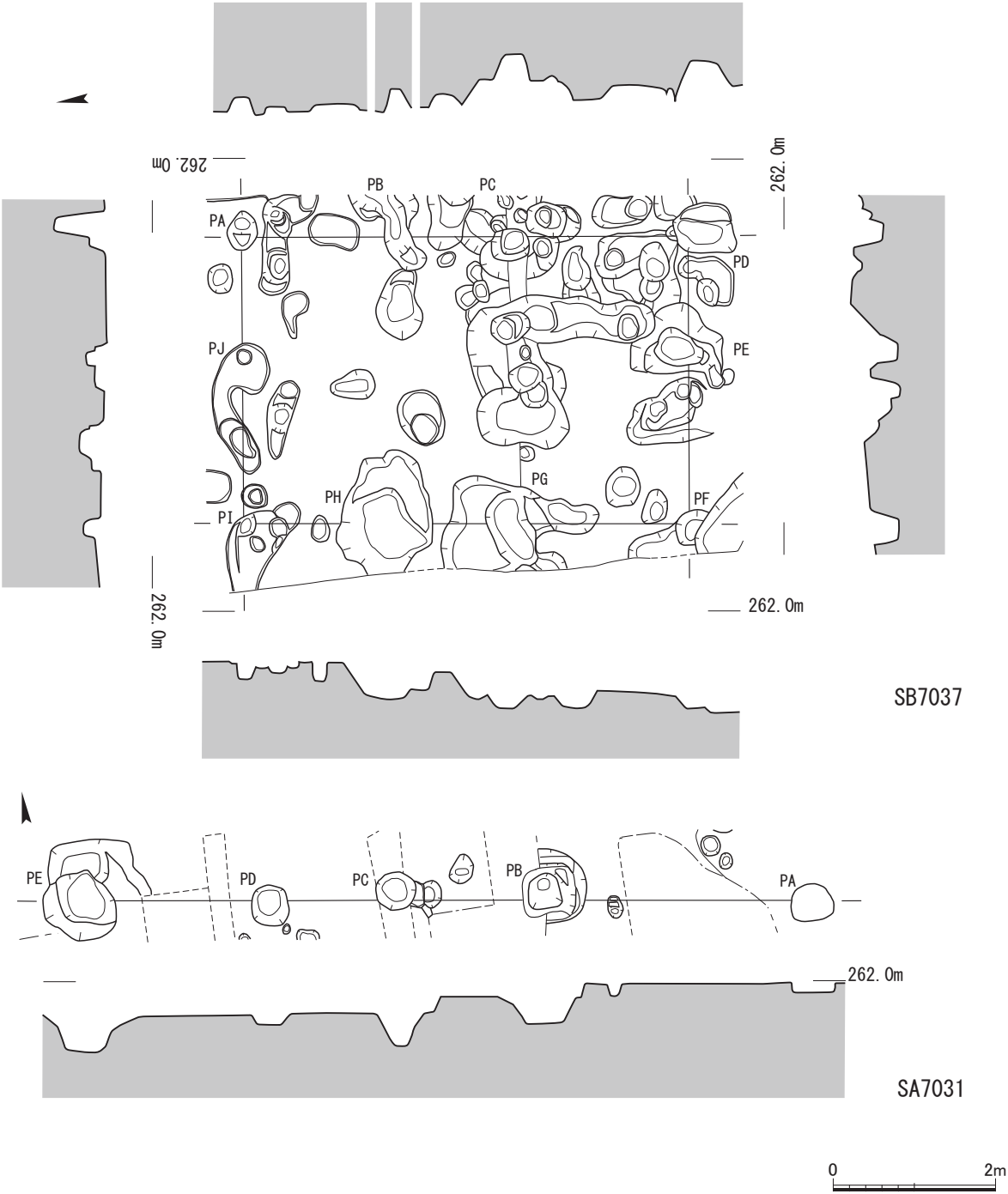


図4－11 7B区SB7037・SA7031（1/80）

周辺で製作されたと考えられる三島手の陶器鉢で、内面は象嵌花文で装飾しており、内面から口縁部までを灰釉、胴部下半から高台外面と高台内には鉄釉を施し、内面見込みには砂目痕が残る。70は肥前産の陶器鉢で、口縁部には褐釉、胴部から底部にかけては鉄釉を掛け分けており、内面に砂目痕が残る。

71は肥前産の染付磁器皿である。72は波佐見系の染付磁器碗で湯呑と考えられる。73は波佐見系の色絵染付磁器丸形碗で、染付碗に赤絵具で上絵付を施している。74は肥前産の陶器火入で、頸部の鉄釉を搔いて櫛描波状文を施す。76・78は肥前内野山の陶器碗で、76は高台畳付に3箇所の胎土目痕が残り、78は内外面に銅緑釉を施している。77は肥前産の陶器天目形碗である。79は瓦質土器播鉢で、外面に煤が付着している。80は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。81は備前産の陶器播鉢である。82は肥前産の陶器播鉢で、口縁部のみに施釉するタイプである。

85は肥前武雄黒牟田産の陶器碗で、鉛釉の上に長石釉でそうめん掛けを施している。胴部下半から底部は露胎である。86は肥前産の京焼風陶器碗である。高台内に印圈と「清□」（□は不明）の刻印を施している。87・88はともに肥前内野山産の陶器皿で、87の内面見込みには砂目痕が残り、88は高台畳付に3箇所の目痕が残る。90は肥前産の染付磁器輪花皿である。92は肥前内野山の陶器皿で、外面の胴部上半には灰釉、内面は銅緑釉を施し、見込みを蛇の目釉剥ぎする。

83・84・89・91は検出面の出土遺物である。83・84・89は竜泉窯系青磁で、83は稜花皿、84は口縁部が外反する碗、89は皿で内面見込みを蛇の目状に釉剥ぎし、底部は露胎である。91は朝鮮半島の雑釉陶器皿と考えられ、内面見込みに目痕が残る。

93～99は表土の出土遺物である。93は肥前内野山の陶器皿で、内面見込みに4箇所の砂目痕が残る。94は景德鎮窯系の青花碗で、小野碗C群である。99は肥前産の染付磁器輪花皿で、内面見込みに足付きハマの目痕が残り、蛇の目凹形高台である。95は肥前産の染付磁器端反形碗である。96は肥前産の陶器皿で、灰釉を施している。97は波佐見系の染付磁器丸形碗である。98は肥前産の染付磁器丸形碗で、内面見込みを蛇の目釉剥ぎしている。

3) 7 C 区の遺構と遺物

7 C 区からは、掘立柱建物跡が3棟検出された（図4－12・13）。3棟の主軸方位は一致しないが、ほぼ同じ箇所に建てられていることから、同じ性格の建物が建替えられたと解される。

SB7038（図4－14）

調査区の中央やや北寄りに位置している。梁行2間（4.04 m）×桁行3間（5.62 m）の建物で、主軸はN 49° E、柱間は、梁行 2.02 m、桁行 1.87 mである。床面積は 22.70㎡である。

SB7039（図4－14）

調査区の中央やや北寄りに位置している。梁行2間（4.72 m）×桁行3間（5.80 m）の建物で、主軸はN 70° Wである。柱間は、梁行 2.36 m、桁行 1.93 m、床面積は 27.38㎡である。

SB7040（図4－15）

調査区の中央やや北寄りに位置している。梁行2間（3.74 m）×桁行3間（5.90 m）の建物で、主軸はN 58° Wである。柱間は、梁行 1.87 m、桁行 1.97 m、床面積は 22.01㎡である。

その他の出土遺物（図4－32・33・34）

100～105は調査区内出土の遺物である。100は肥前産の染付磁器小碗である。101は肥前産の京焼風陶器皿



図4-12 7C区遺構配置図(1/200)

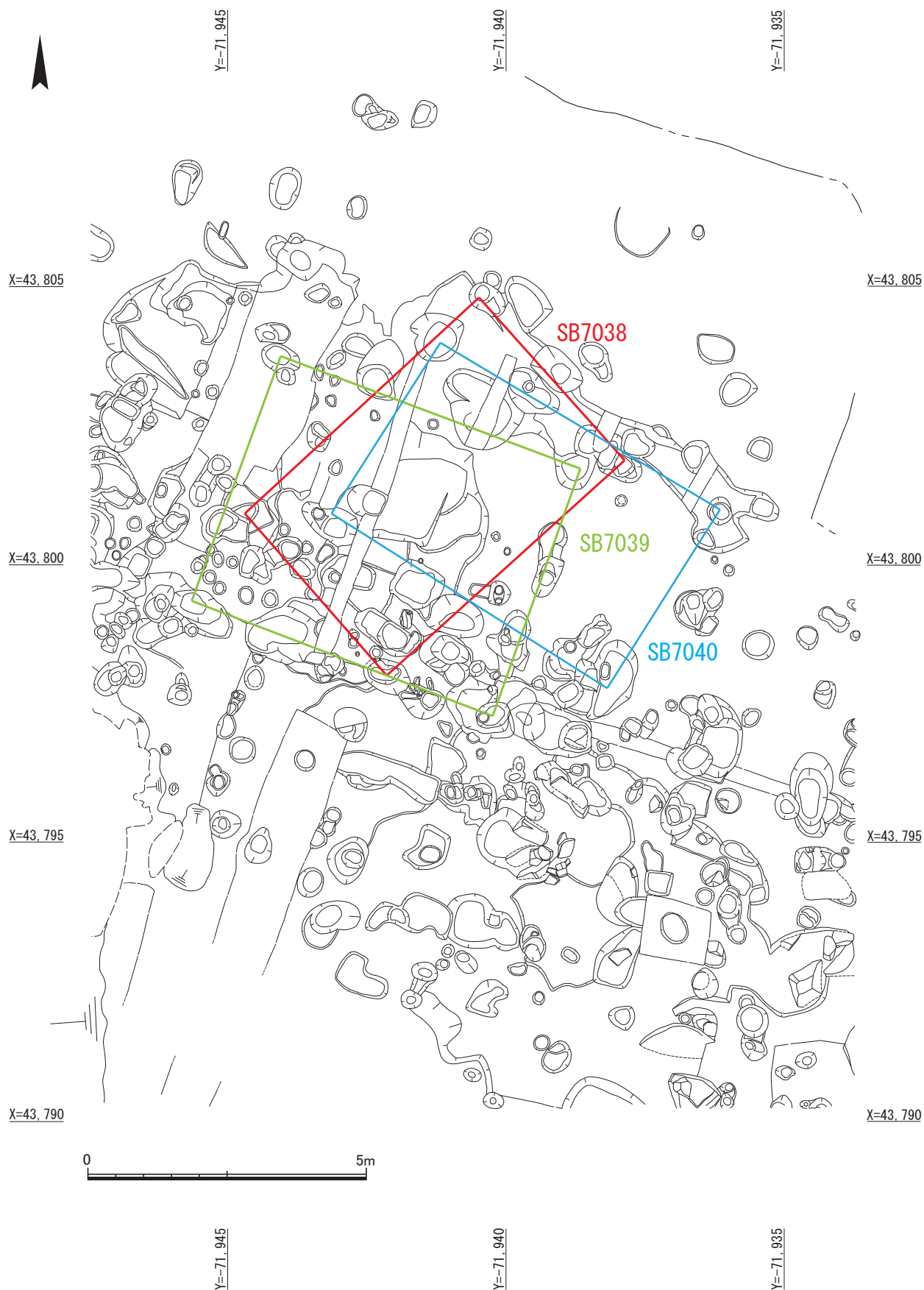
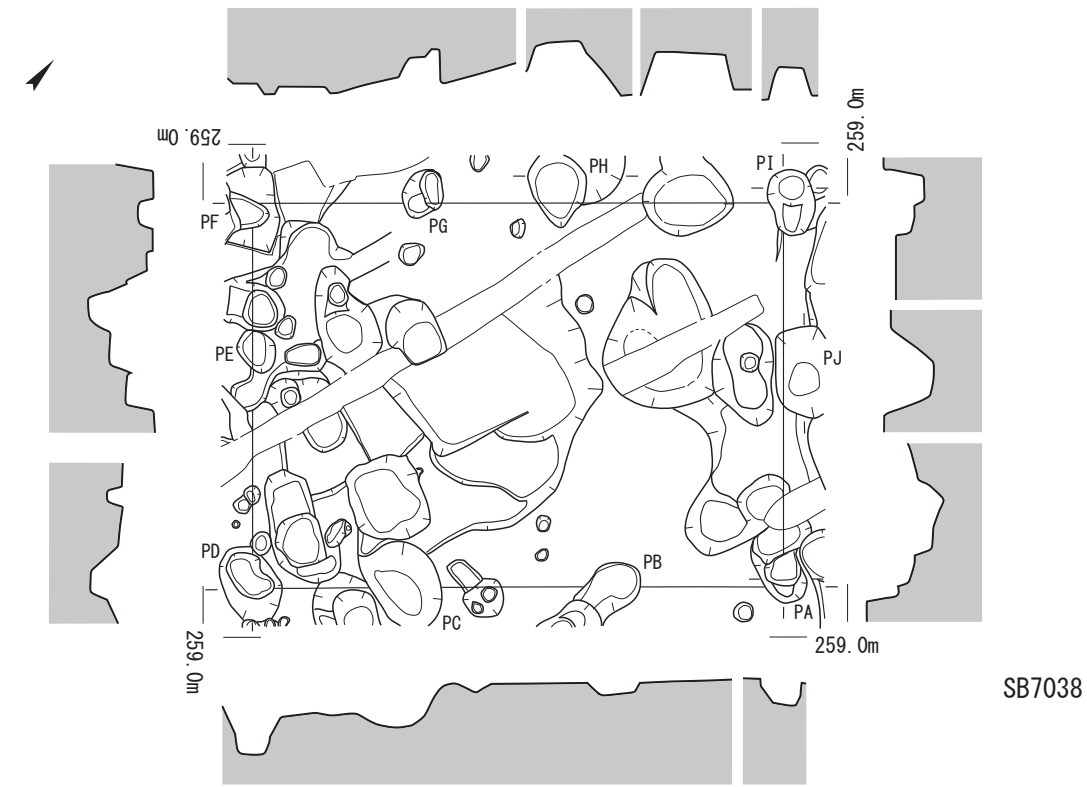
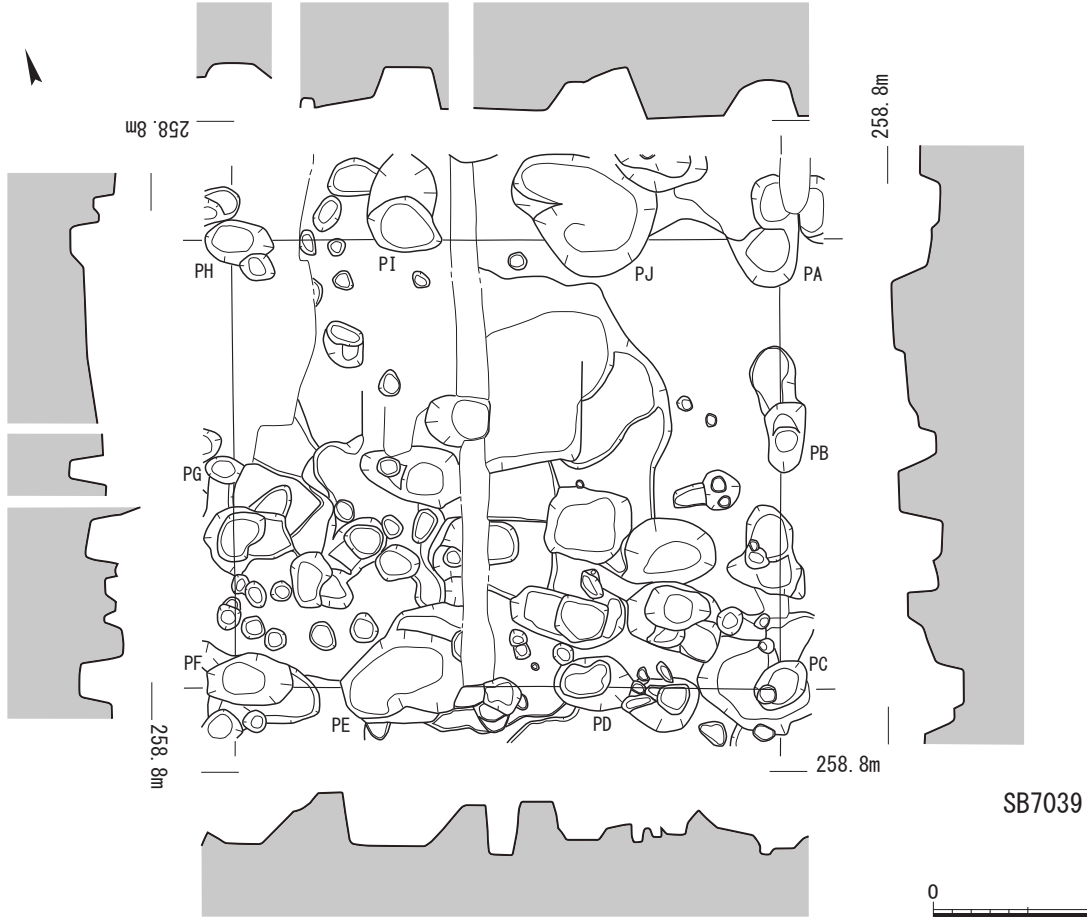


图4-13 7C区掘立柱建物迹配置图(1/100)



SB7038



SB7039



図 4 - 14 7C 区 SB7038・SB7039 (1/80)

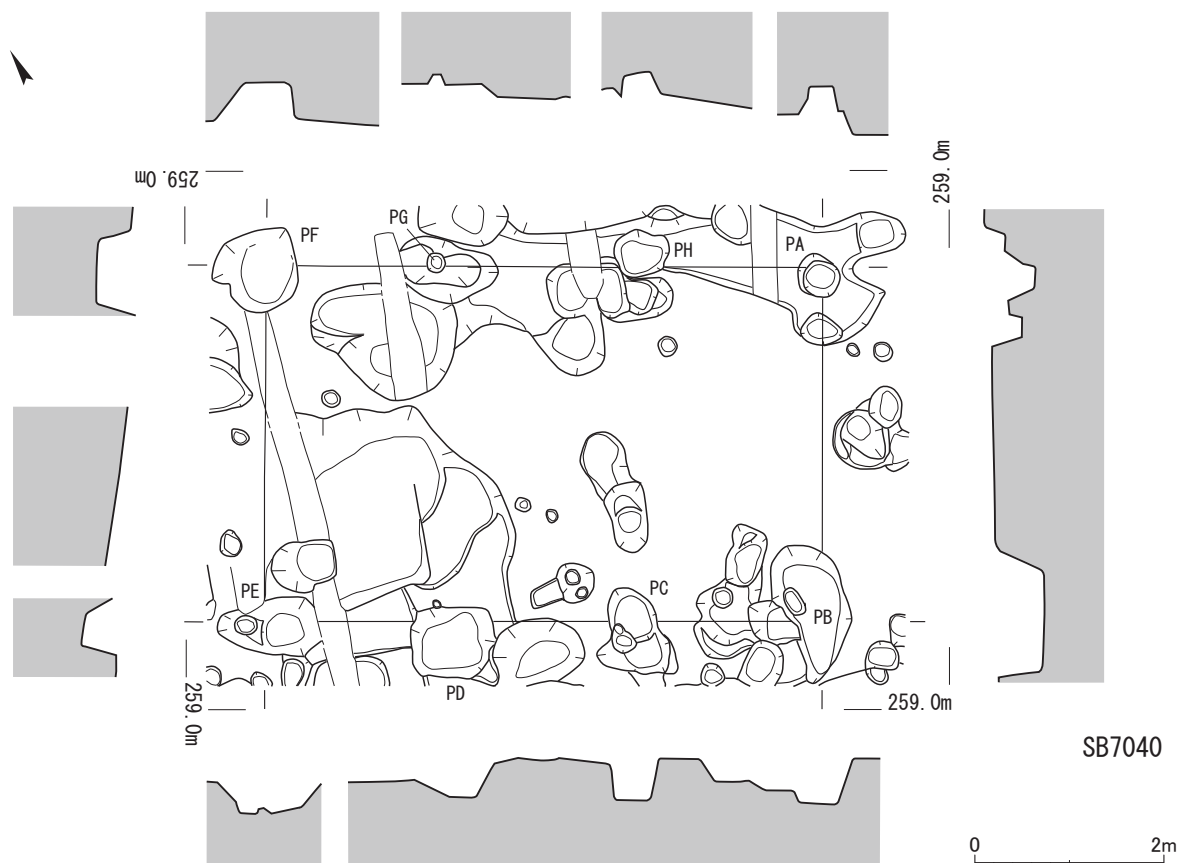


図4-15 7C区SB7040 (1/80)

である。102・104はともに白磁碗で、102は蛇の目凹形高台、104は肥前産である。103は肥前産の染付磁器碗で、内面見込みを蛇の目釉剥ぎする。105は底部糸切の土師器小皿である。

106～111・114～148は検出面の出土遺物である。106・109・110は、中国産の青花で、106は景德鎮窯系の小野皿B1群で、畳付から高台内は露胎、109は福建系の小野皿C群で、胴下半から底部は露胎、110は、福建系の碗で、内面見込みと畳付から高台内は露胎である。107・108・111は白磁皿で、107・111は森田D群、108は森田E群と考えられる。107は胴部下半から高台を釉剥ぎし、108は高台内露胎、111の内面と高台畳付には目痕が残る。114～116は竜泉窯系の青磁碗で、114は畳付から高台内を釉剥ぎし、115は鎬蓮弁文の碗Ⅱb c類である。116は畳付から高台内が露胎である。

117は肥前産の染付磁器瓶である。118～120は肥前産の染付磁器皿で、118は有田、119は嬉野で製作されたと考えられる。118は内面見込みに五弁花文のコンニャク印判を施す。119は上絵付を施しており、高台見込みにハリ支えの痕跡が残る。121は肥前産の青磁火入である。122・123は波佐見系の染付磁器碗で、122は筒丸形碗、123は丸形碗である。124～127は肥前産の染付磁器碗で、124・126・127は丸形碗、125は端反形碗である。

128は関西系の色絵陶器碗である。129・130は肥前産の陶器碗で、129は内外面に刷毛目、口縁部には鉄釉を施し、130は玉子手の碗である。131は肥前産の二彩手陶器火入で、胴部上半に刷毛目を施し、その上に銅緑釉を流し掛けている。132・133は肥前産の陶器皿で、132は鉄釉で文様を描く「絵唐津」で、内面に目痕が残る、133は内面見込みに3箇所の目痕が残る。

134・135は底部糸切の土師器小皿で、ともに口縁部には油煤が付着し、135は底部を穿孔している。136は肥前内野山の陶器小杯である。137～139は底部糸切の土師器杯で、139には板状圧痕が残る。

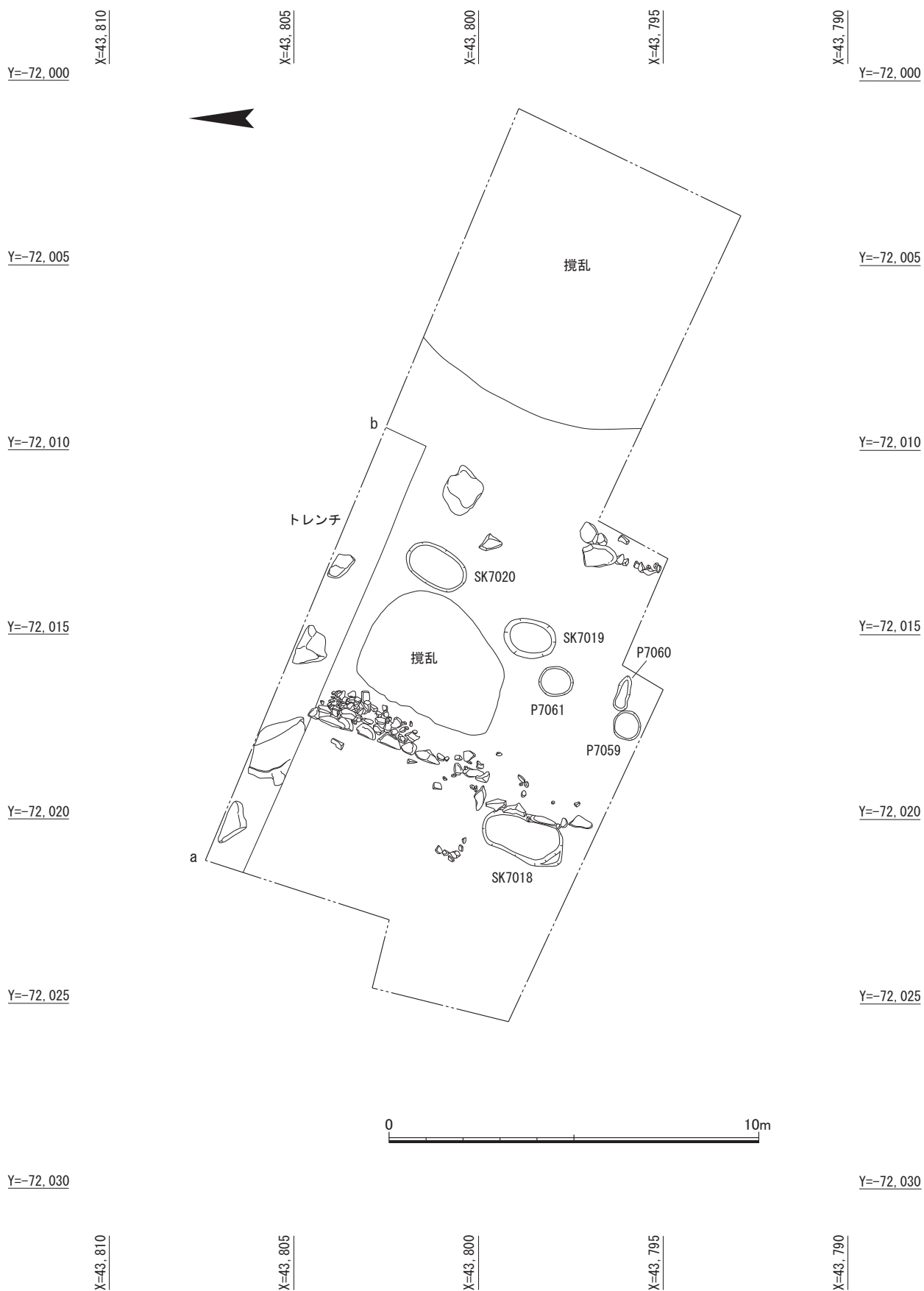


図4-16 7区遺構配置図(1/150)

トレンチ (1/60)



図4-17 7I区トレンチ土層図 (1/60)

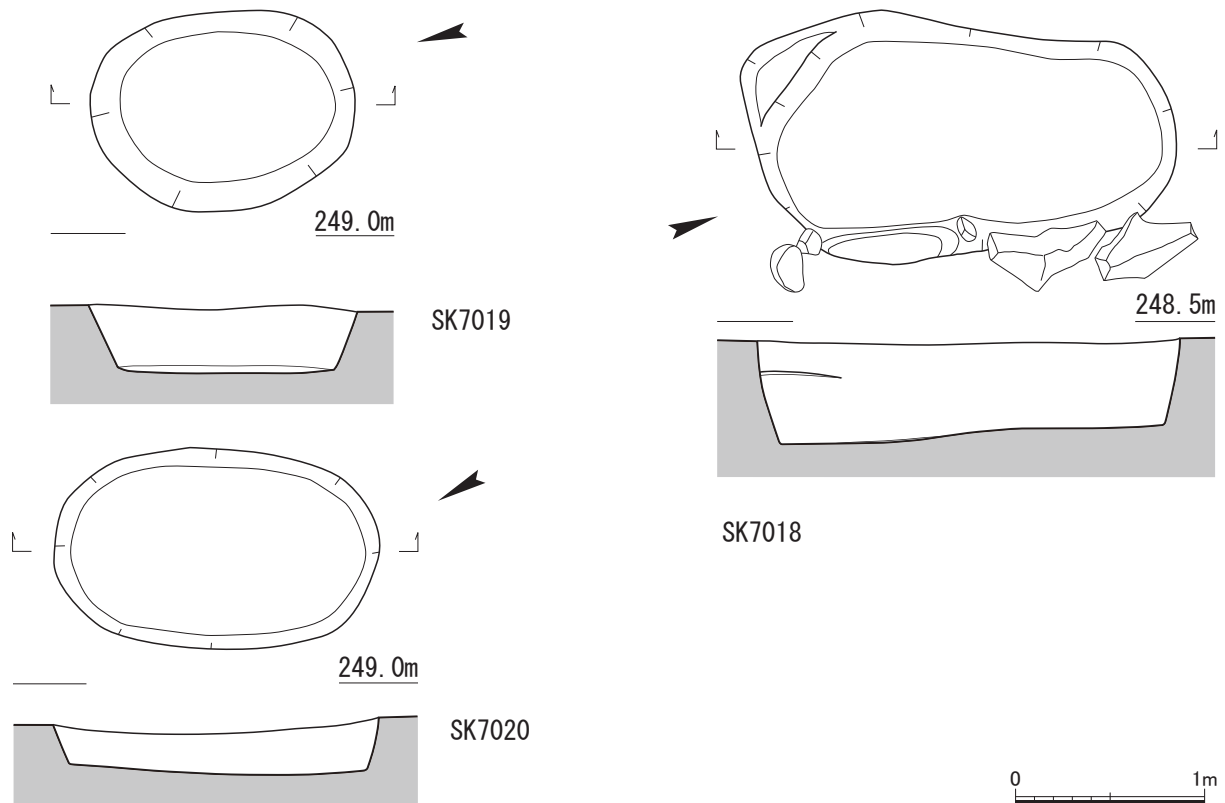


図 4-18 7I 区 SK7018・SK7019・SK7020 (1/40)

140・141・143・144 は瓦質土器鍋で、140・143 の外面には煤が付着している。142 は瓦質土器の茶釜で、外面には煤が付着している。145・147 は肥前産の陶器播鉢で、145 は全面に施釉するタイプ、147 は口縁部のみに施釉するタイプと考えられる。146 は肥前産の二彩手陶器皿で、灰釉の上に白土で刷毛目を施し、鉄釉を流し掛けている。内面見込みに砂目痕が残る。148 は関西系の軟質施釉陶器鍋で、外面に緑釉と白土を流し掛け装飾している。外面底部に「無害」の刻印があり、煤が付着している。

112・113・149～153 は表土出土の遺物である。112 は口縁部が外反する上田 D 類、113 は口縁部外面に雷文帯をもつ上田 C 類、149 は肥前産の陶器碗である。150 は肥前産の陶器灯火具で、口縁部に油煤が付着している。151 は肥前産の染付磁器広東形碗である。152・153 は染付磁器皿で、152 は波佐見系で内面を蛇の目釉剥ぎし、153 は肥前産で内面見込みに五弁花文のコンニャク印判を施している。

4) 7 I 区の遺構と遺物

7 I 区では、地表から約 0.3 m の地点で石列が検出されたため、この面を遺構検出面とした (図 4-16)。この石列は、調査区の西部で南北方向に並べられており、途中でクランク状に折れ曲がる。調査区北端に設定したトレンチの土層断面をみると、石列を挟んだ東西で土質が異なっており (西側=6 層、東側=7 層・8 層)、さらに東側の層が造成土であることから、石列が段の役割を果たしていたものと考えられる (図 4-17)。段が機能していた時期は、出土遺物から、近世期と考えるのが妥当であろう。また、調査区からは、上記の石列の他、若干数の土坑、小穴が検出された。これらは、いずれも近世期のものと考えられる。なお、トレンチおよび各遺構からは、近世期のものに混じり中世期の遺物も出土しており、中世期から集落が形成されていたことがうかがえる。

ちなみに、トレンチの最下層 (15 層) は、大きさに統一性を欠く礫が大量に混ざっており、しかもこれらの礫は、面的に堆積しておらず土砂と混在していることから、土石流の跡である可能性がある。同様の層は、他に 7 J 区 1

トレンチの5層、7 K区1 トレンチの4層、同区2 トレンチの3層・5層にみられる。

SK7018 (図4-18)

SK7018 は調査区西側に位置し、南北方向に長軸をとる楕円形の土坑である。長さ約 2.20 m、幅約 1.20 mで、検出面からの深さは約 0.50 mである。前述した石列の西側に堆積した6層を切り込んでいる。遺構の時期は近世期以降と考えられる。埋土からは、肥前産の染付磁器碗・染付磁器皿・染付磁器猪口、同じく肥前産の陶器碗・鉢、瓦質土器鍋等が出土した。

SK7018 出土遺物 (図4-34)

154 は肥前産の染付磁器猪口である。155 は肥前産の陶器碗で、内外面に黄釉、外面の胴下部と高台には錆釉を施している。

156 は肥前産の京焼風陶器碗で、内面見込みに鉄釉で文様を描いている。

SK7019 (図4-18)

SK7019 は、調査区のほぼ中央に位置する楕円形の土坑である。長さ約 1.40 m、幅約 1.10 mである。検出面からの深さは、約 0.40 mである。埋土からは、肥前産の染付磁器碗、肥前産の陶器鉢、瓦質土器鍋等が出土した。

SK7019 出土遺物 (図4-34)

158・159 は瓦質土器鍋で、158 の外面には煤が付着している。

SK7020 (図4-18)

SK7020 は、調査区中央やや北寄りに位置する土坑で、長さ約 1.7 m、幅約 1.0 mである。検出面からの深さは、約 0.2 mである。埋土からは、肥前産の染付磁器碗、肥前産の陶器碗・甕、陶器壺、肥前産の白磁唐人形灯芯押、土師器皿、瓦質土器鍋等が出土した。

SK7020 出土遺物 (図4-34)

160 は肥前産の白磁唐人形灯芯押である。161 は肥前産の京焼風陶器碗で、内面見込みに鉄釉で文様が描かれている。162 は陶器火入で、外面胴部上半に鉄釉を施している。

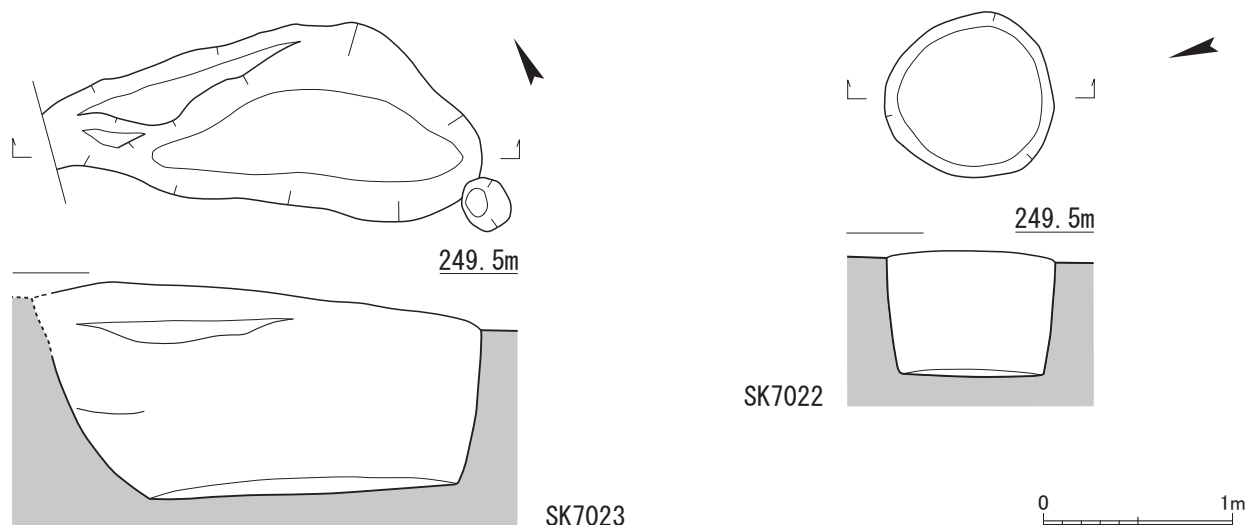


図4-19 7J区 SK7022・SK7023 (1/40)

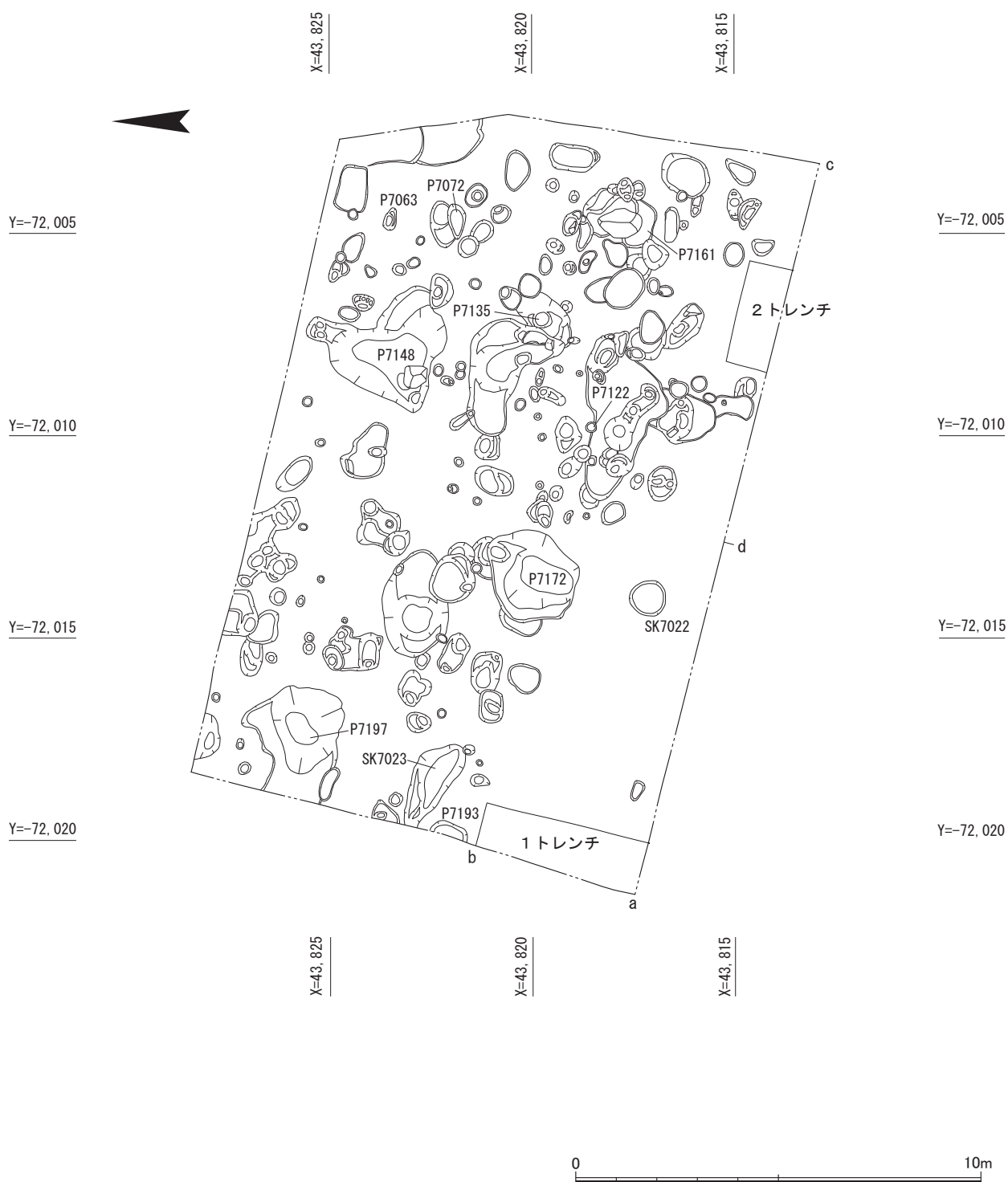
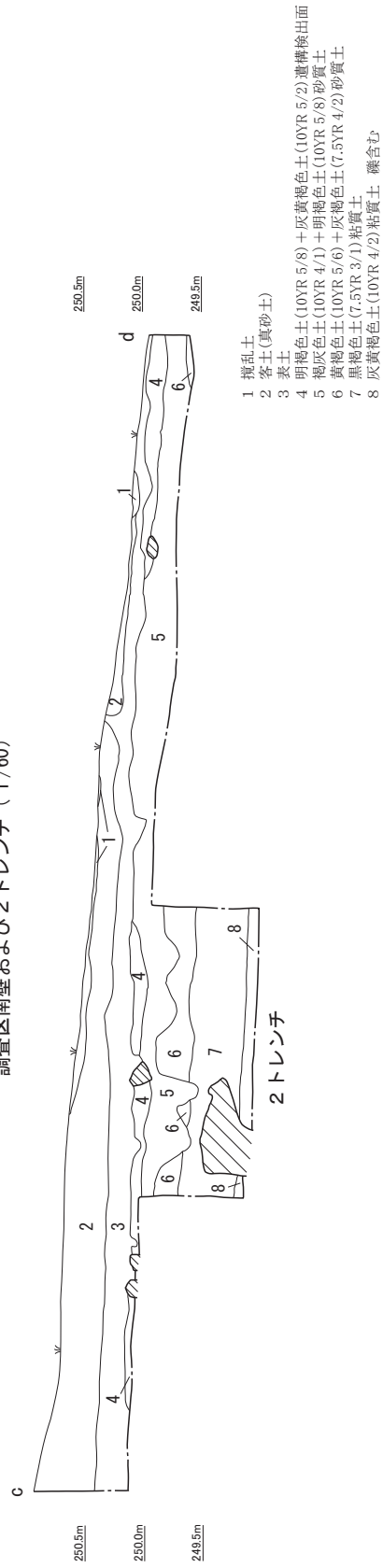


図4-20 7J区遺構配置図(1/150)

調査区南壁および2トレンチ (1/60)



1トレンチ (1/40)

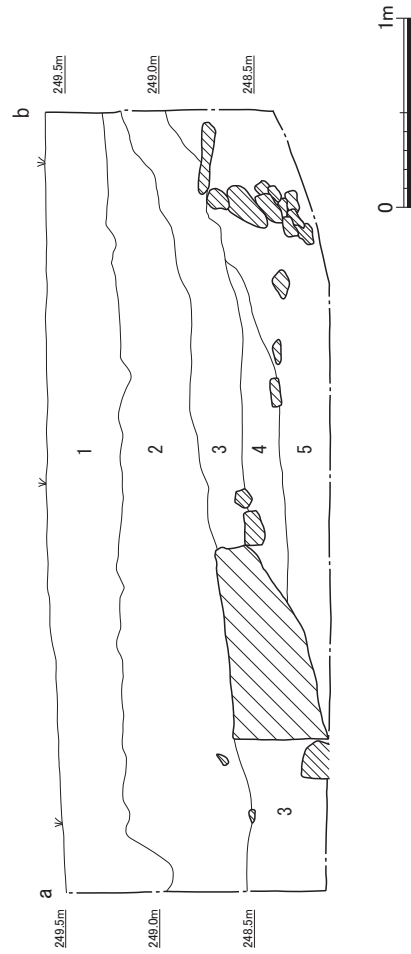


図4-21 7J区土層図 (1/40・1/60)

トレンチ出土遺物（図 4－35）

163～165 は 1 トレンチ 11 層から出土した。163 は銅銭の寛永通寶で、新寛永である。164 は肥前産の染付磁器鉢としたが、香炉や火入の可能性もある。165 は肥前産の染付磁器丸形碗で、内面見込みを蛇の目釉剥ぎしている。166 は 1 トレンチ 12 層から出土した、底部糸切の土師器小皿である。167・168・170 は 1 トレンチ 13 層の出土遺物である。167・168 は底部糸切の土師器小皿である。170 は瓦質土器播鉢で、内面に煤が付着している。171・172 は 1 トレンチ 8 層の出土遺物である。171 は肥前産の陶器皿で、灰釉を施し、内面見込みに鉄釉で文様を描いている。172 は肥前産の染付磁器皿である。173 は 1 トレンチ 9 層の出土遺物である。173 は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着する。175 は 1 トレンチ 3 層の出土遺物である。竜泉窯系の青磁碗である。174 は 1 トレンチ 13 層の出土遺物で、底部糸切の土師器小皿である。

5) 7 J 区の遺構と遺物

7 J 区では、約 0.50 m の表土の下に遺構面があり、多数の小穴・土坑が検出された（図 4－19・20）。遺構はすべて近世期のものであるが、瓦質土器、中国・朝鮮半島産の陶磁器等、中世期の遺物も出土した。なお、小穴、土坑はすべて性格が不明で、建物の柱穴は検出されなかった。

SK7022（図 4－19）

SK7022 は、調査区南部に位置する径約 0.9 m の円形の土坑である。検出面からの深さは、約 0.6 m である。埋土から、肥前産の陶器皿、肥前産の染付磁器碗、土師器皿、瓦質土器火入・鍋等が出土した。

SK7022 出土遺物（図 4－35）

176 は底部糸切の土師器皿である。177 は肥前産の陶器碗で、灰釉を施している。

SK7023（図 4－19）

SK7023 は、調査区西端に位置する不整形の土坑である。西端が調査区の外になるため全容は不明だが、長さ 2.50 m 前後、最大幅 1.00 m の略三角形である。埋土から、土師器皿や瓦質土器播鉢・鍋等が出土した。

SK7023 出土遺物（図 4－35）

178～182 は土師器皿である。178～180・182 は底部糸切で、181 は底部に板状圧痕が残り、182 の内底には螺旋状の調整痕がみられる。183 は瓦質土器播鉢である。

小穴出土遺物（図 4－35・36）

185 は P7063 出土の瓦質土器鉢である。184 は P7072 出土の瓦質土器鉢と考えられ、口縁部外面に印刻文を施す。186 は P7135 出土の竜泉窯系の青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を施している。

188～190 は P7148 から出土した。188 は肥前産の陶器腰折碗で、内面と外面胴下部から灰釉を施しており、高台は露胎である。189 は肥前産の陶器皿で、灰釉を施しており、内面見込みに 3 箇所の子目痕が残る。190 は瓦質土器火鉢である。187 は P7161 出土の土師器鍋である。

191～192 は P7172 から出土した。191 は肥前産の染付磁器丸形碗である。192 は瓦質土器火鉢で、外面に印刻文を施している。193 は P7193 出土の底部糸切の土師器皿で、底部には板状圧痕が残る。

194～197 は P7197 から出土した。194 は瓦質土器火鉢で、外面に印刻文を施している。195 は波佐見系の染付磁器広東形碗である。196 は肥前産の染付磁器猪口で、内面見込みに五弁花文のコンニャク印判を施し、蛇の目凹形高台である。197 は肥前産の染付磁器仏飯器である。

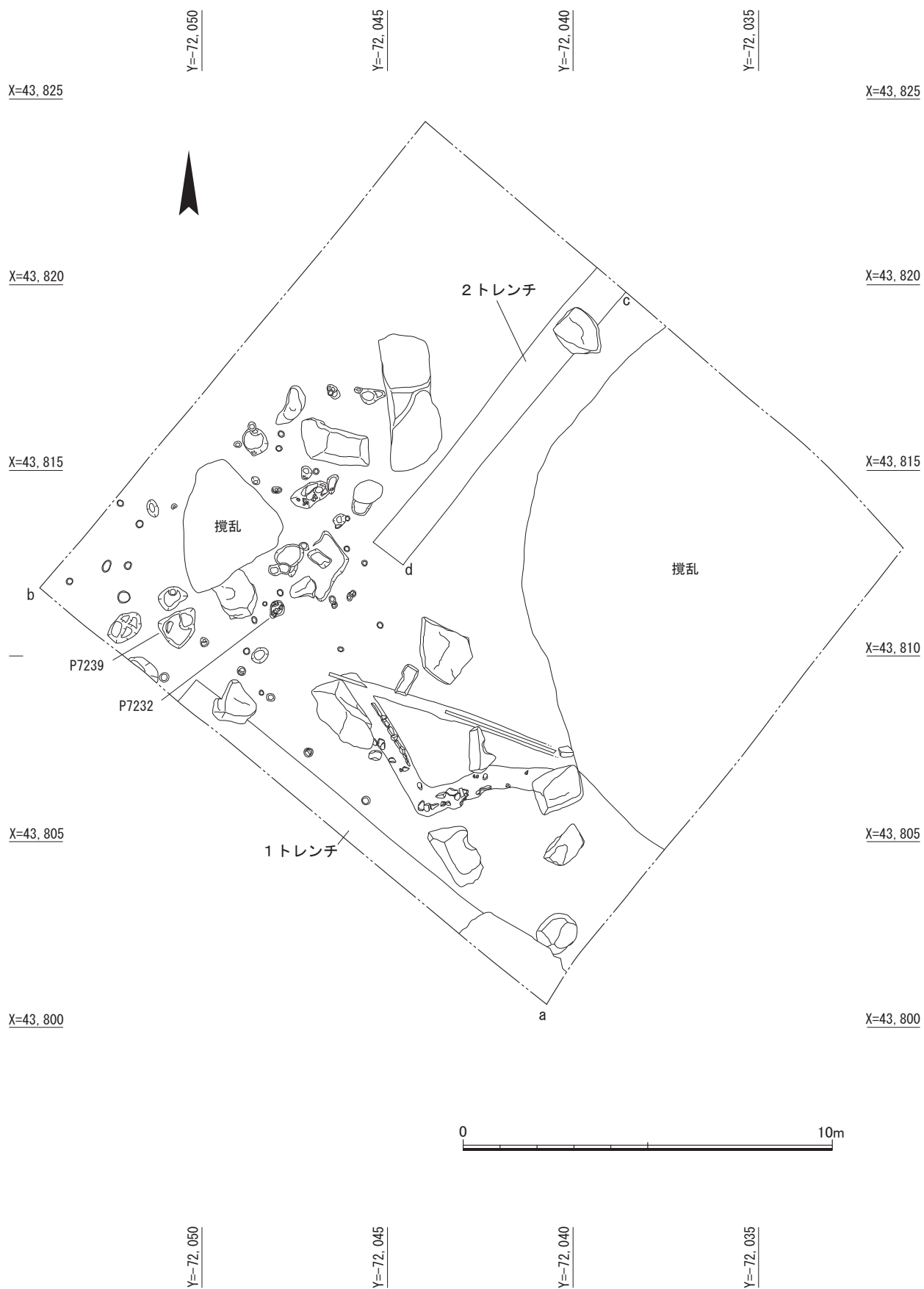
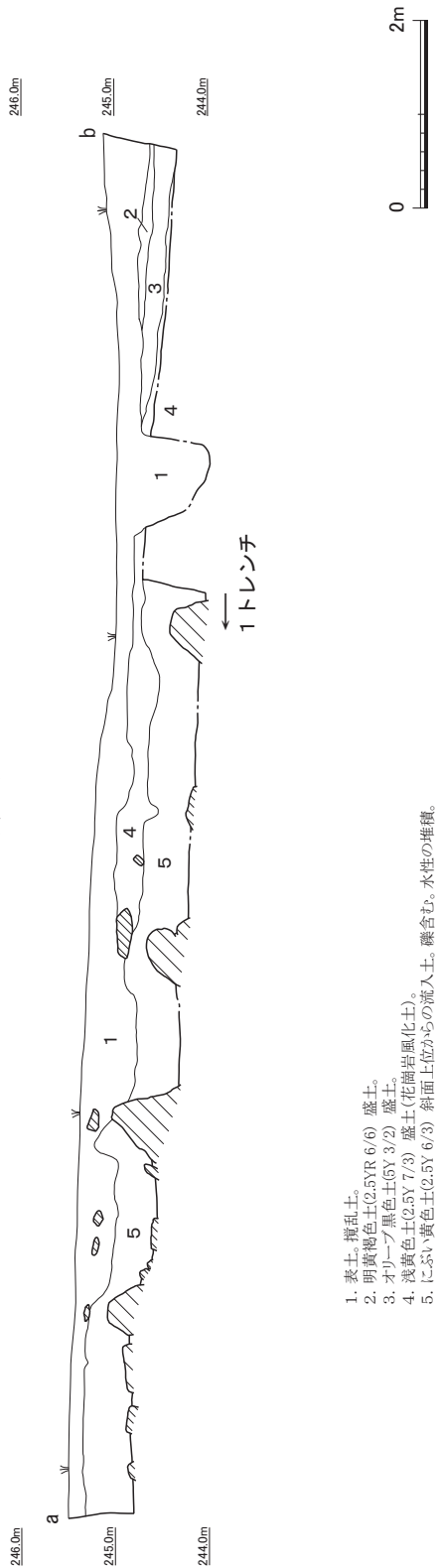


図4-22 7K区遺構配置図(1/150)

調査区南西壁及び 1 トレンチ (1/80)



2 トレンチ (1/60)

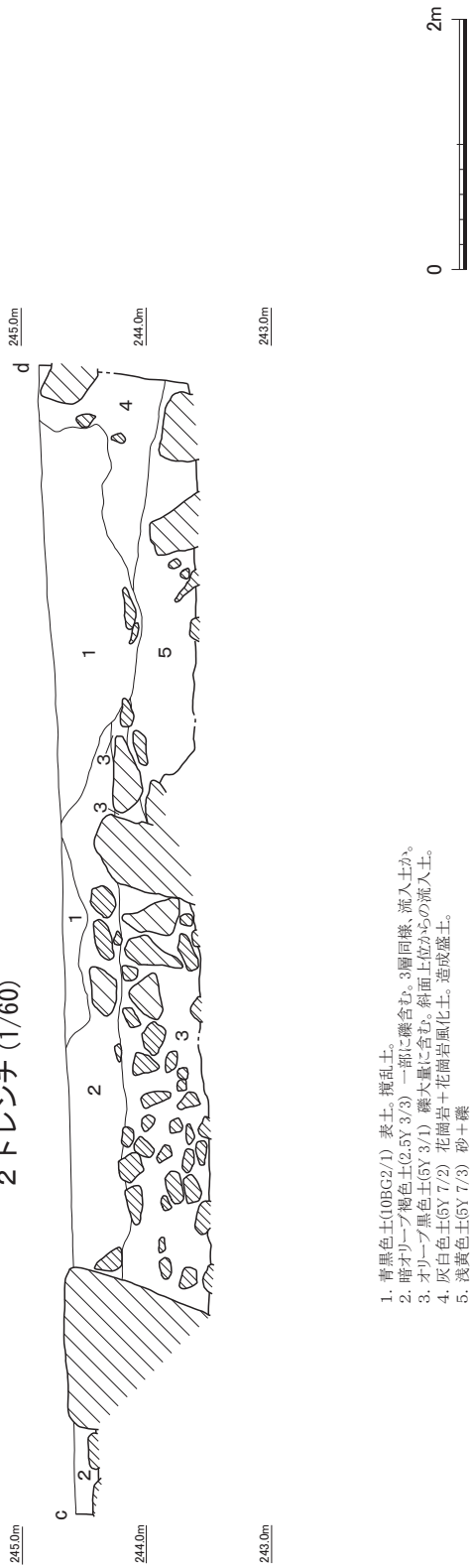


図 4-23 7K 区土層図 (1/60・1/80)

6) 7 K区の遺構と遺物

7 K区は、調査区の大部分が攪乱を受けていたが、調査区南西部において若干数の小穴が検出された(図4-22)。いずれの小穴も、性格は不明である。遺構検出面より下位については、部分的に造成盛土が確認されたが(2トレンチ4層)、他はすべて自然堆積である(図4-23)。この造成盛土からは、中世期の土師器鍋が出土したが、造成自体は近世期のものである可能性が高い。

小穴出土遺物(図4-36)

198はP7232から出土した肥前産の陶器灯明皿で、内面から口縁部外面まで鉄釉を施している。199・200はP7239から出土した底部糸切の土師器小皿で、200には板状圧痕が残る。

その他の出土遺物(図4-36)

201は攪乱出土の弥生土器甕で、口縁部と底部が出土し、2つは同一個体と考えられる。なお、弥生土器は嘉瀬川ダム区域内においても、西畑瀬遺跡や垣ノ内遺跡等で数は少ないながらも出土している。

7) 7 L区の遺構と遺物

7 L区では、調査区の北側において、表土直下から花崗岩風化土の地山が検出されたため遺構検出面とした(図4-24)。この地山面から遺構は確認されなかったが、調査区の南～西側については、現地形に沿うように堆積土が分布していたため、旧地形および現地形の形成時期等を把握するため3本のトレンチを設定し調査を行った。

いずれのトレンチからも、花崗岩風化土の地山が傾斜していく様子がかがえ、さらに、地山の上には、複数の層が地山の傾斜に沿うように堆積している状況が把握できた(図4-25)。これらの層は、自然堆積が主であるが、人工的な造成土も含まれており、地形を改変したことが判る。改変時期については、近世期であると考えられるが、中世期に遡る遺物も若干数、出土した。

トレンチ出土遺物(図4-36)

204・206は1トレンチから出土した。204は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。206は瓦質土器茶釜の羽落部分で、煤が付着している。202・203・205は2トレンチから出土した。202は輝緑凝灰岩製の硯で、裏面に「赤間□」(□は欠損のため不明)の線刻を施している。203は底部糸切の土師器皿である。205は肥前産の染付磁器碗である。207は、2トレンチ4層出土の土師器鍋で、外面に煤が付着している。208は3トレンチ2層出土の竜泉窯系の青磁碗で、線描蓮弁文を施す上田碗BⅣ類である。

8) 7 M区の遺構と遺物

7 M区は、中世山城として利用されていた可能性があるため、尾根筋並びに地形変換点を中心にトレンチを設定した(図4-26)。トレンチ各所からは、複数の掘り込みが確認されたが、いずれも近世期の墓地と考えられる(図4-27)。また、調査区内は、近年の墓地改葬によるものであろうか、いたる所で掘削されており、遺構は確認されなかった。トレンチからは、近世期の陶磁器や土器類、古銭などが出土した。

トレンチ出土遺物(図4-37)

209はトレンチ1層出土の肥前産の染付磁器丸形碗である。210～215・217は2トレンチから出土した。210・211は肥前産の白磁小碗である。212～215は底部糸切の土師器小皿である。217は寛永通寶で、古寛永である。

218・219 は、2 トレンチ 1 層から出土した。218 は寛永通寶で古寛永、219 は近代の 1 銭玉である。220 ～ 227 は、2 トレンチ 4・5 層から出土した。220 ～ 226 は寛永通寶で、220 ～ 225 は新寛永、226 は古寛永である。227 は寛永通寶と鉄銭が錯着し、寛永通寶 2 枚の間に鉄銭 1 枚が挟まれており、上から 3 枚目の寛永通寶は元字銭である。

228 は 3 トレンチから出土した寛永通寶で、古寛永である。216 は 4 トレンチ 1 層から出土した底部糸切の土師器小皿である。

3 まとめ

今回の調査では、7 A ～ 7 C 区で近世期のものと考えられる掘立柱建物が 12 棟、柵列 1 条が確認された。これらのうち、7 B 区で確認された 5 棟、7 C 区で確認された 3 棟の建物については、それぞれが同じ場所で建て替えられており、同様の性格をもつ建物であったと推測される。出土遺物は概ね 17 世紀～ 18 世期の陶磁器や土師器が中心であるが、13 世紀に遡る中国産青磁や 14 世紀～ 15 世紀代の在地系土器や中国産の陶磁器、16 世紀代を主体とする中国産の白磁・青花等の遺物も、若干数出土している。

7 I 区～ 7 K 区では、遺構とした土坑・小穴はすべて近世期のもので、建物跡等は検出できなかった。その他にも土坑や小穴が多数検出されたが、性格は不明で時期も限定し得ないが、調査区内の出土遺物から推測すれば、ほとんどが近世期の所産であると考えて大過ない。ちなみに、調査区からは、14 世紀～ 16 世紀代の在地系の土師器・瓦質土器や中国産の陶磁器も出土している。

また、7 I 区に設定したトレンチの最下層（15 層）は、大きさに統一性を欠く礫が大量に混ざっており、しかもこれらの礫は、面的に堆積しておらず土砂と混在していることから、土石流の跡である可能性がある。同様の層は、7 J 区 1 トレンチの 5 層、7 K 区 1 トレンチの 4 層、同区 2 トレンチの 3 層・5 層にみられる。土石流の起こった時期は明確ではないが、土砂や礫に混じり、中世期の土師器鍋等や近世期の遺物が出土していることから、近世初期である可能性もある。

7 区の調査では、攪乱が激しかったため、近世の屋敷地の内容が判明した例はなかったが、近世集落の様相を知る上での資料が得られた。また、近世期の遺物に混じって 16 世紀代の遺物が出土するが、この時期は同じ東畑瀬地区に畑瀬城や神代氏館等が機能していた時期であり、7 区で確認された建物や遺物は、山城や居館と一連の集落が存在したことを示唆するものであると考えられる。

第 4 章 参考・引用文献

- 小野正敏（1982）「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫（1982）「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 九州近世陶磁学会（2000）『九州陶磁の編年』
- 佐賀県教育委員会（2007）『東畑瀬遺跡 1・大野遺跡 1』佐賀県文化財調査報告書第 170 集
- 佐賀県教育委員会（2008）『西畑瀬遺跡 1』佐賀県文化財調査報告書第 176 集
- 太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第 49 集
- 森田 勉（1982）「14 ～ 16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

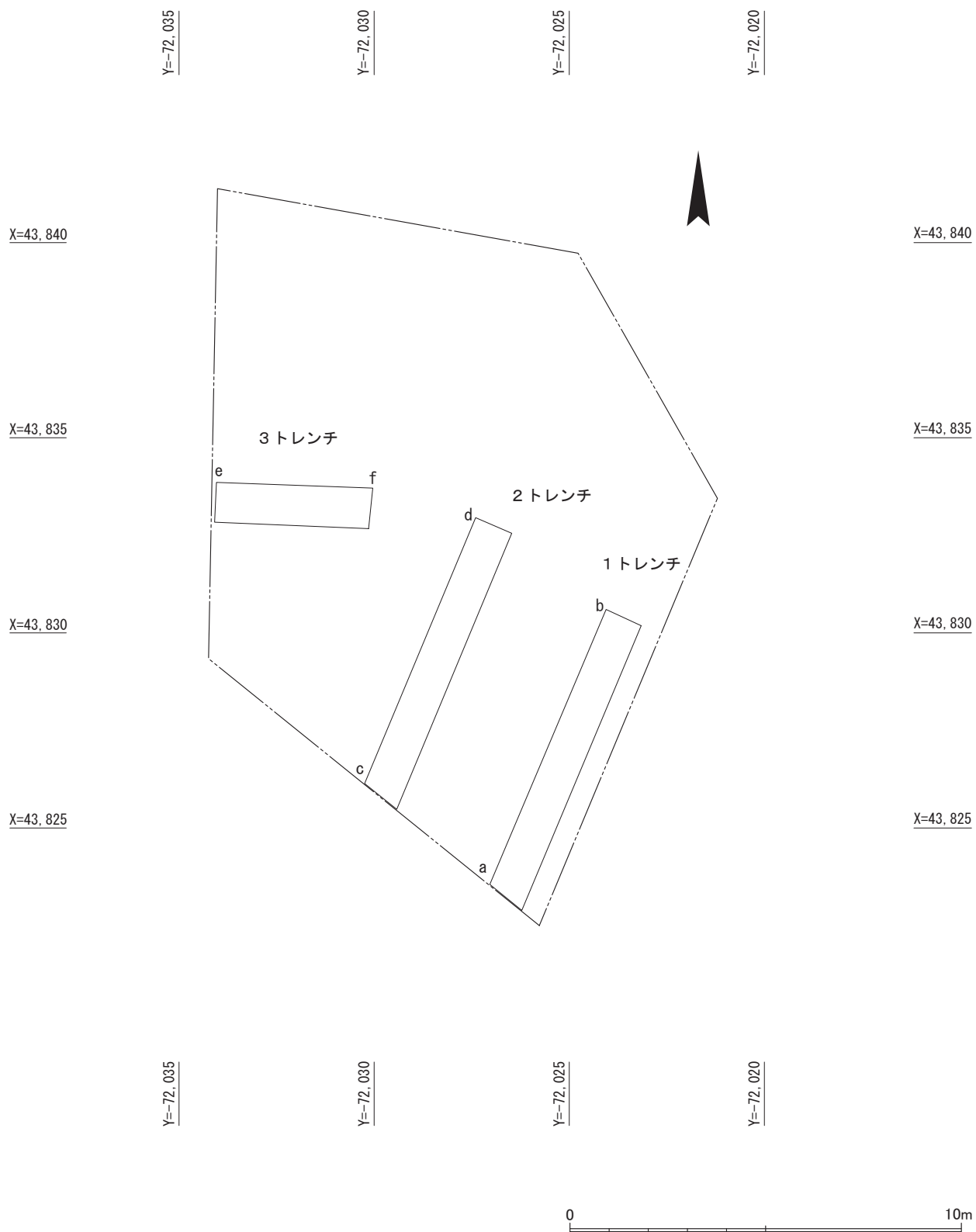
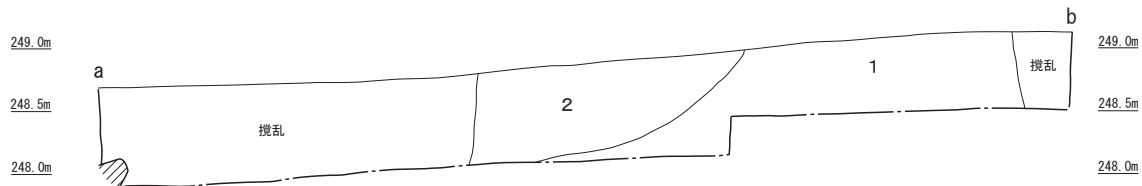


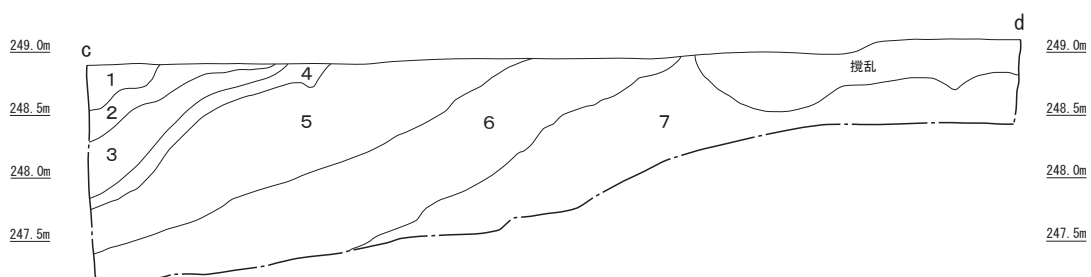
図4-24 7L区トレンチ配置図 (1/150)

1 トレンチ (1/60)



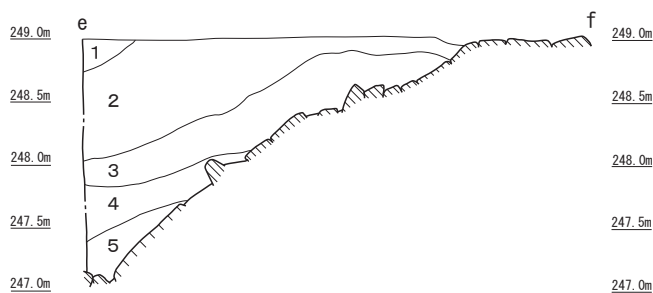
- 1 花崗岩風化土
- 2 褐灰色土(10YR 4/1) 拳大の角礫混じり

2 トレンチ (1/60)



- 1 黒褐色土(10YR 3/2) 花崗岩風化土混じり
- 2 明黄褐色土(10YR 6/6) 花崗岩風化土
- 3 褐色土(10YR 4/4) 拳大の角礫混じり
- 4 黒褐色土(10YR 3/1) 粘質土
- 5 にぶい黄褐色土(10YR 6/4) 拳大の角礫混じり
- 6 褐色土(10YR 4/4) 3層に似る 拳大の角礫混じり
- 7 地山(花崗岩風化土)

3 トレンチ (1/60)



- 1 暗灰黄色土(2.5Y 4/2) 小礫わずかに混じる
- 2 暗オリーブ褐色土(2.5Y 3/3) 小礫わずかに混じる
- 3 黄褐色土(10YR 5/6)
- 4 褐灰色土(10YR 4/1)
- 5 黄褐色土(10YR 5/8)



図4-25 7L区トレンチ土層図 (1/60)

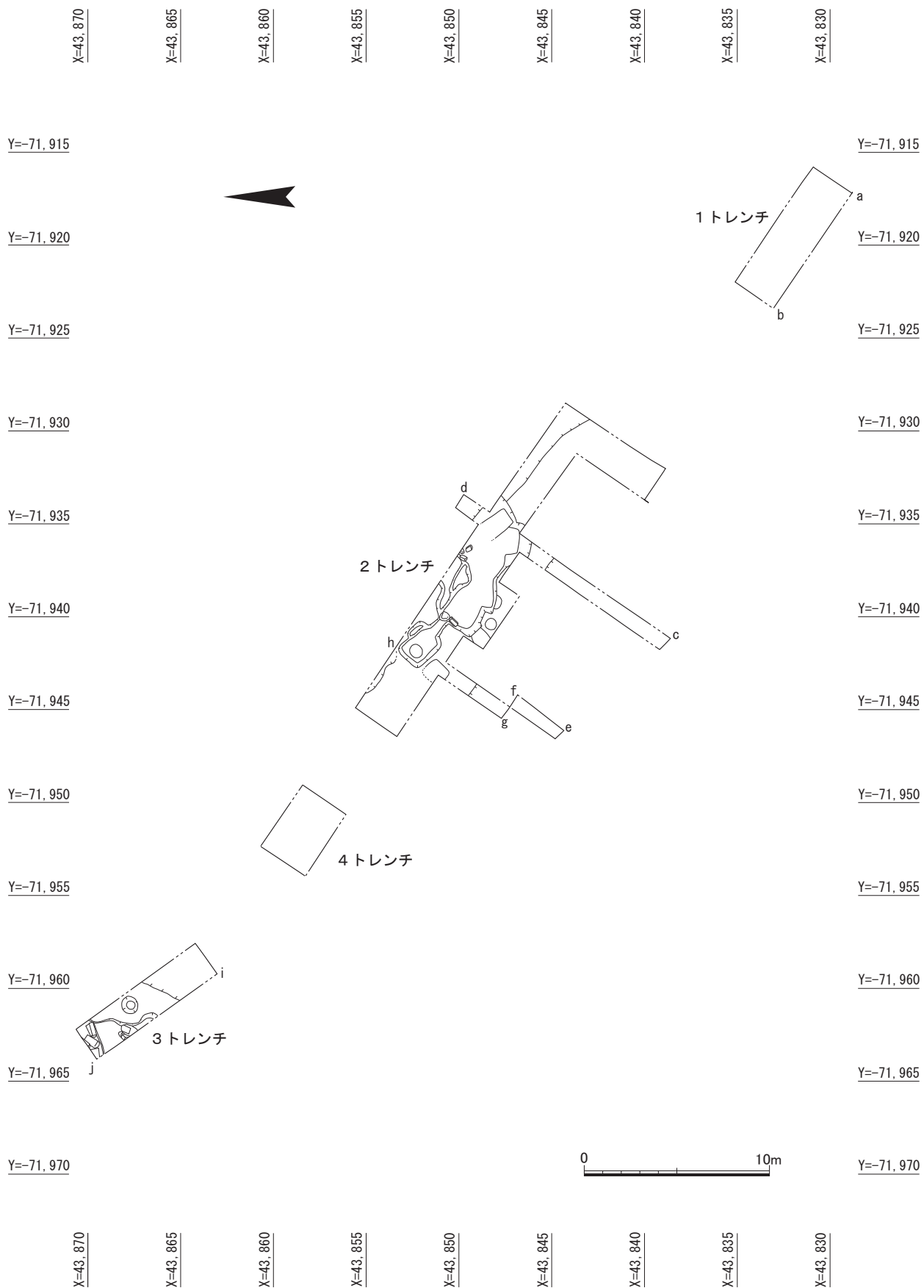


図4-26 7M区トレンチ配置図(1/300)

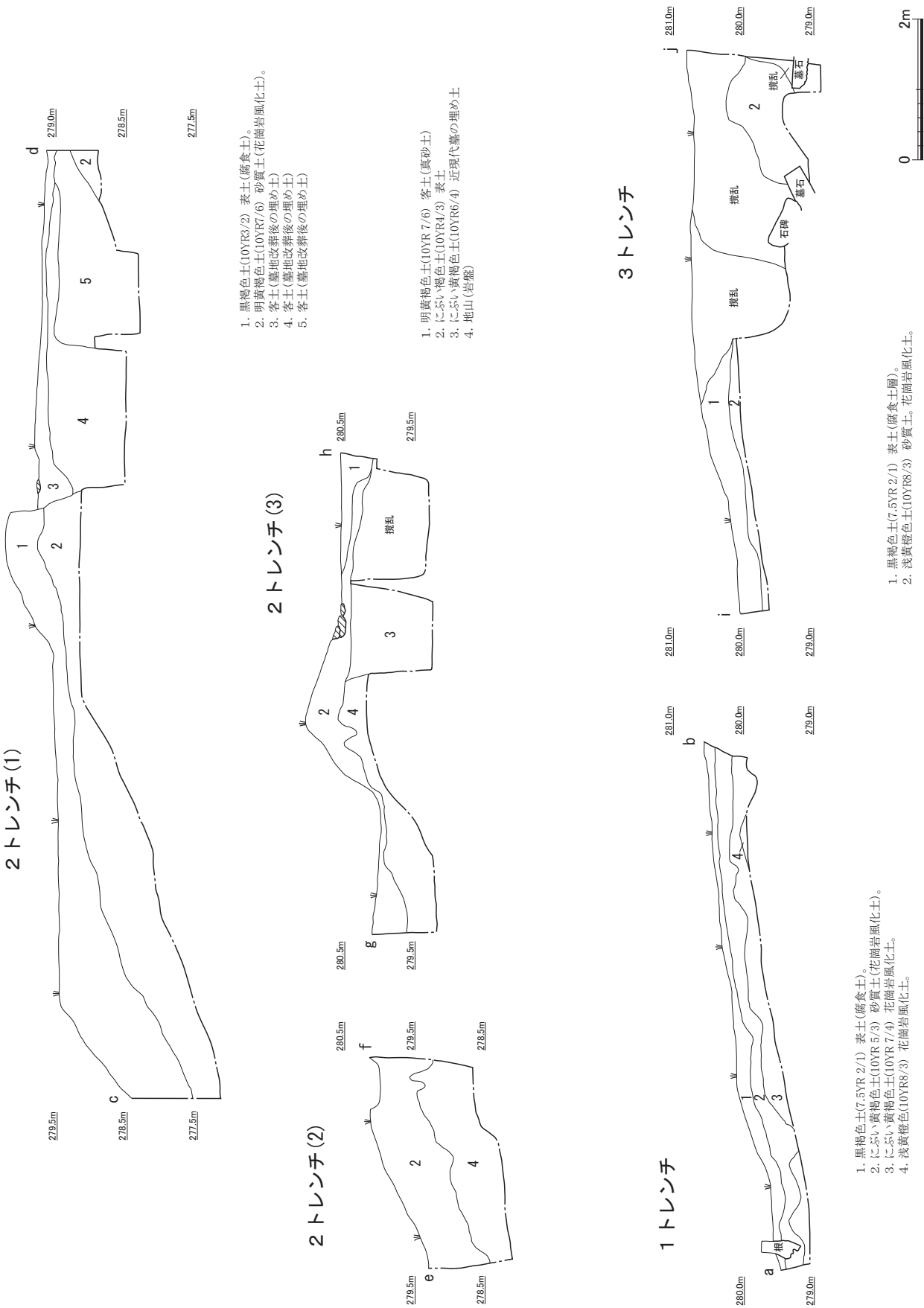


図 4-27 7M 区トレンチ土層図 (1/80)

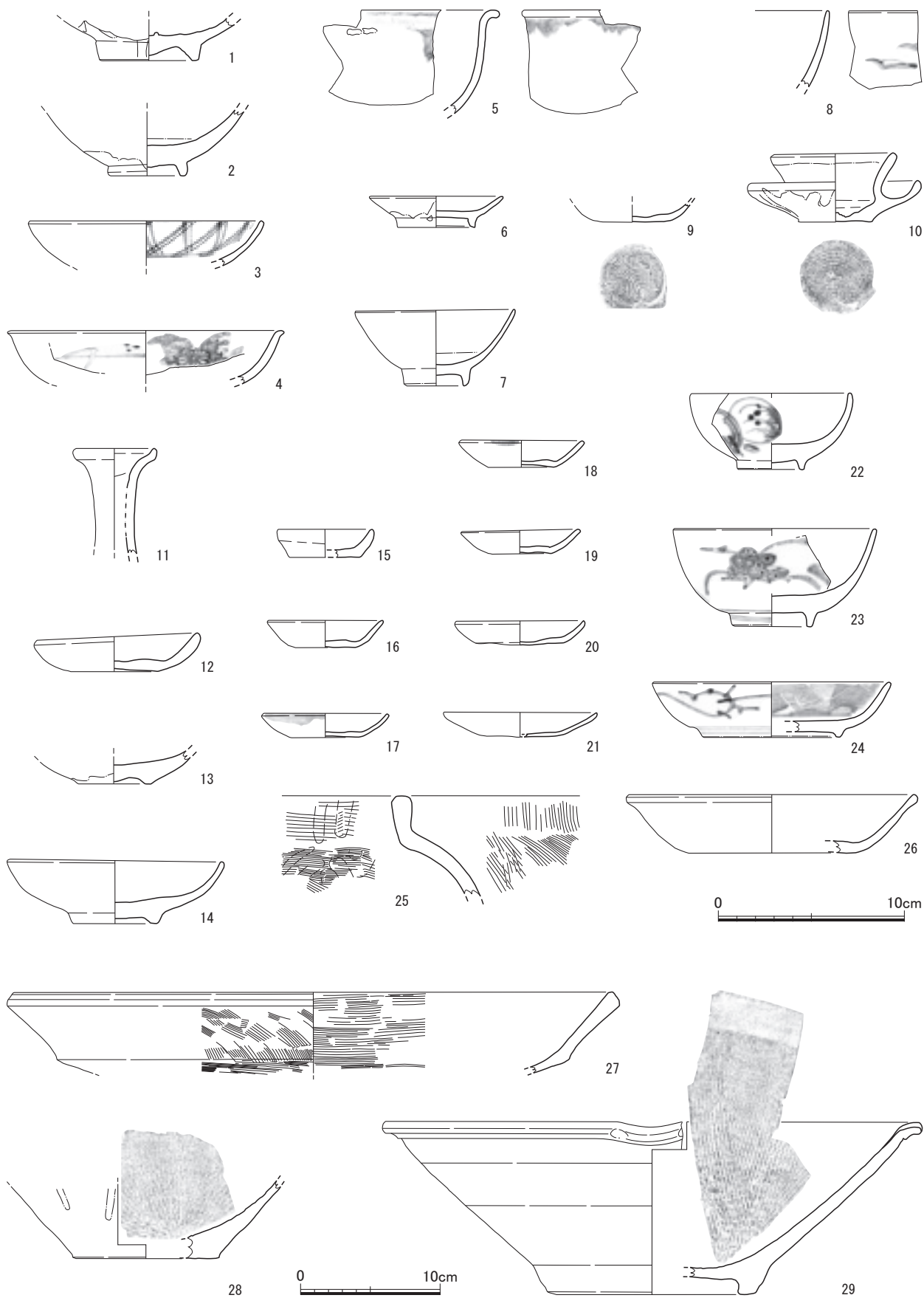


图4-28 7区出土遗物1 (1/3 · 1/4)

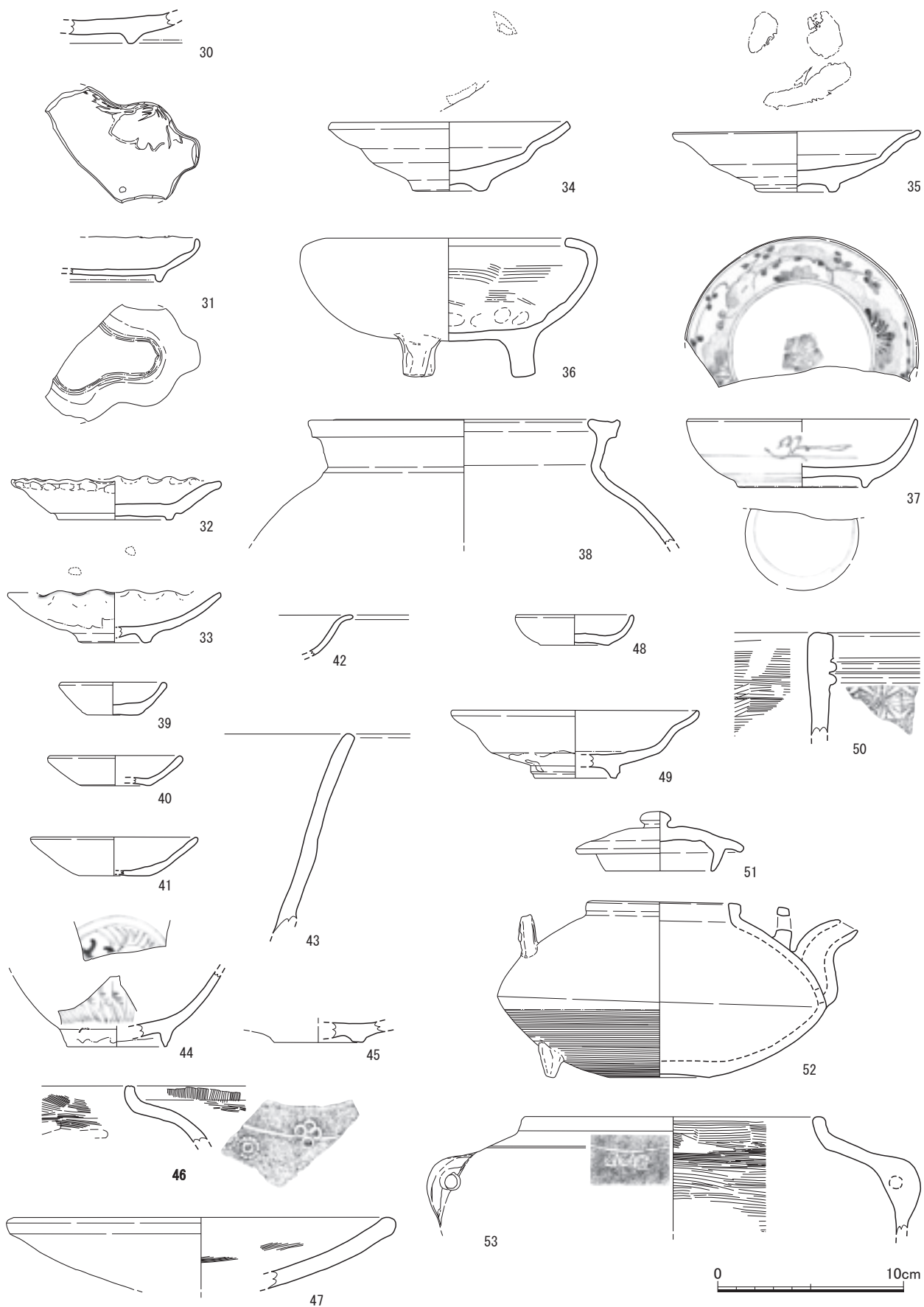


図4-29 7区出土遺物2 (1/3)

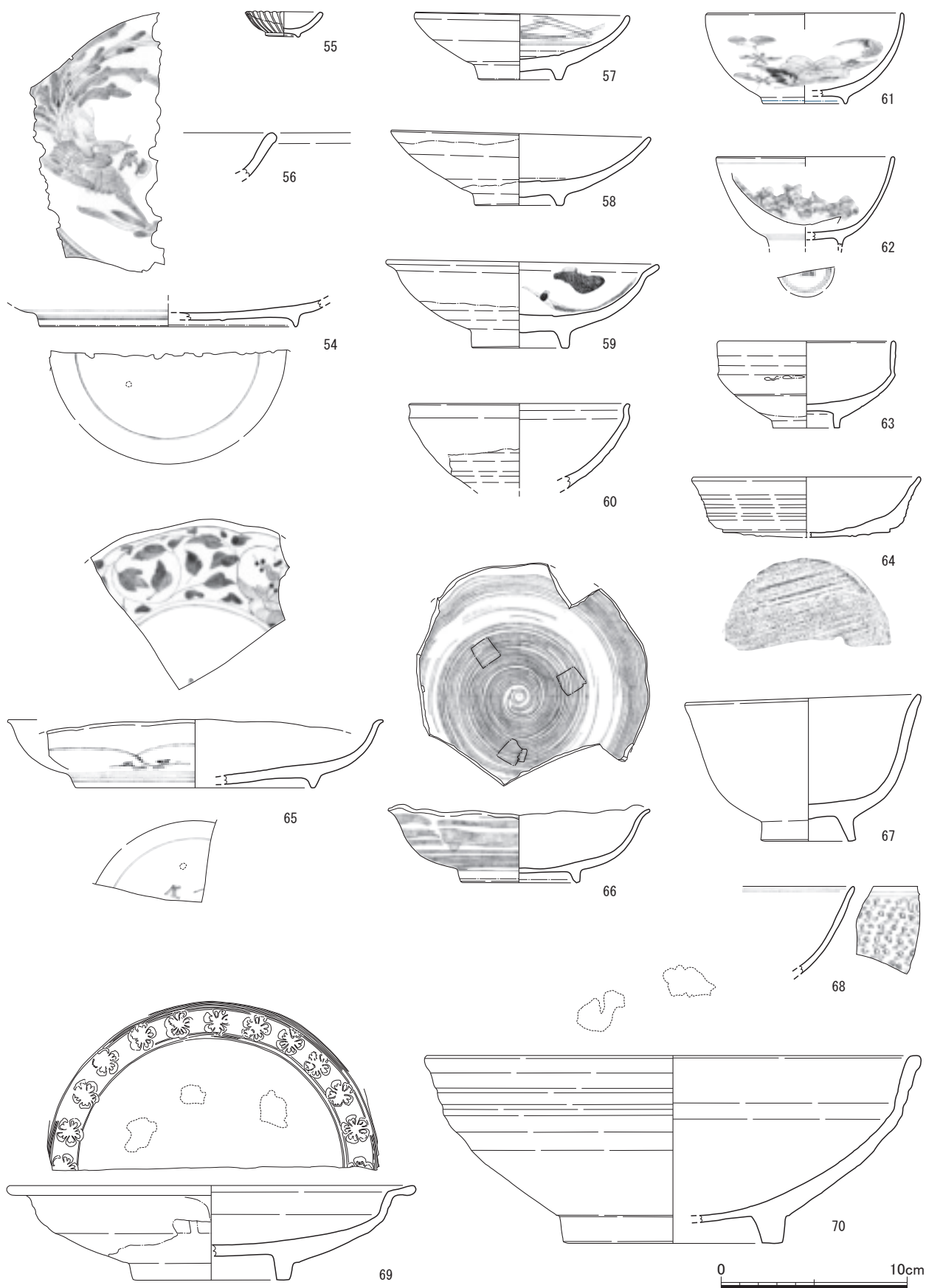


图4-30 7区出土遗物3 (1/3)

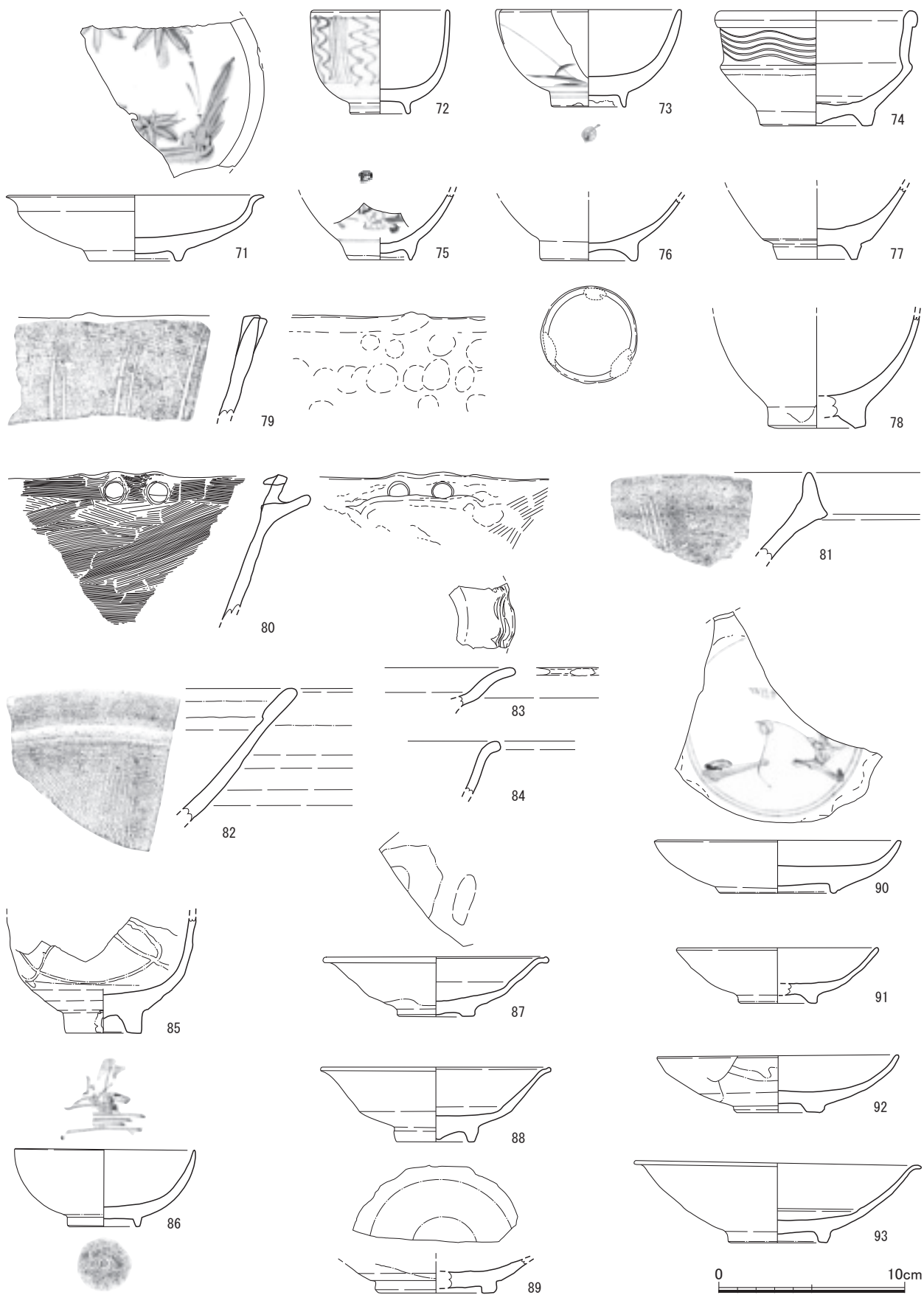


図4-31 7区出土遺物4 (1/3)

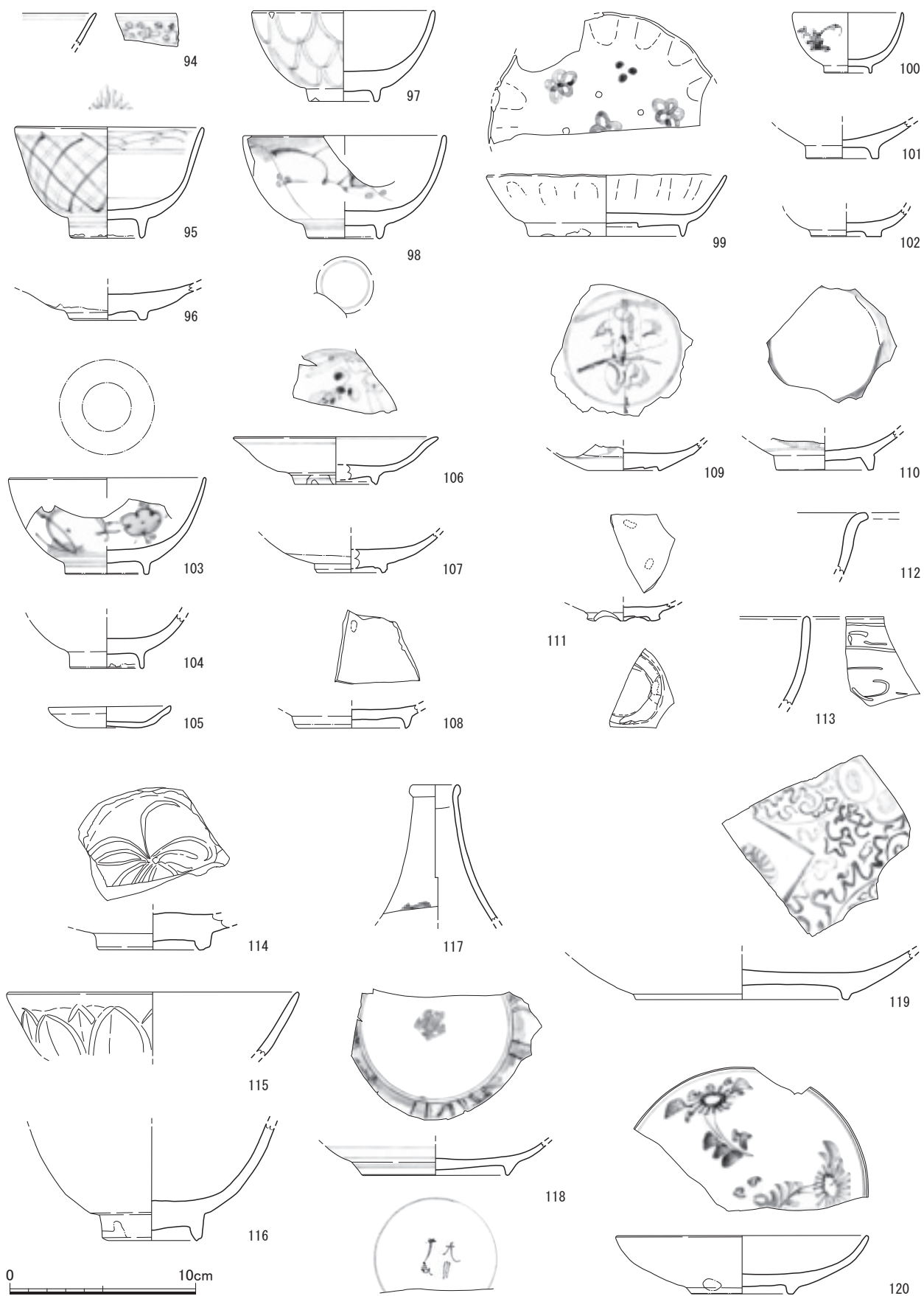


图4-32 7区出土遗物5 (1/3)

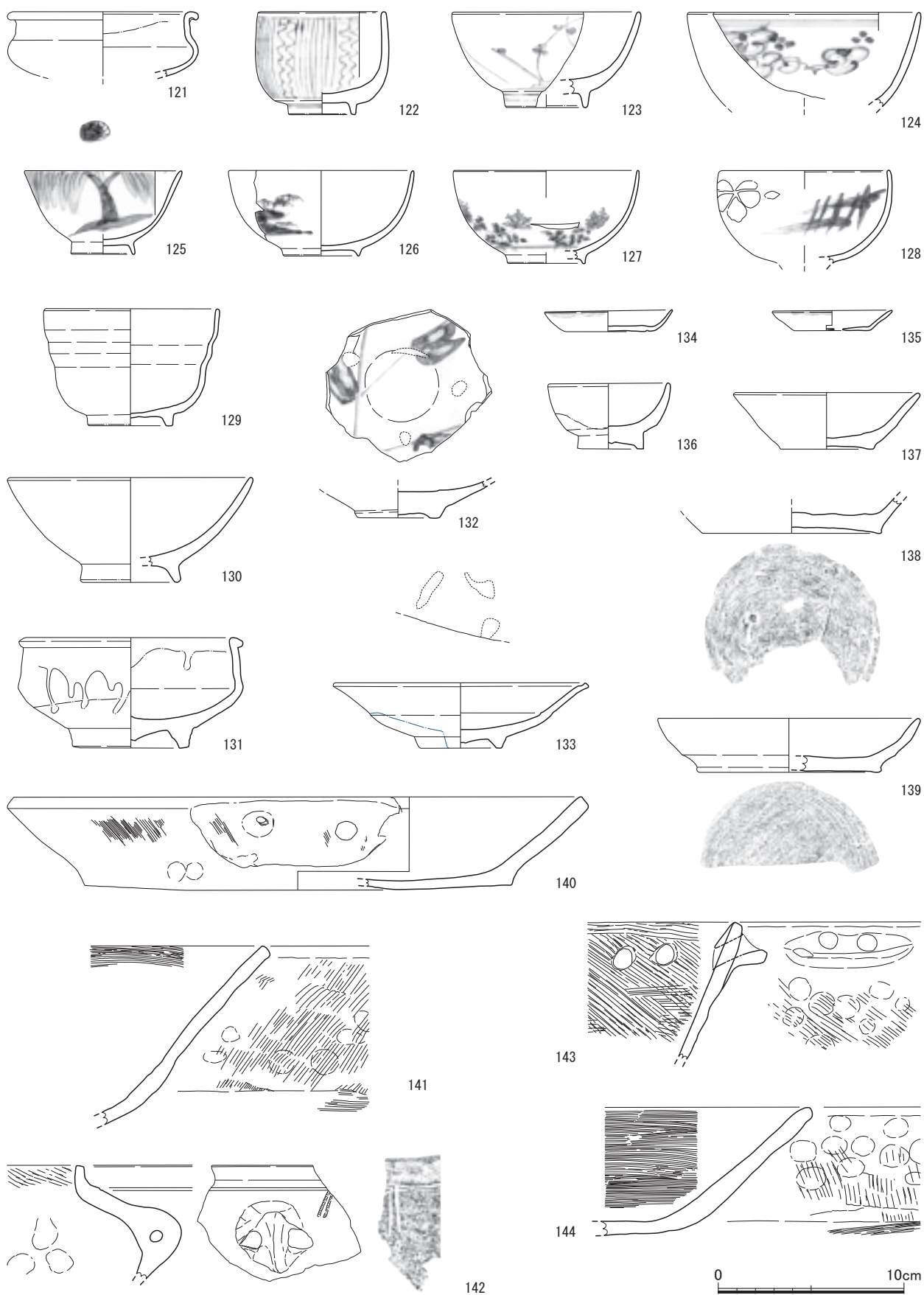


図4-33 7区出土遺物6 (1/3)

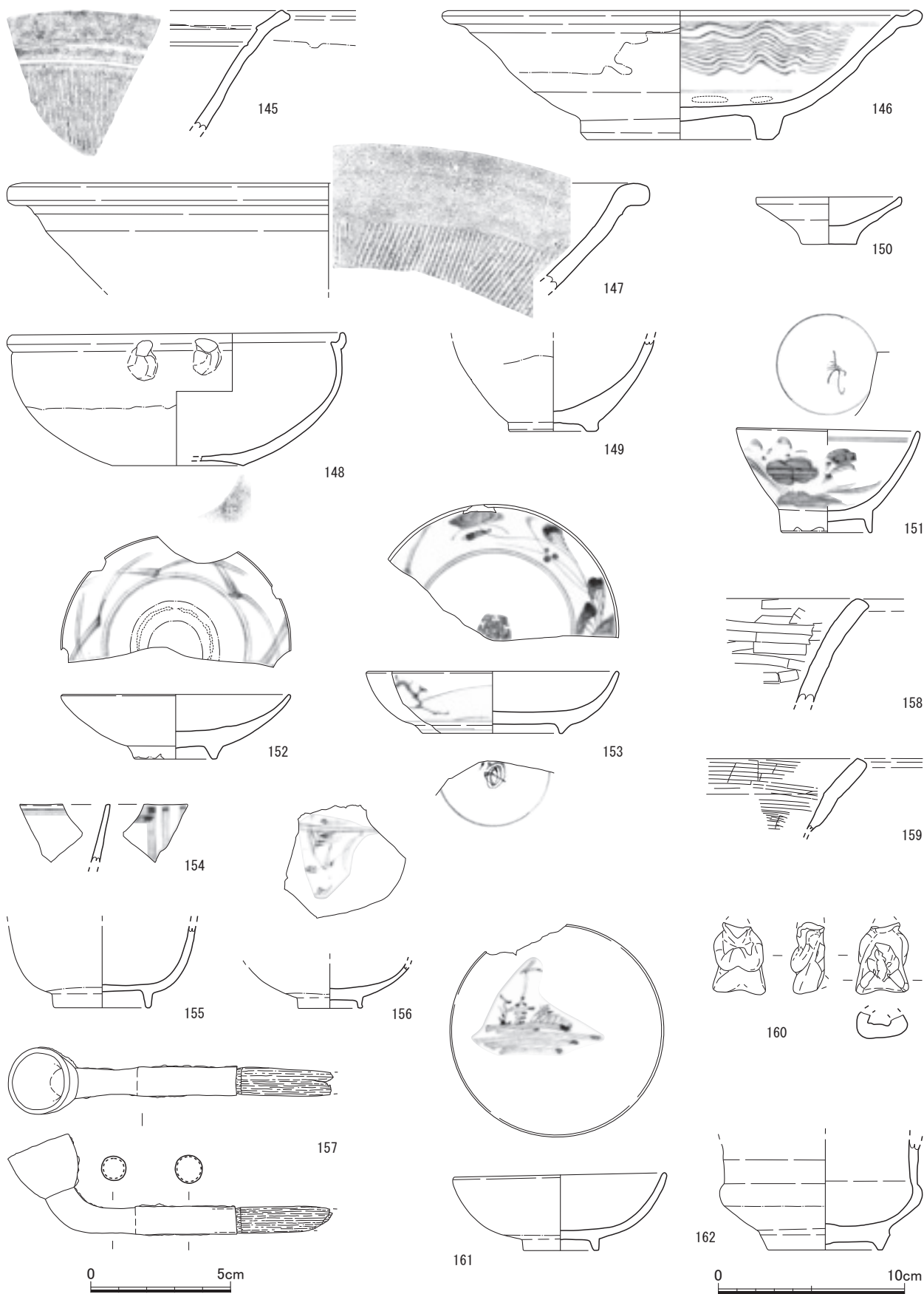


图4-34 7区出土遗物7 (1/3)

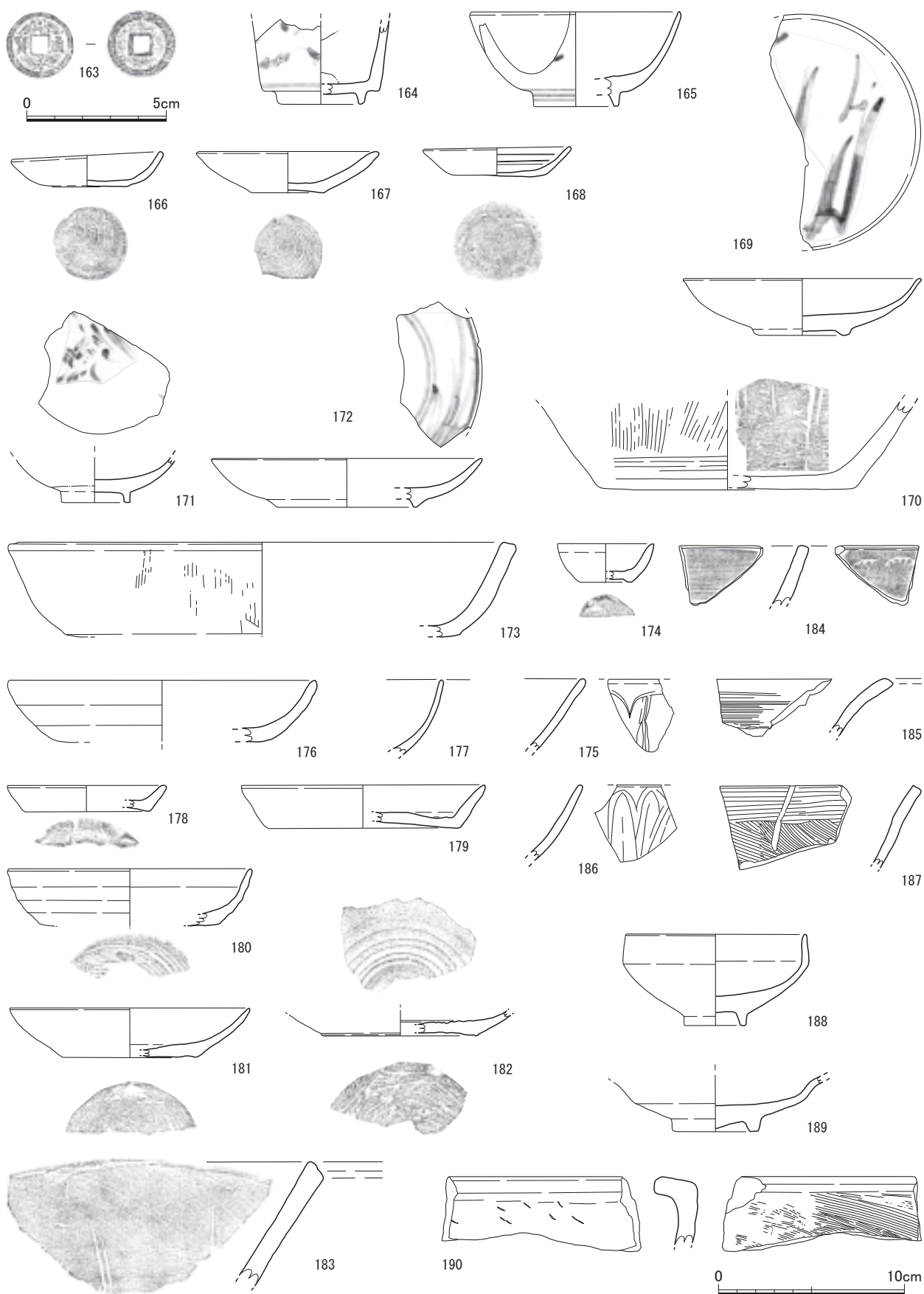


図4-35 7区出土遺物8 (1/2・1/3)

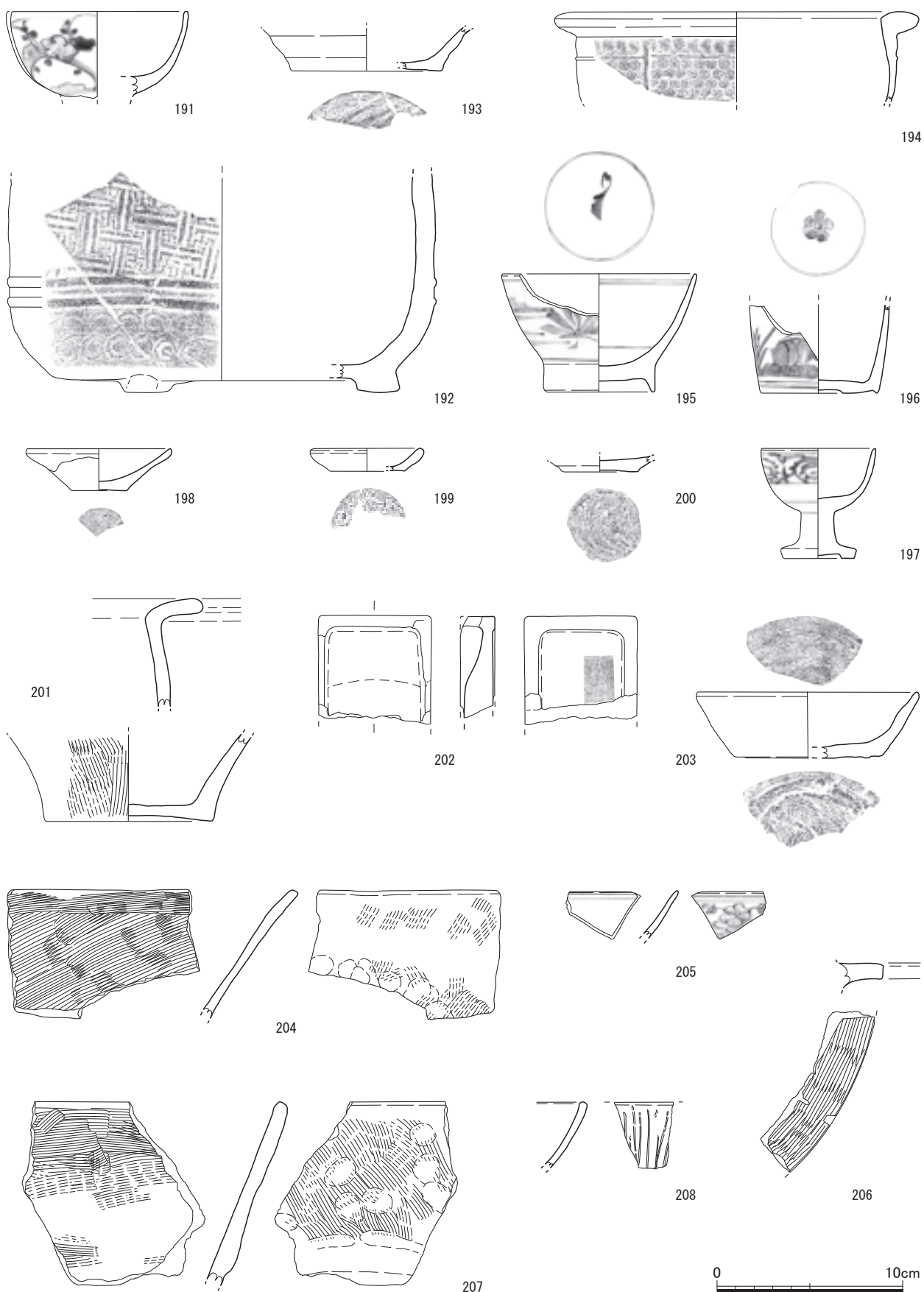


图4-36 7区出土遗物9 (1/3)

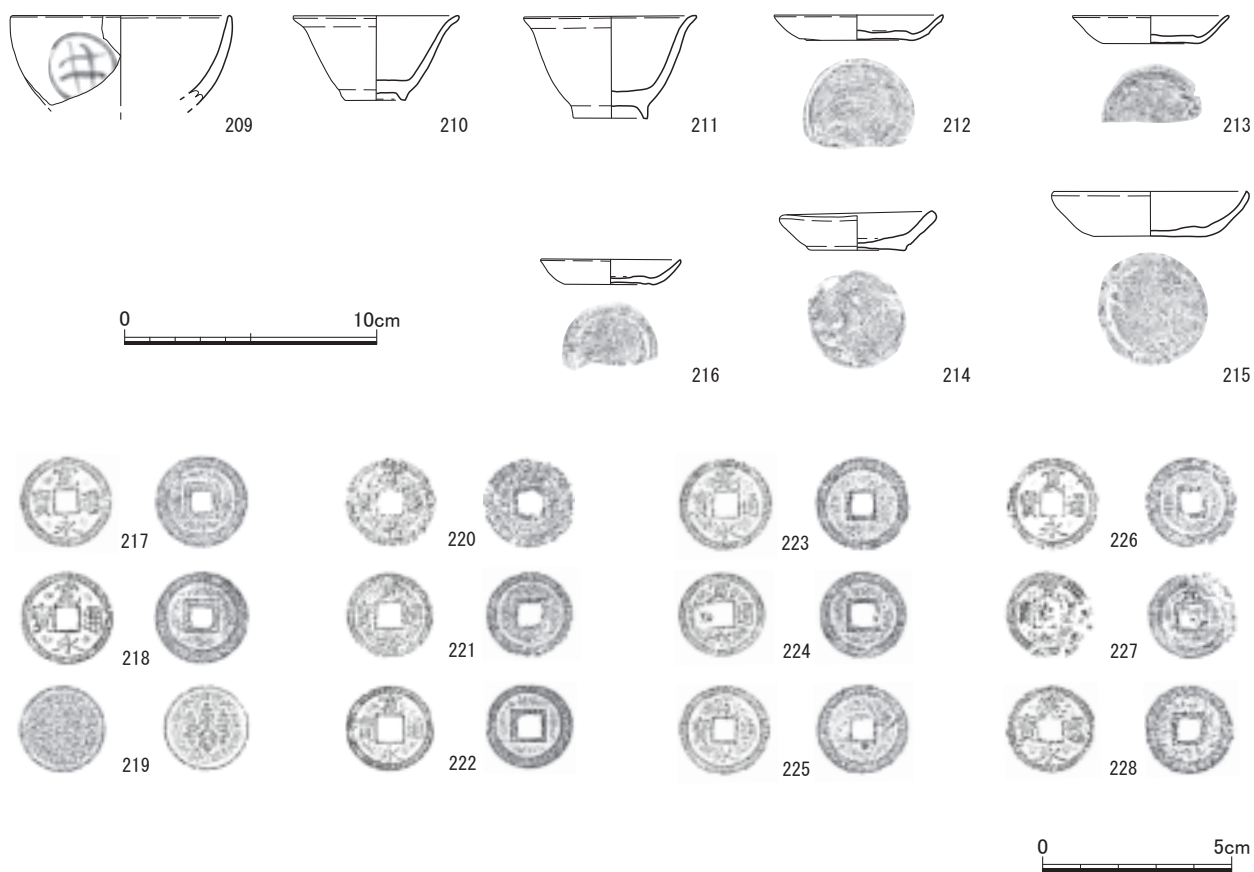


図4-37 7区出土遺物 10 (1/2・1/3)

表4-1 7区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 4-28-1 10002536	7A 区	陶器 火入	-	5.4	-	胎土：明赤褐	肥前 19c 前半	写真図版 4-7-4 20110392
図 4-28-2 10002614	7A 区 SB7029 PD	陶器 碗	-	4.2*	-	胎土：淡黄	肥前 内野山 17c 末～18c 前半 内面蛇の目釉剥ぎ	写真図版 4-7-1 20110393
図 4-28-3 10002613	7A 区 SB7029 PD	染付磁器 皿	12.7*	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 前半	写真図版 4-7-2 20110394
図 4-28-4 10002580	7A 区 SB7029 PD	染付磁器 皿	14.9*	-	-	胎土：灰白	17c 末～18c 初	写真図版 4-7-3 20110395・396
図 4-28-5 10002537	7A 区	陶器 鉢	-	-	-	胎土：灰白	福岡か 17c 後半～18c 代	写真図版 4-7-5 20110397
図 4-28-6 10002615	7A 区	白磁 紅皿	7.2*	4.2	1.7*	胎土：灰白	肥前 18c 前半 型押成形	写真図版 4-7-6 20110398
図 4-28-7 10002538	7A 区	白磁 碗	8.6*	3.5	4.1	胎土：灰白	18c 後半～19c 初 内面見込み釉剥ぎ	写真図版 4-7-11 20110399
図 4-28-8 10002535	7A 区	染付磁器 碗	-	-	-	胎土：灰白	肥前 19c 代	写真図版 4-7-8 20110400
図 4-28-9 10002534	7A 区	土師器 小皿	-	4.0 *	-	にぶい黄橙	底部糸切 外面煤付着	写真図版 4-7-9 20110401・402
図 4-28-10 10002533	7A 区	陶器 灯明皿	6.8*	4.0	3.7	胎土：赤褐 釉調：暗赤褐・灰白	肥前 18c 代	写真図版 4-7-7 20110403
図 4-28-11 10002611	7A 区	陶器 瓶	4.5	-	-	胎土：褐灰	肥前 武雄黒牟田か 17c 前半	写真図版 4-7-13 20110404
図 4-28-12 10002607	7A 区	土師器 小皿	8.9	5.0	2.1	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-7-12 20110405
図 4-28-13 10002608	7A 区	陶器 皿	-	3.9	-	胎土：灰白	肥前 16c 末～17c 初	写真図版 4-7-14 20110406
図 4-28-14 10002609	7A 区	陶器 皿	11.7*	4.6	3.4	胎土：灰白	肥前 16c 末～17c 初	写真図版 4-7-10 20110407
図 4-28-15 10002590	7A 区	土師器 小皿	5.2	3.9	1.5	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-7-15 20110408
図 4-28-16 10002589	7A 区	土師器 小皿	6.3*	3.3*	1.5	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-7-16 20110409
図 4-28-17 10002588	7A 区	土師器 小皿	6.9*	3.9*	1.3	にぶい黄橙	底部糸切 口縁部油煤付着	写真図版 4-7-17 20110410
図 4-28-18 10002587	7A 区	土師器 小皿	6.8*	3.8	1.5	にぶい黄橙	底部糸切 口縁部油煤付着	写真図版 4-7-18 20110411
図 4-28-19 10002586	7A 区	土師器 小皿	6.5	3.4	1.4	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-7-19 20110412
図 4-28-20 10002585	7A 区	土師器 小皿	7.0*	4.8*	1.3	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-7-20 20110413
図 4-28-21 10002584	7A 区	土師器 小皿	8.3*	3.7*	1.3	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-7-21 20110414
図 4-28-22 10002592	7A 区	染付磁器 碗	8.7*	3.6	4.1	胎土：灰白	肥前 18c 末～19c 前半	写真図版 4-7-22 20110415
図 4-28-23 10002591	7A 区	染付磁器 碗	11.0*	4.3	5.3	胎土：灰白	肥前 波佐見 18c 中頃 見込み蛇の目釉剥ぎ	写真図版 4-7-24 20110416
図 4-28-24 10002593	7A 区	染付磁器 碗	12.4*	7.4*	3.0	胎土：灰白	肥前 有田 17c 末～18c 前半 墨弾き	写真図版 4-7-23 20110417
図 4-28-25 10002582	7A 区	瓦質土器 茶釜	-	-	-	外：にぶい黄 内：黄灰	外面煤付着	写真図版 4-7-25 20110418
図 4-28-26 10002583	7A 区	土師器 杯	15.7*	9.0*	3.2	にぶい黄橙	底部糸切 板状圧痕	写真図版 4-7-26 20110419
図 4-28-27 10002581	7A 区	土師器 鍋	43.9*	-	-	にぶい黄橙	外面煤付着	写真図版 4-7-28 20110420
図 4-28-28 10002594	7A 区	陶器 播鉢	-	10.5*	-	胎土：黄灰 釉調：褐	肥前 17c 後半	写真図版 4-7-29 20110421・422
図 4-28-29 10002595	7A 区	炆器 播鉢	38.5*	14.9*	12.4	胎土：にぶい赤褐 釉調：黒褐	肥前 18c 後半～19c 前半	写真図版 4-7-30 20110423
図 4-29-30 10002612	7A 区	陶器 皿	-	-	-	胎土：灰白	肥前か 17c 後半	写真図版 4-7-27 20110424・425
図 4-29-31 10002610	7A 区	白磁 皿	-	-	2.5	胎土：灰白	肥前 有田 1650～60年代か	写真図版 4-7-31 20110426
図 4-29-32 10002528	7A 区 北包含層	陶器 皿	11.3	6.2	2.4	胎土：灰黄 釉調：にぶい赤褐・褐灰	瀬戸・美濃 16c 末	写真図版 4-7-32 20110427

表 4-1 7 区出土遺物一覧

挿図 - 番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 4-29-33 10002529	7A 区 北包含層	陶器 皿	11.5*	3.9*	2.9	胎土：灰褐 釉調：灰オリーブ・黒	肥前 1590 ～ 1600 年代 内面胎土目痕	写真図版 4-7-33 20110428・429
図 4-29-34 10002527	7A 区 北包含層	陶器 皿	13.0*	4.0	3.8	胎土：にぶい黄橙 釉調：灰オリーブ	肥前 16c 末～17c 初 内面胎土目痕	写真図版 4-7-34 20110430
図 4-29-35 10002526	7A 区 北包含層	陶器 皿	13.4*	4.3	3.3	胎土：灰白 釉調：灰オリーブ	肥前 1610 ～ 30 年代 内面砂目痕	写真図版 4-7-35 20110431
図 4-29-36 10002532	7A 区 北包含層	土師器 香炉	12.6*	胴部径 16.0*	7.5	にぶい黄橙・にぶい橙	口縁部煤付着	写真図版 4-7-38 20110432
図 4-29-37 10002530	7A 区 北包含層	染付磁器 皿	12.5*	6.7	3.7	胎土：灰白	肥前 波佐見 18c 前半	写真図版 4-7-36 20110433
図 4-29-38 10002531	7A 区 南包含層	陶器 甕	16.8*	-	-	胎土：灰褐	肥前 16c 末～17c 初	写真図版 4-7-37 20110434
図 4-29-39 10002624	7B 区 SB7034 PK	土師器 小皿	5.8*	1.4*	1.8	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	底部糸切	写真図版 4-8-39 20110435
図 4-29-40 10002620	7B 区 SB7032 PI	土師器 小皿	7.3*	3.9*	1.6	橙	底部糸切	写真図版 4-8-42 20110436
図 4-29-41 10002623	7B 区 SB7034 PK	土師器 小皿	9.0*	4.1*	2.1	橙	底部糸切	写真図版 4-8-41 20110437
図 4-29-42 10002621	7B 区 SB7034 PJ	白磁 皿	-	-	-	胎土：灰白	森田 E 群	写真図版 4-8-40 20110438
図 4-29-43 10002625	7B 区 SB7034 PK	瓦質土器 鍋	-	-	-	内：暗灰黄	外面煤付着	写真図版 4-8-43 20110439
図 4-29-44 10002578	7B 区 SB7032 PI	青花 碗	-	5.4	-	胎土：灰白	景德鎮窯系 16c 代（後半まで）	写真図版 4-8-45 20110440・441
図 4-29-45 10002622	7B 区 SB7034 PK	陶器 皿	4.75*	-	-	胎土：にぶい橙	肥前	写真図版 4-8-44 20110442・443
図 4-29-46 10002627	7B 区 SB7036 PD	瓦質土器 茶釜	-	-	-	外：褐灰・灰黄褐 内：灰黄褐		写真図版 4-8-46 20110444
図 4-29-47 10002626	7B 区 SB7035 PE	土師器 焙烙	21.0*	-	-	にぶい橙	煤付着	写真図版 4-8-49 20110445
図 4-29-48 10002618	7B 区	土師器 小皿	6.4*	3.7*	1.7	橙	底部糸切	写真図版 4-8-48 20110446
図 4-29-49 10002616	7B 区	陶器 皿	13.3*	4.4*	3.7	胎土：灰白	肥前 内野山 17c 末～18c 前半 内面蛇の目釉剥ぎ	写真図版 4-8-47 20110447
図 4-29-50 10002619	7B 区	瓦質土器 火鉢	-	-	-	黄灰		写真図版 4-8-50 20110448
図 4-29-51 10002566	7B 区	陶器 土瓶 蓋	5.9	最大径 9.1	3.2	外：淡橙 内：黒褐	薩摩 19c 前半～幕末 煤付着 胞衣埋納か 10002567 とセット	写真図版 4-8-51 20110449
図 4-29-52 10002567	7B 区	陶器 土瓶 身	8.3	5.4	9.5	外：にぶい赤褐 内：黒褐	薩摩 19c 前半～幕末 煤付着 胞衣埋納か 10002566 とセット	写真図版 4-8-52 20110450
図 4-29-53 10002617	7B 区	瓦質土器 茶釜	16.1*	-	-	外：黄褐 内：黄灰		写真図版 4-8-53 20110451
図 4-30-54 10002579	7B 区	染付磁器 皿	-	13.9*	-	胎土：灰白	肥前 有田 1690 ～ 1710 年代	写真図版 4-8-54 20110452・453
図 4-30-55 10002597	7B 区	白磁 紅皿	4.2	1.9	1.4	胎土：灰白	肥前 18c 後半～19c 初	写真図版 4-8-55 20110454
図 4-30-56 10002557	7B 区	青磁 皿	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系	写真図版 4-8-56 20110455
図 4-30-57 10002542	7B 区	染付磁器 皿	11.6	4.5	3.6	胎土：灰白	肥前 波佐見 1750 ～ 1810 年代 内面蛇の目釉剥ぎ	写真図版 4-8-57 20110456
図 4-30-58 10002598	7B 区	陶器 皿	14.0*	4.8	4.1	胎土：灰白	肥前 内野山 17c 後半 内面見込み蛇の目釉剥ぎ	写真図版 4-8-58 20110457
図 4-30-59 10002600	7B 区	陶器 皿	14.7	5.1	4.8	胎土：浅黄橙	肥前 内野山 17c 中頃～後半 内面見込み蛇の目釉剥ぎ	写真図版 4-8-59 20110458
図 4-30-60 10002572	7B 区	陶器 碗	11.9*	-	-	胎土：にぶい黄橙	肥前 17c 初	写真図版 4-8-60 20110459
図 4-30-61 10002548	7B 区	染付磁器 碗	10.7*	4.5*	4.9	胎土：灰白	肥前 有田 18c 前半	写真図版 4-8-61 20110460
図 4-30-62 10002549	7B 区	染付磁器 碗	9.7	-	-	胎土：灰白	有田 17c 後半	写真図版 4-8-62 20110461
図 4-30-63 10002568	7B 区	陶器 碗	9.6*	3.6	4.7	胎土：灰黄	肥前 18c 前半	写真図版 4-8-64 20110462
図 4-30-64 10002563	7B 区	土師器 杯	12.3*	9.0*	3.3	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	底部糸切 板状圧痕	写真図版 4-8-63 20110463

表4-1 7区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図4-30-65 10002539	7B区	染付磁器 皿	20.2*	12.8*	3.7	胎土：灰白	肥前 17c 末～18c 初頭 高台内に目痕	写真図版 4-8-65 20110464・465
図4-30-66 10002603	7B区	陶器 皿	14.1*	6.4	4.2	胎土：灰	肥前 川久保皿山窯跡 1690～1740 年代 方形に釉剥ぎ3箇所	写真図版 4-8-66 20110466
図4-30-67 10002574	7B区	陶器 碗	12.7*	5.1*	7.9	胎土：灰白	肥前 内野山か 17c 前半～中頃	写真図版 4-8-67 20110467
図4-30-68 10002552	7B区	青花 碗	-	-	-	胎土：灰白	景德鎮窯系碗小野C群	写真図版 4-8-68 20110468
図4-30-69 10002562	7B区	陶器 鉢	22.0*	8.4*	5.1	胎土：にぶい赤褐 釉調：暗赤褐・暗灰黄・灰白	肥前 武雄周辺 1730～40年代 三島手 砂目痕	写真図版 4-8-69 20110469
図4-30-70 10002560	7B区	陶器 鉢	26.7*	11.7*	10.1	胎土：にぶい赤褐 釉調：黒褐	肥前 17c 中頃～後半 内面砂目痕	写真図版 4-8-71 20110470
図4-31-71 10002543	7B区	染付磁器 皿	13.9*	5.0*	3.6	胎土：灰白	肥前 17c 前半	写真図版 4-8-70 20110471
図4-31-72 10002544	7B区	染付磁器 碗	7.5*	3.1*	5.6	胎土：灰白	肥前 波佐見 19c 前半	写真図版 4-9-72 20110472
図4-31-73 10002551	7B区	染付磁器 碗	10.0*	4.0	5.2	胎土：灰白・にぶい黄橙	肥前 波佐見 18c 初	写真図版 4-9-73 20110473
図4-31-74 100002559	7B区	陶器 火入	10.9*	6.1	6.2	胎土：明赤褐 釉調：にぶい赤褐	肥前 17c 後半～18c 前半 畳付に目痕	写真図版 4-9-74 20110474
図4-31-75 10002550	7B区	青花 碗	-	3.4*	-	胎土：灰白	景德鎮窯系	写真図版 4-9-77 20110475
図4-31-76 10002569	7B区	陶器 碗	-	5.3	-	胎土：灰白	肥前 内野山 17c 前半 畳付胎土目3箇所	写真図版 4-9-76 20110476
図4-31-77 10002571	7B区	陶器 碗	-	4.3	-	胎土：にぶい橙	肥前 17c 前半	写真図版 4-9-78 20110477
図4-31-78 10002573	7B区	陶器 碗	-	5.2*	-	胎土：灰白	肥前 内野山 17c 後半	写真図版 4-9-75 20110478
図4-31-79 10002564	7B区	瓦質土器 播鉢	-	-	-	外：灰黄褐 内：灰黄	外面煤付着	写真図版 4-9-79 20110479
図4-31-80 10002565	7B区	瓦質土器 鍋	-	-	-	黄灰	外面煤付着	写真図版 4-9-81 201104780
図4-31-81 10002555	7B区	陶器 播鉢	-	-	-	外：灰赤・にぶい赤褐 内：にぶい赤褐	備前 16c 末～17c 初	写真図版 4-9-80 20110481
図4-31-82 10002561	7B区	陶器 播鉢	-	-	-	胎土：褐灰 釉調：暗赤褐	肥前 17c 後半	写真図版 4-9-84 20110482
図4-31-83 10002558	7B区 検出面	青磁 皿	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系	写真図版 4-9-82 20110483
図4-31-84 10002556	7B区 検出面	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系	写真図版 4-9-83 20110484
図4-31-85 10002570	7B区	陶器 碗	-	4.1	-	胎土：褐灰	肥前 武雄黒牟田か 1600～40年代 そうめんがけ	写真図版 4-9-85 20110485
図4-31-86 10002596	7B区	陶器 碗	9.8*	3.9	4.7	胎土：灰白	肥前 17c 末～18c 前半 底部見込みに印圈・刻印「清□」 (□は不明)	写真図版 4-9-86 20110486
図4-31-87 10002605	7B区	陶器 皿	12.2*	4.2	3.2	胎土：灰白	肥前 内野山 16c 末～17c 初頭 内面見込み砂目痕	写真図版 4-9-87 20110487
図4-31-88 10002602	7B区	陶器 皿	12.4	4.2	4.0	胎土：灰白	肥前 内野山 1610～30年代	写真図版 4-9-88 20110488
図4-31-89 10002554	7B区 検出面	青磁 皿	-	6.5*	-	胎土：にぶい黄橙	竜泉窯系 内面蛇の目状釉剥ぎ	写真図版 4-9-89 20110489・490
図4-31-90 10002541	7B区	染付磁器 皿	13.3*	6.3	2.9	胎土：灰白	肥前 17c 代	写真図版 4-9-90 20110491
図4-31-91 10002606	7B区 検出面	陶器 皿	10.9*	4.3*	3.0	胎土：にぶい黄橙	朝鮮か 16c 代か 内面見込みに目痕	写真図版 4-9-91 20110492・493
図4-31-92 10002599	7B区	陶器 皿	13.0	4.5	3.1	胎土：灰白	肥前 内野山 17c 後半 内面見込み蛇の目釉剥ぎ	写真図版 4-9-92 20110494
図4-31-93 10002601	7B区 表土	陶器 皿	15.2	5.3	4.5	胎土：灰白	肥前 内野山 17c 前半 内面見込み砂目痕4箇所	写真図版 4-9-93 20110495
図4-32-94 10002553	7B区 表土	青花 碗	-	-	-	胎土：灰白	景德鎮窯系碗小野C群	写真図版 4-9-94 20110496
図4-32-95 10002546	7B区 表土	染付磁器 碗	10.2	3.7	6.0	胎土：灰白	肥前 1820～60年代	写真図版 4-9-95 20110497

表 4-1 7 区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 4-32-96 10002604	7B 区 表土	陶器 皿	-	4.2	-	胎土：灰黄 釉調：灰褐	肥前 1600～30 年代	写真図版 4-9-96 20110498
図 4-32-97 10002545	7B 区 表土	染付磁器 碗	9.9*	3.7	4.9	胎土：灰白	肥前 波佐見 18c 中頃～後半	写真図版 4-9-97 20110499
図 4-32-98 10002547	7B 区 表土	染付磁器 碗	11.0*	4.0*	5.6	胎土：灰白	肥前 18c 前半～中頃 内面蛇の目釉剥ぎ	写真図版 4-9-102 20110500
図 4-32-99 10002540	7B 区 表土	染付磁器 皿	13.0*	8.4*	3.4	胎土：灰白	肥前 19c 前半 蛇の目凹形高台 内面目痕	写真図版 4-9-98 20110501
図 4-32-100 11000015	7C 区	染付磁器 小碗	6.0	2.6	3.25	胎土：灰白	肥前 19c 前半	写真図版 4-9-99 20110502
図 4-32-101 11000013	7C 区	陶器 皿	-	3.9*	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半～18c 前半	写真図版 4-9-100 20110503
図 4-32-102 11000014	7C 区	白磁 碗	-	3.8*	-	胎土：灰白	肥前か 18c 末か	写真図版 4-9-101 20110504
図 4-32-103 11000016	7C 区	染付磁器 碗	10.6*	4.5	5.2	胎土：灰白	肥前 18c 中頃～後半 内面蛇の目釉剥ぎ	写真図版 4-9-107 20110505
図 4-32-104 11000012	7C 区	白磁 碗	-	4.0	-	胎土：灰白	肥前 18c 前半～中葉	写真図版 4-9-103 20110506
図 4-32-105 11000021	7C 区	土師器 小皿	6.6	3.2	1.2	浅黄橙	底部糸切	写真図版 4-9-104 20110507
図 4-32-106 10002576	7C 区 検出面	青花 皿	-	3.8	-	胎土：灰白	景德鎮窯系皿小野 B1 群 16c 後半～17c 初頭	写真図版 4-9-105 20110508・509
図 4-32-107 11000031	7C 区 検出面	白磁 皿	11.0*	4.4*	2.6	胎土：灰白	森田 D 群か	写真図版 4-9-106 20110510
図 4-32-108 11000032	7C 区 検出面	白磁 皿	-	3.9*	2.1	胎土：灰白	森田 E 群 高台内露胎	写真図版 4-9-108 20110511
図 4-32-109 10002575	7C 区 検出面	青花 皿	-	6.2*	-	胎土：淡黄 釉調：明オリブ灰	福建系 小野 C 群 16c 後半	写真図版 4-9-109 20110512・513
図 4-32-110 10002577	7C 区 検出面	青花 碗	-	5.2	-	胎土：灰白	福建系 16c 後半 内面見込み・畳付から高台内露胎	写真図版 4-9-110 20110514・515
図 4-32-111 11000033	7C 区 検出面	白磁 皿	-	3.9*	-	胎土：灰白	森田 D 群	写真図版 4-9-111 20110516・517
図 4-32-112 11000035	7C 区 表土	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白 釉調：オリブ灰	竜泉窯系椀上田 D 類	写真図版 4-10-112 20110518
図 4-32-113 11000034	7C 区 表土	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系椀上田 C 類	写真図版 4-10-113 20110519
図 4-32-114 11000036	7C 区 検出面	青磁 碗	-	6.2*	-	胎土：灰白 釉調：オリブ黄	竜泉窯系	写真図版 4-10-114 20110520・521
図 4-32-115 11000037	7C 区 検出面	青磁 碗	15.7*	-	-	胎土：灰白 釉調：オリブ黄	竜泉窯系 椀 II bc 類	写真図版 4-10-115 20110522
図 4-32-116 11000038	7C 区 検出面	青磁 碗	-	5.4	-	胎土：橙	竜泉窯系 高台内露胎	写真図版 4-10-116 20110523
図 4-32-117 11000006	7C 区 検出面	染付磁器 瓶	2.6	-	-	胎土：灰白	肥前 19c 代	写真図版 4-10-117 20110524
図 4-32-118 11000003	7C 区 検出面	染付磁器 皿	-	8.0	-	胎土：灰白	有田か 18c 前半	写真図版 4-10-118 20110525・526
図 4-32-119 11000005	7C 区 検出面	色絵磁器 皿	-	11.5*	-	胎土：灰白	肥前 1650 年代	写真図版 4-10-119 20110527
図 4-32-120 11000002	7C 区 検出面	染付磁器 皿	13.6*	5.5*	3.2	胎土：灰白	肥前 17c 前半	写真図版 4-10-120 20110528
図 4-33-121 11000007	7C 区 検出面	青磁 火入	10.3*	胴部径 10.2*	-	胎土：灰白 釉調：明オリブ灰	肥前 18c	写真図版 4-10-123 20110529
図 4-33-122 11000008	7C 区 検出面	染付磁器 碗	6.9*	3.9*	5.5	胎土：灰白	波佐見 19c 前半	写真図版 4-10-121 20110530
図 4-33-123 11000009	7C 区 検出面	染付磁器 碗	10.2*	4.4*	5.2	胎土：にぶい黄橙	波佐見 18c 中頃～後半	写真図版 4-10-122 20110531
図 4-33-124 11000010	7C 区 検出面	染付磁器 碗	12.5*	-	-	胎土：白	肥前 17c 後半	写真図版 4-10-124 20110532
図 4-33-125 11000019	7C 区 検出面	染付磁器 碗	8.5	3.45	4.5	胎土：灰白	肥前 18c 末～19c 前半	写真図版 4-10-125 20110533
図 4-33-126 11000018	7C 区 検出面	染付磁器 碗	10.0*	4.15	4.6	胎土：灰白	肥前 18c 前半～中頃	写真図版 4-10-126 20110534
図 4-33-127 11000017	7C 区 検出面	染付磁器 碗	10.0	4.2	5.0	胎土：灰白	有田 1710～1750 年代	写真図版 4-10-127 20110535

表4-1 7区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図4-33-128 11000039	7C区 検出面	陶器 碗	9.2*	-	-	胎土：灰白 釉調：淡黄	関西系色絵陶器 18c代	写真図版4-10-128 20110536
図4-33-129 11000041	7C区 検出面	陶器 碗	9.5*	4.6	6.3	胎土：灰	肥前 17c後半	写真図版4-10-130 20110537
図4-33-130 11000040	7C区 検出面	陶器 碗	13.2*	5.4*	5.6	胎土：灰白 釉調：淡黄	肥前 17c後半 玉子手	写真図版4-10-131 20110538
図4-33-131 11000043	7C区 検出面	陶器 火入	12.0*	6.3*	5.9	胎土：橙	肥前 17c後半 二彩手	写真図版4-10-129 20110539
図4-33-132 11000044	7C区 検出面	陶器 皿	-	4.5	-	胎土：灰白 釉調：灰オリーブ	肥前 1590～1610年代 絵唐津	写真図版4-10-132 20110540・541
図4-33-133 11000045	7C区 検出面	陶器 皿	13.7*	4.5	3.5	胎土：灰白 釉調：灰黄	肥前 1610～30年代 内面見込み目痕3箇所	写真図版4-10-133 20110542
図4-33-134 11000022	7C区 検出面	土師器 小皿	6.9	4.9	1.2	浅黄橙	底部糸切 油煤付着	写真図版4-10-136 20110543
図4-33-135 11000030	7C区 検出面	土師器 小皿	6.5	4.1	1.1	にぶい橙	底部糸切 油煤付着 底部穿孔	写真図版4-10-141 20110544
図4-33-136 11000047	7C区 検出面	陶器 小杯	6.6	3.6	3.5	胎土：灰白 釉調：明黄褐	内野山 17c末～18c前半	写真図版4-10-142 20110545
図4-33-137 11000023	7C区 検出面	土師器 杯	10.0*	5.0	3.0	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版4-10-134 20110546
図4-33-138 11000029	7C区 検出面	土師器 杯	-	9.6	-	淡黄	底部糸切	写真図版4-10-137 20110547
図4-33-139 11000024	7C区 検出面	土師器 杯	14.1*	9.9*	2.9	橙	底部糸切 板状圧痕	写真図版4-10-138 20110548
図4-33-140 11000020	7C区 検出面	瓦質土器 鍋	31.2	22.9	5.0	にぶい黄褐	煤付着	写真図版4-10-135 20110549
図4-33-141 11000026	7C区 検出面	瓦質土器 鍋	-	-	-	橙		写真図版4-10-143 20110550
図4-33-142 11000027	7C区 検出面	瓦質土器 茶釜	-	-	-	橙・黒	煤付着	写真図版4-10-139 20110551
図4-33-143 11000028	7C区 検出面	瓦質土器 鍋	-	-	-	外：黒褐 内：灰黄	煤付着	写真図版4-10-140 20110552
図4-33-144 11000025	7C区 検出面	瓦質土器 鍋	-	-	-	黄灰		写真図版4-10-144 20110553
図4-34-145 11000050	7C区 検出面	陶器 播鉢	-	-	-	胎土：黒褐 釉調：暗褐	肥前 17c中頃	写真図版4-11-145 20110554
図4-34-146 11000051	7C区 検出面	陶器 皿	25.8*	10.6	6.9	胎土：赤褐	肥前 17c後半～18c初 二彩手 内面見込み砂目痕	写真図版4-11-146 20110555
図4-34-147 11000049	7C区 検出面	陶器 播鉢	34.5*	-	-	胎土：にぶい橙 釉調：黒褐	肥前 18・19c代	写真図版4-11-147 20110556
図4-34-148 11000048	7C区 検出面	陶器 鍋	-	7.0	7.1	胎土：灰白 釉調：黄橙	関西系軟質施釉陶器 18・19c 煤付着 底部「無害」の刻印	写真図版4-11-148 20110557
図4-34-149 11000042	7C区 表土	陶器 碗	-	4.8*	-	胎土：にぶい橙 釉調：オリーブ	肥前 1580～1610年代	写真図版4-11-149 20110558
図4-34-150 11000046	7C区 表土	陶器 灯明具	7.8	3.0	2.5	外：橙 内：にぶい赤褐	肥前 17c後半～18c代 油煤付着	写真図版4-11-150 20110559
図4-34-151 11000011	7C区 表土	染付磁器 碗	9.9	4.9	5.7	胎土：灰白	肥前 18c末～19前半	写真図版4-11-151 20110560
図4-34-152 11000004	7C区 表土	染付磁器 皿	12.4	4.5	3.5	胎土：灰白	波佐見 18c中頃～後半 内面蛇の目釉剥ぎ	写真図版4-11-152 20110561
図4-34-153 11000001	7C区 表土	染付磁器 皿	13.6*	7.5*	3.3	胎土：灰白	肥前 17c末～18c前半	写真図版4-11-153 20110562
図4-34-154 10002044	7I区 SK7018	染付磁器 猪口	-	-	-	胎土：灰白	肥前 18c末～19c前半	写真図版4-11-154 20110563・564
図4-34-155 10002042	7I区 SK7018	陶器 碗	-	5.1*	-	胎土：浅黄橙 釉調：明黄褐・黒褐	肥前 18c前半 内外面貫入	写真図版4-11-155 20110565
図4-34-156 10002043	7I区 SK7018	陶器 碗	-	3.4	-	胎土：灰白 釉調：浅黄・暗オリーブ褐	肥前 17c前半～18前半	写真図版4-11-156 20110566・0567
図4-34-157 10003105	7I区 SK7018	青銅製品 キセル雁首	-	径 2.4	-	-	竹製羅字残存 径は雁首の最大径	写真図版4-11-157 20110568・569
図4-34-158 10002046	7I区 SK7019	瓦質土器 鍋	-	-	-	にぶい褐・黒褐	煤付着	写真図版4-11-159 20110570・571
図4-34-159 10002047	7I区 SK7019	瓦質土器 鍋	-	-	-	灰白		写真図版4-11-158 20110572

表 4-1 7 区出土遺物一覧

挿図 - 番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 4-34-160 10002050	7I 区 SK7020	白磁 灯芯押	長 3.9+	幅 2.9	-	胎土：白 釉調：明緑灰	肥前 1630～50年代	写真図版 4-11-160 20110573・574
図 4-34-161 10002049	7I 区 SK7020	陶器 碗	11.5	4.1	4.1	胎土：灰白 釉調：浅黄・オリーブ褐	肥前 1690～18c前半	写真図版 4-11-161 20110575・576
図 4-34-162 10002051	7I 区 SK7020	陶器 火入	-	6.2	-	胎土：明赤褐 釉調：にぶい赤褐	肥前 17c末～18c前半	写真図版 4-11-162 20110577
図 4-35-163 10003106	7I 区 1tr 11 層	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	写真図版 4-11-163 20110578
図 4-35-164 10002027	7I 区 1tr 11 層	染付磁器 鉢	-	4.2*	-	胎土：白	肥前 17c前半	写真図版 4-11-164 20110579
図 4-35-165 10002023	7I 区 1tr 11 層	染付磁器 碗	11.4*	4.6*	5.1	胎土：白 釉調：明緑灰・暗青灰	肥前 17c前半 内面見込み蛇の目釉剥ぎ	写真図版 4-11-165 20110580
図 4-35-166 10002019	7I 区 1tr 12 層	土師器 小皿	8.2	3.9	1.7	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-11-166 20110581
図 4-35-167 10002054	7I 区 1tr 13 層	土師器 小皿	9.8*	3.8*	2.2	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-11-167 20110582
図 4-35-168 10002055	7I 区 1tr 13 層	土師器 小皿	8.0	4.9	1.6	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-11-168 20110583
図 4-35-169 10002053	7I 区 1tr 13 層	染付磁器 皿	12.8*	5.0*	3.1	胎土：灰白 釉調：灰白・暗オリーブ		写真図版 4-11-169 20110584・585
図 4-35-170 10002057	7I 区 1tr 13 層	瓦質土器 播鉢	-	-	-	-	煤付着	写真図版 4-11-170 20110586・587
図 4-35-171 10002025	7I 区 1tr 8 層	染付磁器 皿	-	3.7	-	胎土：灰白 釉調：浅黄・暗灰黄	肥前 17c後半～18c前半 内外面細かい貫入	写真図版 4-12-171 20110588・589
図 4-35-172 10002026	7I 区 1tr 8 層	染付磁器 皿	14.6*	7.6*	2.7	胎土：灰白 釉調：明緑灰・暗青灰	肥前 1630～50年代 内外面細かい貫入	写真図版 4-12-172 20110590・591
図 4-35-173 10002029	7I 区 1tr 9 層	瓦質土器 鍋	23.4*	-	-	外：にぶい黄橙・黒 内：灰黄褐・黒褐	煤付着	写真図版 4-12-173 20110592
図 4-35-174 10002020	7I 区 1tr 13 層	土師器 小皿	5.2*	2.7*	2.1	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-12-174 20110593
図 4-35-175 10002024	7I 区 1tr 3 層	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白 釉調：灰オリーブ	竜泉窯系	写真図版 4-12-175 20110594
図 4-35-176 10002074	7J 区 SK7022	土師器 皿	16.6*	10.6*	3.3	明赤褐・橙	底部糸切	写真図版 4-12-176 20110595
図 4-35-177 10002073	7J 区 SK7022	陶器 碗	-	-	-	胎土：灰白 釉調：灰白	肥前 17c代 内外面細かい貫入	写真図版 4-12-177 20110596
図 4-35-178 10002083	7J 区 SK7023	土師器 皿	8.6*	6.7*	1.4	にぶい橙	底部糸切	写真図版 4-12-180 20110597
図 4-35-179 10002079	7J 区 SK7023	土師器 皿	13.2*	10.4*	2.3	明褐灰	底部糸切 板状圧痕	写真図版 4-12-179 20110598
図 4-35-180 10002082	7J 区 SK7023	土師器 皿	13.2*	-	10.0*	橙・にぶい赤褐	底部糸切	写真図版 4-12-181 20110599
図 4-35-181 10002080	7J 区 SK7023	土師器 皿	12.9*	7.2*	2.6	にぶい橙・にぶい褐	底部糸切	写真図版 4-12-178 20110600
図 4-35-182 10002081	7J 区 SK7023	土師器 皿	-	8.6*	-	にぶい橙・橙	内面螺旋状沈線 底部糸切	写真図版 4-12-183 20110601・602
図 4-35-183 10002084	7J 区 SK7023	瓦質土器 播鉢	-	-	-	褐灰・灰黄褐	17c代	写真図版 4-12-182 20110603・604
図 4-35-184 10002060	7J 区 P 7072	瓦質土器 鉢	-	-	-	灰黄		写真図版 4-12-184 20110605・606
図 4-35-185 10002061	7J 区 P 7063	瓦質土器 鉢	-	-	-	灰		写真図版 4-12-185 20110607
図 4-35-186 10002089	7J 区 P7135	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白 釉調：オリーブ灰	竜泉窯系	写真図版 4-12-187 20110608
図 4-35-187 10002062	7J 区 P 7161	土師器 鍋	-	-	-	にぶい橙		写真図版 4-12-186 20110609・610
図 4-35-188 10002085	7J 区 P7148	陶器 碗	9.8*	3.4	4.9	胎土：浅黄橙	肥前 18c前半	写真図版 4-12-189 20110611
図 4-35-189 10002086	7J 区 P7148	陶器 皿	-	4.6	-	胎土：にぶい橙・灰褐 釉調：灰黄褐	肥前 1610～30年代 内面見込み3箇所の砂目痕	写真図版 4-12-190 20110612・613
図 4-35-190 10002065	7J 区 P7148	瓦質土器 火鉢	-	-	-	黄灰・にぶい橙		写真図版 4-12-191 20110614・615
図 4-36-191 10002091	7J 区 P7172	染付磁器 碗	9.8*	-	4.6	胎土：明緑灰	波佐見 18c前半	写真図版 4-12-188 20110616

表4-1 7区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 4-36-192 10002059	7J 区 P7172	瓦質土器 火鉢	-	胴部径 23.8	-	にぶい黄橙		写真図版 4-12-192 20110617
図 4-36-193 10002096	7J 区 P7193	土師器 皿	-	8.3*	-	にぶい橙・橙	底部糸切 板状圧痕	写真図版 4-12-193 20110618・619
図 4-36-194 10002064	7J 区 P 7197	瓦質土器 火鉢	17.9*	-	-	にぶい橙・黒褐		写真図版 4-12-194 20110620
図 4-36-195 10002092	7J 区 P 7197	染付磁器 碗	10.5*	6.0	6.3	胎土：灰白	肥前 1780～1810 年代	写真図版 4-12-195 20110621・622
図 4-36-196 10002095	7J 区 P 7197	染付磁器 猪口	-	6.3	-	胎土：灰白	肥前 18c 後半 蛇の目凹形高台	写真図版 4-12-196 20110623・624
図 4-36-197 10002093	7J 区 P 7197	染付磁器 仏飯器	6.2*	3.8	5.9	胎土：灰白	肥前 18c 後半～19c 前半	写真図版 4-12-197 20110625
図 4-36-198 10003073	7K 区 P7232	陶器 灯明皿	7.8*	3.0*	2.2	胎土：にぶい赤褐 釉調：赤灰	肥前養屋 17c 後半～18c 前半	写真図版 4-12-198 20110626・627
図 4-36-199 10003077	7K 区 P7239	土師器 小皿	6.2*	4.0*	1.2	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-12-199 20110628
図 4-36-200 10003076	7K 区 P7239	土師器 小皿	-	4.1	-	にぶい橙	底部糸切 板状圧痕	写真図版 4-12-200 20110629
図 4-36-201 10003078	7K 区 攪乱	弥生土器 甕	-	9.0	-	外：にぶい黄橙・にぶい橙 内：にぶい黄橙	煤付着	写真図版 4-13-202 20110630・661
図 4-36-202 10003079	7L 区 2tr	石製品 硯	長 5.8+	幅 6.0	厚 1.9	暗赤褐	輝緑凝灰岩 裏面に「赤間□」の線刻有 (□は不明)	写真図版 4-12-201 20110631・632
図 4-36-203 10003080	7L 区 2tr	土師器 皿	12.0*	8.0*	3.6	にぶい橙	底部糸切	写真図版 4-13-203 20110633
図 4-36-204 10003086	7L 区 1tr	瓦器 鍋	-	-	-	外：黄灰・黒 内：灰	煤付着	写真図版 4-13-204 20110634・635
図 4-36-205 10003083	7L 区 2tr	染付磁器 碗	-	-	-	胎土：白 釉調：明青灰	景德鎮窯系 16c 後半～17c 前半	写真図版 4-13-205 20110636・637
図 4-36-206 10003087	7L 区 1tr	瓦質土器 茶釜	-	-	-	黒褐・褐灰	煤付着	写真図版 4-13-206 20110638
図 4-36-207 10003085	7L 区 2tr 4 層	土師器 鍋	-	-	-	外：黒 内：灰黄褐	煤付着	写真図版 4-13-207 20110639
図 4-36-208 10003082	7L 区 3tr 2 層	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰 釉調：灰オリーブ	竜泉窯系上田 B IV 類	写真図版 4-13-208 20110640
図 4-37-209 10003102	7M 区 1tr 1 層	染付磁器 碗	8.8*	-	3.6	胎土：白 釉調：明緑灰	肥前 19c 前半	写真図版 4-13-209 20110641
図 4-37-210 10003090	7M 区 2tr	白磁 小碗	6.6	2.4	3.4	胎土：白 釉調：灰白	高台見込みに付着物	写真図版 4-13-210 20110642
図 4-37-211 10003091	7M 区 2tr	白磁 小碗	6.9	2.9	4.1	胎土：灰白 釉調：明緑灰	内面見込みに付着物	写真図版 4-13-211 20110643
図 4-37-212 10003096	7M 区 2tr	土師器 小皿	6.7	4.6	1.0	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 4-13-214 20110644
図 4-37-213 10003093	7M 区 2tr	土師器 小皿	6.2*	3.8*	1.1	橙	底部糸切	写真図版 4-13-215 20110645
図 4-37-214 10003097	7M 区 2tr	土師器 小皿	6.2	3.8	1.5	にぶい橙	底部糸切	写真図版 4-13-212 20110646
図 4-37-215 10003095	7M 区 2tr	土師器 小皿	7.8*	4.6	1.8	にぶい橙	底部糸切	写真図版 4-13-213 20110647
図 4-37-216 10003100	7M 区 4tr 1 層	土師器 小皿	5.6*	3.6	1.0	にぶい橙	底部糸切	写真図版 4-13-216 20110648
図 4-37-217 10003118	7M 区 2tr	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.1g 古寛永	写真図版 4-13-217 20110649
図 4-37-218 10003109	7M 区 2tr 1 層	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 古寛永	写真図版 4-13-218 20110650
図 4-37-219 10003117	7M 区 2tr 1 層	銭貨 近代銭	-	径 2.4	-	-	1 銭 大正 10 年	写真図版 4-13-219 20110651
図 4-37-220 10003110	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	写真図版 4-13-220 20110652
図 4-37-221 10003111	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.7g 新寛永	写真図版 4-13-221 20110653
図 4-37-222 10003112	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 4-13-222 20110654
図 4-37-223 10003113	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 4-13-223 20110655

表 4－1 7 区出土遺物一覧

挿図 - 番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 4-37-224 10003114	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	写真図版 4-13-224 20110656
図 4-37-225 10003115	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 4-13-225 20110657
図 4-37-226 10003116	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.3g 古寛永	写真図版 4-13-226 20110658
図 4-37-227 10003108	7M 区 2tr 4・5 層	銭貨 銅銭・鉄銭	-	径 2.2	-	-	鉄銭 1 枚と寛永通寶 2 枚が錆着 8.1g(合計) 3 枚目は元字銭 布付着 径は 1 枚目の数値	写真図版 4-13-227 20110659
図 4-37-228 10003119	7M 区 3tr	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.1g 古寛永	写真図版 4-13-228 20110660

第5章 東畑瀬遺跡 6G 区

1 東畑瀬遺跡 6G 区の概要

東畑瀬遺跡 6G 区（宗源院跡）は、佐賀県佐賀市富士町大字関屋字鶴に所在する。

宗源院は玉林寺（佐賀市大和町）の末寺で、戦国武将神代勝利の菩提寺である。寺の北西に隣接して神代勝利の墓、小城支藩の神代家一族や歴代住職の墓がある墓地（東畑瀬遺跡 9 区）が付随する。寺は嘉瀬川ダム建設に伴い佐賀市大和町に移築されているが、銘文に「天和三」（1683 年）、「佐賀郡安富庄畑瀬山宗源禅院」とある半鐘が現存する。また、寺に残る宗源院文書には文化年間に大規模な寺地整備が行われたことが記されている。

神代勝利は、江戸時代にまとめられた『神代家伝記』や『北肥戦誌』などによれば、三瀬宗利の提唱により山内の小領主をまとめて総大将となり、主に三瀬城を拠点として戦国時代に活躍し、後世にまで山内の英雄として親しまれている。佐賀市富士町・三瀬村を中心とする地域がその勢力下であり、ほぼ同じ時期に佐賀で勢力を伸ばしつつあった龍造寺隆信とは戦いと和睦を繰り返す関係にあった。永禄 7（1564）年に家督を子の長良に譲り、隠居所として畑瀬に城を築いたとされるが、翌永禄 8 年に畑瀬城で没している。宗源院は、勝利の生前に開基されたと伝えられる。長良は鍋島直茂の甥を養子としており、神代家は後に親類として佐賀鍋島藩の重臣となる。

6G 区は北西方向に延びる尾根の北東側斜面の山麓部、標高約 272 m の北に向かって開く谷部の奥まった部分に立地している（図 3-2・5-1）。調査区の北東側約 100 m には、神代勝利が築いたとされる畑瀬城のうち、館の部分にあたると推定される建物群などを確認した東畑瀬遺跡 6F 区（神代氏畑瀬館跡）が位置している。

調査の結果、整地（地業）層を挟んで重複する遺構面を 4 面確認した。上層から下層まで一連の土層図がないため、模式図的に南北方向の堆積状況を図示したが（図 5-2）、現地表面から約 0.25 m 下を第 1 面、その 0.7 ～ 0.9 m 下層を第 2 面、その 0.2 ～ 0.4 m 下層を第 3 面、その 0.2 ～ 0.4 m 下層を第 4 面とした。各面のうち、第 1・2 面は明確に面を把握することができたのに対し、第 3・4 面は遺構面を認識するのがやや困難であったが、整地層の厚さや土質に起因するものと思われる。なお、各面の整地層から出土した遺物については、1 面と 2 面の間を「1-2 面」、2 面と 3 面の間を「2-3 面」という要領で注記しており、この報告でも使用する。

第 1 面では、現存した本堂や庫裡とほぼ同規模の礎石建物などが確認され、現代とほぼ同じ構造の寺院であったことが推定される。整地層から出土した遺物などから 19 世紀代の遺構面と考えられ、文献に残る文化年間の寺域整備によって成立したものと推測される。

第 2 面では、建物は確認できなかったが、建物の区画とみられる石列や庭園遺構などを検出した。この面では、庭園遺構に改変が認められ、新旧 2 時期の玉砂利敷が重複していることから、造成を伴わないと思われる改修が少なくとも 1 回は行われていることが確認できる。出土遺物から 18 世紀代の遺構面と考えられる。

第 3 面では、石組遺構、トイレ遺構などを確認したが、全体的な構造は不明な点が多い。出土遺物から 17 世紀後半代の遺構面と考えられる。

第 4 面では、掘立柱建物を構成すると思われる柱穴群、溝、石垣などを検出した。この面の下層にも整地層が認められるが、その下位において明確な遺構面が確認できなかったため、第 4 面が本格的な寺院として整備された最初の時期のものであると推定される。出土遺物から 16 世紀末～17 世紀前半代の遺構面と考えられる。

なお、現地では境内の現存する石垣を残したまま、第 4 面まで掘り下げて一度発掘調査を終了したが、調査後に石垣が崩壊する危険性があったので、掘削機により石垣を除去したところ、遺構と多数の遺物が出土したため、追加調査を行った。この部分を 6G 拡張区としたが、層位的な調査はできておらず、各遺構の状況などから遺構の所属時期を決め、元の調査区の遺構配置図と図面上で合成している。

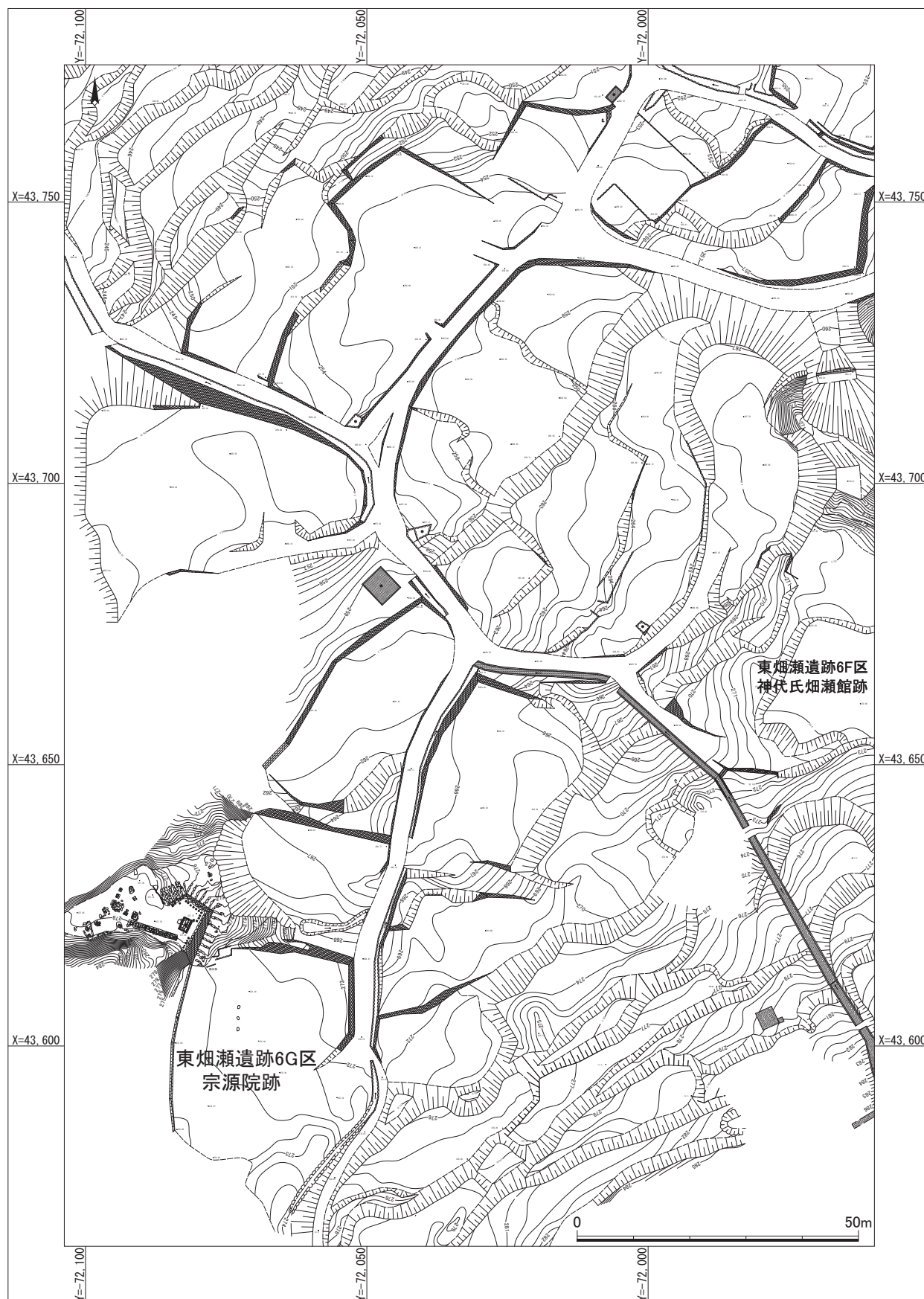


図 5 - 1 東畑瀬遺跡 6G 区周辺の地形 (1/1,000)

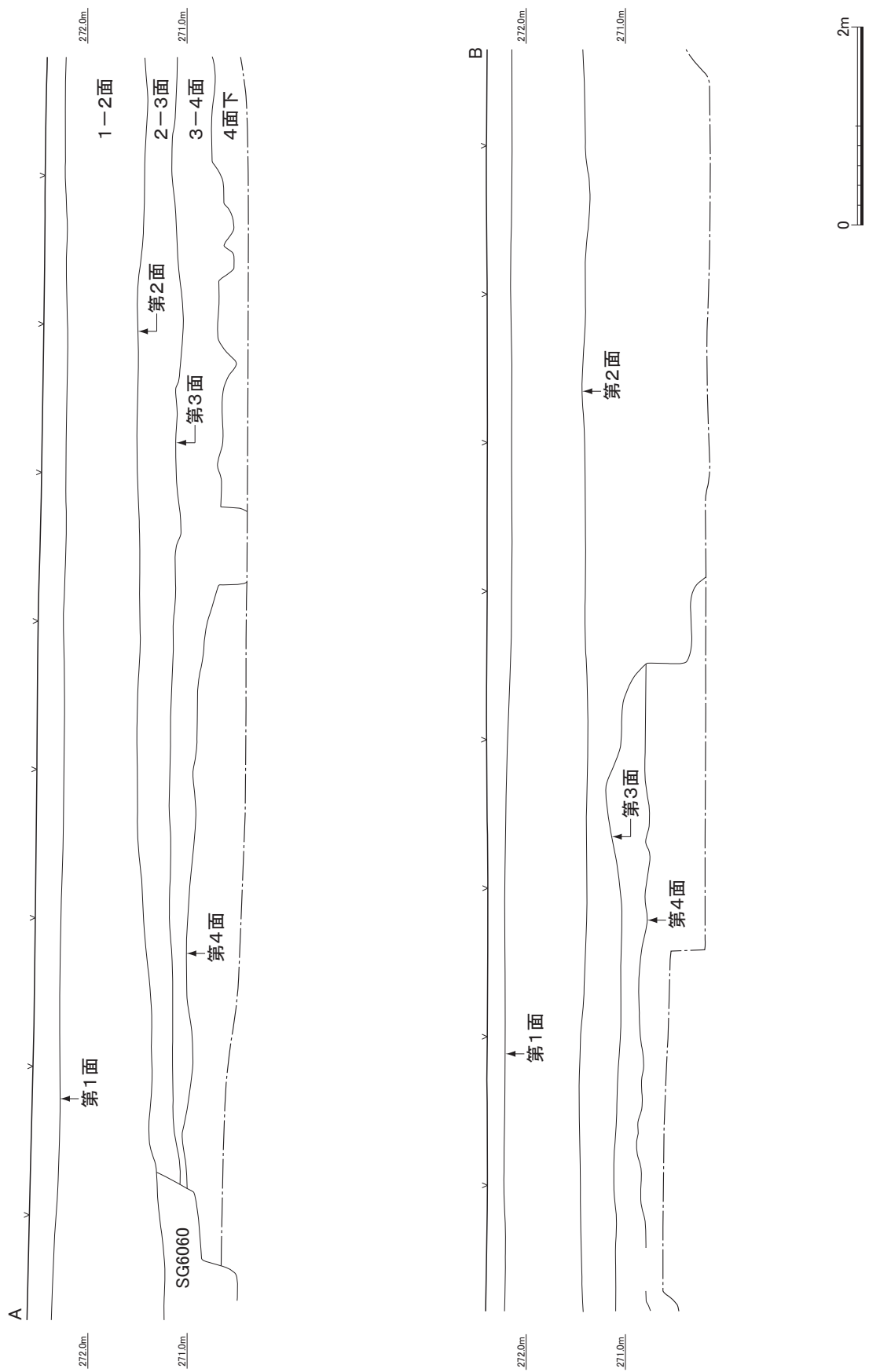


図5-2 6G区の土層 (1/60)

2 第1面の遺構と遺物

遺構

第1面の遺構としては、礎石建物2棟、溝2条、土坑2基などを確認した(図5-3)。礎石建物は、明治末頃に建立されたと推定されている移転前の本堂・庫裡とほぼ同じ構造であり、現存した建物の1段階古い建物であった可能性が高い。調査区南西部で確認された土坑2基(SX6070・6071)は、ほぼ同規模のものが並列しており、トイレであったと考えられる。その場合、移転前の建物配置で北側に位置した庫裡の北東側にトイレと風呂が設置されていたように、本堂に直接トイレが付随するとは思われないことから、移転前の配置とは逆に、北側のSB6012が本堂、南側のSB6013が庫裡であった可能性がある。SB6013には南側に母屋に付随する2間分の構造があるが、移転前の庫裡にも北側に1間半の下屋が付いており、建物の構造的にも同様である。

SB6012(図5-4)

調査区北部に位置する礎石建物で、主軸をN1°Eにとる南北棟の建物である。梁行3間×桁行4間で、柱間は6尺(1.98m)であり、床面積は47㎡である。内部に束柱となると思われる礎石や柱穴が認められ、西側には半間分の軒が付く可能性がある。南側にはSB6013と繋ぐ構造が2間分確認できる。

SB6013(図5-4)

調査区南部に位置する礎石建物で、主軸をN1°Eにとる南北棟の建物である。梁行3間×桁行4間の母屋の南側に2間分の軒が付き、柱間は6尺(1.98m)であり、床面積は軒の部分を含めると70.6㎡である。

遺物(図5-5・6)

1～3は第1面から出土した。1・2は肥前染付磁器碗で、1は端反形、2は丸形である。3は青銅製とみられる飾金具で、下面に径0.5cmの孔があり、表面に鳥を模した印刻が施される。

4～46は1～2面から出土したもので、第1面で使用されたものと第2面で使用されたものが含まれると考えられる。4～10は肥前陶器である。4は内野山窯の小杯で、鉄釉が施される。5は内野山窯と思われる碗で、外面に銅緑釉、内面に透明釉が施される。6は碗で、内面に鉄絵が施される。7は京焼風陶器皿で、内面に山水文と思われる文様が施され、高台内に「小松吉」の押印がある。8は内野山窯の可能性のある皿で、鉄釉が施され、内面見込みを蛇の目釉剥ぎしている。9は灯明皿である。10は播鉢で、全面に鉄釉が施される。11・12は関西系陶器で、11は灰釉を施した碗、12は内面に色絵が施された皿である。13は薩摩産とみられる陶器蓋、14は肥前陶器蓋である。15は関西系陶器土瓶で、鉄釉が施される。16は熊本産の可能性のある陶器土瓶で、灰釉が施される。17は関西系とみられる陶器鍋で、鉄釉が施される。

18～21は肥前白磁で、18が猪口、19が小碗、20が小碗で口鏝、21が碗である。22は肥前染付磁器蓋である。23～32は肥前染付磁器碗である。23～26は小広東形、27～30は丸形、31・32は広東形、33は端反形である。31・32は釉が白濁して文様が不鮮明であり、焼成不良によるものと考えられる。34・35は肥前色絵磁器碗、36は肥前色絵素地碗である。37は肥前青磁染付碗で、内面見込みに手描きの五弁花文を施し、口鏝である。38～41は肥前染付磁器小杯・猪口で、42は肥前染付磁器瓶である。43・44は肥前染付磁器皿で、43は平面形が扇形になるものとみられる。45・46は肥前染付磁器皿で、ほぼ同じ大きさ・文様のものである。

47～57は表面採集のものなどである。47～53は肥前陶磁器である。47は陶器皿で、平面は方形、高台は円形である。内面に竹が描かれる。48は染付磁器蓋付小鉢で、口縁部を釉剥ぎしている。49・50は色絵磁器で、49は外面に唇が書かれている。51は染付磁器蓋、52は磁器合子の身、53は染付磁器皿である。54～57は大



図5-3 第1面の遺構分布 (1/200)



図 5-4 第 1 面の遺構分布詳細 (1/125)



図5-5 第1面・1-2面の出土遺物（3は1/2、他は1/3）



図5-6 1-2面の出土遺物・表採の遺物 (1/3)

正から昭和の磁器で、55・57は瀬戸・美濃産、56は肥前産のものである。

以上の他に図示していない出土遺物として、土師器小皿、瓦質土器鍋・火鉢などがあり、また銭貨として寛永通宝・文久永宝とともに、宋銭（天禧通宝？・元豊通宝？）が出土した。

表5-1 6G区第1面・1-2面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-5-1 10001285	1 面	染付磁器 碗	10.1*	3.8	5.9	胎土：灰白	肥前 1820～50年代	5-3-1 20110295
図 5-5-2 10001279	1 面	染付磁器 碗	10.6*	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 後半～19c 初	5-3-2 20110344
図 5-5-3 11000166	1 面	青銅製品 飾金具	3.5	1.5	2.7		完形	5-3-3 20110696
図 5-5-4 10001981	1-2 面	陶器 小杯	8.0*	4.5*	4.7	胎土：灰白	内野山窯 17c 末～18c 前半	5-3-4 20110319
図 5-5-5 10001282	1-2 面	陶器 碗	10.8*	4.2	6.1	胎土：灰白	肥前 18c 前半	5-3-5 20110293
図 5-5-6 07001431	1-2 面	陶器 碗	12.4*	5.0	5.7	胎土：灰白	肥前 18c 前半	
図 5-5-7 07001433	1-2 面	陶器 皿	12.2*	5.0	4.2	胎土：灰白	肥前 17c 後半 「小松吉」	
図 5-5-8 10001980	1-2 面	陶器 皿	13.1*	4.4	3.7	胎土：灰白	内野山窯力 18c 前半	5-3-8 20110318
図 5-5-9 10001975	1-2 面	陶器 灯明皿	8.3	3.6	2.1	胎土：赤橙	肥前 18c ロクロ回転右回り	
図 5-5-10 10002504	1-2 面	陶器 播鉢	-	-	-	胎土：赤	肥前 18・19c	
図 5-5-11 07001427	1-2 面	陶器 碗	9.6*	2.8	5.3	胎土：灰白	関西系 18c	5-3-11 20110703
図 5-5-12 07001422	1-2 面	色絵陶器 皿	11.8*	3.6	4.1	胎土：灰白	関西系 18c 前半	5-3-12 20110702
図 5-5-13 10001982	1-2 面	陶器 蓋	9.1	5.8	3.5	胎土：明褐灰	薩摩力 19c	5-3-13 20110321
図 5-5-14 10002503	1-2 面	陶器 蓋	10.7*	8.6*	3.0	胎土：赤褐	肥前 18c	
図 5-5-15 10001983	1-2 面	陶器 土瓶	-	7.8*	-	胎土：灰白	関西系 19c	5-3-15 20110364
図 5-5-16 10001984	1-2 面	陶器 土瓶	-	6.7*	-	胎土：明赤褐	熊本力 19c	5-3-16 20110379
図 5-5-17 10001986	1-2 面	陶器 鍋	17.4*	-	-	胎土：灰白	関西系力 18・19c	5-3-17 20110365
図 5-5-18 10002502	1-2 面	白磁 猪口	-	5.2*	-	胎土：灰白	肥前 18c 前半	
図 5-5-19 10002496	1-2 面	白磁 小碗	8.6*	-	-	胎土：灰白	肥前 18c	5-3-19 20110382
図 5-5-20 10001316	1-2 面	白磁 小碗	9.1	2.4	5.0	胎土：灰白	有田 17c 後半 口錆	5-3-20 20110302
図 5-5-21 10002497	1-2 面	白磁 碗	10.3*	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半～18c 初	
図 5-5-22 10001308	1-2 面	染付磁器 蓋	10.8*	-	-	胎土：灰白	肥前 1770～1810年代	
図 5-5-23 10001278	1-2 面	染付磁器 碗	10.2	3.7	5.1	胎土：灰白	肥前 1770～90年代	5-3-23 20110290
図 5-5-24 10001303	1-2 面	染付磁器 碗	10.7*	-	-	胎土：灰白	肥前 1770～1810年代	5-3-24 20110354
図 5-5-25 10001305	1-2 面	染付磁器 碗	9.9*	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 後半～19c 初	5-3-25 20110356
図 5-5-26 10001306	1-2 面	染付磁器 碗	10.0*	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 後半～19c 初	5-3-26 20110357
図 5-5-27 10001307	1-2 面	染付磁器 碗	10.0*	-	-	胎土：灰白	肥前 19c 前半	5-3-27 20110358
図 5-5-28 10001314	1-2 面	染付磁器 碗	9.8*	3.8*	4.6	胎土：灰白	肥前 18c	5-3-28 20110301

表 5-1 6G 区第 1 面・1-2 面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-5-29 10001315	1-2 面	染付磁器 碗	10.2*	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 前半	5-3-29 20110376
図 5-5-30 10002499	1-2 面	染付磁器 碗	10.0*	4.1	5.7	胎土：灰白	肥前 18c 前半	5-3-30 20110328
図 5-5-31 10001280	1-2 面	染付磁器 碗	10.2*	5.5	5.6	胎土：灰白	肥前 19c 前半	
図 5-5-32 10001281	1-2 面	染付磁器 碗	10.5*	5.5	5.7	胎土：黄灰	肥前 19c 前半	5-3-32 20110292
図 5-5-33 10001311	1-2 面	染付磁器 碗	10.2*	-	-	胎土：灰白	肥前 19c 初～幕末	5-3-33 20110360
図 5-6-34 10001284	1-2 面	色絵磁器 碗	10.2	4.0	5.0	胎土：灰白	有田 18c 第 2・3 四半期	5-3-34 20110294
図 5-6-35 10002500	1-2 面	色絵磁器 碗	9.9*	4.3	5.7	胎土：灰白	肥前 1670～90 年代	5-3-35 20110329
図 5-6-36 10001304	1-2 面	色絵素地 碗	15.8*	-	-	胎土：灰白	肥前 1770～1810 年代	5-3-36 20110355
図 5-6-37 10002498	1-2 面	青磁染付 碗	9.1*	3.3	5.0	胎土：灰白	肥前 1690～1730 年代 口鏝	5-3-37 20110326・327
図 5-6-38 10001313	1-2 面	染付磁器 小杯	7.5*	3.5	5.4	胎土：灰白	肥前 17c 後半～18c 初	5-3-38 20110300
図 5-6-39 10001310	1-2 面	染付磁器 猪口	9.2*	4.6*	6.2	胎土：灰白	肥前 18c	5-3-39 20110299
図 5-6-40 10002501	1-2 面	染付磁器 猪口	5.8*	-	-	胎土：灰白	肥前 1690～1730 年代	5-3-40 20110383
図 5-6-41 10001309	1-2 面	染付磁器 小杯	-	3.1	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半	
図 5-6-42 10001319	1-2 面	染付磁器 瓶	3.9	-	-	胎土：灰白	肥前 19c	
図 5-6-43 10001283	1-2 面	染付磁器 小皿	-	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半	5-3-43 20110345
図 5-6-44 10001317	1-2 面	染付磁器 皿	10.6*	6.7*	2.1	胎土：灰白	肥前 1780～1810 年代	5-3-44 20110361
図 5-6-45 10001287	1-2 面	染付磁器 皿	14.5	9.1	4.1	胎土：灰白	肥前 18c 後半	5-3-45 20110278
図 5-6-46 10001286	1-2 面	染付磁器 皿	14.6	9.3	4.3	胎土：灰白	肥前 18c 後半	5-3-46 20110279
図 5-6-47 10002495	表採	陶器 皿	12.7	6.2	5.3	胎土：灰白	肥前 17c 末～18c 前半	5-3-47 20110337
図 5-6-48 10002491	表採	染付磁器 蓋付小鉢	9.3*	5.1*	5.0	胎土：灰白	肥前 19c 初～幕末	
図 5-6-49 10002492	表採	色絵磁器 碗	10.4*	4.8*	6.5	胎土：灰白	肥前 18c 後半～19c 初	5-3-49 20110324
図 5-6-50 10002494	表採	色絵磁器 段重	12.7	7.3	5.4	胎土：灰白	肥前 1780～1820 年代	
図 5-6-51 10001263	表採	染付磁器 蓋	6.3	7.9	1.0	露胎部：灰白	肥前 幕末前後	
図 5-6-52 10001318	1-2 面	白磁 合子身	6.1	3.1	2.1	胎土：灰白	肥前 19c 後半	
図 5-6-53 10002493	表採	染付磁器 皿	10.9	6.3	3.3	胎土：灰白	肥前 1820～60 年代	
図 5-6-54 10001262	表採	白磁 杯	5.0*	2.0*	2.8	胎土：灰白	昭和 「晋山結制記念 清流寺」	
図 5-6-55 10001261	表採	染付磁器 皿	10.7	6.4	2.0	胎土：灰白	瀬戸・美濃 大正前後	
図 5-6-56 10001257	表採	色絵磁器 碗	11.2	4.0	5.3	露胎部：灰白	肥前 昭和	
図 5-6-57 10001258	表採	色絵磁器 碗	12.3	4.5	5.6	胎土：灰白	瀬戸・美濃 昭和	

3 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構としては、庭園遺構、石列、玉砂利敷、溝などを確認した（図5-7）。この面には、造成土が明確ではない全面的な改修が認められ、部分的に古い時期の遺構（SG6060・SX6062など）が残っている。

改修後の新しい時期には、調査区中央に位置する直角に曲がるSX6018石列など真北に近い方位とそれと直交する石列が確認されることから、これらの石列によって建物区画が形成されていたものと推定される（図5-8）。区画内部の検出面には焼土の広がり認められた。区画北部に位置する玉砂利を約0.7×1.2mの範囲に敷き詰めたSX6016は手洗いなど水に関連する遺構と思われる。また、調査区西部に位置する0.1～0.6mの小型の石材を南北方向に並べたSX6015は建物に付随する花壇などの機能が考えられる。建物については、礎石建物の存在が考えられるが、礎石がほとんど確認できなかったため、確実に検出することはできなかったが、石列の方向などから第1面と同じく、真北を意識した主軸の建物であったとみられる。また、調査区南部には築山を伴った庭園遺構が検出された。

改修以前の遺構は、部分的にしか残存しておらず、全体像は不明であるが、玉砂利を長さ5.6m、幅0.5mの範囲に敷き詰めたSX6062の方位が上位の石列とほぼ同じである点やSG6060の状況などから、改修後の新しい時期とほぼ同じような構造であったことが推測される。

調査区北東部で確認された石列（図5-9）は、多くが第2面造成時に土留めのために設置されたものと考えられるが、北東端で確認されたSX6092は境内外郭の石垣、SX6066が古い時期の区画の石積であった可能性がある。調査区南部には、後方の山からの山崩れなどによるものと思われる石が散乱している。

庭園遺構（図5-10・11）

調査区南部に位置し、池と築山などからなる庭園遺構とみられる。改修によりSG6060から築山（SX6079）を伴うSG6061に作りかえられている。

SG6060は素掘りの池で、北西隅が検出されたが、全体の規模については不明である。北西隅の平面形は丸みを帯びながら直角に曲がる形状で、真北を意識した掘形であると考えられる。検出面から約0.5mの深さに、幅0.25～0.7mのテラス状の部分があり、さらにそのテラスから約0.4m掘り下げている。

改修の際にSG6060は黄色系統の砂（5・6層）で埋め立てられた後、その上位にSG6061などが構築されている。その改修時の祭祀に関連するとみられる遺構が、土師器小皿を12点まとめて廃棄したと思われるSX6057である。SG6061を構成する石列のほぼ真下から検出され、ほとんどの小皿は完形品であるが、1点のみ二つに割れた状態で出土している。

SG6061は石囲いの池で、SX6079を伴う。SX6079の北西隅より東側約3.5mのところから北に向かって石列が始まり、径約4.0mの円弧状に石材が並ぶが、長さ約6mまでは石材が確認できるものの、その東側の延長は攪乱を受けたためか、明確ではない。土層からみると、深さ0.35mである。SX6079は直角に曲がる石積で、築山と考えられる。北西隅から東に約4.5mまで石積が確認されるが、その延長は攪乱のためか不明であり、南へ向かう石積は北西隅から約2.3mまで確認でき、その延長は調査区外に続いている。大きさ0.3～1.1mのおおよそ長方体の石材を1～2段積み上げているが、本来の高さは不明である。

庭園や池の全体の構造などは明確にできないが、写真で見ると、SG6060を埋め立てた黄色系統の砂が調査区南部に分布している状況が認められるので（写真図版5-5）、調査区東部で確認されたSX6090石列まで含めて構造を考える必要があるだろう。恐らく、庭園遺構西方の谷筋にある流路から水を引き込んで、池としたことが推測される。

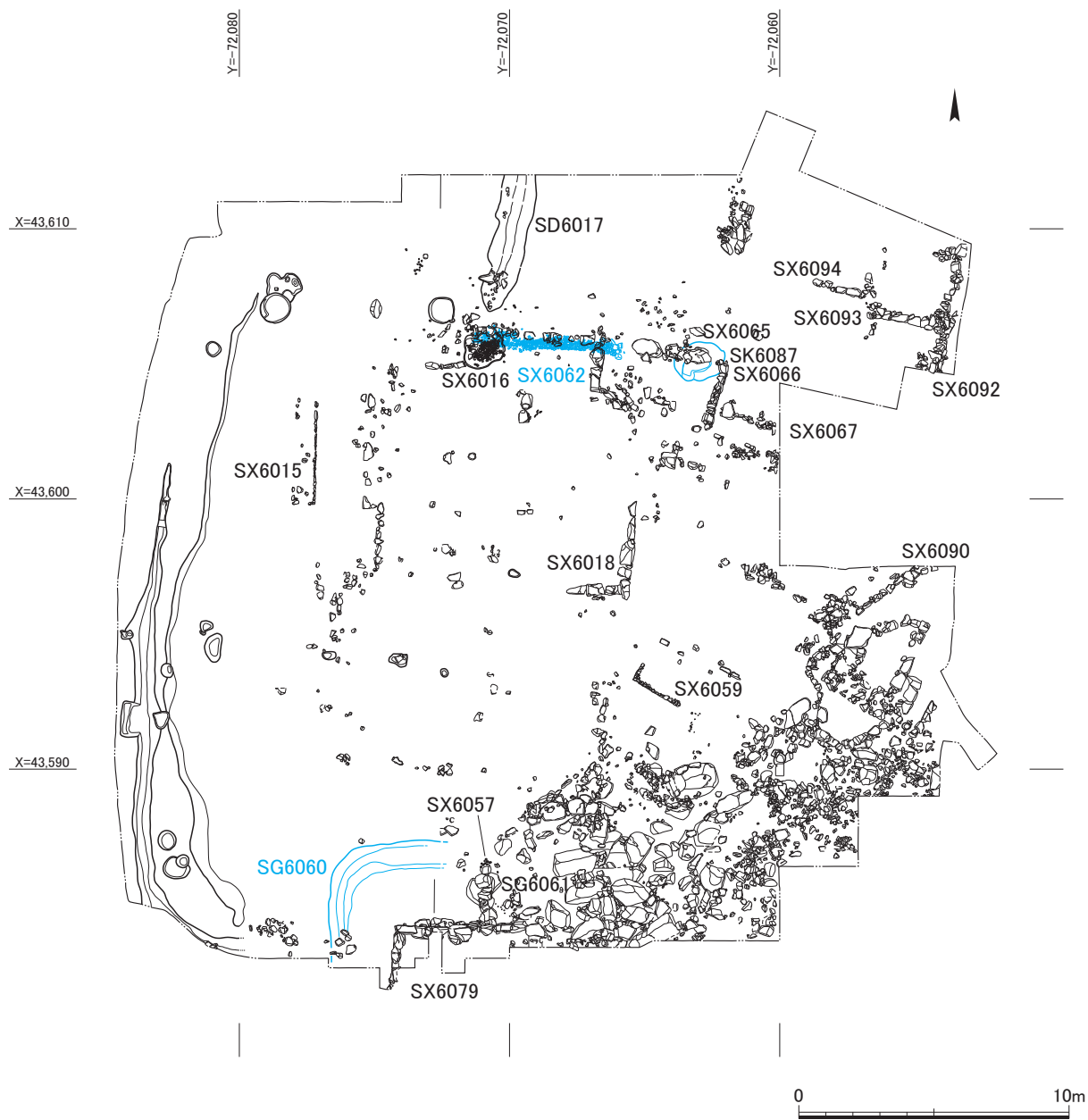


図5-7 第2面の遺構分布 (1/250)

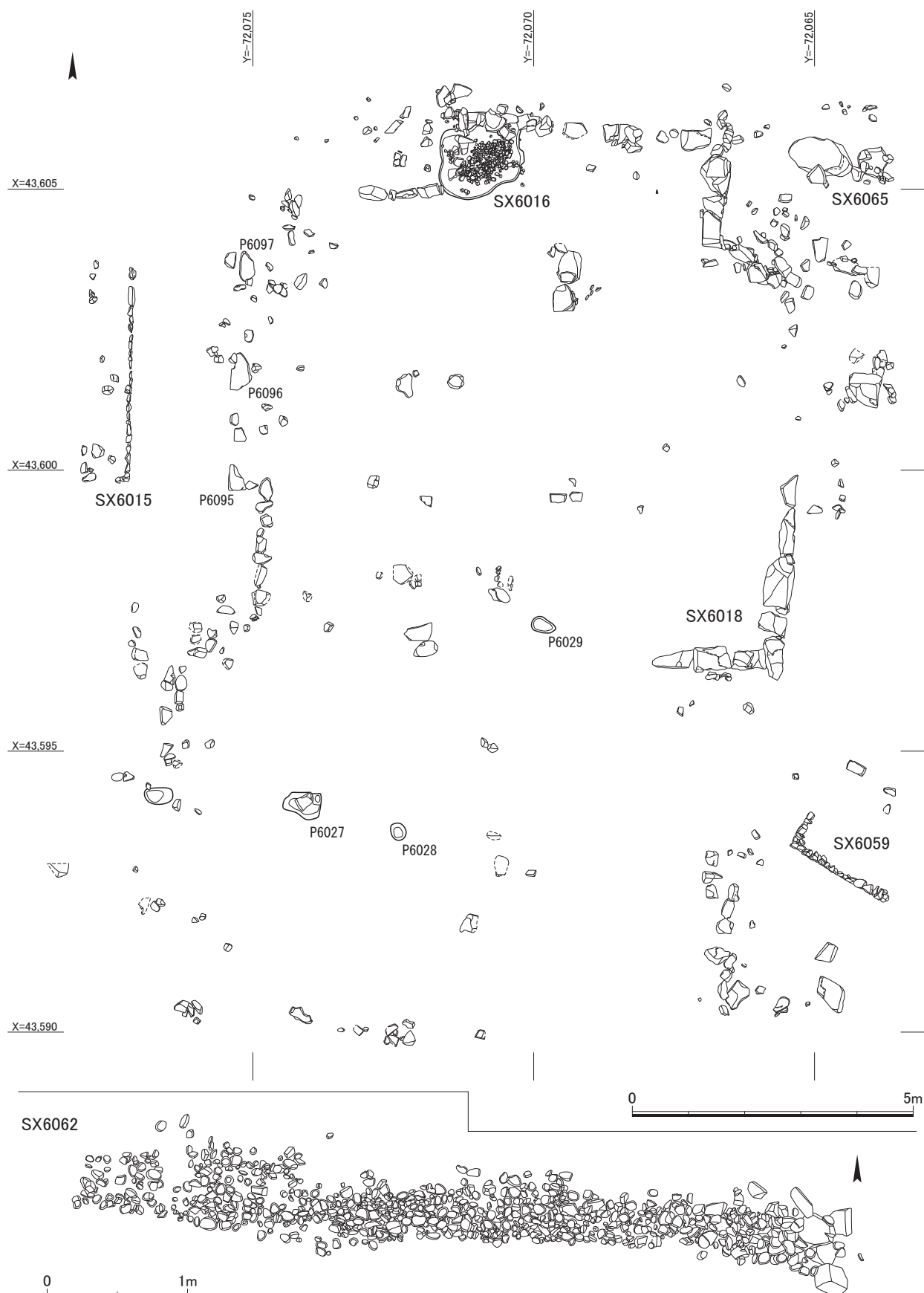


図5-8 第2面の建物区画 (1/100)、SX6062 (1/40)

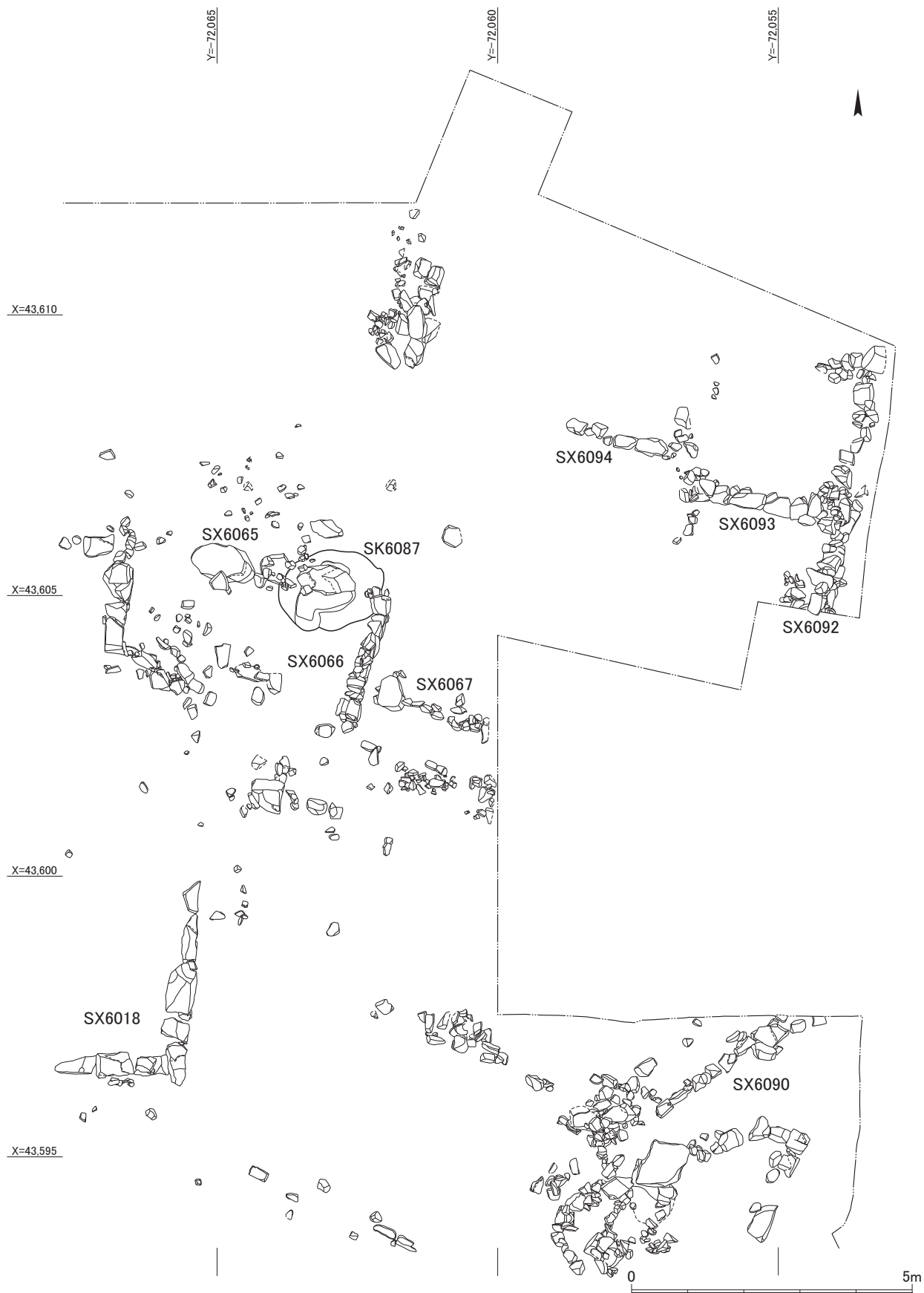


図5-9 第2面北東部の遺構分布詳細 (1/100)

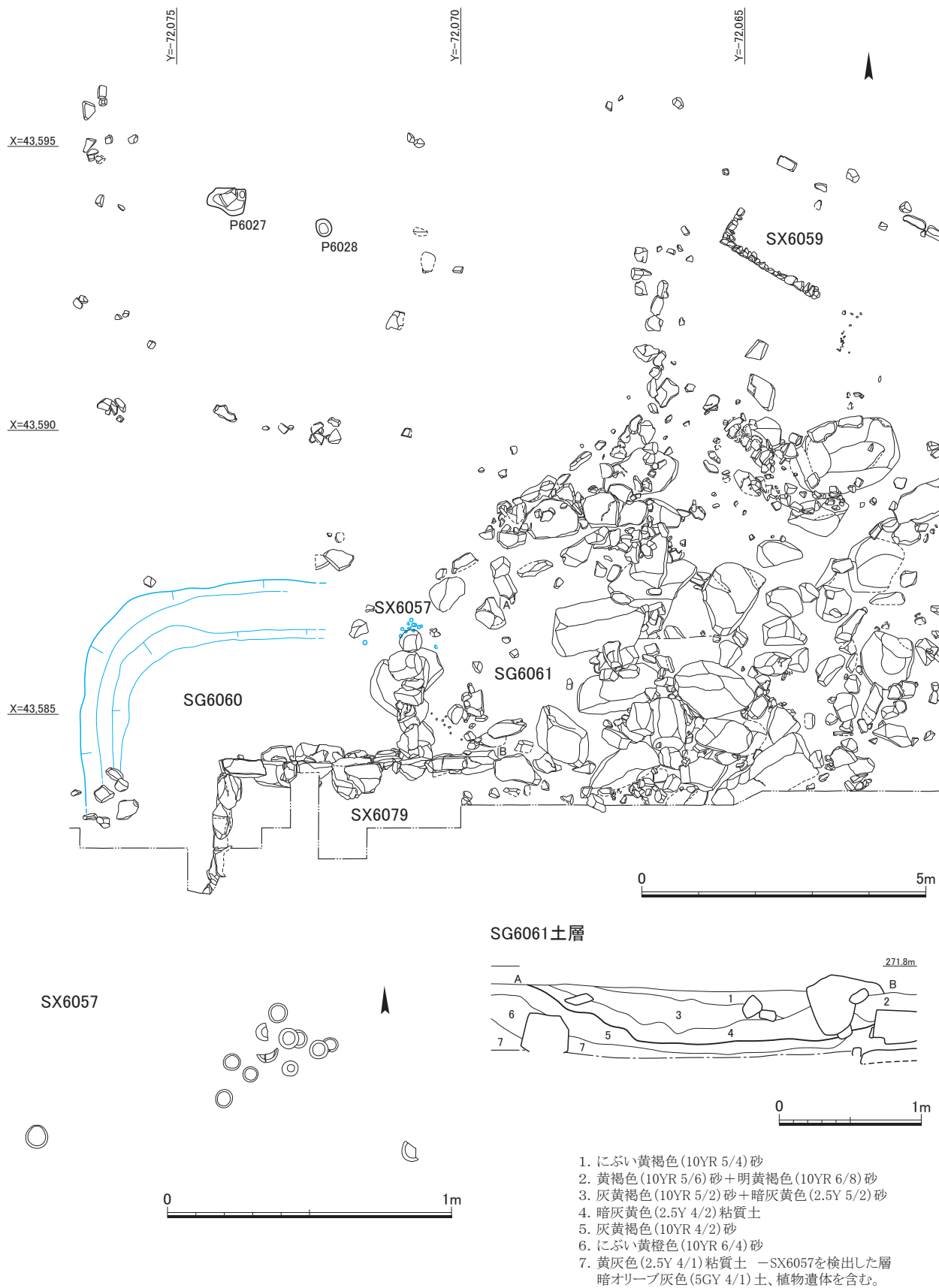


図5-10 第2面の庭園遺構 (1/100)・土層 (1/40)、SX6057 (1/20)

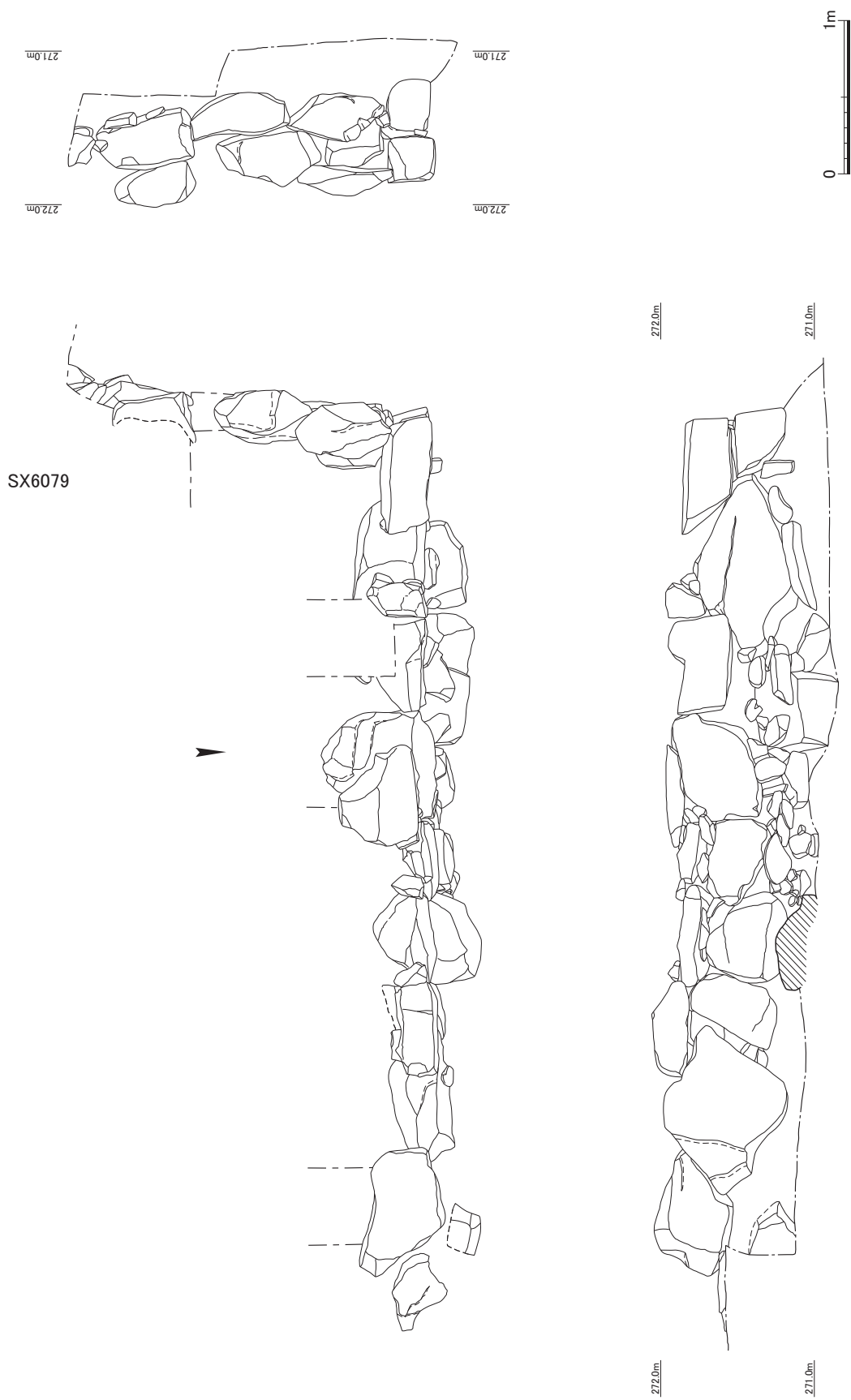


図5－11 SX6079 (1/40)

遺物（図5－12・13）

58～140は第2面から出土した遺物である。第2面の整地層である2－3面出土遺物については、別項を設けて説明する。

58は肥前産の京焼風陶器皿で、内面に山水文が描かれ、高台内の円圏内に押印がある可能性がある。59は関西系もしくは肥前の陶器皿で、高台を丸く仕上げる特徴がある。60は薩摩か熊本産の土瓶蓋である。61・62はセットとなる可能性が高い肥前陶器土瓶とその蓋で、鉄釉と銅緑釉で文様が描かれる。61の内面には墨書がみられる。63は関西系陶器土瓶で、外面上位に鉄釉が施される。64は肥前産と思われる陶器播鉢で、全面に釉が施される。65・66は同一個体と思われる陶器瓶で、鉄釉が施される。66の胎土から陶器としたが、65の胎土は磁器に近いものである。67は備前窯の陶器瓶で、外面に糸目がみられ、底面に「寺見」の銘がある。

68～73は肥前白磁で、68・69は小杯、70・71は小碗、72・73は碗である。68の高台内は無釉、69の外面にはケズリの痕跡がみられ、70は口鏝、72の内外面には主に横方向の細かい傷がみられる。74は肥前染付磁器蓋付鉢、75・76は肥前染付磁器小杯、77は肥前染付磁器蓋である。78～86は肥前染付磁器碗である。78は筒形で、高台内に「大明年製」の銘款がある。79～81は丸形碗、82・85・86は小広東形碗、83は有田以外の製品の可能性がある丸形碗、84は波佐見系の丸形碗である。87は肥前色絵磁器碗で、色絵の部分は剥がれ落ち、痕跡のみである。88は肥前色絵素地の碗で、2－3面出土の285とほぼ同じ大きさ・文様のものである。89は肥前染付磁器碗で、やや大型のものである。90は肥前染付磁器仏飯器、91は肥前染付磁器蓋である。92は肥前色絵磁器人形で、鶏形とみられる。93は窯道具のトチンで、磁器用のものである。

94～105はSX6057出土の底部糸切の土師器小皿である。口径5.7～9.0cm、器高1.2～1.9cmのもので、器壁が厚手のものと薄手のものの2種類みられ、色調もさまざまである。99・101・103・105の口縁部には油煤が付着しており、灯明皿として使用していたものと思われる。106はSG6061、107はSG6060出土の底部糸切の土師器小皿である。108～132は底部糸切の土師器小皿で、口径5.5～9.1cm、器高1.0～2.3cmの大きさで、やはり器壁に2種類のものがみられる。108は底部に穿孔があり、灯明皿として使用した痕跡がみられるものもある。133～136は土師器杯で、133・134は底部糸切、135・136は底部にナデを施し、平滑に仕上げている。137は瓦質土器焙烙で、体部内外面はハケメを施し、外面はさらにナデを施す。138は瓦質土器焙烙または鍋で、底面にはタタキ状の圧痕がみられる。この他に図示していないが、瓦質土器火鉢・火入・茶釜などが出土した。

139は青銅製とみられる碗状の製品で、頂部に径0.2cmの孔があり、縁がやや肥厚していることから鈴のようなものであった可能性がある。外面に幅0.1cmの沈線が4条めぐる。140は鉄製の包丁で、形状などから菜切り用のものと思われる。

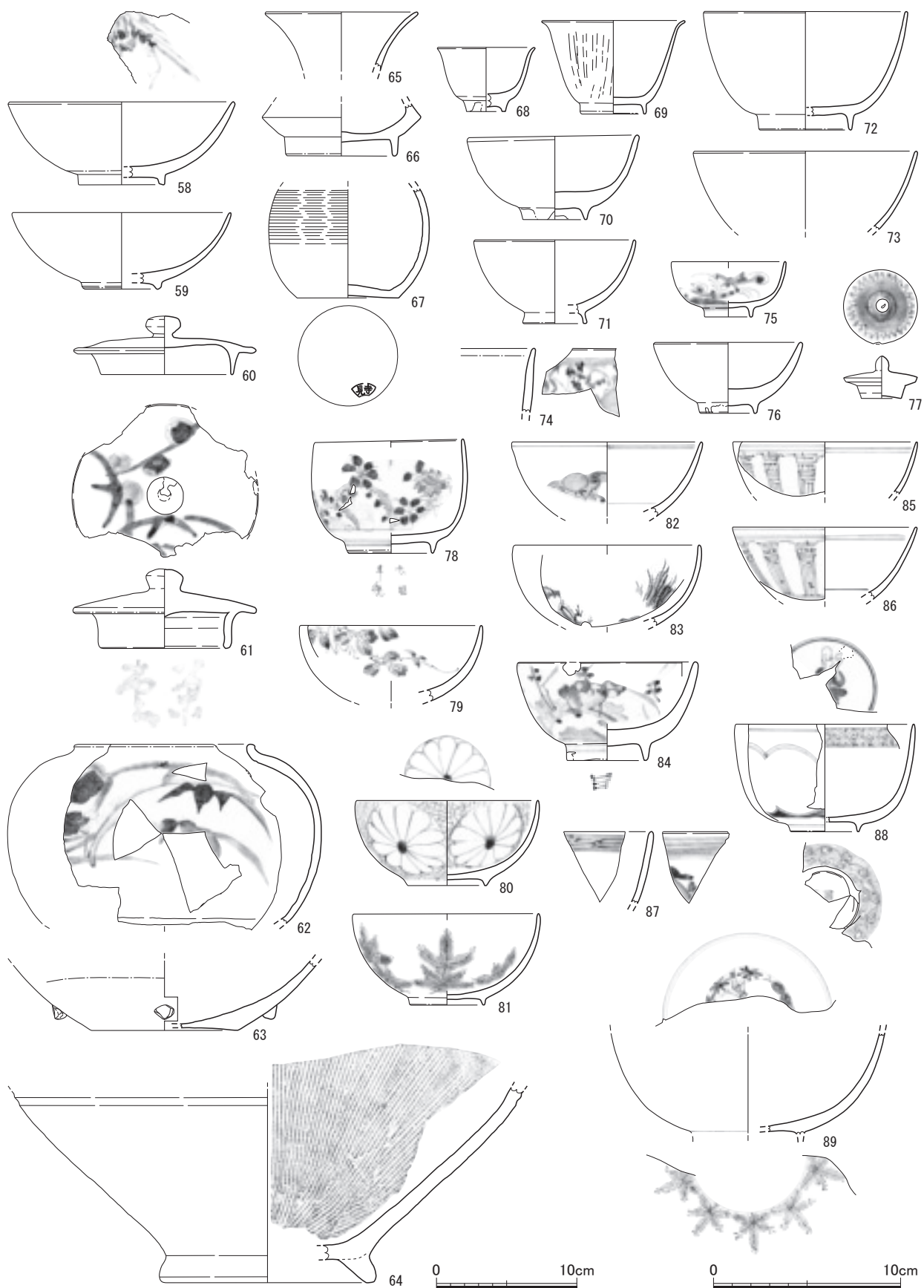


図5-12 第2面の出土遺物1 (64は1/4、他は1/3)

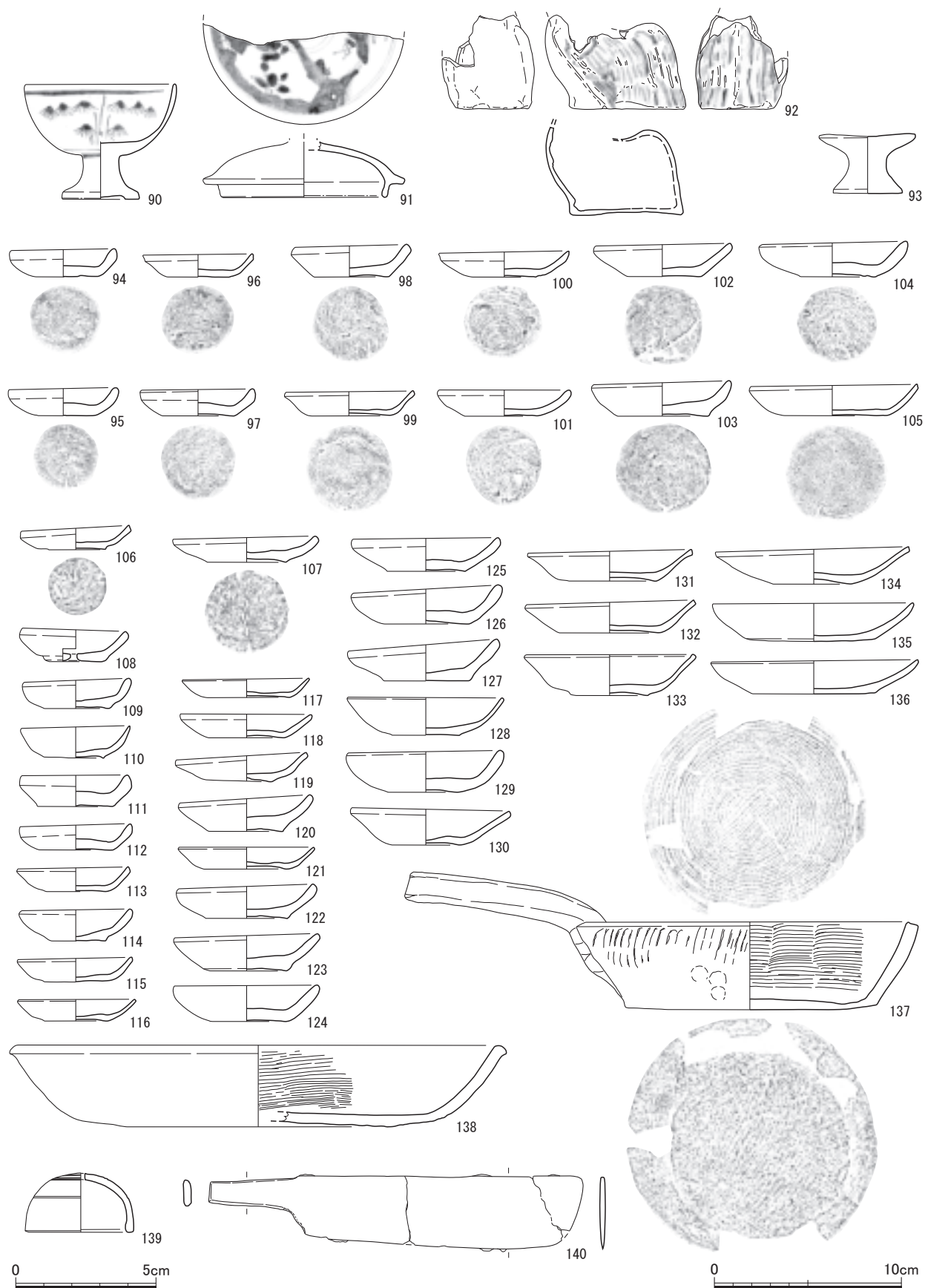


図5-13 第2面の出土遺物2 (139は1/2、他は1/3)

表 5-2 6G 区第 2 面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-12-58 10001972	2 面	陶器 皿	12.1*	4.6*	4.4	胎土：灰白	肥前 17c 後半～18c 初	
図 5-12-59 10001971	2 面	陶器 皿	10.7*	4.2*	4.1	胎土：灰白	関西系か肥前 17c 末～18c 前半	5-7-59 20110325
図 5-12-60 10001977	2 面	陶器 蓋	9.8	7.0	3.1	胎土：橙	薩摩か熊本 19c	5-7-60 20110320
図 5-12-61 10001275	2 面	陶器 蓋	6.9*	9.8*	4.3	胎土：にぶい黄橙	肥前 18c	5-7-61 20110370
図 5-12-62 10001276	2 面	陶器 土瓶	9.7*	-	-	胎土：にぶい黄橙	肥前 18c	5-7-62 20110371
図 5-12-63 10001976	2 面	陶器 土瓶	-	7.8	-	胎土：灰白	関西系 19c	
図 5-12-64 10001979	2 面	陶器 播鉢	-	15.4	-	胎土：淡赤橙	肥前カ 18c 末～19c	
図 5-12-65 10001973	2 面	陶器 瓶	8.2*	-	-	胎土：灰白		5-7-65 20110362
図 5-12-66 10001974	2 面	陶器 瓶	-	6.0*	-	胎土：灰白		5-7-66 20110363
図 5-12-67 10001978	2 面	陶器 瓶	-	5.4	-	胎土：灰赤	備前 17c 後半～18c 「寺見」	5-7-67 20110317
図 5-12-68 10001292	SX6062	白磁 小杯	5.2*	2.1*	3.5	胎土：灰白	肥前 1640～50 年代	5-7-68 20110348
図 5-12-69 10001291	2 面	白磁 小杯	7.7*	3.5*	5.0	胎土：灰白	肥前 17c 後半	5-7-69 20110297
図 5-12-70 10001265	2 面	白磁 小碗	9.2	3.4	4.5	胎土：灰白	肥前 18c 口錆	5-7-70 20110282
図 5-12-71 10001288	SX6061	白磁 小碗	8.7*	3.4*	4.5	胎土：灰白	肥前 18c	
図 5-12-72 10001289	2 面	白磁 碗	11.0*	5.0*	6.4	胎土：灰白	肥前 17c 後半前後	5-7-72 20110296
図 5-12-73 10001290	2 面	白磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半前後	
図 5-12-74 10001297	2 面	染付磁器 蓋付鉢	-	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 前半	5-7-74 20110353
図 5-12-75 10001271	SX6061	染付磁器 小杯	6.1	2.6	3.0	露胎部：灰白	肥前 17c 後半～18c 初	5-7-75 20110332
図 5-12-76 10001266	2 面	染付磁器 小杯	8.0*	3.1	3.8	胎土：灰白	肥前 18c	5-7-76 20110283
図 5-12-77 10001272	2 面	染付磁器 蓋	4.0	-	2.3	胎土：灰白	肥前 17c 後半	5-7-77 20110333
図 5-12-78 10001269	2 面	染付磁器 碗	8.0	4.5	6.1	胎土：灰白	肥前 1660～80 年代	5-7-78 20110286
図 5-12-79 10001293	2 面	染付磁器 碗	9.8*	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 前半	5-7-79 20110349
図 5-12-80 10001298	2 面	染付磁器 碗	9.8*	4.2*	4.6	胎土：灰白	肥前 18c 第 2・3 四半期	5-7-80 20110298
図 5-12-81 10001268	2 面	染付磁器 碗	10.0	4.0	4.9	胎土：灰白	肥前 18c 中頃～末	5-7-81 20110285
図 5-12-82 10001295	2 面	染付磁器 碗	10.2*	-	-	胎土：灰白	肥前 1770～90 年代	5-7-82 20110351
図 5-12-83 10001294	2 面	染付磁器 碗	10.0*	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 後半～19c 初	5-7-83 20110350
図 5-12-84 10001267	2 面	染付磁器 碗	9.7*	4.3	5.3	胎土：灰白	波佐見系 18c 後半	5-7-84 20110284
図 5-12-85 10001301	2 面	染付磁器 碗	9.9*	-	-	胎土：灰白	肥前 1770～1810 年代	
図 5-12-86 10001302	2 面	染付磁器 碗	9.9*	-	-	胎土：灰白	肥前 1770～1810 年代	
図 5-12-87 10001296	2 面	色絵磁器 碗	-	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半	5-7-87 20110353

表5-2 6G区第2面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-12-88 10001299	2 面	色絵素地 碗	9.6*	3.7*	5.8	胎土：灰白	肥前 1710～40年代	5-7-88 20110372・373
図 5-12-89 10001300	2 面	染付磁器 碗	-	-	-	胎土：灰白	肥前 1770～90年代	5-7-89 20110374・375
図 5-13-90 10001273	2 面	染付磁器 仏飯器	8.1	4.2	6.2	胎土：灰白	肥前 17c 後半	5-7-90 20110288
図 5-13-91 10001270	2 面	染付磁器 蓋	8.8*	10.8*	-	胎土：灰白	肥前 18c	5-7-91 20110287
図 5-13-92 10001277	2 面	色絵磁器 人形	-	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半（～18c 前半）	5-7-92 20110289
図 5-13-93 10001274	2 面	窯道具 トチン	5.2	3.7	3.2	胎土：灰白	磁器生産用 17c 後半～18c	5-7-93 20110334
図 5-13-94 10001988	SX6057	土師器 小皿	5.7	3.5	1.5	にぶい黄橙	底部糸切	5-7-94 20110305
図 5-13-95 10001992	SX6057	土師器 小皿	5.9	3.3	1.5	にぶい橙	底部糸切	5-7-95 20110309
図 5-13-96 10001996	SX6057	土師器 小皿	5.9	3.2	1.2	灰白	底部糸切	5-7-96 20110313
図 5-13-97 10001995	SX6057	土師器 小皿	6.2	3.8	1.4	淡橙	底部糸切	5-7-97 20110312
図 5-13-98 10001997	SX6057	土師器 小皿	6.4	4.0	1.7	浅黄橙	底部糸切	5-7-98 20110314
図 5-13-99 10001990	SX6057	土師器 小皿	7.0	4.4	1.3	淡黄	底部糸切 口縁油煤付着	5-7-99 20110307
図 5-13-100 10001989	SX6057	土師器 小皿	7.0	4.0	1.4	灰白	底部糸切	5-7-100 20110306
図 5-13-101 10001987	SX6057	土師器 小皿	7.2*	4.0	1.4	浅黄	底部糸切 口縁油煤付着	5-7-101 20110304
図 5-13-102 10001994	SX6057	土師器 小皿	7.4	3.9	1.8	浅黄橙	底部糸切	5-7-102 20110311
図 5-13-103 10001993	SX6057	土師器 小皿	7.5	5.0	1.9	淡橙	底部糸切 口縁油煤付着	5-7-103 20110310
図 5-13-104 10001991	SX6057	土師器 小皿	8.0	4.1	1.9	淡橙	底部糸切	5-7-104 20110308
図 5-13-105 10001998	SX6057	土師器 小皿	9.0	5.7	1.7	外：淡黄 内：灰白	底部糸切 口縁油煤付着	5-7-105 20110315
図 5-13-106 10002505	SX6061	土師器 小皿	5.8	3.1	1.3	灰白	底部糸切	5-7-106 20110330
図 5-13-107 10002514	SX6060	土師器 小皿	7.8	4.3	1.4	橙	底部糸切 口縁油煤付着	5-7-107 20110331
図 5-13-108 10002508	2 面	土師器 小皿	5.5	2.9	1.8	にぶい黄橙	底部糸切 底部に穿孔	
図 5-13-109 10002109	2 面	土師器 小皿	5.8	3.4	1.6	浅黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-13-110 10002112	2 面	土師器 小皿	5.8	3.2	1.8	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-111 10002507	2 面	土師器 小皿	5.9*	4.2	1.7	にぶい黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-13-112 10002108	2 面	土師器 小皿	6.0	4.0	1.4	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-113 10002506	2 面	土師器 小皿	6.1	3.4	1.3	橙	底部糸切	
図 5-13-114 10002110	2 面	土師器 小皿	6.1	2.9	1.7	にぶい黄橙	底部糸切	
図 5-13-115 10002111	2 面	土師器 小皿	6.2	3.7	1.3	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-116 10002136	2 面	土師器 小皿	6.3	3.4	1.2	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-117 10002138	2 面	土師器 小皿	6.8	4.4	1.0	にぶい橙	底部糸切	

表 5-2 6G 区第 2 面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-13-118 10002135	2 面	土師器 小皿	7.0	4.1	1.3	にぶい橙	底部糸切	
図 5-13-119 10002133	2 面	土師器 小皿	7.1	3.6	1.6	浅黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-13-120 10002509	2 面	土師器 小皿	7.2	4.0	2.0	にぶい黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-13-121 10002137	2 面	土師器 小皿	7.3*	4.5	1.2	浅黄橙	底部糸切 内面に煤付着	
図 5-13-122 10002105	2 面	土師器 小皿	7.5	4.4	1.8	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-123 10002510	2 面	土師器 小皿	7.8	4.2	2.0	にぶい黄橙	底部糸切 油煤付着	
図 5-13-124 10002104	2 面	土師器 小皿	7.8	4.1	1.9	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-125 10002107	2 面	土師器 小皿	8.0	4.2	1.8	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-126 10002106	2 面	土師器 小皿	8.1	4.7	2.1	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-127 10002512	2 面	土師器 小皿	8.1	4.8	2.3	にぶい黄橙	底部糸切 油煤付着	
図 5-13-128 10002140	2 面	土師器 皿	8.4*	3.6	2.0	灰白	底部糸切	
図 5-13-129 10002103	2 面	土師器 小皿	8.4	4.4	2.2	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-130 10002511	2 面	土師器 小皿	8.5	3.7	2.0	灰白	底部糸切 内・外面に煤付着	
図 5-13-131 10002101	2 面	土師器 小皿	8.8	-	1.7	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-132 10002513	2 面	土師器 小皿	9.1	5.4	1.8	浅黄橙	底部糸切	
図 5-13-133 10002139	2 面	土師器 杯	9.2*	4.2	2.2	淡黄	底部糸切	
図 5-13-134 10002000	2 面	土師器 杯	10.4	4.2	2.0	外:浅黄橙 内:黒	底部糸切	
図 5-13-135 10001999	2 面	土師器 杯	10.8	6.6	2.1	淡橙		
図 5-13-136 10002102	2 面	土師器 杯	11.1	6.6	1.8	灰白		
図 5-13-137 10002114	2 面	瓦質土器 焙烙	18.2	13.5	4.7	にぶい褐	外面煤付着	5-7-137 20110339
図 5-13-138 10002115	2 面	瓦質土器 焙烙	26.5*	20.5*	4.3	明褐灰	外面煤付着	
図 5-13-139 11000165	2 面	青銅製品	口径 3.9	器高 2.1	厚 0.3			5-7-139 20110698
図 5-13-140 11000158	2 面	鉄器 包丁	長 20.2	幅 3.9	厚 0.3			

4 2－3面の遺物

第2面の整地層とした2－3面の遺物は、6G区の調査でもっとも出土量が多い。しかし、第2面に明確な造成土を伴わないとみられる改修が行われていることが、この整地層の掘り下げ中に確実になったことなどから、かなり時期幅がある遺物群となっている。2－3面とした遺物には、第2面改修以後と以前に使用されていたもの、第2面造成時のもの、第3面で使用されていたものなどが混在しているものと思われる。出土量が多いこともあり、項を独立させて、説明することにする。また、整理期間の都合などで、陶磁器を中心に報告する。

遺物（図5－15～23）

141～145は肥前陶器小杯で、鉄釉が施され、内野山窯の製品とみられる。146～154は肥前陶器碗である。146は天目形で、鉄釉が施される。147・148は全面に灰釉が施される。149は内外面に銅緑釉が施される。150はいわゆる献上唐津であるが、形態はあまり類例がないものである。151は筒形で、灰釉が施され、部分的に銅緑釉が掛っている。152～154は灰釉が施される。155は産地不明の陶器碗で、透明に近い釉薬を施し、藁灰釉と思われる釉を流し掛けている。156は小石原産の陶器碗で、鉄釉の上に藁灰釉を流し掛けている。157は京焼の可能性のある陶器碗で、外面に鉄絵を描く。

158～160は肥前陶器皿である。158は灰釉が施され、内面に胎土目跡が残る。159・160は灰釉が施される。161は刷毛目手の肥前陶器で、台付皿の可能性はある。162・163は肥前陶器皿である。162は灰釉が施され、高台内は蛇の目状に釉剥ぎされている可能性がある。163は内面に波刷毛目が施され、内面見込みを蛇の目釉剥ぎしたのち、鉄漿が塗布される。164・165は肥前陶器火入で、線香立てなどの用途が考えられる。口縁上面から胴部外面上半にかけて象嵌が施され、脚部は3箇所にはかりがあるものと思われる。内面は無釉で、164は胴部外面下半に、165は胴部外面下半と高台内に鉄釉が施される。

166～181は肥前京焼風陶器である。166は筒形の碗で、外面に山水文が描かれ、高台内に「小松吉」の押印がある。167～178は内面に山水文が描かれた皿で、高台内には円圈がある。167は「小松吉」、168・169は「北嶋十」、170は「小倉」、171は「千？吉」、172は「山原住」、173～177は「清水」、178は「木下弥」の押印があり、これまでに類例が知られていないものがみられる。179は内面に不鮮明な文様が描かれた皿で、高台内に「清水」の押印がみられる。180・181は内面に山水文が描かれた皿で、高台内は円圈のみである。

182～190は器形や刷毛目の特徴などから、佐賀市川久保皿山窯跡の製品と考えられるものである。いずれも白土による巻刷毛目が内外面に施されている。182・183は小碗で、体部にえくぼをつくる。184～187は体部が段状に立ち上がる小碗、188・189は体部が内湾して立ち上がる碗、190は体部が段状に立ち上がる鉢である。

191～194は肥前陶器碗で、191は内外面に打刷毛目、192～194は外面に蛸手、内面に打刷毛目が施されている。195は肥前陶器皿で、外面に蛸手、内面に打刷毛目が施されている。これらは現川窯の製品ではない可能性があるというご指摘を大橋康二氏より頂いている。

196は肥前陶器鉢で、内面に波刷毛目が施され、鉄釉が流し掛けられている。197は二彩手の肥前陶器大皿で、内面に波刷毛目が施され、鉄釉と銅緑釉が流し掛けられている。内面見込みと高台に目跡が残る。198は肥前陶器蓋付鉢で、外面に波刷毛目が施され、口縁部を釉剥ぎしている。199は肥前陶器鉢で、内外面に刷毛目が施される。199は第2面出土遺物であるが、挿図編集の都合上、ここに掲載した。

200は肥前陶器土瓶で、外面上半に白化粧土と銅緑釉で文様が施される。201は肥前産とみられる陶器土瓶で、胴部を直線的にくぼませたやや特異な形態をしており、無釉である。202・203はセットとなる可能性が高い京焼の陶器土瓶とその蓋で、色絵による文様が施される。204・205はセットと思われる肥前陶器水柱とその蓋で、206は205の把手になる可能性があり、いずれも鉄釉が施される。207は肥前産と思われる陶器水柱で、無釉で

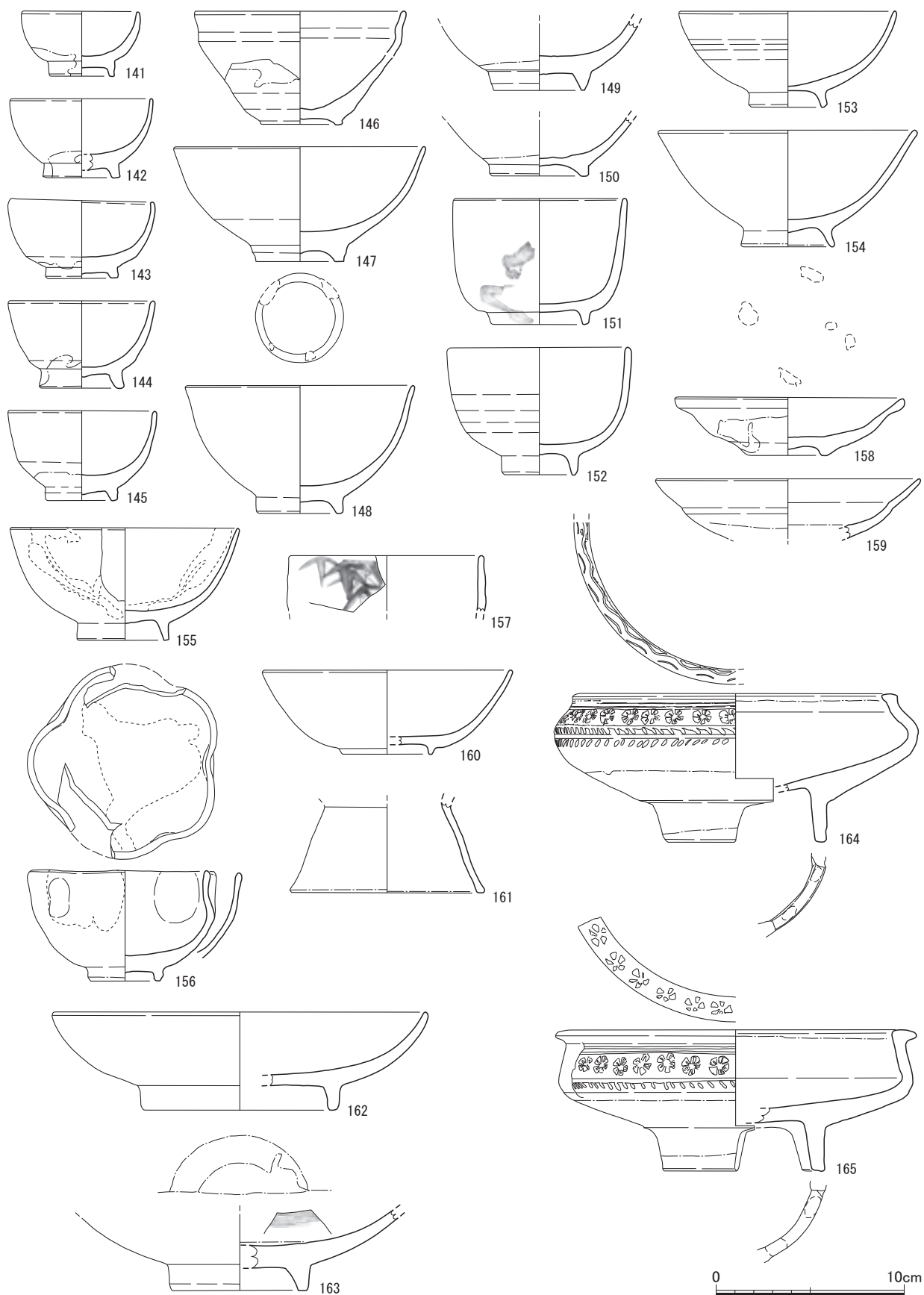


図5-14 2-3面の出土遺物1 (1/3)

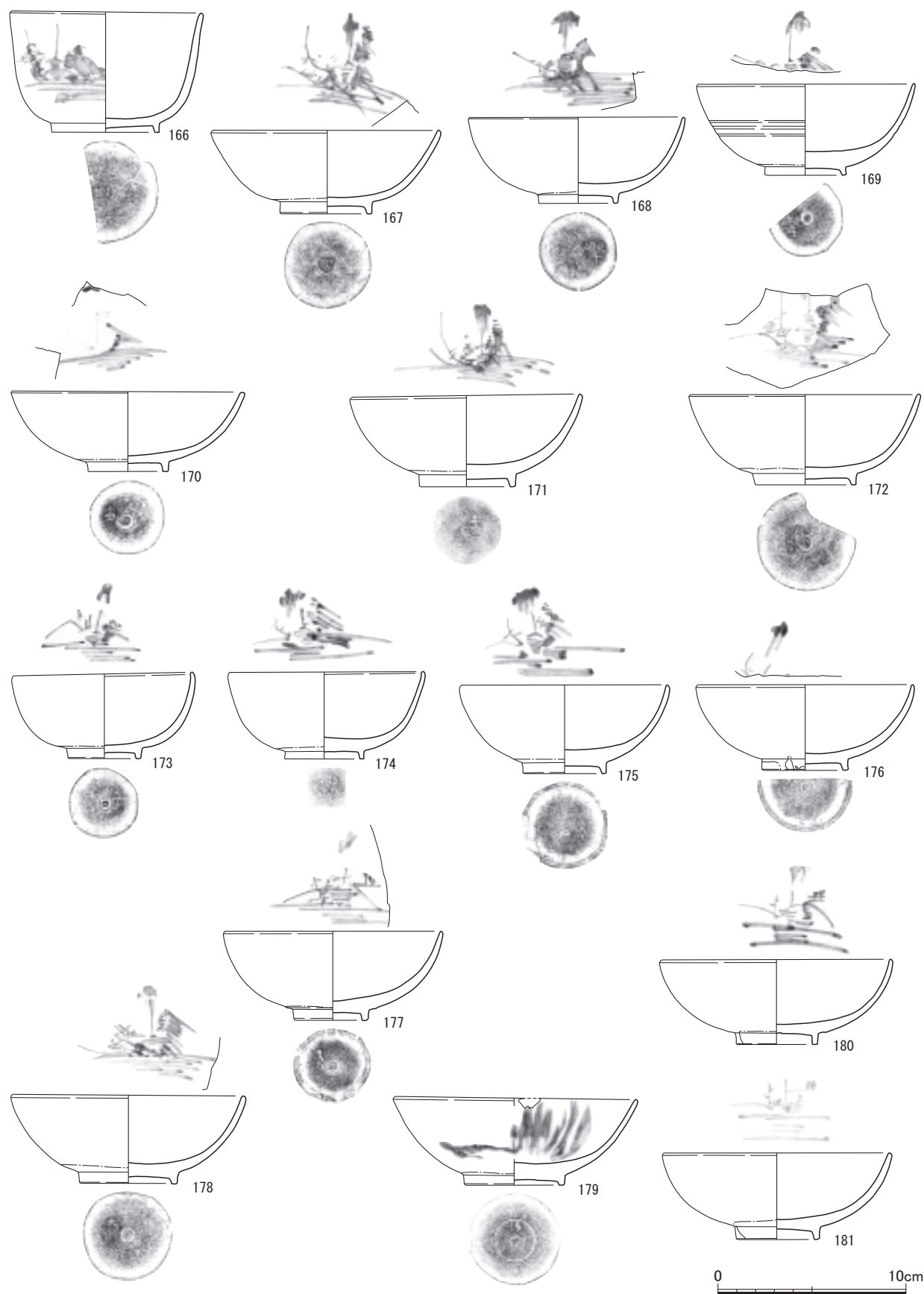


図5-15 2-3面の出土遺物2 (1/3)

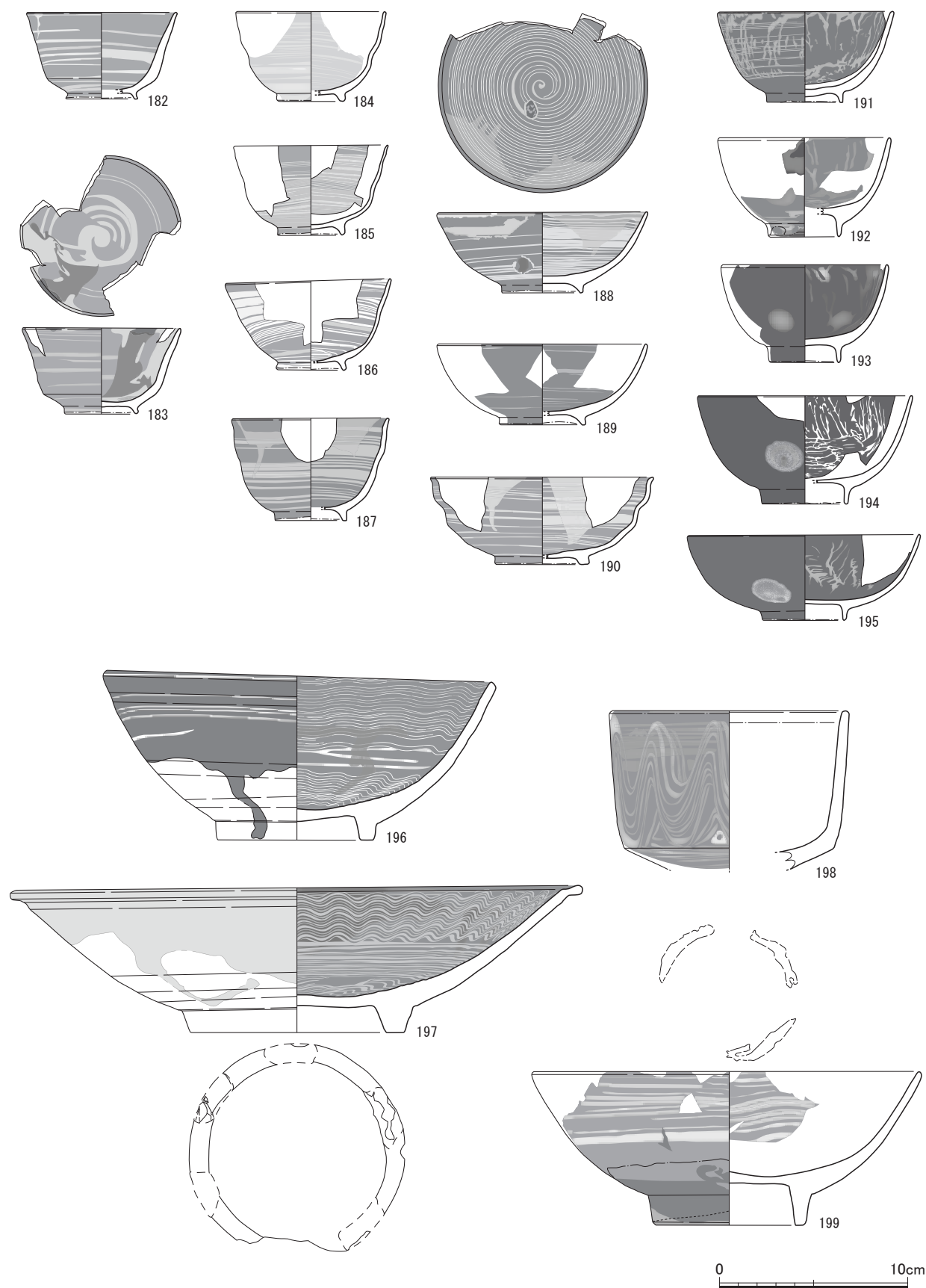


図5-16 2-3面の出土遺物3 (1/3)

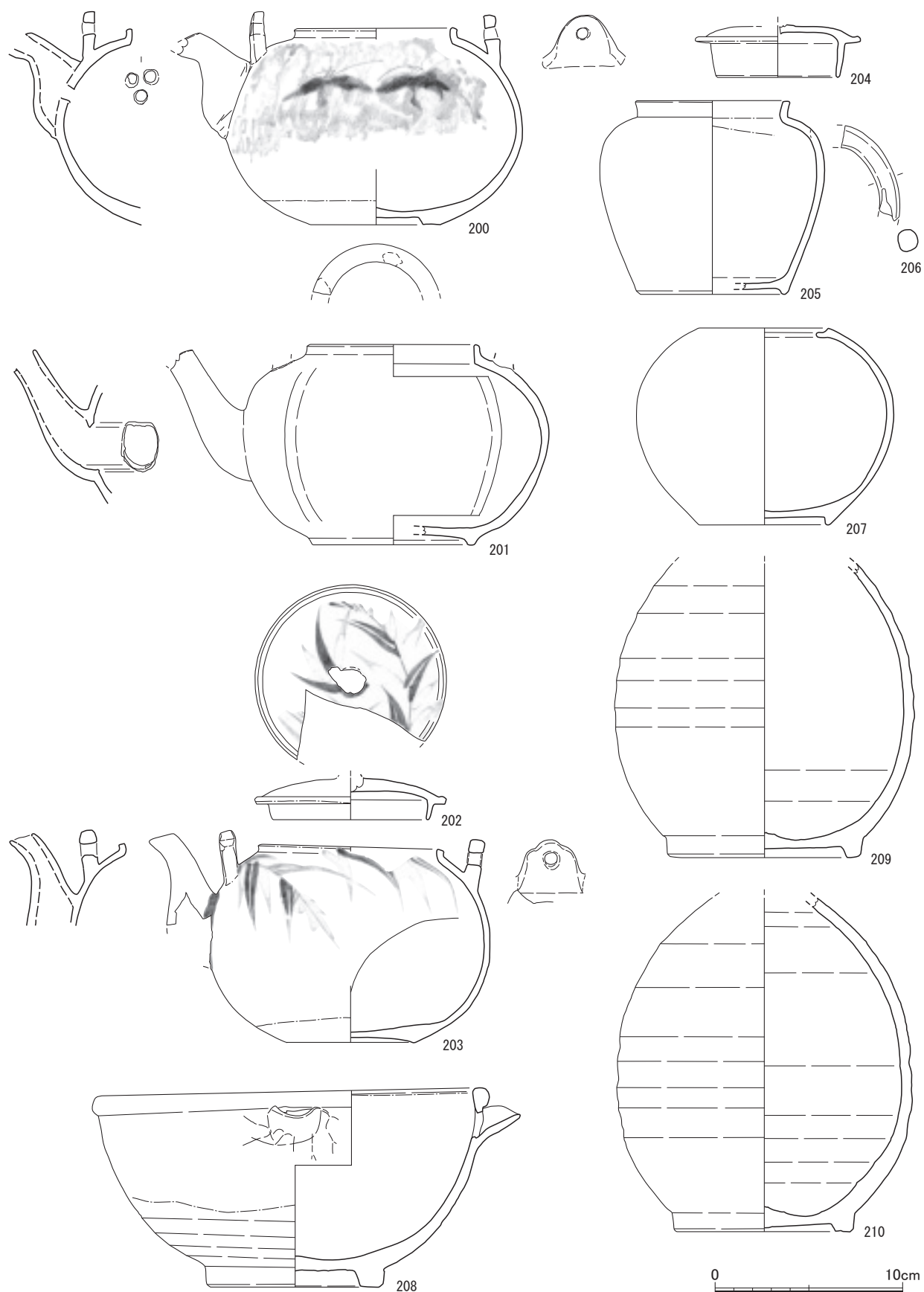


図5-17 2-3面の出土遺物4 (1/3)

あり、201 と同じ窯の製品である可能性がある。208 は肥前陶器片口で、鉄釉が施される。209・210 は二彩手の肥前陶器瓶で、刷毛目が施されたのち、鉄釉と銅緑釉が流し掛けられる。

211～217 は肥前陶器播鉢である。211 は内面の口縁端部を内側に若干とがらせたもので、口縁部のみに釉が施されている。212～216 は平底で、口縁部のみに鉄釉を施すタイプで、212・213 は口縁内面を肥厚させるもの、215・216 は口縁部が玉縁状のものである。217 は全面に鉄釉を施すタイプである。218 は肥前陶器甕で、胴部内面には当て具痕の同心円文がみられる。

219～242 は肥前白磁である。219～227 は小碗で、220 の外面にはケズリの痕跡がみられる。228・229 は碗、230～233 は小杯である。234～236 は猪口で、口鏝である。237～239 は小皿である。240 は皿で、内面に陽刻によるイチョウの文様が施される。241・242 は紅皿である。

243～250 は肥前青磁で、243～245 は碗である。246・247 は同一個体と思われる瓶で、高台部は打ち欠きとみられ、肩部の装飾も打ち欠いている可能性がある。248・249 は瓶、250 は火入である。

251～280 は肥前染付磁器碗で、丸形碗がほとんどである。251・252 は文様が圈線のみである。253・254 はほぼ同じ大きさ・文様のもので、高台内に「宣明年製」の銘款がみられる。255 の高台内には「大明年製」、256 の高台内には「宣（明）年製」の銘款があり、257 にも銘款がみられる。258・259 は鳳凰と思われる鳥を描いたほぼ同じ大きさのもので、高台内には圈線が描かれる。260 にも 258 と似た鳥の文様が描かれる。261 の高台内には圈線、262 の高台内には「大明年製」の銘款がみられる。264 は口縁部端反の碗で、265 の高台内には圈線が描かれる。266 は筒形で、高台内に銘款がみられる。267 は内面見込みに手描きによる五弁花文が施される。270 の高台内には「大明年製」とと思われる銘款がある。271～274 は外面にコンニャク印判による文様が施されたもので、273・274 はほぼ同じ大きさ・文様のものである。275 は第 2 面出土の 80 とほぼ同じ大きさ・文様のものである。276 の高台内には銘款がみられる。277・278 はほぼ同じ大きさ・文様のものである。279 の高台内には圈線、280 の高台内には銘款がみられる。

281 は肥前磁器碗で、外面に瑠璃釉が施される。282～284 は肥前色絵磁器碗で、284 は内面見込みに蛇の目釉剥ぎしたのち、青色の色絵を施している。285 は肥前色絵素地の碗で、茶飲み用のものと思われる。内面見込みに人物、高台内に「富貴長春」の銘款がみられる。

286～288 は肥前染付磁器小杯、289 は肥前染付磁器猪口である。290～292 は肥前染付磁器小碗で、292 は嬉野吉田窯の製品である可能性がある。293～295 は染付磁器小碗で、有田やその周辺の製品でない可能性が高い。295 の高台には 1 箇所抉りがある。296～300 は肥前染付磁器小碗である。297 の高台内には「大明年製」の銘款がみられる。298～300 は外面にコンニャク印判による文様が施されたものである。301 は肥前染付磁器仏飯器である。

302 は肥前染付磁器蓋付小鉢で、口縁部を釉剥ぎしている。303 は肥前染付磁器鉢で、輸出用に近いものである。304～308 は肥前染付磁器皿で、305 の高台内には 1 箇所ハリ支えの痕跡がみられる。309 は肥前染付磁器鉢で、有田やその周辺の製品でない可能性がある。310 は肥前染付磁器鉢で、内面見込みに手描きによる五弁花文、高台内に銘款がみられる。

311 は肥前色絵磁器瓶で、茶筌形になる可能性がある。312～318 は肥前染付磁器瓶である。313・315・316 は嬉野吉田窯の製品である可能性がある。319 は肥前染付磁器花生、320・321 は肥前色絵磁器水滴である。322 は肥前染付磁器水滴で、一部に鉄釉が施される。323 は肥前色絵磁器水滴で、外面は側面と上面の盛り上がった部分を除いて露胎であり、その上に色絵付けが施される。

324～331 は、18 世紀後半以降の肥前染付磁器碗である。324 は波佐見系の丸形碗、325～327 はほぼ同じ大きさ・文様の丸形碗である。328～330 は小広東形碗で、330 は外面と内面見込みに同じ人物の絵柄が描かれる。331 は第 1 面出土の 2 とほぼ同じ大きさ・文様のものである。

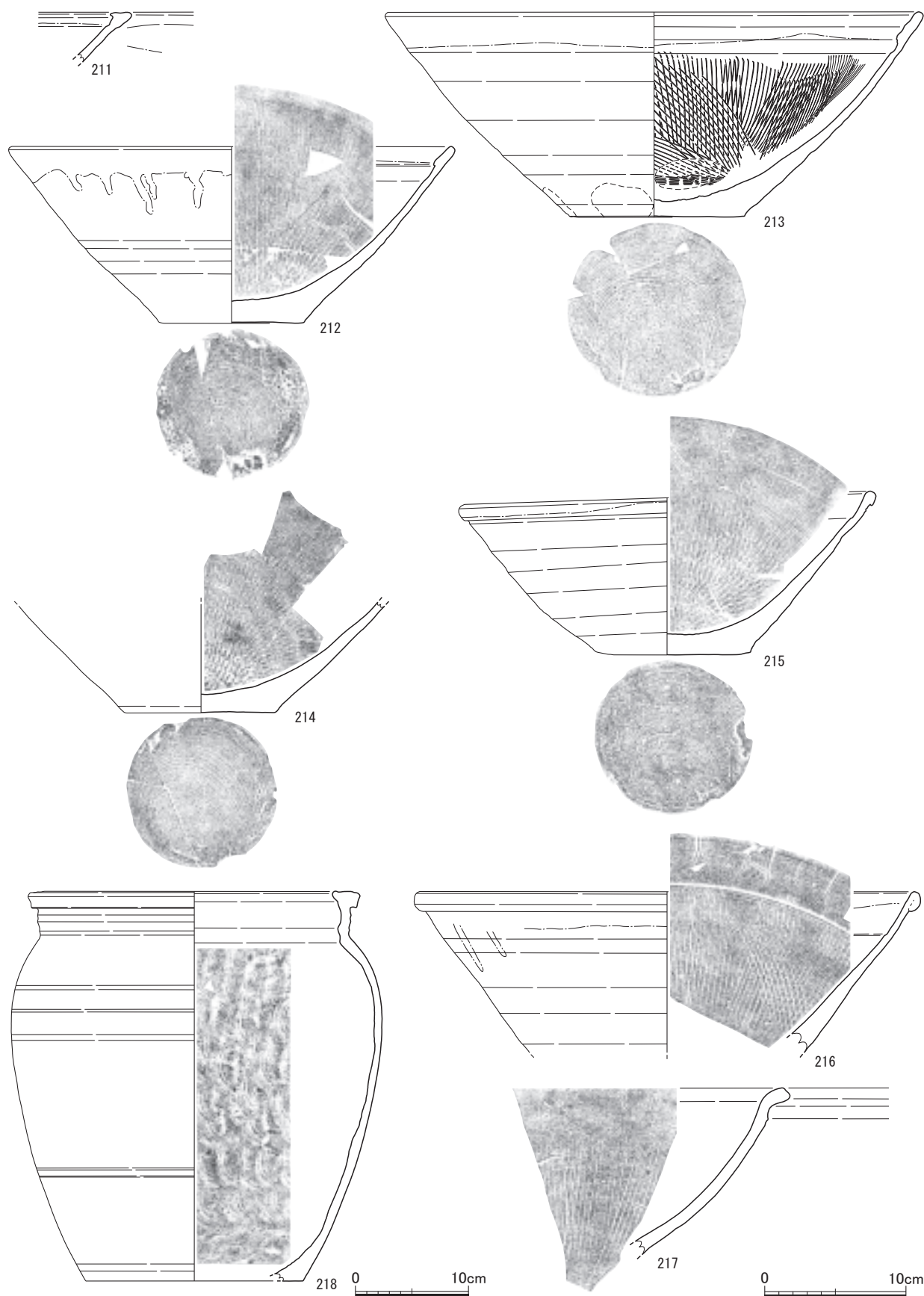


図5-18 2-3面の出土遺物5 (218は1/5、他は1/4)

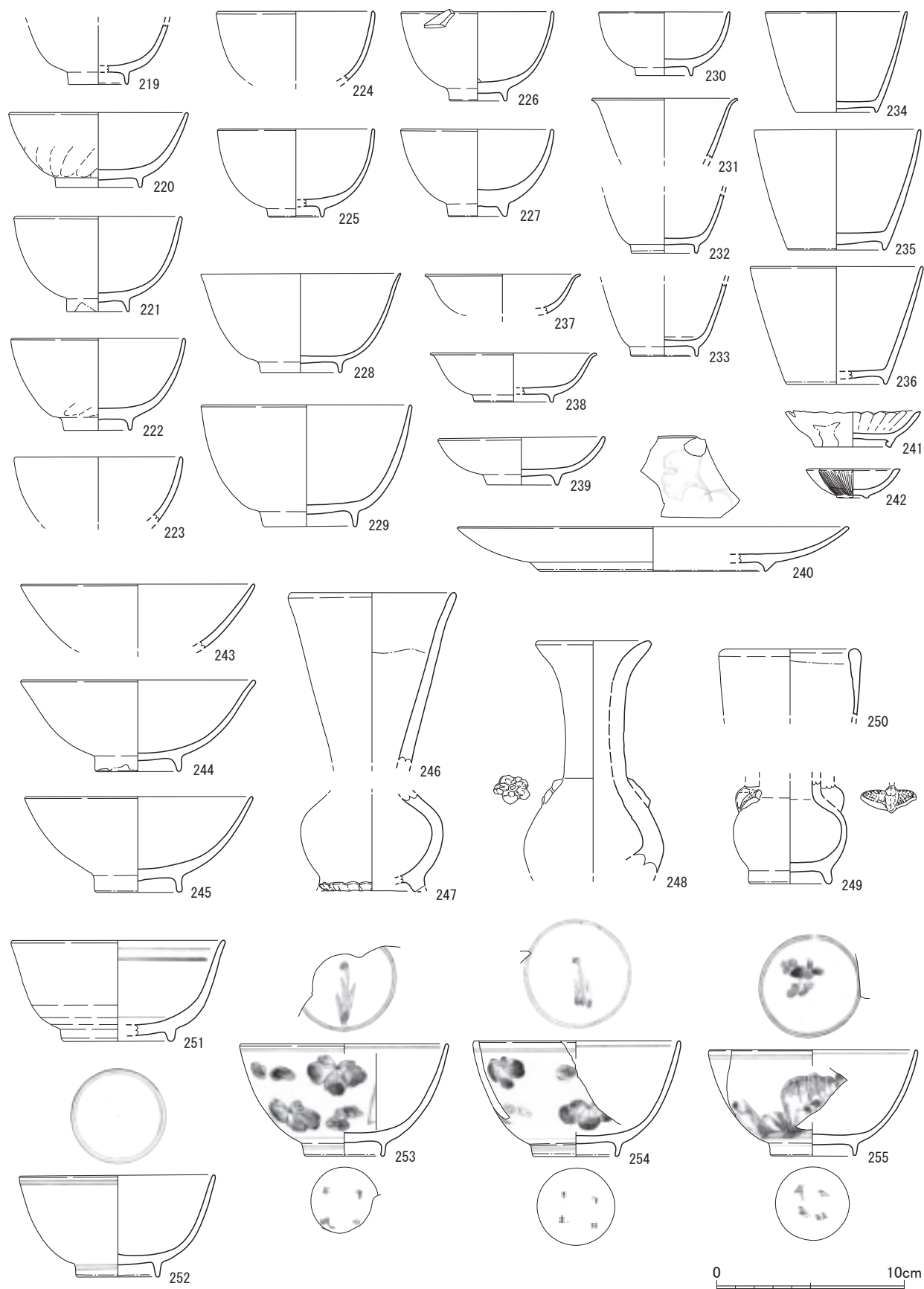


図5-19 2-3面の出土遺物6 (1/3)



図5-20 2-3面の出土遺物7 (1/3)

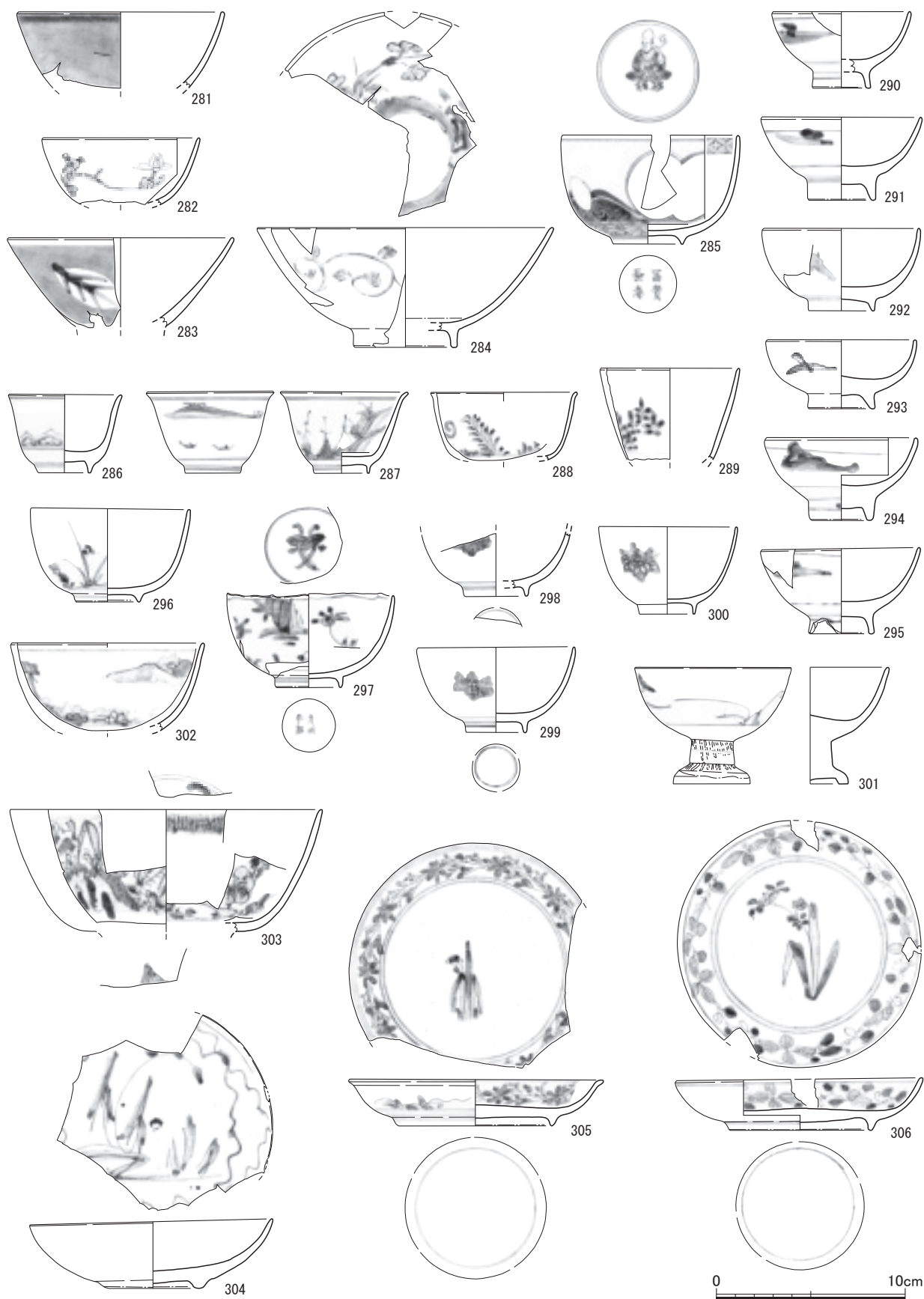


図5-21 2-3面の出土遺物8 (1/3)

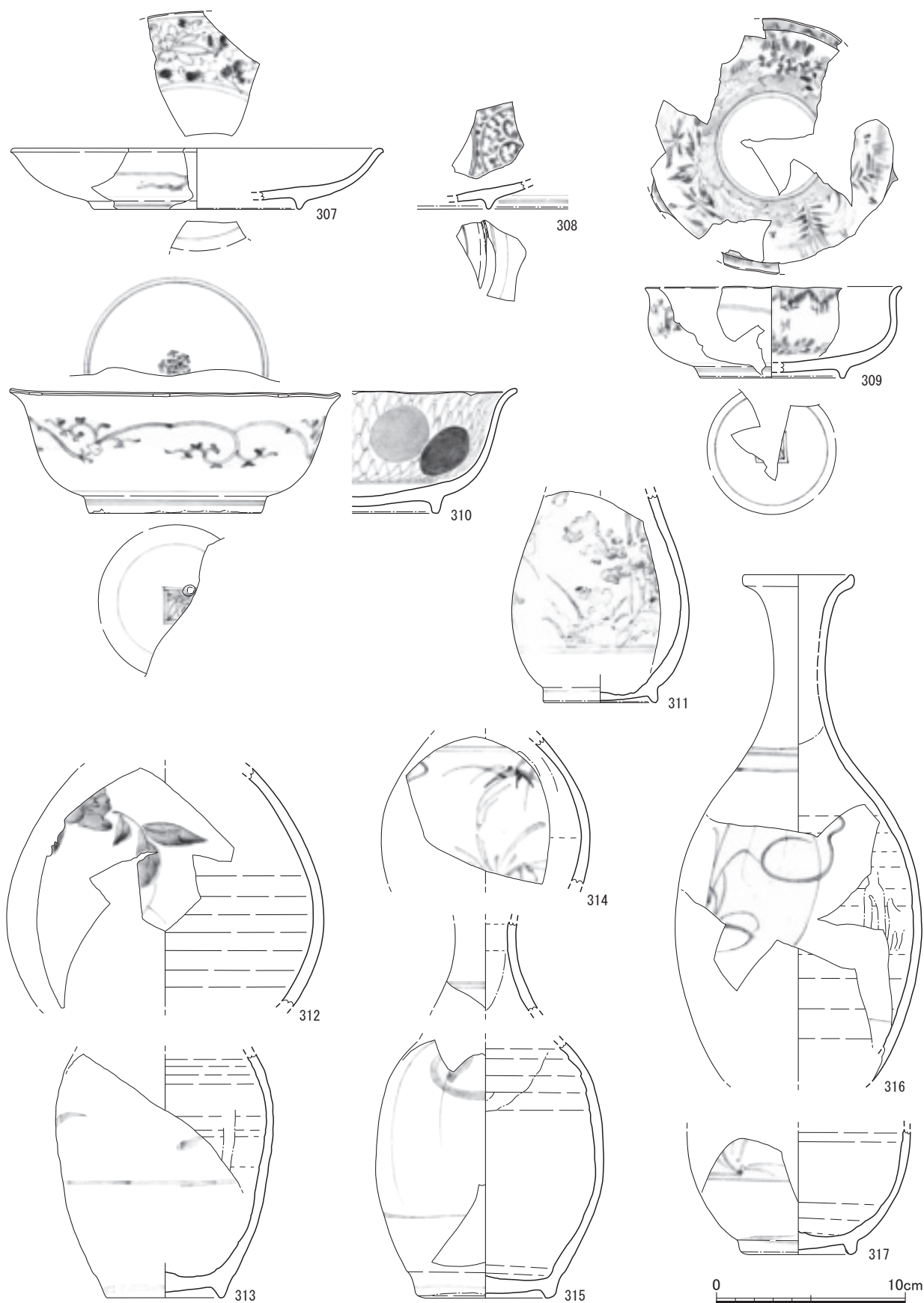


図5-22 2-3面の出土遺物9 (1/3)

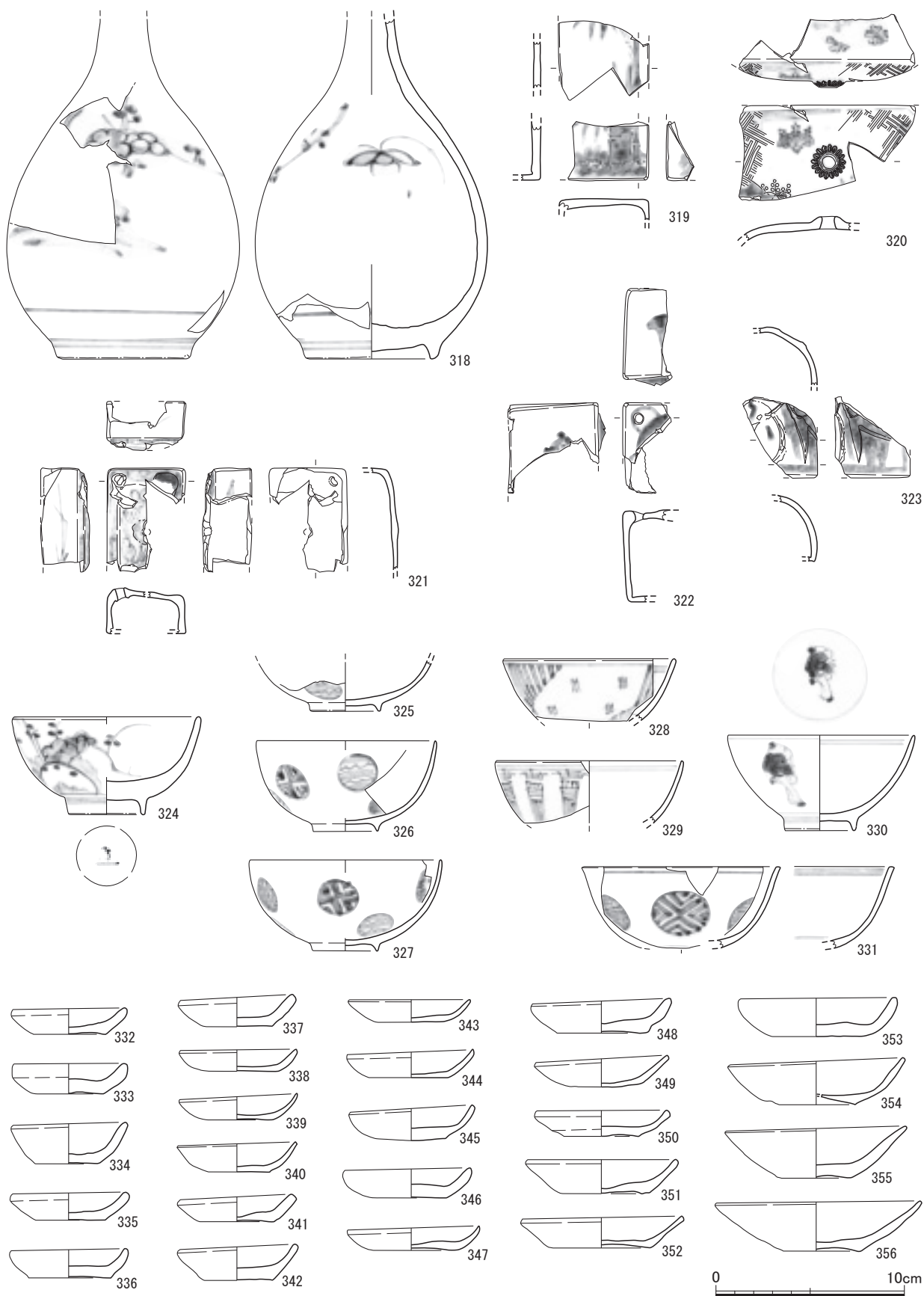


図5-23 2-3面の出土遺物 10 (1/3)

322～353は底部糸切の土師器小皿である。口径6.1～8.4cm、器高1.2～2.2cmで、器壁が厚いものと薄いものの2種類がみられる。354～356は底部糸切の土師器杯で、底径が小さく、口縁部が大きく開く形態のものである。

表5-3 6G区第2-3面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図5-14-141 07001268	2-3面	陶器 小杯	6.3	3.5	3.4	胎土：暗褐	内野山窯 17c後半	5-8-141 20110224
図5-14-142 07001270	2-3面	陶器 小杯	7.6*	4.1*	4.2	胎土：灰白	内野山窯 17c後半	
図5-14-143 07001271	2-3面	陶器 小杯	7.8	3.9	4.2	胎土：灰白	内野山窯 17c後半	5-8-143 20110226
図5-14-144 07001267	2-3面	陶器 小杯	7.8*	4.5	4.7	胎土：灰白	内野山窯 17c後半	5-8-144 20110223
図5-14-145 07001269	2-3面	陶器 小杯	7.9	3.8	4.8	胎土：灰白	内野山窯 17c後半	5-8-145 20110225
図5-14-146 07001266	2-3面	陶器 碗	11.2*	4.3	6.0	胎土：灰白	肥前 16c末～17c初	
図5-14-147 07001294	2-3面	陶器 碗	13.4*	4.7	6.1	胎土：灰白	肥前 17c前半～中頃	5-8-147 20110040
図5-14-148 07001421	2-3面	陶器 碗	12.3	4.7	6.8	胎土：灰白	内野山窯 17c中頃	5-8-148 20110241
図5-14-149 07001273	2-3面	陶器 碗	-	4.8	-	胎土：浅黄橙	内野山窯力 17c後半～18c初	5-8-149 20110227
図5-14-150 07001290	2-3面	陶器 碗	-	5.3	-	胎土：灰白	唐津 17c後半 献上唐津	5-8-150 20110229
図5-14-151 07001291	2-3面	陶器 碗	9.2	5.2	6.7	胎土：浅黄橙	肥前 17c後半	5-8-151 20110237
図5-14-152 07001292	2-3面	陶器 碗	9.7	6.8	4.0	胎土：浅黄	肥前 17c後半～18c初	5-8-152 20110238
図5-14-153 07001293	2-3面	陶器 碗	11.6*	4.2	5.1	胎土：灰白	肥前 17c末～18c前半	
図5-14-154 07001300	2-3面	陶器 碗	13.8*	5.0	6.2	胎土：灰白	肥前 17c後半	
図5-14-155 07001272	2-3面	陶器 碗	6.2	4.9	6.0	胎土：暗褐	産地不明	5-8-155 20110235
図5-14-156 07001274	2-3面	陶器 碗	9.4	4.0	5.9	胎土：灰白	小石原 元禄～18c前半	5-8-156 20110236
図5-14-157 07001295	2-3面	陶器 碗	10.4*	-	-	胎土：灰白	京焼の可能性あり	5-8-157 20110341
図5-14-158 07001256	2-3面	陶器 皿	12.2*	4.5	3.0	胎土：にぶい黄橙	肥前 1590～1610年代	
図5-14-159 07001275	2-3面	陶器 皿	14.1*	-	-	胎土：灰白	内野山窯 17c末～18c前半	5-8-159 20110340
図5-14-160 07001299	2-3面	陶器 皿	13.3*	4.8	4.4	胎土：浅黄	肥前 17c後半～18c初	
図5-14-161 07001254	2-3面	陶器 台付皿力	-	10.3*	-	胎土：灰	肥前 17c末～18c初	
図5-14-162 07001250	2-3面	陶器 皿	20.0*	10.4	5.2	胎土：灰白	肥前 17c後半	5-8-162 20110250
図5-14-163 07001252	2-3面	陶器 皿	-	7.2*	-	胎土：浅黄橙	内野山窯 17c中頃～後半	5-8-163 20110366
図5-14-164 07001248	2-3面	陶器 火入	17.3	9.6	7.9	胎土：灰	肥前 1630～50年代	5-8-164 20110249
図5-14-165 07001249	2-3面	陶器 火入	19.1*	9.7	7.6	胎土：灰	肥前 1630～50年代	
図5-15-166 07001297	2-3面	陶器 碗	10.3	5.7	6.4	胎土：灰	肥前 17c後半 「小松吉」	5-8-166 20110244
図5-15-167 07001285	2-3面	陶器 皿	12.3	4.9	4.5	胎土：灰白	肥前 17c後半 「小松吉」	5-8-167 20110260
図5-15-168 07001287	2-3面	陶器 皿	11.5	4.3	4.6	胎土：灰白	肥前 17c後半 「北嶋十」	5-8-168 20110242・384

表 5-3 6G 区第 2-3 面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-15-169 07001276	2-3 面	陶器 皿	11.5*	4.3	4.8	胎土：灰白	肥前 17c 後半 「北嶋十」	5-8-169 20110367・368
図 5-15-170 07001278	2-3 面	陶器 皿	12.4*	4.3	4.2	胎土：灰白	肥前 17c 後半 「小倉」	5-8-170 20110256
図 5-15-171 07001288	2-3 面	陶器 皿	12.4	5.1	4.8	胎土：灰白	肥前 17c 後半 「千？吉」	5-8-171 20110243・385
図 5-15-172 07001279	2-3 面	陶器 皿	12.3*	5.4	4.8	胎土：灰白	肥前 17c 後半 「山原住」	
図 5-15-173 07001466	2-3 面	陶器 皿	9.7	3.9	4.5	胎土：淡黄橙	肥前 17c 後半 「清水」	5-8-173 20110262
図 5-15-174 07001298	2-3 面	陶器 皿	10.8*	4.3	4.6	胎土：灰白	肥前 17c 後半 「清水」	
図 5-15-175 07001280	2-3 面	陶器 皿	11.2*	4.4	4.7	胎土：灰白	肥前 17c 後半 「清水」	5-8-175 20110257
図 5-15-176 07001282	2-3 面	陶器 皿	11.6*	4.6	4.6	胎土：灰	肥前 17c 後半 「清水」	
図 5-15-177 07001434	2-3 面	陶器 皿	11.7	3.9	4.7	胎土：灰白	肥前 17c 後半 「清水」	5-8-177 20110261
図 5-15-178 07001281	2-3 面	陶器 皿	12.4	5.2	4.7	胎土：灰白	肥前 17c 後半 「木下弥」	5-8-178 20110258
図 5-15-179 07001284	2-3 面	陶器 皿	13.0	5.3	4.7	胎土：灰白	肥前 17c 後半 「清水」	5-8-179 20110259
図 5-15-180 07001432	2-3 面	陶器 皿	12.4	4.3	4.5	胎土：灰白	肥前 17c 後半～18c 初	5-8-180 20110245・386
図 5-15-181 07001277	2-3 面	陶器 皿	12.2*	4.4	4.6	胎土：灰白	肥前 17c 後半～18c 初	
図 5-16-182 07001220	2-3 面	陶器 小碗	8.8*	3.8*	4.6	胎土：灰	川久保皿山窯 17c 後半～18c 前半	
図 5-16-183 07001223	2-3 面	陶器 小碗	8.3	3.9	4.6	胎土：灰黄	川久保皿山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-183 20110217
図 5-16-184 07001225	2-3 面	陶器 小碗	8.0*	3.7*	4.8	胎土：浅黄	川久保皿山窯 17c 後半～18c 前半	
図 5-16-185 07001224	2-3 面	陶器 小碗	8.2*	3.6	4.8	胎土：黒褐	川久保皿山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-185 20110218
図 5-16-186 07001221	2-3 面	陶器 小碗	8.8*	3.7	4.7	胎土：褐灰	川久保皿山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-186 20110215
図 5-16-187 07001219	2-3 面	陶器 小碗	8.3*	3.8	5.4	胎土：灰白	川久保皿山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-187 20110214
図 5-16-188 07001218	2-3 面	陶器 碗	11.2	4.3	3.3	胎土：黄灰	川久保皿山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-188 20110232
図 5-16-189 07001226	2-3 面	陶器 碗	11.2*	4.6*	4.3	胎土：褐灰・灰褐	川久保皿山窯 17c 後半～18c 前半	
図 5-16-190 07001222	2-3 面	陶器 鉢	11.8*	5.0	4.6	胎土：褐灰	川久保皿山窯 17c 後半～18c 前半	5-9-190 20110216
図 5-16-191 07001227	2-3 面	陶器 碗	9.4	4.0	4.8	胎土：灰赤	肥前 1690～18c 前半	5-9-191 20110219
図 5-16-192 07001228	2-3 面	陶器 碗	9.1*	3.8*	5.3	胎土：灰赤	肥前 1690～18c 前半	
図 5-16-193 07001230	2-3 面	陶器 碗	8.9*	3.8	5.3	胎土：暗赤褐	肥前 1690～18c 前半	5-9-193 20110221
図 5-16-194 07001229	2-3 面	陶器 碗	11.4*	4.7*	5.8	胎土：褐灰	肥前 1690～18c 前半	5-9-194 20110220
図 5-16-195 07001231	2-3 面	陶器 碗	12.4*	4.5	4.5	胎土：灰赤	肥前 1690～18c 前半	5-9-195 20110233
図 5-16-196 07001215	2-3 面	陶器 鉢	20.9*	8.5	8.7	胎土：褐灰	肥前 17c 後半	5-9-196 20110263
図 5-16-197 07001214	2-3 面	陶器 鉢	30.4	11.5	7.7	胎土：灰黄褐	肥前 17c 後半 二彩手	5-9-197 20110267
図 5-16-198 10001921	2-3 面	陶器 蓋付鉢	12.8*	-	-	胎土：にぶい黄橙	肥前 17c 第 4 四半期～18c 初	
図 5-16-199 10001922	2 面	陶器 鉢	20.7*	8.1	8.2	胎土：橙	肥前 18c 前半～中頃	
図 5-17-200 08000388	2-3 面	陶器 土瓶	8.7*	6.9*	10.5	胎土：にぶい黄褐	肥前 18c 中頃～後半	5-9-200 20110254

表5-3 6G区第2-3面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-17-201 08000386	2-3 面	陶器 土瓶	9.2*	8.6*	10.7	にぶい赤褐・暗赤褐	肥前カ 18c	5-9-201 20110253
図 5-17-202 08000381	2-3 面	陶器 蓋	8.3	10.2	-	胎土：灰白	京焼 18c 後半か	5-9-202 20110251
図 5-17-203 08000382	2-3 面	陶器 土瓶	9.9	-	11.3*	胎土：灰白	京焼 18c 後半か	5-9-203 20110251
図 5-17-204 08000383	2-3 面	陶器 蓋	6.3	8.8	-	胎土：灰	肥前 18c	5-9-204 20110231
図 5-17-205 08000384	1-2 面	陶器 水注	8.2	8.1*	10.3*	胎土：灰	肥前 18c	5-9-205 20110252
図 5-17-206 08000385	1-2 面	陶器 把手	-	-	-	胎土：灰	肥前 18c	
図 5-17-207 08000387	2-3 面	陶器 水注	6.8*	6.8*	10.5*	外：灰褐 内：暗赤褐	肥前カ 18・19c	
図 5-17-208 10001985	2-3 面	陶器 片口	20.8	9.4	10.6	胎土：にぶい橙	肥前 17c 後半	
図 5-17-209 08000374	2-3 面	陶器 瓶	-	10.3	-	胎土：赤褐	肥前 17c 後半 二彩手	5-9-209 20110268
図 5-17-210 08000375	2-3 面	陶器 瓶	-	9.6	-	胎土：灰	肥前 17c 後半 二彩手	5-9-210 20110269
図 5-18-211 08000353	2-3 面	陶器 搗鉢	-	-	-	胎土：橙	肥前 17c 前半	
図 5-18-212 08000358	2-3 面	陶器 搗鉢	31.6*	10.3	12.5	胎土：赤灰	肥前 17c 後半	5-9-212 20110281
図 5-18-213 08000361	2-3 面	陶器 搗鉢	38.1	12.4	14.6	胎土：暗赤褐	肥前 17c 後半	5-9-213 20110276
図 5-18-214 08000354	2-3 面	陶器 搗鉢	-	10.7	-	胎土：赤灰	肥前 17c 後半	
図 5-18-215 08000343	2-3 面	陶器 搗鉢	29.6	11.0	11.6	胎土：赤褐	肥前 17c 末	
図 5-18-216 08000344	2-3 面	陶器 搗鉢	35.8	-	-	胎土：赤	肥前 17c 末	
図 5-18-217 08000351	2-3 面	陶器 搗鉢	-	-	-	胎土：灰白	肥前 18c	
図 5-18-218 08000362	2-3 面	陶器 甕	30.3	19.2*	34.5	暗褐	肥前 1620～40年代	
図 5-19-219 08000318	2-3 面	白磁 小碗	-	3.2*	-	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-219 20110174
図 5-19-220 08000321	2-3 面	白磁 小碗	9.6	4.5	4.0	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-220 20110125
図 5-19-221 08000316	2-3 面	白磁 小碗	8.9	3.3	5.1	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-221 20110121
図 5-19-222 08000317	2-3 面	白磁 小碗	9.3	3.6	4.9	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-222 20110122
図 5-19-223 08000325	2-3 面	白磁 小碗	9.0*	-	-	胎土：白	肥前 17c 後半～18c 前半	5-10-223 20110175
図 5-19-224 08000326	2-3 面	白磁 小碗	8.4*	-	-	胎土：白	肥前 17c 後半～18c 初	5-10-224 20110176
図 5-19-225 08000324	2-3 面	白磁 小碗	8.4*	3.0	4.7	胎土：灰白	肥前 17c 後半～18c 初	5-10-225 20110193
図 5-19-226 08000327	2-3 面	白磁 小碗	8.2	3.1	4.8	胎土：白	肥前 17c 末～18c 前半	5-10-226 20110128
図 5-19-227 08000315	2-3 面	白磁 小碗	8.2*	3.2	4.7	胎土：灰白	肥前 18c 後半	5-10-227 20110120
図 5-19-228 08000311	2-3 面	白磁 碗	10.5*	4.0	5.3	胎土：白	肥前 1650～60年代	5-10-228 20110116
図 5-19-229 08000310	2-3 面	白磁 碗	11.2	5.0	6.5	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-229 20110115
図 5-19-230 08000319	2-3 面	白磁 小杯	7.0*	3.1*	3.4	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-230 20110123
図 5-19-231 08000332	2-3 面	白磁 小杯	7.8	-	-	胎土：白	肥前 17c 後半	
図 5-19-232 08000329	2-3 面	白磁 小杯	-	3.5	-	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-232 20110129

表 5-3 6G 区第 2-3 面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-19-233 08000320	2-3 面	白磁 小杯	-	3.5*	-	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-233 20110124
図 5-19-234 08000314	2-3 面	白磁 猪口	7.4*	4.2	5.4	胎土：白	肥前 18c 前半 口錆	5-10-234 20110119
図 5-19-235 08000312	2-3 面	白磁 猪口	8.8*	5.1	6.5	胎土：白	肥前 18c 前半 口錆	5-10-235 20110117
図 5-19-236 08000313	2-3 面	白磁 猪口	9.1*	5.1	6.3	胎土：白	肥前 18c 前半 口錆	5-10-236 20110118
図 5-19-237 08000328	2-3 面	白磁 小皿	8.3*	-	-	胎土：白	肥前 17c 後半	
図 5-19-238 08000323	2-3 面	白磁 小皿	8.8*	4.2*	2.6	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-238 20110127
図 5-19-239 08000322	2-3 面	白磁 小皿	8.9	3.9	2.6	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-239 20110126
図 5-19-240 08000331	2-3 面	白磁 皿	20.9*	12.0*	2.4	胎土：白	肥前 1660 年代	5-10-240 20110178
図 5-19-241 10001935	2-3 面	白磁 紅皿	7.2*	4.1	1.9	胎土：灰白	肥前 17c 末～18c 前半	
図 5-19-242 10001934	2-3 面	白磁 紅皿	5.0*	1.6	1.6	胎土：灰白	肥前 18c 末～19c 前半	
図 5-19-243 08000335	2-3 面	青磁 碗	12.5*	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半～18c 前半	
図 5-19-244 08000334	2-3 面	青磁 碗	12.5*	4.6*	4.9	胎土：灰白	肥前 17c 後半～18c 前半	5-10-244 20110699
図 5-19-245 08000336	2-3 面	青磁 碗	12.2	4.7	5.1	胎土：灰白	肥前 17c 後半～18c 前半	5-10-245 20110700
図 5-19-246 08000338	2-3 面	青磁 瓶	8.9	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半	
図 5-19-247 08000339	2-3 面	青磁 瓶	-	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半 高台打欠力	5-10-247 20110693
図 5-19-248 08000341	2-3 面	青磁 瓶	6.2	-	-	胎土：灰	肥前 1630～50 年代	5-10-248 20110697
図 5-19-249 08000342	2-3 面	青磁 瓶	-	4.4*	-	胎土：灰白	肥前 18c	5-10-249 20110695
図 5-19-250 08000340	2-3 面	青磁 火入	7.4*	-	-	胎土：白	肥前 18c	
図 5-19-251 08000745	2-3 面	染付磁器 碗	11.4*	5.8*	5.4	胎土：白・灰白	肥前 1610～30 年代	5-10-251 20110194
図 5-19-252 08000749	2-3 面	染付磁器 碗	10.5	4.5	5.4	胎土：白	肥前 1650～60 年代	5-10-252 20110143
図 5-19-253 10002479	2-3 面	染付磁器 碗	11.1*	4.3*	6.0	胎土：灰白	肥前 1660～70 年代	5-10-253 20110169
図 5-19-254 10002480	2-3 面	染付磁器 碗	11.1*	4.6	6.2	胎土：灰白	肥前 1660～70 年代	5-10-254 20110170
図 5-19-255 10002481	2-3 面	染付磁器 碗	11.1*	4.6	5.7	胎土：灰白	肥前 1660～70 年代	5-10-255 20110171
図 5-20-256 10002478	2-3 面	染付磁器 碗	9.5*	4.1*	4.7	胎土：灰白	肥前 1660～70 年代	5-10-256 20110168
図 5-20-257 10001952	2-3 面	染付磁器 碗	9.7*	3.6	5.3	胎土：灰白	肥前 1660 年代前後	5-10-257 20110002
図 5-20-258 08000737	2-3 面	染付磁器 碗	11.1	4.8	-	胎土：白	肥前 1660～80 年代	5-10-258 20110132
図 5-20-259 08000738	2-3 面	染付磁器 碗	11.2*	4.3*	5.8	胎土：白	肥前 1660～80 年代	5-10-259 20110133
図 5-20-260 10002465	2-3 面	染付磁器 碗	11.2*	-	-	胎土：灰白	肥前 1660～90 年代	
図 5-20-261 08000735	2-3 面	染付磁器 碗	10.2*	4.0	5.4	胎土：白	肥前 1670～90 年代	5-10-261 20110131
図 5-20-262 10002475	2-3 面	染付磁器 碗	10.3*	4.3	5.8	胎土：灰白	肥前 1670～90 年代	5-10-262 20110166
図 5-20-263 08000743	2-3 面	染付磁器 碗	9.1	3.8	5.0	胎土：灰白	肥前 17c 後半	5-10-263 20110138
図 5-20-264 08000748	2-3 面	染付磁器 碗	10.9	3.9	5.9	胎土：白	肥前 17c 後半	5-10-264 20110142

表5-3 6G区第2-3面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-20-265 10001954	2-3 面	染付磁器 碗	10.8*	4.4	5.8	胎土：灰白	肥前 17c 後半	5-10-265 20110004
図 5-20-266 10002477	2-3 面	染付磁器 碗	8.1*	5.4*	6.0	胎土：灰白	肥前 1690～18c 第1四半期	5-10-266 20110200
図 5-20-267 08000734	2-3 面	染付磁器 碗	10.1	4.0	5.7	胎土：白	肥前 1690～18c 第1四半期	5-10-267 20110130
図 5-20-268 08000741	2-3 面	染付磁器 碗	10.6*	4.8	6.3	胎土：灰白	肥前 17c 末～18c 前半	5-10-268 20110136
図 5-20-269 08000740	2-3 面	染付磁器 碗	10.3*	4.7	5.5	胎土：白	肥前 17c 末～18c 初	5-10-269 20110135
図 5-20-270 10002476	2-3 面	染付磁器 碗	10.3*	4.0*	5.6	胎土：灰白	肥前 1690～1730 年代	5-10-270 20110167
図 5-20-271 10002474	2-3 面	染付磁器 碗	10.3*	4.0*	5.3	胎土：灰白	肥前 1690～18c 第1四半期	5-10-271 20110165
図 5-20-272 10002462	2-3 面	染付磁器 碗	10.7*	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 末～18c 前半	5-10-272 20110199
図 5-20-273 10002463	2-3 面	染付磁器 碗	9.8*	4.0	5.7	胎土：灰白	肥前 1690～1730 年代	5-10-273 20110159
図 5-20-274 10002464	2-3 面	染付磁器 碗	-	4.3	-	胎土：灰白	肥前 1690～1730 年代	
図 5-20-275 08000750	2-3 面	染付磁器 碗	9.8	4.2	5.7	胎土：白	肥前 18c 前半	5-10-275 20110144
図 5-20-276 08000736	2-3 面	染付磁器 碗	10.0	4.1	5.1	胎土：白	肥前 18c 前半	5-10-276 20110173
図 5-20-277 10002468	2-3 面	染付磁器 碗	10.4*	3.9*	4.8	胎土：灰白	肥前 18c 前半	5-10-277 20110161
図 5-20-278 10002469	2-3 面	染付磁器 碗	9.7	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 前半	5-10-278 20110162
図 5-20-279 08000744	2-3 面	染付磁器 碗	9.6*	4.2*	-	胎土：白	肥前 18c 前半	5-10-279 20110139
図 5-20-280 08000747	2-3 面	染付磁器 碗	10.0*	4.3*	5.4	胎土：白	肥前 18c 前半	5-10-280 20110141
図 5-21-281 10001938	2-3 面	磁器 碗	11.0*	-	4.1	胎土：灰白	肥前 17c 後半 外面瑠璃釉	5-11-281 20110196
図 5-21-282 10001933	2-3 面	色絵磁器 小碗	8.4*	-	3.5	胎土：灰白	肥前 1670～1700 年代	5-11-282 20110180
図 5-21-283 10001936	2-3 面	色絵磁器 碗	12.0*	-	4.8	胎土：灰白	肥前 17c 後半	5-11-283 20110182
図 5-21-284 10001937	2-3 面	色絵磁器 碗	15.7*	5.5	6.4	胎土：灰白	肥前 1670～90 年代	5-11-284 20110201・202
図 5-21-285 08000746	2-3 面	染付磁器 碗	9.4*	3.7	5.8	胎土：白	肥前 1710～40 年代	5-11-285 20110140
図 5-21-286 10001947	2-3 面	染付磁器 小杯	6.0	2.8	4.2	胎土：白	肥前 1630～50 年代	5-11-286 20110156
図 5-21-287 10001945	2-3 面	染付磁器 小杯	6.8	2.9	4.3	胎土：白	肥前 17c 後半	5-11-287 20110154
図 5-21-288 10002461	2-3 面	染付磁器 小杯	7.8*	-	-	胎土：白	肥前 1660～90 年代	5-11-288 20110190
図 5-21-289 10001944	2-3 面	染付磁器 猪口	7.4*	-	4.8	胎土：灰白	肥前 18c 前半	5-11-289 20110189
図 5-21-290 10001931	2-3 面	染付磁器 小碗	7.4*	3.1	4.1	胎土：灰白	肥前 18c 前半	
図 5-21-291 10001927	2-3 面	染付磁器 小碗	8.6*	3.6	4.4	胎土：灰白	肥前 18c 前半	5-11-291 20110148
図 5-21-292 10001928	2-3 面	染付磁器 小碗	8.4*	3.5	4.4	胎土：灰白	肥前（吉田窯力）18c 前半	5-11-292 20110149
図 5-21-293 10001926	2-3 面	染付磁器 小碗	7.9*	3.6	3.7	胎土：灰白	在地力 18c 前半～中頃	5-11-293 20110147
図 5-21-294 10001929	2-3 面	染付磁器 小碗	8.1	3.4	4.4	胎土：灰白	在地力 18c 前半～中頃	5-11-294 20110150
図 5-21-295 10001930	2-3 面	染付磁器 小碗	8.5	3.5	4.5	胎土：灰白	在地力 18c 前半～中頃	5-11-295 20110151
図 5-21-296 08000739	2-3 面	染付磁器 小碗	8.4	3.3	4.9	胎土：白・灰白	肥前 1690～18c 前半	5-11-296 20110134

表 5-3 6G 区第 2-3 面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-21-297 10002482	2-3 面	染付磁器 小碗	8.9	3.5	5.0	胎土：灰白	肥前 17c 第 4 四半期	5-11-297 20110172
図 5-21-298 10002467	2-3 面	染付磁器 小碗	-	3.3*	-	胎土：灰白	肥前 1690～1730 年代	
図 5-21-299 10002466	2-3 面	染付磁器 小碗	8.4	3.2	4.5	胎土：灰白	肥前 1690～1730 年代	5-11-299 20110160
図 5-21-300 10001946	2-3 面	染付磁器 小碗	7.3	2.9	4.6	胎土：白	肥前 1690～18c 第 1 四半期	5-11-300 20110155
図 5-21-301 10001948	2-3 面	染付磁器 仏飯器	8.3	4.1	6.2	胎土：白	肥前 1640～50 年代	5-11-301 20110157
図 5-21-302 10002460	2-3 面	染付磁器 蓋付小鉢	10.3*	-	-	胎土：白	肥前 17c 後半	5-11-302 20110198
図 5-21-303 08000757	2-3 面	染付磁器 鉢	16.6*	-	-	胎土：白	肥前 1660～90 年代	
図 5-21-304 08000755	2-3 面	染付磁器 皿	12.9*	5.2	3.5	胎土：灰白	肥前 1630～40 年代	5-11-304 20110248
図 5-21-305 08000751	2-3 面	染付磁器 皿	13.5*	8.1	2.5	胎土：白	肥前 1660～70 年代	5-11-305 20110246・389
図 5-21-306 08000752	2-3 面	染付磁器 皿	13.1	7.6	2.7	胎土：白	肥前 1650～70 年代	5-11-306 20110247・390
図 5-22-307 08000753	2-3 面	染付磁器 皿	19.7*	10.9*	3.2	胎土：白	肥前 18c 前半	
図 5-22-308 08000754	2-3 面	染付磁器 皿	-	-	-	胎土：白	肥前 18c 前半	5-11-308 20110342・343
図 5-22-309 08000756	2-3 面	染付磁器 鉢	13.6	7.7	4.9	胎土：白	肥前 18c 第 1 四半期前後	5-11-309 20110277
図 5-22-310 08000758	2-3 面	染付磁器 鉢	17.6	9.1	6.4	胎土：白	肥前 1690～1730 年代	5-11-310 20110265
図 5-22-311 08000708	2-3 面	色絵磁器 瓶	-	6.1*	-	胎土：白	肥前 1650～60 年代	5-11-311 20110274
図 5-22-312 08000706	2-3 面	染付磁器 瓶	-	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半	
図 5-22-313 08000702	2-3 面	染付磁器 瓶	-	6.2	-	胎土：灰白	肥前（吉田窯力） 17c 後半	5-11-313 20110271
図 5-22-314 08000704	2-3 面	染付磁器 瓶	-	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半	
図 5-22-315 08000703	2-3 面	染付磁器 瓶	-	7.4	-	胎土：灰白	肥前（吉田窯力） 17c 後半	
図 5-22-316 08000709	2-3 面	染付磁器 瓶	5.8	-	-	胎土：灰白	肥前（吉田窯力） 17c 後半	
図 5-22-317 08000707	2-3 面	染付磁器 瓶	-	5.8	-	胎土：にぶい黄橙	肥前 17c 後半	
図 5-23-318 08000701	2-3 面	染付磁器 瓶	-	7.0	-	胎土：白	肥前 17c 後半～18c 初	5-11-318 20110270
図 5-23-319 10001939	2-3 面	染付磁器 花生	幅 4.8	-	-	胎土：灰白	肥前 1670～90 年代	5-11-319 20110183・184
図 5-23-320 10001942	2-3 面	色絵磁器 水滴	-	-	-	胎土：灰白	有田 1680～90 年代	5-11-320 20110197
図 5-23-321 10001940	2-3 面	色絵磁器 水滴	幅 4.1	-	2.6	胎土：灰白	有田 18c 後半	5-11-321 20110185
図 5-23-322 10001941	2-3 面	染付磁器 水滴	-	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 中頃～末	5-11-322 20110186・187
図 5-23-323 10001943	2-3 面	色絵磁器 水滴	-	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 後半～19c 初	5-11-323 20110188
図 5-23-324 10001923	2-3 面	染付磁器 碗	10.0	4.1	5.2	胎土：灰白	波佐見系 18c 後半	5-11-324 20110145
図 5-23-325 10002472	2-3 面	染付磁器 碗	-	3.3*	-	胎土：灰白	肥前 18c 後半	
図 5-23-326 10002471	2-3 面	染付磁器 碗	9.6*	3.5	4.9	胎土：灰白	肥前 18c 後半	
図 5-23-327 10002470	2-3 面	染付磁器 碗	10.2*	3.5*	5.0	胎土：灰白	肥前 18c 後半	5-11-327 20110163
図 5-23-328 10001924	2-3 面	染付磁器 碗	9.2	-	3.3	胎土：灰白	肥前 1770～1810 年代	

表5-3 6G区第2-3面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-23-329 10001925	2-3 面	染付磁器 碗	10.0*	-	3.3	胎土：灰白	肥前 1770～1810年代	
図 5-23-330 08000742	2-3 面	染付磁器 碗	9.9*	3.7	5.1	胎土：白	肥前 1770～1810年代	5-11-330 20110137
図 5-23-331 10002473	2-3 面	染付磁器 碗	10.6*	-	-	胎土：灰白	肥前 18c 第4 四半期	
図 5-23-332 10002432	2-3 面	土師器 小皿	6.1	3.9	1.4	浅黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-23-333 10002431	2-3 面	土師器 小皿	6.1	4.0	1.6	浅黄橙	底部糸切	
図 5-23-334 10002446	2-3 面	土師器 小皿	6.2	3.5	2.2	浅黄橙	底部糸切	
図 5-23-335 10002430	2-3 面	土師器 小皿	6.3	3.7	1.5	浅黄橙	底部糸切	
図 5-23-336 10002433	2-3 面	土師器 小皿	6.3	4.4	2.1	黄橙	底部糸切	
図 5-23-337 10002441	2-3 面	土師器 小皿	6.3	3.8	1.7	浅黄橙	底部糸切	
図 5-23-338 10002438	2-3 面	土師器 小皿	6.3	3.6	1.2	浅黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-23-339 10002434	2-3 面	土師器 小皿	6.3	3.5	1.4	浅黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-23-340 10002435	2-3 面	土師器 小皿	6.3	3.3	1.6	淡黄	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-23-341 10002439	2-3 面	土師器 小皿	6.4	3.9	1.4	橙	底部糸切	
図 5-23-342 10002445	2-3 面	土師器 小皿	6.4	3.7	1.9	浅黄橙	底部糸切	
図 5-23-343 10002437	2-3 面	土師器 小皿	6.5	3.6	1.2	浅黄橙	底部糸切	
図 5-23-344 10002440	2-3 面	土師器 小皿	6.7	4.2	1.5	浅黄橙	底部糸切	
図 5-23-345 10002451	2-3 面	土師器 小皿	6.7	3.8	1.9	黒褐	底部糸切	
図 5-23-346 10002436	2-3 面	土師器 小皿	6.8	4.0	1.6	橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-23-347 10002443	2-3 面	土師器 小皿	7.0	4.6	1.3	浅黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-23-348 10002442	2-3 面	土師器 小皿	7.0	4.9	1.9	にぶい黄橙	底部糸切	
図 5-23-349 10002449	2-3 面	土師器 小皿	7.1	4.0	1.7	灰白	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-23-350 10002444	2-3 面	土師器 小皿	7.2	4.0	1.4	橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-23-351 10002450	2-3 面	土師器 小皿	8.1	4.8	1.8	にぶい橙	底部糸切	
図 5-23-352 10002453	2-3 面	土師器 小皿	8.7	5.4	1.7	浅黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-23-353 10002454	2-3 面	土師器 小皿	8.4	4.9	2.1	浅黄橙	底部糸切	
図 5-23-354 10002457	2-3 面	土師器 杯	9.4	4.0	2.5	灰白	底部糸切	
図 5-23-355 10002456	2-3 面	土師器 杯	9.7	4.0	2.8	浅黄橙	底部糸切	
図 5-23-356 10002455	2-3 面	土師器 杯	11.0	4.2	2.7	にぶい黄橙	底部糸切	

5 第3面の遺構と遺物

遺構

第3面の遺構としては、石組遺構、トイレ遺構、石列、土坑などを検出したが、全体的に明確な遺構は少なく、柱穴も多くは検出されていない（図5－24）。調査区北部に周囲より約0.1 m高い基壇状の部分を約0.6 × 0.7 mの範囲で確認し、そのほぼ中央にSX6058があるが、その性格は不明といわざるを得ない。また、調査区西部に位置する石列であるSX6064、東部に位置する方形状の石組であるSX6078も性格不明であり、第3面は全体的にその構造を把握することが難しい。調査区北部に位置するSX6069は最下層に炭化物層が認められる土坑である。

ただ、調査区北東部に位置するSX6100トイレ遺構は簡易的なものではなく、第4面との間に厚くないとはいえ整地層が認められることから、何らかの施設があったことは確実であろう。柱穴の少なさからみて、礎石建物が存在した可能性が高いものと思われる。なお、SX6058周辺とSX6100周辺は1.3 mほどの標高差があるが、その間がどのような構造になっていたかは、調査で明らかにできなかった。

SX6058（図5－25）

調査区北部に位置する性格不明の石組遺構である。長さ0.6 m、幅0.2～0.25 mの石材を中心として約1.6 m四方の方形状に石を並べており、約0.7 × 0.85 mほどの空間を作り出している。図示していないが、周辺の土層などからみて、掘形をもつものではなく、基壇状の盛土構築中に設置されたものと考えられる。石列は1段のみ検出されているが、これより上部にも石が積み上げられていたかどうかは不明である。

SX6063（図5－25）

調査区北部に位置する完形の染付磁器小壺1点・土師器小皿2点、破片となった土師器小皿1点分が比較的集中して出土した部分を遺構とした。わずかな掘り込みが確認できたようであるが、SX6058に近接していることから、一連の構築作業中に埋置された可能性が高い。

SX6063 出土遺物（図5－27）

357・358は底部糸切の土師器小皿で、357は口縁部に油煤が付着している。359は底部糸切の土師器杯である。360は肥前染付磁器小壺で、内面と底部は無釉である。外面に瓢箪が2箇所、十字のそれぞれの先端に円が描かれた文様が1箇所描かれる。

SX6100（図5－26）

調査区北東部に位置するトイレと考えられる遺構である。調査期間の都合で詳細に構築状況などは確認できなかったが、平面が約2.0 m四方の方形状に0.1～0.7 mの大きさの石材を並べて、区画を形成している。区画内部の南辺に近接して木桶を2個並置している形態からトイレ遺構と推定した。区画の四隅には礎石となる可能性がある石材が配置されており、北辺については構築当初から石が配されていなかったかどうかは不明である。確実ではないが、西辺にのみ下位に3段ほどの石材が確認できたので、第4面のSX6095から南方向に構築されていた石垣を利用した可能性がある。また、南辺中央から約0.6 m南に大きさ0.5 mの扁平な石材が置かれたような状態で確認され、SX6100に関連する可能性がある。

内部の木桶は西側のもの（SX6101）は底部付近の板材が比較的良好に残存していたが、東側のもの（SX6102）はごくわずかに板材が残るのみで、土層でその存在が確認されるだけである。SX6101内部からは種子が多数出土しており、金原正明先生の現地における分析では、ウメがもっとも多く、他にヤマモモ・カキ・ナスの種子が確認されている。



図5-24 第3面の遺構分布 (1/250)

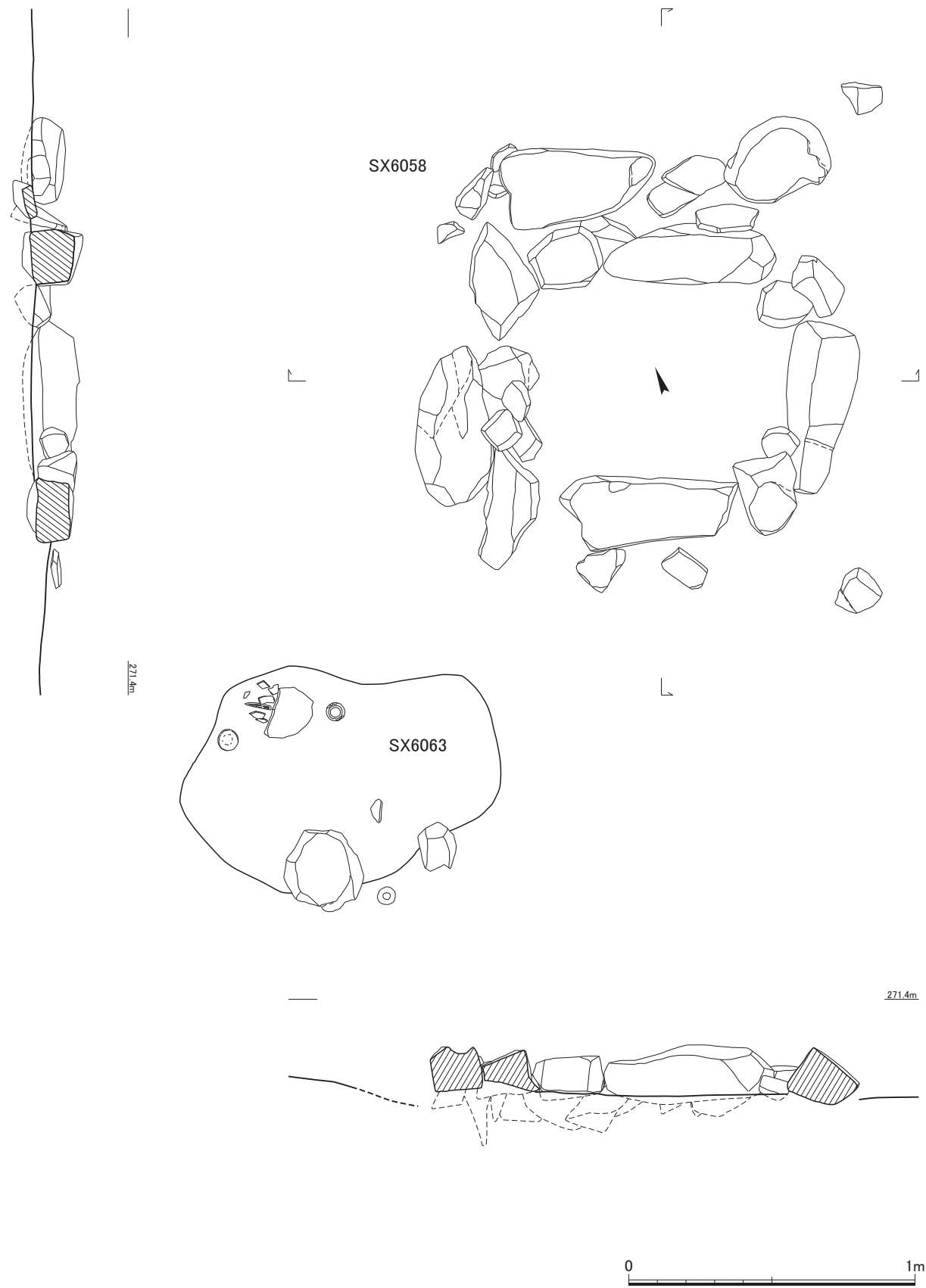


図 5 - 25 SX6058 (1/20)

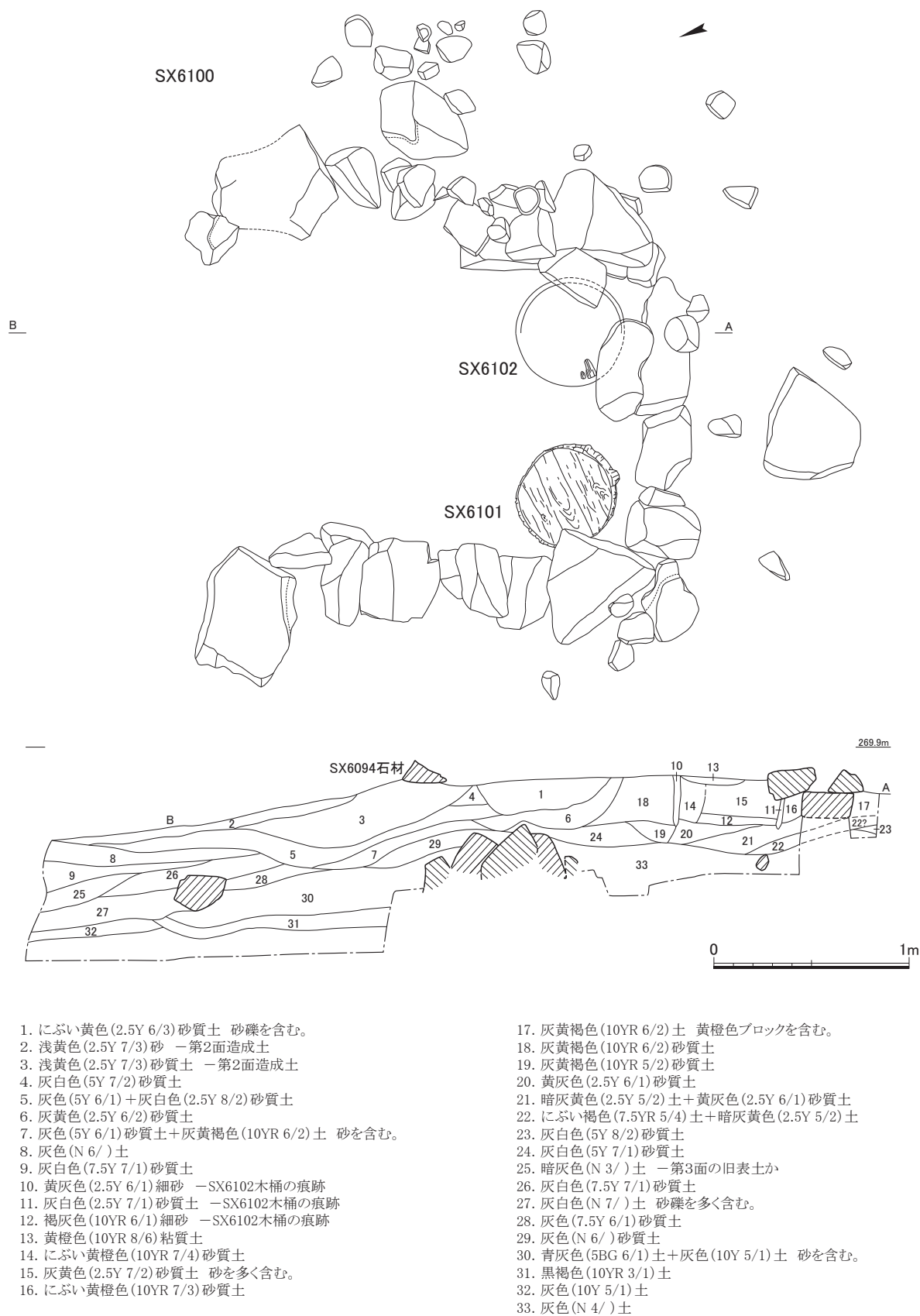


図5-26 SX6100 (1/30)

遺物（図 5－27～29）

第 3 面と 3－4 面から出土した遺物としては、中世の輸入陶磁器（白磁・青磁・青花）、中世～近世の国産陶磁器（肥前・常滑・備前）、在地系土器（土師器・瓦質土器）などの他、銅製柄付鉄刀子がある。

361～369 は第 3 面から出土した。361 は肥前陶器播鉢で、玉縁状の口縁部のみに鉄釉を施す。362～364 は肥前染付磁器である。362 は碗で、呉器手を意識した器形の可能性がある。363 は油壺、364 は芙蓉手の皿である。365 は肥前白磁瓶である。366 は底部糸切の土師器小皿で、SX6100 周辺から出土した完形のものである。367 は底部糸切の土師器杯である。368 は瓦質土器鍋または焙烙である。369 は鉄製刀子で、長さ 9.6cm の柄の部分には鉄地に銅板が被せられている。SX6058 横から出土した。

370～440 は第 3 面の整地層とした 3－4 面から出土した遺物で、第 4 面で使用されていたもの、第 3 面造成時のもの、第 3 面で使用されていたものが含まれているものと考えられる。

370 は白磁森田 D 群の皿である。371～376 は竜泉窯系青磁である。371～374 は碗で、371 は線描きの蓮弁文を施す上田 B IV 類、372 は片切彫に近い丸彫で蓮弁文を施す上田 B III a 類、373 は外面無文の I 類、374 は口縁が外反する上田 D 類である。375 は皿、376 は稜花皿である。377～383 は青花である。377 は皿小野 B1 群、378 は皿小野 C 群である。379・381 は皿、380 は碗または皿の口縁部である。382 は小杯の口縁部、383 は碗の底部である。384 は青花香炉と考えられる。385 は朝鮮王朝期の陶器瓶で、白象嵌が施される。386 は常滑窯の大甕胴部破片である。

387～389 は肥前陶器碗である。387 は天目形で、鉄釉が施される。388・389 は内野山窯の製品とみられ、灰釉が施される。390～399 は肥前陶器皿である。390 は口縁部をなぶり口にしたもので、藁灰釉が施される。391 は岸岳系製品で藁灰釉の可能性はある。392～394 は灰釉が施され、内面に胎土目跡が残る。395～399 は溝縁のもので、灰釉が施され、砂目跡が残る。400 は肥前陶器花瓶または水差で、銅釉が施される。401 は肥前産と思われる陶器鉢で、タタキ成形である。402 は肥前陶器甕で、底部に目跡が残る。403 は肥前または福岡産の陶器甕で、鉄釉が施され、内面には当て具痕がみられない。同一個体と思われる破片には、文字の可能性のある陽刻がある。

404～408 は肥前染付磁器碗である。404 は筒形で、高台畳付は釉剥ぎである。405 は全釉で、高台に目跡が残る。406～408 は丸形碗である。409・410 は内外面で釉を掛け分ける磁器碗で、外面に 409 は鉄釉、410 は青磁釉を施す。411 は染付とみられる肥前磁器碗で、高麗茶碗に近い形態と思われる。412 は肥前青磁碗で、高台内は無釉である。413 は肥前染付磁器瓶で、焼成不良のため、釉の発色が悪い部分が多い。414 は肥前染付磁器小杯、415 は染付とみられる磁器瓶である。

416～425 は底部糸切の土師器小皿で、口径 5.6～8.6cm、器高 1.4～2.2cm である。426～431 は底部糸切の土師器杯である。432 は土師器火入で、3 箇所脚が付く。433・434 は瓦質土器火鉢で、434 には印刻文が施される。435・436 は瓦質土器茶釜で、435 の肩部には印刻文が施される。437 は瓦質土器播鉢である。438 は土師器鍋で、口縁部が玉縁状の皿類、439・440 は瓦質土器鍋で、直口口縁で鉢形の IV 類である。

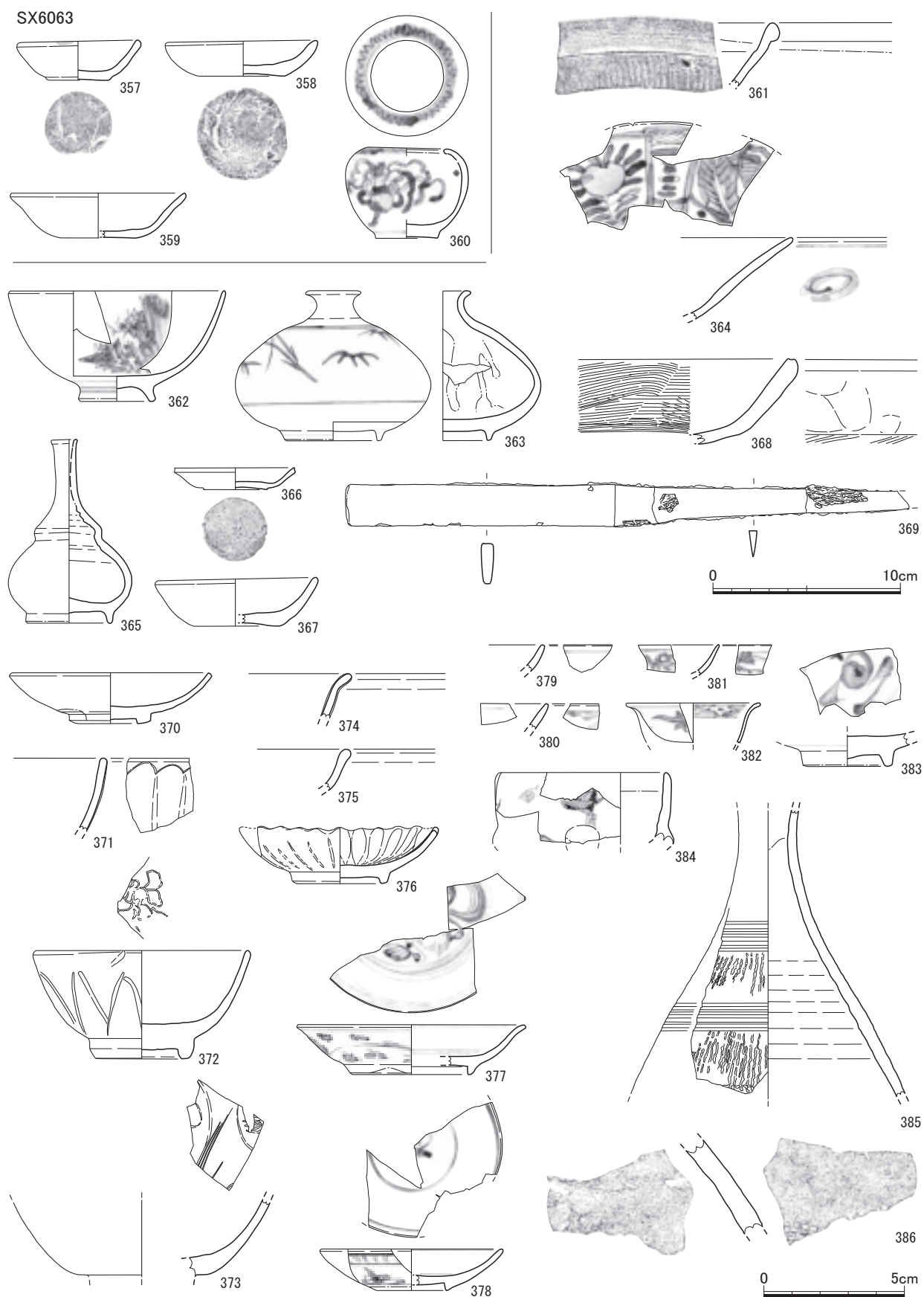


図5-27 第3面・3-4面の出土遺物 (369は1/2、他は1/3)

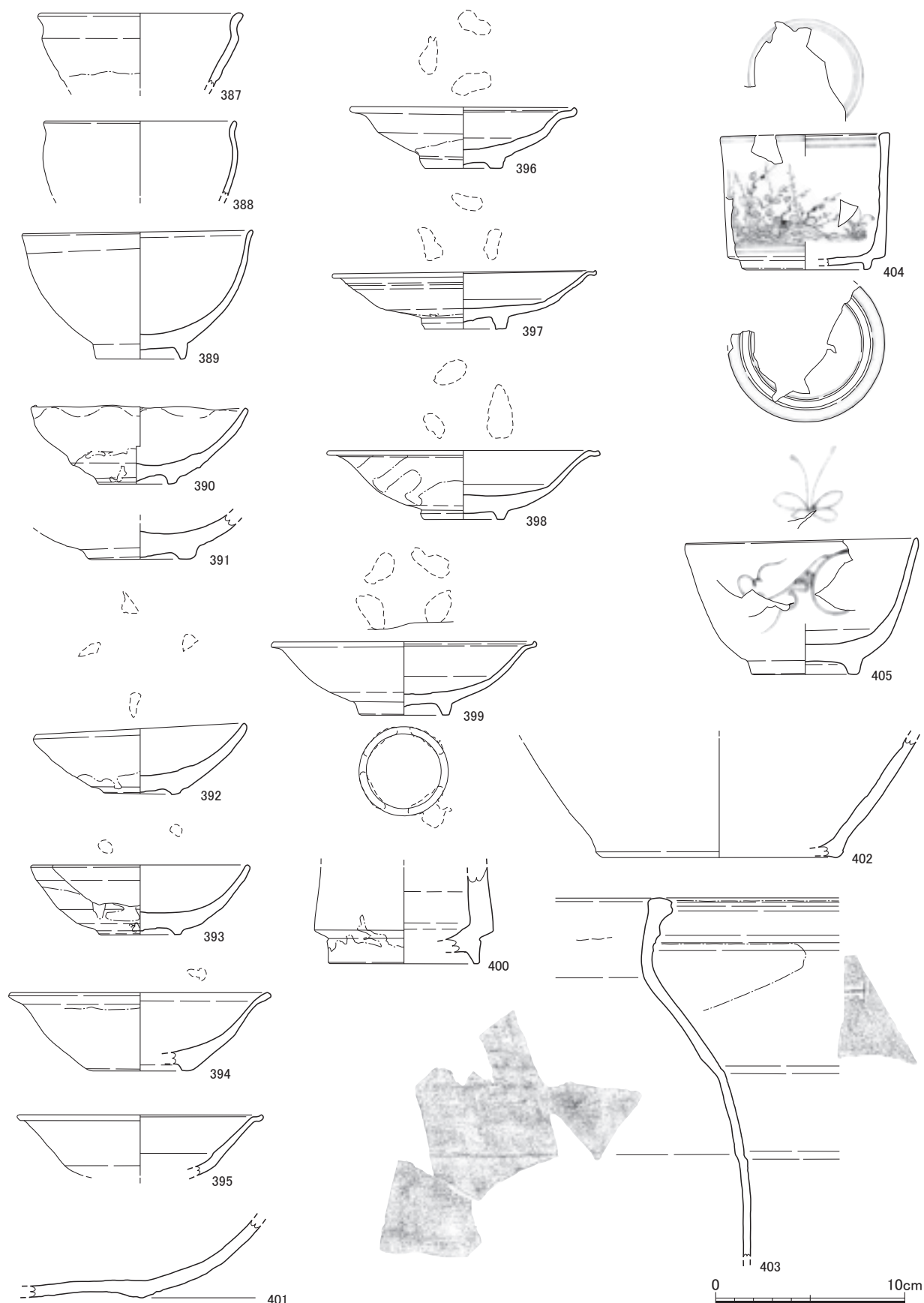


図5-28 3-4面の出土遺物2 (1/3)

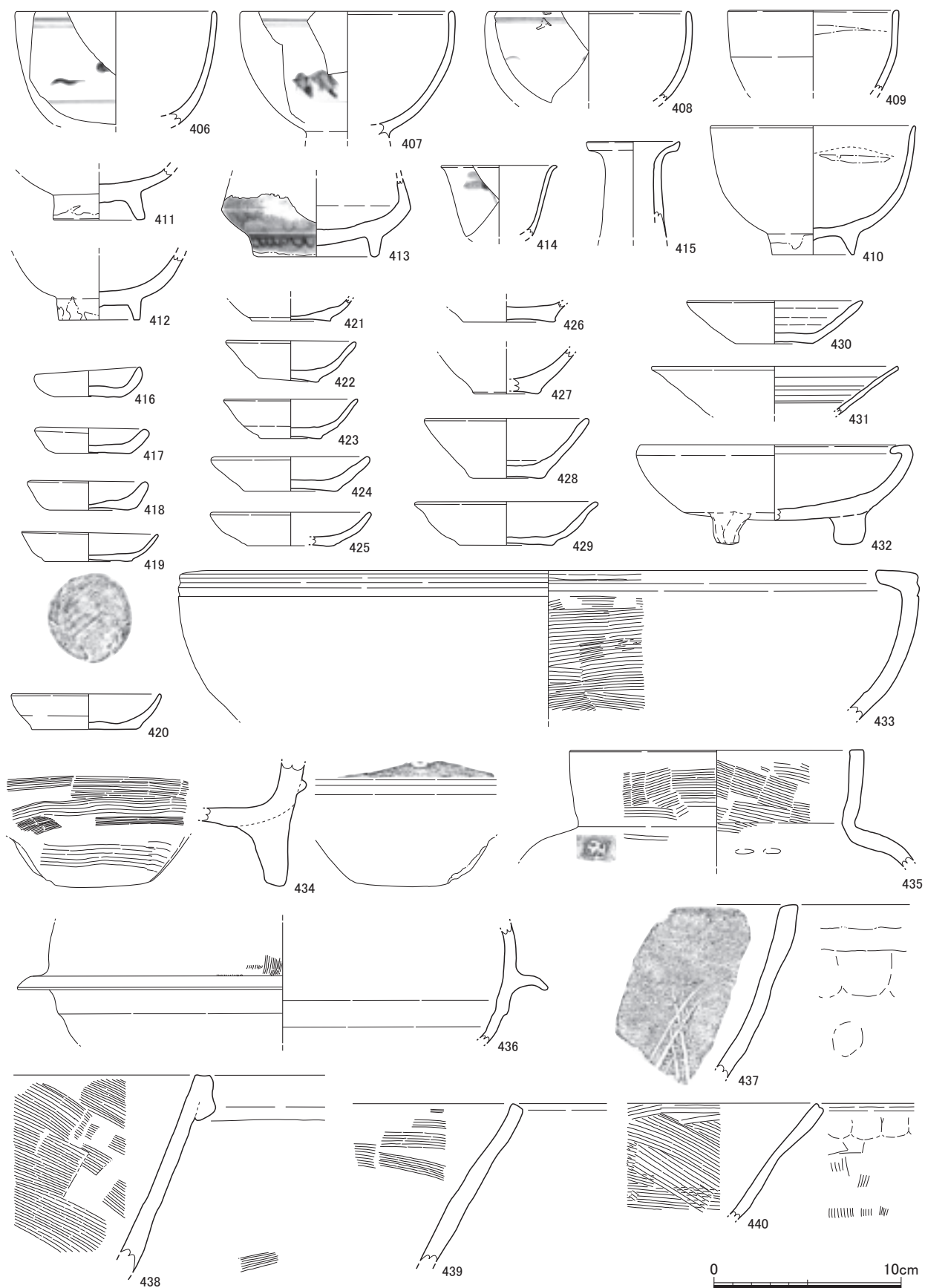


図5-29 3-4面の出土遺物3 (1/3)

表 5-4 6G 区第 3 面・3-4 面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-27-357 10001914	SX6063	土師器 小皿	6.6	3.6	2.2	にぶい黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	5-15-357 20110026
図 5-27-358 10001916	SX6063	土師器 小皿	8.2	4.6	1.9	橙	底部糸切	5-15-358 20110027
図 5-27-359 10001915	SX6063	土師器 杯	9.4*	2.0*	2.4	外:浅黄 内:黄灰	底部糸切後ナデか	
図 5-27-360 10002525	SX6063	染付磁器 小壺	3.9	3.3	4.9	露胎部:灰白	肥前 1650～60年代	5-15-360 20110028・29
図 5-27-361 10001920	3 面	陶器 播鉢	-	-	-	胎土:黒褐	肥前 17c 末	
図 5-27-362 10001953	3 面	染付磁器 碗	11.6	4.1	5.9	胎土:灰白	肥前 1660～80年代	5-15-362 20110003
図 5-27-363 10001932	3 面	染付磁器 油壺	3.0*	5.2	8.0	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-15-363 20110152
図 5-27-364 10001255	3 面	染付磁器 皿	-	-	-	胎土:灰白	肥前 1655～60年代	5-15-364 20110093・94
図 5-27-365 10001256	3 面	白磁 瓶	1.4	4.5	9.8	胎土:灰白	肥前 17c 後半	5-15-365 20110023
図 5-27-366 10001899	SX6100	土師器 小皿	6.4	3.4	1.2	橙	底部糸切	
図 5-27-367 10001913	3 面	土師器 杯	8.7	4.5	2.6	橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-27-368 10001918	3 面	瓦質土器 鍋	-	-	-	灰黄褐		
図 5-27-369 10003120	3 面	鉄器 刀子	長 20.0+	幅 1.5*	厚 0.5		重さ 33.4g 刃部先端欠損	5-15-369 20110205
図 5-27-370 07003921	3-4 面	白磁 皿	10.8*	4.3	2.7	胎土:灰白	森田 D 群	5-15-370 20110087
図 5-27-371 07003912	3-4 面	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗上田 D 類	5-15-371 20110060
図 5-27-372 07003911	3-4 面	青磁 碗	11.6*	5.0*	5.8	胎土:灰白	竜泉窯系 碗上田 B Ⅲ a 類	5-15-372 20110012
図 5-27-373 07003926	3-4 面	青磁 碗	-	5.9 *	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗 I 類	5-15-373 20110090
図 5-27-374 07003914	3-4 面	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗上田 D 類	5-15-374 20110061
図 5-27-375 07003882	3-4 面	青磁 皿	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系	5-15-375 20110034
図 5-27-376 07003923	3-4 面	青磁 菱花皿	10.6	5.1	3.0	胎土:淡黄	竜泉窯系	5-15-376 20110013
図 5-27-377 07003922	3-4 面	青花 皿	12.2*	6.6*	2.7	胎土:灰白	小野 B1 群	5-15-377 20110088・89
図 5-27-378 07003920	3-4 面	青花 皿	9.8*	3.7*	2.2	胎土:灰白	小野 C 群	5-15-378 20110085・86
図 5-27-379 07003915	3-4 面	青花 皿	-	-	-	胎土:灰白		5-15-379 20110062
図 5-27-380 07003916	3-4 面	青花 皿	-	-	-	胎土:灰白	福建系	5-15-380 20110063
図 5-27-381 07003917	3-4 面	青花 皿	-	-	-	胎土:灰白	景德鎮窯系	5-15-381 20110064
図 5-27-382 07003918	3-4 面	青花 小杯	7.2*	-	-	胎土:灰白	景德鎮窯系	5-15-382 20110067・68
図 5-27-383 07003919	3-4 面	青花 碗	-	4.8	-	胎土:灰白		5-15-383 20110068・69
図 5-27-384 10001963	3-4 面	青花 香炉力	9.0*	-	-	胎土:浅黄橙	福建系力 16c 後半～17c 前半	5-15-384 20110099
図 5-27-385 07003929	3-4 面	陶器 瓶	-	-	-	胎土:灰白	朝鮮 15・16c 白象嵌	5-15-385 20110111
図 5-27-386 07003927	3-4 面	陶器 大甕	-	-	-	外:灰白・褐灰 内:褐灰・褐	常滑 14c 前後	5-15-386 20110091

表5-4 6G区第3面・3-4面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-28-387 07001239	3-4 面	陶器 碗	8.8*	-	-	胎土：灰白	肥前 1590～1610 年代	5-16-387 20110031
図 5-28-388 07001240	3-4 面	陶器 碗	-	-	-	胎土：灰白	肥前（内野山窯カ） 1610～30 年代	5-16-388 20110032
図 5-28-389 10001322	3-4 面	陶器 碗	12.3	4.8	6.8	胎土：灰白	内野山窯 1610～30 年代	5-16-389 20110001
図 5-28-390 07001235	3-4 面	陶器 皿	11.3	4.2	4.1	胎土：灰白	肥前 1580～90 年代	5-16-390 20110015
図 5-28-391 07001237	3-4 面	陶器 皿	-	5.7	-	胎土：灰白	岸岳系か	5-16-391 20110075・76
図 5-28-392 07001234	3-4 面	陶器 皿	11.3	4.2	3.8	胎土：褐	肥前 1590～1610 年代	5-16-392 20110014
図 5-28-393 07001236	3-4 面	陶器 皿	11.6*	4.2	3.7	胎土：灰白	肥前 1590～1610 年代	5-16-393 20110073・74
図 5-28-394 07001238	3-4 面	陶器 皿	13.8*	5.7*	4.2	胎土：浅黄橙	肥前 1590～1610 年代	5-16-394 20110077
図 5-28-395 07001243	3-4 面	陶器 皿	13.0*	-	-	胎土：灰白	肥前 1610～30 年代	5-16-395 20110033
図 5-28-396 07001242	3-4 面	陶器 皿	12.0	4.2	3.2	胎土：灰	肥前 1610～30 年代	5-16-396 20110016
図 5-28-397 07001241	3-4 面	陶器 皿	14.0*	4.4	3.0	胎土：浅黄	肥前 1610～30 年代	5-16-397 20110018
図 5-28-398 08000379	3-4 面	陶器 皿	14.5*	4.3	3.6	胎土：灰白	肥前 1610～30 年代	5-16-398 20110022
図 5-28-399 07001245	3-4 面	陶器 皿	14.0*	4.8	3.9	胎土：灰白	内野山窯 1610～30 年代	5-16-399 20110017
図 5-28-400 10001961	3-4 面	陶器 花瓶か水指	-	8.0	-	胎土：灰黄	肥前 1610～50 年代	5-16-400 20110098
図 5-28-401 10001964	3-4 面	陶器 鉢	-	-	-	外：赤灰・にぶい赤褐 内：赤灰	肥前か 16c 末～17c 初	5-16-401 20110112
図 5-28-402 10001965	3-4 面	陶器 甕	-	13.1	-	外：にぶい赤褐 内：黄灰	肥前 17c 第1 四半期	5-16-402 20110106
図 5-28-403 10002458	3-4 面	陶器 甕	-	-	-	胎土：灰白	肥前か福岡（高取か） 17c 第1 四半期	5-16-403 20110113・114
図 5-28-404 10001254	3-4 面	染付磁器 碗	8.9	6.8	7.3	胎土：灰白	肥前 1610～30 年代	5-16-404 20110010
図 5-28-405 10001252	3-4 面	染付磁器 碗	12.3*	5.7	7.2	胎土：灰白	肥前 1610～30 年代	5-16-405 20110008
図 5-29-406 10001949	3-4 面	染付磁器 碗	10.8*	-	-	胎土：灰白	肥前 1630～40 年代	5-16-406 20110096
図 5-29-407 10001950	3-4 面	染付磁器 碗	11.5*	-	-	胎土：灰白	肥前 1640～60 年代	
図 5-29-408 10001951	3-4 面	染付磁器 碗	10.8*	-	-	胎土：灰白	肥前 1630～50 年代	5-16-408 20110070
図 5-29-409 10001959	3-4 面	磁器 碗	9.2*	-	-	胎土：灰白	肥前 1630～40 年代	5-16-409 20110072
図 5-29-410 10001957	3-4 面	磁器 碗	11.0*	4.4	6.9	胎土：灰白・灰黄	肥前 1630～40 年代	5-16-410 20110005
図 5-29-411 10001967	3-4 面	磁器 碗	-	4.9	-	胎土：灰白	肥前 1630～50 年代	5-16-411 20110025
図 5-29-412 10001958	3-4 面	青磁 碗	-	4.4	-	胎土：灰白・浅黄橙	肥前 1630～40 年代	5-16-412 20110024
図 5-29-413 10001962	3-4 面	染付磁器 瓶	-	6.80	-	胎土：灰白	肥前 1640～60 年代	5-16-413 20110006
図 5-29-414 10001956	3-4 面	染付磁器 小杯	6.2*	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 後半	5-16-414 20110071
図 5-29-415 10001960	3-4 面	染付磁器 瓶	5.0*	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 中～後半	5-16-415 20110097
図 5-29-416 10001917	3-4 面	土師器 小皿	5.6	3.6	1.6	胎土：灰白	底部条切	

表 5-4 6G 区第 3 面・3-4 面の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-29-417 10001889	3-4 面	土師器 小皿	6.1	4.1	1.4	浅黄橙	底部糸切	
図 5-29-418 10001890	3-4 面	土師器 小皿	6.4	4.4	1.4	浅黄橙	底部糸切	
図 5-29-419 10001888	3-4 面	土師器 小皿	7.3	4.7	1.6	浅黄橙	底部糸切	
図 5-29-420 10001906	3-4 面	土師器 小皿	8.0	5.8	1.9	橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-29-421 10001891	3-4 面	土師器 小皿	-	4.2*	-	浅黄橙	底部糸切	
図 5-29-422 10001887	3-4 面	土師器 小皿	7.0	3.2	2.2	浅黄橙	底部糸切	
図 5-29-423 10001886	3-4 面	土師器 小皿	7.2*	3.4*	2.1	灰白	底部糸切	
図 5-29-424 10001911	3-4 面	土師器 小皿	8.5*	4.9*	1.9	外: にぶい橙 内: 灰黄褐	底部糸切	
図 5-29-425 10001893	3-4 面	土師器 小皿	8.6*	4.6*	1.9	橙	底部糸切	
図 5-29-426 10001895	3-4 面	土師器 杯	-	4.9	-	橙	底部糸切	
図 5-29-427 10001905	3-4 面	土師器 杯	-	3.6*	-	外: にぶい黄橙 内: 灰黄褐	底部糸切	
図 5-29-428 10001903	3-4 面	土師器 杯	8.8*	3.6	3.2	にぶい黄褐・灰黄褐	底部糸切	
図 5-29-429 10001894	3-4 面	土師器 杯	9.8*	5.2*	2.3	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄褐	底部糸切	
図 5-29-430 10001884	3-4 面	土師器 杯	9.4	4.1	2.3	浅黄橙	底部糸切	
図 5-29-431 10001904	3-4 面	土師器 杯	13.2*	-	-	灰白		
図 5-29-432 10001898	3-4 面	土師器 火入	14.8*	-	5.3	明黄褐	口縁煤付着	
図 5-29-433 10001872	3-4 面	瓦質土器 火鉢	39.6*	-	-	灰		5-16-433 20110208
図 5-29-434 10001919	3-4 面	瓦質土器 火鉢	-	-	-	外: 褐灰 内: 灰黄		
図 5-29-435 10001885	3-4 面	瓦質土器 茶釜	15.8*	-	-	褐灰		
図 5-29-436 10001900	3-4 面	瓦質土器 茶釜	28.3*	-	-	外: 橙 内: 黒褐	外面煤付着	
図 5-29-437 10001910	3-4 面	瓦質土器 播鉢	-	-	-	外: 黄灰 内: にぶい黄橙		
図 5-29-438 10001897	3-4 面	土師器 鍋	-	-	-	橙	外面煤付着	5-16-438 20110209
図 5-29-439 10001896	3-4 面	瓦質土器 鍋	-	-	-	にぶい橙	外面煤付着	
図 5-29-440 10001909	3-4 面	瓦質土器 鍋	-	-	-	褐灰・淡黄	外面煤付着	

6 第4面の遺構と遺物

遺構

第4面の遺構としては、石垣や階段を伴う石列、溝、柱穴などを確認した（図5－30）。第4面は、調査区北部に位置するおおよそ $N65^{\circ}W$ の方向に沿って0.1～0.9 mの大きさの石材が列状に分布するSX6088を境界として北側が南側より0.8～0.9 m低い2段の平坦面をもつ構造となっている。SX6088は本来段の法面に積み上げられていた低い石垣であったと推測され、階段状に3段石材が積み上げられたSX6087を伴っている。SX6088の延長が東西両側とも調査区外に延びるのかは不明であるが、SX6088とほぼ直角をなすSX6098は関連する石積の可能性はある。

SX6088南側には多くの柱穴が確認されており（図5－31）、調査期間の都合により現地での詳細な検討ができず、確実な建物等については不明であるが、掘立柱建物が存在した可能性が高い。調査区南部で確認された

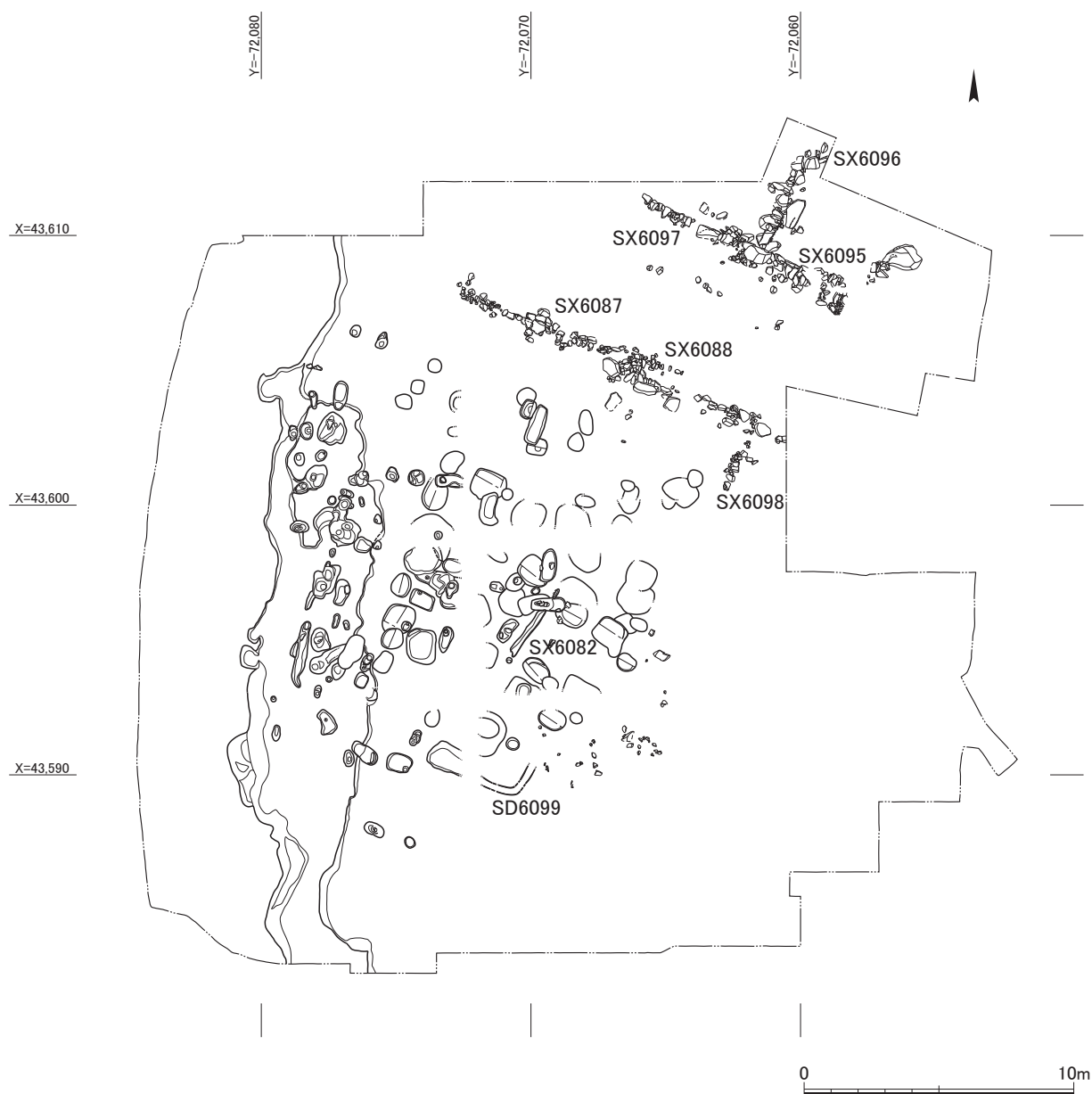


図5－30 第4面の遺構分布（1/250）

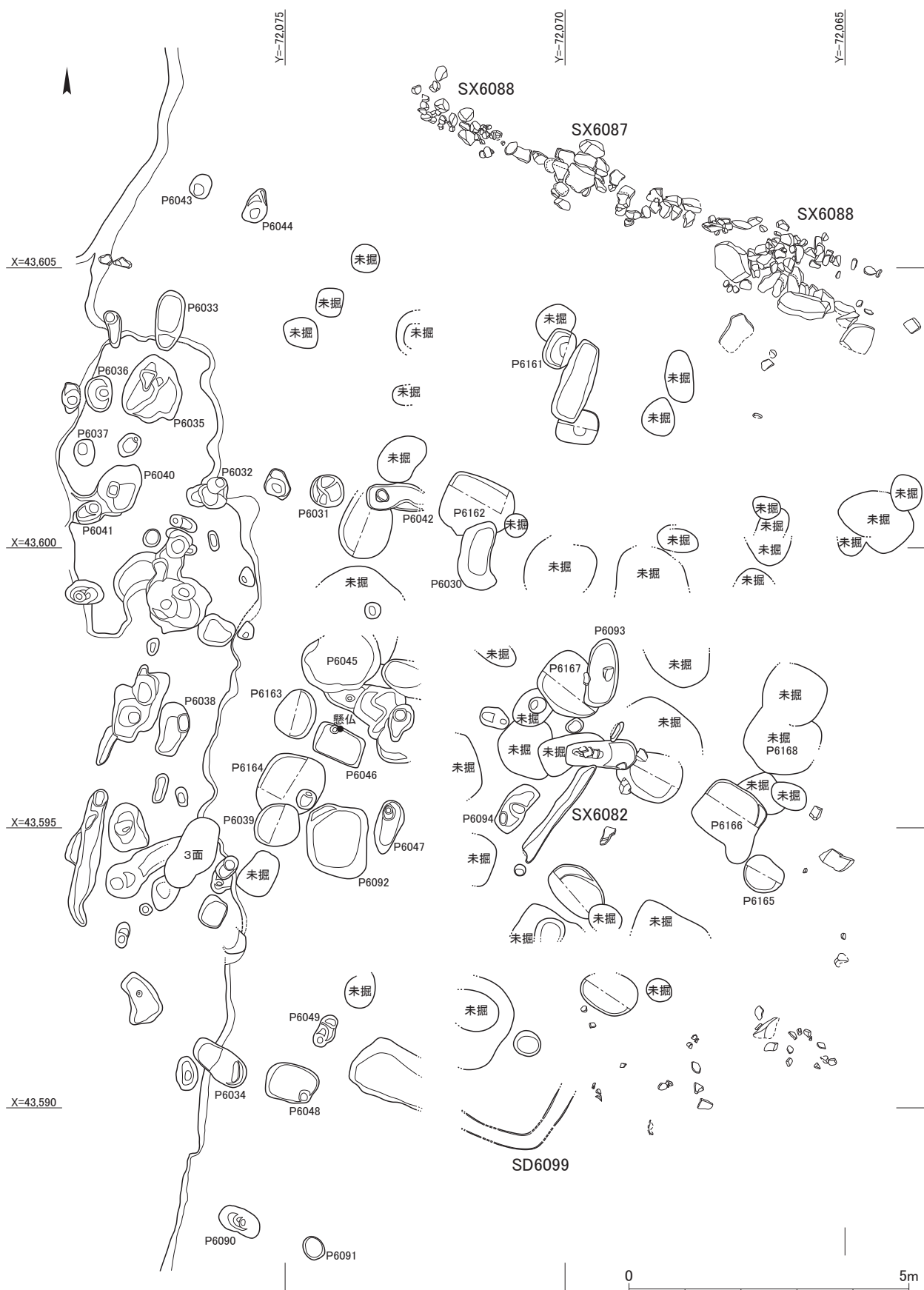


図5-31 第4面の遺構分布詳細1 (1/100)

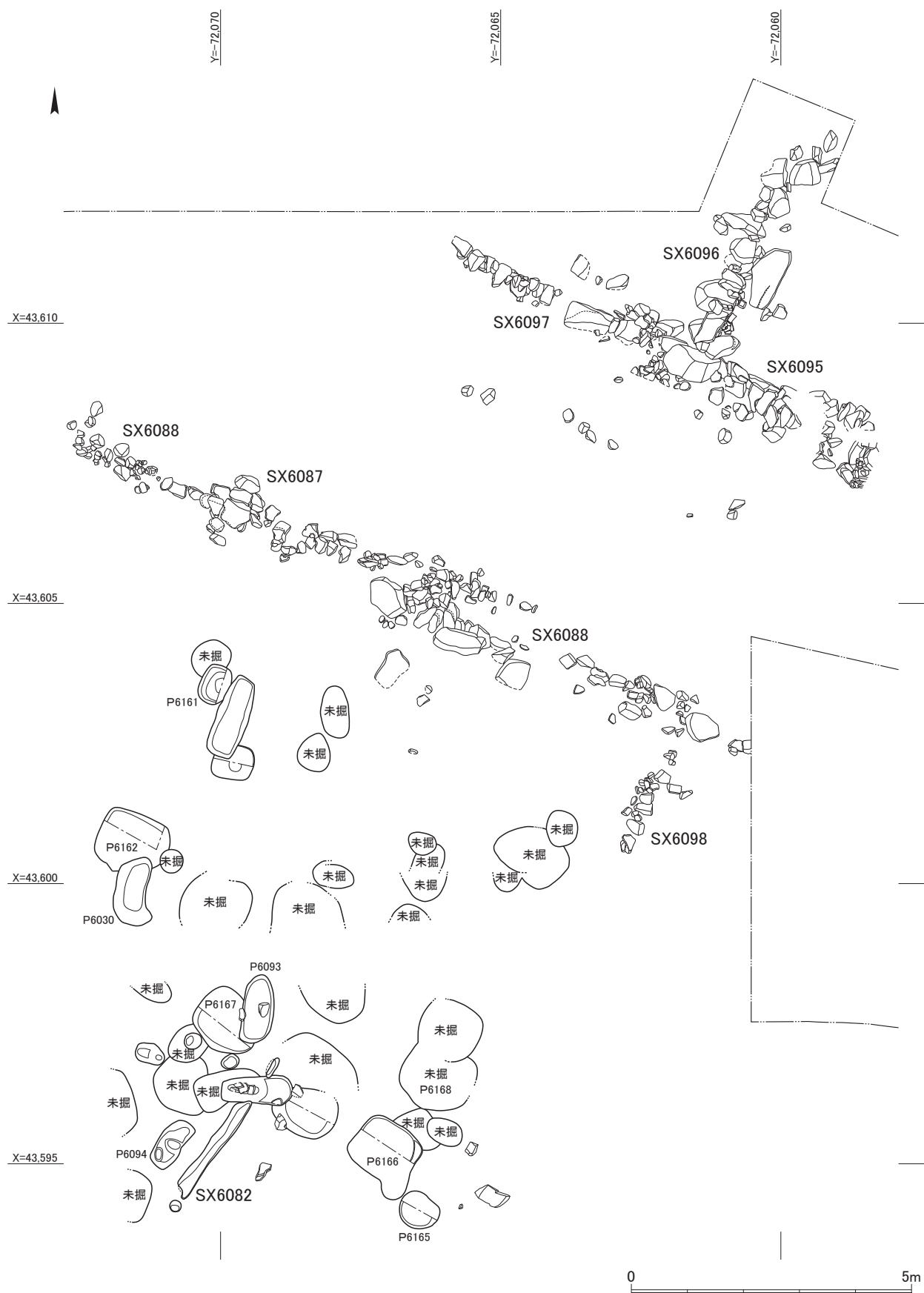


図5-32 第4面の遺構分布詳細2 (1/100)

SD6099 は、ほぼ直角に曲がる深さ 0.03 m のごく浅い溝で、確実に検出された部分は短いものの、写真では北西に延びていた痕跡がみられ（写真図版 5－18）、さらに調査区西部には SD6099 とほぼ同じ方位の断片的な溝が確認できるため、これらが一連となって建物の雨落ち溝であった可能性がある。また、調査区ほぼ中央に位置する SX6082 は、長さ 2.3 m、幅 0.06 m の褐色粘土が検出されたもので、板材の痕跡である可能性があり、建物の構造に関連するかもしれない。このように、断片的な根拠ではあるが、SX6088 とほぼ主軸方位を同じくする建物が南側の平坦面に存在したことが推測される。

北側の 1 段低い平坦面には、確実な柱穴などは確認できておらず（図 5－32）、本来建物などが存在しなかったものと思われる。この平坦面の北側に直角をなす低い石垣と思われる SX6095・6096 があり、その部分までが寺域であり、SX6097 は造成の際に土留めのために置かれた石列であると推定している。SX6095 と 6096 が接する部分の外側（北東側）には第 4 面当時の堆積と考えられる黒褐色土が認められ、肥前陶器皿（460）や皿形の瓦質土器鍋などが廃棄されたような状態で出土した。

遺物（図 5－33～35）

第 4 面と 4 面下層（4 面下と注記）から出土した遺物としては、中世の輸入陶磁器（白磁・青磁・青花・施釉陶器）、中世～近世の国産陶磁器（肥前・備前）、在地系土器（土師器・瓦質土器）などの他、銅製の懸仏の一部がある。遺構から出土した遺物についても、まとめて報告しており、出土位置については表に記している。

441～501 は第 4 面、第 4 面で検出した遺構から出土した。

441・442 は白磁皿で、441 が森田 D 群、442 が森田 E 群で、高台内に染付が施される。443～448 は竜泉窯系青磁である。443 は外面無文の碗で、内面に陽刻による文様が描かれる。444 は外面鎬連弁文の碗Ⅱ bc 類、445・446 は口縁が外反する碗上田 D 類である。447 は碗または皿の口縁部、448 は盤である。449～453 は青花で、449 は小野 C 群の碗、450 は小杯、451・452 は小野 B1 群の皿、453 は小野 C 群の皿である。454 は朝鮮半島産の象嵌青磁で、外面に白象嵌が施される。455 は中国南部産とみられる陶器壺の肩部で、耳が付き、褐釉が施される。茶壺的なものの可能性がある。456 は備前窯の陶器壺である。

457・458 は肥前陶器碗で、灰釉が施される。459・460 は肥前陶器皿で、灰釉が施され、459 は胎土目跡、460 は砂目跡が残る。461 は肥前産の陶器甕と考えられ、鉄釉が施され、口縁上面に貝目跡が残る。462 は肥前陶器壺で、鉄釉が施され、内面に当て具痕の同心円文がみられる。463 は肥前陶器鉢で、片口の可能性があり、灰釉が施される。

464・465 は肥前染付磁器碗で、464 の高台内は釉がかかる部分もあるが無釉で、465 は全面に施釉される。466 は肥前染付磁器皿で、内面見込みに砂が付着している。

467～472 は底部糸切の土師器小皿である。473～483 は底部糸切の土師器杯で、473・474 は内面に沈線状の調整痕がみられ、475 は内面見込みに螺旋状の沈線が施される。480・481 は器高がやや高い形態、483 は大型のものである。484～488 は底部糸切の土師器小皿または杯の底部で、小穴から出土した。489～492 は瓦質土器火鉢で、490～492 は外面に印刻文が施される。493～495 は瓦質土器鍋で、493 は外反口縁で鉢形の V 類、494 は直口口縁で鉢形のⅣ類、495 は皿形のⅥ類である。496・497 は瓦質土器で、焙烙と思われる。498 は瓦質土器茶釜で、外面に沈線が 1 条巡り、印刻文が施される。499・500 は瓦質土器播鉢で、内面に使用による磨滅痕がみられる。

501 は P6046 付近から出土した高さ 2.9cm の懸仏の一部で、背面に径 0.4cm、高さ 0.2cm の突起が付く。蛍光 X 線分析では、銅と鉛がほぼ拮抗する成分である¹⁾。

502～523 は第 4 面の整地層とした 4 面下から出土した。

502・503 は白磁森田 E 群の皿である。504～506 は竜泉窯系青磁で、504 は外反口縁の上田 D 類、505 は剣

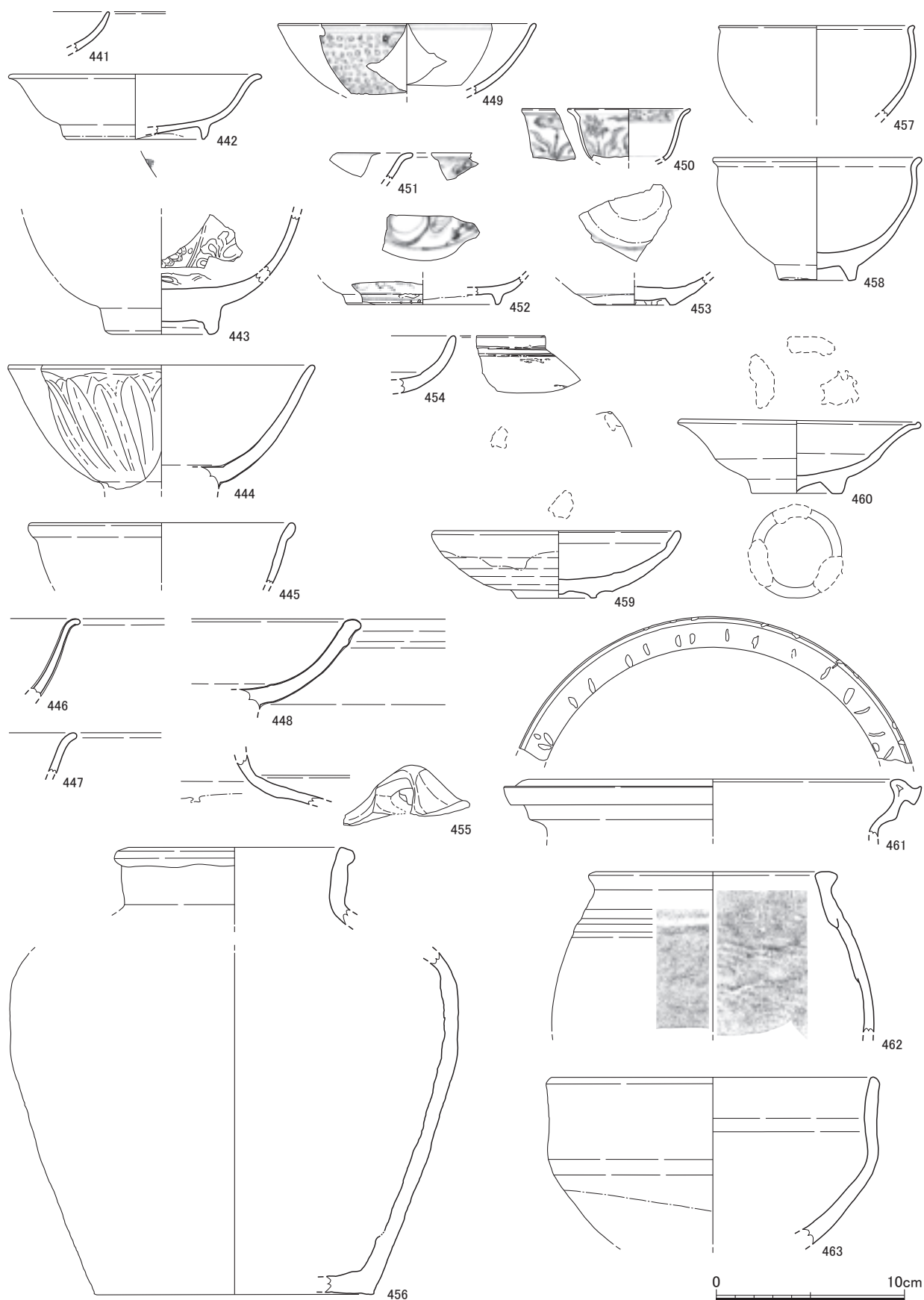


図5-33 第4面の出土遺物1 (1/3)

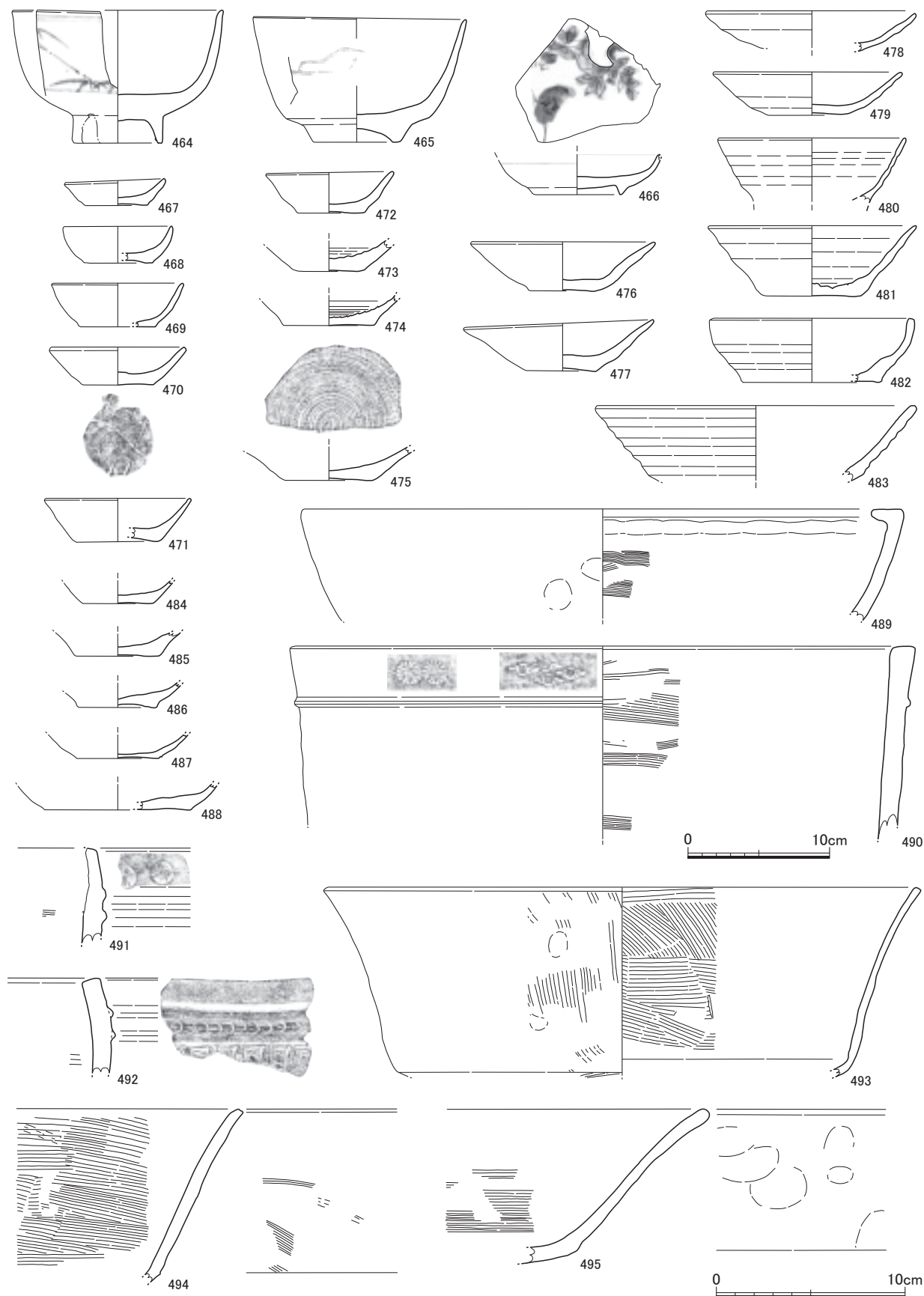


図5-34 第4面の出土遺物2 (489・490は1/4、他は1/3)

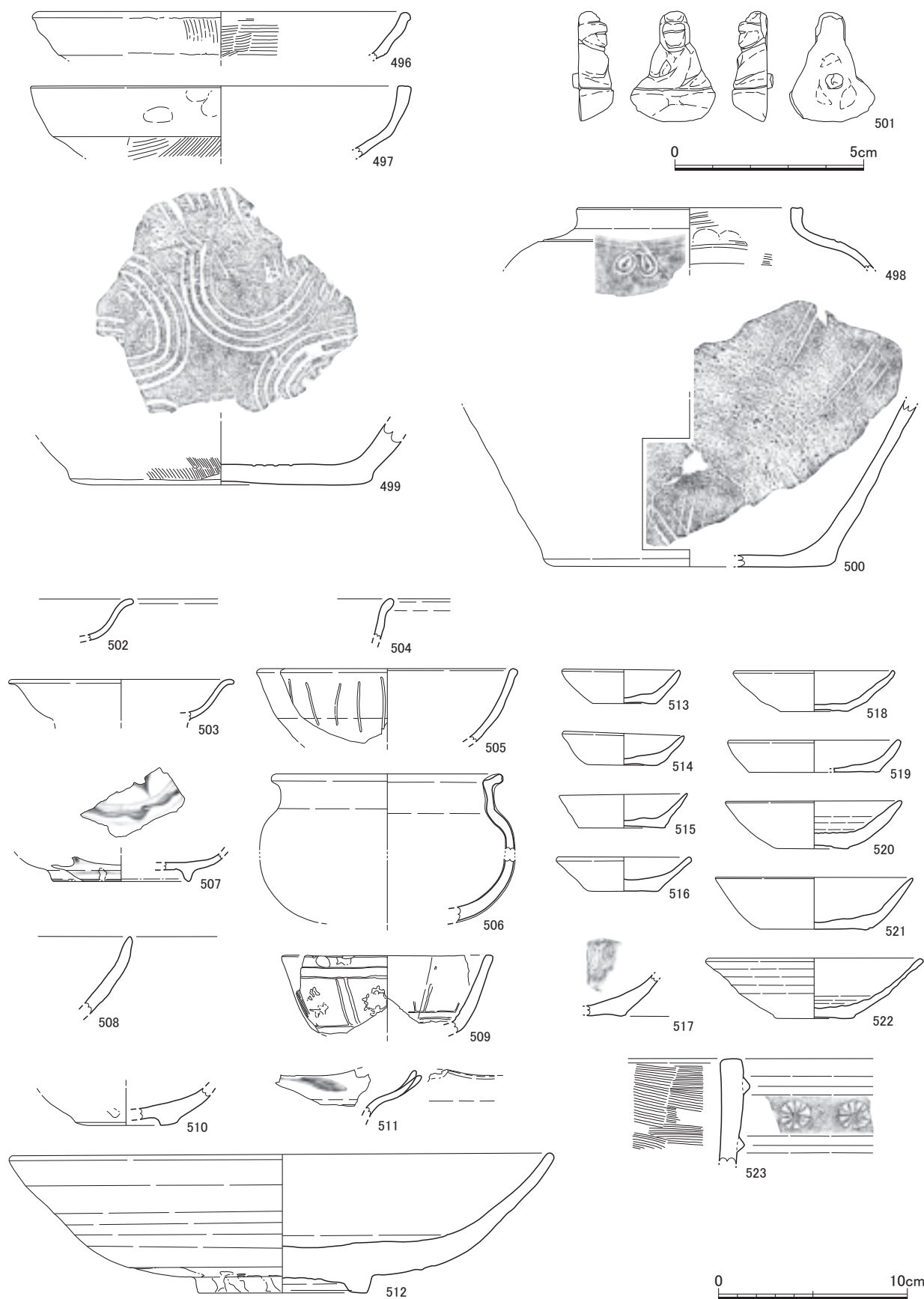


図5-35 第4面・4面下の出土遺物（501は2/3、他は1/3）

頭を省略した線描蓮弁文を施した上田 BⅣ 類、506 は壺である。507 は青花皿で、高台が付き外反口縁の小野 B1 群である。508 は中国産の黒釉陶器天目碗である。509 は朝鮮半島産の象嵌青磁角鉢で、外面に白象嵌が施される。

510・511 は肥前陶器皿で、灰釉が施され、511 は内面に鉄絵が描かれる。512 は肥前陶器大皿で、灰釉が施され、底部は無釉で、靱殻痕がみられる。有田小森窯跡出土品に類例がある。一部の破片が 4 面下から出土したため、ここに図示しているが、第 4 面で使用されていた製品の可能性がある。

513 ～ 516 は底部糸切の土師器小皿、517 ～ 522 は底部糸切の土師器杯で、517 は内面見込みに螺旋状の沈線が施される。523 は瓦質土器火鉢で、外面に印刻文が施される。

表 5－5 6G 区第 4 面・4 面下の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-33-441 07003894	4 面	白磁 皿	-	-	-	胎土：白	森田 D 群	5-19-441 20110040
図 5-33-442 07003899	4 面	白磁 皿	13.5*	7.4*	3.5	胎土：白	森田 E 群	5-19-442 20110105
図 5-33-443 07003887	4 面	青磁 碗	-	6.0	-	胎土：灰白	竜泉窯系	5-19-443 20110082
図 5-33-444 07003881	4 面	青磁 碗	16.3*	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 碗Ⅱ bc 類	5-19-444 20110103
図 5-33-445 07003883	4 面	青磁 碗	14.2*	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 碗上田 D 類	5-19-445 20110035
図 5-33-446 07003885	4 面	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系	5-19-446 20110037
図 5-33-447 07003884	4 面	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系	5-19-447 20110036
図 5-33-448 07003886	4 面	青磁 盤	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系	5-19-448 20110104
図 5-33-449 07003898	4 面	青花 碗	13.7*	-	-	胎土：白	景德鎮窯系 小野 C 群	5-19-449 20110046
図 5-33-450 07003900	4 面	青花 小杯	6.5*	-	-	胎土：白	景德鎮窯系 16c 後半	5-19-450 20110047
図 5-33-451 07003895	4 面	青花 皿	-	-	-	胎土：白	景德鎮窯系 小野 B1 群	5-19-451 20110041
図 5-33-452 07003896	4 面	青花 皿	-	8.0*	-	胎土：白	景德鎮窯系 小野 B1 群	5-19-452 20110042・43
図 5-33-453 07003897	4 面	青花 皿	-	4.4*	-	胎土：灰白	福建系 小野 C 群	5-19-453 20110044・45
図 5-33-454 07003891	4 面	象嵌青磁 皿	-	-	-	胎土：灰白	朝鮮半島	5-19-454 20110039
図 5-33-455 10001970	4 面	陶器 壺	-	-	-	胎土：灰	中国南部 15・16c	5-19-455 20110110
図 5-33-456 10001969	4 面	陶器 壺	12.8*	-	-	灰赤・暗赤灰	備前 15・16c	5-19-456 20110102
図 5-33-457 07003892	4 面	陶器 碗	10.4*	-	-	胎土：灰白	内野山 1610 ～ 30 年代	5-20-457 20110038
図 5-33-458 07003890	4 面	陶器 碗	11.1*	4.1	6.6	胎土：灰	肥前 1610 ～ 30 年代	5-20-458 20110011
図 5-33-459 07003889	4 面	陶器 皿	13.3*	4.4	3.6	胎土：黄灰	肥前 1590 ～ 1610 年代	5-20-459 20110020
図 5-33-460 08000378	4 面	陶器 皿	13.2*	4.8	3.8	胎土：灰白	肥前 1610 ～ 1630 年代	5-20-460 20110021
図 5-33-461 10001331	4 面	陶器 甕力	22.2*	-	-	胎土：褐灰	肥前力 16c 末～ 17c 初	5-19-461 20110107
図 5-33-462 10001332	4 面	陶器 甕	13.6*	-	-	胎土：黄灰	肥前 16c 末～ 17c 初	5-19-462 20110108
図 5-33-463 10001968	4 面	陶器 鉢	17.7 *	-	-	胎土：にぶい黄橙	肥前 1590 ～ 1630 年代	5-19-463 20110109
図 5-34-464 10001253	4 面	染付磁器 碗	11.2*	4.7	7.1	胎土：灰白	肥前 1630 ～ 50 年代	5-20-464 20110009

表5-5 6G区第4面・4面下の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-34-465 10001251	4 面	染付磁器 碗	11.3*	4.6	6.7	胎土：灰白	肥前 1610～30年代	5-20-465 20110007
図 5-34-466 10001966	4 面	染付磁器 皿	-	4.7	-	胎土：灰白	肥前 1630～50年代	5-20-466 20110100・101
図 5-34-467 10001874	4 面	土師器 小皿	5.4	3.3	1.5	にぶい黄橙	底部糸切	
図 5-34-468 10001881	P6041	土師器 小皿	5.8*	3.6*	2.0	外：にぶい黄橙 内：橙	底部糸切	
図 5-34-469 10001850	P6167	土師器 小皿	7.0*	4.0*	2.3	にぶい黄褐・褐灰	底部糸切	
図 5-34-470 10001877	4 面	土師器 小皿	7.2*	-	-	橙	底部糸切	
図 5-34-471 10001837	4 面	土師器 小皿	7.8*	4.6	2.3	外：灰白 内：灰白・灰黄褐	底部糸切	
図 5-34-472 10001876	4 面	土師器 小皿	6.8	3.6	2.2	にぶい橙	底部糸切	
図 5-34-473 10001879	P6035	土師器 杯	-	3.8*	-	にぶい橙	底部糸切	
図 5-34-474 10001875	4 面	土師器 杯	-	4.8*	-	灰白	底部糸切	5-20-474 20110212・213
図 5-34-475 10001880	4 面	土師器 杯	-	4.6*	-	灰白	底部糸切 底部煤付着	
図 5-34-476 10001835	4 面	土師器 杯	9.8	3.6	2.6	浅黄橙	底部糸切	
図 5-34-477 10001836	4 面	土師器 杯	10.1	3.6	2.8	浅黄橙	底部糸切	
図 5-34-478 10001856	P6166	土師器 杯	11.2*	-	-	にぶい橙		
図 5-34-479 10001838	4 面	土師器 杯	9.9*	4.2	2.3	浅黄橙	底部糸切	
図 5-34-480 10001844	P6167	土師器 杯	10.0*	-	-	浅黄橙		
図 5-34-481 10001833	4 面	土師器 杯	11.0*	5.4*	4.7	にぶい黄橙	底部糸切	
図 5-34-482 10001878	4 面	土師器 杯	10.8*	7.2*	3.9	橙	底部糸切	
図 5-34-483 10001834	4 面	土師器 杯	17.0*	-	-	灰白		
図 5-34-484 10001852	P6094	土師器 杯	-	3.7	-	浅黄橙	底部糸切	
図 5-34-485 10001855	P6166	土師器 杯	-	4.4	-	浅黄橙	底部糸切	
図 5-34-486 10001854	P6166	土師器 杯	-	4.0	-	にぶい黄橙	底部糸切	
図 5-34-487 10001853	P6168	土師器 杯	-	4.4	-	にぶい黄橙	底部糸切	
図 5-34-488 10001851	P6162	土師器 杯	-	7.8*	-	外：にぶい橙 内：灰白	底部糸切	
図 5-34-489 10001873	4 面	瓦質土器 火鉢	42.6*	-	-	にぶい黄橙	内面に黒斑	
図 5-34-490 10001902	4 面	瓦質土器 火鉢	44.2	-	-	灰		
図 5-34-491 10001843	4 面	瓦質土器 火鉢	-	-	-	浅黄橙		
図 5-34-492 10001840	4 面	瓦質土器 火鉢	-	-	-	褐灰		5-20-492 20110211
図 5-34-493 10001845	4 面	瓦質土器 鍋	31.6*	-	-	にぶい黄橙	外面煤付着	
図 5-34-494 10001847	4 面	瓦質土器 鍋	-	-	-	にぶい黄橙	外面煤付着	
図 5-34-495 10001846	4 面	瓦質土器 鍋	-	-	-	外：褐灰 内：黒	外面煤付着	5-20-495 20110207
図 5-35-496 10001841	P6167	瓦質土器 焙烙	20.1*	-	-	灰白		

表 5-5 6G 区第 4 面・4 面下の出土遺物

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 5-35-497 10001849	4 面	瓦質土器 焙烙	20.2*	-	-	外: にぶい黄褐 内: 灰黄		
図 5-35-498 10001839	4 面	瓦質土器 茶釜	12.0*	-	-	灰白		5-20-498 20110210
図 5-35-499 10001858	4 面	瓦質土器 播鉢	-	28.4*	-	褐灰		5-20-499 20110206
図 5-35-500 10001901	4 面	瓦質土器 播鉢	-	15.4*	-	外: 橙 内: にぶい赤褐		
図 5-35-501 10003121	4 面	銅製品 懸仏	長 2.9	幅 2.3	厚 1.1		重さ 17.2g	5-19-501 20110203・204
図 5-35-502 07003904	4 面下	白磁 皿	-	-	-	胎土: 白	森田 E 群	5-20-502 20110052
図 5-35-503 07003905	4 面下	白磁 皿	11.9*	-	-	胎土: 白	森田 E 群	5-20-503 20110053
図 5-35-504 07003908	4 面下	青磁 碗	-	-	-	胎土: 灰白	竜泉窯系 碗上田 D 類	5-20-504 20110057
図 5-35-505 07003888	4 面下	青磁 碗	13.8*	-	-	胎土: にぶい橙	竜泉窯系 碗上田 B IV 類	5-20-505 20110084
図 5-35-506 07003909	4 面下	青磁 壺	12.3*	-	-	胎土: 灰白	竜泉窯系	5-20-506 20110058
図 5-35-507 07003906	4 面下	青花 皿	7.2*	-	-	胎土: 灰白	福建系カ 小野 B1 群	5-20-507 20110054・55
図 5-35-508 07003910	4 面下	黒釉陶器 碗	-	-	-	胎土: 灰白	中国 14・15c 天目	5-20-508 20110059
図 5-35-509 07003907	4 面下	象嵌青磁 角鉢	11.2*	-	-	胎土: 灰白	朝鮮半島	5-20-509 20110056
図 5-35-510 07003902	4 面下	陶器 皿	-	5.4*	-	胎土: 灰黄褐	肥前 1590～1610 年代	5-20-510 20110049・50
図 5-35-511 07003903	4 面下	陶器 皿	-	-	-	胎土: にぶい黄橙	肥前 1590～1610 年代	5-20-511 20110051
図 5-35-512 07003901	4 面下	陶器 大皿	28.9*	9.0	7.4	胎土: 灰白・灰黄褐	肥前 1590～1610 年代	5-20-512 20110030
図 5-35-513 10001869	4 面下	土師器 小皿	6.3	3.3	1.8	浅黄橙	底部糸切	
図 5-35-514 10001863	4 面下	土師器 小皿	6.4	3.7	1.8	浅黄橙	底部糸切 口縁油煤付着	
図 5-35-515 10001866	4 面下	土師器 小皿	6.8	4.6	1.8	橙	底部糸切	
図 5-35-516 10001868	4 面下	土師器 小皿	7.2*	3.8	1.9	浅黄橙	底部糸切	
図 5-35-517 10001871	4 面下	土師器 杯	-	-	-	浅黄橙	底部糸切	
図 5-35-518 10001870	4 面下	土師器 小皿	8.6*	3.6*	2.2	浅黄橙	底部糸切	
図 5-35-519 10001865	4 面下	土師器 杯	9.2*	7.0*	1.7	黄橙	底部糸切	
図 5-35-520 10001864	4 面下	土師器 杯	9.4*	3.9	2.6	浅黄橙	底部糸切	
図 5-35-521 10001862	4 面下	土師器 杯	10.4*	5.8*	3.8	外: にぶい橙 内: 橙	底部糸切	
図 5-35-522 10001861	4 面下	土師器 杯	11.5*	4.2	3.2	灰白	底部糸切	
図 5-35-523 10001867	4 面下	瓦質土器 火鉢	-	-	-	外: にぶい黄橙 内: にぶい褐		

7 まとめ

東畑瀬遺跡 6G 区では、戦国武将神代勝利の菩提寺であった宗源院の下層について発掘調査を行い、江戸時代の遺構面を4面確認し、多くの遺物が出土した。調査の内容について、寺院の変遷とその背景を簡潔ながらまとめておきたい。

1) 各面の様相

第1面では、現存していた本堂・庫裡とほぼ同じ規模の建物を確認し、1段階古い本堂・庫裡であったと推定される。本堂と庫裡の位置については、現存していたものとは南北逆になる可能性はあるが、造成による整地を伴う建て替えが行われたことが考えられる。第1面の時期については、第1面から出土した遺物は少ないものの、第1面の整地層である1-2面出土遺物が18世紀後半から19世紀初頭のものを中心としているため、1800年前後の時期が推定される。宗源院に残されていた宗源院文書には、文化2（1805）年の「瑞雲山本堂再興目安帳」、文化5（1808）年「観音再興并堂一字造営目安帳」などがあり、文化年間に大規模な寺地整備が行われたことが判明する。考古学的に推定される整地の時期と符合するため、第1面は文化年間（19世紀初頭）に整備されたものと断定できよう。寺域北東部に現存していた石垣もこの時期に構築されたものと思われる。

第2面では、建物区画や庭園遺構などを検出し、ほぼ同一面での大規模な改修が行われたことが確認された。建物自体については不明であるが、礎石建物の存在が推定され、庭園や花壇状の遺構が伴うことから、ある程度の規模の寺院が建立されていた可能性が高い。なお、各面を通じて瓦がほとんど出土していないため、礎石建物であっても、瓦葺ではない建物であったと考えられる。庭園は素掘りの池から築山を伴う石囲いの池へと変遷しており、寺院の格を知る手掛かりとなろう。第2面の時期については、出土遺物が18世紀代を中心とし、時期幅はあるものの、第2面の整地層である2-3面出土遺物は17世紀後半のものが大多数を占めることから、18世紀代の時期とみられる。改修の時期について詳細にすることはできないが、1-2面で18世紀後半、2-3面で18世紀前半の遺物が出土しており、18世紀中頃ではないかと思われる。

第3面では、石組遺構やトイレ遺構を確認したが、第2面の整地層があまり厚くないことや明確な遺構が少ないこともあり、全体像を把握するのは難しい。ただ、トイレ遺構の状況などから、ある程度の規模の建物などが存在していたことが示唆される。SX6058 石組遺構は性格不明といわざるを得ないが、基壇状をなす部分のほぼ中央にあることから、何らかの施設の下部構造であった可能性がある²⁾。第3面の時期については、SX6058に関連すると推定されるSX6063 出土の肥前染付磁器小壺が1650～60年代のものであり、第3面の整地層である3-4面出土遺物に17世紀前半代の遺物が多いことから、17世紀第3四半世紀に整備が行われたことが推測される。

第4面では、石垣、石列、溝、小穴などを検出し、明確にすることはできなかったが、掘立柱建物の存在が推定される。この面からは懸仏の一部が出土しており、寺院であったことを示す遺物であると考えられ、ある程度の広さの寺域を有するものとみられる。第4面で検出された遺構の方位から、真北を意識した第1・2面とは異なり、地形に沿った寺院の構造となっている。第4面の時期については、第4面から17世紀前半代の遺物が出土していることから、この時期に使用された面と推定される。整備された時期については、整地層である4面下から大橋Ⅰ期の陶器が出土していることから、16世紀末を大きく遡ることはないであろう。

第4面の下層については、試掘坑で遺構面を確認することはできなかった。したがって、第4面が最初に本格的な寺院として整備されたものであると考えられる。第4面を中心に戦国時代のものを主体とした中世の遺物が出土しているが、寺院に関係するものか、勝利が隠居所とした畑瀬城に伴うものかは不明であり、もし戦国期に遡る施設があったとしても、ごく簡素なものであったと思われる³⁾。

2) 出土遺物について

6G 区からは数多くの遺物が出土しているが、整理期間の都合などで、陶磁器を主として報告した。今回の報告のみでは、宗源院跡出土遺物の全体像を知ることができない点を御了承願いたい。

陶磁器類の中では、2－3 面から 1－2 面にかけて肥前白磁が一定の割合を占める点が注目され、肥前青磁を含め寺院跡出土遺物の特徴が表れている可能性が高い。また、恐らく組物と思われるほぼ同じ大きさ・文様の染付磁器が多く確認されることも特徴的であり、一般的な集落の様相とはやや異なる点がみられる。

定量的な分析ができていないが、陶磁器の組成を概観すると、17 世紀代は肥前産のものでほぼ独占されているが、18 世紀代には関西系陶器がみられるようになり、19 世紀になると薩摩や熊本産の土瓶などが入ってきている。このような様相は、恐らく一般的な集落でもみられるものと思われる。

産地の点では、佐賀市川久保皿山窯の製品が確認されている。巻刷毛目で装飾され、器形などに特徴があり、生産地と消費地の関係を知るうえで手掛かりとなる。嘉瀬川ダム建設に伴う発掘調査では散見されているようで、東畑瀬遺跡 7 区でも出土している。特に、川久保皿山窯は神代領内にあり、山内との関連が深いかもしれない。このほか、有田やその周辺の製品ではない可能性の染付磁器や産地不明の陶器碗などが出土しており、その産地については今後の課題である。

また、組物になる可能性がある京焼風陶器皿が多く出土しているが、高台内の押印には「北嶋十」「山原住」などのこれまで類例が知られていないものが確認される。これらについても産地や類例を含め、検討が必要である。

陶磁器以外では、第 2 面、2－3 面を中心に土師器小皿の出土が目立ち、祭祀に関係する可能性がある。詳細な分析は行っていないが、おおよそ口径など大きさが縮小傾向にあり、18 世紀代になると器壁の薄手のものが出現するようである。図示したものは少ないが、瓦質土器鍋・焙烙・火鉢などが各遺構面や整地層から出土しており、第 2 面では包丁があることから、住職や管理する人が住んでいた可能性が高い。

3) 造営・改修の契機と背景

6G 区の調査によって、宗源院は 16 世紀末～17 世紀初頭に本格的な寺院として整備されて以降、改修が何回も行われ、現代にいたっていることが判明した。ここでは、その背景について簡単に述べてみたい。

宗源院で行われる重要な儀式として、神代勝利の 50 年ごとの年忌がある。史料には、元治元（1864）年に三百回忌（「当院開基公三百回忌記録」宗源院文書）、文化 11（1814）年に二百五十年忌、宝暦 14（1764）年に二百年忌（「宗源院開基公二百年忌 二百五十忌 両度之記録」）を行っていることがみられる。このうち、文化 11 年の二百五十年忌は、第 1 面整備の時期と符合するので、文化年間の大規模な整備は二百五十年忌に向けた整備であると考えられる。また、宝暦 14 年の二百年忌は 18 世紀中頃と思われる第 2 面の大規模な改修時期に近く、記録にはないものの、第 3 面の整備時期が 17 世紀第 3 四半世紀に推定されることから、行われたとすれば寛文 4（1664）年の百年忌を契機としたことが推測される。このように、発掘調査で確認された第 1 面整備、第 2 面の改修、第 2 面整備、第 3 面整備と五十年忌は回数的にも同じであるため、宗源院の整備・改修は五十年忌を契機に行われている可能性がある。なお、「曹洞宗由緒」に残る宗源院の記録に、寛文 3（1663）年に鍋島光茂より「茶湯薪用山林寺町余寄付」、宝永元（1704）年に神代弾正より「茶湯料米三石永代被遊御寄付」とあり、年忌に向けた整備と関連するかもしれない。

上記の推定が正しければ、宗源院は慶長 19（1614）年の五十年忌を執り行うために本格的に整備されたとみられる。出土遺物の面からは矛盾がないので、契機としては十分に考えられることである。これに関連して、宗源院墓地（9 区）にある神代勝利の墓とされる宝篋印塔が 17 世紀前半～中頃の作と推定されていることから、この石塔も第 4 面あるいは第 3 面の整備に伴って製作されたものかもしれない。

ところで、記録に残る年忌の施主についてみると、三百回忌と二百五十年忌では川久保神代家の当主が務めてい

るが、二百年忌では当主の嫡子の子が施主となっており、興味深い。神代家には宗源院に関する史料がみられないようであり、意外と宗源院との関係が薄い可能性がある。少なくとも二百年忌は実質的に執り行った別の人物がいると考えられるが、その候補として宗源院墓地に葬られている小城鍋島家に仕えた神代家（以下、小城神代家）が挙げられる。宗源院に付属する墓地に葬られていることから、宗源院の維持管理について小城神代家が実質的な主体者であった可能性が高い。恐らく、勝利の50年ごとの年忌についても重要な役割を果たしたに違いない。

ところが、小城神代家は4代とされる利尚が寛永14・15（1637・38）年の島原の乱で功名を挙げたことから、小城支藩の主要な家臣となるが、それ以前については不明な点が多い⁴⁾。したがって、宗源院の第4面整備に小城神代家が関わっていたとは考えにくい。神代本家と宗源院のかかわりが明らかでない中、宗源院の創建ともいえる第4面の整備の主体者は誰であろうか。

確証はないが、本格的な寺院として整備に関わったのは鍋島本家ではないかと思われ、少なくとも直茂、勝茂の意向が働いていたのではなかろうか。寛文3（1663）年に2代藩主光茂より寄付があったことは示唆的である。鍋島家にとって山内は決して支配が容易な地域ではなく、細心の注意を払う必要があったことが「鍋島勝茂・元茂知行覚書」（小城鍋島家文書）からうかがえる。神代勝利が2回、長良が1回、山内から落ち延びなければならない状況になっても、再び山内の総大将として帰還していることがその背景にあるものと思われる。江戸時代初期は、勝茂が関ヶ原の戦い自体には参加していないものの西軍の一員として伏見城・安濃津城攻めに参加しており、また龍造寺家との関係も整理されておらず、鍋島家は決して安泰な地位にあったわけではない。もし、山内の支配がうまくいかず、何か事が起これば、改易の可能性もあったはずで、山内の支配にはかなり腐心していたものと思われる。このようなことが、宗源院を本格的な寺院として整備することの背景にあったのではないかと推測するのである。勝利が亡くなった畑瀬の地に寺院を創建して、山内の英雄として鍋島家が勝利を敬っていることを示すことによって、山内を安定的に支配するための象徴的な役割を宗源院が担っていたのではなかろうか。

いずれにせよ、宗源院の本格的な整備・改修とその背景は、宗源院墓地の分析を含めて、より広い視野での検討が必要になるものと思われる。

注

- 1) 369の刀子と合わせ2点の分析・保存処理にあたっては、福岡市埋蔵文化財センターのご好意により、機器等を利用させていただいた。
- 2) 憶測の域を出ないが、神代勝利の墓とされる宝篋印塔が当初はここに設置されていた可能性もある。
- 3) 東畑瀬遺跡では16世紀後半の遺物は意外と少なく、勝利の死後に畑瀬城が積極的に利用されていたとはいえ、勝利が畑瀬で過ごした時間もごく短いことから、本格的な寺院があったとは考えにくい。
- 4) 小城神代家と島原の乱の経緯については『元茂公御年譜』に詳しいが、島原の乱が発生した時には利尚、その弟の喜兵衛は江戸にいたことが分かり、利尚は鍋島家に仕えていたかどうかは定かではない。系図では勝利につなげているものの、出自自体はかなり怪しい。

第5章 参考・引用文献

- 上田秀夫（1982）「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
 小野正敏（1982）「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
 嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（2000）『嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書』富士町教育委員会
 九州近世陶磁学会（2000）『九州陶磁の編年』
 佐賀県教育委員会（2007）『東畑瀬遺跡1・大野遺跡1』佐賀県文化財調査報告書第170集
 佐賀県教育委員会（2008）『西畑瀬遺跡1』佐賀県文化財調査報告書第176集
 佐賀県教育委員会（2009）『西畑瀬遺跡2・大串遺跡』佐賀県文化財調査報告書第180集
 佐賀県教育委員会（2010）『東畑瀬遺跡2・畑瀬城跡』佐賀県文化財調査報告書第185集
 佐賀県立図書館（1990）『佐賀県史料集成 古文書編』第30巻
 佐賀大学文系基礎学研究プロジェクト（2004）『小城鍋島文庫に見る小城鍋島藩と島原の乱』
 佐賀市教育委員会（2001）『佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書—1997・1998年度—』佐賀市文化財調査報告書第122集
 全国神代ゆかりの会（1980）「神代家伝記」『神代家とその一族』1号
 全国神代ゆかりの会（1981）『神代家とその一族』2号
 太宰府市教育委員会（2000）『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
 徳永貞紹（1990）「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会

東畑瀬遺跡 6G 区

富士町教育委員会（2005）『畑瀬城跡』富士町文化財調査報告書第4集

富士町誌編さん委員会（1968）『富士町誌』富士町教育委員会

富士町史編さん委員会（2000）『富士町史』上巻・下巻 富士町

森田 勉（1982）「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

森本朝子・片山まび（2000）「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案」『博多研究会誌』第8号 博多研究会

第6章 東畑瀬遺跡9区

1 東畑瀬遺跡9区の概要

東畑瀬遺跡は、佐賀県佐賀市富士町大字関屋字鶴・辻・田野々・平・川向に所在する。

東畑瀬地区は、嘉瀬川中流域の左岸に位置し、ダム建設に伴い全戸移転するまで北西向きの山麓部斜面一帯に集落が展開していた。当地には、各地に割拠した小領主をまとめあげて山内を統一し、佐賀の龍造寺隆信と覇を競った神代勝利が隠居所とした畑瀬城があったとされ、さらに勝利の菩提寺である宗源院がある。嘉瀬川を挟んだ対岸には西畑瀬地区があり、東西の畑瀬地区は、藩政期には東畑瀬が佐賀本藩領、西畑瀬が小城鍋島家（小城支藩）領に属し、昭和31（1956）年に旧富士町として合併するまで佐賀郡小関村と小城郡南山村に分かれていた。現在は国道323号線が古湯地区から西畑瀬を経て栗並地区に続いているが、近世以前の基幹道は小副川地区から峠を越えて東畑瀬に入り、嘉瀬川を渡って西畑瀬に向かうという経路であったことが『正保四年肥前一国絵図』などからも読み取れる。

東畑瀬遺跡では、嘉瀬川ダム建設事業に伴い1～9区の発掘調査が実施され、縄文時代～弥生時代の集落跡・遺物包含層、中世の集落跡・城館跡、近世の寺院跡・集落跡などが確認されている。

今回報告する9区は、上記した神代勝利やその子孫および宗源院の歴代住職墓がある墓地（宗源院墓地）で、遺跡域の南端に近く、旧東畑瀬集落域からみても南端に近い。当地がダム建設のために水没することから、墓地の移転（改葬）が計画されたが、当地が東畑瀬遺跡の範囲に含まれることに加え、神代勝利およびその一族に関連する遺跡・遺構は地域において特に重要なものであることなどを考慮し、改葬前に本調査を実施することとした。

調査は、あらかじめ墓石・石塔類などを記録化し、これらを移転のため撤去した後、あらためて遺構検出作業を行い墓壇等の調査を実施した。

2 9区の遺構と遺物

1) 外表施設

宗源院墓地の調査では、墓地の移転に先だって、まず墓石・石塔類等の外表施設を記録化し、これらを撤去した後、改めて遺構検出を行い、下部遺構の調査を行った。

外表施設については、墓地内の石塔類や自然石にはSXの遺構略号を付した。ちなみに、神代勝利の墓と伝えられているものはSX9001である。なお、報告に際して外表施設の左右を示す場合には、調査者からみた左右で表記する。

SX9001（図6-3・12）

調査区の東端近くに位置する。神代勝利の墓と伝えられるもので、正面は西を向く。竿石を3段に巡らし、その上に、さらに一回り小型の竿石を巡らし内側に板石を敷き並べ基壇としている。基壇の端には玉垣が巡り、正面には石門をもつ。基壇中央には台石があり、その上に宝篋印塔が載る。基壇に使用された石はすべて花崗岩で、玉垣、石門、台石、宝篋印塔は安山岩製である。調査時点において、石門は破損しており、基壇正面に積み重ねられた状態であった（図は石門を復元した姿）。宝篋印塔は、方柱状の相輪、開きぎみの隅飾突起をもつ笠、縦長方形の軸、裾拡がり形で下部がアーチ状の基礎からなり、全高は1.06 mである。宝篋印塔の軸の正面には「心」、後面には「星」、右側面には「日」、左側面には「月」の銘がある。また、基礎の正面には「覚譽堅利 大禪定門」の銘がある。



図 6 - 1 周辺地形図 (1/250)

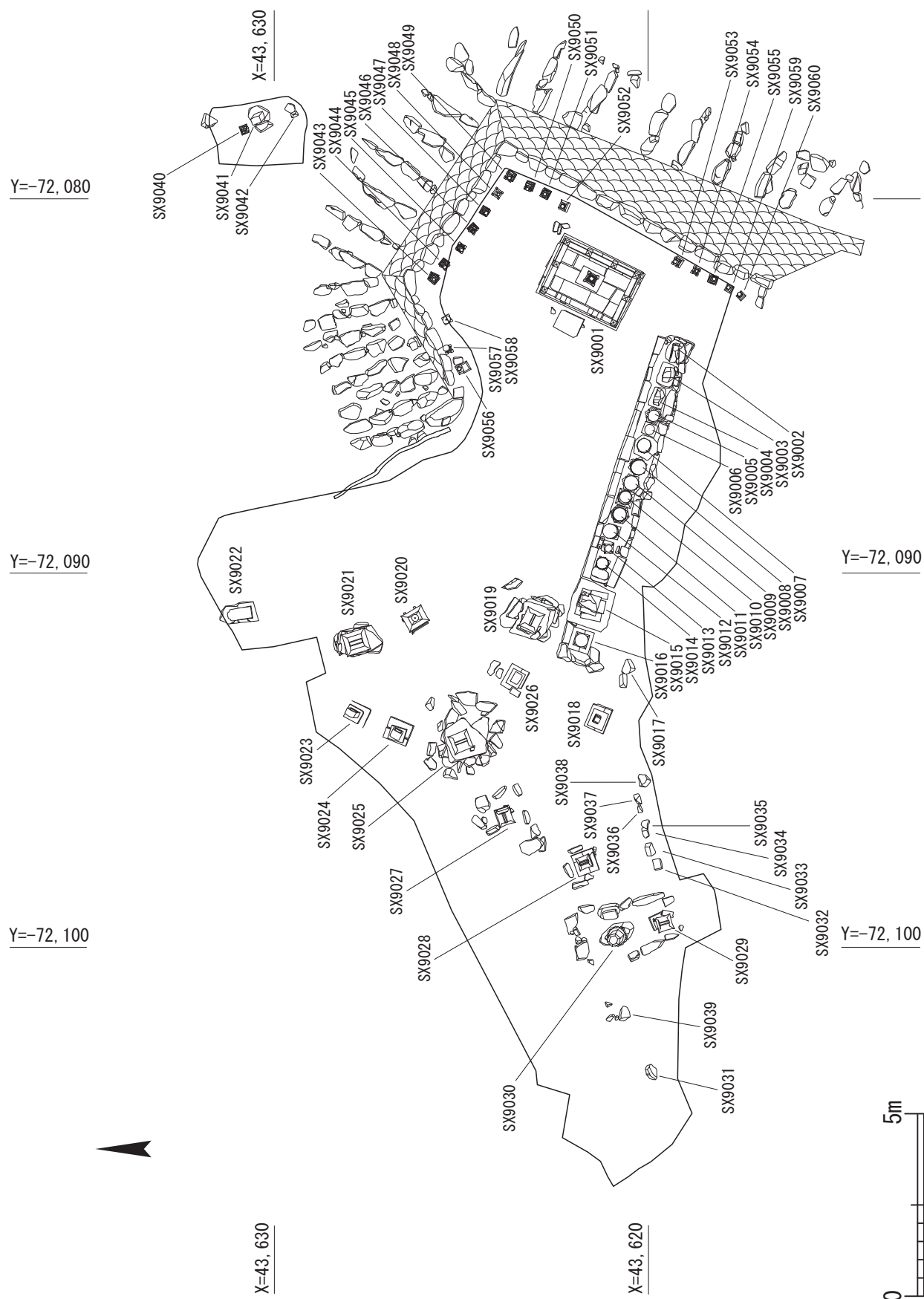


図6-2 外表施設位置図 (1/150)

なお、相輪についてみると、左側面のみ九輪を表現した線刻がなく（この面が本来の後面であったと考えられる）、軸については、正面のみに縦方向の線刻が施されており、さらに、笠の線刻や基礎の段が後面では省略されていることなどから、この宝篋印塔は、方向（特に正面観）を意識して造られていると推定される。

SX9002（図6－4・12）

調査区の南東部に概ね東西に長軸をとる基壇が築かれており、基壇上に宗源院の歴代住職墓の多くが北向きに並べられている（SX9002～SX9014）。SX9002は、この基壇の最も東端に位置しており、西隣にはSX9003がある。

扁平に加工された石塔と、下部の台石の2石からなり、ともに安山岩製である。石塔は、高さ0.86m、幅0.52m、厚さ0.18mである。石塔正面の花燈形の中に「加永二酉年 十二世大和尚 四月廿六日」の銘がある。

SX9003（図6－4・12）

調査区の南東部、歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9002、西隣にはSX9004がある。やや厚みのある自然石風の石塔と台石の2石からなり、ともに安山岩製である。石塔は、高さ0.65m、幅0.39m、厚さ0.29mである。石塔正面の花燈形の中に「八世大和尚」の銘がある。

SX9004（図6－4・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9003が、西隣にはSX9005がある。自然石風の石塔と台石からなり、ともに安山岩製である。石塔は、高さ0.66m、幅0.45m、厚さ0.23mである。石塔正面の花燈形の中に「六世大和尚」の銘がある。

SX9005（図6－4・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9004が、西隣にはSX9006がある。塔身・中台・基礎からなる無縫塔で、塔身は花崗岩製、中台と基礎は安山岩製である。塔身は、高さ0.43m、最大径0.31mで、正面に「碧雲緑雪首座」、裏側に「享保六□正月十八日」の銘をもつ（□は判読不能）。基礎は、六角形で反花座を置く。

SX9006（図6－4・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9004が、西隣にはSX9006がある。塔身・中台・基礎からなる無縫塔で、塔身・中台は安山岩製、基礎は花崗岩製である。塔身は、高さ0.41m、最大径0.27mで、正面に「鏡翁仙和尚」、裏側に「元禄九丙子天霜月廿六日 壽岳立之」の銘をもつ。

SX9007（図6－4）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9006が、西隣にはSX9008がある。塔身・請花座・基礎からなる無縫塔で、各部位はすべて花崗岩製である。塔身は、高さ0.47m、最大径0.38mである。銘は見当たらない。

SX9008（図6－4・12）

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣にはSX9007が、西隣にはSX9009がある。塔身・請花座・基礎からなる無縫塔で、各部位はすべて安山岩製である。塔身は、高さ0.48m、最大径0.42mで、正面に「前徳持當山中興十世恵照天大和尚禪師」、右側面に「文政二己年卯九月初六日」の銘をもつ。基礎は、六角形で反花座を置く。

SX9009 (図6-4・12)

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣には SX9008 が、西隣には SX9010 がある。塔身・請花座・基礎からなる無縫塔で、各部位はすべて安山岩製である。塔身は、高さ 0.44 m、最大径 0.39 m で、正面に「前□□山九世雪山亭大和尚禪師」の銘をもつ（□は判読不能）。基礎は六角形で反花座を置く。

SX9010 (図6-5・12)

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣には SX9009 が、西隣には SX9011 がある。塔身・請花座・基礎からなる無縫塔で、塔身・請花座は安山岩製、基礎は花崗岩製である。塔身は、高さ 0.43 m、最大径 0.33 m で、正面に施された花燈形の中に「七世無闕玄大和尚」、正面やや右側に「安永二癸巳年二月六日示寂」の銘をもつ。基礎は方形で、正面に「四世梁全大和尚」の銘をもつ。

SX9011 (図6-5・12)

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣には SX9010 が、西隣には SX9012 がある。塔身・請花座・基礎からなる無縫塔で、各部位はすべて安山岩製である。塔身は、高さ 0.49 m、最大径 0.36 m で、正面に施された花燈形の中に「當院前住海翁玉印和尚品位」、正面右側に「元文四巳未年九月二十三日」の銘をもつ。基礎は六角形で反花座を置く。

SX9012 (図6-5)

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある。東隣には SX9011 が、西隣には SX9013 がある。塔身・請花座・中台・基礎の4石からなる無縫塔である。塔身・請花座は花崗岩製、中台・基礎は安山岩製である。塔身は、高さ 0.48 m、最大径 0.38 m である。銘は見当たらない。

SX9013 (図6-5・13)

歴代住職墓が並ぶ基壇上にある有耳五輪塔で、東隣には SX9012 が、西隣には SX9014 がある。各部位はすべて安山岩製、地表面からの全高は約 0.68 m である。水輪の正面に「照」、左側面に「圓」、後面に「明」の銘がある。また、右側面にも銘があるが判読できない。

SX9014 (図6-5・13)

歴代住職墓が並ぶ基壇の最西端に位置する。東隣には SX9013 が、西隣（基壇外）には SX9015 がある。塔身・請花座・中台・基礎からなる無縫塔で、基礎だけが花崗岩製、他の3石は安山岩製である。塔身は、高さ 0.43 m、最大径 0.32 m である。塔身の正面に「十六世大和尚」の銘、右側に「明治十四巳八月廿八日」の銘がある。

SX9015 (図6-5・13)

歴代住職墓が並ぶ基壇の西側に隣接し、正面は北を向く。西隣には SX9016 がある。塔身・中台・下台および花立(左側のみ)からなり、塔身と花立は蛇紋岩製、中台と下台は安山岩製である。下台の下にはさらに大型の扁平な自然石を敷き基礎としている。塔身から下台までの全高は約 1.7 m である。塔身は自然石風で、正面に施された花燈形の中に「十七代聯山大和尚」の銘をもち、側面には矢穴が残る。中台の正面には「明治三十四年 新六月廿一日 旧五月六日」、同じく中台の左側面には「設立主 安都間クラ」の銘がある。下台には香炉が造りつけられている。

SX9016 (図6-5)

歴代住職墓が並ぶ基壇の西側、SX9015の西隣に位置し、正面は北を向く。塔身・請花座・中台・下台・基からなる無縫塔である。塔は、縁石（自然石）を回し内部に土を充填した上に築かれている。塔身は、高さ0.49 m、最大径0.35 mである。昭和期に没した和尚の墓で、正面に施された花燈形の中に「二十二世天冲鷹雲大和尚」、正面右側に没年、同じく正面左側に建立者の銘をもつ。事前に改葬されており、調査の対象とはしておらず、外表施設は図化した、僧名以外の銘文については図示していない。

SX9017 (図6-6・13)

調査区南側の急斜面を背にして位置し、北を正面とする自然石の塔である。SX9016の背後にあたる。地表面からの高さは、約0.8 mで、正面に「加永六年 天山仙桂上座 丑三月十日」の銘がある。花崗岩製である。

SX9018 (図6-6・13)

調査区南側の急斜面を背にして位置する丸石塔（位牌形）で、北を正面とする塔で、塔身・中台・下台からなる。塔身のみ安山岩製で、中台・下台は花崗岩製である。塔身は円頂方形で、高さ0.48 m、幅0.23 m、厚さ0.16 m、正面に施された花燈形の中に「豊室妙念大姉」、右側面に「明治十二卯五月七日」の銘をもつ。

SX9019 (図6-6・13)

調査区の中央部、やや南寄りに位置する石祠で、正面は北を向く。背後にはSX9015、SX9016がある。入母屋造りの屋根・観音扉のついた祠・方形の下台からなり、各部位はすべて安山岩製である。屋根から下台までの全高は0.84 mである。下台の下には、大型の自然石が下部遺構（石室）の蓋として敷かれているが、この蓋石は水平が保たれておらず、下石と蓋石の間に人頭大の自然石を挿み込み、石塔を安定させている。祠の中には花燈形が施され、その中に「蘭庭元秀禅尼」の銘が、祠の後面には「元禄十一戊寅年三月念八日」の銘がそれぞれある。

SX9020 (図6-6・13)

調査区の中央部に位置する石祠で、正面は北東を向く。北隣にSX9021がある。宝形造りの屋根・観音扉のついた祠・請花座・下台からなり、各部位はすべて安山岩製である。屋根から下台までの全高は1.49 mである。祠の中には花燈形が施され「一應妙機信女」の銘がある。

SX9021 (図6-7・13)

調査区の中央部、やや北寄りに位置する石祠で、正面は北東を向く。南隣にSX9020がある。寄棟造りの屋根・観音扉のついた祠・下台からなり、各部位はすべて安山岩製である。下台の下には大型の基礎石を敷き、さらに基礎石の下部に人頭大の石を咬ませ水平を保たせている。屋根から下台までの高さは0.81 mである。祠内部に施された花燈形の中には五輪塔が陽刻されており、「白室道光禅定門」の銘をもつ。また、右扉の内側中央には「寛文十年庚戌歳十一月十四日」、左扉の内側中央には「前神代次兵衛尉利尚卒示」の銘がある。

SX9022 (図6-6・13)

調査区の最北端に位置する石塔で、正面は南を向く。石塔の背後には、北向きの急斜面が迫る。花崗岩の自然石に花燈形を施し、その中に「繁室妙昌位」の銘をおく。石塔は、後向きに倒れている。地表面からの石塔の長さは約1.24 mである。

SX9023 (図6-7・14)

調査区の中央部、やや西寄りに位置する丸石塔（位牌形）で、正面は南東を向く。南西隣に SX9024 がある。塔身・中台・下台からなり、すべて花崗岩製である。塔身は円頂方形で、高さ 0.54 m・幅 0.3 m・厚さ 0.22 m、正面に施された花燈形の中に「天真禪童子」の銘をもつ。下台は半分以上が埋まり、塔全体が傾いている。

SX9024 (図6-7・14)

調査区の中央部、やや西寄りに位置する丸石塔（位牌形）で、正面は南東を向く。北東隣には SX9023 がある。塔身・中台・下台からなり、すべて花崗岩製である。塔身は円頂方形で、高さ 0.55 m・幅 0.31 m・厚さ 0.22 m、正面に施された花燈形の中に「槐窓覚夢信女」の銘をもつ。下台は半分近くが埋まり、塔全体が傾いている。

SX9025 (図6-7・14)

調査区の中央部、やや西寄りに位置する石祠で、正面は北東を向く。東隣には SX9026 がある。入母屋造りの屋根・観音扉のついた祠・方形の下台からなり、各部位はすべて安山岩製である。屋根から下台までの全高は 0.83 m である。下台の下には、大型の自然石（花崗岩）が下部遺構（石室）の蓋として敷かれている。下台と蓋石の間に幾つかの小礫を挿み込み、石塔を安定させている。祠の中には花燈形が施され、その中に「一吼軒主獅巖定活禪門」の銘が、祠の後面には「元禄九丙子天三月二十日逝」の銘がある。

SX9026 (図6-8・14)

調査区の中央部、やや西寄りに位置する丸石塔（位牌形）で、正面は北東を向く。東隣には SX9019 が、西隣には SX9025 があり、ちょうど両者に挟まれた格好になる。塔身・中台・下台からなり、すべて花崗岩製である。塔身は円頂方形で、高さ 0.55 m・幅 0.31 m・厚さ 0.22 m、正面に施された花燈形の中に「涼薫禪童子」の銘をもつ。

SX9027 (図6-8・14)

調査区の西部、中央寄りに位置する石祠で、正面は北を向く。東隣には SX9025 がある。入母屋造りの屋根・観音扉のついた祠・方形の下台からなり、各部位はすべて安山岩製である。屋根から下台までの全高は 0.75 m である。祠の中に「鑑室明周大姉之塔」、左扉の内側左寄りに「享保十四歳己酉三月六日卒去」の銘がある。

SX9028 (図6-8・14)

調査区の西部に位置する石祠で、正面は東を向く。背後には SX9030 がある。入母屋造りの屋根・観音扉のついた祠・中台・下台からなり、すべて安山岩製である。屋根から下台までの全高は 0.85 m である。祠の中に「金剛軒南山涼薫居士」、右扉の内側中央に「俗名神代官右衛門物部利經」、左扉の内側中央に「文化二年乙丑六月十日卒」の銘がある。

SX9029 (図6-8・14)

調査区の南西部に位置する石祠で、正面は東を向く。北隣には SX9030 があり、ともに縁石で囲まれている。入母屋造りの屋根・観音扉のついた祠（扉は左側だけ残存）・下台からなり、すべて安山岩製である。地表面からの高さは、約 0.7 m である。祠の中に「真際院活巖法水大姉之塔」、左扉の内側左寄りに「寛保四歳甲子正月二十五日卒□」の銘がある（□は判読不能）。

SX9030 (図6-8・14)

調査区の南西部に位置し、正面は東を向く。南隣にはSX9029があり、ともに縁石で囲まれている。塔身・請花座・基礎からなり、塔身・請花座は安山岩製、基礎は花崗岩製である。塔身は、頂部が丸い六角柱で、高さ0.91m・幅0.36mである。塔身の正面には花燈形が施され、その中に「桃林軒徼外元聞老居士」、右面に「元文三戌午天」、左面に「夏五月朔日卒」の銘がある。基礎は自然石である。

SX9031 (図6-8・14)

調査区の最西端に位置し、正面は北を向く。自然石を用いた塔で、地表面からの長さは、約0.75mである。正面に花燈形を施し、その中に「作夢童子」の銘をもつ。

SX9032 (図6-9・14)

調査区南側の急斜面を背にして位置する丸石塔（位牌形）で、正面は北を向く。東隣にSX9033がある。円頂方形の花崗岩製の石塔で、地表面からの高さ約0.55m、幅0.30m・厚さ0.23mである。正面に花燈形が施されており、その中に「紅雪禪童女」の銘がある。

SX9033 (図6-9)

調査区南側の急斜面を背にして位置する。西隣にSX9032、東隣にSX9034がある。花崗岩製の方形の石塔で、地表面からの高さ約0.54m、幅約0.30m・厚さ約0.16mである。北面に花燈形や銘があったような痕跡があるが、剥離のため判然としない。

SX9034 (図6-9・14)

調査区南側の急斜面を背にして位置し、正面は北を向く。西隣にはSX9033、東隣にはSX9035がある。花崗岩製の方形の石塔で、地表面からの高さ約0.54m、幅約0.31m、厚さ約0.17mである。正面に「享和元西天 蟠龍上座 八月廿六日」の銘がある。

SX9035 (図6-9)

調査区南側の急斜面を背にして位置する、花崗岩を用いた塔である。西隣にはSX034、東隣にはSX9036がある。地表面からの高さは約0.47mである。銘などは見当たらない。

SX9036 (図6-9)

調査区南側の急斜面を背にして位置する、花崗岩を用いた塔である。西隣にはSX9035、東隣にはSX9037がある。地表面からの高さは約0.33mである。銘などは見当たらない。

SX9037 (図6-9)

調査区南側の急斜面を背にして位置する、花崗岩を用いた塔である。西隣にはSX9036、東隣にはSX9038がある。地表面からの高さは約0.52mである。銘などは見当たらない。

SX9038 (図6-9)

調査区の南側の急斜面を背にして位置する、花崗岩を用いた塔である。西隣にはSX9037がある。地表面からの高さは約0.40mである。銘などは見当たらない。

SX9039

調査区西端近くに位置し、西隣には SX9031 がある。花崗岩を数個配しただけのものである。なお、実測図は作成していない。

SX9040 (図6-9)

墓地北東部の一段低い場所に位置し、SX9041、SX9042 とともに、他の石塔類から離れた場所にある。正面は南西を向く。頭部を欠いた石仏坐像、五輪塔の水輪、逆さに置いた宝篋印塔の笠からなり、すべて安山岩製で、全高は 0.42 m である。銘などは見当たらない。

SX9041 (図6-9・14)

墓地北東部の一段低い場所に位置し、SX9040、SX9042 とともに、他の石塔類から離れた場所にある。正面は南西を向く。平頂方形の塔身、自然石を用いた基礎からなる。塔身は、花崗岩製で高さ 0.54 m、幅 0.27 m、厚さ 0.22 m である。正面に施された花燈形の中に「為幻身了□」の銘がある。(□は判読不能、蓮弁か?)

SX9042 (図6-9)

墓地北東部の一段低い場所に位置し、SX9040、SX9041 とともに、他の石塔類から離れた場所にある。正面は南西を向く。安山岩製の有蓋類型板碑で、地表面からの長さ約 0.47 m、幅 0.20 m、厚さ 0.13 m である。後方に若干傾いて立っている。銘などは見当たらない。

SX9043 (図6-10)

調査区東部の石垣周縁に並べられた石塔の中のひとつで、北東側の列中、西端に位置する。東隣には SX9044 がある。安山岩製の宝篋印塔で、全高は約 0.73 m である。円柱の相輪、外開きの隅飾突起をもち軒上 3 段・軒下 2 段の笠、方形の軸、やや裾拡がりて下部がアーチ状の基礎からなる宝篋印塔である。銘などは見当たらない。

SX9044 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔のうち、北東側の列中に位置する。西隣には SX9043、東隣には SX9045 がある。宝篋印塔と五輪塔の部材が混在し、宝篋印塔の方柱の相輪、線刻を有する有耳五輪塔の火輪、宝篋印塔の方形の軸、やや裾拡がりて下部がアーチ状の基礎からなる。各部位はすべて安山岩製で、全高は約 0.66 m である。銘などは見当たらない。

SX9045 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔のうち、北東側の列中に位置する。西隣には SX9044、東隣には SX9046 がある。円柱の相輪、外開きの大きな隅飾突起をもつ軒上 3 段・軒下 2 段の笠、方形の軸、やや裾拡がりて下部がアーチ状の基礎からなる宝篋印塔である。各部位はすべて安山岩製、全高は約 0.67 m である。銘などは見当たらない。

SX9046 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北東側の列中に位置する。西隣に SX9045、東隣に SX9047 がある。宝篋印塔と五輪塔の部材が混在し、宝篋印塔の方柱の相輪、線刻を有する有耳五輪塔の火輪、宝篋印塔の方形の軸、方形の基礎からなる。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は、約 0.67 m である。銘などは見当たらない。

SX9047 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北東側の列中に位置する。西隣にSX9046、東隣にSX9048がある。方柱の相輪、外開きの隅飾突起をもつ軒上3段・軒下2段の笠、方形の軸、方形の基礎からなる宝篋印塔である。各部位はすべて安山岩製で、全高は約0.70mである。銘などは見当たらない。

SX9048 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北東側の列中、東端近くに位置する。西隣にはSX9047、東隣にはSX9049がある。宝篋印塔と五輪塔の部材が混在しており、宝篋印塔の円柱の相輪、有耳五輪塔の火輪、宝篋印塔の方形の軸、方形の基礎からなる。各部位はすべて安山岩製で、全高は約0.65mである。銘などは見当たらない。

SX9049 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北東側の列中の東端に位置する。西隣にはSX9048、南隣にはSX9050がある。方柱の相輪、外開きの隅飾突起をもつ軒上3段・軒下1段の笠、方形の軸、わずかに裾拡がりの基礎からなる宝篋印塔である。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は約0.67mである。銘などは見当たらない。

SX9050 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列中の北端近くに位置する。北隣にはSX9049、南隣にはSX9051がある。宝篋印塔の円柱の相輪とやや外開きの隅飾突起をもつ軒上3段・軒下2段の笠、五輪塔の水輪、わずかに裾拡がりの宝篋印塔の基礎からなる。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は約0.73mである。銘などは見当たらない。

SX9051 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の北寄りに位置する。北隣にはSX9050、南隣にはSX9052がある。円柱の相輪、やや外開きで大きな隅飾突起をもつ軒上3段・軒下2段の笠、方形の軸、方形の基礎からなる宝篋印塔である。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は約0.72mである。銘などは見当たらない。

SX9052 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の北寄りに位置する。北隣にはSX9051、やや距離をあげ、南隣にはSX9053がある。宝篋印塔と五輪塔の部材が混在しており、宝篋印塔の円柱の相輪、五輪塔の火輪、宝篋印塔の方形の軸、五輪塔の地輪からなる。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は約0.65mである。銘などは見当たらない。

SX9053 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の南寄りに位置する。北隣には、やや距離をあげSX9052が、南隣にはSX9054がそれぞれ位置する。方柱の相輪、外開きの隅飾突起をもつ軒上3段・軒下1段の笠、方形の軸、裾拡がりて下部がアーチ状の基礎からなる宝篋印塔である。各部位はすべて安山岩製、全高は約0.67mである。銘などは見当たらない。

SX9054 (図6-10)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の南寄りに位置する。北隣にはSX9053、南隣にはSX9055がある。

宝篋印塔と五輪塔の部材が混在しており、宝篋印塔の方柱の相輪、有耳五輪塔の火輪、宝篋印塔の方形の軸と方形の基礎からなる。各部位はすべて安山岩製で、地表面からの全高は約 0.53 m である。銘などは見当たらない。

SX9055 (図 6-11)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の南よりに位置する。北隣には SX9054、南隣には SX9059 がある。円柱の相輪、外開きの隅飾突起をもつ軒上 3 段・軒下 2 段の笠、裾拡がりで下部がアーチ状の基礎からなる。いずれも宝篋印塔の部材である。各部位はすべて安山岩製で、全高は約 0.60 m である。銘などは見当たらない。

SX9056 (図 6-11)

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北西側の列の南端に位置する。円柱の相輪、方形の基礎からなる。いずれも宝篋印塔の部材で、安山岩製である。地表面からの高さは約 0.33 m である。

SX9057

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北西側の列の南寄りに位置する。南隣には SX9056、北隣には SX9058 がある。五輪塔の空風輪と、有耳五輪塔の火輪の 2 石からなる。各部位は安山岩製で、全高は 0.31 m である。なお、SX9057 については、調査時には実測図作成および写真撮影を行っていないため、墓地移転後の写真を掲載した。

SX9058

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、北西側の列の北端に位置する。南隣には SX9057、東隣には SX9043 がある。五輪塔と宝篋印塔の部材が混在し、五輪塔の空風輪と、やや外開きの隅飾突起をもつ軒上 1 段の宝篋印塔の笠の 2 石からなる。各部位は安山岩製で、全高は 0.43 m である。なお、SX9058 については、調査時には実測図作成および写真撮影を行っていないため、墓地移転後の写真を掲載した。

SX9059

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の南端近くに位置する。北隣には SX9055、南隣には SX9060 がある。方柱の相輪、裾拡がりで下部がアーチ状の基礎の 2 石からなる。各部位は安山岩製で、全高は 0.31 m である。なお、実測図は作成していない。

SX9060

石垣周縁に並ぶ石塔の列のうち、南東側の列の南端に位置する。北隣には SX9059 がある。宝篋印塔の円柱の相輪、有耳五輪塔の火輪の 2 石からなる。各部位は安山岩製で、全高は 0.42 m である。なお、実測図は作成していない。

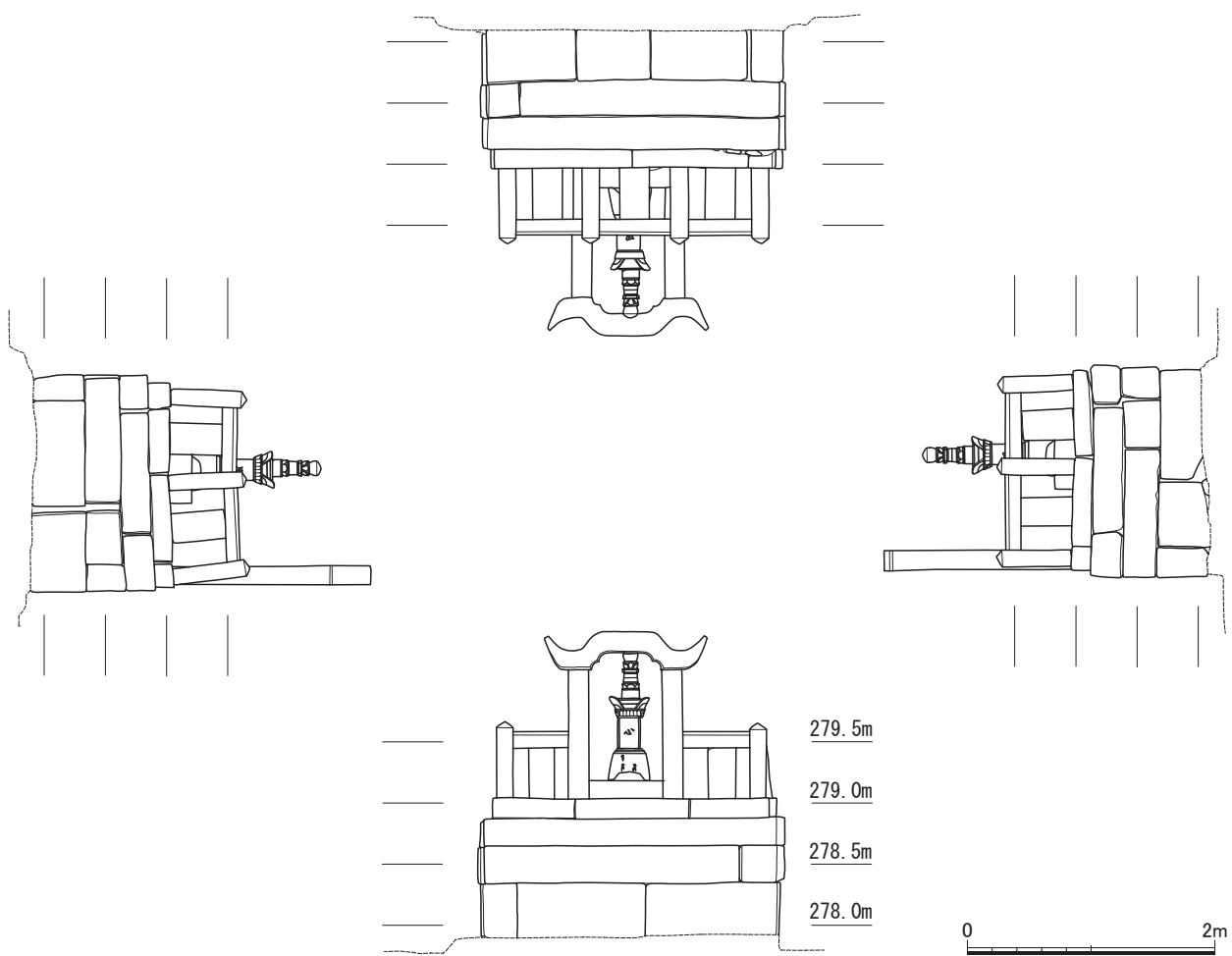
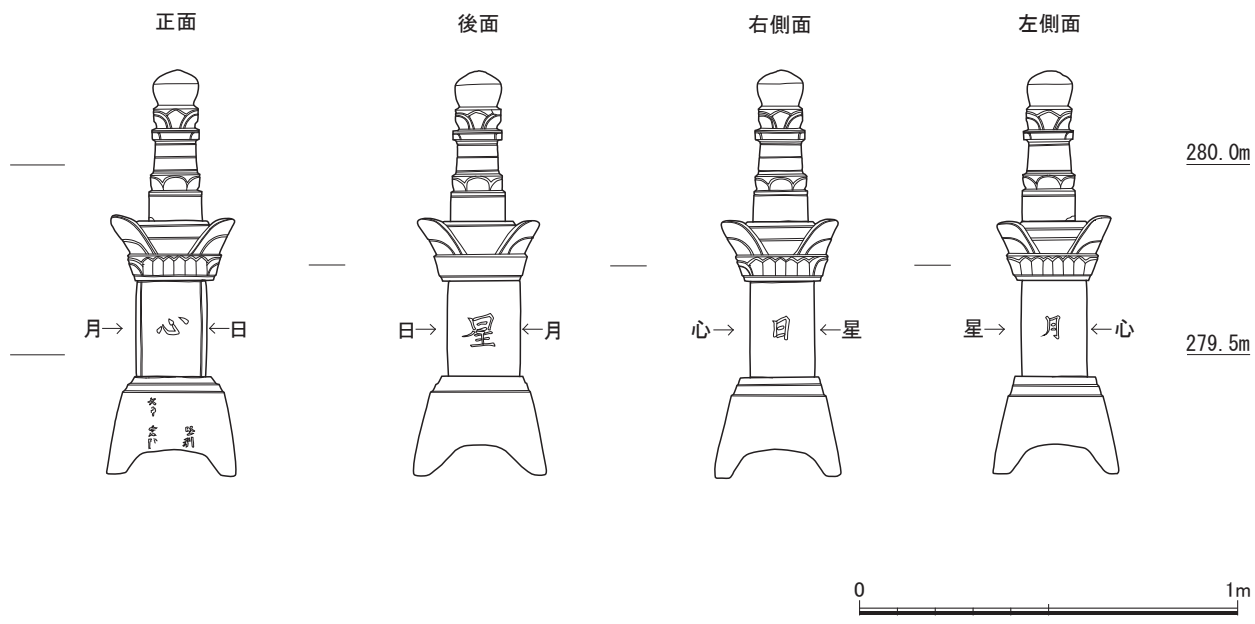


図6-3 外表施設1(1/60)

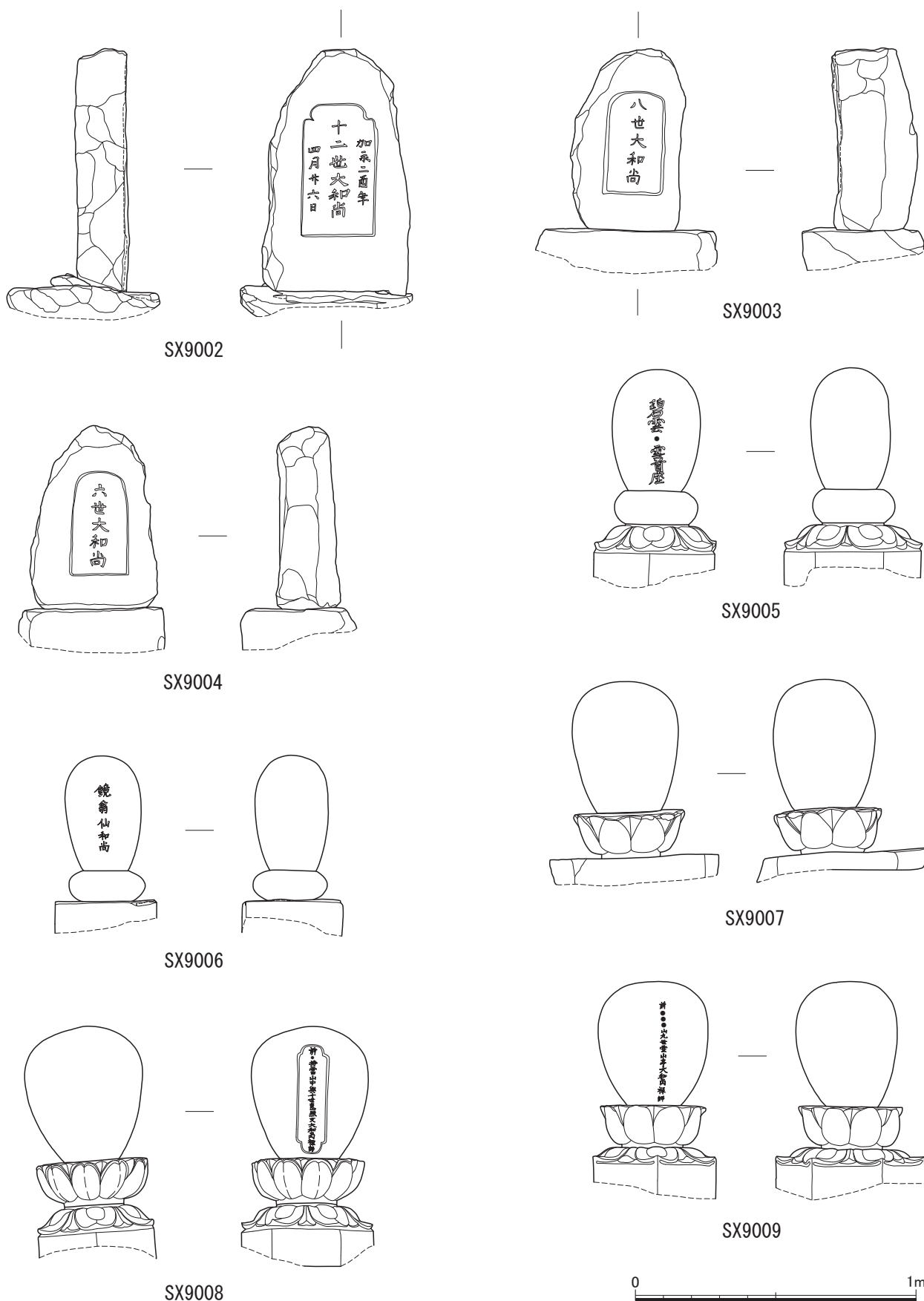
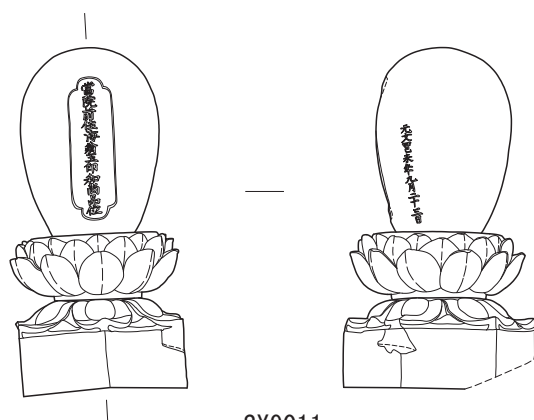
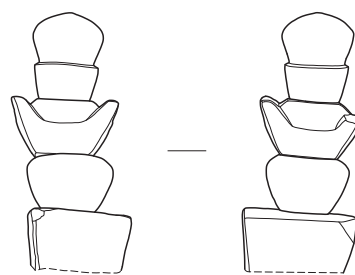


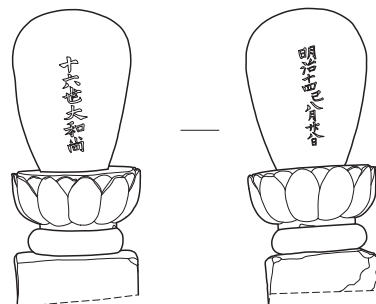
図6-4 外表施設2(1/60)



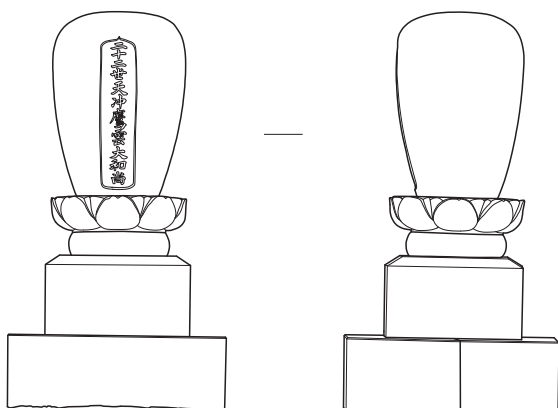
SX9011



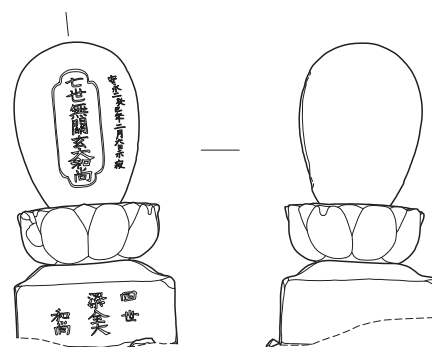
SX9013



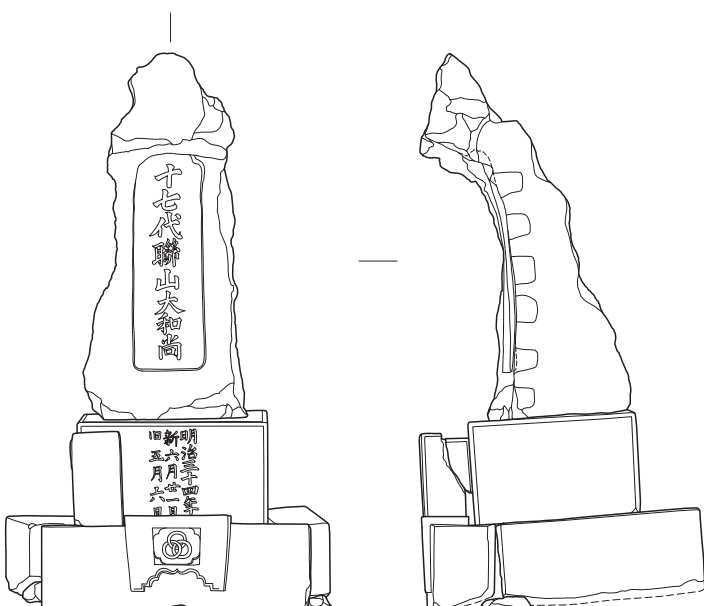
SX9014



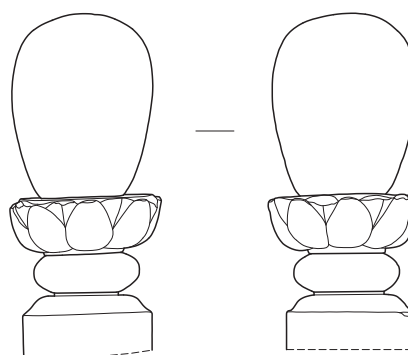
SX9016



SX9010



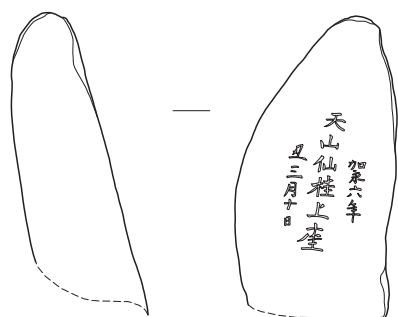
SX9015



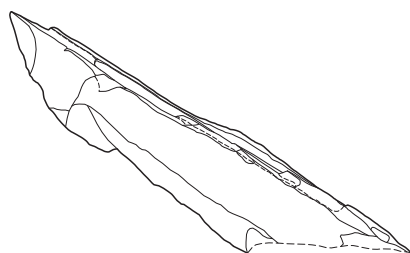
SX9012



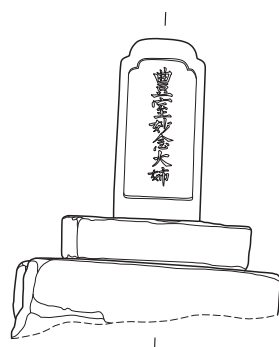
図6-5 外表施設3(1/60)



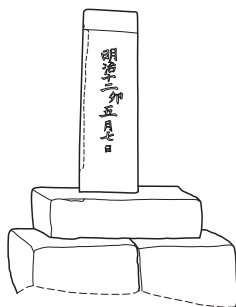
SX9017



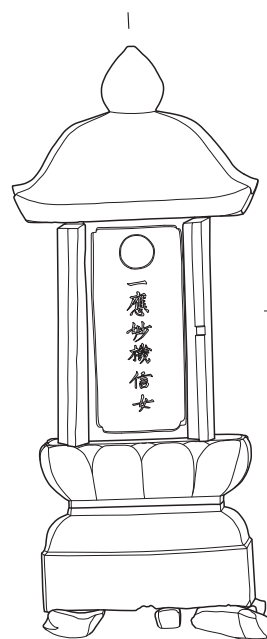
SX9022



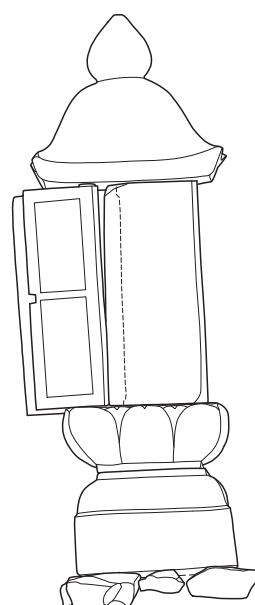
SX9018



SX9019

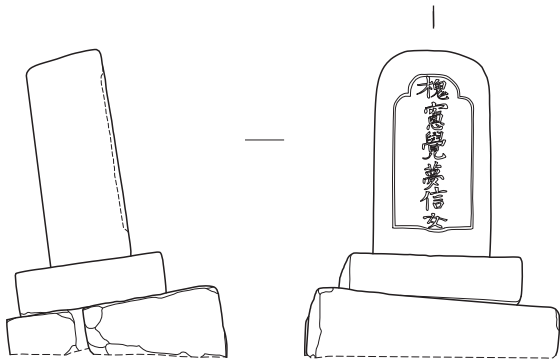


SX9020

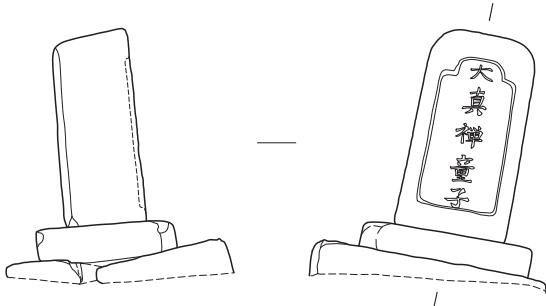


0 1m

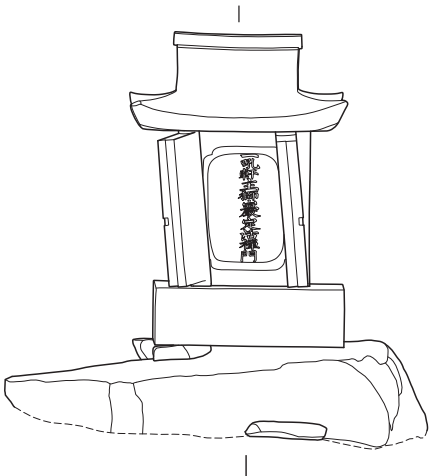
図6-6 外表施設4(1/60)



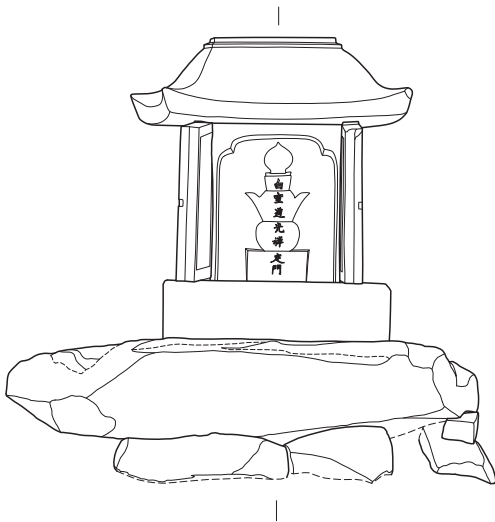
SX9024



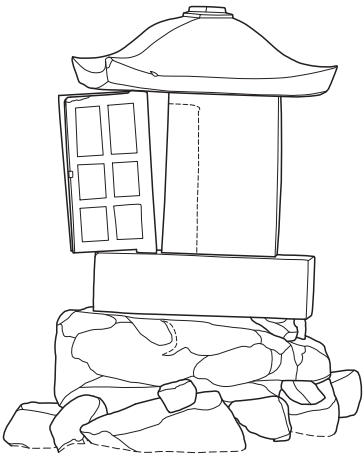
SX9023



SX9025

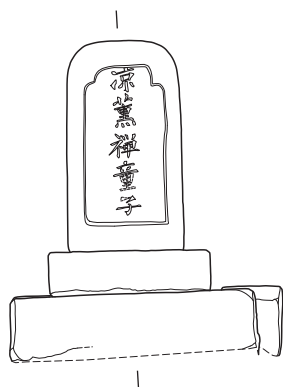


SX9021

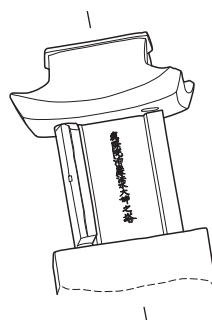
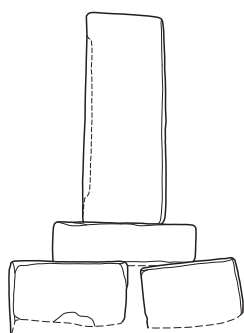


0 1m

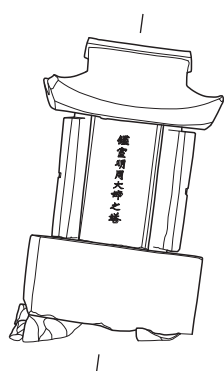
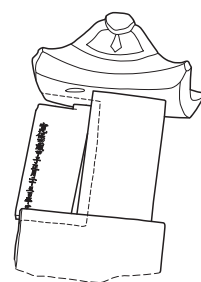
図6-7 外表施設5(1/60)



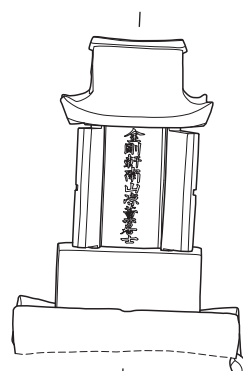
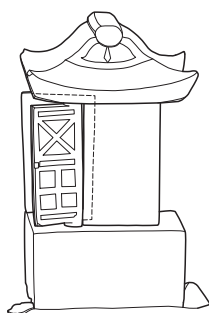
SX9026



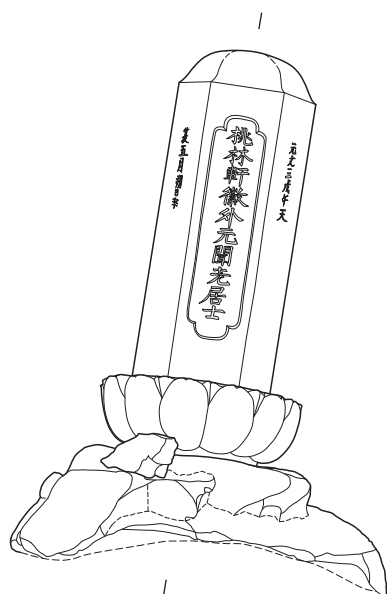
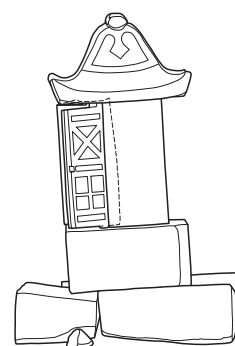
SX9029



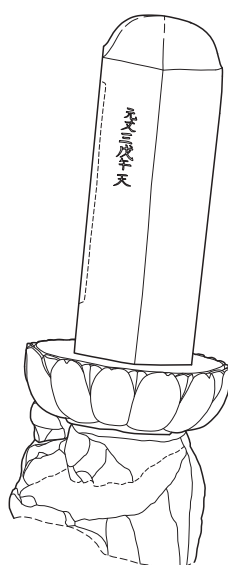
SX9027



SX9028



SX9030

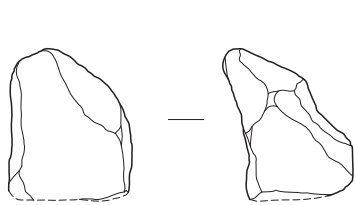


SX9031

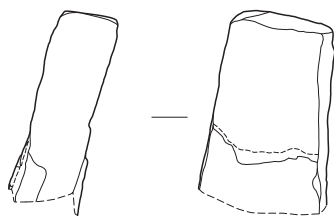


0 1m

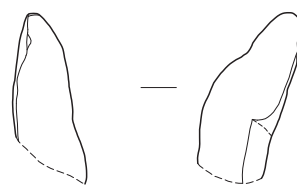
图6-8 外表施設6(1/60)



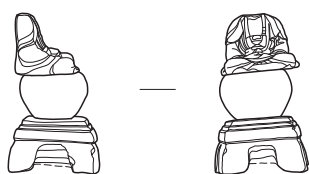
SX9038



SX9033



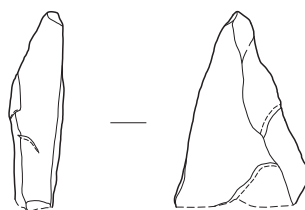
SX9035



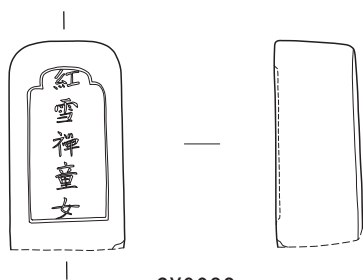
SX9040



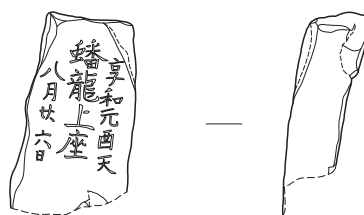
SX9036



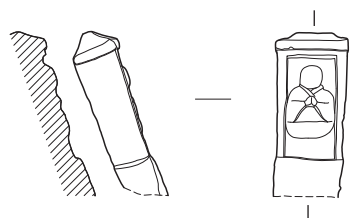
SX9037



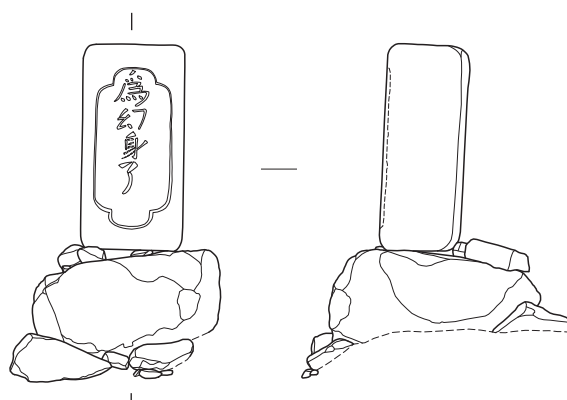
SX9032



SX9034



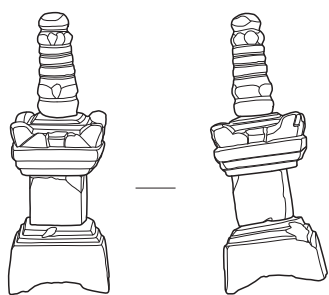
SX9042



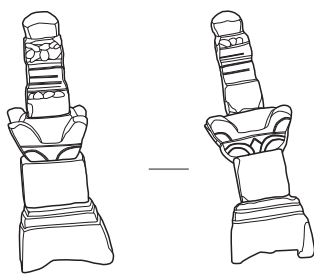
SX9041



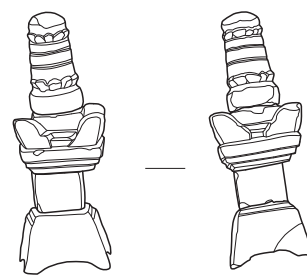
図6-9 外表施設7(1/60)



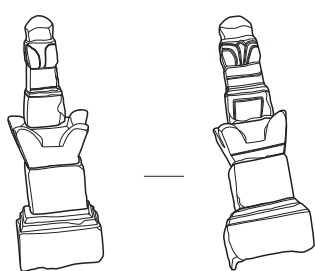
SX9043



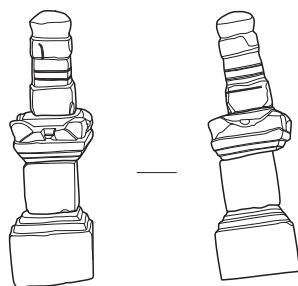
SX9044



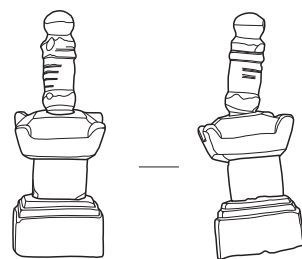
SX9045



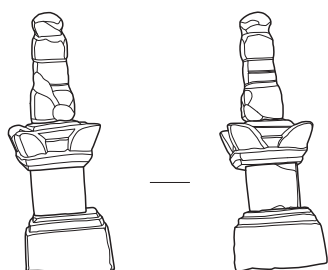
SX9046



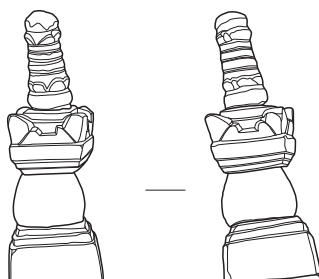
SX9047



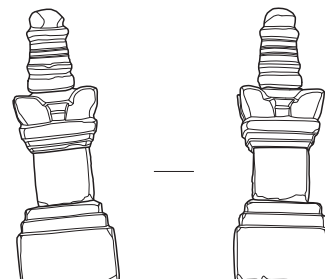
SX9048



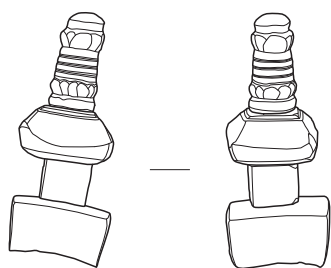
SX9049



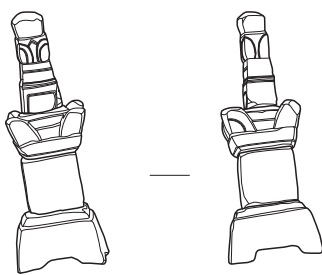
SX9050



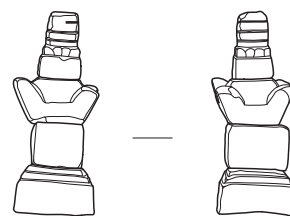
SX9051



SX9052



SX9053



SX9054



図6-10 外表施設8(1/60)

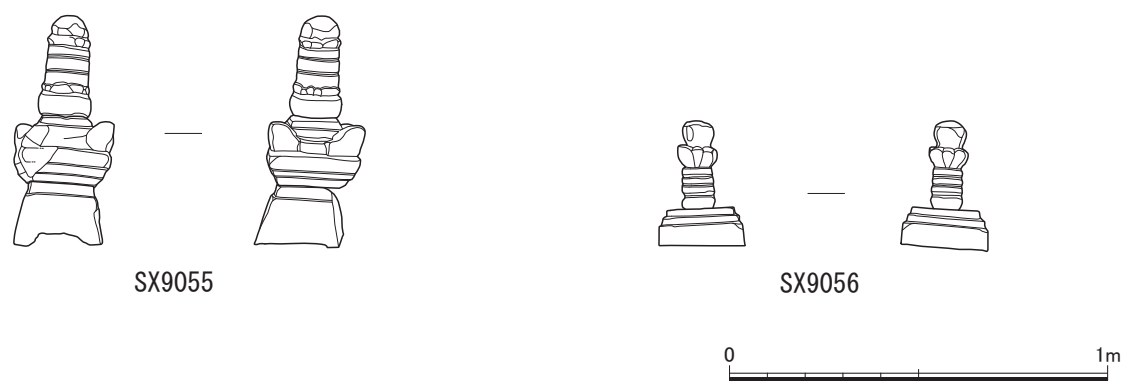


図 6－11 外表施設 9（1/60）

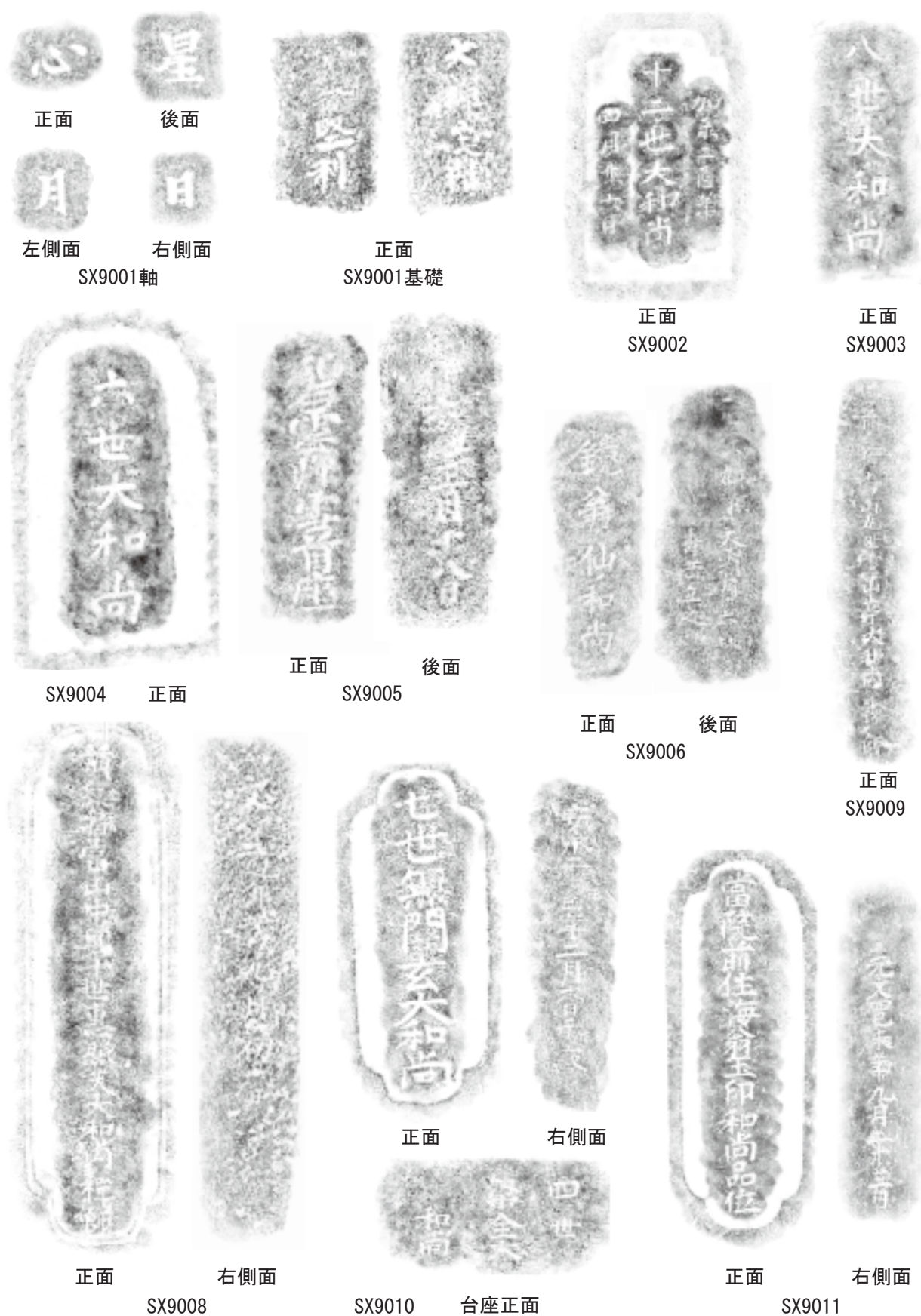


圖6-12 外表施設拓本1 (縮尺不同)

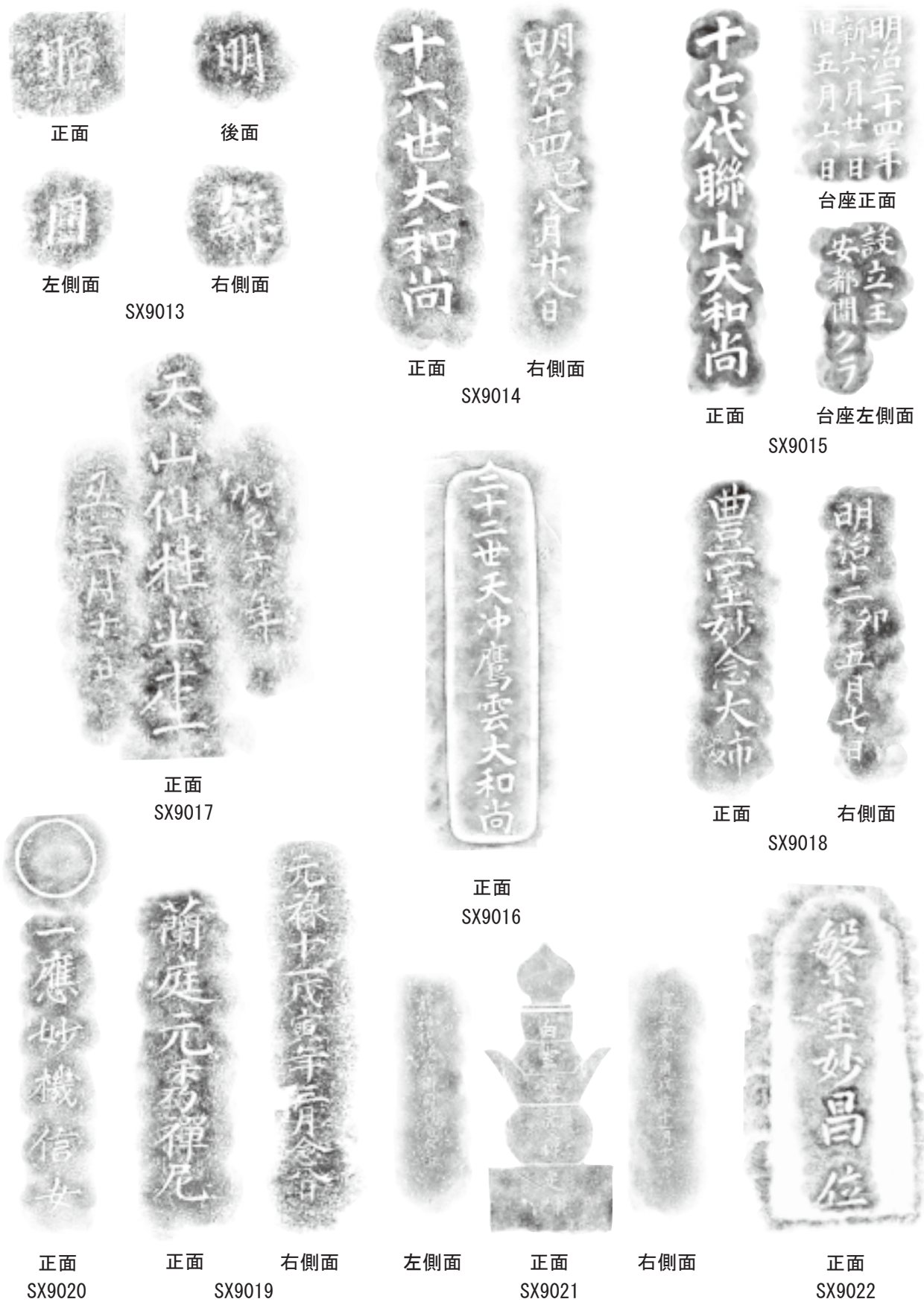


図6-13 外表施設拓本2 (縮尺不同)

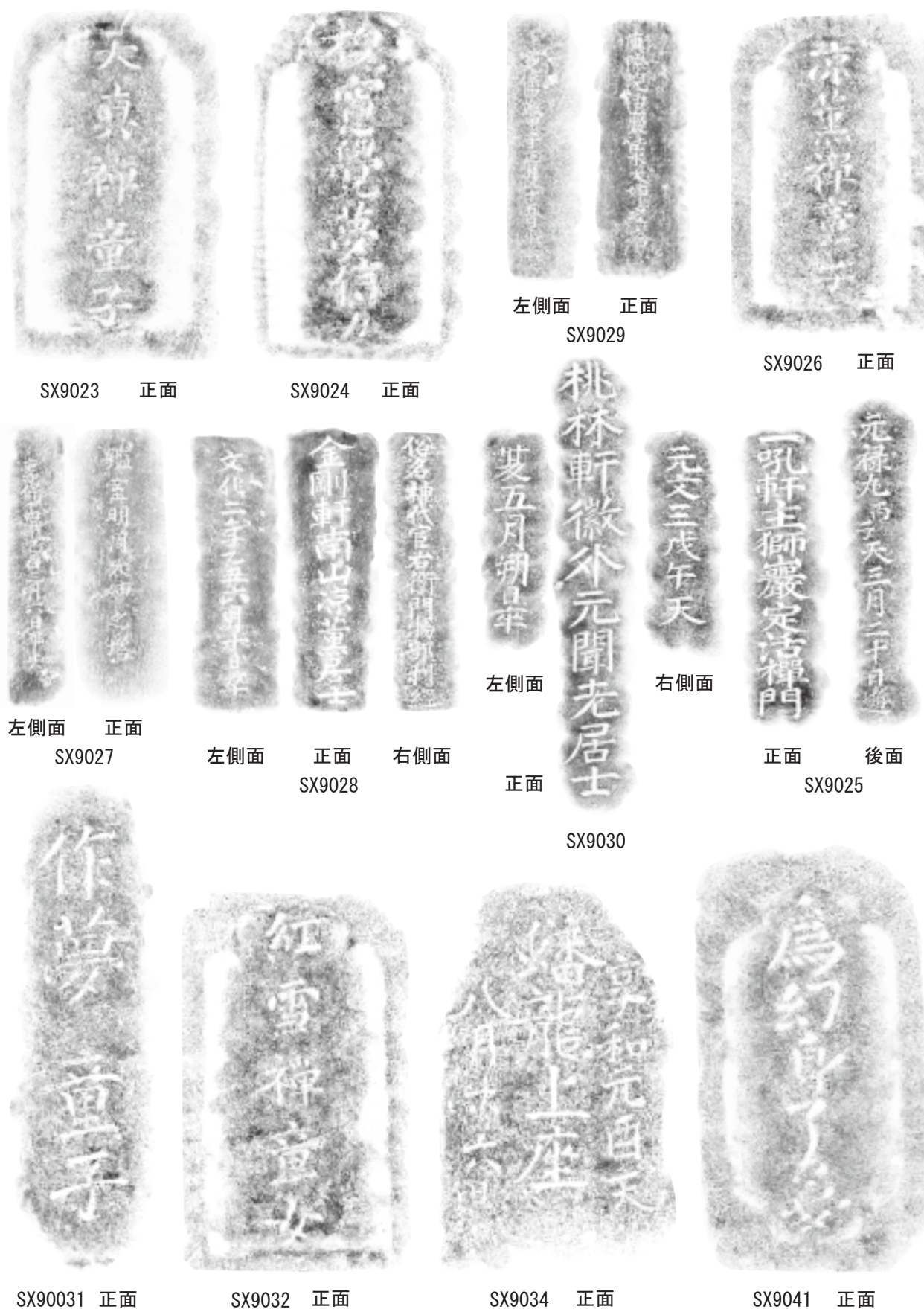


図6-14 外表施設拓本3 (縮尺不同)

表6-1 9区外表施設一覧

図版番号	遺構番号	石塔		銘	被葬者		直下の遺構	写真図版番号
		構成	高さ (m)		名前・続柄	生没年		
図 6-3・12	SX9001	宝篋印塔	1.06 (基礎除く)	心 星 日 月 覚菩提利大禪定門	神代勝利	?～永禄 8(1565)	-	写真図版 6-2
図 6-4・12	SX9002	石碑	0.86 (基礎除く)	加永二酉年 十二世大和尚 四月廿六日	12 代住職	?～嘉永 2(1849)	-	写真図版 6-3
図 6-4・12	SX9003	石碑	0.65 (基礎除く)	八世大和尚	8 代住職	?～天明 4(1784)	-	写真図版 6-3
図 6-4・12	SX9004	石碑	0.66 (基礎除く)	六世大和尚	6 代住職	?～安永 2(1773)	-	写真図版 6-3
図 6-4・12	SX9005	無縫塔	0.43 (塔身のみ)	碧雲緑雪首座 享保六〇正月十八日	碧雲緑雪首座	?～享保 6(1721)	-	写真図版 6-3
図 6-4・12	SX9006	無縫塔	0.41 (塔身のみ)	鏡翁仙和尚 元禄九丙子天霜月廿六日 壽岳立之	鏡翁仙和尚	?～元禄 9(1696)	-	写真図版 6-3
図 6-4	SX9007	無縫塔	0.47 (塔身のみ)	-	-	-	-	写真図版 6-3
図 6-4・12	SX9008	無縫塔	0.48 (塔身のみ)	前德持當山中興十世惠照天大和尚禪師 文政二己年卯九月初六日	10 代住職 惠照天大和尚	?～文政 2(1819)	-	写真図版 6-3
図 6-4・12	SX9009	無縫塔	0.44 (塔身のみ)	前〇〇〇山九世雪山亭大和尚禪師	9 代住職 雪山亭大和尚	?～寛政 5(1793)	-	写真図版 6-3
図 6-5・12	SX9010	無縫塔	0.43 (塔身のみ)	七世無間玄大和尚 (塔身) 安永二癸巳年二月六日示寂 (塔身) 四世 梁全大和尚 (基礎)	7 代住職 無間玄大和尚	?～安永 2(1773)	-	写真図版 6-4
図 6-5・12	SX9011	無縫塔	0.49 (塔身のみ)	當院前住海翁玉印和尚品位 元文四巳未年九月二十三日	3 代住職 海翁玉印和尚	?～元文 4(1739)	-	写真図版 6-4
図 6-5	SX9012	無縫塔	0.48 (塔身のみ)	-	-	-	-	写真図版 6-4
図 6-5・13	SX9013	五輪塔	0.68	正面「照」、左側「圓」、 裏側「明」右側「〇」	-	-	-	写真図版 6-4
図 6-5・13	SX9014	無縫塔	0.43 (塔身のみ)	十六世大和尚 明治十四巳八月廿八日	-	-	-	写真図版 6-4
図 6-5・13	SX9015	石碑	1.70	十七代聯山大和尚 明治三十四年 新六月廿一日 旧五月六日 設立主 安都間クラ	17 代住職 聯山大和尚	?～明治 34(1901)	ST9131	写真図版 6-4
図 6-5	SX9016	無縫塔	0.49 (塔身のみ)	二十二世天冲鷹雲大和尚	22 代住職 天冲鷹雲大和尚	(昭和)	-	写真図版 6-4
図 6-6・13	SX9017	石碑	0.80	加永六年 天山仙桂上座 丑三月十日	天山仙桂 玉林空仙和尚の弟子	?～嘉永 6(1853)	-	写真図版 6-5
図 6-6・13	SX9018	丸石塔 (位牌形)	0.75	豊室妙念大姉 明治十二卯五月七日	15 代住職の妻	?～明治 12(1879)	ST9136	写真図版 6-5
図 6-6・13	SX9019	石祠	0.84 (基礎除く)	蘭庭元秀禪尼 元禄十一戊寅年三月念八日	5 代利実の妻	?～元禄 11(1698)	ST9106	写真図版 6-5
図 6-6・13	SX9020	石祠	1.49	一應妙機信女	4 代利尚の妻	慶長 11(1606)～ 承応 3(1654)	ST9103	写真図版 6-5
図 6-7・13	SX9021	石祠	0.81 (基礎除く)	白室道光禪定門 前神代次兵衛尉利尚卒示 寛文十年庚戌歳十一月十四日	4 代 神代利尚	慶長 8(1603)～ 寛文 10(1670)	ST9102	写真図版 6-5・6
図 6-6・13	SX9022	石碑	0.64	繁室妙昌位	4 代利尚の義母	-	ST9101	写真図版 6-6
図 6-7・14	SX9023	丸石塔 (位牌形)	0.54 (塔身のみ)	天真禪童子	宮次郎 7 代利亮の次男	?～享保 11(1726)	ST9104	写真図版 6-6
図 6-7・14	SX9024	丸石塔 (位牌形)	0.55 (塔身のみ)	槐窓覺夢信女	かう 6 代利庸か 7 代利亮の娘	?～正徳 4(1714)	ST9105	写真図版 6-6

表6-1 9区外表施設一覧

図版番号	遺構番号	石塔		銘	被葬者		直下の遺構	写真図版番号
		構成	高さ (m)		名前・続柄	生没年		
図 6-7・14	SX9025	石祠	0.83 (基礎除く)	一吼軒主獅巖定活禪門 元禄九丙子天三月二十日逝	5代 神代利実	寛永 3(1623) ～ 元禄 9(1696)	ST9108	写真図版 6-6
図 6-8・14	SX9026	石碑	0.55 (塔身のみ)	涼薫禪童子	鳩之助 6代利庸の末子か 7代利亮の子	?～寛延 3(1750)	ST9107	写真図版 6-6
図 6-8・14	SX9027	石祠	0.75	鑑室明周大姉之塔 享保十四歳己酉三月六日卒去	7代利亮の妻	?～享保 14(1729)	ST9109	写真図版 6-7
図 6-8・14	SX9028	石祠	0.85	金剛軒南山涼薫居士 文化二年乙丑六月十日卒 俗名神代官右衛門物部利經	9代 神代利經	?～文化 2(1805)	ST9112	写真図版 6-7
図 6-8・14	SX9029	石祠	0.70	真際院活巖法水大姉之塔 寛保四歳甲子正月二十五日卒□	6代利庸の妻	?～寛保 4(1744)	ST9114	写真図版 6-7
図 6-8・14	SX9030	石碑	0.91 (塔身のみ)	桃林軒微外元聞老居士 元文三戊午天 夏五月朔日卒	6代 神代利庸	寛文 2(1662) ～ 元文 3(1738)	ST9115	写真図版 6-7
図 6-8・14	SX9031	石碑	0.75	作夢童子	-	-	ST9118	写真図版 6-7
図 6-9・14	SX9032	丸石塔 (位牌形)	0.55	紅雪禪童女	とと・とも 7代利亮の娘	?～享保 7(1722)	-	写真図版 6-7
図 6-9	SX9033	石碑	0.54	-	-	-	-	写真図版 6-7
図 6-9・14	SX9034	石碑	0.54	享和元酉天 蟠龍上座 八月廿六日	10代住職 惠照天大和尚の弟子	?～享和元年 (1801)	-	写真図版 6-7
図 6-9	SX9035	石碑	0.47	-	-	-	-	写真図版 6-7
図 6-9	SX9036	石碑	0.33	-	-	-	-	写真図版 6-7
図 6-9	SX9037	石碑	0.52	-	-	-	-	写真図版 6-7
図 6-9	SX9038	石碑	0.40	-	-	-	-	写真図版 6-7
-	SX9039	-	-	-	-	-	ST9117	写真図版 6-8
図 6-9	SX9040	組合石塔	0.42	-	-	-	-	写真図版 6-8
図 6-9・14	SX9041	石碑	0.54 (塔身のみ)	為幻身了□	-	-	-	写真図版 6-8
図 6-9	SX9042	板碑	0.47	-	-	-	-	写真図版 6-8
図 6-10	SX9043	宝篋印塔	0.73	-	-	-	-	写真図版 6-8
図 6-10	SX9044	宝篋印塔	0.66	-	-	-	-	写真図版 6-8
図 6-10	SX9045	宝篋印塔	0.67	-	-	-	-	写真図版 6-8
図 6-10	SX9046	宝篋印塔	0.67	-	-	-	-	写真図版 6-9
図 6-10	SX9047	宝篋印塔	0.70	-	-	-	-	写真図版 6-9
図 6-10	SX9048	組合石塔	0.64	-	-	-	-	写真図版 6-9

表6-1 9区外表施設一覧

図版番号	遺構番号	石塔		銘	被葬者		直下の遺構	写真図版番号
		構成	高さ (m)		名前・続柄	生没年		
図6-10	SX9049	宝篋印塔	0.67	-	-	-	-	写真図版6-9
図6-10	SX9050	組合石塔	0.73	-	-	-	-	写真図版6-9
図6-10	SX9051	宝篋印塔	0.72	-	-	-	-	写真図版6-9
図6-10	SX9052	組合石塔	0.65	-	-	-	-	写真図版6-9
図6-10	SX9053	宝篋印塔	0.67	-	-	-	-	写真図版6-9
図6-10	SX9054	組合石塔	0.53	-	-	-	-	写真図版6-10
図6-11	SX9055	組合石塔	0.60	-	-	-	-	写真図版6-10
図6-11	SX9056	組合石塔	0.33	-	-	-	-	写真図版6-10
-	SX9057	組合石塔	0.31	-	-	-	-	写真図版6-10
-	SX9058	組合石塔	0.43	-	-	-	-	写真図版6-10
-	SX9059	組合石塔	0.31	-	-	-	-	写真図版6-10
-	SX9060	組合石塔	0.42	-	-	-	-	写真図版6-10

2) 下部遺構と遺物

外表施設の記録化が終了した後、墓地移転のため石塔類が撤去された。SX9001については、基壇内部を調査する必要があるため、宝篋印塔・台石・石門・玉垣だけを先行して撤去し、基壇を構成する板石および竿石は調査に際し随時撤去することとした。SX9001以外の遺構については、外表施設を基礎石まですべて撤去した後、あらためて遺構検出を行い、下部遺構の調査を実施した。

調査および報告に際しては、墓と判るものについてはSTの遺構略号を、墓とは断定しかねるものについてはSXの遺構略号をそれぞれ付した。なお、火葬骨・髪・歯の埋納遺構および内容物の不明な埋納遺構についてもSTの遺構略号を付した。ここでは、上記の遺構の種別如何に関わらず、遺構番号順に報告する。

SX9001

基壇は竿石を4段重ね、内部に土石を充填し、上部に板石を敷き並べて造られている。調査に際しては、基壇上部の板石を除去した後、内部を調査しながら1段ずつ竿石を撤去する方法を繰り返した（写真図版6-13・14）。

基壇内部は上から1段目、2段目は主に花崗岩風化土が充填されていたが、3段目あたりから礫が増え始め、3段目下部から4段目下部（基底面）にかけては著しく多くの礫が充填されていた。また、基壇内部からは径3.0～4.0cmほどの玉石が若干数出土した。玉石は、墓地のいずれかの場所に敷かれていたものが、散乱した後、基壇を築いた際に混入したものと考えられる。つまり、基壇内部の土は、墓地内の土を集めて充填したものと推定される。ちなみに、基底面の中央（概ね宝篋印塔の真下）は、径0.50m程度の範囲が0.10m前後掘りくぼめられ礫が詰められていた。これは、上部に石塔など重量物が据え置かれることを意識した造作であるのかもしれない。

基壇内部からは、竿石のおおよそ2段目のレベルで、寛永通宝と5円玉が、おおよそ3段目のレベルで、寛永通宝・1円玉・5円玉・10円玉・土師器小皿が、おおよそ4段目から基底面にかけて、寛永通宝・半銭玉・土師器小皿・土師器鍋等が出土した。また、竿石の1段目と2段目の間に寛永通宝と1銭玉が、2段目と3段目の間に10円玉が、それぞれ挿まれていた。

基壇の基底面より下位については、サブトレンチを設定し調査したが何も検出されず、今回の調査では、基壇内部および基壇の下からは、内部主体や祭祀に関連するような施設は確認されなかった。なお、出土遺物のうち現行銭は、図示していない。

SX9001 出土遺物（図6-30）

1・2は土師器小皿で、1は口縁部に油煤が付着しており、底部糸切である。3は土師器鍋で、外面に煤が付着している。1・3は竿石のおおよそ4段目から基底面にかけて、2はおおよそ3段目のレベルから出土した。

4・5・7・8・10～12・14は寛永通寶で、4・5・8・11・12は古寛永、10・14は新寛永である。9は銅銭であるが欠損しており、寶の文字しか読み取れないため、種類は不明である。15は鉄銭で、錆のため種類不明である。6・13は近代の1銭玉と半銭玉である。4～6は竿石のおおよそ1段目、8・9はおおよそ2段目、10はおおよそ3段目、11～15はおおよそ4段目から基底面にかけて出土した。

ST9101（図6-17）

調査区の最北端、外表施設SX9022からやや南西にずれた地点に位置する墓である。円形の墓壇に陶器の甕を入れ、石蓋を載せる。墓壇の大きさは径約0.70m、検出面からの深さは0.41mである。甕の中からは古銭2枚および火葬骨が出土した。また、甕の下には古銭が5枚重ねて置かれていた。

ST9101 出土遺物（図6-30）

16は肥前産の陶器甕で、蔵骨器に転用されていた。肩部に縄状の突帯2条を貼り付け、白土を流し掛けて装飾する。17・18は棺内、19～23は棺外から出土した寛永通寶で、17・20は古寛永、その他のものは新寛永で、

新寛永のうち18・19は文銭である。

ST9102 (図6-17)

調査区の中央部、やや北寄りにあり、外表施設SX9021のほぼ直下に位置する墓である。方形の墓壙で、墓壙の北端に皿で蓋をした甕が埋納されていた。皿・甕ともに陶器である。墓壙の大きさは約0.62×0.61mで、検出面からの深さは約0.29mである。甕の中からは、火葬骨を入れた磁器の小鉢と蓋付の曲物が出土しており、曲物の中に小鉢が納められていたものと考えられる。副葬品は出土しなかった。

なお、墓壙東寄りの遺構検出面より高い位置から陶器の線香立が出土したが、墓壙埋土に所属するのか、表土中のものなのか判然としなかった。

ST9102 出土遺物 (図6-30・6-31)

24は肥前産の陶器甕で、全体に鉄釉を施し、肩部には緑釉を流し掛けて装飾している。内外面に格子目状の当て具・叩き具痕が残る。25は肥前産の陶器皿で、内面は象嵌文様を施し、見込みに4箇所の胎土目痕が残る。26・27は曲物とその蓋で、身は側板の一部、蓋は全体のおよそ1/2が残存している。蓋は、宝珠形のつまみと直方体の飾りおよび蓋部からなり、つまみははずれて出土した。つまみの頂部から飾りにかけて穿孔されていることから、つまみと飾りを接続するための何らかの付属品があったと考えられる。

28・29は肥前産の白磁蓋付丸形碗で、嬉野不動山で生産された可能性がある。30は肥前産の陶器線香立で、内面底部から外面胴部上半にかけて黒褐釉を施し、高台は露胎である。

ST9103 (図6-17)

調査区の中央部、やや北寄りにあり、外表施設SX9020のほぼ直下に位置する墓である。円形の墓壙で、径約0.30m、検出面からの深さは0.22mである。陶器の甕の中から、火葬骨を入れた磁器の碗と小鉢が出土している。また、甕の中には、蓋として使用されたと思われる陶器の皿が落ち込んだ状態で出土した。なお、副葬品は出土しなかった。

ST9103 出土遺物 (図6-31)

31は肥前産の陶器甕で、蔵骨器の外容器に転用されていた。外面底部に胎土目痕が残る。32は肥前系の染付磁器皿である。33は肥前産の染付磁器蓋付小鉢で、蔵骨器として用いられていた。蓋はなく、口縁部を打ち欠いている。34は肥前産の白磁丸形碗で、火葬骨を入れた33に被せられていた。

ST9104 (図6-18)

調査区の北端近く、やや西寄りにあり、外表施設SX9023の直下に位置する墓である。一見、二段掘りのように見えるが、崩れ等のために出来上がった形であろう。方形の墓壙で、検出面における大きさは約1.20×1.10m、底面は概ね0.84×0.82m、検出面からの深さは約1.35mである。墓壙からは、鉄釘および人骨が出土した。副葬品は出土しなかった。

ST9105 (図6-18)

調査区の北端近く、やや西寄りにあり、外表施設SX9024の直下に位置する墓である。方形の墓壙で、検出面における大きさは1.16×0.94m、底面の大きさは0.87×0.72m、検出面からの深さは1.43mである。墓壙からは、鉄釘および人骨が出土した。副葬品は出土しなかった。

ST9106 (図6-18)

調査区のほぼ中央にあり、外表施設SX9019の直下に位置する。ST9108とともに方形の石室を有する墓で、掘

り込みの中に石を積上げ構築されている。掘り込みの東側の一部は、ST9144 と重複し、ST9106 が古い。掘り込みの規模は約 2.0 m 四方で、石室の内寸は 0.75 m 四方、最上段の石から底面までの深さは 1.25 m である。石室からは、鉄釘、木片（棺材の一部）および人骨が出土したが、副葬品は出土しなかった。なお、石室の上には、蓋と外表施設 SX9019 の基礎を兼ねた大型の自然石（花崗岩）が載せられている。

ST9107（図 6－19）

調査区のほぼ中央、ST9106 と ST9108 の間にあり、外表施設 SX9026 の直下に位置する墓である。片側二段掘りの方形の墓で、墓壙全体の規模は約 1.32 × 1.02 m、2 段目の規模は、0.93 × 1.02 m、底面の大きさは 0.83 × 0.69 m、検出面からの深さは、0.93 m である。墓壙からは、鉄釘、磁器の小徳利、同じく磁器の緒締もしくは根付、刀、古銭 4 枚および人骨が出土した。

ST9107 出土遺物（図 6－31）

35 は肥前産の白磁小徳利で、型押成形され底部は露胎である。36 は肥前産の色絵磁器で、人物形の緒締もしくは根付と考えられ、型押成形され底部は露胎である。また、顔や烏帽子・着衣の表現を赤・金の色絵具で上絵付し、背面から底部にかけて穿孔を施している。37 は刀で、被葬者が小児であるので、懐刀であるのかもしれない。関部分から 2 つに折れた状態で出土した。刃部の大半は欠損しており、劣化が著しく鞘と錆着している。また、鐔は青銅製で、大部分が欠損している。楕円形で透かしを施している。切羽・縁金は青銅製、鯉口は木製である。さらに、柄には、装飾に用いられた銅板が付着し残存しており、大小の円形の打出文様がみとれる。なお、刀の図面は、残存状態の良い面を図示しているため、刃・鞘部分は差裏、柄は差表となっている。38～41 は寛永通寶で、39・40 は古寛永、38・41 は新寛永である。

ST9108（図 6－19）

調査区の中央部、やや西寄りにあり、外表施設 SX9025 の直下に位置する墓である。ST9106 とともに方形の石室を有する墓で、掘り込みの中に石を積上げ構築されている。掘り込みの規模は約 2.00 m 四方で、石室の内寸は 0.95 ～ 0.90 m、最上段の石から底面までの深さは 0.95 m である。石室からは、鉄釘、古銭 2 枚および人骨が出土した。他に副葬品は出土しなかった。なお、石室の上には、蓋と外表施設 SX9025 の基礎を兼ねた大型の自然石（花崗岩）が載せられていた。

ST9108 出土遺物（図 6－32）

42・43 は寛永通寶で、ともに古寛永である

ST9109（図 6－19）

調査区の南西部、中央寄りにあり、外表施設 SX9027 の直下に位置する墓である。方形の墓壙で、検出面での大きさは 1.52 × 1.27 m、底面は約 1.10 × 0.84 m、検出面からの深さは約 1.61 m である。墓壙からは鉄釘の他、陶器の華瓶、人骨が出土した。なお、墓壙最上部から、髪が入れた磁器の蓋付碗が出土したが（ST9110）、墓壙を埋め戻す際に同時に埋納されたものか、ある時間が経過した後、改めて埋納されたものかは判然としない。

ST9109 出土遺物（図 6－32）

44 は肥前産の陶器華瓶で、多久・武雄周辺で生産された可能性がある。胴くびれ部より上半は灰釉の上に白土で装飾し、下半には錆釉を施している。

ST9110（図 6－19）

調査区の南西部、中央寄りにある埋納遺構で、ST9109 と重複する位置から磁器の蓋付碗が出土した。径約 0.20

～0.30 mの円形の掘り方をもつようにもみえるが、明確ではない。碗には髪が入れられていた。

ST9110 出土遺物（図6-32）

45は肥前産の白磁蓋、46は肥前産の白磁碗である。蓋と碗では大きさが合わないため、別個体の蓋と碗を組み合わせたものであろう。

ST9111（図6-20）

調査区の南西部、やや中央寄りにあり、ST9109の南西側に位置する墓である。方形の墓壙で、検出面での大きさは 1.12×1.11 m、底面は $0.79 \sim 0.81$ m四方である。検出面からの深さは約1.06 mである。墓壙からは鉄釘が出土したが、副葬品は出土しなかった。また、歯が数点残存していたが、採取できなかった。なお、当墓壙に対応する明確な外表施設はなかったが、調査前には数点の自然石がとどまっており、これらの自然石が外表施設の一部だったのかもしれない。

ST9112（図6-20）

調査区の南西部にあり、外表施設SX9028の直下に位置し、円形の墓壙をもち、陶器の大型の甕を棺身とし、同じく陶器の鉢を蓋として用いた墓である。検出面での大きさは径約1.20 m、底面は径 $0.40 \sim 0.50$ m、検出面からの深さは約2.57 mである。棺内部からは、布袋に入った煙管、毛抜、古銭27枚以上および人骨が出土した。遺物は、散乱せず1箇所からまとまって出土した。

ST9112 出土遺物（図6-32・33、写真図版6-26・27）

47は肥前産の陶器鉢で、全体に鉄釉を施し、棺の蓋として転用している。48は肥前産の陶器甕で、全体に鉄釉を施し、肩部から胴部にかけて3箇所に3～4条の沈線を巡らす。49は青銅製の毛抜で、全体に鍍銀を施し、外面には桔梗文様の毛彫、留金具には菊花が表現されている。50・51は煙管の雁首と吸口で、ともに青銅製。残存する羅字は竹製である。煙管は、布袋に入った状態で出土したが、羅字の中ほどで2つに折れている（布袋＝写真図版6-62）。なお、吸口には布片が付着している。52～58は寛永通寶で、54は古寛永、52・53・55・56は新寛永、新寛永のうち56は元字銭である。59～64は鉄銭と銅銭が複数枚、錆着したものである。銭のうち図示できなかったものは写真のみ掲載している（写真図版6-26-56）。

ST9114（図6-21）

調査区の南西部、調査区南側の急斜面の裾にあり、外表施設SX9029の直下に位置する墓で、北隣にはST9115がある。方形二段掘りの石蓋を有する墓で、1段目は 1.49×1.30 mで検出面からの深さは約1.02 m、2段目は約 0.90×0.80 m、深さ約0.96 mである。蓋石は約 0.9×0.7 m、厚さ約0.1 mの自然石の板石で、墓壙の大きさとほとんど差がないため、調査時は墓壙に落ちかけの状態であった。墓壙からは、鉄釘、古銭8枚および人骨が出土した。なお、古銭8枚は人骨の膝に載った状態で重なって出土した。

ST9114 出土遺物（図6-33）

65～72は寛永通寶で、68は古寛永、その他は新寛永である。

ST9115（図6-21）

調査区の南西部にあり、外表施設SX9030の直下に位置する墓である。南隣にはST9114がある。方形二段掘りの石蓋を有する墓で、1段目の大きさは 1.50×1.39 mで検出面からの深さ0.57 m、2段目の大きさは 0.70×0.66 m、深さは0.98 mである。蓋石は約 1.00×0.70 m、厚さ0.10 mほどの自然石の板石である。蓋石が多少‘いびつ’であるため、墓壙との間に隙間が生じており、隙間を埋めるためであろうか $0.10 \sim 0.20$ m程度の石

数個を充填している。

また、墓壙底面には、0.15 ～ 0.30 mほどの板石が3個敷かれているが、底面すべてを覆っているわけではない。墓壙からは、鉄釘、木片（棺材の一部）、布片、扇子および人骨が出土した。

ST9115 出土遺物

ST9115 からは、扇子が出土したが、骨部分がほとんど残存せず、表面に塗布された赤漆塗膜が断片となって出土したのみである（写真図版6－27－76）。

ST9117（図6－22）

調査区の西端近くにあり、外表施設SX9039の直下に位置する墓で、西隣にはST9118がある。方形二段掘りの墓壙をもち、1段目の大きさは1.90 × 1.79 mで検出面からの深さ0.80 m、2段目の大きさは0.85 × 0.84 mで、深さは約1.30 mである。墓壙からは、鉄釘、古銭20枚以上の他、人骨が出土した。なお、古銭は人骨の頭部の下から連なった状態で出土した。古銭には布片が付着しており、袋に入れられるか、布で包まれていたものと考えられる。

ST9117 出土遺物

写真図版6－27－74・75は銅銭である。75は15枚以上が錆着し、74は5枚が錆着したもので、いずれも文字が判読できないため種類は不明である。両者とも布片が付着し、74の孔には銭を束ねていた紐が残存する。

ST9118（図6－22）

調査区の西端にあり、外表施設SX9031の直下に位置する墓で、東隣にはST9117がある。方形二段掘りの墓壙をもち、1段目は1.85 × 1.58 mで、検出面からの深さ約0.35 m、2段目は約0.87 × 0.85 mで、深さは約1.35 mである。2段目は、1段目の北東側に片寄って掘られている。墓壙からは、鉄釘、古銭23枚の他、人骨が出土した。古銭については、連なった状態ではないが、1箇所からまとまって出土した。

なお、平面図において、墓壙の1段目の平面形は台形であるが、これは墓壙北西側を掘り過ぎて、本来の形状の追及が困難になったことによるもので、本来は方形であったと推定される。さらに、断面見通し図において、墓壙1段目の深さに大きな差があり、北側で深く、南側で浅くなっているが、これは墓壙1段目の北側を掘り過ぎたため、本来は南側の深さと同程度であったと推定される。

ST9118 出土遺物（図6－33）

73～95は寛永通寶で、73・74・81・87は古寛永、その他のものは新寛永で、新寛永のうち77・79・80・85は文銭、90・95は元字銭である。

ST9119（図6－20）

調査区の東端近くにあり、外表施設SX9003のやや北にずれた地点に位置する。陶器の甕を棺身とし、同じく陶器の鉢を棺蓋とする。墓壙は円形で、検出面での大きさは径約0.90 m、同じく検出面からの深さは0.64 mである。墓壙底部は、浅いレンズ状である。

棺内からは、磁器の碗・小杯2点・小皿、1.0～5.0cmほどの石2個の他、火葬骨が出土した。また、棺底部からは、痕跡程度ではあるがワラ状の植物繊維が出土した。碗については、口縁部を打ち欠いており、欠けた破片が棺内から出土した。なお、棺内から出土した2個の石については、この石よりも下位から棺蓋の破片が出土しないことから、当初から棺内に入れられていたものと考えられる。

棺外からは、土師器の小皿が3点出土した。うち2点は半分には割られていた。いずれも墓壙底部より浮いた位置で出土したことから、埋め戻しの際（甕埋置の際）に埋められたものと考えられる。

ST9119 出土遺物（図6－34）

96は肥前産の陶器皿で、鐔形に開く口縁部には、銅緑釉の上に白土を掛けて波状の刷毛目で装飾し、内外面胴部から底には錆釉を施している。97は肥前産の陶器甕で、内外面に格子目文の当て具・叩き具痕が残る。98～100は土師器小皿で、99は底部糸切である。101は肥前産の白磁小杯、102は肥前産の染付小皿、103は肥前産の染付小杯である。104は肥前産の色絵磁器で、古九谷様式の丸形碗である。外面に州浜や扇等を上絵付けし、高台畳付には砂目痕が残る。

ST9121（図6－23）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9008・SX9009の南側に位置する墓である。北側に位置するST9122より新しい。方形の墓壇で、検出面での大きさは1.24×1.22m、検出面からの深さ約1.70m、底面の大きさは0.72×0.71mである。墓壇からは人骨の他は何も出土しなかった。

ST9122（図6－23）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9008～SX9011の直下に位置する墓である。四方でST9121・ST9123・ST9124・ST9127と重複するが、いずれの遺構よりも古い。円形の墓壇で、検出面での径は1.50～1.80m、同じく検出面からの深さ約1.75m、墓壇底面は径0.55～0.65mである。墓壇の壁面には凹凸があるが、これは墓壇を掘削した箇所が花崗岩風化土の硬い岩脈と風化が進行した軟質土とが互層をなしていることから生じたものと考えられる。

墓壇からは、人骨の他、水晶製の数珠玉12個とガラス製玉1個が出土した。数珠玉はまとまりをもたず、ばらばらに出土したが人骨に絡むような状態であったことから、少なくとも遺体に持たせるか、あるいは遺体に載せられていたものと考えられる。なお、墓壇が円形であること、鉄釘が出土していないことから、棺は蓋を釘打ちしない丸桶だったと推定される。

ST9122 出土遺物（図6－34）

105～115・117・118は水晶製の数珠玉で、117には鍍金された青銅製金具が付属する。この金具には環があり、房等を付けていたと考えられる。また、117は径2.1cm、118は径1.6cmと大型で、T字状に穿孔している。その他の玉は径0.9～1.0cmと小型である。116はガラス製の玉であるが、水晶製の玉と共に数珠玉を構成したものか、他の用途であった可能性も考えられる。

ST9123（図6－23）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9008のやや北側に位置する墓である。南側で重複するST9122より新しい。円形の墓壇で、検出面では径1.00～1.05m、底面での径は0.84～0.92m、検出面からの深さは約0.89mである。墓壇からは鉄釘と人骨が出土した。

ST9124（図6－24）

調査区の南東部にあり、外表施設SX9012・SX9013のやや南側に位置する墓である。方形の墓壇をもち、検出面での大きさは1.57×1.54m、底面では1.34×1.32m、検出面からの深さは1.43mである。墓壇西端にはST9125があるが、重複関係にあるのか、墓壇を埋める際に埋納したのかは判然としなかった。重複関係にあるのであれば、ST9125のほうが新しいことになる。墓壇からは、青銅製の絡子環・吊金具、不明鉄製品・漆の塗膜片・古銭30枚・鉄釘・人骨が出土した。鉄釘以外の遺物は、人骨に絡んで出土しており、古銭については1箇所からまとまって出土した。

ST9124 出土遺物 (図6-35)

119～148は寛永通寶で、121・123・124・127・132・133・136・137・146・147は古寛永、その他は新寛永で、新寛永のうち128・129・148は文銭である。

149は不明鉄製品で、仏具もしくは禅僧の持物の可能性がある。長方形の板を山形に折り曲げて成形し、全体の中ほどには段があり、握り部を作り出しているようにも感じられる。表面に木片・織物片が付着する。150・151は青銅製の吊金具と絡子環（禅宗系統で用いられる袈裟に付属する環）である。150は絡子環を掛けて吊り下げるための吊金具で、先端部がわずかに欠損している。150・151ともに織物が付着し、150には糸が残存する。

写真図版6-29-156は漆の塗膜片で、図化はしていない。いずれも漆器の一部であった可能性があるが、木地部分は腐朽し残存しない。

ST9125 (図6-24)

調査区の南東部にあり、外表施設SX9014のやや南側に位置する。ST9124の墓壇西端から出土した埋納遺構で、磁器の蔵骨器であるが、ST9124と重複関係にあるのか、墓壇を埋める際に埋納されたものかは判然としなかった。なお、蔵骨器には火葬骨が入れていた。

ST9125 出土遺物 (図6-35)

152・153は肥前産の白磁蓋付小壺である。

ST9127 (図6-24)

調査区の南東部にあり、外表施設SX9010・SX9011の北側に位置する墓である。墓壇の南東側で重複するST9122および西側で重複するSX9128より新しい。方形の墓壇をもち、検出面での大きさは1.55×1.22m、底面の大きさは0.90×0.84m、検出面からの深さは約1.79mである。墓壇からは、鉄釘および人骨が、墓壇埋土からは白磁の水滴が出土した。

なお、墓壇中央でST9145（白磁の蔵骨器）が、同じく墓壇東部でST9146（陶器の甕）・9147（陶器の蔵骨器）が出土した。いずれも墓壇の中心近くから出土しており、墓壇を埋め戻す際に埋納されたものと考えられる。

ST9127 出土遺物 (図6-35)

154は肥前産の白磁唐人形水滴で、型押成形しており、唐人の両肩に1箇所ずつ孔を設けている。

SX9128 (図6-25)

調査区の南東部にあり、外表施設SX9013の北側に位置する、性格不明遺構である。円形の土壇で検出面での径は0.53～0.55m、底面の径は0.18～0.20m、検出面からの深さは約0.20mである。埋土から焼骨が1片出土した。なお、重複するST9141より古い。さらに西側でST9143、東側でST9127と重複し、いずれよりも新しい。

ST9130 (図6-24)

調査区の中央部南寄りにあり、外表施設SX9014・SX9015の直下に位置する墓である。西側で重複するST9131より古く、北側で重複するST9143より新しい。方形の墓壇をもち、検出面での大きさは南北で約1.55m、東西は推定約1.30mである。墓壇底面の大きさは、南北で0.76m、東西もほぼ同程度であると推定される。検出面からの深さは1.81mである。墓壇からは、土師器小皿、銅製品（いわゆる雁首銭）、鉄銭6枚（?）、鉄釘および人骨が出土した。

なお、人骨については、頭蓋骨が見当たらないが、重複するST9131からは頭蓋骨が2個出土しており、ST9131の墓壇を掘削する際に出土したST9130の骨を再埋納したものと考えられる。

ST9130 出土遺物 (図6-36)

155は青銅製品で、いわゆる雁首銭である。156は土師器小皿である。写真図版6-29-160~162は鉄銭で、160は、2枚ほどが錆着しているが、枚数は錆のため不明である。161・162は各2枚が錆着している。

ST9131 (図6-24)

調査区の中央部南寄りにあり、外表施設SX9015の直下に位置する墓である。東側で重複するST9130より新しい。方形の墓壇をもち、検出面での大きさは 1.05×0.91 m、底面の大きさは 0.69×0.64 m、検出面から底面までの深さは約2.15 mである。墓壇からは、鉄釘、扇子、不明金属製品、ガラス製のボタン6個、ガラス製の玉、金モール、人骨が出土した。ボタンおよび金モールについては、肋骨付近から出土した。

人骨については、頭蓋骨が2個出土したが、これは、墓壇を掘削する際、隣接するST9130の骨が出土したため、再埋納したものと考えられる。なお、ST9130の頭蓋骨が潰れていないこと、さらに、頭蓋骨の上にはST9131の大腿骨が載っていることから、この頭蓋骨はST9131の棺に入れられて再埋納されたものと推定される。

ST9131 出土遺物 (図6-36)

157~162はガラス製ボタンである。163はガラス製玉で、琥珀色を呈する。玉はこの1点しか出土しておらず、どのような用途であるのか不明である。164は不明金属製品(真鍮製か)で、用途は不明である。165は扇子で、要付近より下部は欠損している。骨は竹製で、親骨の表面には赤漆、中骨基部の扇面に隠れない部分には赤色顔料を塗布しており、また親骨の3箇所に通かし飾りがある。なお、扇面の紙は残存状態が悪く、図化に耐えなかったため、骨部分のみ図示した。金モールは図化できなかったので写真を掲載しておく(写真図版6-29-173)。

ST9132 (図6-22)

調査区の中央部南端にあり、外表施設SX9015・SX9016の南側に位置する埋納遺構で、 0.20×0.19 m、深さ0.20 mの小穴に白磁の蔵骨器を埋納している。蔵骨器の中からは何も出土しなかった。

ST9132 出土遺物 (図6-36)

166・167は、肥前産の白磁蓋付小壺である。

ST9133

調査区の中央部南寄りにあり、SX9016の直下に位置する墓である。この墓については、墓地移転に先行し遺族個人で改葬が行われており、調査の対象とはしていないため、墓壇等の記録化は行っていない。

ST9134

調査区の中央部南寄りにあり、ST9133とST9135の間で出土した白磁の蔵骨器である(写真図版6-20)。原位置は保たれていないが、遺構番号を付した。蔵骨器には火葬骨が入れられていた。

ST9134 出土遺物 (図6-36)

168・169は、肥前産の白磁蓋小壺である。

ST9135 (図6-22)

調査区の中央部南寄りにあり、外表施設SX9018の北東側に位置する。ST9136に隣接する位置でもある。 0.38×0.21 m、深さ0.11 mの楕円形の穴で、内部からは陶器の土瓶が出土した。土瓶の中からは何も出土しなかったが、土瓶を利用した抱衣埋納の可能性はある。

ST9135 出土遺物（図6－36）

170・171 は肥前産の陶器土瓶で、蓋・身ともに外面は銅緑釉を施し、身の外面底部には煤が付着している。

ST9136（図6－25）

調査区の中央部南寄りにあり、外表施設 SX9018 の直下に位置する墓である。円形の墓壙で、検出面での径は約 0.90 m、底面での径は約 0.70 m、出面からの深さは 2.20 m である。墓壙からは木製の櫛、古銭 46 枚および人骨が出土し、鉄釘は出土しなかった。古銭は墓壙底部に散らばっているだけでなく、頭蓋骨に載った状態のものもあった。また、頭蓋骨上の古銭に接して布が残存しており、銭に通して束ねていた布であった可能性もある。

なお、墓壙が円形であること、鉄釘が出土していないことから、棺は蓋を釘打ちしない丸桶だったと推定される。さらに、頭蓋骨の上に載った状態の古銭は、当初から頭部に載せられていた銭が、腐朽に伴う人骨の移動に関わらず原位置を保ったと考えるより、棺蓋の上に置かれていた銭が落下したと考えたほうがよさそうである。ただし、棺蓋上に置かれていたのは、一部の銭だったのか、すべての銭だったのかは判然としない。

ST9136 出土遺物（図6－36・37）

172～190・192～218 は寛永通寶で、181・182・204・205・206 は古寛永、その他のものは新寛永である。新寛永のうち 215 は長字銭、192・193 には布片が付着する。191 は摩耗しており種類は不明である。219 は木製の櫛で、全体の 1/2 程度が残存する。樹種は不明である。

ST9137（図6－25）

調査区の中央部やや東寄りに位置する、ST9138 の墓壙内に埋納されていた白磁の蓋付碗である。碗には、髪が入れられていた。墓壙のやや北寄り、検出面から 0.35 m の深さから出土した。ST9138 の検出の際、掘り方が確認されなかったことから、ST9138 の墓壙を埋め戻す際に、埋納されたものと推定される。

ST9137 出土遺物（図6－37）

220・221 は肥前産の白磁蓋付碗である。

ST9138（図6－25）

調査区の中央部、やや北東寄りに位置する墓である。直上および近接した位置に外表施設はない。方形二段掘りの墓壙をもち、2 段目は南東側に偏って掘られている。墓壙 1 段目の検出面での大きさは 1.19 × 1.11 m、同じく検出面からの深さは 0.21 m、2 段目は 0.80 × 0.76 m、深さ 1.99 m、検出面から底部までの深さは 2.20 m、底面は 0.58 × 0.55 m の隅丸方形である。

墓壙からは、鉄釘、ガラス製の数珠玉 66 点、布で包まれた古銭 11 枚（文久永寶 6 枚・天保通寶 5 枚）、木製の煙管筒に入った状態の煙管および人骨が出土した。数珠玉はばらばらの状態、古銭は墓壙底面近くから錆着した状態、煙管は墓壙底面から若干浮いた位置から煙管筒に入ったまま、2 つに折れた状態でそれぞれ出土した。さらに、人骨の下からは間隙をおかず植物の葉が出土しており、葉は棺底に敷かれていたものと推定される。

なお、墓壙内やや北寄り、検出面から 0.35 m の深さから磁器の蓋付碗が出土し（ST9137）、中には髪が入れられていたが、これは墓壙を埋め戻す際に埋納したものと推定される。

ST9138 出土遺物（図6－37・6－38）

222～227 は文久永寶、228～232 は天保通寶で、すべて布袋に入った状態で出土した。233 は煙管で、雁首・吸口は青銅製、羅字は竹製である。234 の中に入れられ、2 つに折れた状態で出土した。

234 は木製の煙管筒で、中に入っていた煙管とともに 2 つに折れて出土した。蓋・身ともに、一木を削り抜いて作られており、外面には、極めて細密な格子目文様を彫り込んでいる。また、蓋の縁金には筒と煙草入とを結び

付けるための紐と緒締を装着している。235～301はガラス製数珠玉である。235は径1.35cm、236は径1.60cmと大型で、236はT字状の孔を設けている。その他の玉は径0.9～1.0cmと小型である。

ST9141 (図6-25)

調査区の南東部にあり、外表施設SX9013の北側に位置する。重複するSX9128より新しい。0.3×0.2mほどの楕円形の小穴の中に陶器の蔵骨器が埋納されていた。SX9128を調査する過程で出土したため、ST9141本来の掘り方は形状が不明な部分もあるが、下部においてSX9128のものとは異なる埋土が確認されたことから、重複関係にあることが判明した。蔵骨器には火葬骨が入れられていた。

ST9141 出土遺物 (図6-38)

302・303は肥前産の陶器蓋付小壺で、外面に白化粧土を施す。

ST9143 (図6-25)

調査区の中央部、やや東寄りにあり、外表施設SX9014の北側に位置する墓である。東側でSX9128、西側でST9144、南側でST9130と重複するが、いずれの遺構よりも古い。方形の墓壙をもつが、他の遺構と重複しており、検出面での大きさは不明である。推定すれば、南北1.1×東西0.90mほどになるうか。墓壙底面の大きさは0.63×0.53m、検出面からの深さは1.08mである。

墓壙からは、鉄釘、鉄製の糸切鋏、巻貝・二枚貝、掛軸の木製八双と軸棒、磁器製の小皿、ガラス製の玉1点・人骨が出土した。なお、二枚貝には微量の赤色顔料が残存しており、紅入れであったことがうかがえる。また、玉については1点しか出土していないことから、数珠玉と考えるより、掛軸に付属する飾りであると考えた方が自然であろう。

ST9143 出土遺物 (図6-38)

304は掛軸の木製八双、305は掛軸の木製軸棒である。304(八双)には一対の青銅製環(吊手と座金具)が付属する。304・305のそれぞれに金糸が織り込まれた裂(絹)の一部が残存する。ともに樹種は不明である。

306は鉄製の鉋尾と考えられ、薄い鉄板の三辺の端を折り曲げている。表面に木質が付着する。307はガラス製玉で、T字状の孔を設ける。308は二枚貝でシジミガイ、309は巻貝でツメタガイと考えられるが専門家の鑑定を受けたものではない。308の内側には微量の赤色顔料(紅)が残存しており、紅入として用いられたものであろう。310は鉄製の鋏で、布片が付着している。311は肥前産の白磁小皿で、型押成形され底部は露胎である。

ST9144 (図6-23)

調査区の中央部、やや東寄りにあり、外表施設SX9015の北側に位置する墓である。東側でST9143、西側でST9106と重複するが、どちらの遺構よりも新しい。おおむね楕円形の墓壙をもち、検出面での大きさは0.92×0.62m、墓壙底部は方形で0.43×0.41m、検出面からの深さは0.86mである。墓壙からは、鉄釘と人骨が出土した。

ST9145 (図6-24)

調査区東端近くにあり、外表施設SX9010・SX9011の北側に位置する。ST9127の墓壙のほぼ中央、深さ0.45mの地点から出土した陶器の蔵骨器である。ST9127と重複関係にある独立した遺構なのか、墓壙を埋め戻す際に埋納したものなのかが判然としなかったため、独立した遺構番号を付与している。蔵骨器の中には人骨(歯)が入れられていた。

ST9145 出土遺物 (図6-39)

312・313は肥前産の蓋付小壺で、外面に白化粧土を施している。

ST9146 (図6-24)

調査区の東端近くにあり、外表施設 SX9010・SX9011 の北側に位置する。ST9127 の墓壙の東寄り、深さ 0.35 m の地点から出土した陶器の甕である。陶器の播鉢を蓋としていたようで、破片が甕の中に落ちこんでいた。甕の内部には火葬骨が入っており、火葬骨の上に別の蔵骨器 (ST9147) が載った状態で出土した。ST9127 と重複関係にある独立した遺構なのか、墓壙を埋め戻す際に埋納したのかが判然としなかったため、独立した遺構番号を付与している。

ST9146 出土遺物 (図6-40)

314 は肥前産の陶器播鉢で、内外面の上半部に鉄釉を施す。315 は肥前産の陶器甕で、肩部に縄状突帯 1 条を貼り付け、その下に 2 条の沈線をめぐらす。外面底部に 3 箇所胎土目痕、内面に格子目状の当て具痕が残る。

ST9147 (図6-24)

調査区の東端近くにあり、外表施設 SX9010・SX9011 の北側に位置する。ST9127 の墓壙から出土した陶器の甕 (ST9146) の中から出土した。白磁の蔵骨器で、中に火葬骨が入れられていた。説明の際の煩雑さを避けるため、独立した遺構略号を付与している。蔵骨器は、ST9146 の火葬骨に載った状態で出土した。

ST9147 出土遺物 (図6-40)

316・317 は肥前産の白磁蓋付小壺である。

ST9148

調査区の南東部、外表施設 SX9016 と SX9017 の間に位置する白磁の蔵骨器である。原位置は保たれていないが、遺構番号を付した。内部には、火葬骨が入れられていた。

ST9148 出土遺物 (図6-40)

318・319 は肥前産の白磁蓋付小壺で、明治以降に製作されたものである。

SX9149 (図6-26)

調査区の中央部、やや北寄りにあり、外表施設 SX9020・SX9021 の西側に位置する埋納遺構である。平面は 0.80 × 0.40 m の楕円形で、検出面からの深さは 0.40 m、底面は径 0.30 × 0.35 m のいびつな楕円形である。遺構は、南側が深く掘られており、陶器の甕が出土した。甕は、同じく陶器の皿で蓋をされていた。甕の内部には、底部から約 18cm の高さまで炭が充填されており、中央付近から 8 本の筒状の炭化した遺物が炭の中にまとめて立てられた状態で出土した。遺物は、触れるだけで破砕するほど劣化が進んでいた。

この遺構・遺物を一瞥すると、経典を埋納した経塚であるように思えることから、炭化した筒状の遺物について赤外線スキャナを用いて調査したが、文字等は読み取れなかった。さらに、詳細に検討するため、九州国立博物館において X 線 CT スキャン装置で状態や断面調査を実施した。その結果、幅 20cm 前後の紙と思われる巻物であること、巻物は計 8 巻がまとめられた状態で付着していること、それぞれの巻物に軸はなく、最も外側はやや厚みのあるもので巻かれていることなどが判った。

これらのことを総合すると、SX9149 は巻物を埋納した埋納遺構である可能性が高いが、はたして巻物に書かれているものが経典なのかどうかは不明である。

SX9149 出土遺物 (図6-40)

320 は肥前産の二彩手陶器鉢で、鉄釉を搔いて櫛描き波状文を施している。321 は肥前産の陶器甕で、全体に鉄釉を施しており、肩部には白化粧土を流し掛けて装飾している。

検出面出土および表採遺物（図6－40、写真図版6－8）

322は肥前産の陶器蓋である。323は肥前産の青磁壺としたが、火入や瓶の可能性もある。324は肥前産の染付磁器碗である。325は肥前産の陶器鉢で、322と同一個体と考えられる。326は肥前産の陶器土瓶で、外面底部に煤が付着している。327は肥前産の染付磁器皿である。

なお、検出面出土および表採の銭は、拓本をとっておらず、写真のみ掲載している。写真図版6－32－336・337・339は寛永通寶で、いずれも新寛永、339は文銭である。写真図版6－32－338は文久永寶である。写真図版6－32－340は1/3程度が欠損しているが、おそらく元豊通寶であろう。

SX9001 周辺の出土遺物（図6－41）

328～330・332～340・342～350は寛永通寶で、335・340・343・347は古寛永、その他は新寛永で、新寛永のうち342は文銭、345は元字銭である。331は昭武通寶、341は文久永寶である。

3 まとめ

東畑瀬遺跡9区（宗源院墓地）では、神代勝利とその一族、また宗源院歴代住職の墓を調査した。

宗源院墓地の調査は、墓地の移転に先だって、まず墓石・石塔類等の外表施設を記録化し、これらを撤去した後、改めて遺構検出を行い墓壇等の下部遺構について調査した。以上のような手順で調査を行ったため、ここでも外表施設や下部遺構等の項目に分けて概要を説明する（1）。

外表施設について

宗源院墓地で確認された外表施設（墓石・石塔類）は、自然石の配石も含めると総数60基である。

外表施設は、宝篋印塔、有耳五輪塔、無縫塔、石祠、丸石塔（位牌形）、有蓋類型板碑、自然石および宝篋印塔や五輪塔等の各部材が組み合わせられた石塔に大別できる。外表施設には、墓碑銘から判断できるものとして、神代家一族と歴代住職の墓がある。調査区の東端付近には、神代勝利墓、東端の石垣周縁には部材が組み合わせられた石塔群が分布する。また、概ね中央部から南西部には神代家一族の各墓、南東部には歴代住職墓がそれぞれ位置している。

神代家一族の墓には、石祠・丸石塔（位牌形）・六角形塔があり、正面は概ね北から北東に向けられている。このうち石祠は、神代家歴代当主と妻の墓だけに用いられている。7基の石祠のうち、SX9020は、屋根が宝形造りで、請花座をもつ点が他の石祠と異なるが、他の6基については、SX9021の屋根が寄棟造りである点を省けば同じ形態である。

また、歴代住職の墓には、無縫塔・自然石が用いられている。住職墓の多くは、調査区の南東部に築かれた基壇上に、正面を北にして並べられている。基壇上の住職墓は、各部材が組み換えられており、造られた当初の姿を留めるものはほとんどない。

なお、調査区東端の石垣周縁に並べられていた石塔群には、室町時代後期～戦国時代のものが多く含まれている。東畑瀬地区では、畑瀬城跡（畑瀬城跡2・3区）や神代氏館跡（東畑瀬遺跡6区）等、室町時代後期～戦国時代の遺跡が調査され、山内における拠点的な場所であったことが判明しており、これらの石塔は、東畑瀬地区に造立されていたものが、後世になり集められたものと考えられる。

下部遺構について

総数40基が確認でき、その内訳は、墓37基、埋納遺構2基、不明遺構1基である。火葬骨・髪・歯の埋納遺

構や内容物がわからない埋納遺構が 10 基あるが、報告に際しては、これらも墓として扱った。

墓壙には、方形、円形の 2 種類のものがあるが、方形墓壙が大多数である。方形墓壙の墓は、素掘りのもの、石室を有するもの、二段掘りのもの、片側二段掘りのもの、二段掘りで石蓋を有するもの等多様である。多くから釘が出土していることから、棺は釘を使用した箱形棺であったと考えられる。

一方、円形墓壙の墓は、素掘りのものに限られる。このうち、釘が全く出土していない墓は、釘を使用しない丸桶を棺として用いていたと考えられる。また、陶器の甕を棺に転用している場合もある。

下部遺構のうち、火葬骨・髪・歯が入られた蔵骨器や蓋付小鉢が 10 基確認されているが、その中でも原位置が保たれている 8 基のうち、他の墓壙との関係が読み取れない位置から出土した ST9132 を除く 7 基については、それらが埋納された状況を幾通りか想定できる。

まず、他の墓壙の端に重複するか、墓壙に近接する位置で出土したもの（ST9110・ST9125・ST9141）については、主たる墓に関係するものである可能性がある。ただし、これらについては、埋納されたものが火葬骨のほか、髪もあることから、すべてを単純に埋葬行為と理解してよいのか疑問である。

一方、他の墓壙と完全に重複した位置から出土したもの（ST9137・ST9145・ST9146・ST9147）については、主たる墓の墓壙を掘る際、過去に埋納された蔵骨器等が露出したため、埋め戻しに際して埋納されたものか、あるいは、主たる墓の外表施設が原位置から動かされた後、偶然同じ場所に埋納されたものか、または、主たる墓の造営に際して当初から埋納されたものなのか、いずれかの可能性が考えられる。

なお、調査区の南東部に並ぶ歴代住職墓については、墓が並ぶ基壇の内部からは何も出土しなかった。また、基壇撤去後、下部遺構を調査したが、これら住職墓と対応するような位置で墓壙は確認されなかった。ちなみに、ST9122 および ST9130 については、基壇直下に位置するが、基壇上の石塔と対応するものとは捉えにくく、後述するように、これら住職墓の並ぶ基壇は、後世築造されたものと考えられる。

さらに、墓地では、墓壙の構造や規模が類似する墓が隣接して営まれている傾向が認められ、これらは夫婦や近親者の墓である可能性がある。なお、夫婦の墓と考えられるものについては、項目を分けて記述する。

外表施設と下部遺構の対応関係

宗源院墓地からは、外表施設の直下から下部遺構が検出されたもの、すなわち墓石と墓壙の対応関係が保たれていると考えられる墓が 17 基確認された。このうち、ST9102 と ST9103、ST9106 と ST9108、ST9114 と ST9115 の 3 組は、墓が近接して営まれており、下部遺構の構造が類似している。さらに、墓碑銘と文献とを照らし合わせると、3 組とも夫婦の墓である可能性が高い。

ST9102 と ST9103 のうち、ST9102 には、俗名・戒名・没年月日の銘、ST9103 には、戒名の銘があり、ST9102 は 4 代神代利尚（1603 ～ 1670）、ST9103 は利尚の妻（1606 ～ 1654）の墓であることが推定される。これらの墓は、屋根や祠部分の形態が多少異なるが、ともに石祠を用いていること、火葬骨が蔵骨器に入れられていること、さらに、甕と皿を用いた外容器に蔵骨器が納められていることなど類似する点が多い。

ST9106 と ST9108 は、ともに戒名と没年月日の銘があり、ST9108 は、5 代神代利実（1626 ～ 1696）の墓、ST9106 は利実の妻（？～ 1698）の墓であると推定される。両者は、外表施設に石祠を用いるだけでなく、同規模の石室を有する点で共通する。夫妻の墓の間には、ST9107 があるが、これは夫妻の墓が造られた後に営まれたものであり、元々夫妻の墓は並ぶように位置していることがわかる。

ST9114 と ST9115 についても、ともに戒名と没年月日の銘があり、ST9115 は 6 代神代利庸（1662 ～ 1738）の墓、ST9114 はその妻（？～ 1744）の墓であると推定される。両者は隣接して営まれており、縁石に囲まれている。また、墓の構造もともに方形二段掘りで石蓋を有し、墓壙も同規模である。ただし、両者の外表施設は異なっており、利庸の墓は六角形塔、妻の墓は石祠である。利庸の墓に用いられている六角形塔は、他の歴代当主・妻の墓に

はみられない特異なものである。

なお、これらの3組の墓からは、すべて人骨が出土しており、形質人類学的な所見は、銘文等から得られる情報（性別・年齢など）と矛盾はしない。

SX9001 について

神代勝利の墓と伝えられている墓（以下、勝利墓）である。勝利墓では基壇内部の調査を行うため、外表施設の記録化を行った後、宝篋印塔・台石・石門・玉垣を先行して撤去し、その後、基壇を構成する板石と竿石を撤去しながら調査を実施した。その結果、基壇内部からは、内部主体や祭祀に関わるような施設は確認されなかった。また基壇撤去後、あらためて遺構検出およびトレンチを設定し調査を行ったが、基壇直下からも何も出土しなかった。

なお、基壇内からは、土師器の小皿や鍋片、古銭・近代銭・現行銭などの銭貨が出土し、とくに基壇最下部付近で、近代の半銭玉が出土している。出土した半銭玉の発行年は、錆のため確認できないが、半銭玉自体の発行期間は、明治6年～21年に限定される（2）。また基壇の2段目・3段目から1円玉・5円玉・10円玉等の現行銭も出土している。これらの銭貨が出土したことから、勝利墓は少なくとも明治6年以降、あるいは昭和期においても基壇の改修等が行われた可能性がある。

ちなみに、基壇内からは他の遺物に混じって径約3.0～4.0cmの玉石が若干数出土した。この玉石は、墓地のいずれかの場所に敷かれていたものが、散乱した後、基壇を築いた際に混入したものと考えられる。つまり、基壇内部の土は、墓地内の土を集めて充填したものと推定される。

トレンチ調査の概要

SX9001の正面（勝利墓の西側）には、他の墓が営まれていない空間があり、この空間が当初からあったものか、あるいは墓石が散逸もしくは撤去されただけで、元々は墓が営まれていたのか等について不明な点があった。そこで、旧地形の復元も兼ね、調査区の北部から東部に7箇所のトレンチを設定して調査を行った。

これら各トレンチの調査成果を総括すると、調査区の北部から東部において、1層から4層の土層が確認された。1層は、調査区の東部から北東部で確認でき、石垣に伴う裏込めや造成盛土である。2層も同様に石垣築造に伴う造成盛土であるが、石垣築造前に堆積した土も含まれている。3層は花崗岩風化土、4層は岩盤で、ともに地山である。ちなみに、墓はすべて3層もしくは4層に掘り込まれている。1・2層は石垣の周辺、つまり、調査区の東部一帯に分布し、北から北東に向け傾斜する3層（旧地形面）の縁辺を覆うように堆積している。なお、各トレンチでは、墓およびその他の遺構は確認されず、遺物も出土していない。このことから調査区の東部は、石垣築造以前には北および北東に向かう緩やかな斜面であり、墓は営まれていなかったことが明らかとなった。

なお、史料によると、文化8年（1811）5月中旬、長雨で勝利の廟処が崩落したため、その措置として石垣普請が行われたとされており、廟処の崩落が契機となり石垣が築造されたことがうかがえる。トレンチによる調査結果も、勝利墓は2層（石垣築造に伴う造成盛土）の上に建てられており、史料の内容と矛盾しない。これらのことから、勝利墓が現在の位置に建てられたのは、少なくとも文化8年以降と考えることができよう。また、史料にある廟処が崩落したとの記述は、逆にいうと、文化8年以前にはすでに「廟処」が存在したとも解されるわけで、「廟処」が建っていたとすれば、少なくとも1・2層よりも古い層、すなわち、3層・4層もしくはこれらに堆積した表土上に建っていたことになる。勝利墓の宝篋印塔は、戦国期の特徴を多分に残しており、17世紀代に造られたものと推定されるが、上記のことと考えあわせると、「廟」は石垣築造に伴い移築される以前から、ほぼ同じ場所に存在していた可能性は否定できない。

SX9149について

調査区の中央部北寄り、ST9102とST9103の西側に位置している。検出時には、盛土や石塔等の外表施設は確認できなかった。遺構は、楕円形の土壌に、皿で蓋をした甕が埋められており、甕の内部からは炭と巻物8本が炭化した状態で出土した。これらの状況からSX9149は経塚である可能性が高いと考えられる。外容器の甕と皿の製作年代は17世紀後半であり、宗源院墓地で本格的に造墓が開始される時期、もしくは、初期に営まれた墓と同時期に埋納されたと推定される。つまり、墓地に墓を営む前に、当地を聖地化したとも考えられる。

また、外容器（甕・皿）の製作年代が17世紀後半ということと、4代夫妻の墓に隣接して営まれていることを考慮すれば、墓地に墓が営まれ始めた後のある時期に、4代夫妻の追善供養を行う目的で埋納されたと考えられよう。さらに、この経塚が4代利尚本人（1603～1670）によって営まれたと考えるならば、利尚本人の生前供養や後生善処、または先に亡くなった妻の供養を意図して営まれたものである可能性もあろう。

その他

宗源院墓地は、4代利尚夫妻の墓（ST9102・ST9103）の造営によって始まる。墓碑銘によれば、利尚の妻は承応3年（1654）に没しており、没年が確認できるものとしては最も古い墓である。また、ほぼ同時期に、夫妻の墓に隣接した場所に経塚が営まれたと考えられるが、前述したとおり、墓地の聖地化のためのものなのか、夫妻の供養を意図したものなのかは定かでない。

また、この墓地では4代夫妻の墓の造営に際し、山腹が切り開かれ平坦面が造成されたと考えられるが、その後の一族墓が営まれる墓地南西部まで一度に開削されたのか、段階的に開削されたのかは不明である。

ちなみに、4代夫妻およびほぼ同時期の墓である妻の実母（ST9101）・関係不明の子供（ST9119）、つまり宗源院墓地における最初期の墓はすべて火葬で、その後の一族はすべて土葬である。4代利尚の妻は、宗源院の開基とされる人物で、宗源院にとっては重要な人物であり、葬法の違いは、単に時期的あるいは地域的な慣行を表しているのではなく、4代夫妻の立場の特殊性によるものかもしれない。

なお、前述したように、勝利墓は宝篋印塔の特徴から17世紀代に造られたものと推定されることや、同じく前述したように、江戸後期の石垣築造以前から勝利の「廟」があったらしいことから、4代夫妻の造墓以前に、この地に存在していた可能性は否定できない。この場合の「この地」とは、無論、石垣築造前の旧地形上の一角を指す。

墓地を概観すると、おおよそ中央部から南西部にかけては外表施設が伴う神代家一族墓が分布し、南東部には外表施設が伴わない墓が群をなす。これら南東部の墓の上には基壇が設けられ歴代住職の外表施設が並べられている。基壇は、南東部に営まれていた歴代住職墓の外表施設を、後世まとめたものとするのが自然であろう。

註

- 1) 神代家一族に関しては『神代家物部姓系譜』『宗源院過去帳』『宗源院文書』の史料がある。さらに、これらを総括したものとして『嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書』があり参考とした。宗源院墓地に葬られている神代家一族については、神代勝利を祖とし、鍋島氏に仕え、小城支藩創設の際、佐賀本藩から移籍した一族である。神代家は、移籍組を指す「八十三士」に名を連ねるとともに、藩の要職を務めたとされる（岩松1974・宮島2004）。なお、神代家一族の墓は、今回調査を実施した宗源院墓地だけではなく、小城市小城町畑田に所在する鸛山真照寺にも営まれていることがわかっている。
- 2) ただし、半銭玉は明治11年には発行されていない。

参考・引用文献

- 岩松要輔（1974）「近世 1. 小城藩の成立」『小城町史』小城町史編集委員会編
 嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（2000）『嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書』富士町教育委員会
 佐賀県立図書館編（1986）『佐賀県史料集成 古文書編』第27巻 佐賀県立図書館
 全国神代ゆかりの会（1980）「神代家伝記」『神代家とその一族』1号
 富士町史編集委員会（2000）『富士町史』上巻 富士町
 三瀬村誌編集委員会（1977）『三瀬村誌』三瀬村
 宮島敬一編（2004）『小城鍋島文庫にみる小城鍋島藩と島原の乱』佐賀大学文系基礎学研究プロジェクト

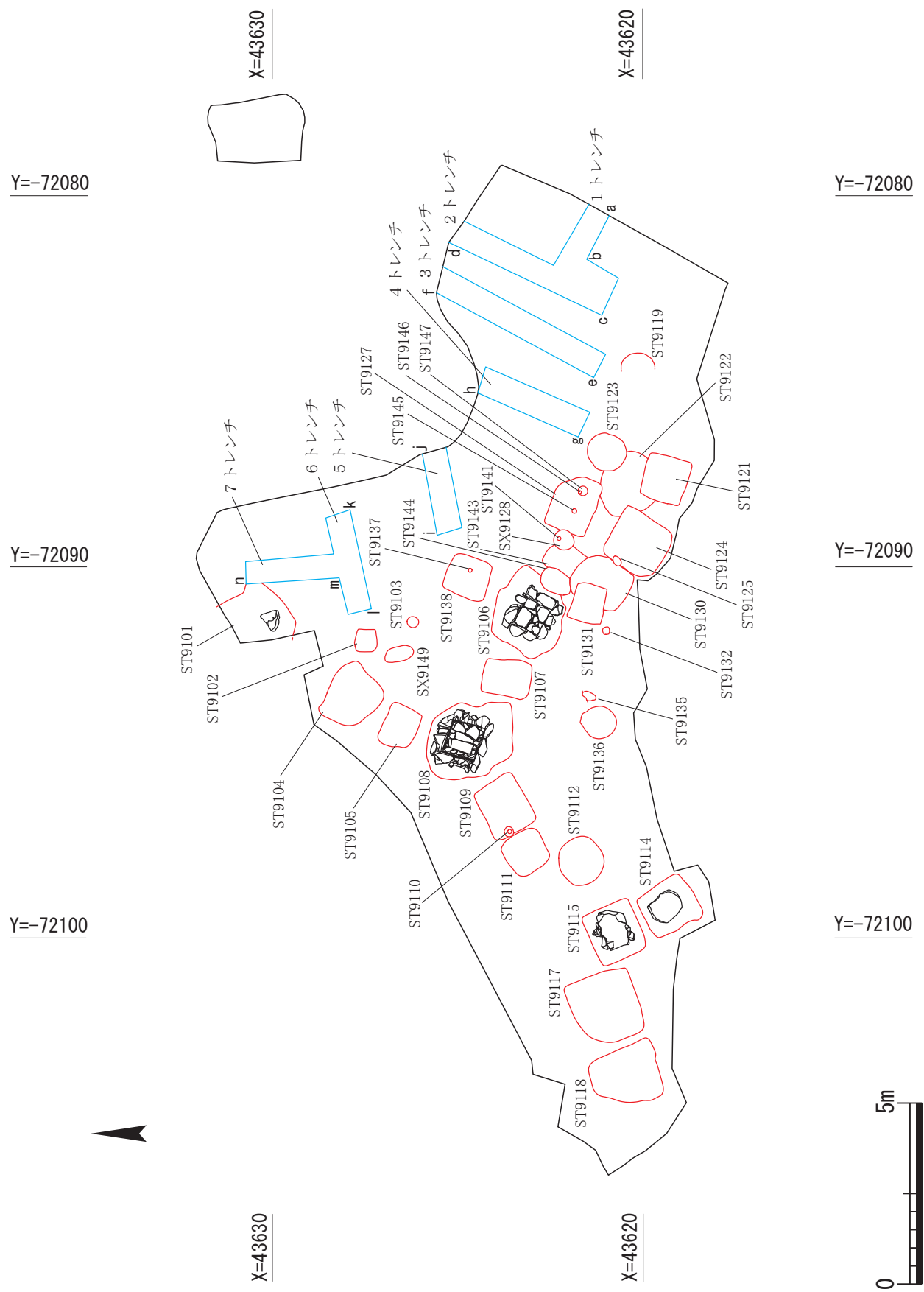


図6-15 下部遺構及びトレンチ配置図 (1/150)

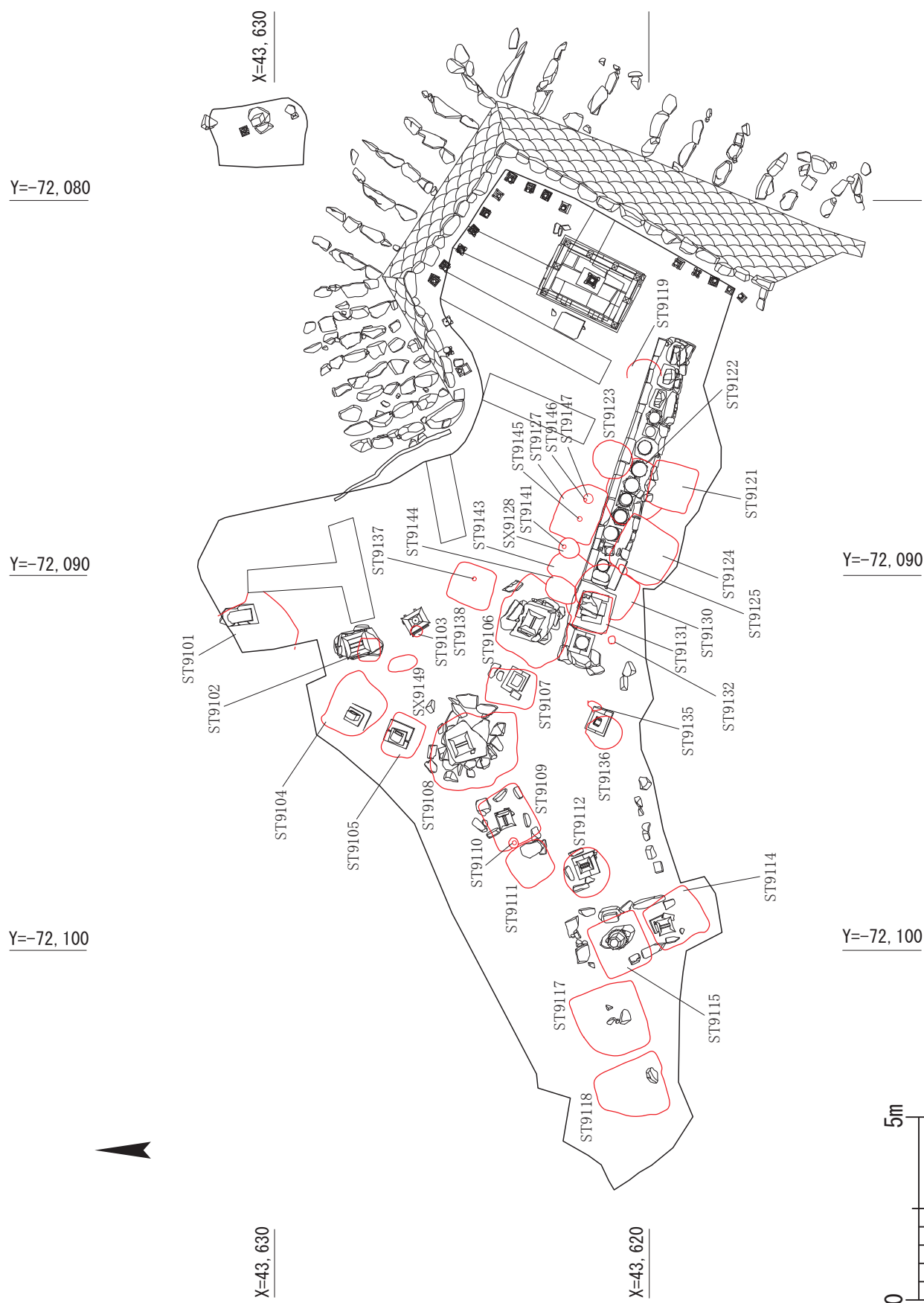
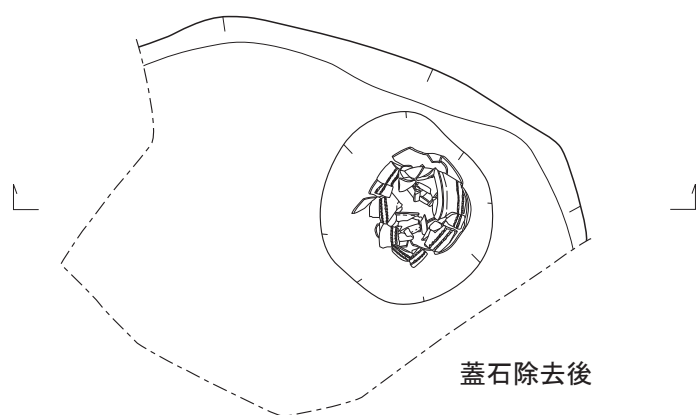
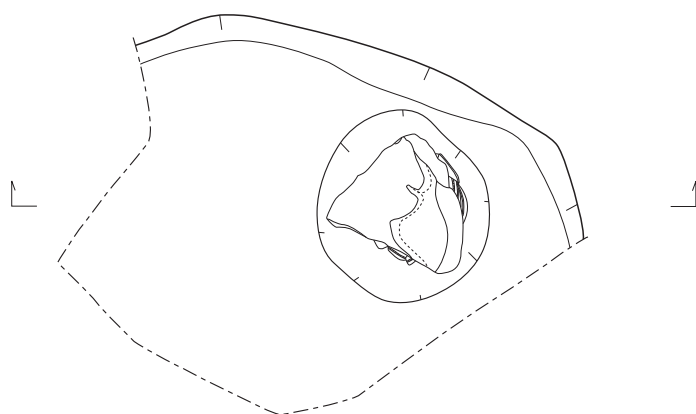
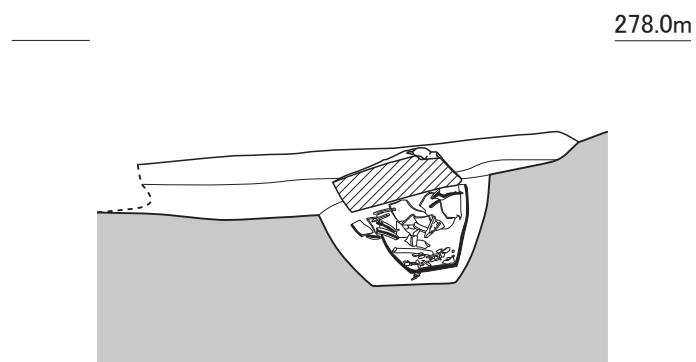


図6-16 外表施設及び下部遺構位置図 (1/150)



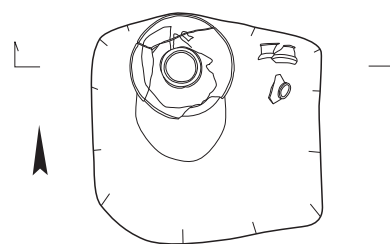
蓋石除去後



銭出土状況(棺外)

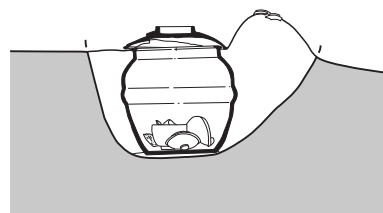


ST9101

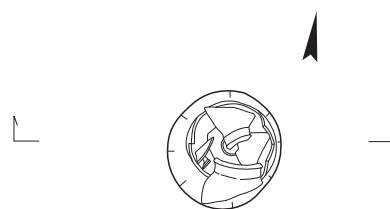


甕の内部

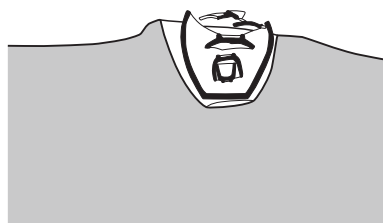
278.0m



ST9102



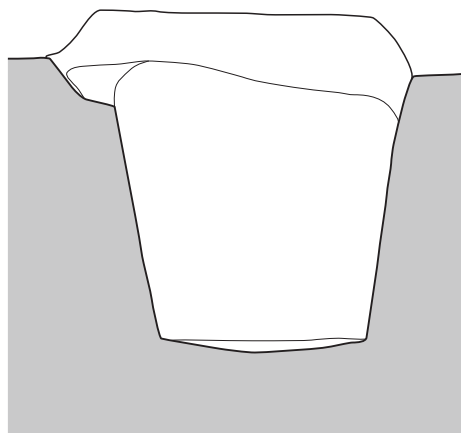
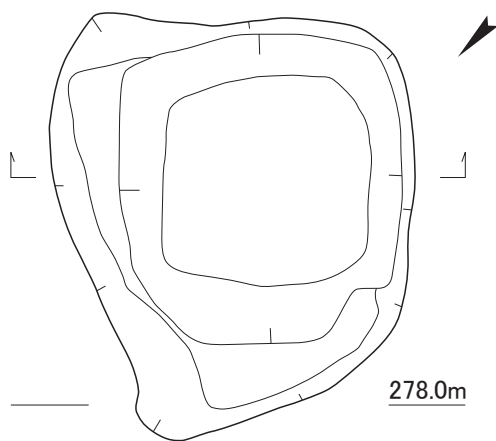
278.0m



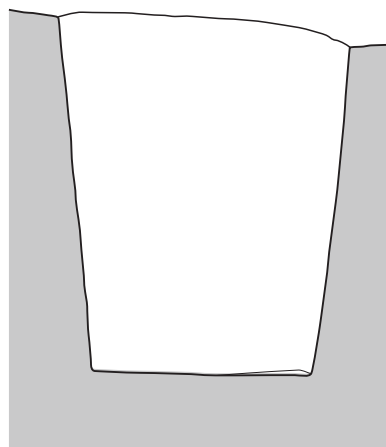
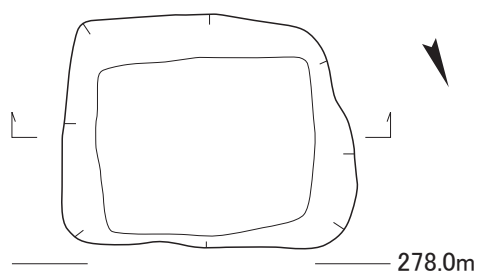
ST9103



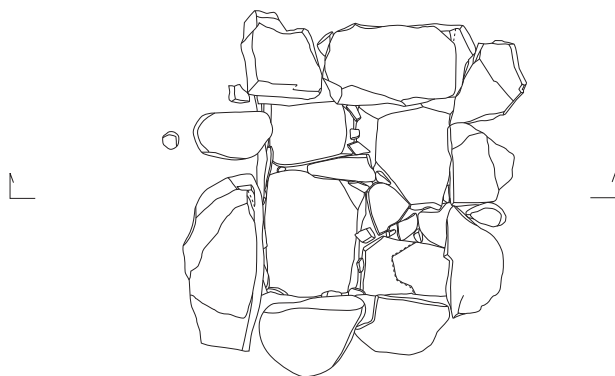
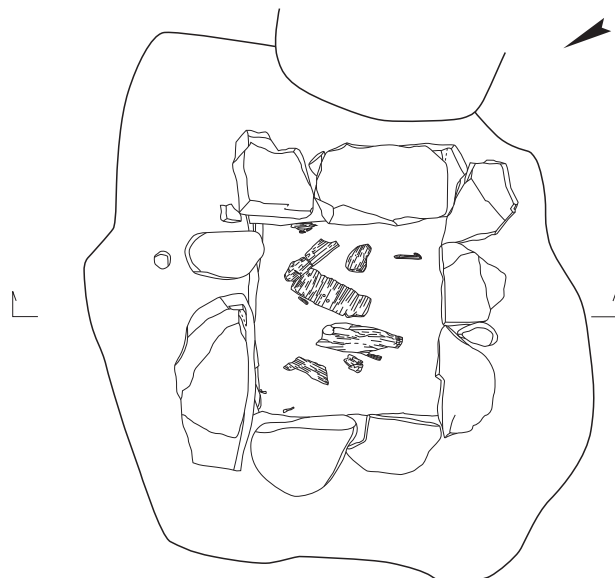
図6-17 下部遺構1 (1/20・1/30)



ST9104



ST9105



ST9106

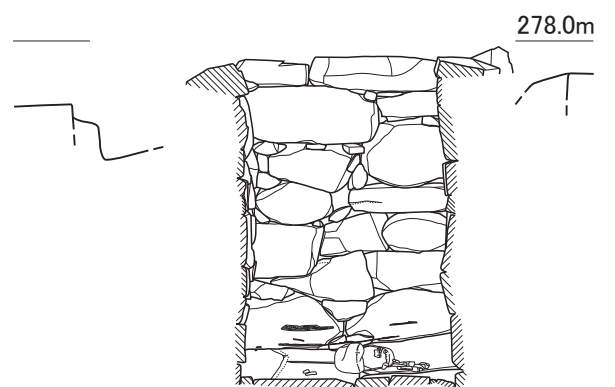


図6-18 下部遺構2 (1/30)

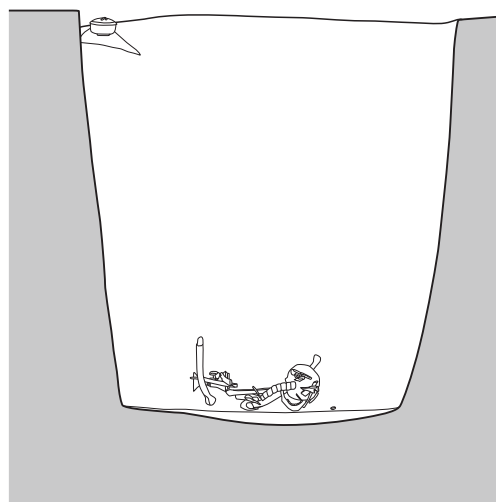
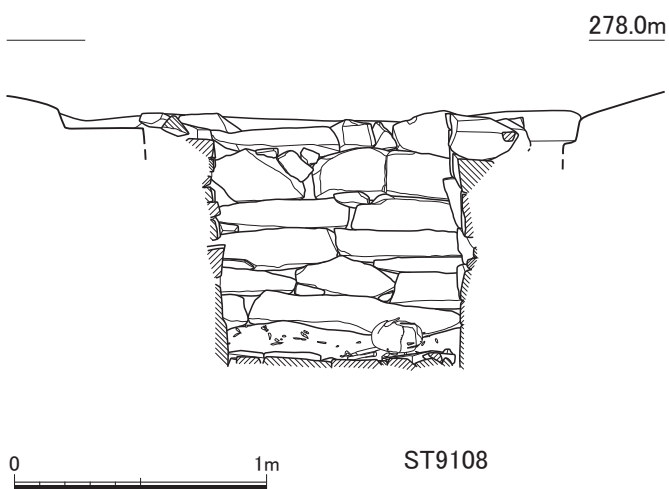
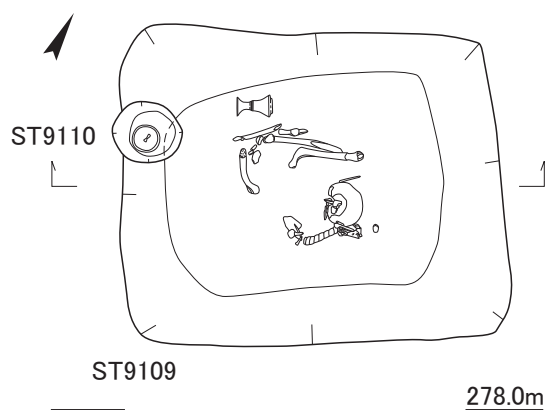
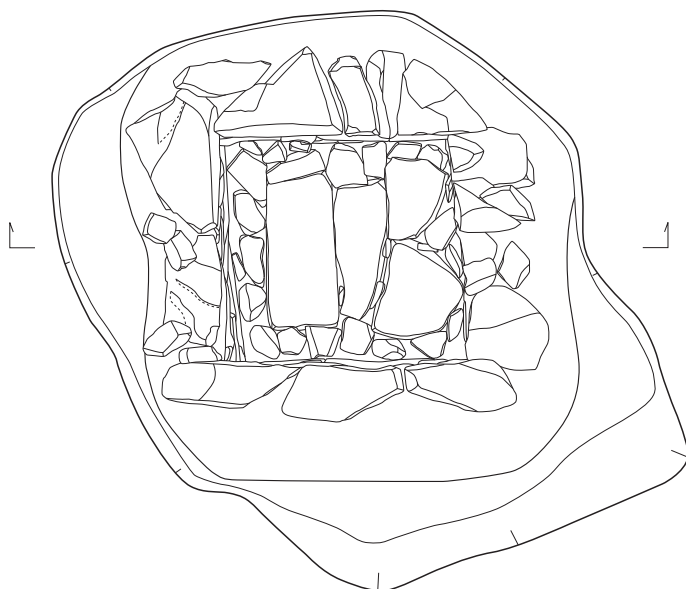
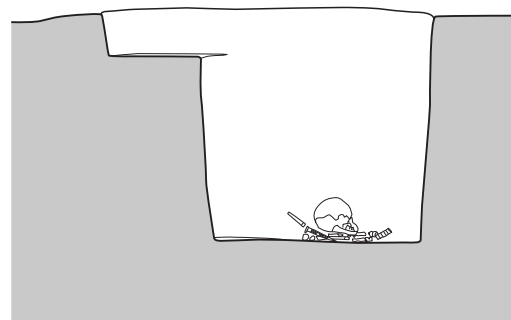
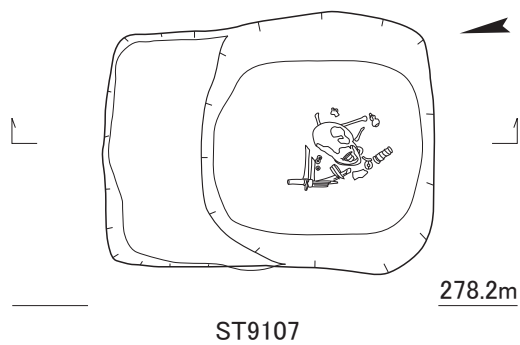
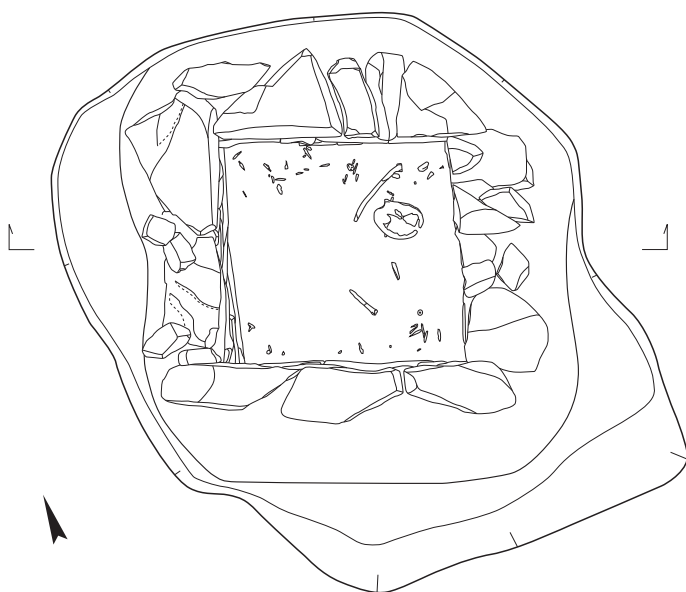
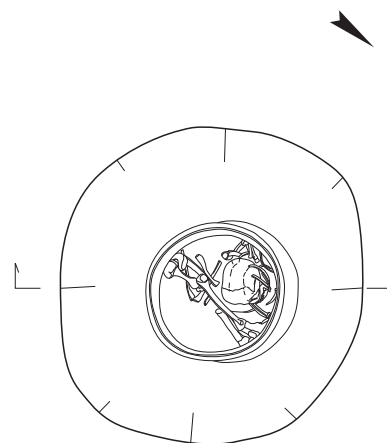
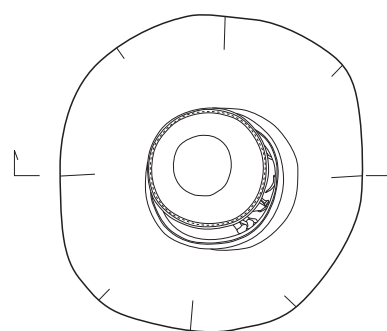
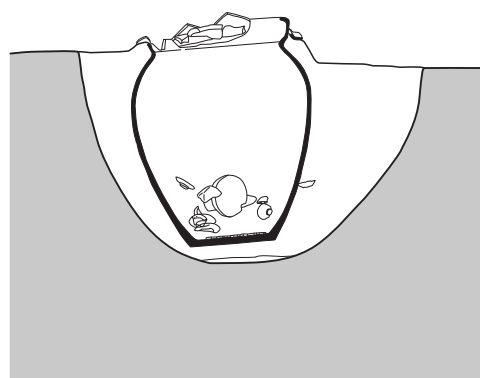
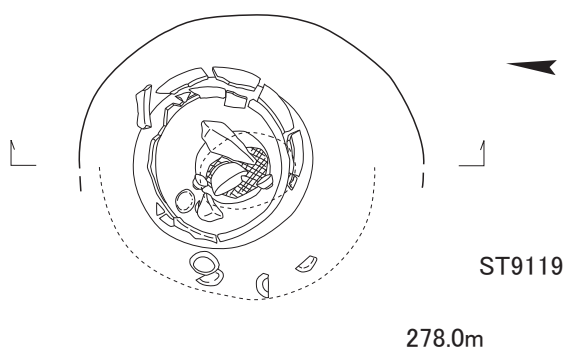


図6-19 下部遺構3 (1/30)



ST9112

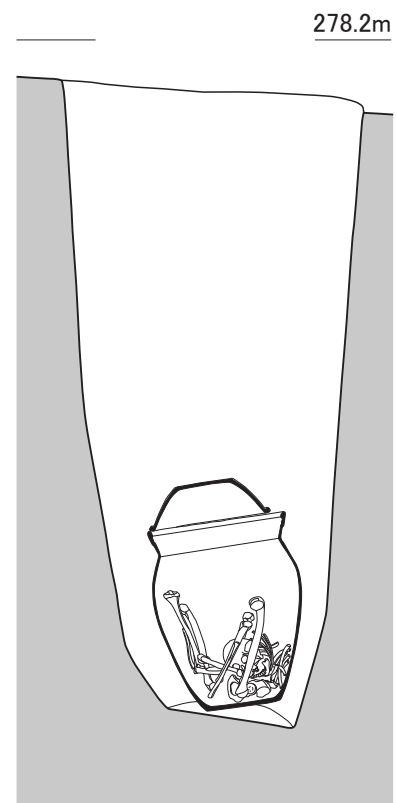
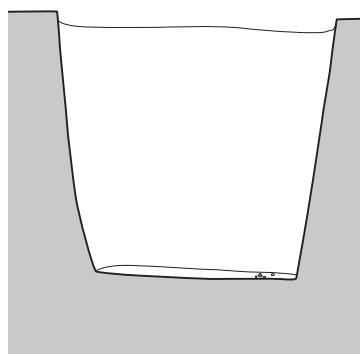
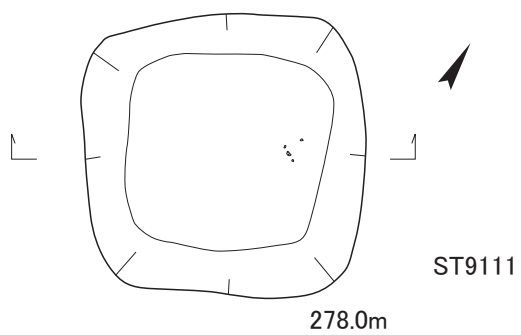
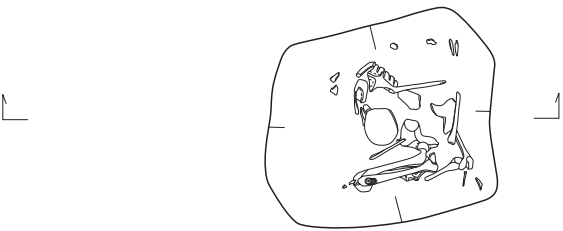
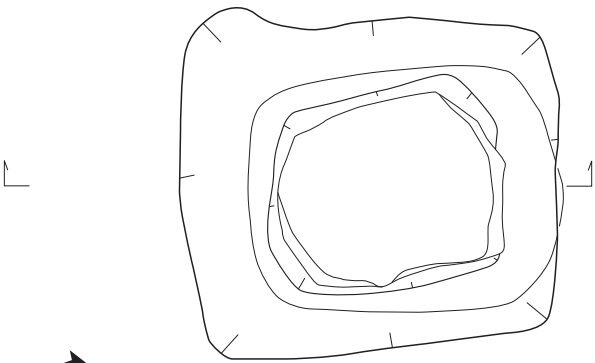
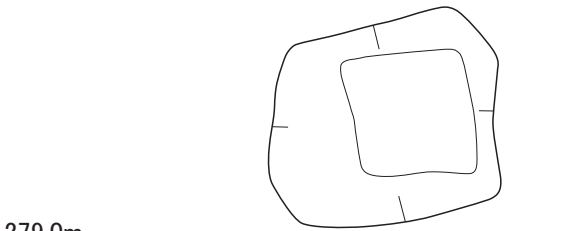


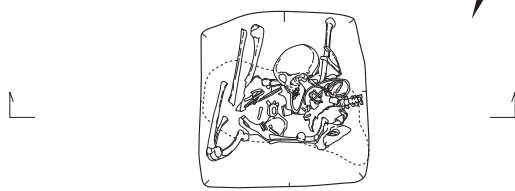
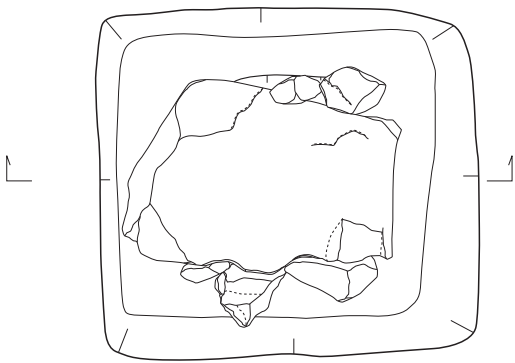
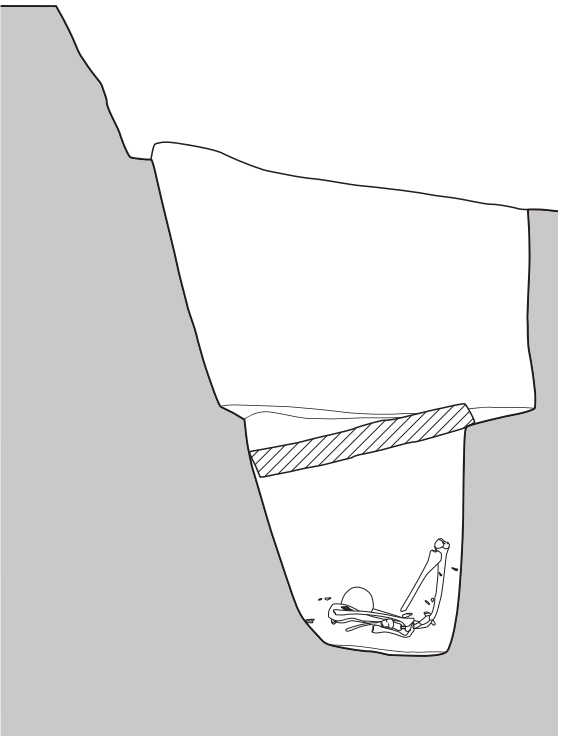
図6-20 下部遺構4 (1/20・1/30)



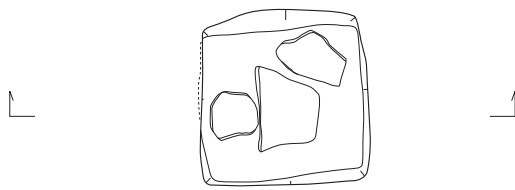
ST9114



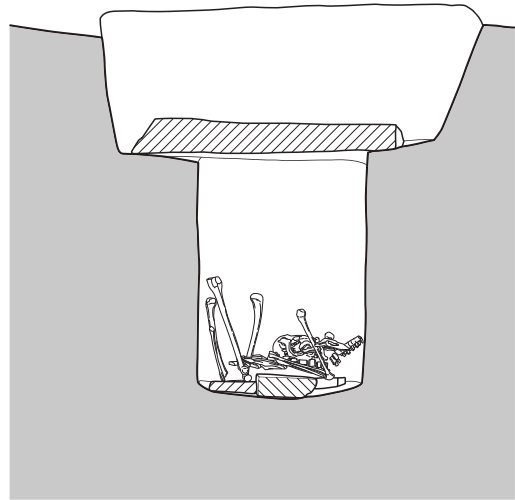
279.0m



ST9115



278.2m



0 1m

図6-21 下部遺構5 (1/30)

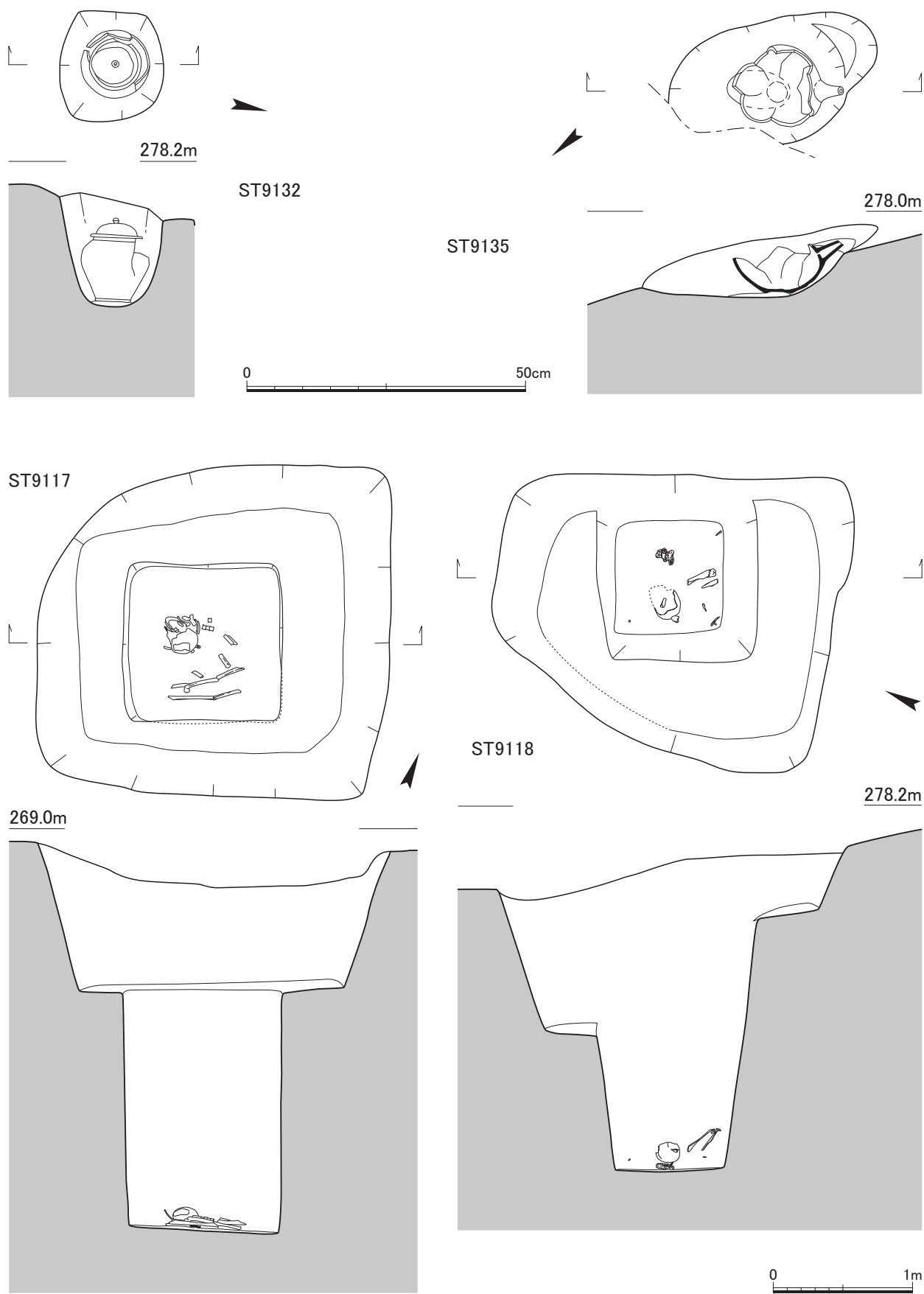


图6-22 下部遺構6 (1/10・1/30)

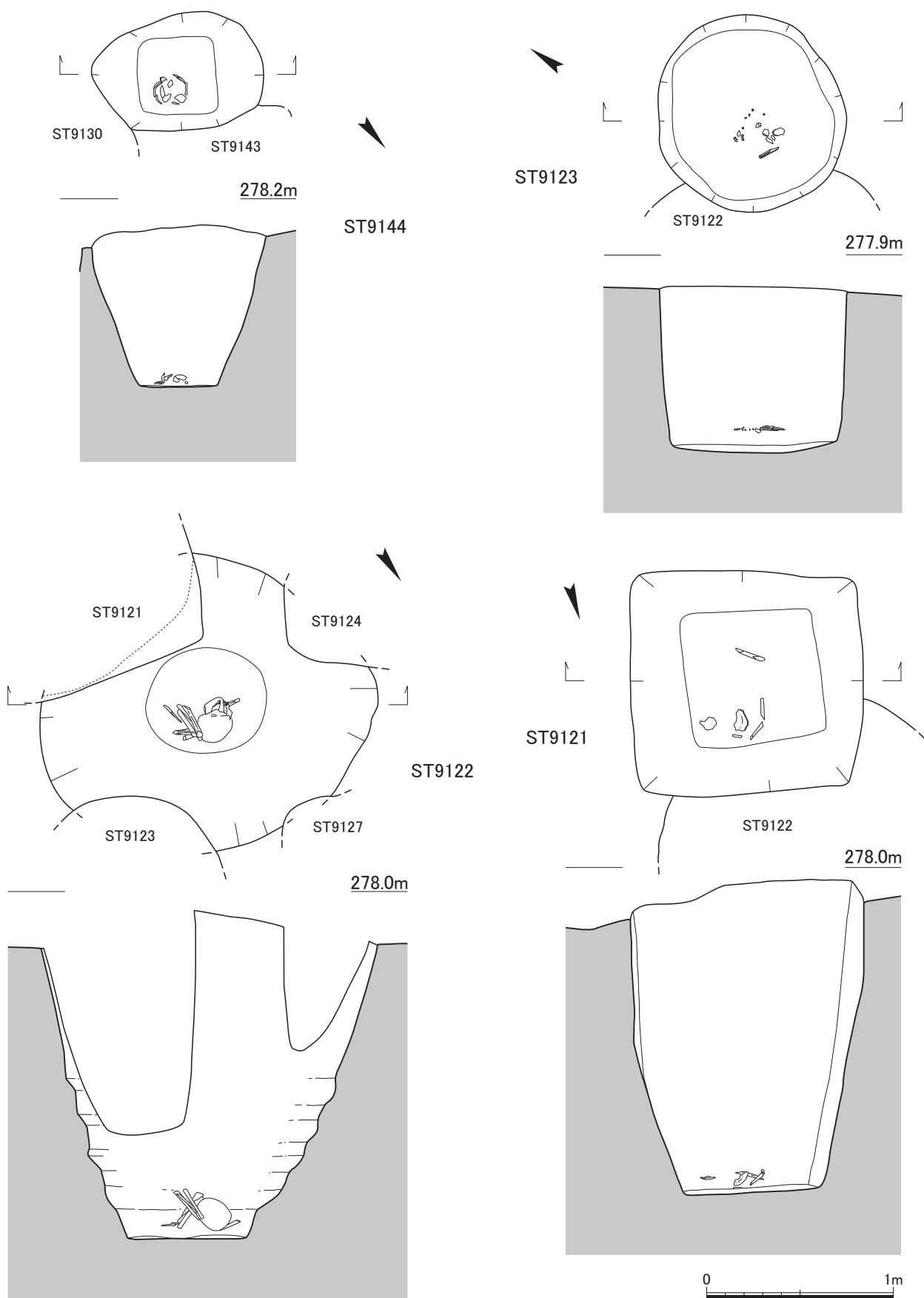


図 6-23 下部遺構 7 (1/30)

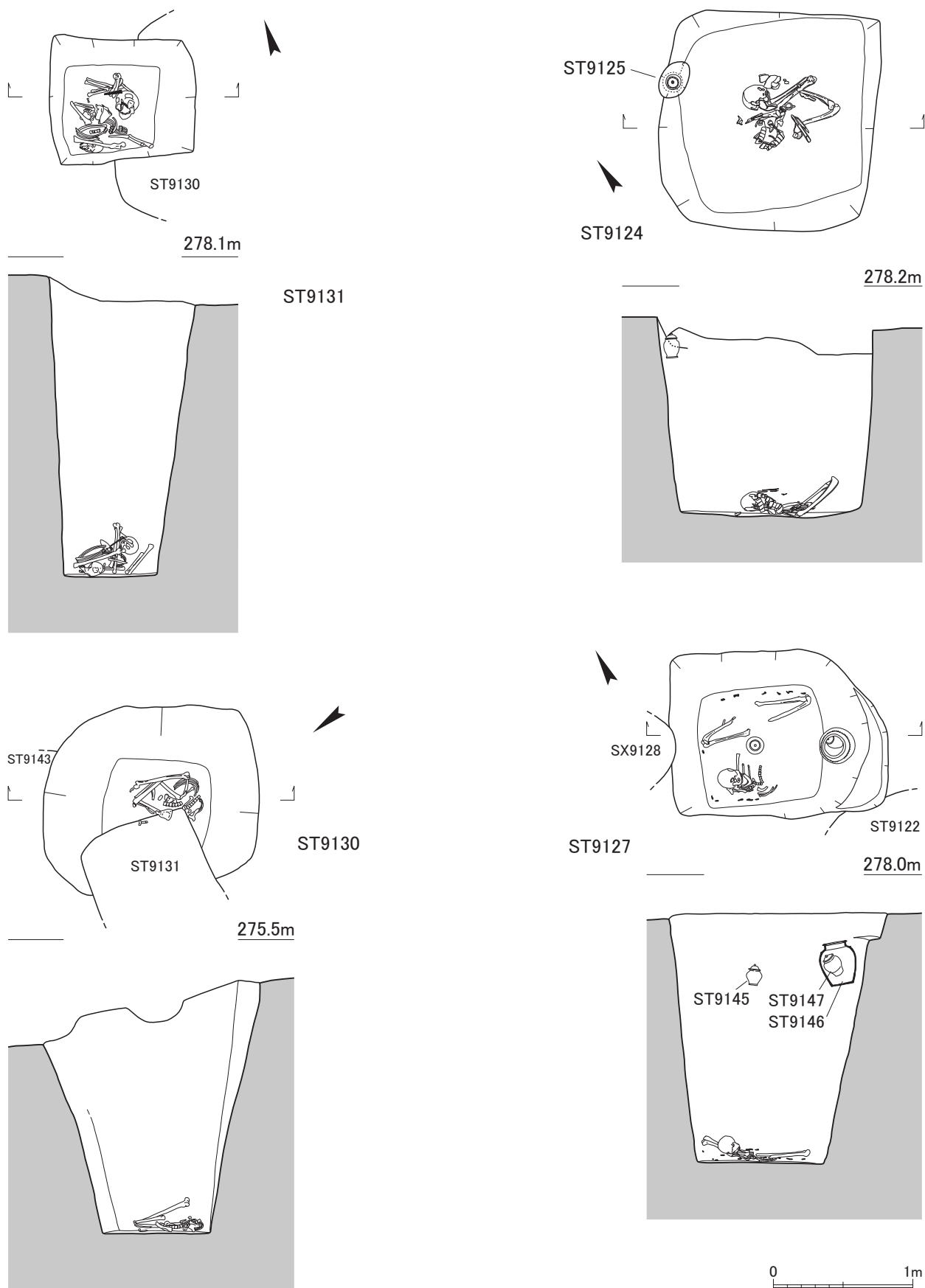


图6-24 下部遺構8 (1/40)

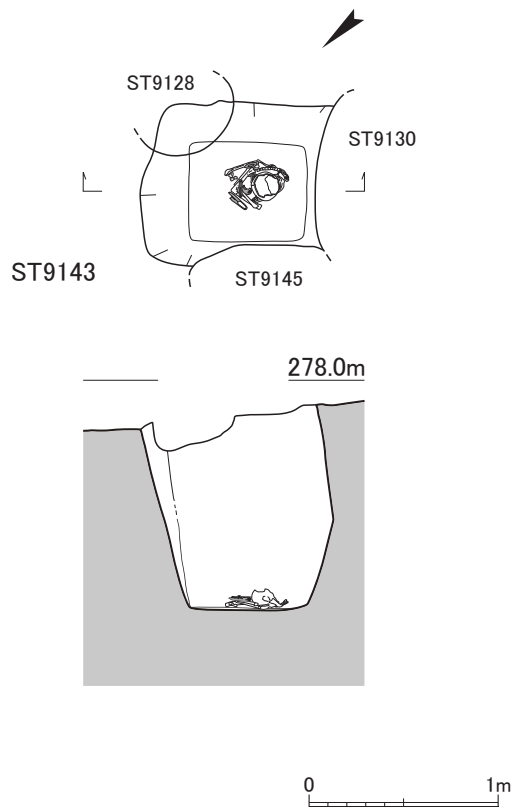
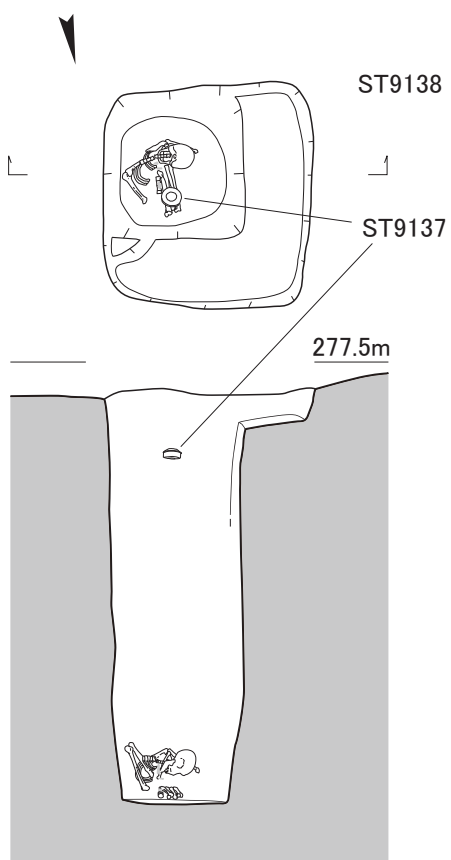
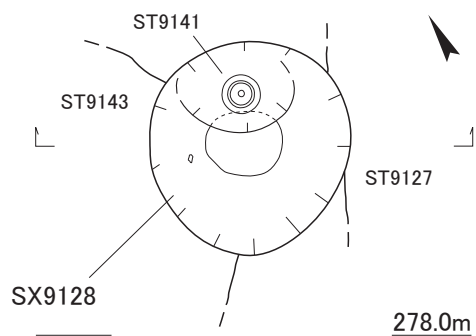
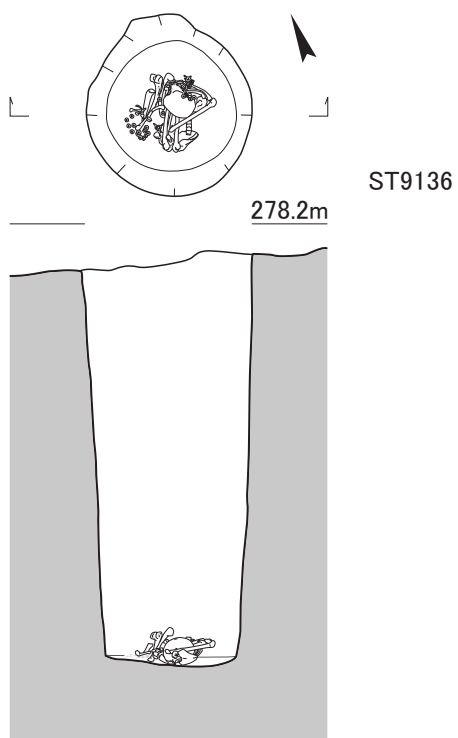


図6-25 下部遺構9 (1/20・1/40)

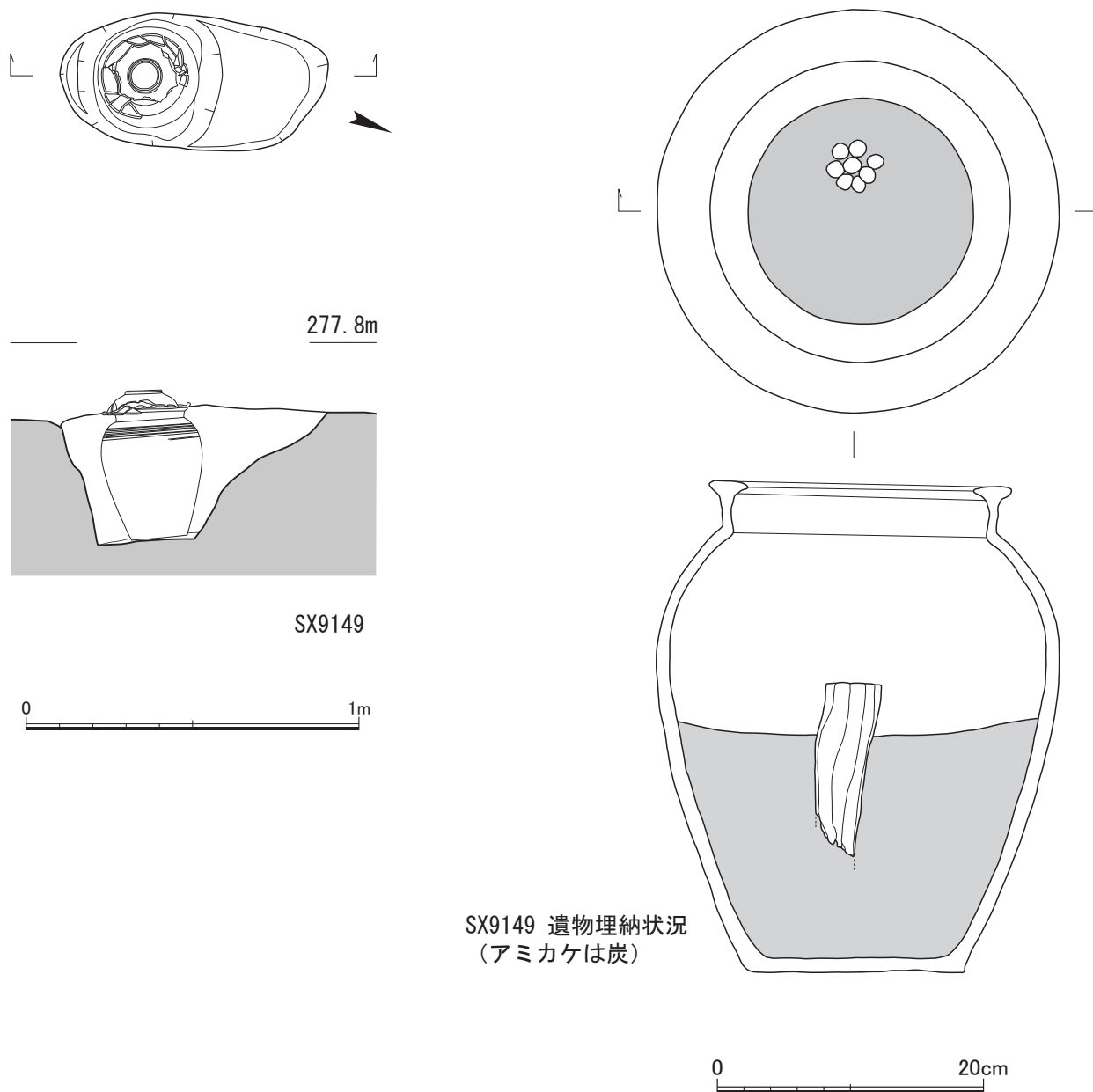


図6-26 下部遺構 10・SX9149 遺物埋納状況 (1/5・1/20)

表6-2 9区下部遺構一覧

図版番号	遺構番号	墓壇等			葬法	棺(容器)	その他	出土遺物	人骨の所見 (性別・年齢)	直上の 外表施設	写真図版 番号
		平面形	(上面) (底面) 単位 (m) (深さ)	その他の 特徴							
-	SX9001	-	-	-	-	-	-	土師器小皿・土師器鍋、 銭(寛永通宝・半銭・ 1銭・1円・5円・10円)	-	-	写真図版 6-13・14
図6-17	ST9101	円形	(上面) 径0.7 (深さ) 0.41	石蓋	火葬	甕	-	銭(寛永通宝)	女性の可能性・?	SX9022	写真図版 6-14
図6-17	ST9102	方形	(上面) 0.62 × 0.61 (深さ) 0.29	-	火葬	甕、皿、碗、 蓋付曲物	-	-	?・熟年以上	SX9021	写真図版 6-14
図6-17	ST9103	円形	(上面) 径0.3 (深さ) 0.22	-	火葬	甕、皿、碗、 小鉢	-	-	?・壮年以降だが 老年には達してい ない	SX9020	写真図版 6-14
図6-18	ST9104	方形	(上面) 1.2 × 1.1 (底面) 0.84 × 0.82 (深さ) 1.35	-	土葬	箱形棺	-	鉄釘	?・2～3歳	SX9023	写真図版 6-15
図6-18	ST9105	方形	(上面) 1.16 × 0.94 (底面) 0.87 × 0.72 (深さ) 1.43	-	土葬	箱形棺	-	鉄釘	?・10代後半	SX9024	写真図版 6-15
図6-18	ST9106	方形	(上面) 辺2.0 (深さ) 1.25	石室	土葬	箱形棺	-	鉄釘、木片	女性・高齢	SX9019	写真図版 6-15
図6-19	ST9107	方形	(上面) 1.32 × 1.02 (底面) 0.83 × 0.69 (深さ) 0.93	片側 二段堀り	土葬	箱形棺	-	緒締めか根付、小徳利、 刀、銭(寛永通宝)、 鉄釘	?・3～4歳	SX9026	写真図版 6-15
図6-19	ST9108	方形	(上面) 辺2.0 (深さ) 0.95	石室	土葬	箱形棺	-	銭(寛永通宝)、鉄釘	男性的・高齢	SX9025	写真図版 6-15
図6-19	ST9109	方形	(上面) 1.52 × 1.27 (底面) 1.10 × 0.84 (深さ) 1.61	-	土葬	箱形棺	ST9110が 埋土中より出土	華瓶、鉄釘	女性・壮年	SX9027	写真図版 6-16
図6-19	ST9110	円形?	(上面) 径0.2～0.3	-	髪 埋納	蓋付碗	ST9109の 埋土中から出土	-	-	-	写真図版 6-16
図6-20	ST9111	方形	(上面) 1.12 × 1.11 (底面) 辺0.81～0.79 (深さ) 1.06	-	土葬	箱形棺	-	鉄釘	-	-	写真図版 6-16
図6-20	ST9112	円形	(上面) 径1.2 (底面) 径0.4～0.5 (深さ) 2.57	-	土葬	甕、鉢	-	煙管、煙管入れ(布袋)、 毛抜き、銭(寛永通宝・ 鉄銭)	男性・壮年後半～ 熟年前半	SX9028	写真図版 6-16・17
図6-21	ST9114	方形	(上面) 1.49 × 1.30 (深さ) 1.98	二段堀り 石蓋	土葬	箱形棺	-	銭(寛永通宝)、鉄釘	女性・熟年後半～ 老年	SX9029	写真図版 6-17
図6-21	ST9115	方形	(上面) 1.50 × 1.39 (深さ) 1.55	二段堀り 石蓋	土葬	箱形棺	-	扇子、鉄釘、布片、 木片	男性・老年	SX9030	写真図版 6-17・18
図6-22	ST9117	方形	(上面) 1.90 × 1.79 (深さ) 2.10	二段堀り	土葬	箱形棺	-	銭(寛永通宝)、鉄釘、 布片	男性的・熟年以降	SX9039	写真図版 6-18
図6-22	ST9118	方形	(上面) 1.85 × 1.58 (深さ) 1.70	二段堀り	土葬	箱形棺	-	銭(寛永通宝)、鉄釘	女性的・熟年以降	SX9031	写真図版 6-18
図6-20	ST9119	円形	(上面) 径0.9 (深さ) 0.64	-	火葬	甕、鉢	-	碗、小杯、小皿、藁?、 小石、土師器小皿(棺外)	?・4～5歳	-	写真図版 6-18・19
図6-23	ST9121	方形	(上面) 1.24 × 1.22 (底面) 0.72 × 0.71 (深さ) 1.70	-	土葬	-	-	-	男性的・高齢	-	写真図版 6-19
図6-23	ST9122	円形	(上面) 径1.5～1.8 (底面) 径0.55～0.65 (深さ) 1.75	-	土葬	丸桶	-	水晶製(数珠玉)・ ガラス製玉	男性・熟年後半か 老年	-	写真図版 6-19
図6-23	ST9123	円形	(上面) 径1.0～1.05 (底面) 0.92～0.84 (深さ) 0.89	-	土葬	箱形棺	-	鉄釘	男性的・高齢の 可能性	-	写真図版 6-19
図6-24	ST9124	方形	(上面) 1.57 × 1.54 (底面) 1.34 × 1.32 (深さ) 1.43	-	土葬	箱形棺	-	絡子環、吊金具、 不明鉄製品、漆塗膜片、 銭(寛永通宝)、鉄釘	男性・熟年後半か 老年	-	写真図版 6-19・20

表6-2 9区下部遺構一覧

図版番号	遺構番号	墓壙等			葬法	棺（容器）	その他	出土遺物	人骨の所見 (性別・年齢)	直上の 外表施設	写真図版 番号
		平面形	(上面) (底面) 単位 (m) (深さ)	その他の 特徴							
図 6-24	ST9125	-	-	-	火葬	蔵骨器	-	-	?・6～7 歳	-	-
図 6-24	ST9127	方形	(上面) 1.55 × 1.22 (底面) 0.90 × 0.84 (深さ) 1.79	-	土葬	箱形棺	埋土中から T9145・9146・ 9147 が出土	水滴、鉄釘	男性・熟年	-	写真図版 6-20
図 6-25	SX9128	円形	(上面) 径 0.53 ～ 0.55 (底面) 径 0.18 ～ 0.2 (深さ) 0.2	-	-	-	埋土中から焼骨 1 片・ST9141 出土	-	-	-	写真図版 6-23
図 6-24	ST9130	方形	(上面) 1.55 × 1.3 (底面) 0.76 × 0.76 (深さ) 1.81	-	土葬	箱形棺	-	雁首銭、鉄銭、鉄釘	男性・熟年	-	写真図版 6-20
図 6-24	ST9131	方形	(上面) 1.05 × 0.91 (底面) 0.69 × 0.64 (深さ) 2.15	-	土葬	箱形棺	-	扇子、ボタン、金糸 (金 モール)、ガラス製玉、 不明金属製品、鉄釘	男性・熟年後半～ 老年前期	SX9015	写真図版 6-20
図 6-22	ST9132	方形	(上面) 0.2 × 0.19 (深さ) 0.2	-	火葬	蔵骨器	-	-	-	-	写真図版 6-20
-	ST9133	-	-	-	-	-	-	-	-	SX9016	-
-	ST9134	-	-	-	火葬	蔵骨器	-	-	?・熟年以降	-	写真図版 6-20
図 6-22	ST9135	楕円形	(上面) 0.38 × 0.21 (深さ) 0.11	-	-	土瓶	胞衣埋納?	-	-	-	写真図版 6-21
図 6-25	ST9136	円形	(上面) 径 0.9 (底面) 径 0.7 (深さ) 2.2	-	土葬	桶棺	-	櫛、銭 (寛永通寶)	女性・壮年前半	SX9018	写真図版 6-21
図 6-25	ST9137	-	-	-	-	蓋付碗	ST9138 に埋納	-	-	-	写真図版 6-21
図 6-25	ST9138	方形	(上面) 1.19 × 1.11 (底面) 0.58 × 0.55 (深さ) 2.20	片側 二段掘り	土葬	箱形棺	埋土中から ST9137 が出土	煙管、煙管筒、数珠玉、 銭 (文久永寶・天保通寶)、 布袋 (巾着)、鉄釘、葉	男性・壮年後半	-	写真図版 6-21
図 6-25	ST9141	楕円形	(上面) 0.3 × 0.2	-	火葬	蓋付小壺	-	-	?・熟年以上か	-	写真図版 6-21
図 6-25	ST9143	方形	(底面) 0.63 × 0.53 (深さ) 1.08	-	土葬	箱形棺	-	小皿、鉄製鉢、巻貝、 二枚貝 (紅入か)、 掛軸の八双・軸棒、 ガラス製玉、鉄釘	?・4 歳程度	-	写真図版 6-22
図 6-23	ST9144	楕円形	(上面) 0.92 × 0.62 (底面) 0.43 × 0.41 (深さ) 0.86	-	土葬	箱形棺	-	鉄釘	?・1 歳半から 2 歳程度	-	写真図版 6-22
図 6-24	ST9145	-	-	-	歯 埋納	蓋付小壺	ST9127 埋土中 に埋納	-	?・熟年以上	-	写真図版 6-22
図 6-24	ST9146	-	(深さ) 0.35	-	火葬	甕、搗鉢	ST9127 埋土中 に埋納	-	男性か・成人	-	写真図版 6-22
図 6-24	ST9147	-	-	-	火葬	蔵骨器	ST9146 の中 に埋納	-	男性か・熟年	-	写真図版 6-22
-	ST9148	-	-	-	火葬	蓋付小壺	-	-	?・胎児 (未熟児) か	-	-
図 6-26	SX9149	楕円形	(上面) 0.8 × 0.4 (底面) 0.3 × 0.35 (深さ) 0.4	-	-	-	埋納遺構 (経塚か)	甕、皿、経典? (巻物 8 本)・炭	-	-	写真図版 6-23

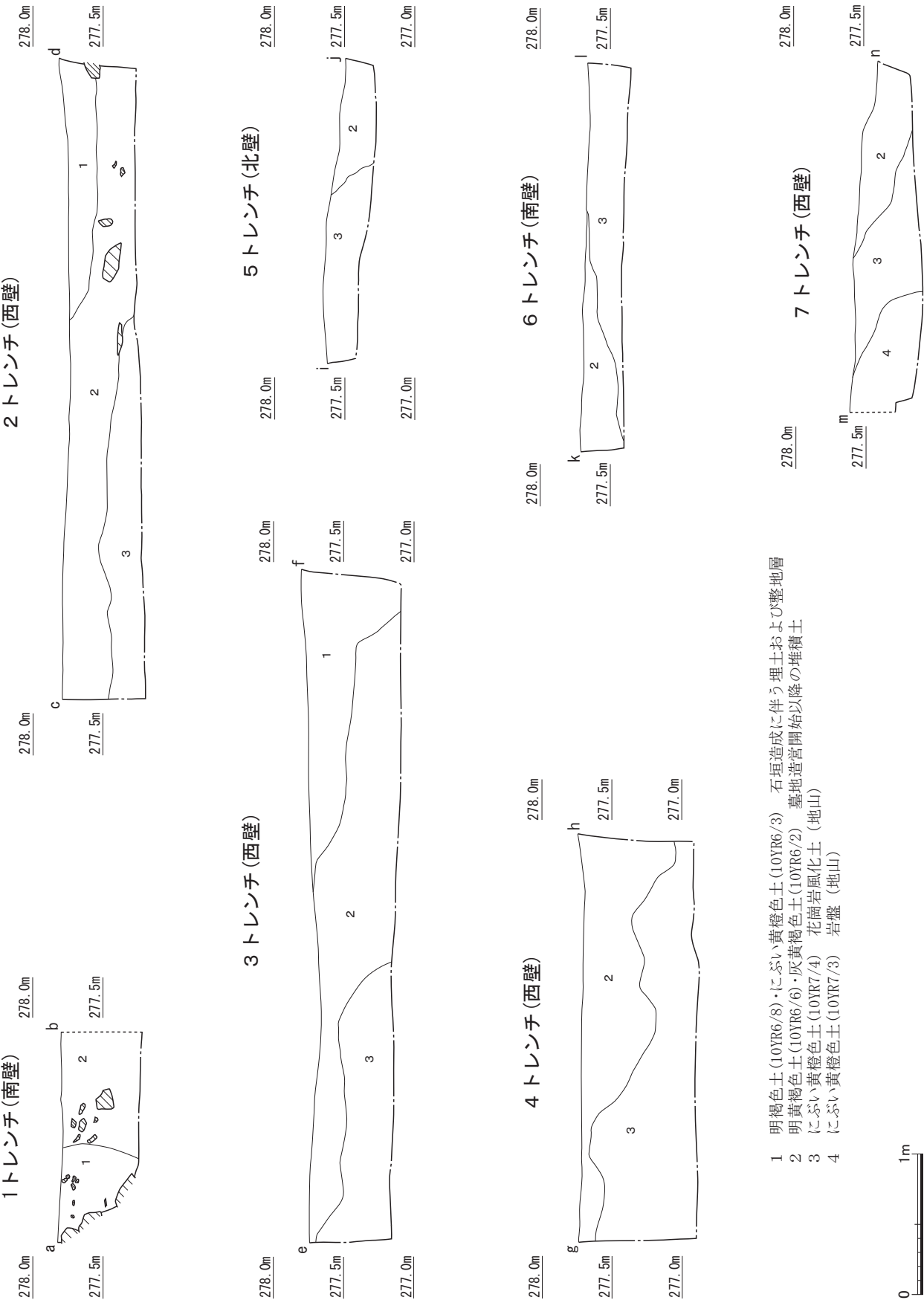


図 6-27 土層断面図 (1/40)

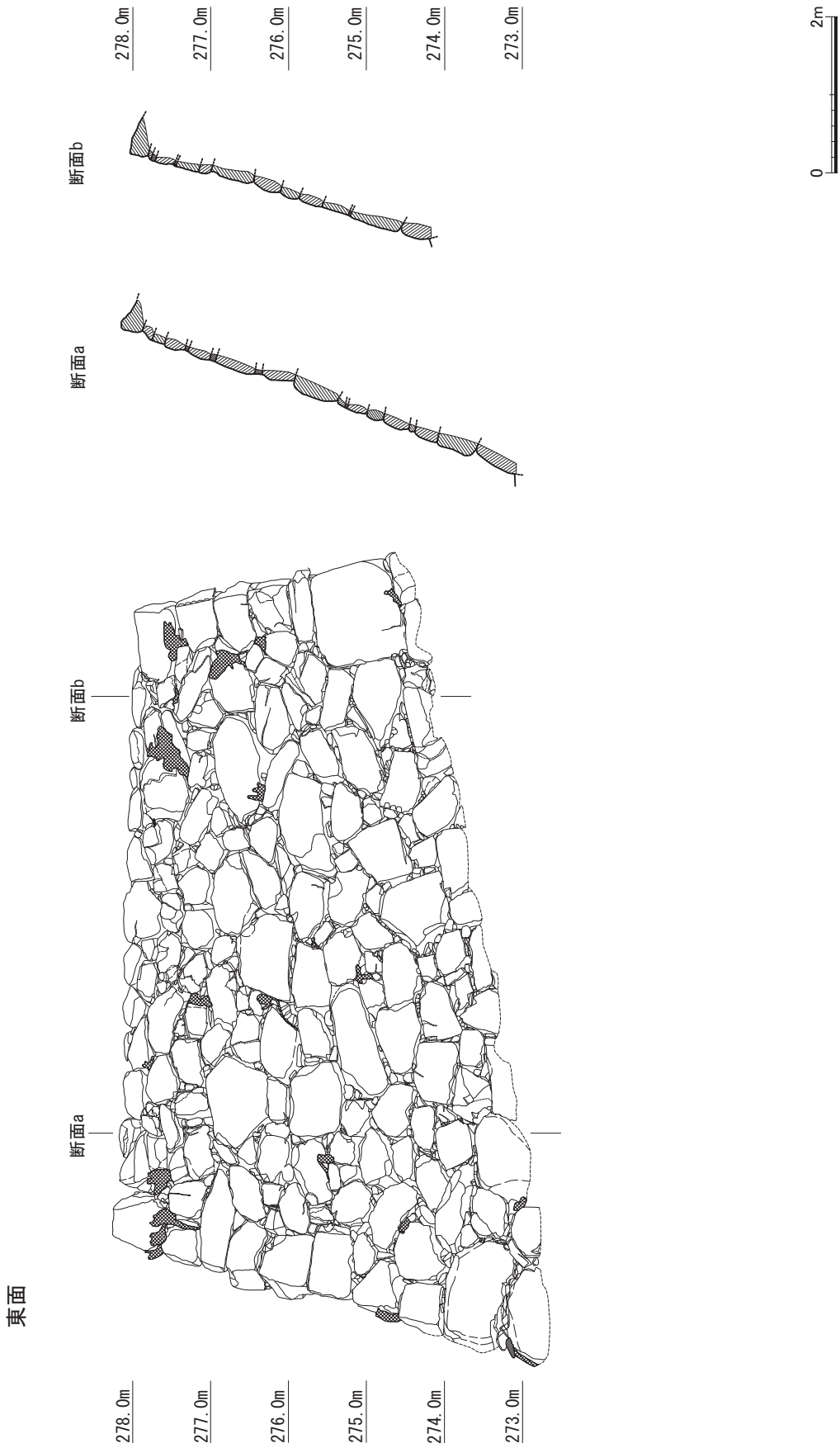


图 6 - 28 石垣東面 立面・断面图 (1 / 80)

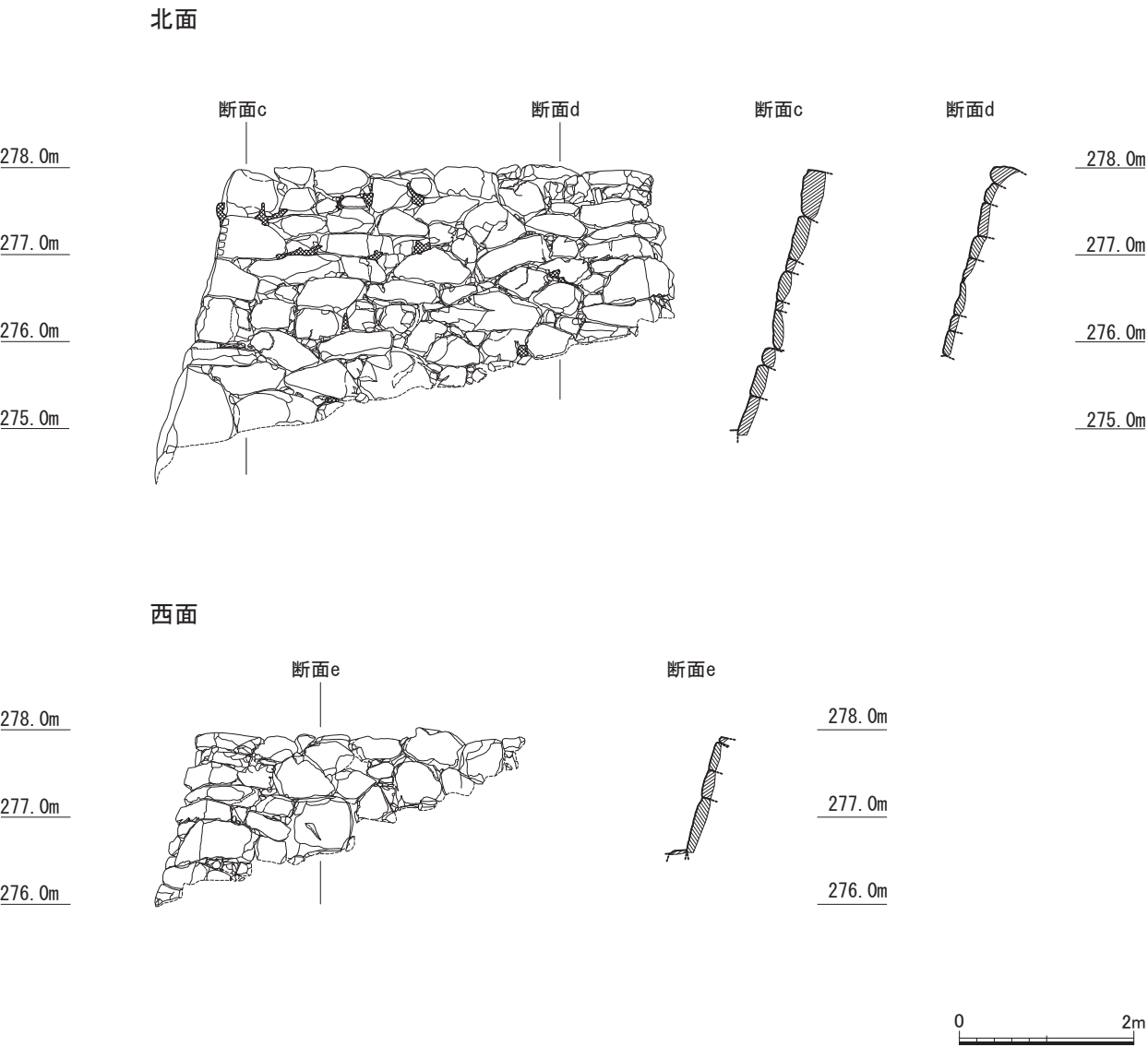


図6-29 石垣北面及び西面 立面・断面図 (1/150)

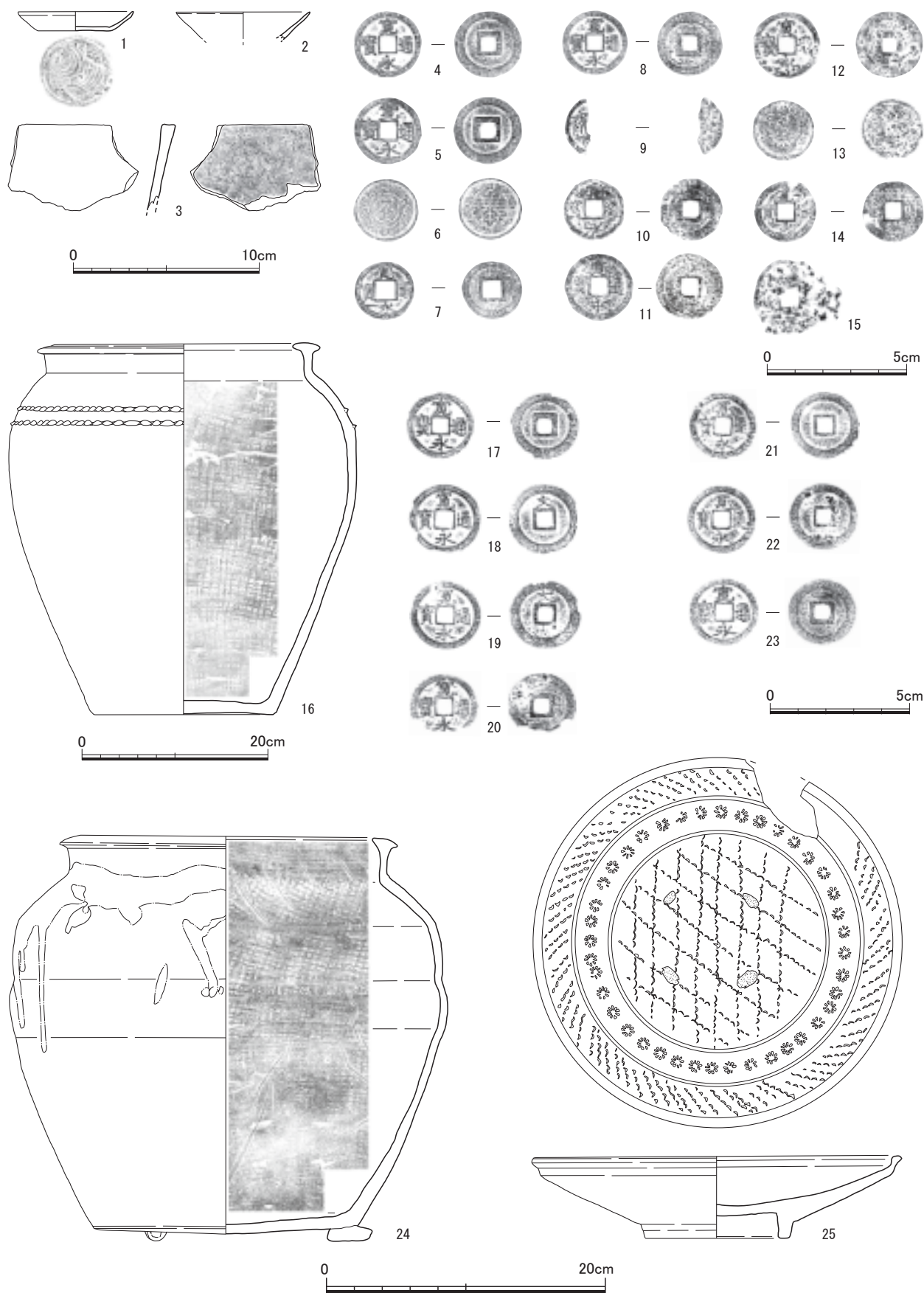


图6-30 9区出土遗物1 (1/2 · 1/3 · 1/4 · 1/6)

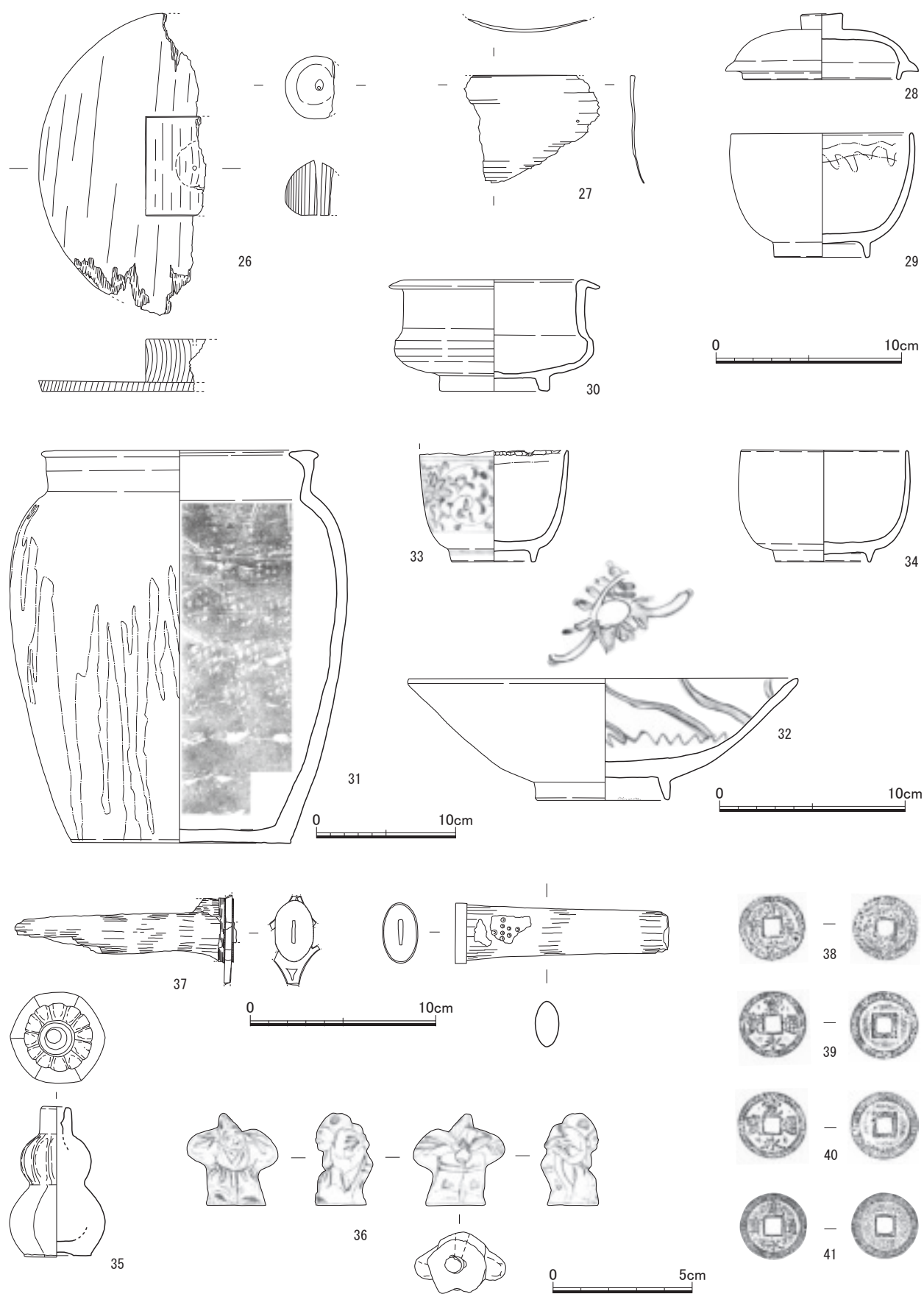


図6-31 9区出土遺物2 (1/2・1/3・1/4)

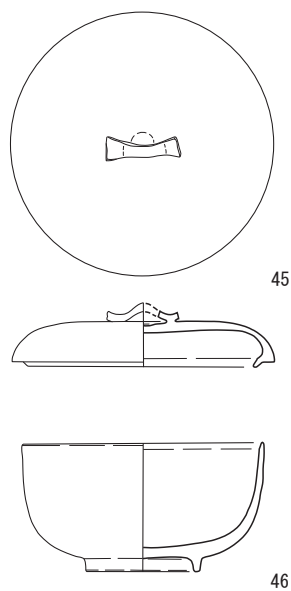
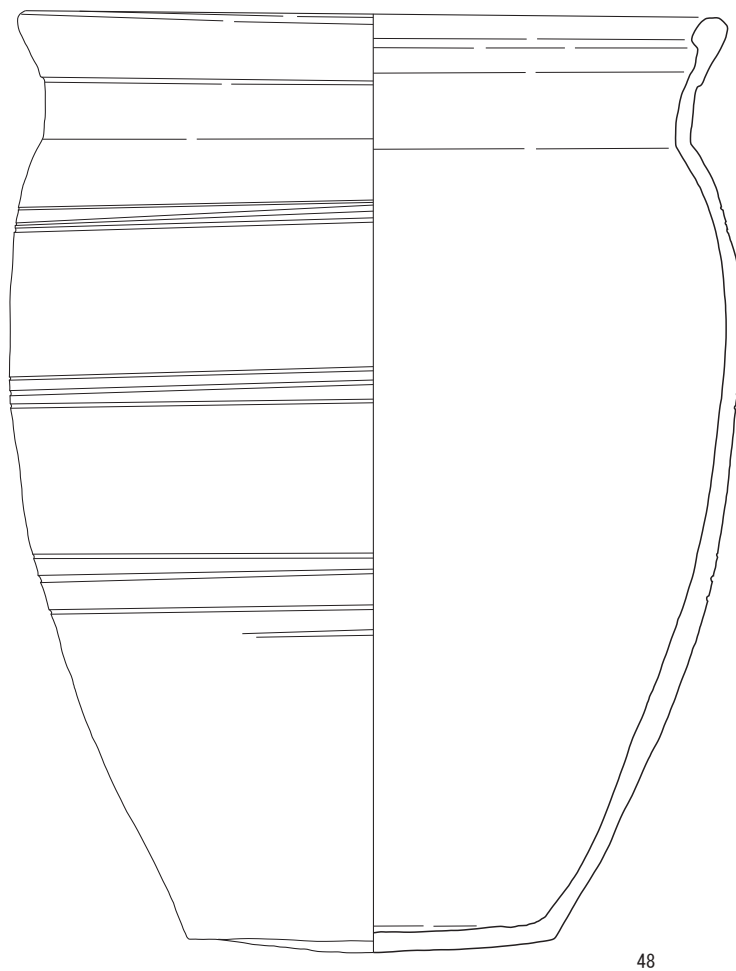
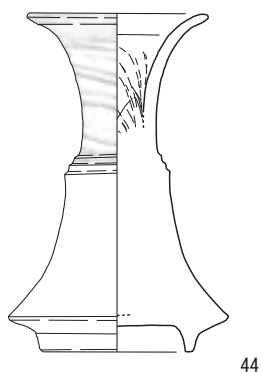
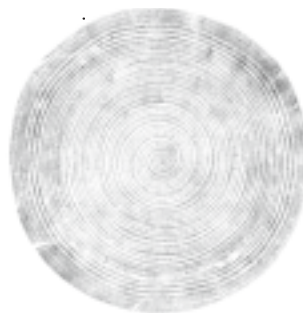
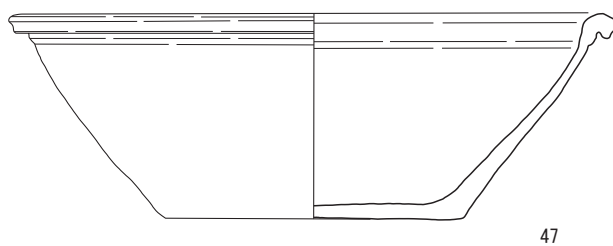
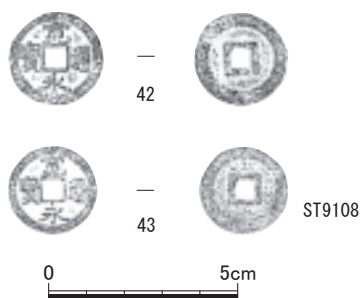


图6-32 9区出土遗物3 (1/2 · 1/6)

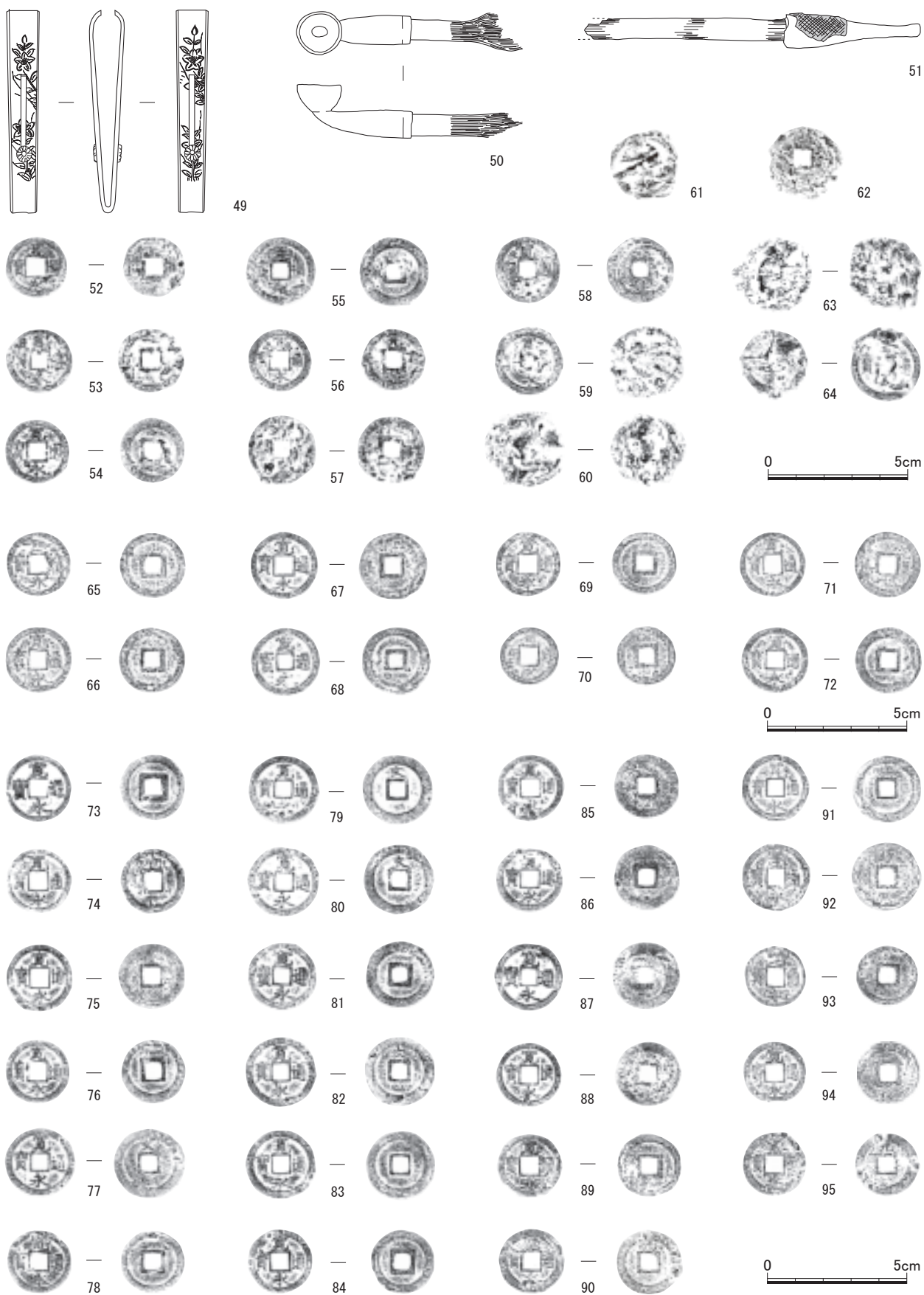


図6-33 9区出土遺物4 (1/2)

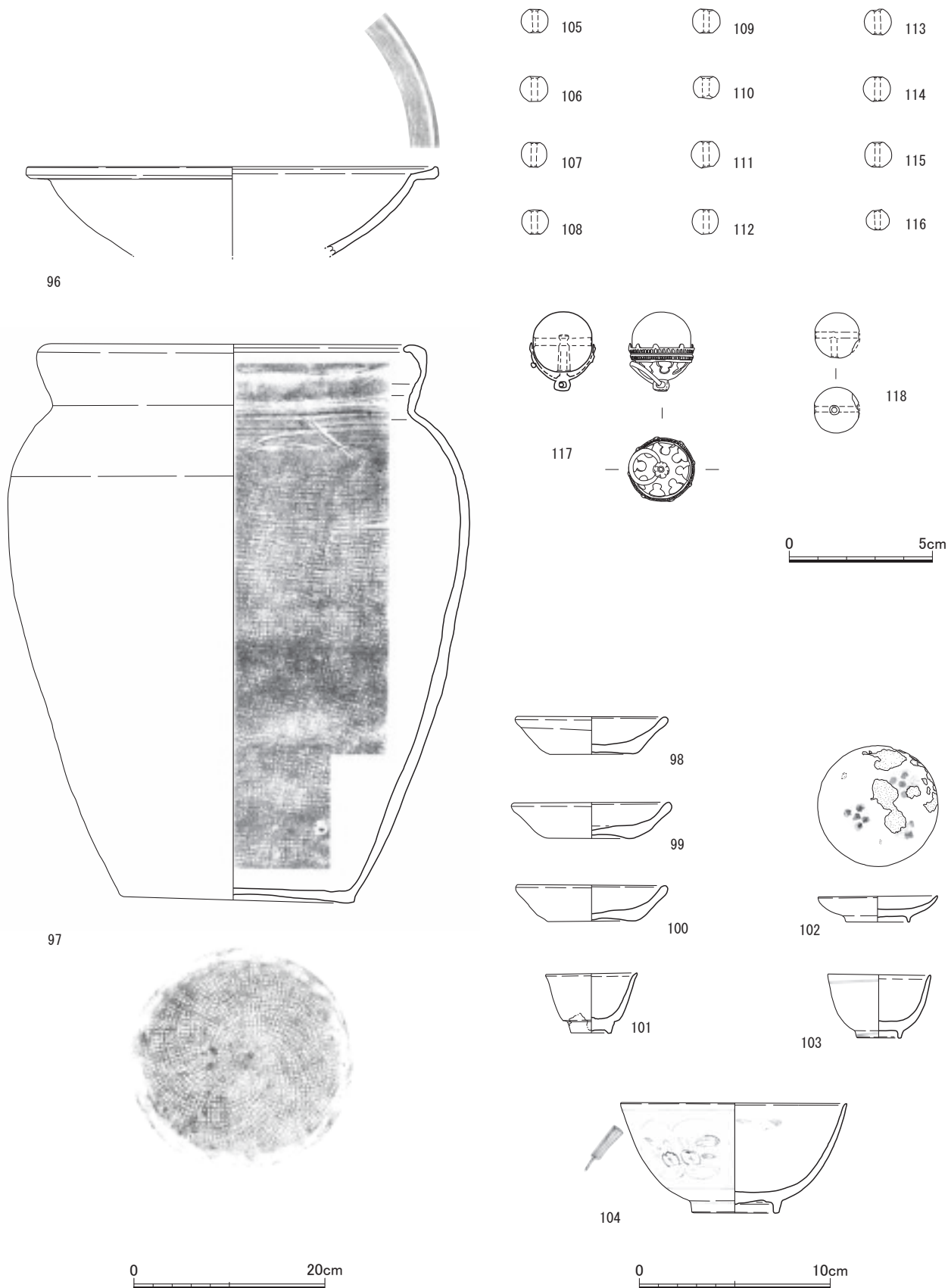


图6-34 9区出土遗物5 (1/2 · 1/3 · 1/6)

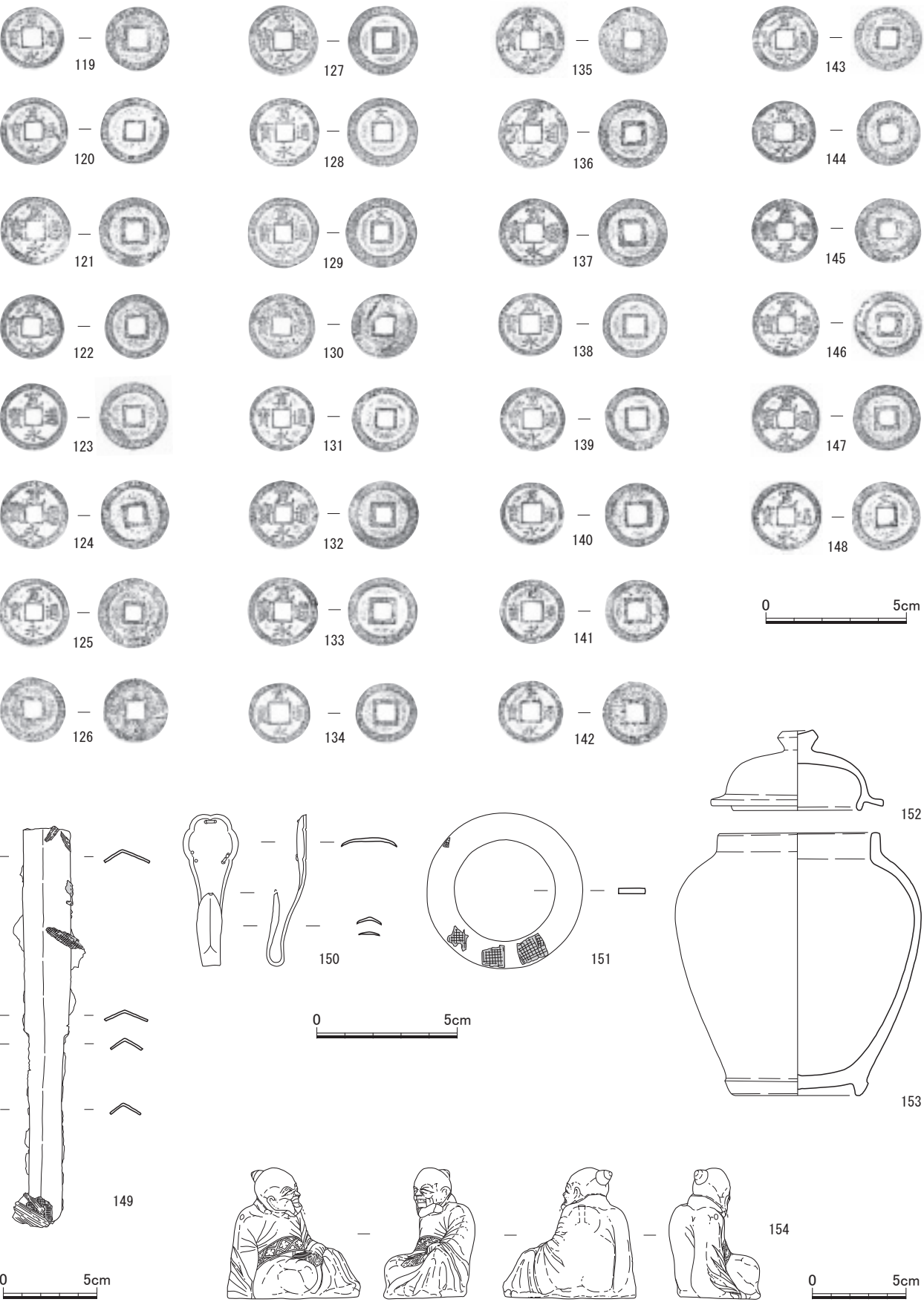


図6-35 9区出土遺物6 (1/ 2・1/ 3)

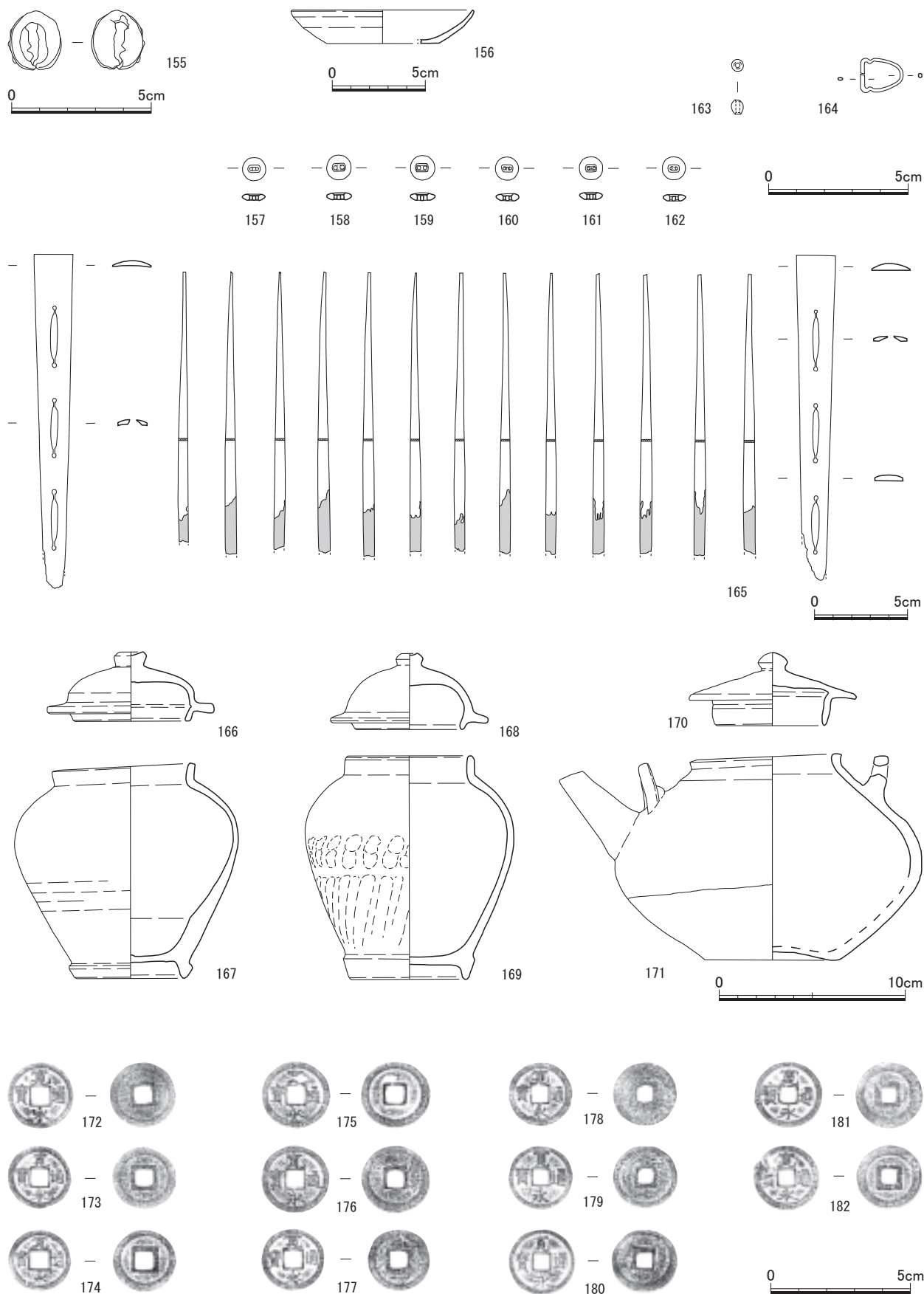


图6-36 9区出土遺物7 (1/2 · 1/3)

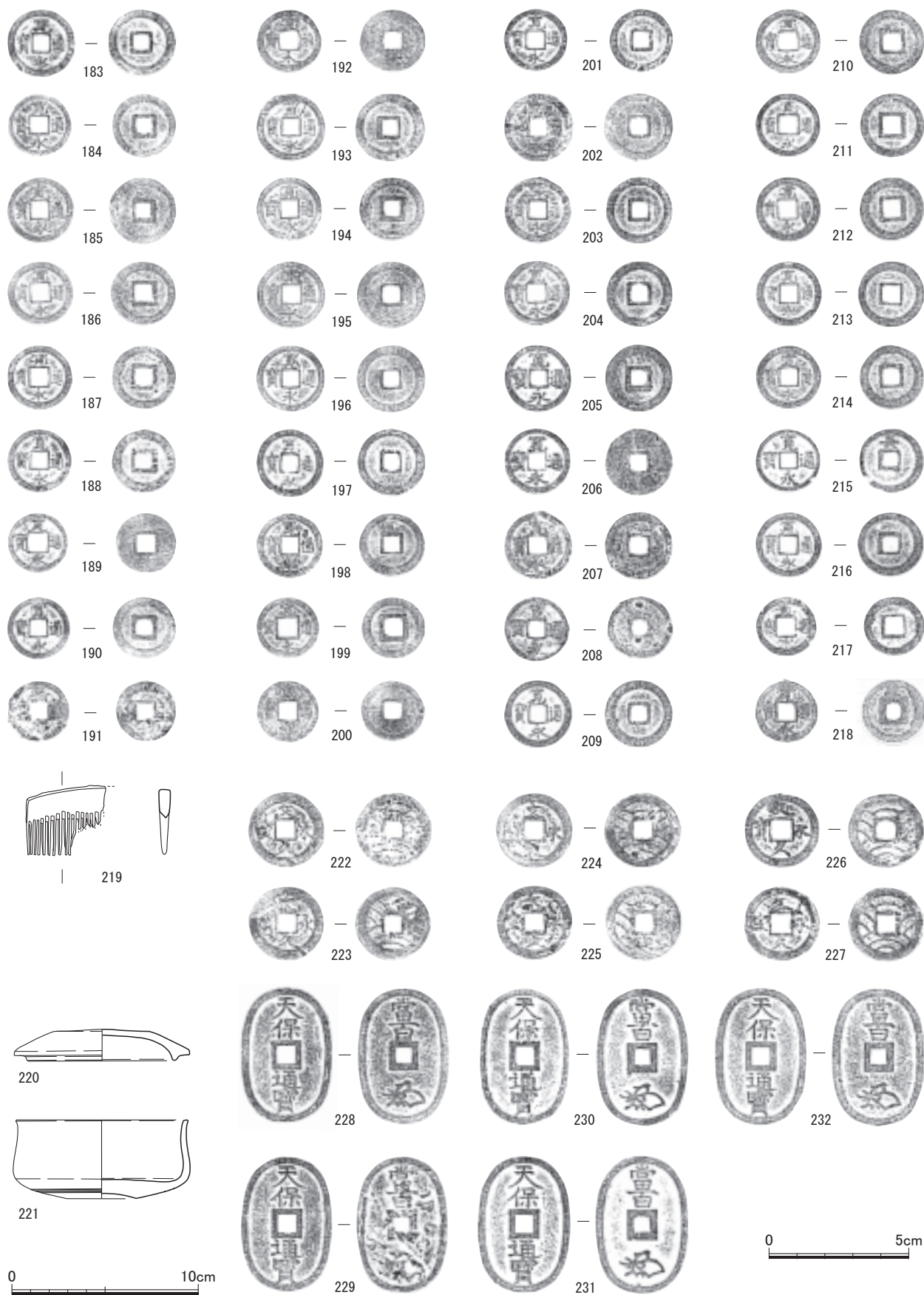


図6-37 9区出土遺物8 (1/2・1/3)

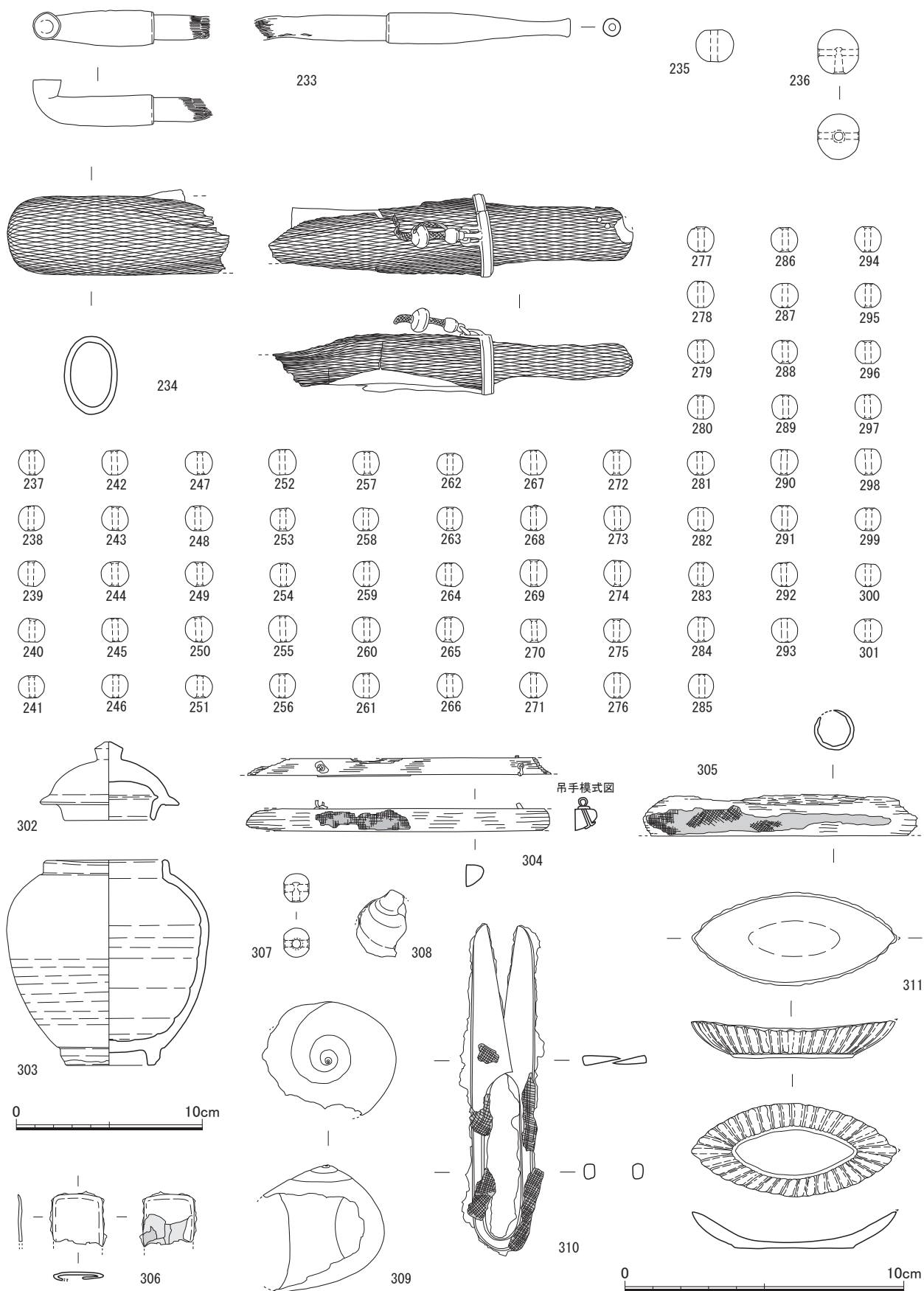


图6-38 9区出土遗物9 (1/2·1/3)

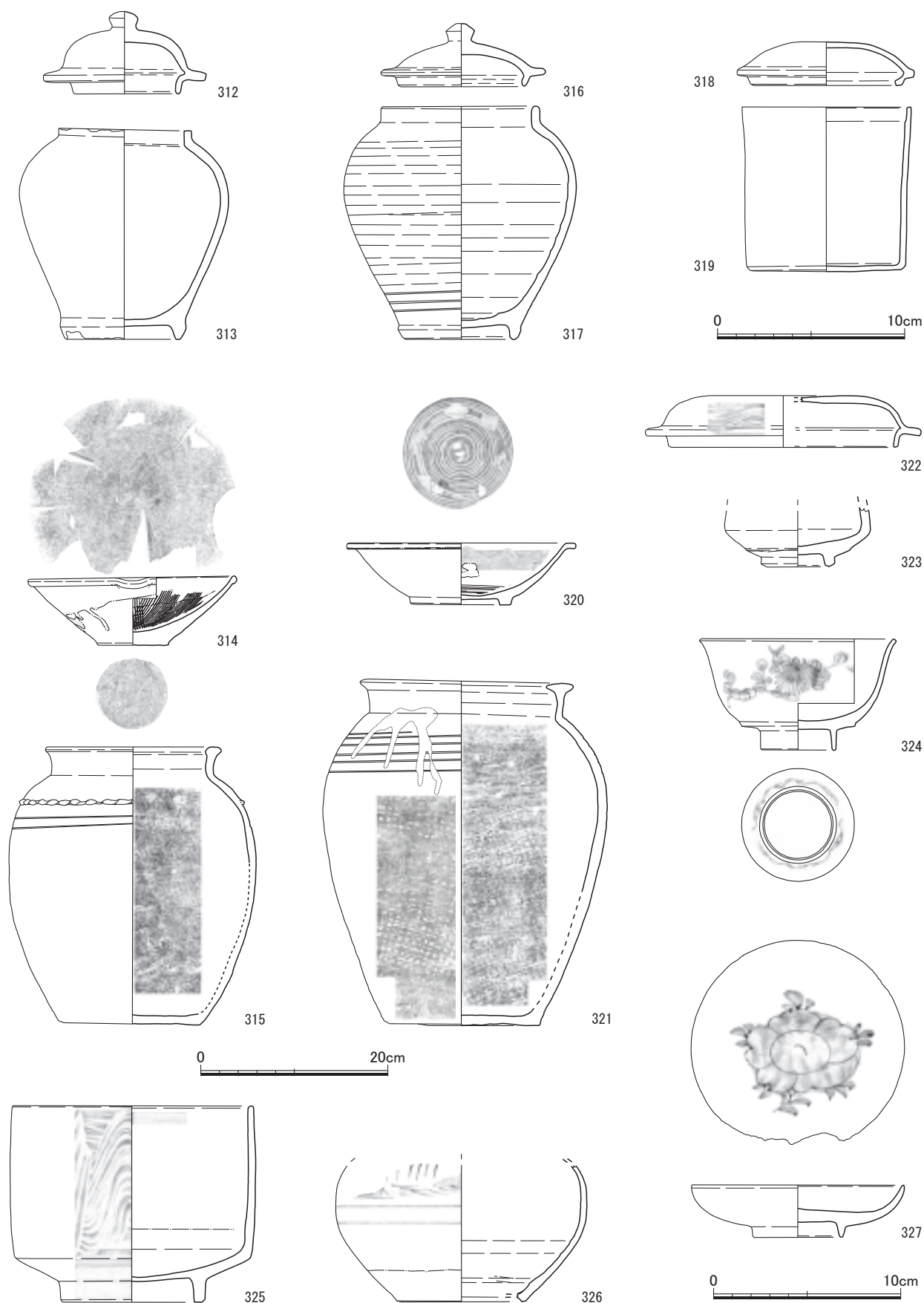


図6-39 9区出土遺物10(1/3・1/6)

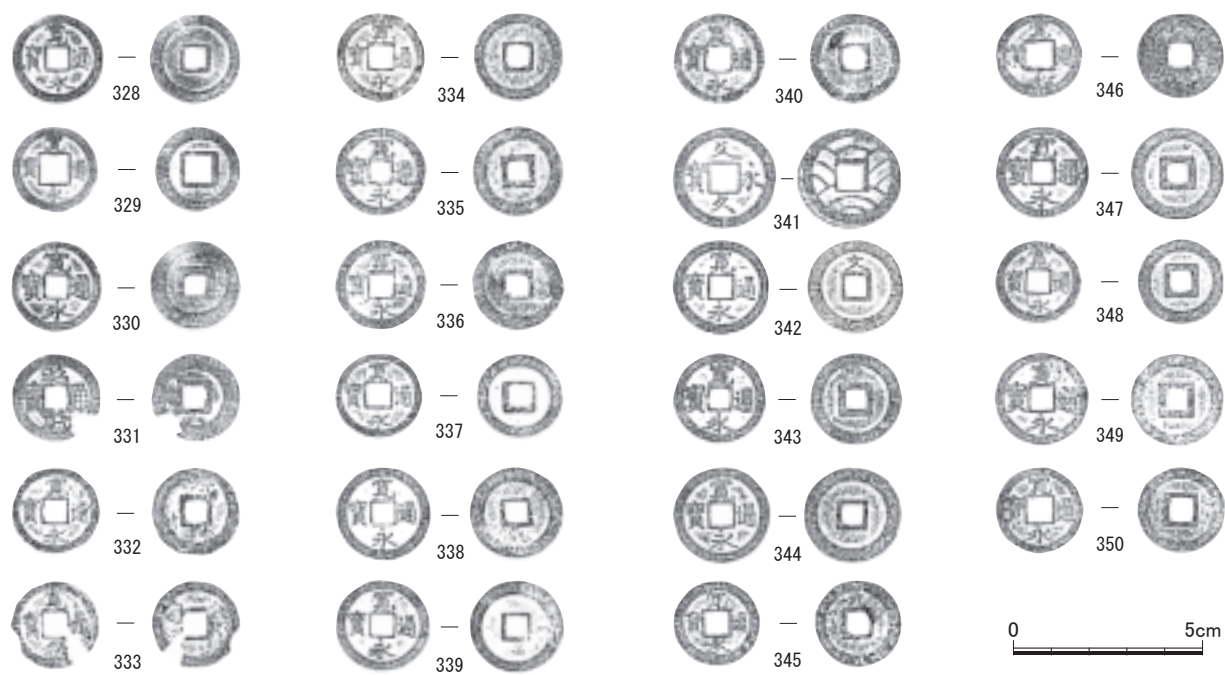


图6-40 9区出土遗物11 (1/2)

表 6-3 9 区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚			
図 6-30-1 10000040	SX9001	土師器 小皿	6.2	4.0	1.0	橙	底部糸切 油煤付着	写真図版 6-25-1 20102057
図 6-30-2 10000041	SX9001	土師器 小皿	7.2*	-	-	橙		写真図版 6-25-2 20102058
図 6-30-3 10000042	SX9001	土師器 鍋か	-	-	-	内：橙・にぶい黄橙 外：にぶい褐	煤付着	写真図版 6-25-3 20102059
図 6-30-4 09001633	SX9001	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.9g 古寛永	写真図版 6-25-4 20080873
図 6-30-5 09001634	SX9001	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.3g 古寛永	写真図版 6-25-5 20080874
図 6-30-6 09001635	SX9001	銭貨 近代銭	-	径 2.3	-	-	1 銭	写真図版 6-25-6 20080875
図 6-30-7 09001636	SX9001	銭貨 銅銭	-	径 2.15	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	写真図版 6-25-7 20080876
図 6-30-8 09001638	SX9001	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.0g 古寛永	写真図版 6-25-8 20080879
図 6-30-9 09001639	SX9001	銭貨 銅銭	-	径 約 2.3	-	-	寛永通寶か 1/3 程度残存	写真図版 6-25-9 20080880
図 6-30-10 09001645	SX9001	銭貨 銅銭	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 1.6g	写真図版 6-25-10 20080891
-	SX9001	銭貨 銅銭	-	-	-	-	寛永通宝か 6 個ほどの破片 計 2.6g	写真図版 6-25-13 20080892
図 6-30-11 09001647	SX9001	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.1g	写真図版 6-25-11 20080893
図 6-30-12 09001648	SX9001	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 古寛永	写真図版 6-25-12 20080894
図 6-30-13 09001649	SX9001	銭貨 近代銭	-	径 2.2	-	-	半銭	写真図版 6-25-14 20080895
図 6-30-14 09001650	SX9001	銭貨 銅銭	-	径 2.2	-	-	寛永通寶 1.8g 新寛永	写真図版 6-25-15 20080896
図 6-30-15 09001651	SX9001	銭貨 銅銭	-	径 約 2.5	-	-	錆のため銭種不明	写真図版 6-25-16 20080897
図 6-30-16 10000059	ST9101	陶器 甕	30.3	19.6	39.7	胎土：にぶい赤褐・明褐 釉調：暗褐	肥前 17c 後半 内面格子目文当て具痕	写真図版 6-25-17 20102077
図 6-30-17 09001490	ST9101	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.5g 古寛永 棺内出土	写真図版 6-25-18 20080721
図 6-30-18 09001491	ST9101	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永（文銭） 棺内出土	写真図版 6-25-19 20080722
図 6-30-19 09001492	ST9101	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永（文銭） 棺外出土	写真図版 6-25-20 20080723
図 6-30-20 09001493	ST9101	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.1g 古寛永 棺外出土	写真図版 6-25-21 20080724
図 6-30-21 09001494	ST9101	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永 棺外出土	写真図版 6-25-22 20080725
図 6-30-22 09001495	ST9101	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永 棺外出土	写真図版 6-25-23 20080726
図 6-30-23 09001496	ST9101	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永 棺外出土	写真図版 6-25-24 20080727
図 6-30-24 10000060	ST9102	陶器 甕	24.1	18.7	28.4	胎土：褐灰 釉調：暗褐・オリーブ黄・ オリーブ黒	肥前 17c 後半 内外面格子目文当て具・ 叩き具痕 底部胎土目痕 3 箇所	写真図版 6-25-30 20102078
図 6-30-25 10000001	ST9102	陶器 皿	26.4	10.4	5.8	胎土：にぶい黄褐 釉調：にぶい赤褐	肥前 武雄白木原か 1630 ～ 1650 年代 内面見込み胎土目痕 4 箇所	写真図版 6-25-29 20102023
図 6-31-26 09001487	ST9102	木製品 曲物・蓋	長 (高) 6.0+	幅 6.85+	厚 0.25	-	09001712 とセット	写真図版 6-25-27 20091668・ 20110926
図 6-31-27 09001712	ST9102	木製品 曲物・身	16.8*	-	5.8*	-	09001487 とセット	写真図版 6-25-28 20110927
図 6-31-28 10000019	ST9102	白磁 蓋付碗・蓋	8.5	最大径 10.4	3.5	胎土：灰白	肥前 嬉野不動山か 1660 ～ 1670 年代 10000015 とセット	写真図版 6-25-26 20102039
図 6-31-29 10000015	ST9102	白磁 蓋付碗・碗	9.8	5.2	6.7	胎土：灰白	肥前 嬉野不動山か 1660 ～ 1670 年代 10000019 とセット	写真図版 6-25-26 20102039

表6-3 9区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径/長	底径/幅	器高/厚			
図 6-31-30 10000014	ST9102	陶器 線香立	11.4*	5.9	6.0*	胎土：浅黄橙 釉調：赤黒	肥前 17c 後半	写真図版 6-25-25 20102038
図 6-31-31 10000061	ST9103	陶器 甕	19.9	15.8	28.3	胎土：暗褐 釉調：暗褐	肥前 1650～1660年代 格子目文当て具・叩き具痕 胎土目痕 2箇所残存	写真図版 6-26-34 20102079
図 6-31-32 10000013	ST9103	染付磁器 皿	21.1	7.3	6.6	胎土：灰白	肥前系 1650年代	写真図版 6-26-33 20102037
図 6-31-33 10000008	ST9103	染付磁器 蓋付小鉢・身	8.0	4.1	6.0	胎土：白	肥前 1660年代 口縁部打ち欠き	写真図版 6-26-32 20102029
図 6-31-34 10000007	ST9103	白磁 碗	9.0	5.1	6.0	胎土：白	肥前有田 1660～1680年代	写真図版 6-26-31 20102028
図 6-31-35 10000009	ST9107	白磁 小瓶	1.1	2.4	5.4	胎土：灰白	肥前 18c 型押成形	写真図版 6-26-42 20102030
図 6-31-36 10000011	ST9107	色絵磁器 緒締・根付か	高 3.3	幅 3.3	厚 1.9	胎土：灰白	肥前 色絵（赤・金使用） 底部から背面に孔	写真図版 6-26-41 20102032・2035
図 6-31-37 09001710	ST9107	鉄製品 刀	長 22.5+	-	-	-	柄部は差表、刃部・鞘部は差裏 を図化	写真図版 6-26-36 20102004
図 6-31-38 09001497	ST9107	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-26-37 20080728
図 6-31-39 09001498	ST9107	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.2g 古寛永	写真図版 6-26-38 20080729
図 6-31-40 09001499	ST9107	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 古寛永	写真図版 6-26-39 20080730
図 6-31-41 09002931	ST9107	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 6-26-40 20102019
図 6-32-42 09001500	ST9108	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 2.8g 古寛永	写真図版 6-26-43 20080731
図 6-32-43 09001501	ST9108	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.5g 古寛永	写真図版 6-26-44 20080732
図 6-32-44 10000018	ST9109	陶器 華瓶	7.3	6.1	13.4	胎土：灰黄 釉調：灰黄・黒褐	肥前 多久・武雄周辺か 17c 末～18c 前半	写真図版 6-26-45 20102042
図 6-32-45 10000030	ST9110	白磁 蓋付碗・蓋	9.1	最大径 10.5	2.6*	胎土：白	肥前 18c 代 10000031 とセットではない	写真図版 6-26-46 20102048
図 6-32-46 10000031	ST9110	白磁 蓋付碗・身	9.6	4.5	5.1	胎土：白	肥前 18c 代 10000030 とセットではない	写真図版 6-26-46 20102048
図 6-32-47 10000054	ST9112	陶器 鉢	48.4	23.7	16.4	胎土：赤茶褐 釉調：茶褐	肥前 19c 代	写真図版 6-27-63 20102072
図 6-32-48 10000063	ST9112	陶器 甕	56.4	29.2	75.0	にぶい赤褐	肥前 19c 代	写真図版 6-27-64 20102081
図 6-33-49 09001705	ST9112	青銅製品 毛拔	長 7.3	幅 1.2	厚 1.2	-	鍍銀 桔梗文様毛彫	写真図版 6-27-65 20101999・2000
図 6-33-50 09001707	ST9112	青銅・竹製品 煙管雁首	長 12.1+	径 1.5	-	-	径は雁首の最大径 09001706 と同一個体	写真図版 6-27-61 20102001
図 6-33-51 09001706	ST9112	青銅・竹製品 煙管吸口	長 8.1+	径 1.2	-	-	径は吸口の最大径 布片付着 09001707 と同一個体	写真図版 6-27-61 20102001
-	ST9112	布製品 煙管入	-	-	-	-	煙管が入った状態で出土	写真図版 6-27-62 20102098
図 6-33-52 09001502	ST9112	銭貨 銅銭	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-26-47 20080733
図 6-33-53 09001503	ST9112	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 1.7g 新寛永	写真図版 6-26-48 20080734
図 6-33-54 09001504	ST9112	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.9g 古寛永	写真図版 6-26-49 20080735
図 6-33-55 09001505	ST9112	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 4.0g 新寛永	写真図版 6-26-50 20080736
図 6-33-56 09001506	ST9112	銭貨 銅銭	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 1.9g 新寛永 （元字銭）	写真図版 6-26-51 20080737
図 6-33-57 09001507	ST9112	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g	写真図版 6-26-52 20080738
図 6-33-58 09001508	ST9112	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g	写真図版 6-26-53 20080739
図 6-33-59 09001509	ST9112	銭貨 銅銭・鉄銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 新寛永 裏面で鉄銭と錯着 2枚で 7.0g	写真図版 6-26-54 20080740

表 6-3 9 区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚			
図 6-33-60 09001510	ST9112	銭貨 鉄銭か	-	径 2.5	-	-	2 ～ 3 枚錆着か 9.4g	写真図版 6-26-55 20080741
図 6-33-61 09001511	ST9112	銭貨 銅銭・鉄銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶と鉄銭が付着 8.3g	写真図版 6-26-57 20080742
図 6-33-62 09001512	ST9112	銭貨 銅銭・鉄銭	-	径 2.35	-	-	銅銭と鉄銭付着 11.2g 布付着	写真図版 6-26-58 20080743
図 6-33-63 09001513	ST9112	銭貨 鉄銭	-	径 約 2.5	-	-	2 ～ 3 枚錆着か 11.8g	写真図版 6-26-59 20080744
図 6-33-64 09001514	ST9112	銭貨 銅銭・鉄銭	-	径 2.5	-	-	鉄銭を挟み 2 枚の寛永通寶 (銅銭) が錆着 10.1g	写真図版 6-26-60 20080745
-	ST9112	銭貨 銅銭・鉄銭	-	径 2.5	-	-	銅銭と鉄銭が錆着 計 10.4g 布付着	写真図版 6-26-56 20090946
図 6-33-65 09001515	ST9114	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-27-66 20080746
図 6-33-66 09001516	ST9114	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永か	写真図版 6-27-67 20080747
図 6-33-67 09001517	ST9114	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-27-68 20080748
図 6-33-68 09001518	ST9114	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.0g 古寛永	写真図版 6-27-69 20080749
図 6-33-69 09001519	ST9114	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.3g 新寛永	写真図版 6-27-70 20080750
図 6-33-70 09001520	ST9114	銭貨 銅銭	-	径 2.15	-	-	寛永通寶 2.6g	写真図版 6-27-71 20080751
図 6-33-71 09001521	ST9114	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-27-72 20080752
図 6-33-72 09001522	ST9114	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 6-27-73 20080753
-	ST9115	漆 扇子	-	-	-	-	扇子の漆塗膜	写真図版 6-27-76 20102006
-	S T 9117	銭貨 銅銭	-	-	-	-	銅銭 15 枚以上が錆着	写真図版 6-27-75 20080947
-	ST9117	銭貨 銅銭	-	-	-	-	銅銭 5 枚が錆着	写真図版 6-27-74 20080948
図 6-33-73 09001523	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.4g 古寛永	写真図版 6-28-77 20080754
図 6-33-74 09001524	ST9118	銭貨 銅貨	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.5g 古寛永	写真図版 6-28-78 20080755
図 6-33-75 09001525	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-28-79 20080756
図 6-33-76 09001526	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-28-80 20080757
図 6-33-77 09001527	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 新寛永 (文銭)	写真図版 6-28-81 20080758
図 6-33-78 09001528	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.9g 新寛永	写真図版 6-28-82 20080759
図 6-33-79 09001529	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.55	-	-	寛永通寶 3.6g 新寛永 (文銭)	写真図版 6-28-83 20080760・761
図 6-33-80 09001530	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 新寛永 (文銭)	写真図版 6-28-84 20080762・763
図 6-33-81 09001531	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.6g 古寛永	写真図版 6-28-85 20080764
図 6-33-82 09001532	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 2.7g 新寛永 (文銭)	写真図版 6-28-86 20080765
図 6-33-83 09001533	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.4g 新寛永	写真図版 6-28-87 20080766
図 6-33-84 09001534	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永	写真図版 6-28-88 20080767
図 6-33-85 09001535	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 1.9g 新寛永	写真図版 6-28-89 20080768
図 6-33-86 09001536	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-28-90 20080769
図 6-33-87 09001537	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.1g 古寛永	写真図版 6-28-91 20080770

表6-3 9区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚			
図 6-33-88 09001538	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-28-92 20080771
図 6-33-89 09001539	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.5g	写真図版 6-28-93 20080772
図 6-33-90 09001540	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永 (元字銭)	写真図版 6-28-94 20080773
図 6-33-91 09001541	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-28-95 20080774
図 6-33-92 09001542	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.6g	写真図版 6-28-96 20080775
図 6-33-93 09001543	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.2	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	写真図版 6-28-97 20080776
図 6-33-94 09001544	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 2.1g 新寛永	写真図版 6-28-98 20080777
図 6-33-95 09001545	ST9118	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.7g 新寛永 (元字銭)	写真図版 6-28-99 20080778
図 6-34-96 10000057	ST9119	陶器 皿	43.2*	-	-	胎土：明赤褐 釉調：青黄緑	肥前 1650 年代	写真図版 6-28-114 20102074・2075
図 6-34-97 10000058	ST9119	陶器 甕	40.9	24.2	58.3	胎土：灰褐 釉調：褐	肥前 1630～1650 年代 内面格子目文当て具痕有り	写真図版 6-28-115 20102076
図 6-34-98 10000004	ST9119	土師器 小皿	8.0	4.5	2.0	橙		写真図版 6-28-116 20102025
図 6-34-99 10000005	ST9119	土師器 小皿	8.4	4.5	1.9	にぶい黄橙	底部糸切	写真図版 6-28-117 20102026
図 6-34-100 10000006	ST9119	土師器 小皿	8.0	4.6	1.9	にぶい黄橙		写真図版 6-28-118 20102027
図 6-34-101 10000017	ST9119	白磁 小杯	4.8	2.1	3.1	胎土：灰白	1650 年代前後	写真図版 6-28-121 20102041
図 6-34-102 10000012	ST9119	染付磁器 小皿	6.3	3.3	1.3	胎土：白	内外面に付着物	写真図版 6-28-119 20102036
図 6-34-103 10000016	ST9119	染付磁器 小杯	5.4	2.4	3.3	胎土：灰白	1650 年代	写真図版 6-28-120 20102040
図 6-34-104 10000010	ST9119	色絵磁器 碗	11.9	4.6	5.8	胎土：白	肥前 古九谷様式 1650～1660 年代 底部砂目痕	写真図版 6-28-122 20102031
図 6-34-105 09001717	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-28-100 20094742
図 6-34-106 09001718	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-28-101 20094743
図 6-34-107 09001719	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-28-102 20094744
図 6-34-108 09001720	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-28-103 20094745
図 6-34-109 09001721	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-28-104 20094746
図 6-34-110 09001722	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-28-105 20094747
図 6-34-111 09001723	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-28-106 20094748
図 6-34-112 09001724	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-28-107 20094749
図 6-34-113 09001725	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-28-108 20094750
図 6-34-114 09001726	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-28-109 20094751
図 6-34-115 09002927	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 1.05	-	-		写真図版 6-28-110 20102016
図 6-34-116 09002928	ST9122	ガラス製品 玉	-	径 1.6	-	-		写真図版 6-28-111 20092016
図 6-34-117 09001715	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 2.1	-	-	鍍金青銅製金具付き T 字状の孔	写真図版 6-28-112 20094740
図 6-34-118 09001716	ST9122	水晶製品 数珠玉	-	径 1.6	-	-	T 字状の孔	写真図版 6-28-113 20094741

表6-3 9区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚			
図 6-35-119 09001546	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.1g 新寛永	写真図版 6-29-123 20080779
図 6-35-120 09001547	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.9g 新寛永	写真図版 6-29-124 20080780
図 6-35-121 09001548	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.0g 古寛永	写真図版 6-29-125 20080781
図 6-35-122 09001549	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.3g 新寛永	写真図版 6-29-126 20080782
図 6-35-123 09001550	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 4.0g 古寛永	写真図版 6-29-127 20080783
図 6-35-124 09001551	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 4.1g 古寛永	写真図版 6-29-128 20080784
図 6-35-125 09001552	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.55	-	-	寛永通寶 4.0g 新寛永	写真図版 6-29-129 20080785
図 6-35-126 09001553	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	摩耗により銭種不明 2.5g	写真図版 6-29-130 20080786
図 6-35-127 09001554	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.1g 古寛永	写真図版 6-29-131 20080787
図 6-35-128 09001555	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.3g 新寛永 (文銭)	写真図版 6-29-132 20080788・0789
図 6-35-129 09001556	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.55	-	-	寛永通寶 3.4g 新寛永 (文銭)	写真図版 6-29-133 20080790・0791
図 6-35-130 09001557	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-29-134 20080792
図 6-35-131 09001558	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.9g 新寛永	写真図版 6-29-135 20080793
図 6-35-132 09001559	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.8g 古寛永	写真図版 6-29-136 20080794
図 6-35-133 09001560	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 2.7g 古寛永	写真図版 6-29-137 20080795
図 6-35-134 09001561	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.2	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 6-29-138 20080796
図 6-35-135 09001562	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 2.7g 新寛永	写真図版 6-29-139 20080797
図 6-35-136 09001563	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.6g 古寛永	写真図版 6-29-140 20080798
図 6-35-137 09001564	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 4.1g 古寛永	写真図版 6-29-141 20080799
図 6-35-138 09001565	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-29-142 20080800
図 6-35-139 09001566	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-29-143 20080801
図 6-35-140 09001567	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-29-144 20080802
図 6-35-141 09001568	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-29-145 20080803
図 6-35-142 09001569	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-29-146 20080804
図 6-35-143 09001570	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-29-147 20080805
図 6-35-144 09001571	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-29-148 20080806
図 6-35-145 09001572	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g	写真図版 6-29-149 20080807
図 6-35-146 09001573	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.9g 古寛永	写真図版 6-29-150 20080808
図 6-35-147 09001574	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 3.6g 古寛永	写真図版 6-29-151 20080809
図 6-35-148 09001575	ST9124	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永 (文銭)	写真図版 6-29-152 20080810
図 6-35-149 09001704	ST9124	不明鉄製品	長 16.0	幅 2.5	厚 0.1	-	木片・布片付着 禅僧持物・仏具か	写真図版 6-29-153 20101998
図 6-35-150 09001703	ST9124	青銅製品 吊金具	長 5.4	幅 2.0	厚 0.1 強	-	09001702 と組み合わせて使用	写真図版 6-29-154 20101997

表6-3 9区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚			
図 6-35-151 09001702	ST9124	青銅製品 絡子環	5.5	幅 0.9	厚 0.2	-	布付着 09001703 と組み合わ せて使用	写真図版 6-29-155 20101996
図 6-35-152 10000024	ST9125	白磁 蔵骨器・蓋	6.8	最大径 9.2	4.3	胎土：灰白	17c 後半～18c 初 10000025 とセット	写真図版 6-29-157 20102045
図 6-35-153 10000025	ST9125	白磁 蔵骨器・身	8.6	6.7	14.0	胎土：灰白	17c 後半～18c 初 10000024 とセット	写真図版 6-29-157 20102045
図 6-35-154 10000032	ST9127	白磁 水滴	-	底部幅 7.0 × 4.3	7.0	胎土：灰白	17c 後半～18c 前半 両肩に1箇所ずつ孔	写真図版 6-29-158 20102051
図 6-36-155 09001698	ST9130	銅製品 雁首銭か	長径 2.1	短径 1.85	厚 0.3	-		写真図版 6-29-159 20080952
図 6-36-156 10000055	ST9130	土師器 小皿	9.8*	6.0*	1.8	灰黄		写真図版 6-29-163 20110391
-	ST9130	銭貨 鉄銭	-	径 2.6*	-	-	鉄銭か	写真図版 6-29-160 20080949
-	ST9130	銭貨 鉄銭	-	径 2.5*	-	-	鉄銭2枚付着 計 5.0g	写真図版 6-29-161 20090950
-	ST9130	銭貨 鉄銭	-	径 2.5*	-	-	鉄銭2枚付着 計 7.5g	写真図版 6-29-162 20080951
図 6-36-157 09002920	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.1	-	厚 0.3	白		写真図版 6-29-165 20102008
図 6-36-158 09002921	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.2	-	厚 0.3	白		写真図版 6-29-166 20102009
図 6-36-159 09002922	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.2	-	厚 0.4	白		写真図版 6-29-167 20102010
図 6-36-160 09002923	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.1	-	厚 0.4	白		写真図版 6-29-168 20102011
図 6-36-161 09002924	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.1	-	厚 0.3	白		写真図版 6-29-169 20102012
図 6-36-162 09002925	ST9131	ガラス製品 ボタン	径 1.1	-	厚 0.3	白		写真図版 6-29-170 20102013
図 6-36-163 09002929	ST9131	ガラス製品 玉	-	径 0.4	-	-		写真図版 6-29-164 20102017
図 6-36-164 09002930	ST9131	不明金属製品	1.25	1.5	-	-	真鍮製か	写真図版 6-29-171 20102018
図 6-36-165 09001711	ST9131	竹製品 扇子	長 親骨:17.5+ 中骨:15.3+	幅 親骨:2.1+ 中骨:0.7+	厚 親骨:0.4 中骨:0.1	-	親骨表面に赤漆 中骨下部に赤色顔料塗布	写真図版 6-29-172 20102005
-	ST9131	金モール	-	-	-	-		写真図版 6-29-173 20102099・2100 ・2101
図 6-36-166 10000028	ST9132	白磁 蔵骨器・蓋	6.8	最大径 9.0	3.7	胎土：白	肥前 17c 後半～18c 初 10000029 とセット	写真図版 6-30-174 20102047
図 6-36-167 10000029	ST9132	白磁 蔵骨器・身	7.4 ～ 7.7	6.0	11.4	胎土：白	肥前 17c 後半～18c 初 10000028 とセット	写真図版 6-30-174 20102047
図 6-36-168 10000034	ST9134	白磁 蔵骨器・蓋	5.9*	最大径 8.5*	4.1	胎土：白	肥前 1690 年代か 10000033 とセット	写真図版 6-30-175 20102053
図 6-36-169 10000033	ST9134	白磁 蔵骨器・身	7.0*	6.2	12.0	胎土：白	肥前 1690 年代か 10000034 とセット	写真図版 6-30-175 20102053
図 6-36-170 10000035	ST9135	陶器 土瓶・蓋	6.0	最大径 9.1	3.9	胎土：灰褐 釉調：コバルトブルー	肥前 武雄黒牟田系統 19c 代	写真図版 6-30-176 20102054
図 6-36-171 10000036	ST9135	陶器 土瓶・身	8.2	7.2	11.0	胎土：灰褐 釉調：コバルトブルー	肥前 武雄黒牟田系統 19c 代	写真図版 6-30-176 20102054
図 6-36-172 09001576	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-30-179 20080811
図 6-36-173 09001577	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-30-180 20080812
図 6-36-174 09001578	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 6-30-181 20080813
図 6-36-175 09001579	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-30-182 20080814
図 6-36-176 09001580	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-30-183 20080815
図 6-36-177 09001581	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 3.6g 新寛永	写真図版 6-30-184 20080816

表6-3 9区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚			
図 6-36-178 09001582	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.7g 新寛永	写真図版 6-30-185 20080817
図 6-36-179 09001583	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 6-30-186 20080818
図 6-36-180 09001584	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-30-187 20080819
図 6-36-181 09001585	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.6g 古寛永	写真図版 6-30-188 20080820
図 6-36-182 09001586	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 3.4g 古寛永	写真図版 6-30-189 20080821
図 6-37-183 09001587	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永	写真図版 6-30-190 20080822
図 6-37-184 09001588	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永	写真図版 6-30-191 20080823
図 6-37-185 09001589	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 4.7g 新寛永	写真図版 6-30-192 20080824
図 6-37-186 09001590	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 6-30-193 20080825
図 6-37-187 09001591	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.1g 新寛永	写真図版 6-30-194 20080826
図 6-37-188 09001592	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-30-195 20080827
図 6-37-189 09001593	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.2	-	-	寛永通寶 2.0g 新寛永	写真図版 6-30-196 20080828
図 6-37-190 09001594	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 6-30-197 20080829
図 6-37-191 09001595	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.2	-	-	摩耗のため銭種不明 3.3g	写真図版 6-30-198 20080830
図 6-37-192 09001596	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永 布片付着	写真図版 6-30-199 20080831
図 6-37-193 09001597	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.5g 新寛永 布片付着	写真図版 6-30-200 20080832
図 6-37-194 09001598	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-30-201 20080833
図 6-37-195 09001599	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-30-202 20080834
図 6-37-196 09001600	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-30-203 20080835
図 6-37-197 09001601	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.1g 新寛永	写真図版 6-30-204 20080836
図 6-37-198 09001602	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 3.4g 新寛永	写真図版 6-30-205 20080837
図 6-37-199 09001603	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-30-206 20080838
図 6-37-200 09001604	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.0g	写真図版 6-30-207 20080839
図 6-37-201 09001605	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-30-208 20080840
図 6-37-202 09001606	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通寶 3.1g	写真図版 6-30-209 20080841
図 6-37-203 09001607	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永	写真図版 6-30-210 20080842
図 6-37-204 09001608	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 3.1g 古寛永	写真図版 6-30-211 20080843
図 6-37-205 09001609	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 布付着	写真図版 6-30-212 20080844
図 6-37-206 09001610	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.6g 古寛永	写真図版 6-30-213 20080845
図 6-37-207 09001611	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.45	-	-	寛永通寶 2.4g 古寛永	写真図版 6-30-214 20080846
図 6-37-208 09001612	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 3.7g 新寛永	写真図版 6-30-215 20080847
図 6-37-209 09001613	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-30-216 20080848

表6-3 9区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚			
図 6-37-210 09001614	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.4g 新寛永	写真図版 6-30-217 20080849
図 6-37-211 09001615	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.0	-	-	寛永通寶 2.0g 新寛永	写真図版 6-30-218 20080850
図 6-37-212 09001616	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.2g 新寛永	写真図版 6-30-219 20080851
図 6-37-213 09001617	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.8g 新寛永	写真図版 6-30-220 20080852
図 6-37-214 09001618	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 3.0g 新寛永	写真図版 6-30-221 20080853
図 6-37-215 09001619	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永 (長字銭)	写真図版 6-30-223 20080854
図 6-37-216 09001620	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通寶 2.5g 新寛永	写真図版 6-30-222 20080855
図 6-37-217 09001621	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.2	-	-	寛永通寶 1.7g 新寛永	写真図版 6-30-224 20080856
図 6-37-218 09002932	ST9136	銭貨 銅銭	-	径 2.25	-	-	寛永通寶 3.5g 新寛永	写真図版 6-30-225 20102020
図 6-37-219 09001484	ST9136	木製品 櫛	-	-	厚 0.4	-		写真図版 6-30-178 20091639
図 6-37-220 10000037	ST9137	白磁 蓋付碗・蓋	8.1	最大径 9.5	1.7	胎土：灰白	18c 末～幕末	写真図版 6-30-177 20102055
図 6-37-221 10000038	ST9137	白磁 蓋付碗・身	9.2	3.7	4.2	胎土：白	18c 末～幕末	写真図版 6-30-177 20102056
図 6-37-222 09001622	ST9138	銭貨 銅銭	-	径 2.75	-	-	文久永寶 3.7g	写真図版 6-30-226 20080857
図 6-37-223 09001623	ST9138	銭貨 銅銭	-	径 2.7	-	-	文久永寶 3.5g	写真図版 6-30-227 20080858
図 6-37-224 09001624	ST9138	銭貨 銅銭	-	径 2.7	-	-	文久永寶 3.0g	写真図版 6-30-228 20080859
図 6-37-225 09001625	ST9138	銭貨 銅銭	-	径 2.7	-	-	文久永寶 3.6g	写真図版 6-30-229 20080860
図 6-37-226 09001626	ST9138	銭貨 銅銭	-	径 2.7	-	-	文久永寶 4.6g	写真図版 6-30-230 20080861
図 6-37-227 09001627	ST9138	銭貨 銅銭	-	径 2.7	-	-	文久永寶 4.7g	写真図版 6-30-231 20080862
図 6-37-228 09001628	ST9138	銭貨 銅銭	4.9	3.3	-	-	天保通寶 20.4g	写真図版 6-30-232 20080863・0864
図 6-37-229 09001629	ST9138	銭貨 銅銭	4.9	3.25	-	-	天保通寶 20.9g	写真図版 6-31-233 20080865・0866
図 6-37-230 09001630	ST9138	銭貨 銅銭	4.95	3.25	-	-	天保通寶 21.4g	写真図版 6-31-234 20080867・0868
図 6-37-231 09001631	ST9138	銭貨 銅銭	4.95	3.3	-	-	天保通寶 19.4g	写真図版 6-31-235 20080869・0870
図 6-37-232 09001632	ST9138	銭貨 銅銭	4.9	3.25	-	-	天保通寶 22.4g	写真図版 6-31-236 20080871・0872
図 6-38-233 09001709	ST9138	青銅・木製品 煙管	長 18.8+	径 1.3	-	-	径は雁首の最大径	写真図版 6-31-304 20102003
図 6-38-234 09001708	ST9138	木製品 煙管筒	-	幅 2.3	厚 1.5	-	幅・厚さは身の数値	写真図版 6-31-305 20102002
図 6-38-235 09001729	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.35	-	-		写真図版 6-31-237 20094754
図 6-38-236 09001728	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.6	-	-	T 字状の孔	写真図版 6-31-238 20094753
図 6-38-237 09001730	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-239 20094755
図 6-38-238 09001731	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-240 20094756
図 6-38-239 09001732	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-241 20094757
図 6-38-240 09001733	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-242 20094758
図 6-38-241 09001734	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-243 20094759

表6-3 9区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径/長	底径/幅	器高/厚			
図 6-38-242 09001735	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-244 20094760
図 6-38-243 09001736	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-245 20094761
図 6-38-244 09001737	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-246 20094762
図 6-38-245 09001738	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-247 20094763
図 6-38-246 09001739	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-248 20094764
図 6-38-247 09001740	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-249 20094765
図 6-38-248 09001741	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-250 20094766
図 6-38-249 09001742	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-251 20094767
図 6-38-250 09001743	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-252 20094768
図 6-38-251 09001744	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-253 20094769
図 6-38-252 09001745	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-254 20094770
図 6-38-253 09001746	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-255 20094771
図 6-38-254 09001747	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-256 20094772
図 6-38-255 09001748	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-257 20094773
図 6-38-256 09001749	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-258 20094774
図 6-38-257 09001750	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-259 20094775
図 6-38-258 09001751	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-260 20094776
図 6-38-259 09001752	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-261 20094777
図 6-38-260 09001753	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-262 20094778
図 6-38-261 09001754	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-263 20094779
図 6-38-262 09001755	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-264 20094780
図 6-38-263 09001756	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-265 20094781
図 6-38-264 09001757	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-266 20094782
図 6-38-265 09001758	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-267 20094783
図 6-38-266 09001759	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-268 20094784
図 6-38-267 09001760	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-269 20094785
図 6-38-268 09001761	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-270 20094786
図 6-38-269 09001762	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-275 20094787
図 6-38-270 09001763	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-276 20094788
図 6-38-271 09001764	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-277 20094789
図 6-38-272 09001765	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-278 20094790
図 6-38-273 09001766	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-271 20094791

表6-3 9区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径/長	底径/幅	器高/厚			
図 6-38-274 09001767	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-276 20094792
図 6-38-275 09001768	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-277 20094793
図 6-38-276 09001769	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-278 20094794
図 6-38-277 09001770	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-279 20094795
図 6-38-278 09001771	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-280 20094796
図 6-38-279 09001772	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-281 20094797
図 6-38-280 09001773	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-282 20094798
図 6-38-281 09001774	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-283 20094799
図 6-38-282 09001775	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-284 20094800
図 6-38-283 09001776	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-285 20094801
図 6-38-284 09001777	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-286 20094802
図 6-38-285 09001778	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-287 20094803
図 6-38-286 09001779	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-288 20094804
図 6-38-287 09001780	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-289 20094805
図 6-38-288 09001781	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-290 20094806
図 6-38-289 09001782	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-291 20094807
図 6-38-290 09001783	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-292 20094808
図 6-38-291 09001784	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-293 20094809
図 6-38-292 09001785	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-294 20094810
図 6-38-293 09001786	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-295 20094811
図 6-38-294 09001787	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-296 20094812
図 6-38-295 09001788	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-297 20094813
図 6-38-296 09001789	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-298 20094814
図 6-38-297 09001790	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-299 20094815
図 6-38-298 09001791	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-300 20094816
図 6-38-299 09001792	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.95	-	-		写真図版 6-31-301 20094817
図 6-38-300 09001793	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 0.9	-	-		写真図版 6-31-302 20094818
図 6-38-301 09002926	ST9138	ガラス製品 数珠玉	-	径 1.0	-	-		写真図版 6-31-303 20102014
図 6-38-302 10000022	ST9141	陶器 蔵骨器・蓋	4.9	最大径 7.5	4.2	胎土：にぶい橙 釉調：にぶい黄橙	肥前唐津 18c 頃 10000023 とセット	写真図版 6-31-306 20102044
図 6-38-303 10000023	ST9141	陶器 蔵骨器・身	6.3	4.9	11.0	胎土：灰 釉調：灰白	肥前 18c 頃 砂目痕 10000022 とセット	写真図版 6-31-306 20102044
図 6-38-304 09001485	ST9143	木製品 掛軸 八双	長 10.9+	幅 0.8	厚 0.8	-	裂（表面に金糸）と青銅製鐙 （座金具・吊子）残存	写真図版 6-31-309 20081642
図 6-38-305 09001486	ST9143	木製品 掛軸 軸棒	長 9.8+	径 1.5	-	-	裂残存（表面に金糸）	写真図版 6-31-310 20081644

表6-3 9区出土遺物一覧

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径/長	底径/幅	器高/厚			
図 6-38-306 09002933	ST9143	鉄製品 鉈尾	長 1.9+	幅 1.8	0.1	-	木質付着	写真図版 6-31-312 20102022
図 6-38-307 09001727	ST9143	ガラス製品 玉	-	径 1.05	-	-	T 字状の孔	写真図版 6-31-311 20094752
図 6-38-308 09001700	ST9143	貝 シジミガイか	長 2.4+	幅 1.8+	-	-	紅少量残存	写真図版 6-31-314 20101992
図 6-38-309 09001699	ST9143	貝 ツメタガイか	長 4.5+	幅 3.3+	厚 4.1+	-		写真図版 6-31-315 20101993
図 6-38-310 09001701	ST9143	鉄製品 糸切鉄	長 11.7	幅 2.3	厚 0.6	-	布片付着	写真図版 6-31-313 20101994
図 6-38-311 10000039	ST9143	白磁 小皿	長 7.5 × 3.4	幅 4.3 × 1.6	1.3	胎土：灰白	肥前 17c 末～18c	写真図版 6-31-308 20102056
図 6-39-312 10000027	ST9145	陶器 蔵骨器・蓋	5.7	最大径 8.7	4.4	胎土：灰白 釉調：暗赤褐・明緑灰	肥前 伊万里周辺か 18c 前半～中葉 10000026 とセット	写真図版 6-31-307 20102046
図 6-39-313 10000026	ST9145	陶器 蔵骨器・身	7.1	6.2	11.2	胎土：灰白 釉調：暗褐・明緑灰	肥前 伊万里周辺か 18c 前半～中葉 10000027 とセット	写真図版 6-31-307 20102046
図 6-39-314 10000056	ST9146	陶器 擂鉢	22.3	7.6	7.3	胎土：赤褐 釉調：灰黄褐・褐灰	肥前 17c 後半 底部糸切	写真図版 6-32-349 20102073
図 6-39-315 10000062	ST9146	陶器 甕	18.8	15.3	29.5	釉調：暗褐	(17c 後半～)18c 前半 内面格子目叩き具痕 底部に胎土目痕3箇所	写真図版 6-32-350 20102080
図 6-39-316 10000020	ST9147	白磁 蔵骨器・蓋	6.8	最大径 8.8	3.4	胎土：灰白	18c 頃 10000021 とセット	写真図版 6-32-351 20102043
図 6-39-317 10000021	ST9147	白磁 蔵骨器・身	8.5	6.1	12.4	胎土：灰白	18c 頃 10000020 とセット	写真図版 6-32-351 20102043
図 6-39-318 10000002	ST9148	磁器 蔵骨器・蓋	8.1～8.2	最大径 9.5	2.3	胎土：白	肥前 明治以降 10000003 とセット	写真図版 6-32-352 20102024
図 6-39-319 10000003	ST9148	磁器 蔵骨器・身	9.1	8.5	8.8	胎土：白	肥前 明治以降 底部に「特 製」の刻印 10000002 とセット	写真図版 6-32-352 20102024
図 6-39-320 09001489	SX9149	陶器 鉢	24.5	10.8	6.6	胎土：にぶい赤褐 釉調：灰白・暗赤褐	肥前 二彩手	写真図版 6-32-345 20094819・4820
図 6-39-321 09001488	SX9149	陶器 甕	22.8	16.7	37	釉調：暗褐	肥前 17c 後半	写真図版 6-32-346 20091676
図 6-39-322 10000049	表採	陶器 蓋付碗・蓋	12.3*	最大径 14.2*	-	胎土：にぶい橙 釉調：淡黄・黄褐	外面全体に刷毛目文様	写真図版 6-32-341 20102068
図 6-39-323 10000051	表採	青磁 花瓶か	-	4.0*	-	胎土：灰白		写真図版 6-32-344 20102070
図 6-39-324 10000053	検出面	染付磁器 碗	10.5	4.0	6.0	胎土：白		写真図版 6-32-347 20094737
図 6-39-325 10000050	表採	陶器 蓋付碗・身	12.9*	7.7	10.5	胎土：にぶい橙 釉調：淡黄・黄褐	外面全体に刷毛目文様	写真図版 6-32-342 20102069
図 6-39-326 10000064	検出面	陶器 土瓶	-	6.9*	-	胎土：浅黄 釉調：灰白・オリープ黄	底部煤付着	写真図版 6-32-348 20094736
図 6-39-327 10000052	表採	染付磁器 皿	11.4	4.8	2.8	胎土：白		写真図版 6-32-343 20102071
-	表採	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通宝 新寛永 2.3g	写真図版 6-32-336 20080934
-	表採	銭貨 銅銭	-	径 2.35	-	-	寛永通宝 新寛永 3.1g	写真図版 6-32-337 20080935
-	表採	銭貨 銅銭	-	径 2.5	-	-	寛永通宝 新寛永 文銭 2.8g	写真図版 6-32-339 20080938・939
-	表採	銭貨 銅銭	-	径 2.65	-	-	文久永寶 3.1g	写真図版 6-32-338 20080936・937
-	表採	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	元豊通寶か 1.2g	写真図版 6-32-340 20080942
図 6-40-328 09001652	SX9001 周辺	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 2.6g 新寛永	写真図版 6-32-316 20080898
図 6-40-329 09001653	SX9001 周辺	銭貨 銅銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶 1.9g 新寛永	写真図版 6-32-317 20080899
図 6-40-330 09001654	SX9001 周辺	銭貨 銅銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶 3.2g 新寛永	写真図版 6-32-318 20080900

表6-3 9区出土遺物一覽

挿図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚			
図 6-40-331 09001656	SX9001 周辺	錢貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	昭武通寶 2.8g	写真図版 6-32-319 20080902
図 6-40-332 09001657	SX9001 周辺	錢貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寬永通寶 2.2g 新寬永	-
図 6-40-333 09001658	SX9001 周辺	錢貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寬永通寶 1.4g 新寬永	-
図 6-40-334 09001659	SX9001 周辺	錢貨 銅錢	-	径 2.35	-	-	寬永通寶 2.6g 新寬永	-
図 6-40-335 09001660	SX9001 周辺	錢貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寬永通寶 3.1g 古寬永	写真図版 6-32-320 20080906
図 6-40-336 09001661	SX9001 周辺	錢貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	寬永通寶 2.6g 新寬永	写真図版 6-32-321 20080907
図 6-40-337 09001665	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寬永通寶 2.9g 新寬永	写真図版 6-32-322 20080911
図 6-40-338 09001666	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寬永通寶 3.1g 新寬永	写真図版 6-32-323 20080912
図 6-40-339 09001667	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寬永通寶 3.3g 新寬永	写真図版 6-32-324 20080913
図 6-40-340 09001668	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寬永通寶 2.6g 古寬永	写真図版 6-32-325 20080914
図 6-40-341 09001669	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.7	-	-	文久永寶 4.0g	写真図版 6-32-326 20080915・0916
図 6-40-342 09001670	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寬永通寶 3.9g 新寬永 (文錢)	写真図版 6-32-327 20080917・918
図 6-40-343 09001671	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寬永通寶 3.1g 古寬永	写真図版 6-32-328 20080919
図 6-40-344 09001672	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.55	-	-	寬永通寶 3.4g 新寬永	写真図版 6-32-335 20080920
図 6-40-345 09001673	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寬永通寶 1.8g 新寬永 (元字錢)	写真図版 6-32-329 20080921
図 6-40-346 09001674	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寬永通寶 2.5g 新寬永	写真図版 6-32-330 20080922
図 6-40-347 09001675	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.5	-	-	寬永通寶 3.3g 古寬永	写真図版 6-32-331 20080923
図 6-40-348 09001676	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.3	-	-	寬永通寶 2.8g 新寬永	写真図版 6-32-332 20080924
図 6-40-349 09001677	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.45	-	-	寬永通寶 3.4g 新寬永	写真図版 6-32-333 20080925
図 6-40-350 09001678	SX9001 西側	錢貨 銅錢	-	径 2.25	-	-	寬永通寶 2.5g 新寬永	写真図版 6-32-334 20080926

(補遺) 6区の集石および宝篋印塔について

東畑瀬遺跡で発見された集石・宝篋印塔について報告する。集石の中央部には板石が置かれ、その上に宝篋印塔がある(図6-42)。

宝篋印塔は、総高0.61mを測り、安山岩製。相輪は、断面円形で、宝珠は扁平で請花に花卉彫出を施し、伏鉢は方柱状、柄は円形、九輪は彫出しているが4つとやや形骸化した様相を示す。笠は、延作りで扁平、外反が顕著な鰭付の隅飾突起を持つ。軒上3段、軒下2段で柄穴は円形である。軸には、何も刻まれない。基礎は上段2段である。このような相輪や笠は、吉野ヶ里町霊仙寺跡や糸島市夷巍寺無量院跡で類例が報告されているものを含め、分布が西九州に限られる特徴的なものである。この宝篋印塔は、全体の小型化、相輪九輪の形骸化、笠の扁平化、笠隅飾突起の外反という特徴から、15世紀後半～16世紀前半のものと考えられる。

なお、宝篋印塔笠の柄穴から銅銭が出土したが、これらの銅銭は全て近世以降のものであること、さらに集石の下からは近代に形成された面が確認されていることから、この集石は近代以降に現在の位置に置かれたと考えられる。

出土遺物(図6-41)

351～357は寛永通宝(新寛永)で、そのうち355と356は元字銭、357は小字銭である。



図6-41 6区集石および宝篋印塔出土遺物(1/2)

247.0m

247.0m



宝篋印塔南面

図6-42 6区集石および宝篋印塔 (1/20)

第 7 章 自然科学分析

1 東畑瀬遺跡9区から出土した人骨について

川久保善智₁・澤田純明₂、大野憲五₃、竹下直美₃、隅康二₄、埴原恒彦₅
※1.佐賀大・医・解剖人類 2.聖マリアンナ医大・医・解剖 3.佐賀大・医・法医
4.佐賀大・医・口腔外科 5.北里大・医・解剖

1) はじめに

佐賀市富士町の東畑瀬遺跡9区は肥前の戦国武将神代勝利とその一族の墓所である。勝利の墓からは人骨は検出されなかったものの、江戸時代に肥前小城藩に仕えた神代家の歴代当主とその家族の他、宗源院の住職等が埋葬された江戸～明治期の墓から土葬人骨21体、火葬人骨11体が検出された。本稿はそれらの人類学的報告である。頭蓋の計測値を表7-4、頭蓋小変異の出現状況を表7-5、四肢骨の計測値を表7-6に示す。骨の計測法はMartin and Saller (1957) と馬場 (1991) に、顔面平坦度計測はYamaguchi (1973) に従った。身長 の推定には男性人骨に対して藤井の式 (1960)、女性人骨に対して佐宗・埴原の式 (1998) を使用した。歯式は正面からみた状態を示している。歯式では萌出歯を略称で表しているが、その他の記号の意味は次の通りである。

○：歯槽解放 (死後脱落) ×：歯槽閉鎖 △：不明 (歯槽の欠損を除く) -：歯、歯槽とも欠損
その他、文中で使用した縫合の癒着程度、咬耗度の基準を以下に記す。

・縫合の癒着程度 (Broca)

- 0 全然癒合なし
- 1 ルーペでやっと癒合の存在がわかる
- 2 肉眼で分かる
- 3 破線状
- 4 消失

・咬耗度 (Martin)

- 0 無咬耗
- 1 エナメルのみ咬耗し、咬頭は明瞭であるもの
- 2 エナメル質が磨滅して各咬頭に孤立的に象牙質が現れるもの
- 3 咬合面全部の象牙質が現れるもの
- 4 咬耗が歯頸部に及ぶもの

2) 各人骨について

【ST9101 神代家4代当主利尚の義母】

遺存状態：断片化した焼骨である。白色、灰白色、黒色の小片が混在しており、白色、灰白色のものには著しい変形やひび割れがみられる。骨片の部位は頭蓋や肩甲骨、大腿骨など全身にわたる。総重量は約223gである。

年齢推定：断片化が著しく、骨からの年齢推定は困難である。

性別判定：熱による変形や収縮を考慮しても大腿骨の骨幹は細く、骨頭も小さいので、女性の可能性がある。

【ST9102 神代家4代当主利尚】

遺存状態：断片化した焼骨である。灰白色と褐色のものがあり、灰白色のものには変形やひび割れが認められる。

頭蓋冠や頬骨、上顎骨、下顎骨などの頭骨片や尺骨、寛骨、大腿骨などの四肢骨片が認められるが、1 cm²に満たない小片はほとんど含まれていないので、ある程度の大きさのものを選んで蔵骨器に入れた可能性が高い。総重量

は約101gである。

年齢推定：部分的に残存する上顎や下顎では歯槽の吸収や閉鎖が認められ、頭蓋冠には発達したクモ膜顆粒小窩がみられることから、本人骨は熟年以上だった可能性が高い。

性別判定：大腿骨の粗線が発達しており、この点は男性的だが、焼成による変形が大きく、断定は困難である。

【ST9103 神代家4代当主利尚の妻】

遺存状態：断片化した焼骨である。白色、茶褐色、黒色の小片が混在しており、灰白色のものには変形やひび割れがみられる。頭蓋冠や頬骨、上顎骨、下顎骨などの頭骨片や大白歯（象牙質のみ）、椎骨、脛骨など全身にわたる骨片が認められる。1 cm²に満たない小片がほとんど含まれていないので、ある程度の大きさのものを選んで蔵骨器に入れた可能性が高い。総重量は約62gである。

年齢推定：ラムダ縫合の内板側では一部が癒合しており、成人に達していた可能性が考えられる。下顎の切歯から犬歯までの歯槽が比較的良好に保存されているが、著しい吸収や閉鎖は認められない。本人骨の年齢は壮年以降だが、老年には達していなかったと思われる。

性別判定：保存状態が悪く、性別を判定するのは困難である。

特記事項：この遺骨は神代家4代当主利尚の妻（1606—1654）のものとされている。生年と没年から計算される彼女の年齢は40代後半だが、これは人骨からの推定年齢と矛盾しない。

【ST9104 神代家7代当主利亮の次男 宮次郎】

遺存状態：上顎左第2乳臼歯、下顎右乳犬歯、下顎左右第2乳臼歯、下顎左右第1大白歯の歯冠のみが遺存する。

-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(dm2)	-	-	-
-	-	-	(dm2)	-	dc	-	-	-	-	(dm2)	-	-	-

年齢推定：歯冠のうち下顎の右乳犬歯には明瞭な咬耗が認められるのですでに萌出していたと思われるが、第2乳臼歯は未萌出か、または萌出して間もなかった可能性が高い。下顎の第1大白歯の歯冠がある程度形成されており、これらの所見を総合すると、本人骨の年齢は2～3歳だったと推定される。

性別判定：この年齢段階での性別判定は困難である。

特記事項：この遺骨は神代家7代当主利亮の次男、宮次郎（？—1726）のものとされている。

【ST9105 神代家6代当主利庸または7代当主利亮の娘 カウ】（写真15上段）

遺存状態：保存状態は不良である。残存する骨片は大半が頭骨である。前頭骨や頭頂骨は比較的原形を保っており、下顎骨や左右の頬骨、鼻骨、上顎骨も部分的に残る。四肢骨は断片化が著しい。

M2	M1	P2	P1	C	I2	○	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2
(M3)	M2	M1	P2	○	○	○	I1	I2	C	P1	P2	○	- (M3)

年齢推定：冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合にはいずれも癒合がみられず、切歯縫合も比較的に明瞭に認められる。

下顎の第3大白歯は根の大部分が形成されているが、未だ完成していない。以上の所見から、本人骨の年齢は10代後半と推定される。

性別判定：頭蓋が小さく華奢で女性的だが、全体的に保存状態が悪く、判別が難しい。

特記事項：この遺骨は於カウ（？—1714）のものとされている。於カウは「神代物部姓系譜」では6代利庸の子となっているが、「神代先祖婦月集」や「宗源院過去帳」では7代利亮の娘と書かれている。カウの生年を死亡推

定年齢から逆算すると1690年代中頃になる。これをもとに父親候補の2人との歳の差を計算すると、6代利庸とは約30年の開きがあるが、7代利亮との歳の差は10年以下しかないと分かる。カウは6代利庸の子、7代利亮の妹だと考えた方が自然である。その他の特記事項として、上顎の第2大臼歯が両側とも矮小化していることが挙げられる。

【ST9106 神代家5代当主利実の妻】(写真1)

遺存状態：骨の保存状態は不良である。頭骨では前頭骨や蝶形骨の大部分とその周辺に欠損がみられる。四肢骨はいずれかの骨端を欠くものが多く、肋骨や椎骨の保存状態も悪い。

M2	M1	P2	P1	○	I2	×	×	○	C	×	-	-	-	-
×	×	×	×	×	C	×	×	×	C	P1	P2	M1	×	-

年齢推定：内板では矢状縫合とラムダ縫合の大部分が癒合・消失しており、外板でもこれらの縫合にはBrocaの2～3°に相当する癒合がみられる。口蓋では左の切歯縫合が若干認められるものの、正中口蓋縫合の口蓋骨部や横口蓋縫合の外側部の癒合がかなり進んでいる。上・下顎の歯槽には退縮が認められ、歯冠が残る上顎右の側切歯や第2大臼歯、下顎右犬歯には少なくともMartinの2°以上の咬耗がみられる。胸椎の椎体には骨棘の形成も認められる。以上の所見から、本人骨はかなり高齢だった可能性が高い。

性別判定：乳様突起はやや小さく、項面や外後頭隆起の発達が悪い。四肢骨も細く華奢である。以上、本人骨は女性と考えられる。

特記事項：この遺骨は神代家5代当主利実の妻（？－1698）のものとされている。

【ST9107 神代家6代当主利庸または7代当主利亮の子 鳩之助】(写真15 下段1)

遺存状態：保存状態はやや不良である。頭蓋は比較的良好に残っているが、側頭骨や後頭骨の鱗部などに劣化・欠損がみられる。四肢骨は左右の寛骨（腸骨、恥骨、坐骨が未癒合）や大腿骨、脛骨などが比較的良好に残っている。その他、頸椎や胸椎、仙椎（未癒合）、肋骨片などが認められる。

dm2	dm1	dc	di2	i1	di1	di2	dc	dm1	dm2
dm2	dm1	dc	di2	i1	di1	di2	dc	dm1	dm2

年齢推定：歯の発達段階から、本人骨の年齢は3～4歳だったと推定される。

性別判定：この年齢段階での性別判定は困難である。

特記事項：この遺骨は鳩之助（？－1750）のものとされている。鳩之助は「神代物部姓系譜」と「神代先祖帰月集」では6代利庸の子（徽外末子）になっているが、「宗源院過去帳」では7代利亮の子と書かれている。鳩之助が生まれたときにはすでに利庸は亡くなっており、一方の利亮は60歳前後なので、利亮の末子だと考えるのが妥当だと思われる。

【ST9108 神代家5代当主利実】(写真2)

遺存状態：保存状態は不良である。頭蓋は顔面や左頭頂骨とその周辺が大きく欠損しており、全体的に劣化が進んでいる。椎骨や肋骨の状態も悪い。四肢骨については大腿骨と脛骨が骨幹を中心に遺存するが、他は断片化が著しい。

M3	M2	M1	○	○	○	-	-	-	-	-	M1	M2	○
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	M2	-

年齢推定：上顎の第3大臼歯の萌出は完了しており、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。また、頭蓋冠の内板では冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合がほぼ全域にわたって癒合していることから、本人骨はかなり高齢だった可能性が高い。

性別判定：骨の遺存状態が悪く、性別を判定するのは難しいが、外後頭隆起がやや発達している点は男性的である。

特記事項：本人骨は神代家5代利実（1626－1696）のものとされている。利実は70歳前後で亡くなったとされているが、咬耗は第1大臼歯がMartinの2°、第2、第3大臼歯が1°相当で、年齢に比して弱い。計測は出来なかったが、脳頭蓋は低頭、長頭性が強いようにみえる。

【ST9109 神代家7代当主利亮の妻】（写真3）

遺存状態：保存状態は全身にわたってやや不良である。頭蓋については頬上顎部や頭蓋冠の左側が広い範囲が欠損するが、頭蓋冠の右側や後頭部、頭蓋底が比較的よく残っている。四肢骨は骨幹を中心に遺存するが、いずれも劣化が進んでいる。

M2	M1	○	○	C	I2	○	○	I2	C	P1	P2	M1	M2		
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3

年齢推定：下顎では第3大臼歯の萌出が完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の内、外板では矢状縫合の大部分に癒合がみられるものの、冠状縫合やラムダ縫合の癒合はあまり進んでいない。また、口蓋の切歯縫合はまだ明瞭に残存しており、歯の咬耗が全体に弱く、椎骨や四肢骨に骨棘などの変形がみられないことから、本人骨の年齢は壮年と推定される。

性別判定：頭蓋は全体的に華奢であり、眉弓や眉間、乳様突起、外後頭隆起の発達が弱い。また、四肢骨も細く華奢なことから女性と考えられる。

特記事項：本人骨は神代家7代利亮（1680年代後半－1765）の一人目の妻のものとされている。利亮はこの一人目の妻が1729年に亡くなった後、二人目の妻（？－1767）を迎えているので、一人目の妻は若いうちに亡くなった可能性が高い。壮年という推定年齢はそれを裏付けるように思われる。

【ST9112 神代家9代当主利経】（写真4）

遺存状態：骨の保存状態は全体的に良好だが、四肢骨の骨端に若干の欠損がみられる。墓壙内には骨の他、少量の頭髪が残っていた。

M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	○	○	M1	M2	M3
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	○	P2	M1	M2	M3

年齢推定：上・下顎とも第3大臼歯の萌出が完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨のそれぞれの骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭髪は劣化が進んでいるが、色は黒く、白髪は認められない。頭蓋冠の縫合は内板では冠状縫合と矢状縫合がほとんど消滅し、ラムダ縫合も破線状にわずかに残る程度だが、外板では部分的に癒合にとどまる（Brocaの2°程度）。口蓋では左側にのみ切歯縫合が残存し、正中口蓋縫合口蓋部の後半は癒合している。上・下顎の歯槽には若干の退縮がみられる。恥骨結合面の形状はToddのⅧである。肋軟骨には全体的に骨化がみられ、特に第1肋骨では骨化がかなり進んでいる。以上の所見から、この人骨は壮年後半から熟年前半であったと推定される。

性別判定：眉弓や眉間の発達 は弱く、頬骨弓も華奢だが、乳様突起はやや大きい。上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の殿筋粗面や粗線など、筋付着部が発達している。大坐骨切痕は狭く、妊娠痕は認められない。以上の所見から、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：この遺骨は神代家9代利経（？－1805）のものとされている。利経の歯は年齢の割に咬耗が弱い。また、複数の歯で咬合面の溝や隣接面歯頸部に軽度の齲蝕が認められる。左右の大腿骨や脛骨、左の上腕骨や撓骨、尺骨からそれぞれ推定される身長を平均すると156.2cmとなる。江戸時代の男性の平均身長は157.1cmなので（平本1972）、利経の身長は当時としては平均的であったと思われる。

【ST9114 神代家6代当主利庸の妻】（写真5）

遺存状態：骨の保存状態はやや不良である。頭蓋は比較的良く残っているが、右の頬骨弓や下顎枝、後頭骨の一部などに欠損がみられる。四肢骨では大腿骨がある程度原形をとどめているが、他は劣化・欠損がかなり進んでいる。椎骨や肋骨の保存状態も悪い。

△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△
△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△

年齢推定：蝶後頭軟骨結合や四肢骨のそれぞれの骨端が完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の縫合は内板ではラムダ縫合が全長にわたって明瞭に認められるが、冠状縫合や矢状縫合は大部分が消失している。外板でもラムダ縫合の癒合はあまり進んでいないが、冠状縫合や矢状縫合ではBrocaの2～3°相当の癒合がみられる。上・下顎の歯槽ではおそらくすべての歯が生前に脱落しており、全体に著しい退縮がみられる。切歯縫合を除く口蓋の縫合は比較的明瞭に残っているが、総合的にみると本人骨はかなり高齢であった可能性が高い。熟年後半か、老年に達していたと考えられる。

性別判定：眉弓や眉間、乳様突起の発達 は弱く、頬骨弓は華奢である。また、寛骨の大坐骨切痕のなす角度が大きいことから、本人骨は女性と考えられる。

特記事項：神代家6代当主利庸の妻（？－1744）のものとされている。左右の上腕骨、大腿骨、脛骨と左の撓骨から推定される身長を平均すると145.5cmとなる。江戸時代の女性の平均身長は145.6cmなので（平本1972）、この個体の身長は当時としては平均的であったと思われる。その他、夫の利庸には少なくとも7代当主利亮を含む6人の子供がいたとされているが、妊娠・出産経験が多いほど深くなるといわれている骨盤の妊娠痕（Igarashi 1992）がこの個体にはほとんどみられない。

【ST9115 神代家6代当主利庸】（写真6）

遺存状態：骨の保存状態は良好でほぼ全身の骨が確認できる。骨の他、少量の頭髪が残存している。

M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	○	I2	C	P1	P2	M1	M2		
M3	×	M1	P2	○	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	×	○

年齢推定：下顎の第3大臼歯の萌出が完了しており、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の内板では冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合のいずれもほぼ完全に癒合している。外板でも各縫合の癒合が進んでおり、鱗状縫合や冠状縫合の側頭部はほぼ消失し、矢状縫合やラムダ縫合も全域にわたって破線状に残るのみである。口蓋でも切歯縫合や横口蓋縫合が完全に消失している。肋骨の胸骨端では肋軟骨の骨化がかなり進んでおり（写真16－3・16－4）、胸骨では胸骨柄、胸骨体、剣状突起が一つに癒合している（写真17－5）。胸椎や腰椎には骨棘の形成がみられ、少なくとも第2と第3胸椎の椎間や第6から第11胸椎の椎間では骨棘が互いに癒合

している（写真16－5・16－6）。また、仙腸関節の癒合（写真17－4）や甲状軟骨、輪状軟骨の骨化（写真16－1・16－2）も認められる。上記の骨化現象は通常に加齢変化でも起こりうるが、本例の場合は症状が顕著であり、汎発性特発性骨増殖症（DISH）の可能性も考えられる。ただしDISHは高齢の男性に発症することが多い病気なので、何れにせよ本人骨は老年に達していた可能性が高い。

性別判定：眉弓や眉間の隆起は強くないが頭蓋は全体的に大きく、頬骨弓は太く、乳様突起や外後頭隆起が発達している。四肢骨は太く頑丈で、上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の粗線など、筋付着部がよく発達している。骨盤の恥骨下角や大坐骨切痕は狭い。以上の所見より、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：この遺骨は神代家6代利庸（1662－1738）のものとされている。利庸は70代後半で亡くなったとされているが、これは骨から推定される年齢とも矛盾しない。ただし、歯の咬耗については最も進んでいる第2大臼歯でもMartinの2°と、この年齢にしては弱い。歯槽には退縮が若干みられるものの、状態は比較的良好である。齶蝕によると思われる歯冠の欠損が上・下顎で合わせて5本認められる。左右の上腕骨と左の撓骨、大腿骨、脛骨からそれぞれ推定される身長を平均すると157.3cmとなる。江戸時代の男性の平均身長は157.1cmなので（平本1972）、利庸の身長は当時としては平均的であった。

【ST9117】（写真7）

遺存状態：全身にわたって保存状態はやや不良である。頭骨では頬上顎部や後頭鱗、右の頭頂骨やその周辺、両側の下顎枝などに欠損がみられる。椎骨や肋骨の保存状態は悪い。四肢骨は骨幹部を中心に遺存するが、いずれも劣化が進んでいる。

-	-	-	P2	P1	C	I2	○	I1	I2	C	×	×	×	M2	-
M3	×	M1	×	P1	C	I2	△	I1	I2	C	P1	P2	×	×	×

年齢推定：下顎では第3大臼歯の萌出が完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の内板では冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合がいずれもほぼ消失しており、外板でも癒合が進んでいる（Brocaの2～3°）。口蓋では切歯縫合が消失し、正中口蓋縫合や横口蓋縫合も部分的に癒合が進んでいる。歯の咬耗はBrocaの1～2°程度である。椎骨の保存状態は前述のとおり概して悪いが、椎体が原形を保つ胸椎では若干の骨棘形成が認められる。これらの所見から、本人骨の年齢は熟年以降であったと推定される。

性別判定：保存状態があまり良くないため、判定が難しい。頭骨では眉弓や眉間の発達が弱く、四肢骨では骨幹が細いといった女性的な特徴もみられるが、外後頭隆起や乳様突起、頬骨弓、下顎は発達しており、全体的には男性的である。

特記事項：下顎の右第1小臼歯に齶蝕によると思われる歯冠の欠損がみられる。また、大臼歯の咬合面にも軽度の齶蝕が認められる。咬耗の程度はMartinの1～2°であり、推定された年齢にしてはやや弱い。

【ST9118】

遺存状態：骨の保存状態は不良である。頭骨では前頭骨や頭頂骨からなる頭蓋冠の一部や、側頭骨、上顎骨、下顎の一部が遺存する。椎骨や肋骨は断片化が著しい。四肢骨は左右大腿骨の後面下部が一部残る。その他、墓室内に少量の頭髪が残っていた。

年齢推定：頭蓋冠では冠状縫合や矢状縫合が内、外板とも完全に癒合・消失している。口蓋では切歯縫合が消失している。頭髪には黒髪に混じって白髪が認められる。これらの所見から、本人骨は熟年以降であった可能性が高い。

性別判定：保存状態が悪いので性別判定は難しいが、歯が比較的小さく、下顎のオトガイ部があまり発達していない点は女性的である。

【ST9119】

遺存状態：火葬骨だと思われるが、全体的に茶褐色～黒色を呈し、変形やひび割れがほとんどみられないことから、それほど高温には曝されていない可能性がある。前頭骨の眉間周辺、右の頭頂骨や側頭骨錐体部、後頭骨の一部などの頭骨片の他、椎骨や肋骨、長管骨の一部がそれぞれ一点ずつ認められる。総重量は約39gである。

年齢推定：頭蓋冠の骨は成人に比べて薄く、前頭縫合の大部分はすでに癒合・消失しているが、後頭骨の外側部と底部の間や椎骨が未だ癒合していないことから、本人骨の年齢は4～5歳程度であったと推定される。

性別判定：この年齢での性別の判定は困難である。

【ST9121】

遺存状態：骨の保存状態は不良である。大腿骨の骨幹（左右不明）を含む四肢骨と頭蓋冠の断片が遺存する。

年齢推定：頭蓋冠では冠状縫合が内板、外板ともに広範囲で癒合しており、また内板にはクモ膜顆粒小窩の発達が見られることから、本人骨はかなり高齢だった可能性がある。

性別判定：保存状態が悪く、性別の判定は難しいが、大腿骨は骨幹が太く、男性的である。

【ST9122】（写真8）

遺存状態：骨の保存状態は全体的にやや不良だが、頭蓋は左側の頬骨弓や側頭鱗、乳様突起、下顎体、両側の下顎枝などに欠損がみられるものの、その他は比較的良く残っている。四肢骨の大半は骨端が大きく欠損しており、椎骨や肋骨も断片化が著しい。

-	M2	○	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
M3	M2	○	P2	△	C	I2	-	-	I2	C	P1	○	○	M2	M3

年齢推定：上・下顎とも第3大臼歯は萌出が完了しており、Martinの2～3°に相当する咬耗がみられることから、20歳以上の成人段階には十分達していたと考えられる。他の歯にも同程度の強い咬耗がみられる。頭蓋冠の内板では冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合がほとんど癒合・消失している。外板でも癒合がかなり進行している（Brocaの2～3°相当）。また、内板ではクモ膜顆粒小窩が発達している。口蓋では切歯縫合が完全に消失し、正中口蓋縫合や横口蓋縫合でも大部分に癒合が認められる。上・下顎の歯槽では部分的に著しい退縮がみられる。これらの所見から、本人骨は熟年後半か、老年に達していた可能性が高い。

性別判定：前頭結節が発達し、側面からみた前頭骨の輪郭は鉛直に近いが、眉弓や眉間、頬骨弓、乳様突起、外後頭隆起はよく発達している。また、四肢骨でも撓骨粗面や大腿骨の殿筋粗面、粗線などの筋付着部が全体的によく発達しており、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：前述の通り、この個体の四肢骨の筋付着部は全体的によく発達しており、脛骨には強い扁平性（横径の割に前後径が大きい）がみられる。また、この個体の鼻骨は非常に大きく、鼻骨最小幅が14.5mmと、一般的な北部九州の江戸～現代人（7mm前後）の倍以上の値を示す。

【ST9123】

遺存状態：骨の保存状態は不良である。頭蓋冠や側頭骨の錐体部、歯、四肢骨片などが認められる。歯牙については上顎の右第1小臼歯、左右第1大臼歯、右第2大臼歯、下顎の左第1大臼歯が認められるが、いずれも歯根が欠

損している。

-	(M2)	(M1)	-	(P1)	-	-	-	-	-	-	(M1)	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(M1)	-	-

年齢推定：歯の形成段階から6～7歳と思われる。

性別判定：情報が少なく、性別判定は困難である。

特記事項：右第2大臼歯は矮小化している。

【ST9124】（写真9）

遺存状態：骨の保存状態はやや不良である。頭骨では頬上顎部や前頭部周辺、後頭骨、左の乳様突起や頬骨弓などに劣化・欠損がみられる。椎骨や肋骨も一部を除いて劣化が進んでおり、四肢骨も骨端は欠くものが多い。

		M1	P2	P1		×	×		×	×	○	×	×			
○	M2	M1	P2	P1	○	I2	×		×	○	C	P1	P2	M1	M2	M3

年齢推定：下顎の第三大臼歯は萌出が完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の縫合は内板では冠状縫合の一部に癒合がみられるものの、外板ではほとんど癒合が進んでいない。また、切歯縫合は消失しているが、正中口蓋縫合にはほとんど癒合がみられない。椎骨については観察できるものが限られるが、骨棘形成などの変形は認められない。上下顎とも歯槽の退縮や閉鎖が著しい。大臼歯にはMartinの2～3°に相当するかなり強い咬耗がみられる。これらの所見を総合すると、本人骨の年齢は壮年後半から熟年前半と思われる。

性別判定：前頭部は丸みを帯びるが、眉間はやや発達しており、乳様突起も大きい。また、四肢骨でも上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の殿筋粗面や粗線などの筋付着部がよく発達していることから、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：墓壙から銅製の絡子環が出土しているので、被葬者は曹洞宗の僧侶であった可能性がある。右脛骨最大長をもとに藤井の式（1960）で算出したこの個体の身長は158.2cmである。本例の埋葬時期は江戸から明治にかけてという他は詳細が不明だが、江戸時代の平均身長は157.1cm、近代（明治期）は155.3cmであり（平本1972）、この個体の身長は何れにしても平均的であったと思われる。

【ST9125】

遺存状態：焼骨である。前頭骨や頭頂骨、下顎骨、歯、頸椎が認められる。骨片には白色ないし灰白色を呈し、変形やひび割れが著しいものがあり、これらはかなりの高温を受けた可能性があるが、歯牙片については大部分が黒色を呈し、エナメル質が残るものもあることから、それほど高温には曝されなかったと思われる。1cm²に満たない小片があまり含まれていないので、ある程度の大きさのものを選んで蔵骨器に入れた可能性が高い。総重量は約77gである。

-	-	M1?	P2?	-	-	-	-	-	-	-	M1?	-	-
-	M2	M1	-	-	-	-	-	-	I2?	-	-	M2	-

年齢推定：矢状縫合では内板がほとんど癒合している。下顎の歯槽は閉鎖や退縮が著しい。大臼歯にはMartinの2～3°に相当する咬耗がみられる。以上の所見から、熟年以降だと思われる。

性別判定：下顎は小さく、華奢であり、女性的にみえるが、歯槽の閉鎖や退縮、熱による収縮などの影響による可能性があり、断定できない。

特記事項：歯牙片のうち、下顎左側切歯だけは熱を受けた痕跡が無く、対応する歯槽も完全に閉じていることから、別個体のものが混入している可能性がある。

【ST9127】(写真 10)

遺存状態：骨の全体的な保存状態はやや不良である。頭骨は右側の頬骨弓や側頭鱗、乳様突起、下顎枝、後頭骨の項平面などに欠損がみられるが、その他は比較的よく残っている。椎骨は第6～12胸椎が比較的よく残るが、その他は断片的である。四肢骨は左上腕骨と左右の大腿骨や脛骨がおおよそ原形をとどめているが、いずれも劣化が進んでいる。

	○	M1	P2	P1	C	I2	○		I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	
△	×	M1	○	P1	C	I2	○		○	I2	C	P1	P2	×	×	△

年齢推定：蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端が完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の内板では縫合の癒合がかなり進んでおり、ラムダ縫合の下部がわずかに残るのみだが、外板では冠状縫合の側頭部に癒合がみられるものの、矢状縫合やラムダ縫合は全域にわたって比較的明瞭に認められる（Brocaの2°程度）。口蓋では切歯縫合や正中口蓋縫合口蓋部が癒合・消失している。上・下顎には歯槽の退縮がみられ、とくに大臼歯部において顕著である。第1肋骨はほぼ全体が骨化している。胸椎の椎体には骨棘の形成がみられる。以上の所見から、この人骨は少なくとも熟年には達していたと推定される。

性別判定：眉弓や眉間の発達はまだあまり良くないが、頬骨弓は太く、乳様突起や外後頭隆起が発達している。四肢骨でも上腕骨の三角筋粗面が発達していることから、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：歯の咬耗は最も進んでいる第2大臼歯でもMartinの2°程度しかなく、熟年としては弱い。

【SX9128】

遺存状態：焼骨である。四肢骨の一部と思われる骨片が一点みとめられる。重量は約1gである。

年齢推定：情報が少なく、年齢推定は困難である。

性別判定：情報が少なく、性別判定は困難である。

【ST9130】(写真 11)

遺存状態：全体的な保存状態はやや良好である。頭骨は下顎枝にいくらか欠損がみられるものの、その他はほぼ完全に残る。四肢骨では骨端部の欠損が多くみられる。

○	M2	M1	P2	P1	○	○	○		○	I2	C	P1	○	M1	M2	○
M3	M2	M1	P2	×	○	○	I1		×	○	△	○	P2	M1	○	M3

年齢推定：上・下顎とも第3大臼歯の萌出は完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の縫合は内板では冠状縫合と矢状縫合がほとんど癒合・消失しており、ラムダ縫合の一部がわずかに残る。一方、外板では冠状縫合に部分的な癒合が認められるものの、矢状縫合やラムダ縫合ではあまり進んでいない（Brocaの2°程度）。口蓋では切歯縫合が消失し、正中口蓋縫合口蓋部や横口蓋縫合が全域で癒合している。上・下顎の歯槽では退縮が進んでいる。第1、第2大臼歯の咬耗はともにMartinの2°に相当する。第1肋軟骨ではかなり骨化が進んでおり、胸椎には骨棘の形成が認められる。以上の所見から、この人骨の年齢は熟年に達していたと推定される。

性別判定：眉弓や眉間、乳様突起が発達しており、頬骨弓も太い。四肢骨では殿筋粗面や大腿骨の粗線などの筋付

着部がやや発達している。また、大坐骨切痕は狭く、妊娠痕は認められない。以上、本例は男性と考えられる。

特記事項：頭骨や左の上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨、脛骨、腓骨がST9130の墓壙と切り合いがみられるST9131の墓壙内から検出された。これはST9131墓壙が掘られた際、先に埋葬されていたST9130人骨の一部が誤って掘りだされ、ST9131内に再び埋め戻されたものと考えられている。ST9130人骨とST9131人骨は色や骨質が異なり、容易に判別が可能であった。その他、左の第11胸椎と肋骨との間の靭帯（放射状肋骨頭靭帯）に著しい骨化がみられた（写真17－3）。

【ST9131 宗源院 17 世住職】（写真 12）

遺存状態：骨の遺存状態は非常に良好である。

M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3

年齢推定：上・下顎とも第3大臼歯の萌出はみられないが、蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端が完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたのは明らかである。頭蓋冠の縫合は内板では冠状縫合が消失し、矢状縫合やラムダ縫合もわずかに残る程度（Brocaの3°）であり、外板でも矢状縫合の全域と冠状縫合やラムダ縫合の一部が消失し、その他の部位でもBrocaの2～3°相当の癒合が認められる。口蓋でも横口蓋縫合や正中口蓋縫合口蓋部の癒合・消失がかなり進んでいる。肋軟骨には骨化がみられ、第1肋軟骨はほぼ全体が骨化している。甲状軟骨も側板全体が骨化しており、これらの所見はいずれも本人骨が高齢であったことを示している。しかし歯槽は比較的良好な状態であり、切歯縫合が一部残存しており、また椎骨では骨棘などの変形がそれほど進行していないことから、熟年後半から老年前期であったと推定される。

性別判定：眉弓や眉間の発達がよく、頬骨弓も太く、乳様突起の発達は中程度である。四肢骨では上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の殿筋粗面や粗線などの筋付着部が発達している。大坐骨切痕は狭く、妊娠痕は認められない。以上の所見から、本人骨は男性と考えられる。

特記事項：この遺骨は宗源院17世住職（？－1901）のものとされている。歯の咬耗は年齢の割に弱く、現存する歯に明瞭な齶蝕は認められない。この個体には上下顎の複数の歯にまたがる異常な摩耗が認められる（写真18－1・18－2）。上顎の右側では犬歯から第1大臼歯にかけて、上顎の左側では側切歯から第1大臼歯にかけて、頬・唇側面に溝状の摩耗が認められる。左右それぞれで溝が直線的に並んでいる。摩耗は後方の歯では歯頸部の高さにあり、前方（近心）では歯冠中央や咬合面にみられる。摩耗の深さがほとんどの歯で象牙質にまで達しており、特に左の側切歯や犬歯、第1小臼歯のものが深い。この特殊な摩耗は左側の方が右に比べて強いので、右利きの人物が歯ブラシをするような動作で何かしらの道具を使って擦ったために形成されたように思える。下顎では上顎に比べて摩耗がみられる範囲は狭いが、頬・唇側面だけでなく咬合面にまで及んでおり、咬耗との境界が不明瞭になっている。何の目的で、どのような道具を使用したかなど不明な点が多いが、溝の表面が滑らかなことから、長期的な習慣によって形成されたように思われる。この住職が生きていた江戸末期から明治にかけては口腔ケアの様式が大きく変化した。江戸時代には口腔ケアの道具として一般的に房楊枝と塩または琢砂（房州砂、伊万里土など）に香りを付けた歯磨き粉が使われていたが、明治時代に入ると今日のような西洋式の歯磨きが徐々に普及していった（谷津1976、長谷川1993）。そのため、どのような道具を使用していたのかを特定するのは困難だが、何れにしても摩耗がここまで進むまで特定の行為を継続していた事は尋常ではない。

この個体には歯の異常摩耗の他にも、左右の前腕や下腿、左の大腿の骨に骨膜炎の痕跡が認められる（写真18－3・18－4・18－5・18－6）。これらの骨では骨幹がおおよそ左右対称に肥厚している。また、左大腿骨の骨幹近位外側には外傷性骨化性筋炎を疑わせる異所性骨化が認められる（写真18－7）。その他、左第6肋骨には

骨折の痕が認められる。藤井の式（1960）を用いて左右の上腕骨、橈骨、脛骨、右尺骨、左大腿骨からそれぞれ推定した身長は平均は151.3cmであった。近代人（明治期）の平均身長は155.3cmであり（平本1972）、この個体は平均よりやや身長が低い。

【ST9134】

遺存状態：上顎右小臼歯、上顎左第2大臼歯、下顎右第1、第2小臼歯の4本が残るが、いずれも歯根が崩壊している。火葬か土葬かという判断は難しいが、これらの歯にはエナメル質が残っていることから、それほど高温に曝されてはいないと思われる。

-	-	-	P2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	M2	-
-	-	-	P2?	P1?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

年齢推定：いずれの歯にもMartinの2°以上の咬耗がみられ、熟年以降であった可能性が高い。

性別判定：保存状態が悪く情報も少ないため、性別の判定は困難である。

【ST9136 宗源院15世住職の妻】（写真13）

遺存状態：骨の保存状態は良好である。

M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2
M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2

年齢推定：蝶後頭軟骨結合や四肢骨の骨端が完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の縫合は内板、外板とも癒合があまり進んでいない。口蓋の縫合も明瞭に残る。上・下顎の歯槽に退縮はほとんどみられない。恥骨結合面の形状はToddのⅢ～Ⅳ（Ubelaker 1978）に当てはまる。椎骨の変形や肋軟骨の骨化はみられない。歯の咬耗は弱い（Martinの1°程度）。以上の所見から、この人骨は壮年前半であったと推定される。

性別判定：眉弓や眉間の発達が弱く、頬骨弓は華奢であり、乳様突起も小さい。また、寛骨の大坐骨切痕のなす角度は大きく、妊娠痕が認められるので、本人骨は女性と考えられる。

特記事項：この遺骨は宗源院15世住職の妻（？-1879）のものとされている。大臼歯の咬合面の溝には軽度の齲蝕が認められる。左右の上腕骨、大腿骨、脛骨と左橈骨から推定される身長を平均すると145.7cmとなる。近代（明治期）の女性の平均身長は144.8cmなので（平本1972）、当時としては平均的な身長であった。

【ST9138】（写真14）

遺存状態：寛骨や仙骨、四肢骨の骨端部などに欠損がみられるが、全体的な保存状態は良好である。

M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3

年齢推定：上・下顎とも第3大臼歯の萌出が完了しており、蝶後頭軟骨結合や四肢骨のそれぞれの骨端も完全に癒合していることから、20歳以上の成人段階に達していたと考えられる。頭蓋冠の内板では冠状縫合の側頭部が消失しているものの、矢状縫合やラムダ縫合はまだあまり癒合が進んでいない。外板でも冠状縫合の側頭部では癒合が進んでいるが、矢状縫合やラムダ縫合にはほとんど癒合が認められない。歯槽には顕著な退縮は認められず、大臼歯の咬耗もBrocaの1°程度である。一方、口蓋の縫合は切歯縫合が消失し、正中口蓋縫合の口蓋骨部の大部分

が癒合している。恥骨結合面の形状はToddのⅦである（Ubelaker 1978）。以上の所見から、この人骨は壮年後半であったと推定される。

性別判定：眉弓や乳様突起、外後頭隆起が発達しており、頬骨弓も太い。四肢骨も全体的に太く、骨端がよく発達している。また、寛骨の保存状態はやや不良だが、残存部位で見える限り、大坐骨切痕は狭く、妊娠痕は認められない。本人骨は男性と考えられる。

特記事項：右上腕骨に顆上骨折によると思われる内反変形がみられる（写真17－2）。この骨折は4～11歳の男児に多くみられ、肘関節進展位で手を開いて倒れたような場合に起こりやすい。本例では完全に治癒しており、また、幼少年期に受傷したものとすれば、骨折がある右の上腕骨の方が左より発達していることから、運動障害などの後遺症は軽微だったと考えられる。左上腕骨、右大腿骨、左右脛骨から藤井の式（1960）で推定される身長は平均は151.0cmである。埋葬時期の詳細は不明だが、江戸時代の平均身長は157.1cm、近代（明治期）は155.3cmであり（平本1972）、何れにしてもこの個体の身長は平均よりやや低い。

【ST9141】

遺存状態：焼骨である。骨は灰白色～白色を呈し、変形やひび割れが認められることから、少なくとも部分的にはかなりの高温で焼かれたものと考えられる。前頭骨や頭頂骨、後頭骨、上顎骨などの頭骨片の他、胸椎、肋骨、胸骨など上半身の骨に偏っている。1 cm²に満たない小片があまり含まれていないので、ある程度の大きさのものを選んで蔵骨器に入れた可能性が高い。総重量は約84gである。

年齢推定：胸椎の椎体に骨棘の形成は認められないが、ラムダ縫合では内板が広い範囲で癒合しており、上顎骨では歯槽の閉鎖や退縮が著しいので、熟年以上だった可能性が高い。

性別判定：保存状態が悪く、性別判定は困難である。

【ST9143】（写真 15 下段 2）

遺存状態：骨の保存状態はやや不良である。頭骨は顔面や頭蓋冠の前半の残りはよいものの、頭頂骨の後半から断片化している。体幹骨や四肢骨は原形を保っているものが多い。

dm2	dm1	dc	di2	○	di1	di2	○	dm1	dm2
dm2	dm1	dc	di2	di1	di1	di2	dc	dm1	dm2

年齢推定：歯の発達段階からこの個体は4歳程度だったと推定される。

性別判定：この年齢段階での性別判定は困難である。

【ST9144】（写真 15 下段 3）

遺存状態：骨の保存状態はやや不良である。頭骨は顔面や頭蓋底は比較的良好に残っているものの、頭蓋冠の大部分が断片化している。椎骨はよく残っているが、肋骨や四肢骨は骨端を欠くものが多い。

	dc	di2	○	○	di2	○	
dm1	○	○	○	○	○	dc	dm1

年齢推定：歯の発達段階からこの個体は1歳半から2歳程度だったと推定される。

性別判定：この年齢段階での性別判定は困難である。

【ST9145】

遺存状態：上顎左大白歯（おそらく第1大白歯）のみが遺存する。

年齢推定：歯冠にはMartinの2～3°に相当する咬耗がみられることから、熟年以上だった可能性がある。

性別判定：情報量が少なく、性別の判定は困難である。

【ST9146】

遺存状態：焼骨である。骨は断片化しており、白色ないし灰白色から黒褐色まで様々な色を呈する。一部には変形やひび割れが認められることから、少なくとも部分的にはかなりの高温で焼かれたものと考えられる。頭骨や椎骨、肋骨、四肢骨など断片的ながら、全身各部にわたる骨片が認められる。総重量は約978gと、この遺跡から出土した他の焼骨に比べると重い、特に部位の重複はみられないので1個体分だと考えてよいと思われる。

年齢推定：頭頂骨の断片をみると、矢状縫合後半の内板側は完全に癒合・消失しており、外板でもBrocaの2°に相当する癒合が認められることから、成人には達していたと考えられる。

性別判定：焼骨なのでいくらか収縮している可能性があるにもかかわらず、橈骨や大腿骨、脛骨などの四肢骨の骨幹が太いので、本人骨は男性の可能性が高い。

【ST9147】

遺存状態：骨は断片化しており、白色ないし灰白色から黒色を呈する。変形やひび割れが著しいものがあり、部位によってはかなりの高温で焼かれたものと考えられる。骨片の大きさは様々で、前頭骨、側頭骨、頭頂骨、後頭骨、下顎骨、上顎骨、歯牙片などの頭骨片の他、椎骨、肋骨、四肢骨片なども認められる。総重量は約174gである。

年齢推定：ラムダ縫合では内板の癒合が認められ、上顎、下顎とも歯槽突起に吸収が認められるので、少なくとも熟年には達していたと思われる。

性別判定：熱で収縮しているにもかかわらず、全体的に大きく、後頭骨の筋付着部が非常によく発達していることから、男性の可能性が高い。

【ST9148】

遺存状態：胎児または新生児の骨と思われる。骨は原形をある程度とどめてはいるものの、白色ないし灰白色を呈しており、変形やひび割れもみられることから、かなりの高熱を受けている可能性がある。総重量は約48gしかないが、ほぼ全身の骨が含まれているようにみえる。

年齢推定：頭蓋冠や椎骨、四肢骨の骨端は何れもまだ癒合していない。周産期の人骨と比べ、大腿骨や脛骨のサイズが熱による収縮を考慮してもなお小さいことから、本人骨は胎児（未熟児）だと思われる。

性別判定：この年齢段階での性別判定は困難である。

3) 神代家人骨の頭蓋形態

東畑瀬遺跡9区から出土した神代家人骨の頭蓋形態の特徴を明らかにするため、保存状態が良い6代当主利庸（ST9115 写真6）と9代当主利経（ST9112 写真4）の頭蓋を計測し、関東、近畿、北部九州の江戸時代人や現代人、徳川将軍家、長岡藩主牧野家、福岡藩家老久世家のデータと比較した。

使用した比較資料の詳細を表7-1に示す。図7-1～7-4は頭蓋長幅示数、コルマン上顔示数、眼窩示数、鼻示数を構成する計測項目をそれぞれX軸とY軸にとった散布図である。

頭蓋最大長と最大幅（図7-1）では神代家の2個体は長頭傾向が強く、特に6代利庸は過長頭に分類された。

表7-1 比較資料

標本名	身分	データの計測者または参考文献
関東江戸（池之端）	庶民	川久保
関東現代（千葉大）	庶民	川久保
近畿江戸	庶民	長岡朋人, 熊倉博雄 (2002) 旧吉原墓地（大阪）から出土した近世人頭蓋の形態的特徴. 人類学雑誌 109: 85-100
近畿現代	庶民	宮本博人 (1924) 現代日本人人骨の人類学的研究. 人類学雑誌 39: 307-451
北部九州江戸（天福寺）	庶民	川久保
北部九州現代（九大）	庶民	川久保、重松
徳川家	将軍家	鈴木 尚 他 (1967) 増上寺徳川将軍と遺品・遺体. 東京大学出版会
牧野家	越後長岡藩主	加藤 征 他 (1986) 長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書, 東京都港区教育委員会
久世家	福岡藩家老	小野 千吉郎 他 (1957) 久世家歴代の頭骨に就いて. 人類学研究 4: 111-141
天徳寺	武家	加藤 征 他 (1991) 江戸時代人骨の形質に関する人類学的研究. 平成2年度科学研究費補助金一般研究B研究成果報告
関東中世（鎌倉材木座）	不明	鈴木 尚 他 (1956) 鎌倉市材木座発見の中世遺跡とその人骨. 日本人類学会編, 岩波書店

一方、牧野家は短頭傾向が強く、神代家とは対照的であった。徳川家、久世家については重心が中頭に属するものの、徳川家の方がやや短頭側に位置している。これらの一族にはそれぞれに特徴的な分布がみられるが、いずれも重心は江戸庶民や現代人から大きく外れており、共通の方向性は認められなかった。各地域の江戸庶民と現代人の重心は地域ごとにまとまっており、北部九州の江戸庶民と現代人は神代家ほどではないが、長頭側に位置した。頬骨弓幅と上顔高（図7-2）では、久世家は頬骨弓幅のデータがないので比較できなかったが、徳川家、牧野家が全体的に狭上顔側に位置した。神代家の2個体も狭上顔傾向が強く、特に6代利庸は過狭上頭に分類された。これは徳川家慶（12代）や家茂（14代）といった後期の将軍に匹敵するレベルである。この傾向は鼻幅と鼻高の関係（図7-3）においても認められた。一方、久世家の鼻幅や鼻高は江戸の庶民や現代人とあまり大きく違わなかった。眼窩幅と眼窩高（図7-4）については、徳川家や牧野家の個体が眼窩の幅も高さも非常に大きな値を示したが、神代家2個体の眼窩サイズは江戸の庶民や現代人と大差がなかった。眼窩示数では久世家、牧野家の重心はやや高眼窩側に位置したが、神代家は徳川家とともに中眼窩に属した。

日本列島住民の頭蓋形態における時代変化については、関東地方の人骨を対象とした研究から、中世から現代にかけて短頭化や狭顔化が進行してきたことが指摘されている。一方、江戸時代の将軍家や大名家などの上層階級の人びとには、当時の庶民のみならず現代人よりもさらに狭顔化が著しい「貴族形質」と呼ばれる特徴がみられることが報告されている（鈴木1985）。神代家6代利庸と9代利経にみられる狭顔傾向は徳川将軍家の人びとに匹敵するレベルに達していた。徳川将軍の狭顔傾向については、彼らの歯に咬耗がほとんどみられないことから、咀嚼量の減少との関わりが示唆されている。利庸と利経の歯も年齢の割に咬耗の程度が弱く、咀嚼量が非常に少なかったと可能性が高い。一方、神代家のもう一つの特徴である長頭性については、北部九州の江戸時代庶民や現代人も同様の傾向を示すことから、地域的な特徴が強く表れている可能性がある。

4) 東畑瀬遺跡9区人骨のエナメル質減形成について（写真17-1）

東畑瀬遺跡9区人骨群の発育期の健康状態を検討するため、エナメル質減形成の出現状況を調査した。エナメル質減形成とは、歯冠の形成期（乳・幼児期）に何らかの障害的因子が作用することで発生したエナメル質の量的欠損で、多くの場合、歯冠をとりまくように横走する線状または小窩状の形成不全として認められる。減形成の原因として、全身的な代謝ストレス（栄養障害、疾患、内分泌障害など）、顔面部の局所的な外傷または炎症、および遺伝的因子が知られているが、減形成の出現状況から原因がこれらのどれなのかを推定することが可能である

表 7-2 エナメル質減形成の個体別出現状況

人骨番号	上顎中切歯	上顎犬歯	下顎中切歯	下顎犬歯
ST9117	y (1)	/	/	/
ST9109	/	n	/	y (2)
ST9112	y (1)	y (1)	n	y (1)
ST9115	n	n	n	n
ST9118	n	/	/	n
ST9122	y (1)	y (1)	/	/
ST9124	/	/	/	y (2)
ST9127	/	y (1)	/	y (2)
ST9130	/	/	n	y (1)
ST9131	y (3)	/	y (1)	y (1)
ST9136	y (3)	y (3)	y (2)	y (4)
ST9138	y (2)	/	n	y (1)

y: 減形成が出現した歯 (括弧内は減形成の数)

n: 減形成がみられない歯

/: 歯が残存していない、もしくはエナメル質の表面が観察

表 7-3 東畑瀬遺跡 9 区と江戸一橋遺跡の減形成出現率および出現率の差の検定結果

	東畑瀬遺跡 9 区	江戸一橋遺跡	有意水準
上顎中切歯	75.0% (6/8)	57.8% (26/45)	p=0.455
上顎犬歯	66.7% (4/6)	73.7% (42/57)	p=0.657
下顎中切歯	33.3% (2/6)	64.3% (18/28)	p=0.202
下顎犬歯	80.0% (8/10)	83.6% (46/55)	p=0.673

括弧内は減形成の出現した歯の数 / 観察した歯の数

(Goodman and Rose 1990)。いったん生じたエナメル質減形成は自然に修復されないため、歯冠形成期の成長障害を調査するストレス・マーカーとして有用である。

資料と方法

上・下顎の中切歯と犬歯を対象とし、原則として右側の歯を観察した。咬耗度がプロカの 3 度を超える歯と、歯石の付着が著しい歯は除外した。観察に際し、十分に明るい光源 (LED ライト BF-425、Panasonic) を用い、肉眼で確認できる線状・溝状・小窩状の減形成をカウントした。観察者間誤差を防ぐため、減形成のデータ採取は同一人物 (澤田) が行なった。

結果と考察

中切歯ないし犬歯を観察できた 12 個体中、10 個体においていずれかの歯にエナメル質減形成が認められた (表 7-2)。これらの減形成は同歯種の左右両側に対称的に出現しているものが多いことから、局所的な障害ではなく、何らかの全身的代謝ストレスによって生じたと考えられる。東畑瀬遺跡 9 区人骨群が乳・幼児期にストレスを受容しやすい環境にあったことが伺える。

日本の縄文時代から近代までの減形成出現状況を調査した山本 (1988) は、江戸時代の府中一橋人骨群における減形成出現率が、各時代の集団のなかで最も高かったことを報告している。東畑瀬遺跡 9 区人骨群の減形成出現率を江戸一橋人骨群 (澤田・平田 2009) と比較検討したところ、上顎中切歯と下顎犬歯における減形成出現率は江戸一橋より高い値を示した。フィッシャーの直接確率法では、どの歯種においても両集団の間に有意差が検出されなかった (表 7-3)。江戸一橋人骨群は比較的低い階層の人々で構成されており (森本ほか 1985)、また、同人骨群の高い減形成出現率の理由として肉食忌避の思想による栄養的に乏しい食生活や、人口過密に由来する非衛生的で疾患にかかりやすい生活環境が想定されているが (山本 1988)、武家・僧侶を主体とする東畑瀬遺跡 9 区人骨群の減形成出現率が高かったことは、当時の上流社会における生活環境を考える上で興味深い結果といえる。

謝辞

本分析の遂行にあたって便宜を図っていただいた全国神代ゆかりの会の方々、宗源院代表役員久世童龍氏、古川末由先生はじめ宗源院総代会の方々に謹んで感謝の意を表する。佐賀大学医学部救急医学講座中島厚士先生、同大歯科口腔外科学講座鐫木正紀氏には人骨の整理作業を通して多大な協力をいただいた。ここに感謝の意を表する。

文献

- Igarashi Y. (1992) Pregnancy Bony Imprint on Japanese Female Pelvis and Its Relation to Pregnancy Experience. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 100 (3) : 311-319
- Goodman A.H. and Rose J.C. (1990) Assessment of systemic physiological perturbations from dental enamel hypoplasias and associated histological structures. *Yearbook of Physical Anthropology*, 33 : 59-110
- 佐宗亜衣子・埴原恒彦 (1998) 日本女性の新しい身長推定式. *人類学雑誌*, 106 (1) : 55-66
- 澤田純明・平田和明 (2009) エナメル質減形成の出現状況の時代変化と形成年齢について. 第114回日本解剖学会・全国学術集会発表
- 鈴木 尚 (1985) 骨は語る 徳川将軍・大名家の人びと. 東京大学出版, 東京
- 瀬田季茂・吉野峰生 (1990) 白骨死体の鑑定. 令文社, 東京
- 長谷川正康 (1993) 歯の風俗誌. 時空出版, 東京
- 馬場悠男 (1991) 人骨計測法. *人類学講座別巻1—人体計測法*. 雄山閣, 東京
- 平本嘉助 (1972) 縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化. *人類学雑誌*, 80 : 221-236
- 藤井 明 (1960) 四肢長骨の長さと言長の関係について. *順天堂大学体育学部紀要*, 3 : 49-61
- Martin R. and Saller K. (1957) *Lehrbuch der Anthropologie Band. I*. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart
- 森本岩太郎・小片岳彦・平本嘉助・吉田俊爾 (1985) 人骨. 江戸：都立一橋高校地点発掘調査報告, 都立一橋高校内遺跡調査団, 東京 : 522-546
- Yamaguchi B. (1973) Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. *Bulletin of the National Science Museum*, 16 : 161-171
- 谷津三雄 (1976) 歯学史資料図鑑. 医歯薬出版, 東京
- Ubelaker D. (1978) *Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis, Interpretation*. Aldine, Chicago
- 山本美代子 (1988) 日本古人骨永久歯のエナメル質減形成. *人類学雑誌*, 96 : 417-433

表 7-4 頭蓋計測値 (mm)

計測項目		ST9106	ST9108	ST9109	ST9112	ST9114	ST9115	ST9117	ST9122	ST9124	ST9127	ST9130	ST9131	ST9136	ST9138
		5代 利実妻	5代 利実	7代 利亮前妻	9代 利経	6代 利庸妻	6代 利庸	♂ ?	♂	♂	♂	♂	17世 住職	15世 住職妻	♂
1	脳頭蓋最大長	-	(187)	168	179	170	193	178	190	(187)	183	181	180	177	184
1d	ナジオン脳頭蓋長	-	-	166	177	170	191	176	189	(185)	178	177	177	175	180
5	頭蓋底長	-	-	95	99	93	100	99	104	101	102	101	96	95	100
8	脳頭蓋最大幅	-	-	(132)	132	133	133	-	144	145	142	134	135	139	133
8/1	頭蓋長幅示数	-	-	78.6	73.7	78.2	68.9	-	75.8	77.5	77.6	74.0	75.0	78.5	72.3
9	最小前頭幅	-	(103)	-	97	93	97	(100)	95	(96)	95	96	91	95	89
10	最大前頭幅	-	-	-	111	107	119	114	118	(118)	119	110	114	114	111
11	両耳幅	115	-	(121)	123	120	120	(125)	126	-	(127)	125	(116)	123	128
11b	ラディクラーレ幅	113	-	118	120	120	120	-	123	-	-	123	114	121	127
12	最大後頭幅	110	-	104	103	(103)	113	110	115	(110)	108	103	113	110	106
17	バジオン・ブレグマ高	-	(126)	131	132	130	134	135	140	143	139	131	135	134	135
17/1	頭蓋長高示数	-	67.4	78.0	73.7	76.5	69.4	75.8	73.7	76.5	76.0	72.4	75.0	75.7	73.4
17/8	頭蓋幅高示数	-	-	99.2	100.0	97.7	100.8	-	97.2	98.6	97.9	97.8	100.0	96.4	101.5
23	脳頭蓋水平周	-	-	-	511	483	542	-	539	532	516	518	510	510	513
24	横弧長	-	-	-	302	309	312	311	332	-	323	303	314	312	310
25	正中矢状弧長	-	-	354	378	-	398	366	404	392	375	372	378	371	378
26	正中前頭弧長	-	-	119	126	117	127	121	141	135	135	134	127	127	132
27	正中頭頂弧長	(132)	-	114	123	123	130	128	138	138	116	112	143	128	124
28	正中後頭弧長	-	-	121	129	-	139	117	125	118	124	126	109	115	123
29	正中前頭弦長	-	-	103	110	104	111	107	122	119	116	114	111	112	114
30	正中頭頂弦長	(118)	-	104	108	110	118	114	123	122	104	102	125	113	110
31	正中後頭弦長	-	-	101	105	-	108	96	99	100	98	99	94	97	101
40	顔長	-	-	-	100	-	100	-	(109)	-	93	(98)	98	92	100
43	上顔幅	-	-	-	101	100	107	(106)	107	-	104	109	102	101	(101)
45	頬骨弓幅	-	-	-	126	(121)	128	-	(133)	-	-	135	126	127	133
46	中顔幅	-	-	-	94	(87)	103	-	-	-	95	104	92	98	95
48	上顔高	-	-	(69)	75	-	83	-	80	-	71	(72)	77	67	68
48/45	コルマン上顔示数	-	-	-	59.5	-	64.8	-	60.2	-	-	53.3	61.1	52.8	51.1
48/46	ウィルヒョウ上顔示数	-	-	-	79.8	-	80.6	-	-	-	74.7	69.2	83.7	68.4	71.6
49a	眼窩間幅	-	-	16r	19	18	28	21	21	19	18	24	16	23	18
51	眼窩幅	-	-	(41)r	41	42	44	43	43	(41)r	45	45	43	41	42
51a	眼窩幅	-	-	39r	40	40	39	42	42	(39)r	43	39	42	36	40
52	眼窩高	-	-	-	36	(35)	35	(35)	34	-	37	32	34	33	33
52/51	眼窩示数	-	-	-	87.8	83.3	79.5	81.4	79.1	-	82.2	71.1	79.1	80.5	78.6
54	鼻幅	(25)	-	-	21	23	25	24	27	(25)	26	28	27	23	25
55	鼻高	-	-	(49)	56	48	59	56	54	(55)	53	52	55	51	51
54/55	鼻示数	-	-	-	37.5	47.9	42.4	42.9	50.0	45.5	49.1	53.8	49.1	45.1	49.0
60	上顎歯槽突起長	-	-	-	54	-	53	-	-	-	49	53	53	48	54
61	上顎歯槽突起幅	-	-	-	61	-	68	-	(65)	-	60	(68)	65	64	62
61/60	上顎歯槽突起示数	-	-	-	113.0	-	128.3	-	-	-	122.4	128.3	122.6	133.3	114.8
65	下顎関節突起幅	-	-	-	113	-	122	-	-	-	-	-	113	(122)	(118)
66	下顎角幅	-	-	-	97	-	91	-	-	-	-	-	102	93	(98)
69	オトガイ高	-	-	(30)	(38)	-	39	-	-	-	-	38	34	30	(31)
69(3)	下顎体厚	-	-	-	10	11	12	12	(14)r	12	13	13	11	14	13
70	下顎枝高	-	-	-	55	(56)	63	-	-	-	-	59	(59)	50	60
71	下顎枝幅	-	-	(34)r	32	-	36	-	-	-	-	34	29	32	35
71/70	下顎枝示数	-	-	-	58.2	-	57.1	-	-	-	-	57.6	49.2	64.0	58.3
顔面平坦度															
	前頭骨弦長	-	-	-	94.9	94.7	101.5	101.2	100.9	-	98.9	101.4	96.6	94.2	94.9
	前頭骨垂線長	-	-	-	15.6	17.3	17.4	16.3	20.5	-	15.6	16.1	15.1	17.4	15.1
	前頭骨平坦示数	-	-	-	16.4	18.3	17.1	16.1	20.3	-	15.8	15.9	15.6	18.5	15.9
	鼻骨弦長	-	-	8.0	9.4	8.8	7.6	9.7	14.5	4.8	5.6	7.9	5.6	7.8	4.0
	鼻骨垂線長	-	-	1.8	3.4	0.9	1.2	2.8	5.5	1.2	1.8	2.5	1.5	1.1	2.0
	鼻骨平坦示数	-	-	22.5	36.2	10.2	15.8	28.9	37.9	25.0	32.1	31.6	26.8	14.1	50.0
	頬上顎部弦長	-	-	-	94.9	-	105.0	-	(104.7)	-	(90.8)	101.7	93.9	97.4	(95.4)
	頬上顎部垂線長	-	-	-	26.5	-	26.4	-	(27.3)	-	20.1	23.3	22.8	23.6	(19.7)
	頬上顎部平坦示数	-	-	-	27.9	-	25.1	-	26.1	-	22.1	22.9	24.3	24.2	20.6

() 推定値 r 右側を計測

表7-5 頭蓋形態小変異

観察項目	ST9106 5代 利実妻		ST9108 5代 利実		ST9109 7代 利亮前妻		ST9112 9代 利経		ST9114 6代 利康妻		ST9115 6代 利康		ST9117 ♂?		ST9118 ?		ST9122 ♂		ST9124 ♂		ST9127 ♂		ST9130 ♂		ST9131 17世 住藏		ST9136 15世 住藏妻		ST9138 ♂	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R
前頭縫合	(/)	(/)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
眼窩上神経溝	(/)	(/)	(/)	(/)	(-)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(/)	(-)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
眼窩上孔	(/)	(/)	(/)	(/)	(-)	(/)	(-)	(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(/)	(/)	(/)	(/)	(+)	(+)	(/)	(/)	(-)	(-)	(+)	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
ラムダム骨	(-)	(/)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
横後頭縫合痕跡 (10 mm以上)	(-)	(-)	(/)	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
アステリオン骨	(-)	(-)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(+)	(-)	(-)
後頭乳突縫合骨	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(-)	(-)	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(-)
頭頂切痕骨	(-)	(-)	(/)	(-)	(-)	(/)	(-)	(-)	(+)	(+)	(-)	(-)	(/)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)
順管開存	(+)	(/)	(-)	(/)	(-)	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(+)	(+)	(+)	(/)	(/)	(+)	(-)	(+)	(+)	(+)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)
前顆結節	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
傍顆突起	(/)	(/)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(/)	(/)	(/)	(/)	(/)	(/)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
舌下神経管二分	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)
フシケ孔	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
卵円孔形成不全	(-)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
ヴェサリウス孔	(/)	(/)	(/)	(/)	(-)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)	(±)	(±)	(±)	(+)	(+)
翼棘孔	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
内側口蓋管	(-)	(/)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
外耳道骨腫	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
横顔骨縫合痕跡 (5 mm以上)	(/)	(-)	(/)	(/)	(/)	(/)	(-)	(+)	(/)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(/)	(/)	(-)	(/)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(-)	(+)	(+)
頸静脈孔二分	(-)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(+)	(-)	(+)	(-)	(-)	(+)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
矢状洞溝左折	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(+)	(+)	(±)	(±)	(-)	(±)	(±)	(±)	(±)	(±)	(±)
床状突起間骨橋	(/)	(/)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
顎舌骨筋神経溝骨橋	(-)	(/)	(/)	(/)	(-)	(/)	(-)	(-)	(/)	(-)	(-)	(-)	(/)	(-)	(/)	(/)	(-)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
下顎隆起	(-)	(/)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(/)	(/)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

十有 一無 ±中間 /欠損により判断不能

+有 一無 ±中間 /欠損により判断不能

表 7-6 四肢骨計測値 (mm)

計測項目	ST9106 5代利実妻		ST9109 7代利亮前妻		ST9112 9代利経		ST9114 6代利康妻		ST9115 6代利康		ST9117 ♂?		ST9122 ♂		ST9124 ♂		ST9127 ♂		ST9130 ♂		ST9131 17世住職		ST9136 15世住職妻		ST9138 ♂		
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	
[鎖骨]																											
1 鎖骨最大長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4 中央垂直径	-	(9)	-	-	148 (141)	-	-	-	-	(133)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	125	-	126 (122)	136 (131)	-	-	-
5 中央矢状径	-	(12)	-	-	9 10	-	-	-	10	-	-	-	-	-	-	-	-	(10)	-	(12)	(11)	12 13	10 11	12 (13)	-	-	-
4/5 中央断面示数	-	-	-	-	13 13	-	-	-	12	-	-	-	-	-	-	-	-	(13)	-	(14)	(15)	12 11	9 10	11 (12)	-	-	-
6 中央周	-	(33)	-	-	69.2 76.9	-	-	-	83.3	-	-	-	-	-	-	-	-	(76.9)	-	(85.7)	(73.3)	100.0 118.2	111.1 110.0	109.1 108.3	-	-	-
[上腕骨]																											
1 上腕骨最大長	-	-	-	-	36 38	-	-	-	36	-	-	-	-	-	-	-	-	(40)	-	(41)	(42)	38 39	32 34	38 41	-	-	-
5 中央最大径	-	-	-	-	289	-	-	-	289 283	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(281)	280 (284)	(270) 270	(270) 284 *	-	-	-
6 中央最小径	-	-	-	-	22 (22)	-	-	-	21 21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(21)	21 21	20 21	20 21	20 (21)	-	-	-
6/5 中央断面示数	-	-	-	-	15 (16)	-	-	-	14 14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(17)	16 17	16 15	15 17 (18)	-	-	-	
7 骨体最小周	-	-	-	-	68.2 (72.7)	-	-	-	66.7 66.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(81.0)	76.2 81.0	80.0 71.4	85.0 (86)	-	-	-	
[桡骨]																											
1 桡骨最大長	-	-	-	-	61 (61)	-	-	-	57 55	-	-	51	-	62	-	61 *	-	-	-	59	-	56 58	59 60	-	63	-	-
3 骨体最小周	-	-	-	-	222	-	-	-	226	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	203 206	(205)	-	-	-	-	
4 骨体横径	36	-	-	-	36 37	-	-	-	38 35	-	-	-	-	44	-	-	-	-	-	38 40	41 44 *	38 38	41 44	-	-	-	
5 骨体矢状径	17	-	-	-	14 15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15 17 *	14 15	14 16	16 16	-	-	
5/4 骨体断面示数	58.8	-	-	-	11 11	-	-	-	16 16	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12 13 *	10 10	10 11	12 12	-	-	-
[尺骨]																											
1 尺骨最大長	-	-	-	-	78.6 73.3	-	-	-	11 10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	80.0 76.5 *	71.4 66.7	78.6 75.0	-	-	-	-
3 骨体最小周	-	-	-	-	232	-	-	-	35 35	-	-	-	-	38	-	-	-	-	-	-	220	-	-	-	-	-	-
11 骨体矢状径	9	-	-	-	13 13	-	-	-	13 13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13 14	14 *	15 *	13 13	12 13	15 14	-	-
12 骨体横径	13	-	-	-	15 16	-	-	-	15 15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13 14	18 *	15 15	15 14	-	-	-	-
11/12 骨体断面示数	69.2	-	-	-	86.7 81.3	-	-	-	86.7 86.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0 100.0	77.8 * 83.3 *	86.7 86.7	80.0 92.9	-	-	-	-
[大腿骨]																											
1 大腿骨最大長	-	-	-	-	412 (408)	-	-	-	425	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	397	-	388 392	-	(395)	-	-
6 骨体中央矢状径	23 (21)	-	-	-	29 28	-	-	-	28 28	-	-	-	-	29	-	30	-	(25)	-	25	24 24	25 25	27 26	26 26	-	-	-
7 骨体中央横径	22 (22)	-	-	-	24 25	-	-	-	24 23	-	-	-	-	28	-	24	-	(23)	-	25	23 22	26 26	26 26	26 26	-	-	-
6/7 中央断面示数	104.6 (95.5)	-	-	-	120.8 112.0	-	-	-	116.7 121.7	-	-	-	-	103.6	-	125.0	-	(108.7)	-	100.0	104.3 109.1	96.2 96.2	103.9 100.0	-	-	-	-
8 骨体中央周	71 (70)	-	-	-	82 83	-	-	-	82 82	-	-	-	-	-	-	83	-	(76)	-	78	76 76	81 80	78 80	-	-	-	-
[脛骨]																											
1 脛骨全長	-	-	-	-	339 338	-	-	-	357	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	310 310	319 318	312 312	312 312	-	-	-
1a 脛骨最大長	-	-	-	-	343 344	-	-	-	363	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(315)	314 322	321 317	317 318	-	-	-
8 中央最大矢状径	-	-	-	-	25 25	-	-	-	27 (28)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	30 *	31 *	30 28	26 28	28 28	-	-
9 中央横径	-	-	-	-	19 19	-	-	-	20 (20)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21 *	22 *	21 21	21 21	-	-	-
9/8 中央断面示数	-	-	-	-	76.0 76.0	-	-	-	74.1 (71.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	70 *	71 *	70.0 75.0	80.8 75.0	-	-	-
8a 栄養孔位最大径	-	-	-	-	31	-	-	-	30 31	-	-	-	-	35	-	-	-	-	-	(28)	34 *	37 *	32 31	29 30	30 30	-	-
9a 栄養孔位横径	-	-	-	-	23	-	-	-	24 23	-	-	-	-	26	-	-	-	-	-	(20)	23 *	24 *	24 23	24 24	25 25	-	-
10 骨体中央周	-	-	-	-	71 71	-	-	-	74 74	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	79 *	85 *	79 77	75 77	77 77	-	-
10b 骨体最小周	67	-	-	-	68 71	-	-	-	66 70	-	-	-	-	73	-	-	-	-	-	61	73 *	80 *	70 73	73 73	-	-	-
[腓骨]																											
1 腓骨最大長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	314	-	-
2 中央最大径	-	-	-	-	(11) (14)	-	-	-	(16)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14 *	15 *	(15) 15	12 15	15 15	-	-
3 中央最小径	-	-	-	-	(10) (9)	-	-	-	(11)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11 *	12 *	(10) 9	11 10	10 10	-	-
3/2 中央断面示数	-	-	-	-	(90.9) (64.3)	-	-	-	(68.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	78.6 *	80.0 *	(66.7) 60.0	91.7 66.7	-	-	-
4 中央周	-	-	-	-	(34) (39)	-	-	-	(45)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	41 *	45 *	42 42	38 41	-	-	-

() 推定値 * 計測点に傷病変による骨変化が認められる

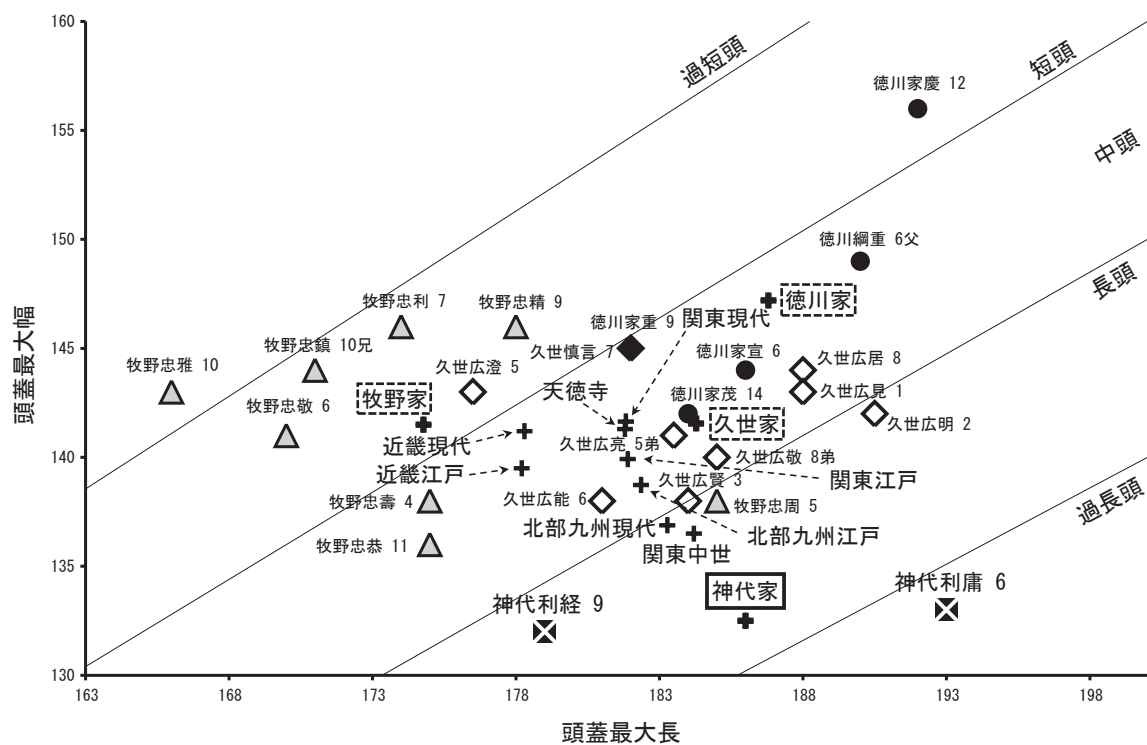


図7-1 頭蓋最大長と最大幅 (頭蓋長幅指数)

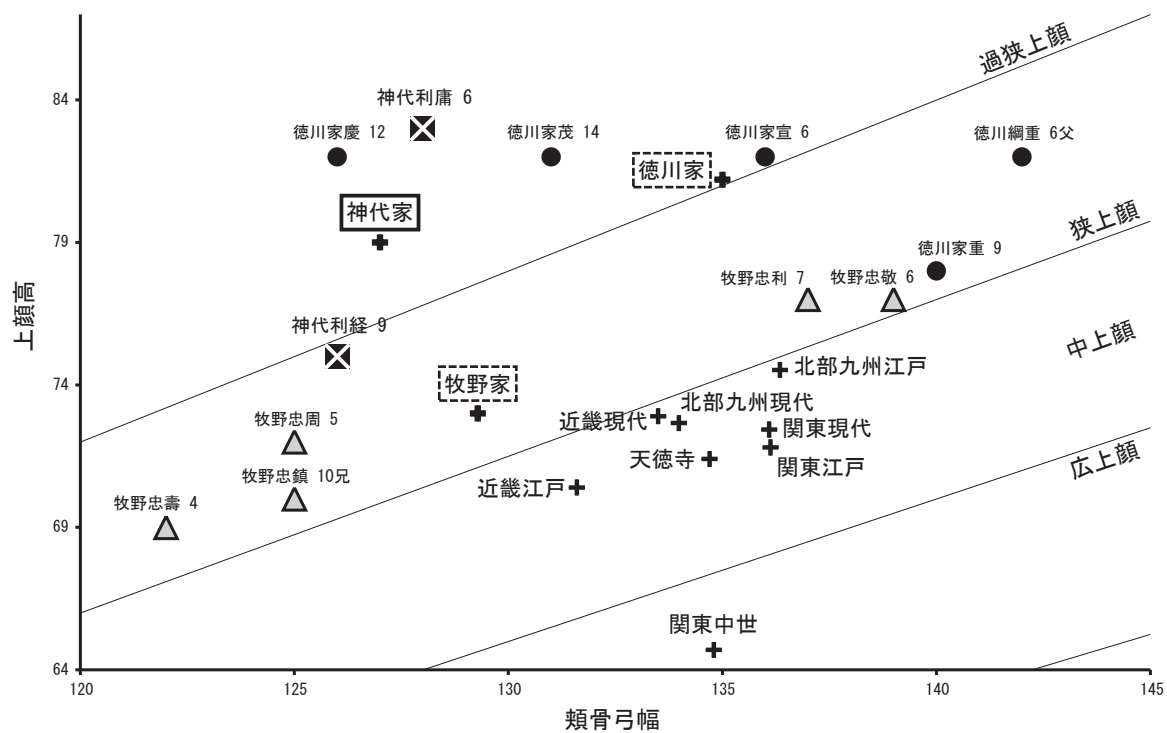


図7-2 頬骨弓幅と上顔高 (コルマン上顔示数)

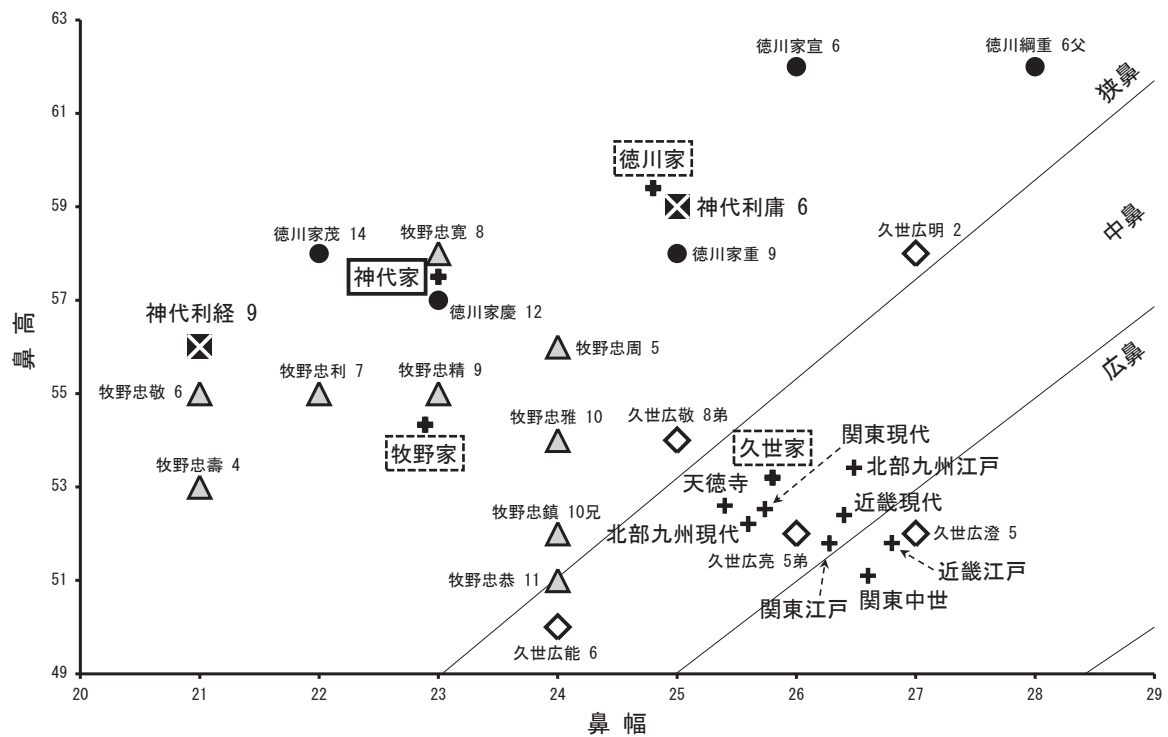


図7-3 鼻幅と鼻高(鼻示数)

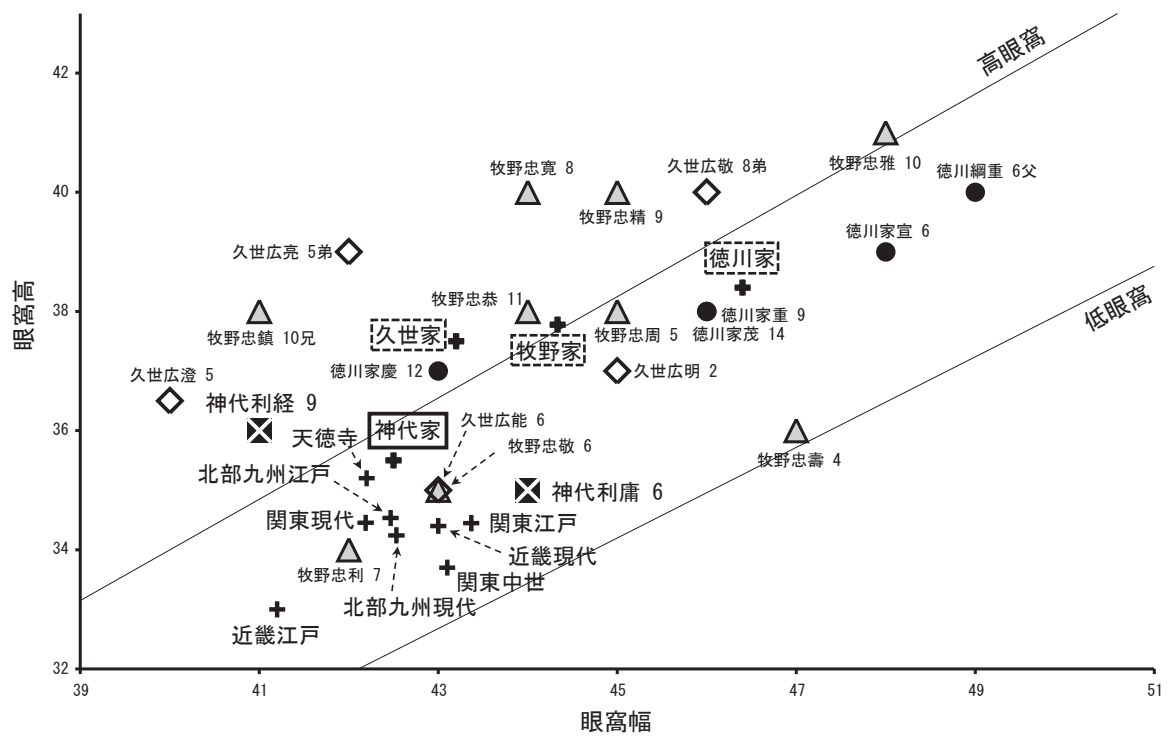


図7-4 眼窩幅と眼窩高(眼窩指数)

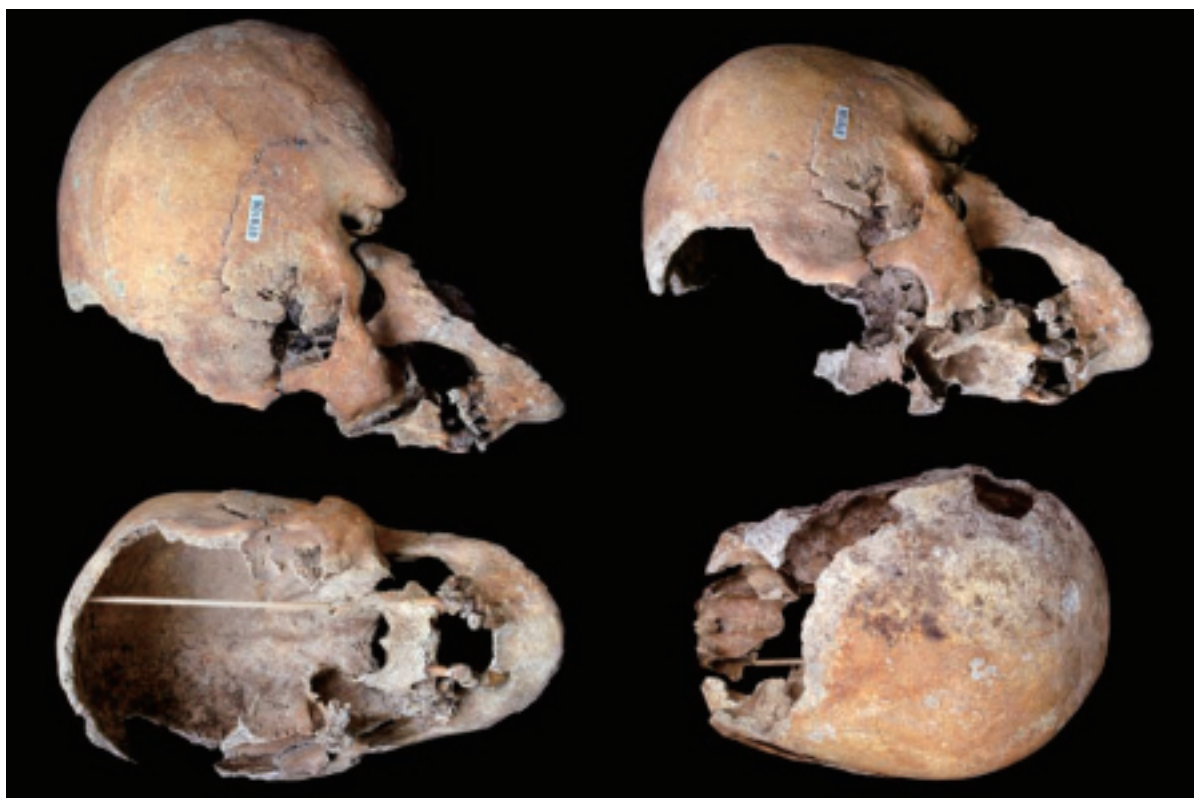


写真1 ST9106

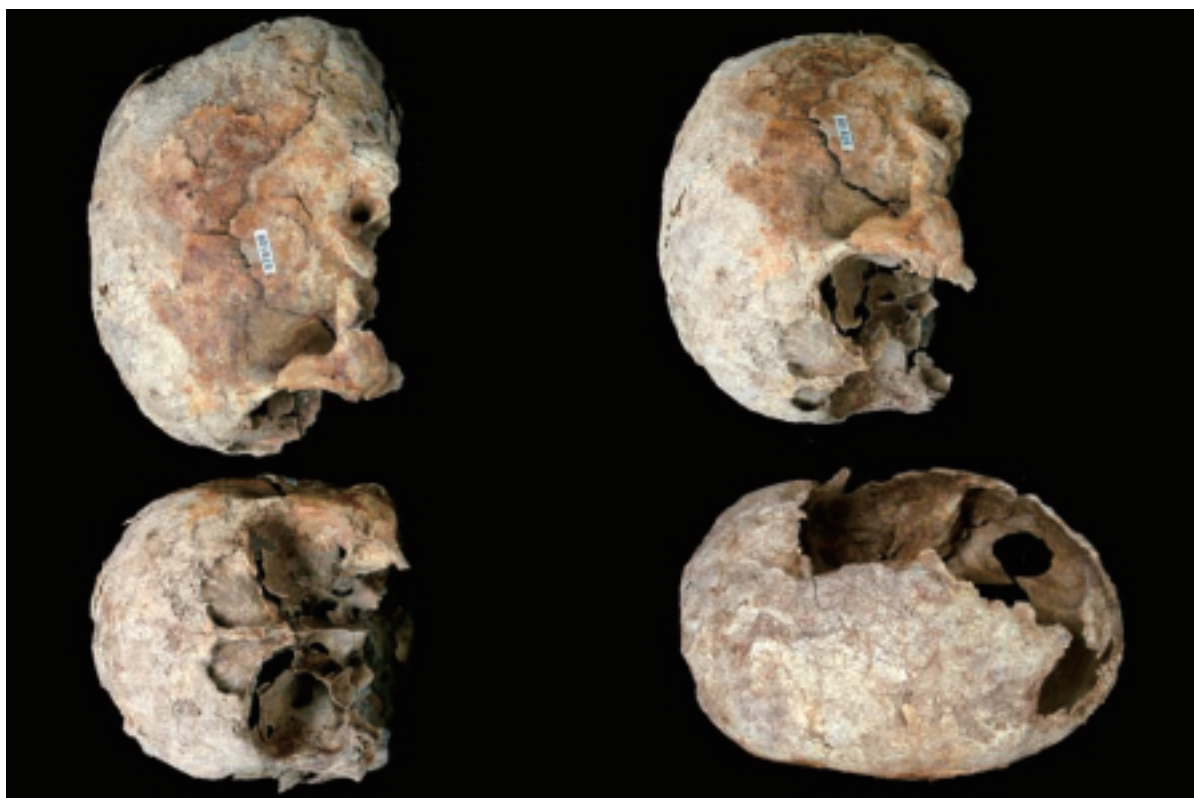


写真2 ST9108

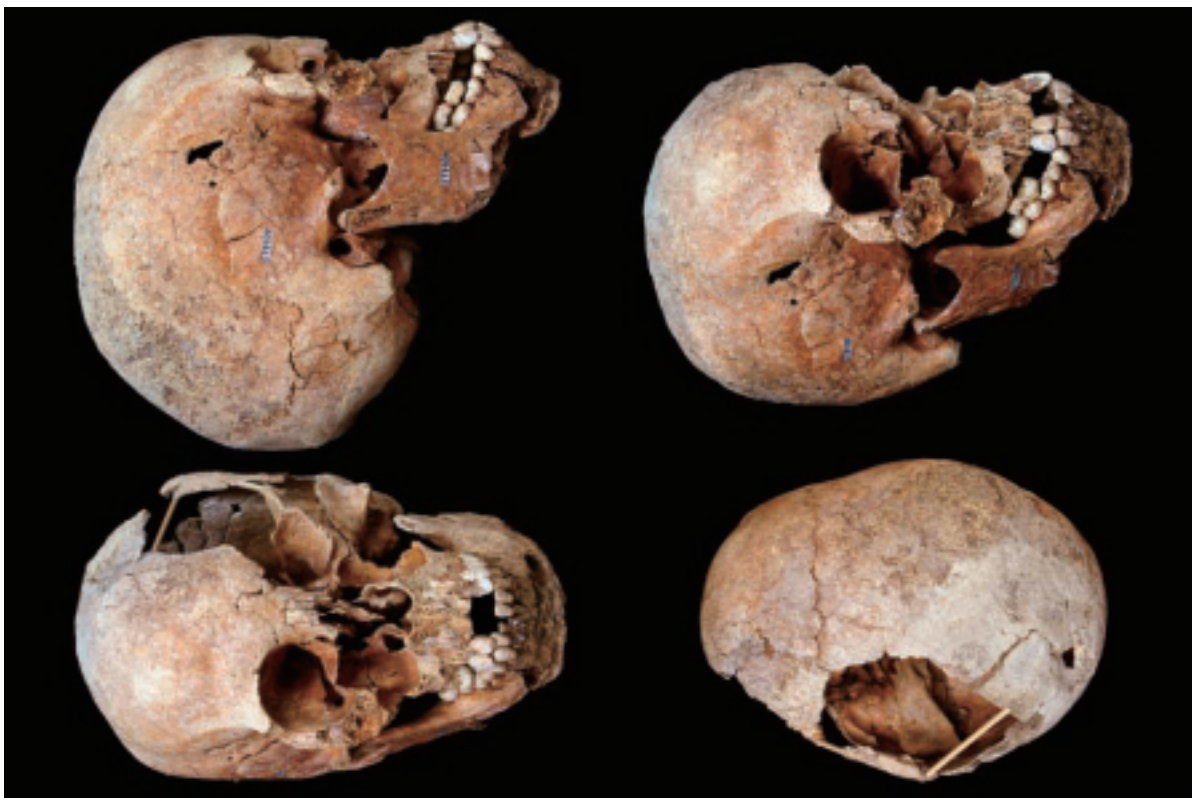


写真3 ST9109



写真4 ST9112

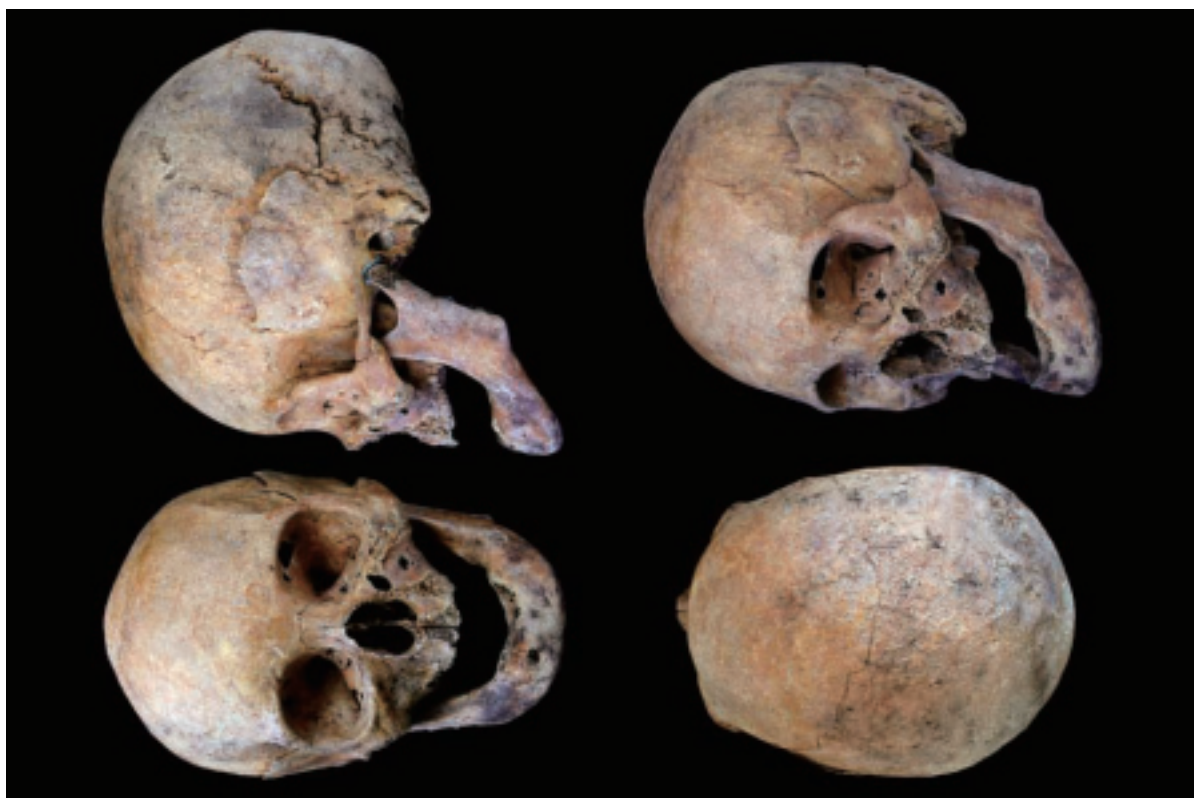


写真5 ST9114



写真6 ST9115

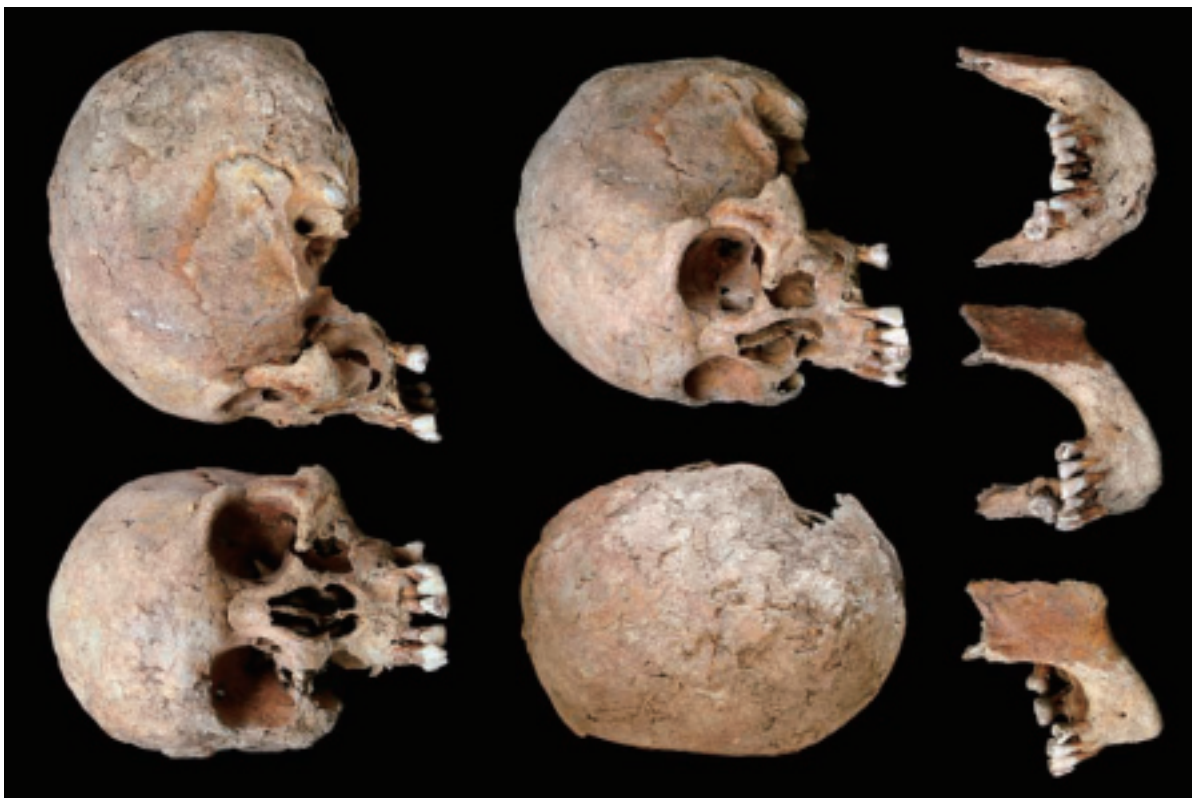


写真7 ST9117



写真8 ST9122

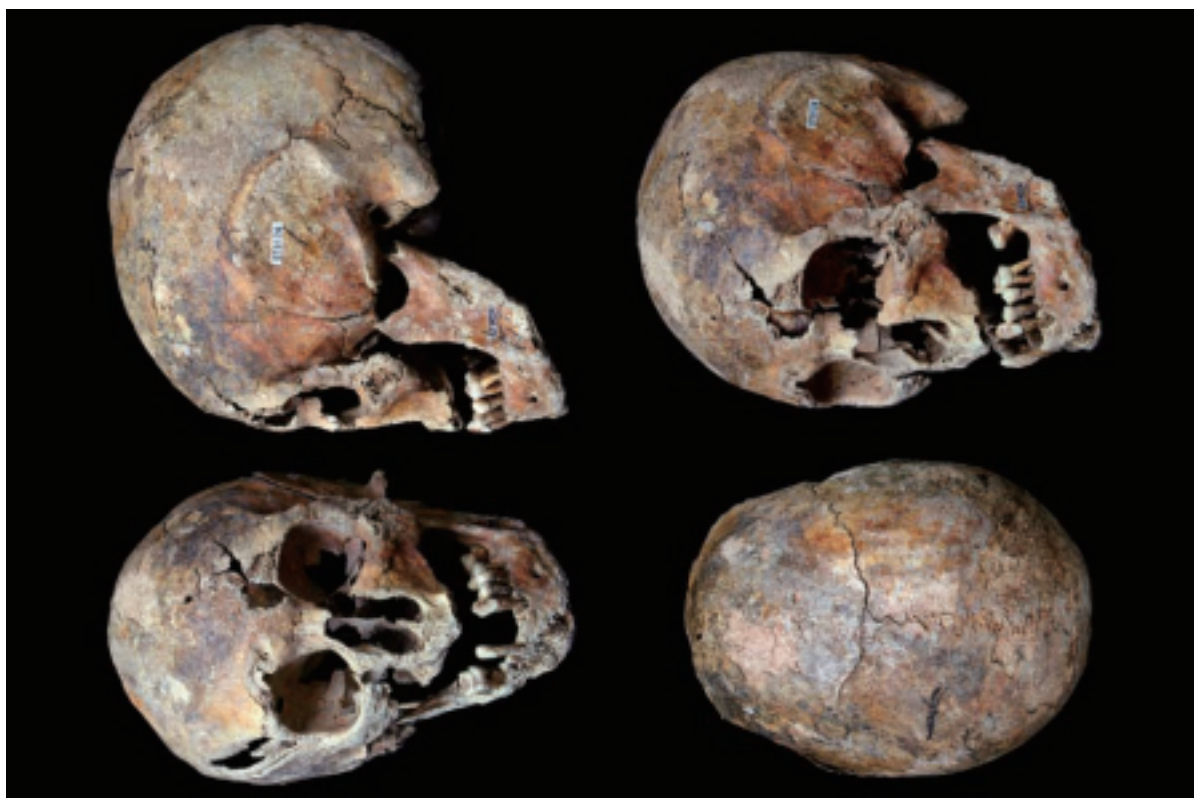


写真9 ST9124



写真10 ST9127

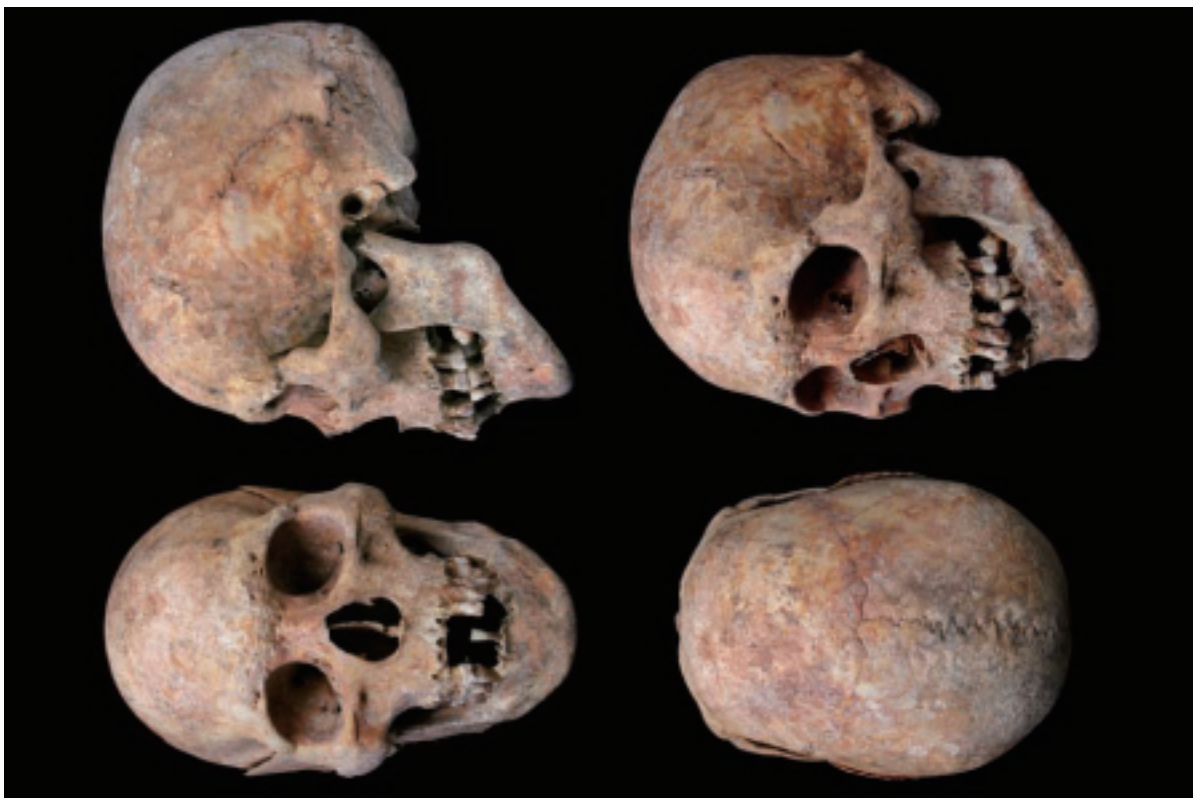


写真 11 ST9130



写真 12 ST9131



写真13 ST9136



写真14 ST9138



写真 15 上段 :ST9105 下段 :1.ST9107 2.ST9143 3.ST9144

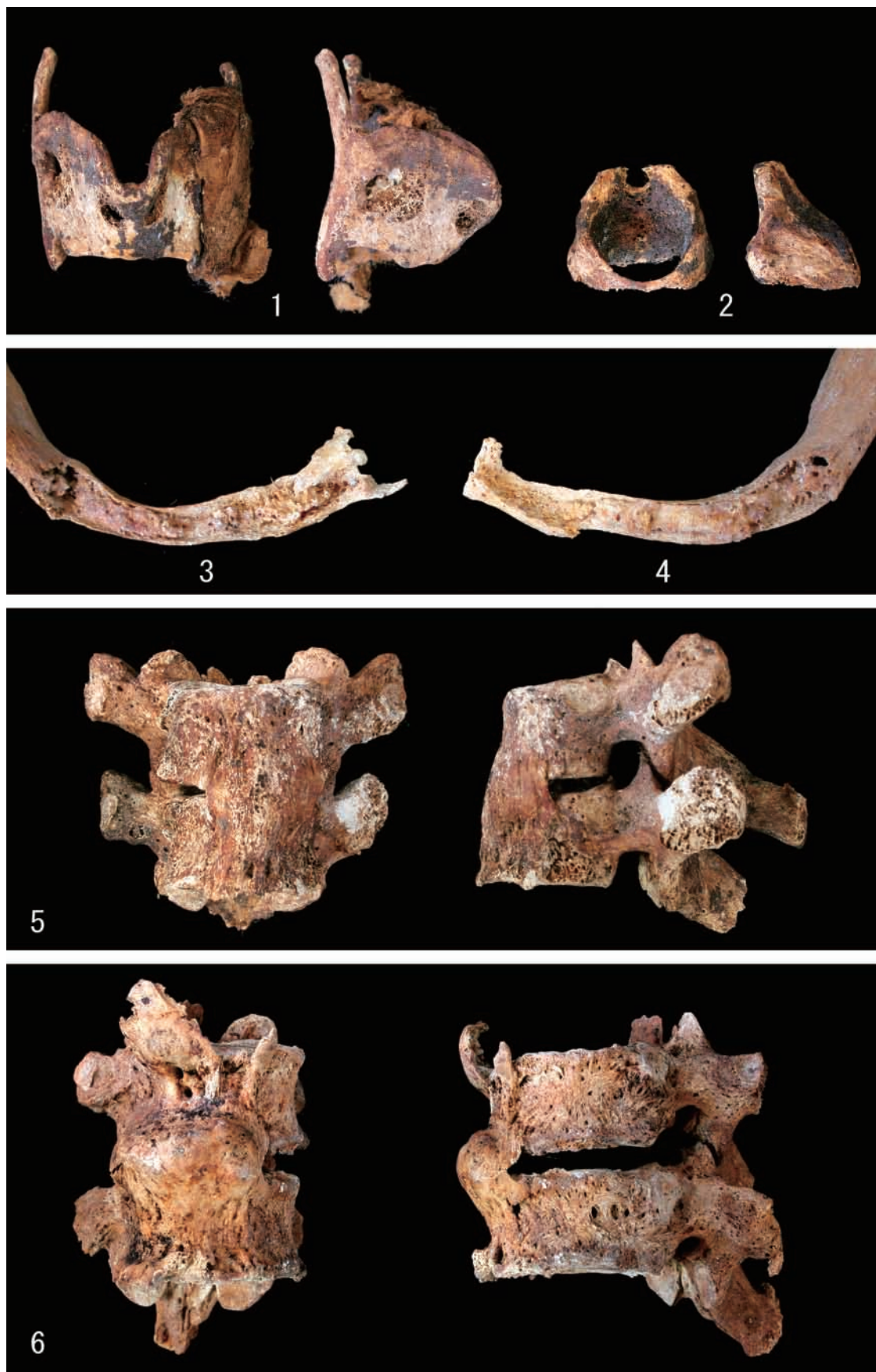


写真 16 病变 1



写真 17 病变 2



写真 18 病变 3

2 神代家墓所から出土した人骨資料の炭素・窒素同位体比と鉛濃度の分析

東京大学大学院新領域創成科学研究科

米田 稔・内藤裕一・覚張隆史

1) はじめに

神代家墓所から出土した人骨資料について、残存するコラーゲンを抽出し、その炭素・窒素同位体比を測定し、当時の食生態について検討を行った。また、骨のハイドロキシアパタイトに含まれている鉛濃度を測定し、江戸時代に深刻な環境汚染が発生していた可能性が指摘されている鉛汚染について検討したので、現在までに得られている所見について報告する。

2) 資料と方法

資料は、川久保善智博士（佐賀大学）によって形態学的に部位同定された資料を提供頂いた（表7-7）。次の方法にしたがってコラーゲンを抽出し、炭素・窒素安定同位体比分析に供した(Yoneda et al. 2002)。約0.2~0.5 gの骨片を純水中で超音波洗浄した後、0.2mol/Lの水酸化ナトリウム溶液に12時間浸けて、フミン酸やフルボ酸などの土壌有機物を除去して、乾燥後に粉碎する。この粉末試料をセルロース膜に封入し、1 mol/Lの塩酸と穏やかに反応させて、骨の無機分画ハイドロキシアパタイトを溶解した。セルロース膜は、分子量14,000ダルトン以下の分子を透過する半透膜であり、コラーゲン（約30万ダルトン）は透過できないが、比較的小さな分子量を持つ土壌有機物は透過する。これによって、酸やアルカリに溶解しない土壌有機物（ヒューミン）もある程度除去することができる。次に、残存した有機物を純水中で90℃に加熱することでコラーゲンのみを熱変性によって可溶化し、外部から滲入した土壌有機物とコラーゲンを遠心分離によって分離した。このように得られた溶液をガラスフィルター（Wattman GF/F）でろ過した後、凍結乾燥して、抽出物を「ゼラチン」と呼び、分析に供した。

上記の方法で抽出されたゼラチンから約0.25mgを分取して、炭素・窒素安定同位体比分析に供した。同位体比測定には、元素分析計（EA：Carlo Erba NA1500）で試料を燃焼し、生成された二酸化炭素および窒素を連続フロー型安定同位体比質量分析器（IRMS：Finnigan MAT 252）で測定するシステム（EA-IRMS）を使用した。通常の測定精度は炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ 値）で0.1‰程度、窒素同位体比（ $\delta^{15}\text{N}$ 値）で0.25‰程度である。元素分析計では同時に炭素と窒素の含有量を測定しており、炭素と窒素の含有量、C/N比を基準として、抽出されたコラーゲンの保存状態と汚染状況を検討する。なお、安定同位体比は、それぞれの絶対値ではわずかな違いしかないので、国際的な標準物質との偏差を千分率（‰）として表記する。炭素ではベレムナイトの化石（PDB）を基準とし、窒素では大気中の窒素（AIR）を基準としている。

鉛分析は、0.1 g程度の骨粉を採取し、硝酸で分解した。分解は、シリコン容器内に密閉した状態で、オーブン内で140℃、3時間加熱することで行った。分解溶液を約1万倍に希釈して、結合誘導プラズマ質量分析装置（ICP-MS）で、鉛濃度を測定した。

3) 分析結果と考察

炭素・窒素同位体比の分析結果を表7-8に示す。抽出されたゼラチンに含まれている炭素と窒素の元素数の比（C/N比）をみると、ST9118とST9121、ST9144の3個体が高い値を示している。生体のコラーゲンが示すC/N比は2.9から3.6の範囲なので、この3個体のゼラチンは、土壌有機物などの汚染を受けているか、コラーゲン成分が変質している可能性が考えられるので、炭素・窒素同位体の分析結果を分析不能（ND）とした。残りの個体については、ゼラチンは保存状態の良いコラーゲンから形成されており、生前の食生活が炭素・窒素同位体比に反

映していると期待できる。

図7-5には骨コラーゲンの炭素窒素同位体比と代表的な食物から構成された同位体比を比較した。比較のために示した食物の値は、食物中のタンパク質からコラーゲンへの濃縮（炭素4.5‰、窒素3.5‰）を補正している。神代家墓所から出土した人骨における炭素・窒素同位体の分布をみると、 C_3 植物と海産物の間で比較的直線的に分布していることが分かる。 C_3 植物にはイネ、麦類などが含まれる。また、淡水魚の影響も否定できないが、直線的な分布は同位体の特徴が大きく異なる2種の混合を示唆しており、ほとんどのタンパク質を海水魚から得た個体を想定しないと説明ができないため、 C_3 植物と海産物の組み合わせである可能性が高いと考えられる。

とくにST9143が高い窒素同位体比を示しているのは、母乳の摂取により母体よりも窒素同位体比が3‰程度濃縮した影響であると考えられる。もう1個体の幼児、ST9107も比較的高い窒素同位体比を示しているが、成人と比較すると、神代家に属する7個体と、僧侶および妻の4個体の間では、炭素同位体比（t-test, $p=0.35$ ）も窒素同位体比（t-test, $p=0.12$ ）も有意差はない。性差について、神代家の男性3個体と女性4個体を比較したが、炭素同位体（t-test, $p=0.14$ ）でも、窒素同位体比（t-test, $p=0.13$ ）でも有意差は見られなかった。

神代家墓所から出土した人骨資料の炭素・窒素同位体比を他の近世人骨集団と比較した（図7-6）。本州の集団では、比較的炭素同位体比の高い東北の内陸部の集団（上野、荒谷）と、炭素が低い集団に大別できる。前者はアワ・ヒエなどの C_4 植物に属する雑穀を利用していると考えられる。神代家集団は後者の中でも窒素が比較的高い傾向が認められる。これは、海産物を多く摂取した可能性を示唆すると考えられる。

次に、骨における鉛濃度の分析結果を表7-9に示す。有鉛ガソリンなどの影響をうけている現代人の骨中鉛濃度は9.8ppm程度、汚染がないと考えられる縄文時代では1ppm程度であり（Yoshinaga et al. 1998）、今回分析した個体はいずれも鉛濃度が非常に高いと言える。なかでも、ST9107やST9144はそれぞれ3727ppmと1628ppmと非常に高い鉛濃度を示しており、鉛中毒によって死亡した可能性を考慮する必要がある。この2個体がいずれも幼児（3～4歳と1.5～2歳）である点は興味深い。もう1個体の幼児であるST9143も356ppmと比較的高い鉛濃度を示している。その他に高い鉛濃度を示した個体は、ST9106（537ppm）、ST9109（315ppm）、ST9131（378ppm）の3個体が見られるが、前2者は神代家の女性で、後者は僧侶の男性である。江戸時代の鉛汚染源としては、おしろいその候補にあげられるが、丸薬や塗料などにも含まれており、今回の分析結果はおしろいが主要な鉛汚染源のひとつであっても矛盾しないが、おしろい以外にも鉛の汚染源があったことを示唆している。

しかし、今回示された幼児骨の鉛濃度は、これまでに報告された江戸時代人骨よりも突出して高いものであり、周辺環境からの汚染などがなかったかをさらに検討する必要がある。また、佐賀藩庶民における人骨鉛濃度と比較することで、江戸時代の鉛汚染の実態に重要な知見を与えることが期待される。

謝辞

試料採取では佐賀大学医学部の川久保善智博士にお世話になった。鉛測定では、東京大学新領域創成科学研究科の吉永淳博士にお世話になった。炭素・窒素安定同位体比の測定には、国立環境研究所地球環境研究センターの向井人史博士にお世話になった。記して謝意を表する。

参考文献

- Yoneda, M., A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, K. Uzawa, M. Hirota, and M. Uchida, (2002) . Radiocarbon marine reservoir effect in human remains from the Kitakogane site, Hokkaido, Japan. *Journal of Archaeological Science*, 29 (5) : 529-536
- Yoshinaga, J., T. Suzuki, M. Masatoshi (1989) . Sex-related and age related variation in elemental concentrations of contemporary Japanese ribs. *Science of the Total Environment*, 79 : 209-221.

表 7-7 分析資料

資料番号	部位	個体	性別	年齢
ST9105	頭蓋骨	6 代利庸か 7 代利亮の娘：おカウ	女	10 代後半
ST9106	肋骨	5 代神代利実の妻	女	老年
ST9107	左中位肋骨	6 代利庸か 7 代利亮の子：鳩之助	不明（男）	3 ～ 4 歳
ST9108	左右不明尺骨	5 代神代利実	男	老年
ST9109	右第一肋骨	7 代神代利亮の妻	女	壮年
ST9112	肋骨	9 代神代利経	男	壮～熟年
ST9114	左上腕骨	6 代神代利庸の妻	女	老年
ST9115	肋骨	6 代神代利庸	男	老年
ST9117	肋骨	不明：ST9118 の家族？	不明	熟年～
ST9118	右大腿骨	不明：ST9117 の家族？	女？	熟年～
ST9121	四肢長骨	不明：僧侶？	男？	老年
ST9122	四肢長骨	不明：僧侶？	男	熟～老年
ST9124	右脛骨	不明：僧侶の可能性高	男	壮～熟年
ST9127	肋骨	不明	男	熟年
ST9130	肋骨	不明	男	熟年
ST9131	右下位肋骨	宗源院 17 世住職	男	熟～老年
ST9136	肋骨	宗源院 15 世住職の妻	女	壮年
ST9138	肋骨	不明	男	壮年
ST9143	右肋骨	不明：おそらく神代家	不明	4 歳
ST9144	左中位肋骨	不明：おそらく神代家	不明	1.5 ～ 2 歳

表 7-8 炭素・窒素同位体比

試料	mg	%C	%N	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$	C/N
ST9105	0.241	43.1	15	-20.5	12.5	3.4
ST9106	0.252	44.2	15.8	-20.9	10.5	3.3
ST9107	0.246	43.7	15.9	-19.1	13.1	3.2
ST9108	0.251	44	14.6	-19.8	13	3.5
ST9109	0.23	44.7	15.5	-19.9	12.4	3.4
ST9112	0.225	44	16.1	-20.1	12.4	3.2
ST9114	0.244	43.9	15.3	-20.2	11.7	3.4
ST9115	0.237	43.6	15.8	-19.8	13	3.2
ST9117	0.251	44.1	15.1	-19.6	13.3	3.4
ST9118	0.27	41.6	10.2	ND	ND	4.8
ST9121	0.264	42.1	11.9	ND	ND	4.1
ST9122	0.254	43.9	15.3	-21.1	10.3	3.3
ST9124	0.244	43.9	14.3	-21.7	10.8	3.6
ST9127	0.264	43.7	15.6	-20.9	10	3.3
ST9130	0.222	43.5	15.8	-21.6	9.9	3.2
ST9131	0.257	44.2	15.6	-20.3	11.2	3.3
ST9136	0.285	44.2	16.3	-19.4	12.4	3.2
ST9138	0.249	44.1	15.7	-21.2	10.5	3.3
ST9143	0.268	44.4	15.6	-19	15.5	3.3
ST9144	0.293	42.9	13.7	ND	ND	3.7

表7-9 骨中鉛濃度の測量結果

個体番号	骨中濃度 (ppm)	注記
ST9105	194.8	6代利庸か7代利亮の娘：おカウ
ST9106	537.5	5代神代利実の妻
ST9107	3,727.60	6代利庸か7代利亮の子：鳩之助
ST9108	73.5	5代神代利実
ST9109	314.9	7代神代利亮の前妻
ST9112	14.8	9代神代利経
ST9114	13.5	6代神代利庸の妻
ST9115	53.4	6代神代利庸
ST9117	37.8	不明（神代家？）
ST9118	33.8	不明（神代家？）
ST9121	35.6	不明（僧侶？）
ST9122	92.7	不明（僧侶？）
ST9124	29.2	不明：（僧侶の可能性高）
ST9127	58.9	不明
ST9130	15.9	不明
ST9131	379.9	宗源院 17 世住職
ST9136	103.2	宗源院 15 世住職の妻
ST9138	30	不明
ST9143	355.9	幼児（おそらく神代家）
ST9144	1,628.90	乳児（おそらく神代家）

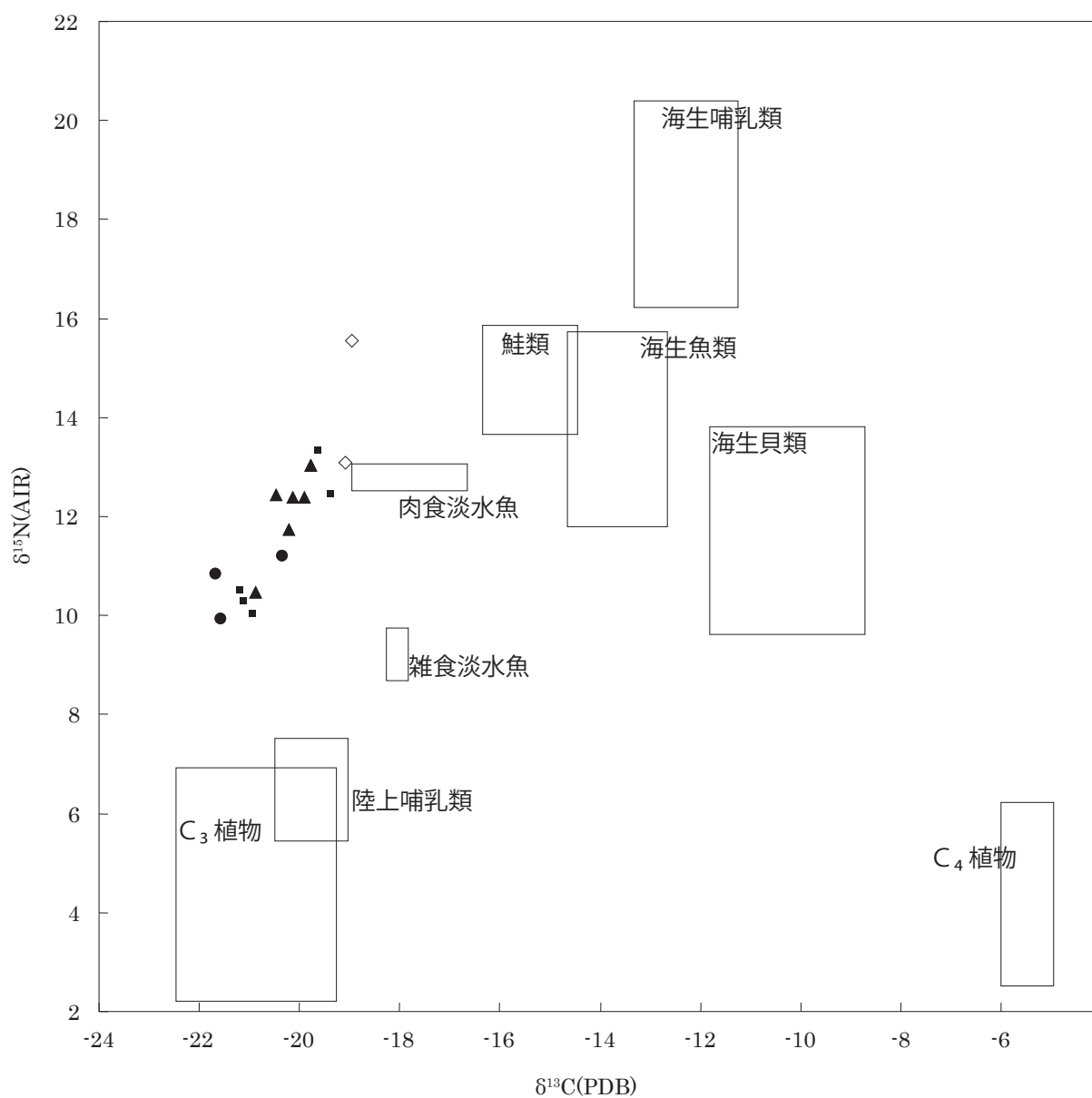


図7-5 神代家墓所出土人骨と代表的な食料資源の炭素・窒素同位体比 (▲神代家、◇乳幼児、●僧侶、■不明)

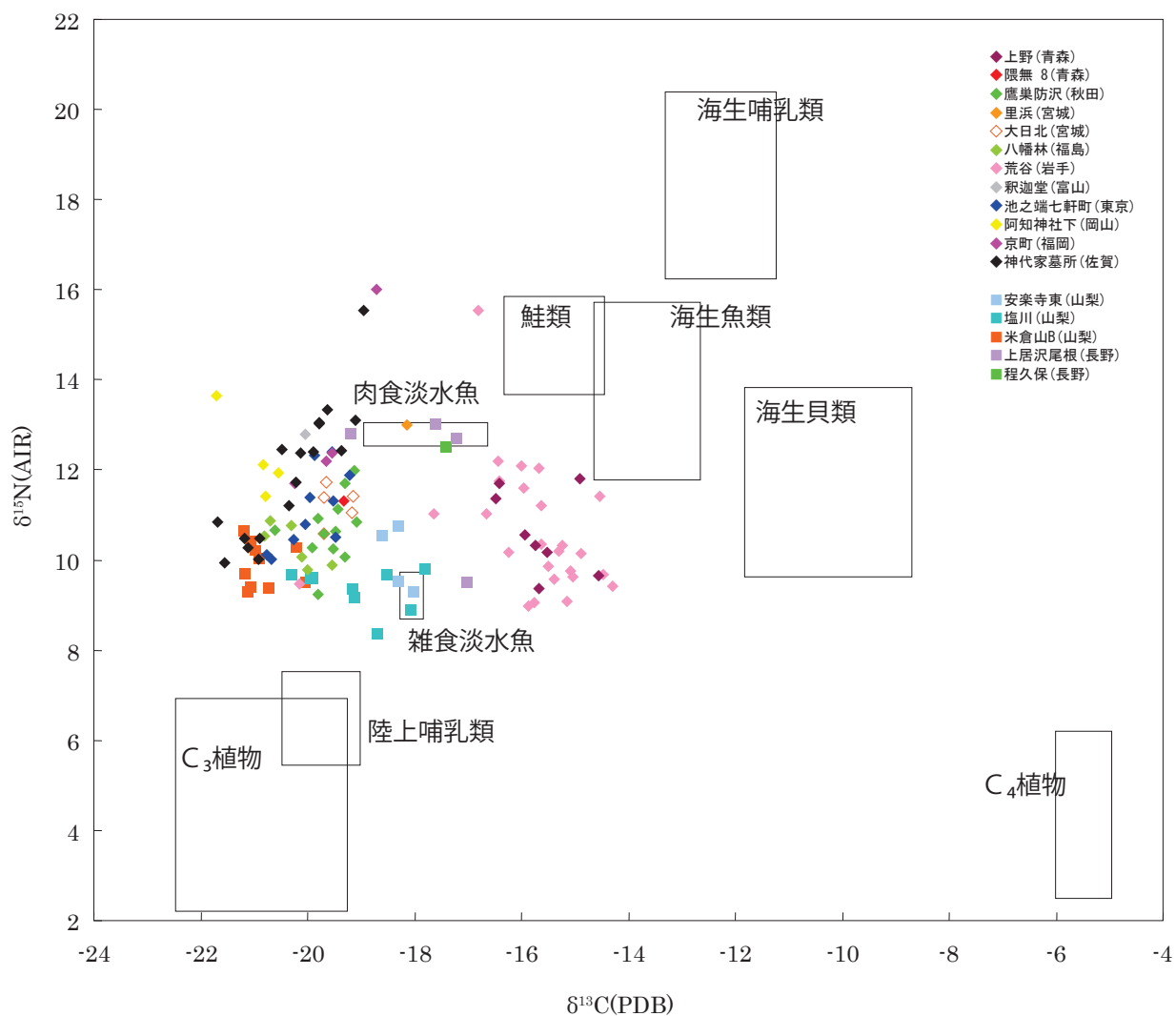


図7-6 神代家墓所出土人骨と他の近世集団における炭素・窒素同位体比の比較

3 東畑瀬遺跡9区（宗源院墓地）から出土したガラス玉の自然科学分析

新免歳靖 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター

1) はじめに

東畑瀬遺跡9区（宗源院墓地）の近世墓からは、水晶製またはガラス製と推測される玉類（数珠玉）が多数出土した。水晶製の玉とガラス製の玉を比較した場合、水晶製の方が価値は高く、ガラス玉はいわば水晶の模造品と位置づけられる。したがって、この両者の材質を明確にすることは被葬者の性格（社会的な地位や経済状態など）を考える上で重要な基礎情報となる。そこで、本調査では、これらの玉類の材質を特定するために比重測定と蛍光X線分析による科学分析を実施した。

一方、筆者は近世遺跡から出土したガラス製品を対象として科学分析を行い、国産や外国産といった生産地の同定、国産ガラス製造技術の変遷と伝播に関する情報を蓄積している（新免 2009、新免ら 2007・2009）。今回の玉類は出土遺構によって埋葬年代に差があるため、ガラス製品の場合は、資料の化学組成の年代的な推移を検証する上で適した資料となる。そこで、上記の調査でガラスと判明した資料の一部を用い、蛍光X線分析によって資料の化学組成を求めた。以下に報告する。

2) 分析資料

分析資料は、宗源院墓地内の ST9122、ST9138、ST9143 の3墓址から出土した玉類 79 点である。分析にあたっては遺構番号に枝番号を付し、分析資料番号とした。

① ST9122 出土資料（分析資料番号：ST9122-01～12）

ST9122 は土葬墓で、墓の埋葬年代については年代を示す遺物がなく不明である。本遺構から 12 点の玉が出土している。いずれも透明度が高く、表面状態も良いことから水晶製であると予想される。その中でも ST9122-01 は、直径約 2.1cm と本遺跡内で出土した玉の中では大型であり、銅製の垂下金具が付けられている。残る 11 点の内、ST9122-02 が直径約 1.6cm と大型で、他は直径約 0.9～1cm と小型の玉である。

② ST9138 出土資料（分析資料番号：ST9138-01～66）

ST9138 は土葬墓である。副葬品として銭（天保通宝、文久永宝）やキセルが出土している。文久永宝は文久3年（1863年）に铸造が始まった銭であるため、埋葬年代の上限となる。本遺構からは 66 点の玉が出土している。いずれも表面が劣化し、表面が薄く曇るか、一部が白色の風化生成物に覆われている。そのため、これらの資料はガラス製と予想され、本来は無色透明の玉であった可能性が高い。資料中には、直径約 1.4～1.6cm のやや大型の玉が 2 点ある（01・02）。いずれも T 字形の穴があげられており、親玉であったと考えられる。それ以外の玉は直径約 0.9～1cm 程度で、64 点が出土している。以下、前者を大玉、後者を小玉とする。

③ ST9143 出土資料（分析資料番号：ST9143-01）

ST9143 は土葬墓である。副葬品には糸切鋏や二枚貝（紅入れ）などが出土している。あわせて 17 世紀末から 18 世紀前半の磁器小皿が出土しているため、年代的な基準となる。出土した玉類は直径約 1.1cm 程度の玉 1 点である。本資料も ST9138 の玉と同様に、一部が風化生成物に覆われており、ガラス製と予想される。本資料は 1 点のみの出土であるが、T 字形の穴があげられており、親玉であったと考えられる。そのため、墓中には残存しなかった有機質の玉（種子製、木製、動物骨製など）と合わさって数珠を形成していた可能性もある。

3) 分析方法

比重測定

鉱物やガラスは、構成する物質によって比重値が変化するため、比重を測定することで大まかな種類を推定する

ことができる¹⁾。測定には卓上精密比重秤(Mettler 社製 AE160)を用い、「空气中重量／(空气中重量－水中重量)」の式から比重値を求めた(平均水温 25℃)。ただし、資料中の ST9122-01 は金具が付属し、玉のみの測定はできなかったため、比重測定は実施しなかった。

蛍光X線分析

蛍光X線分析は、資料にX線を照射し、発生する蛍光X線のエネルギーとその強度を測定し、資料を構成する元素の種類(定性分析)や含有量(定量分析)を調べる分析法である。まず全資料の非破壊定性分析を行い、検出元素の種類から材質分類を行った。その結果、ガラス製と判明した資料については一部を選択し、定量分析を行い、資料の化学組成を求めた。ただし、資料は表面が劣化し、風化物が生成しているものもあるため、本来の化学組成を把握することは困難である。そこで、表面の劣化層と風化生成物層をミニターで除去し、新鮮面(3mm²程度の範囲)を検出した上で分析を行った。

定性分析にはエネルギー分散型蛍光X線分析装置(JEOL 製 JSX-3201M)を用いた。分析条件は、管電圧:50kV、管電流:3mA、コリメーター径:φ1mm、試料室雰囲気:大気測定時間:180秒である。

定量分析には微小部エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SII・ナノテクノロジー社製 SEA5120S)を用いた。分析条件は、管電圧:15・45kV(マルチ分析)、管電流:8～150μA、コリメーター径:φ1.8mm、試料室雰囲気:真空、測定時間:180秒×2回である。成分元素の定量は、主成分元素を中心とする15元素(Si・Ti・Al・Fe・Mg・Ca・Na・K・Pb・Mn・Co・Cu・Zn・Rb・Sr)の酸化物の和が100となるファンダメンタルパラメーター(FP)方式で行い、標準ガラス試料(STG-No.8)を用いて規格化した。

4) 結果および考察

比重測定結果

比重測定の結果を表7-10に記す。ST9122の11点の比重値は2.63～2.65であった。ST9138の小玉64点は、2点(08・29)が3.54、3.55とやや低い値を示した以外は、62点が3.57～3.60にまとまった。一方、ST9138の大玉2点(01・02)は3.53、3.48と小玉に比べると低い値を示した。ST9143の1点(01)は3.66と全資料中最も高い値であった。

以上より、ST9122の玉類は水晶製(石英(水晶)の比重は2.7)であり、ST9138とST9143の玉類は鉛ガラス製(鉛ガラスの比重は3.4～4.3)と推定できる結果となった。

蛍光X線分析による定性分析結果

蛍光X線分析による定性分析の結果、各資料から検出された主要な元素を表7-11に記す。あわせて図7-7～7-9に各遺構の代表資料の蛍光X線スペクトルを示す。

ST9122の玉12点からは、Si(ケイ素)以外に特徴的なピークが検出されなかった(図7-7)²⁾。そのため、ケイ素を主成分とする水晶製の玉であると判断した。

ST9138の玉66点、ST9143の玉1点からは、Si、K(カリウム)、Pb(鉛)が検出されたため(図7-8・7-9)、カリウム鉛シリカガラス(以下、カリ鉛ガラス)である可能性が高い。ただし、本分析条件ではナトリウムなどの軽元素を検出できないため、より正確なガラス材質の分析は定量分析結果から判別することとしたい。

上記の3元素以外には、Ca(カルシウム)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Cu(銅)などのピークが確認された。これらの元素はいずれも微量であることから、原料として加えられたものではなく、原料中に不純物として含まれていたか、埋没中に土壌から資料表面に沈着したと考えられる。その他の検出元素としては、Zn(亜鉛)が注目される。今回の分析では、ST9138の資料全点からZnが検出され(図7-8)、ST9143の1点からは検出されな

かった（図7－9）。

以上の結果から蛍光X線分析によるガラス製品と水晶製品の分類結果は、肉眼観察や比重測定と整合性のあるものとなった。

表7－10 比重および蛍光X線分析による定性分析結果

分析No	比重	検出主要元素	材質	分析No	比重	検出主要元素	材質
ST9122-01	-	<u>Si</u>	水晶	ST9138-29	3.55	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-02	2.65	<u>Si</u>	水晶	ST9138-30	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-03	2.63	<u>Si</u>	水晶	ST9138-31	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-04	2.63	<u>Si</u>	水晶	ST9138-32	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-05	2.63	<u>Si</u>	水晶	ST9138-33	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-06	2.63	<u>Si</u>	水晶	ST9138-34	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, Cu, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-07	2.63	<u>Si</u>	水晶	ST9138-35	3.60	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-08	2.63	<u>Si</u>	水晶	ST9138-36	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-09	2.63	<u>Si</u>	水晶	ST9138-37	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-10	2.63	<u>Si</u>	水晶	ST9138-38	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Ti, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-11	2.63	<u>Si</u>	水晶	ST9138-39	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9122-12	2.63	<u>Si</u>	水晶	ST9138-40	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-01	3.53	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-41	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-02	3.48	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-42	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-03	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-43	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-04	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-44	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-05	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, Cu, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-45	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-06	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-46	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, Cu, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-07	3.56	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, Cu, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-47	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-08	3.54	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-48	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-09	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-49	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-10	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-50	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-11	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-51	3.60	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-12	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-52	3.60	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-13	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-53	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-14	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-54	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-15	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, Cu, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-55	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-16	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, Cu, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-56	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, Cu, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-17	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, Cu, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-57	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-18	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-58	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-19	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-59	3.60	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-20	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-60	3.60	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-21	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-61	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-22	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-62	3.60	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-23	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-63	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, Cu, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-24	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-64	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-25	3.59	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-65	3.60	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, Cu, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-26	3.57	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Ti, Mn, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9138-66	3.60	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-27	3.56	<u>Si</u> , <u>K</u> , <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス	ST9143-01	3.66	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス
ST9138-28	3.58	<u>Si</u> , <u>K</u> , Ca, Fe, <u>Zn</u> , <u>Pb</u>	カリ鉛ガラス				

* 下線がある元素は主要な成分と考えられるもの。

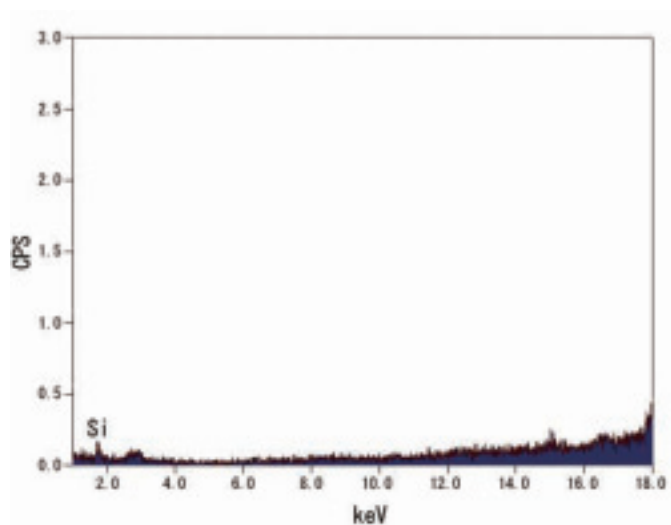


図7-7 ST9122-02(水晶製)の蛍光X線スペクトル

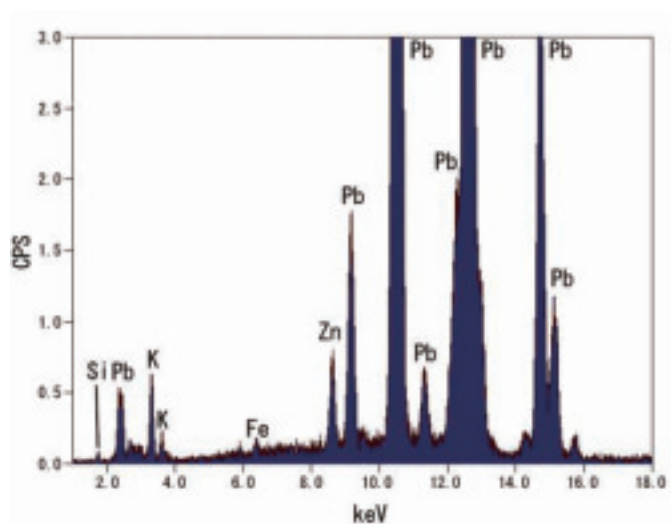


図7-8 ST9138-21(カリ鉛ガラス製)の蛍光X線スペクトル

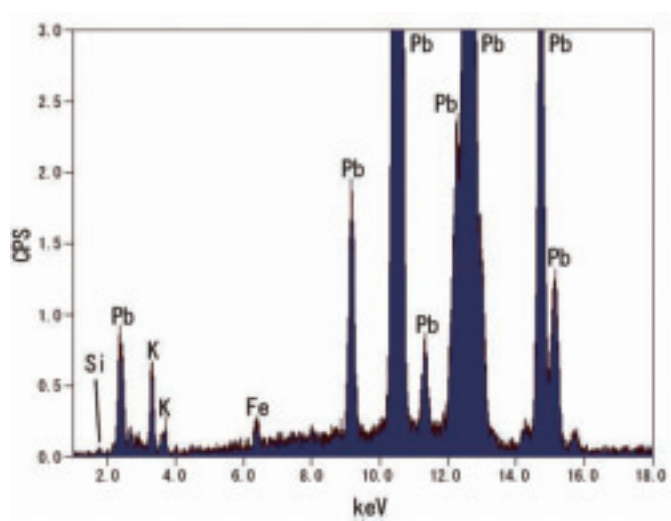


図7-9 ST9143-01(カリ鉛ガラス製)の蛍光X線スペクトル

蛍光X線分析による定量分析結果

定性分析によってガラス製品と明らかになった ST9138 と ST9143 出土資料について、化学組成を明らかにするために蛍光X線分析による定量分析を行った。選択した資料は、ST9138 の中から大玉 2 点（01・02）と小玉 3 点（20・40・60）、ST9143 の小玉 1 点（01）の合計 6 点である。

分析結果を表 7－11 に記す。本結果から、いずれもケイ素（ SiO_2 ）、カリウム（ K_2O ）、鉛（ PbO ）を主成分とするカリ鉛ガラスであることが確実となった。日本における本格的かつ継続的なガラス生産は、江戸時代の長崎ではじまったと考えられている。近世日本で製造されたガラスは、中国宋代（960～1279 年）に開発された金属鉛（Pb）、硝石（ KNO_3 ）、石粉（ SiO_2 ）の 3 種類の原料を混合して製造するカリ鉛ガラス（ $\text{K}_2\text{O-PbO-SiO}_2$ ガラス）の技術系譜を引くもので（棚橋 1966）、近世を通じて多少の例外はあるものの、この 1 種類のガラスのみが製造され続けた。ガラスの製造は、遅くとも 17 世紀後半には長崎で行われており³⁾、18 世紀以降、大坂、京都、江戸などにも技術が伝わったとされる。したがって、今回の分析資料は材質的に国産ガラスであり⁴⁾、遺跡の立地的に長崎に近い長崎産ガラスの可能性もあると考えている。

表 7－11 蛍光 X 線分析による定量分析結果 (%)

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MgO	CaO	Na2O	K2O	PbO	MnO	Co2O3	CuO	ZnO	Rb2O	SrO
ST9138-01	38.6	0.05	2.7	0.01	nd	0.08	nd	10.5	47.3	0.06	nd	0.02	0.41	0.13	0.10
ST9138-02	38.8	0.02	2.8	0.02	nd	0.12	nd	10.5	47.0	0.09	nd	0.02	0.29	0.13	0.10
ST9138-20	37.8	0.04	2.5	0.02	nd	0.08	nd	9.2	49.7	0.01	nd	0.01	0.45	0.14	0.09
ST9138-40	37.8	0.04	2.4	0.01	nd	0.07	nd	9.0	50.0	0.04	nd	0.01	0.43	0.15	0.09
ST9138-60	37.7	nd	2.4	0.01	nd	0.09	nd	9.2	49.8	0.04	nd	0.02	0.46	0.17	0.09
ST9143-01	36.6	0.01	2.4	0.02	nd	nd	0.05	9.4	51.1	0.01	nd	0.04	nd	0.13	0.11

nd：検出限界以下

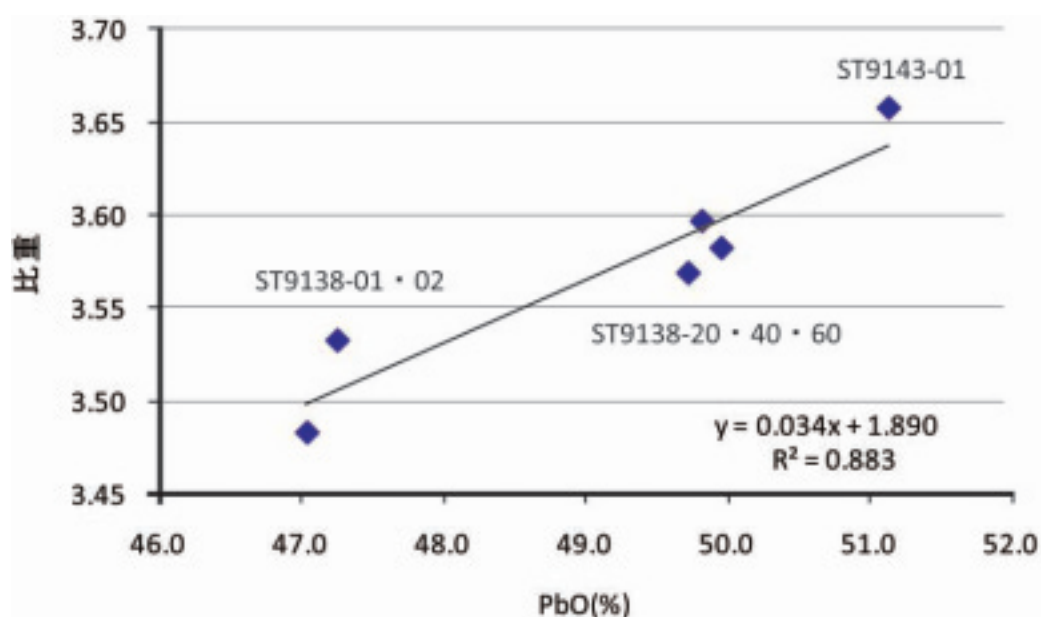


図 7－10 比重値と PbO の分布図

他の含有元素を見ると、石粉(SiO_2)に伴うと考えられるアルミニウム(Al_2O_3)が2%程度含まれる以外は、前述した亜鉛を除き、ほとんど含まないか、不純物程度の含有である。鉄、銅、マンガン、コバルトなどの着色元素の濃度も極めて低く、無色透明なガラスを製造するために精製された原料が使用されたと考えられる。

全体的な分析値を見ると、 SiO_2 が約37～39%、 K_2O が約9～11%、 PbO が約47～51%にまとまり、比較的類似した組成を示している。そこで、個々の資料の特徴を把握するために、比重値と PbO 濃度で分布図を作成し、図7-10に示す。

本図から、比重値と PbO 濃度には強い正の相関関係があり、原料中の鉛分の増減によって比重値が変化することが認められた。また、ST9138の大玉(01・02)、同小玉(20・40・60)、ST9143-01の3グループに分かれた。特に、ST9138の小玉3点は非常にまとまって分布しており、資料間の均質性が高く、同一工房で同時期に製造されたと考えられる。また、大玉の2点も基本的に小玉と同一の工房で製造された可能性が高いが、 PbO 濃度で3%近い開きがあり、これが玉の大きさによって微妙に原料調合を変えて製造された結果生じた差なのか、偶然生じた差なのかなどは判断がつかない。

いずれにせよ、個別にはまとまる傾向があるものの全体的には良く似ており、特に、ST9138とST9143には年代的に1世紀以上の開きが存在するものの、ガラス玉の化学組成が類似している点は興味深い。

亜鉛の有無と製造年代について

前述したように、今回の分析では、ST9143-01(17世紀末から18世紀前半)からは亜鉛が検出されず、ST9138-01～66(19世紀中盤から後半)からは亜鉛が検出された。特にST9138の66点、全てから亜鉛が検出された点は特筆すべきで、意図的に加えられたものと判断できる。

近世ガラスの製造技術について記した19世紀前半の文献資料には、金属鉛を溶かす際に少量の亜鉛を加えるという記述がある(棚橋1975・1983など)。今回の分析では19世紀代の資料から亜鉛が検出されており、文献資料の記述を実証するデータといえる。文献に記載された添加量は、およそ鉛100に対して3程度(濃度では約1.5～2%)である。表7-11の定量分析値を見ると、ST9138の6点の亜鉛濃度(ZnO)は0.29～0.46%(平均値0.41%)であり、一定量の亜鉛が加えられていたことがわかる。ただし、文献値とやや開きがあり、今後分析データを蓄積し検証する必要がある。

近世ガラスの科学分析において亜鉛が検出されることは珍しいことではないが、今回のように資料の年代差に応じて亜鉛の検出に差異が認められた点は重要な結果である。

5) おわりに

今回の分析では、東畑瀬遺跡9区(宗源院墓地)内の3墓址から出土した玉製品の科学分析を実施した。その結果、ST9122から出土した玉製品は水晶製、ST9138とST9143から出土した玉製品はカリ鉛ガラス製であることが明らかとなった。今後は、鉛同位体比測定を実施し、鉛原料の生産地に関する議論を行う予定である。また、長崎市内の遺跡や江戸遺跡から出土したガラス製品との比較を行い、製造地や製造年代に関する検討を行いたい。

注

- 1) 特に近世の国産ガラスは製造時期によって比重値が変化することが明らかとなっており、およその製造年代を推定することが可能となっている(岡1996)。しかし、今回は紙面の都合から製造年代の推定は行わなかった。
- 2) 本図のケイ素のピークは非常に小さいが、これは大気条件下の分析のためである。蛍光X線分析では、原子番号がK(カリウム)以下の元素は大気条件下では検出が難しく、試料室を真空にして分析する。今回の定性分析では、分析の迅速性を考慮し、大気化での分析をおこなった。
- 3) 長崎でガラス生産がいつ開始されたのかは明らかとなっていない。延宝四年(1676)に關所となった末次家の財産目録である『末次平蔵御關所御払帳』(元禄四年(1691)に「日本物ひいとり釣花入」という記載があり(「ひいとり」とは「びいどろ」、すなわちガラスの古語である)、延宝四年の段階では国産ガラスの製造が始まっていたと考えられる。ただし、開始時期がどこまで遡るかは意見が分かれている。

自然科学分析

4) ただし、当時の中国（明末～清）でもカリ鉛ガラスが製造されていたとされるが、中国のガラス製品の研究が進展しておらず、その詳細は不明である。現時点では国産と中国産のカリ鉛ガラスを化学組成によって分類することはできない。形状や色調などの特徴が明確な資料が、国産または中国産ガラスと同定できるにすぎない。今後、考古学的に中国産と明確な資料の分析結果を蓄積していく必要がある。今回の資料は、形状などから生産地は判断できないが、ごく普通の玉であり、わざわざ輸入していたとは考えにくく、国産品と考えている。

参考文献

- 岡 泰正 1996 「びいどろ・ぎやまん概説一年代基準を求める試み―」『びいどろ・ぎやまん図譜』淡交社
- 棚橋淳二 1975 「鉛丹ガラスと金属鉛ガラス（二）」『松蔭女子学院大学・短期大学』研究紀要 第 17 号
- 棚橋淳二 1983 「江戸時代におけるガラス技術の変遷と伝播」『松蔭女子学院大学・短期大学』研究紀要 第 25 号
- 新免歳靖・木下正史・永嶋正春 2007 「近世遺跡出土ガラス製品の自然科学的研究」『日本文化財科学会第 24 回大会発表要旨集』日本文化財科学会
- 新免歳靖 2009 「東京都文京区弓町遺跡 6 次調査出土の近世ガラス製品の材質調査」『東京都文京区弓町遺跡第 6 地点』テイケイトレード埋蔵文化財事業部
- 新免歳靖・齋藤努 2010 「有珠 4 遺跡から出土したガラス玉の自然科学分析」『北海道伊達市有珠 4 遺跡』伊達市噴火湾文化研究所

写真図版



嘉瀬川ダム予定地周辺（南東から）（平成4年10月撮影 嘉瀬川ダム工事事務所提供）



畑瀬地区周辺（真俯瞰合成）（平成4年10月 嘉瀬川ダム工事事務所提供）



東畑瀬遺跡全景（南から）（平成4年10月 嘉瀬川ダム工事事務所提供）



7A 区（写真右）・7B 区（写真中央）・7C 区（写真左）（南東から）



7C 区 全景（東から）



71区 調査区全景（北東から）



71区 調査区全景（西から）



71区 SK7018（西から）



71区 SK7019（西から）



71区 SK7020（西から）



71区 トレンチ土層（西から）



71区 トレンチ土層（南西から）



71区 調査状況



7J区 調査区全景（南西から）



7J区 SK7022（西から）



7J区 SK7023（西から）



7J区 1トレンチ土層（北東から）



7J区 1トレンチ土層（東から）



7J区 2トレンチ土層（北から）



7J区 2トレンチ・南壁土層（北から）



7J区 調査状況



7K区 調査区全景（北東から）



7K区 調査区全景（北東から）



7K区 調査区全景（北西から）



7K区 1トレンチ（東から）



7K区 1トレンチ（北から）



7K区 2トレンチ（南西から）



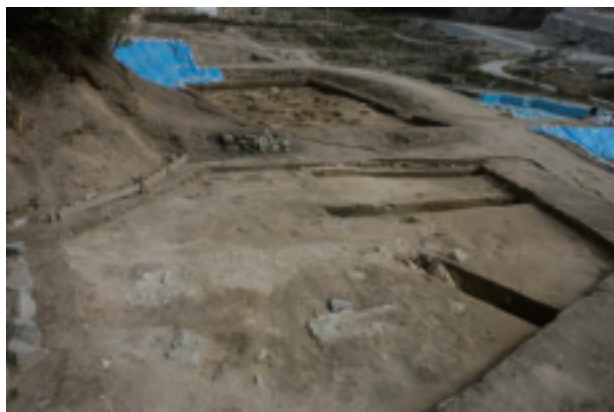
7K区 2トレンチ（北から）



7K区 調査状況



7L区 調査区全景（北西から）



7L区・7J区（写真奥） 調査区全景（北西から）



7L区 1トレンチ（北東から）



7L区 1トレンチ土層（北東から）



7L区 2トレンチ（北から）



7L区 2トレンチ土層（北東から）



7L区 3トレンチ（東から）



7L区 3トレンチ土層（東から）



7M 区 調査区全景（南東から）



7M 区 調査区全景（北西から）



7M 区 1 トレンチ（南東から）



7M 区 2 トレンチ（東から）



7M 区 2 トレンチ土層 c～d 南側（東から）



7M 区 2 トレンチ土層 e～h 南側（南から）



7M 区 3 トレンチ（北から）



7M 区 調査状況



7区出土遺物 1





7区出土遺物 3



7区出土遺物 4



7区出土遺物 5







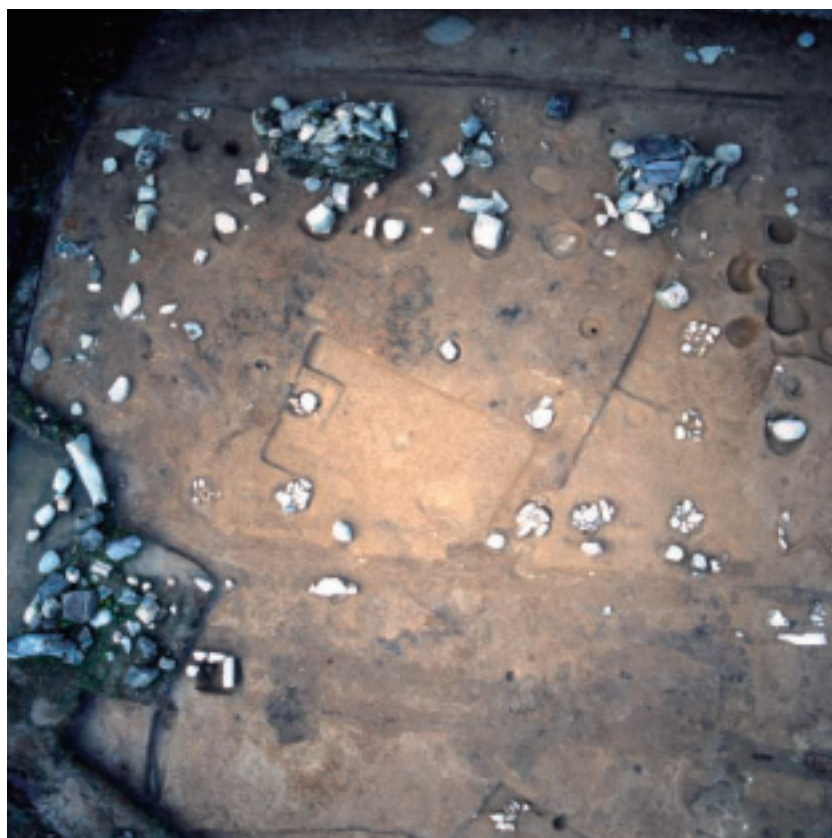
6G 区 遠景（北東から）



6G 区 第1面全景（東から）



6G 区第 1 面 SB6012 (上が西)



6G 区第 1 面 SB6013 (上が西)



6G 区 第 1 面の出土遺物



6G区 第2面全景（南から）



6G区 第2面全景（上が南）



6G 区第 2 面 庭園遺構（上が南）



6G 区第 2 面 SX6079（北西から）



6G 区第 2 面 SG6060（上が南）



6G 区第 2 面 焼土検出状況（北から）



6G 区第 2 面 SX6016（南から）



6G 区第 2 面 SG6061（南西から）



6G 区第 2 面 SX6057（東から）



6G 区第 2 面 SX6065・6066・6067（東から）



6G 区第 2 面 SX6062（南西から）



6G 区第 2 面 遺物出土状況



6G 区第 2 面 SX6092（南東から）



6G 区 第 2 面の出土遺物



6G 区 2 - 3 面の出土遺物 1



6G区 2－3面の出土遺物 2



6G 区 2 - 3 面の出土遺物 3



6G 区 2 - 3 面の出土遺物 4



6G区 第3面全景（東から）



6G区第3面 SX6058 周辺（上が南）



6G 区第 3 面 SX6058 (東から)



6G 区第 3 面 SX6058 土層 (西から)



6G 区第 3 面 SX6063 (南から)



6G 区第 3 面 SX6063 拡大 (南から)



6G 区第 3 面 SX6064 (北から)



6G 区第 3 面 SX6078 (北西から)



6G 区第 3 面 SX6101 種子出土状況 (南から)



6G 区第 3 面 SX6102 土層 (西から)



6G 区第 3 面 SX6100 検出状況（北から）



6G 区第 3 面 SX6100 土層（西から）



6G 区第 3 面 SX6101・6102（南から）



6G 区 第 3 面の出土遺物 1



6G 区 第 3 面の出土遺物 2



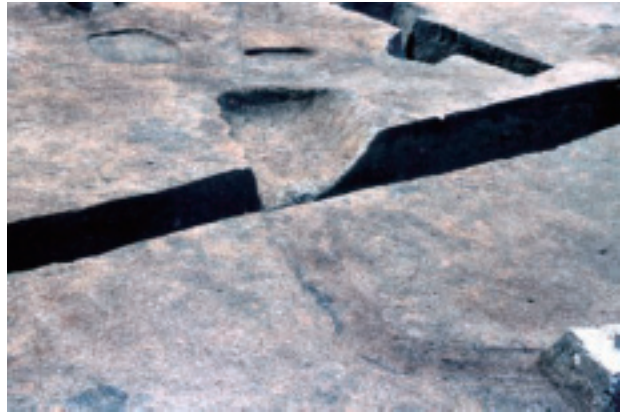
6G区 第4面全景（上が西）



6G区 第4面拡大（上が西）



6G 区第 4 面 完掘状況（北から）



6G 区第 4 面 SD6099（南東から）



6G 区第 4 面 SX6087（北から）



6G 区第 4 面 SX6088（東から）



6G 区第 4 面 SX6082 土層（東から）



6G 区第 4 面 SX6098（北東から）



6G 区第 4 面 SX6095・6096（東から）



6G 区第 4 面 SX6096 遺物出土状況（東から）



6G 区 第 4 面の出土遺物 1



6G 区 第 4 面の出土遺物 2



9区 全景（北西から）



9区 全景（北東から）



SX9001 正面（西から）



SX9001 左側面（北から）



SX9001 右側面（南から）



SX9001 右側面～後面（南東から）



SX9001 宝篋印塔正面（西から）



SX9001 宝篋印塔右側面（南から）



SX9002 (北から)



SX9003 (北から)



SX9004 (北から)



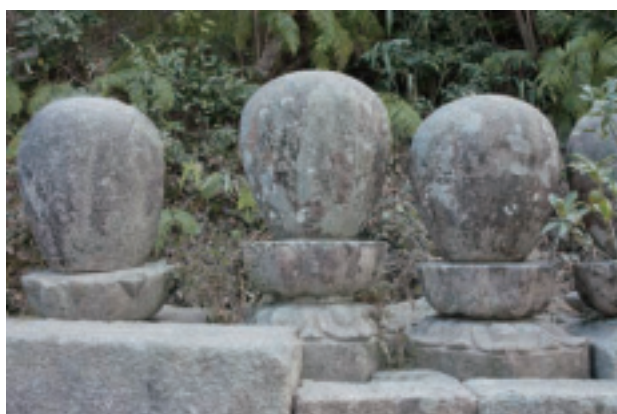
SX9005 (北から)



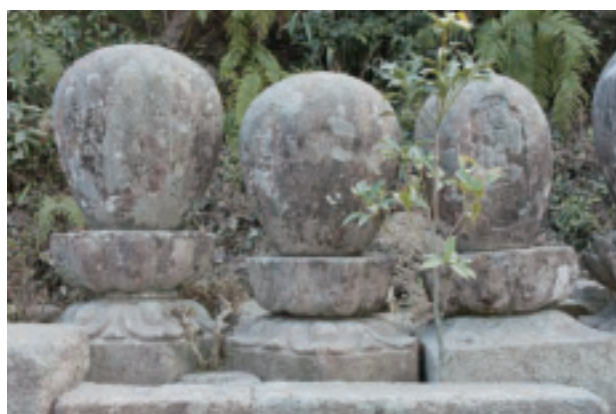
SX9006 (北から)



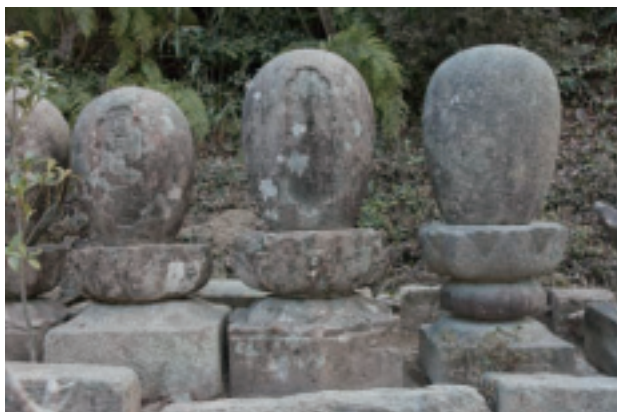
SX9007 (北から)



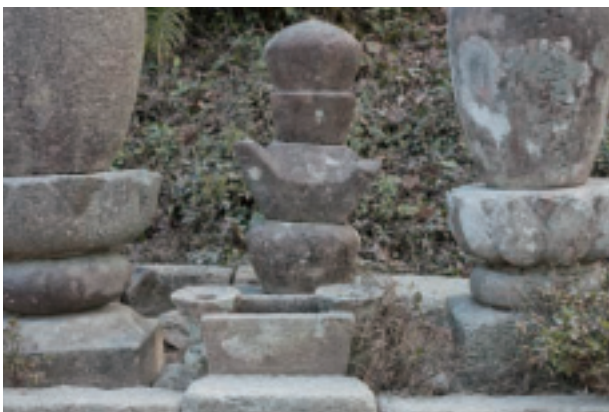
SX9008 (北から)



SX9009 (北から)



SX9010・SX9011・SX9012 (北から)



SX9013 (北から)



SX9014 (北から)



SX9015 (北東から)



SX9016 (北西から)



SX9002 ～ SX9016 (北西から)



SX9002 ～ SX9016 (南西から)



SX9002 ～ SX9016 (北東から)



SX9002 ~ SX9016 (南東から)



SX9017 (北から)



SX9018 (北東から)



SX9019 正面 (北から)



SX9019 右側面 (西から)



SX9020 正面 (北西から)



SX9020 右側面 (西から)



SX9021 正面 (東から)



SX9021 右側面（北から）



SX9022（東から）



SX9023（南東から）



SX9024（南東から）



SX9025 正面（北東から）



SX9025 後面（西から）



SX9025 左側面（南から）



SX9026（北から）



SX9027 正面（北から）



SX9027 右側面（西から）



SX9028 正面（東から）



SX9028 後面（北西から）



SX9029・SX9030（東から）



SX9031（北から）



SX9032（北から）



SX9032～SX9038（北東から）



SX9039 (北から)



SX9040 (南西から)



SX9041 (南西から)



SX9042 (南西から)



SX9040 ～ SX9042 (南西から)



SX9043 (南から)



SX9044 (南から)



SX9045 (南から)



SX9046 (南から)



SX9047 (南から)



SX9048 (南から)



SX9049 (南西から)



SX9050 (西から)



SX9051 (西から)



SX9052 (西から)



SX9053 (西から)



SX9054 (西から)



SX9055 (西から)



SX9056 (西から)



SX9057 (移転後)



SX9058 (移転後)



SX9059・SX9060 (西から)



SX9051 ～ SX9058 (南西から)



SX9053 ～ SX9055・SX9059・SX9060 (北西から)



石垣東面（南東から）



石垣東面（東から）



石垣東面（北から）



石垣北面（東から）



石垣北面（北から）



石垣北面（北西から）



石垣西面（北西から）



石垣西面周辺（西から）



調査区全景（西から）



調査区南西部（北から）



調査区東部（北西から）



SX9001 基壇 3 段目遺物出土状況 (図 6-30- 2・10) (西から)



SX9001 基壇 3 段目下部～4 段目上部 (北から)



SX9001 基壇 4 段目 (南から)



SX9001 基壇 4 段目遺物出土状況 (図 6-30-11) (東から)



SX9001 基壇 4 段目遺物出土状況 (図 6-30- 1) (南東から)



SX9001 基壇 4 段目遺物出土状況 (図 6-30-12) (南から)



SX9001 基壇 4 段目遺物出土状況 (図 6-30-13) (南から)



SX9001 基壇基底面遺物出土状況 (図 6-30- 3) (北から)



SX9001 基底面（南から）



ST9101 甕出土状況（北から）



ST9101 銭出土状況（東から）



ST9102 検出状況（南東から）



ST9102 甕内部（南東から）



ST9103 甕出土状況（南から）



ST9103 甕内部（東から）



ST9103 蔵骨器内部（東から）



ST9104 (東から)



ST9105 (東から)



ST9106 (東から)



ST9106 遺物・人骨出土状況 (北西から)



ST9106 完掘状況 (西から)



ST9107 (北から)



ST9107 遺物・人骨出土状況 (北東から)



ST9108 (南から)



ST9108 遺物・人骨出土状況（西から）



ST9108 完掘状況（南から）



ST9109（北から）



ST9109 遺物・人骨出土状況（北から）



ST9110（北から）



ST9110 蔵骨器内部



ST9111（南から）



ST9112（南から）



ST9112 甕出土状況（南から）



ST9112 人骨出土状況（南から）



ST9114（西から）



ST9114 石蓋除去後（西から）



ST9114 人骨出土状況（西から）



ST9115（北から）



ST9115 石蓋除去後（北から）



ST9115 人骨出土状況（北から）



ST9115 完掘状況（北から）



ST9117（北から）



ST9117 遺物・人骨出土状況（北から）



ST9117 銭出土状況（北から）



ST9118（東から）



ST9118 人骨出土状況（東から）



ST9118 銭出土状況（東から）



ST9119（北から）



ST9119 甕及び遺物出土状況（北から）



ST9121（北東から）



ST9121 人骨出土状況（東から）



ST9122（北から）



ST9122（南から）



ST9123（北から）



ST9123 人骨出土状況（北から）



ST9124（北から）



ST9124 遺物・人骨出土状況（北から）



ST9124 銭出土状況（東から）



ST9127 人骨出土状況（北から）



ST9130・ST9131（東から）



ST9130 人骨出土状況（北西から）



ST9131 遺物・人骨出土状況（西から）



ST9132（北東から）



ST9134（南から）



ST9135 (東から)



ST9136 遺物・人骨出土状況 (北西から)



ST9137 (北から)



ST9137 (北から)



ST9138 (東から)



ST9138 人骨出土状況 (東から)



ST9141 (西から)



ST9141 壺内部



ST9143 (北から)



ST9143 遺物・人骨出土状況 (西から)



ST9144 (東から)



ST9144 人骨出土状況 (北から)



ST9145・ST9146 出土状況 (北から)



ST9146 甕内部 (ST9147) (東から)



ST9146 甕内部 (ST9147 取上後)



ST9147 壺内部



SX9128 (西から)



SX9149 検出状況 (北東から)



SX9149 (北から)



SX9149 甕内部



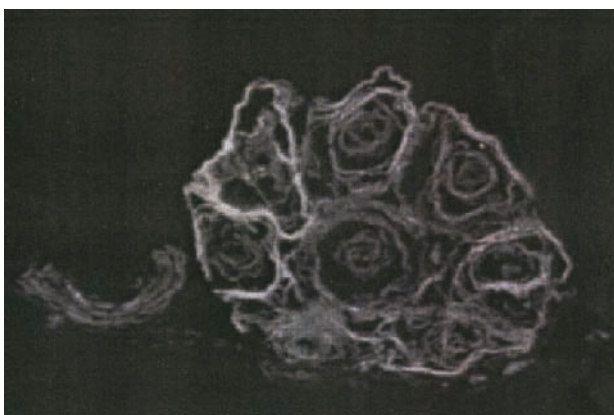
SX9149 出土遺物



SX9149 出土遺物



SX9149 出土遺物



SX9149 出土遺物 X線 CT スキャナによる断層像
(九州国立博物館提供)



1～5トレンチ設定状況（南東から）



3～7トレンチ設定状況（南東から）



調査状況



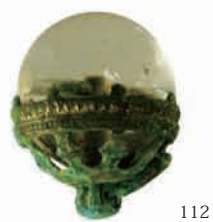
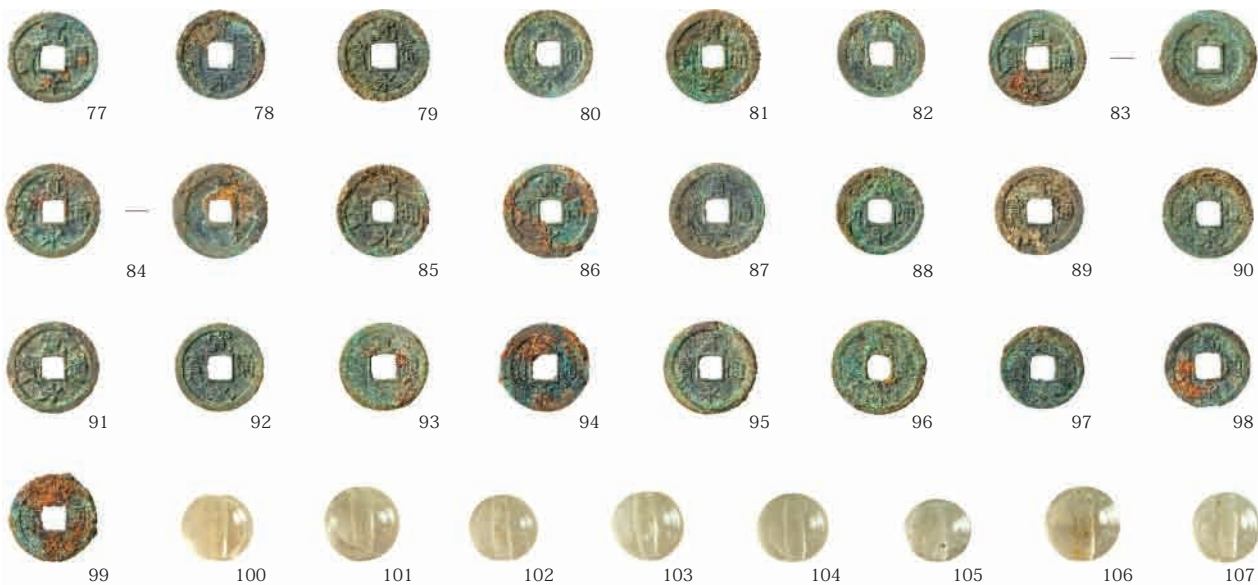
9区遺物写真1



9区遺物写真 2



9区遺物写真 3



9区遺物写真4



173

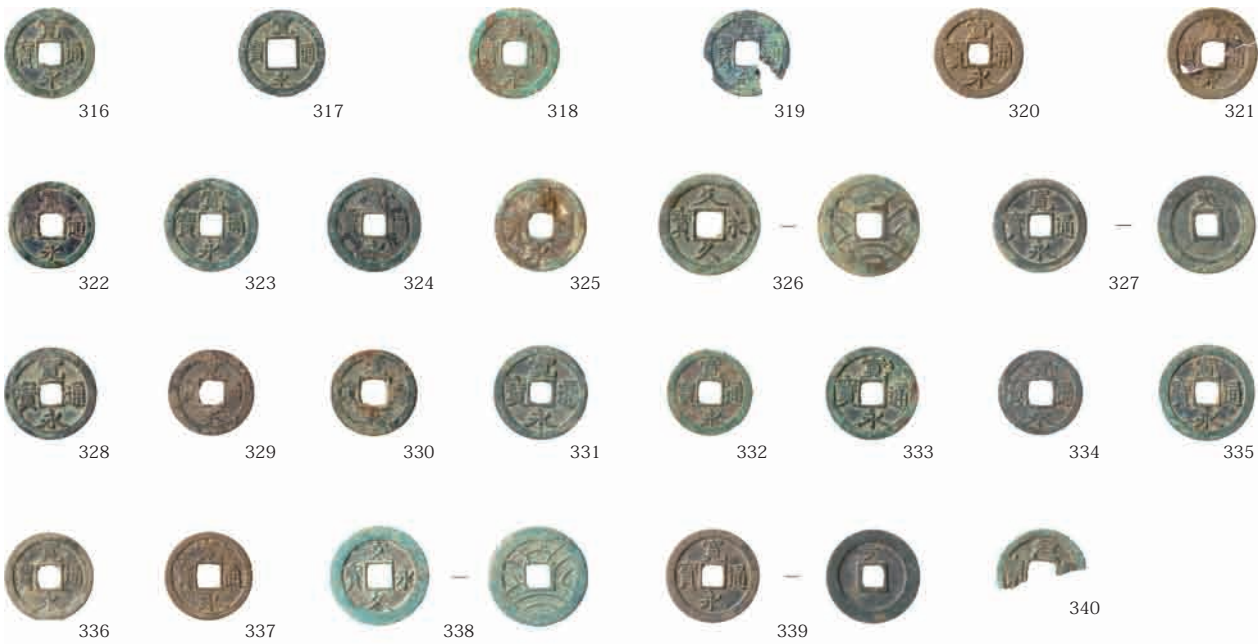
9区遺物写真 5



9区遺物写真 6



9区遺物写真 7



9区遺物写真8



6区 石塔調査前



6区 石塔調査後

報告書抄録

ふりがな	ひがしはたぜいせき 3							
書名	東畑瀬遺跡 3							
副書名	嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	6							
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 190 集							
編著者名	渋谷格・白木原宜・徳永貞紹・西野元勝・吉田大輔 川久保善智・澤田純明・大野憲五・竹下直美・隅康二・埴原恒彦・米田稷・内藤裕一・覚張隆史・新免歳靖							
発行機関	佐賀県教育委員会							
所在地	〒 840-8570 佐賀市城内一丁目 1 番 59 号							
発行年月日	平成 23 (西暦 2011) 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひがしはたぜ 東畑瀬遺跡 6G・7・9区	さがしふじちうおおざせきや 佐賀市富士町大字関屋	412045	0089 0091	33° 23′ 31″ 世界測地系 (33° 23′ 43″)	130° 13′ 36″ 世界測地系 (130° 13′ 28″)	20040726 ～ 20090520	19,600	嘉瀬川ダム建設に 伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東畑瀬遺跡 6G 区 (宗源院跡)	寺院跡	近世		礎石建物 庭園遺構 トイレ遺構 石組遺構 石列 石垣		在地系土器 国産陶磁器 中国・朝鮮陶磁 青銅製品 鉄器		神代勝利の菩提寺 江戸時代の遺構面 を 4 面確認
7 区	集落跡	中世 近世		掘立柱建物 柵列 土坑		在地系土器 中国・朝鮮陶磁 国産陶磁 青銅製品 石製品 銭貨		
9 区 (宗源院墓地)	墓地	近世 近代		近世墓 近代墓 埋納遺構 石塔		在地系土器 国産陶磁 水晶製品 ガラス製品 青銅製品 銭貨 鉄製品 木製品 漆製品		
								小城支藩の神代家 一族の墓地 良好な近世人骨が 出土

佐賀県文化財調査報告書第 190 集

東畑瀬遺跡 3

— 嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6 —

平成 23 (2011) 年 3 月 31 日

発行 佐賀県教育委員会

〒 840-8570 佐賀県佐賀市城内 1 丁目 1 番 59 号

印刷 鹿島印刷株式会社

〒 849-1321 佐賀県鹿島市古枝甲 249 番地 3

